

川原平(6)遺跡

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2016年3月

青森県教育委員会

川原平(6)遺跡

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2016年3月

青森県教育委員会



遺跡遠景（西から）



調査区全景（南から）



第1号竖穴住居跡（東から）



第1号竖穴住居跡出土遺物



第7号土坑遺物出土状況（南から）



第7号土坑出土遺物（出土状況にあわせて配置）



遺構外（南斜面）出土土器（狩猟文土器）
（上は展開写真：合成）

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成24～26年度に実施した川原平(6)遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代中期から晩期にかけての遺構や、同時期の土器・石器等の遺物が発見されました。特に縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての集落跡からは、大型の竪穴住居跡をはじめ、同時期の狩猟文土器などの遺物も多数見つかっており、当時の生活様式などを知る上で貴重な成果を得ることができました。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成28年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 三 上 盛 一

例 言

1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成24～26年度に発掘調査を実施した西目屋村川原平(6)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は10,300㎡である。

2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下のとおりである。

川原平(6)遺跡 青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字宮元 青森県遺跡番号 343035

3 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。

4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下の通りである。

発掘調査期間 平成24年9月11日～10月26日

平成25年5月8日～6月28日

平成26年5月1日～7月11日

整理・報告書作成期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日

平成26年4月1日～平成27年3月31日

平成27年4月1日～平成28年3月31日

5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター新山隆男文化財保護主幹、荒谷伸郎文化財保護主事が担当した。依頼原稿については文頭に執筆者名を記した。

6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

空中写真撮影 株式会社 シン技術コンサル

基準点・水準点測量 株式会社 キタコン

地質・地形分析 日本第四紀学会会員 山口 義伸

石器の石質鑑定 日本第四紀学会会員 山口 義伸

青森県立郷土館学芸主幹 島口 天

放射性炭素年代測定 株式会社 加速器分析研究所

株式会社 パレオ・ラボ

種実同定分析 株式会社 パレオ・ラボ

土器付着炭化物分析 株式会社 パレオ・ラボ

土器付着赤色塗膜材質分析 株式会社 パレオ・ラボ

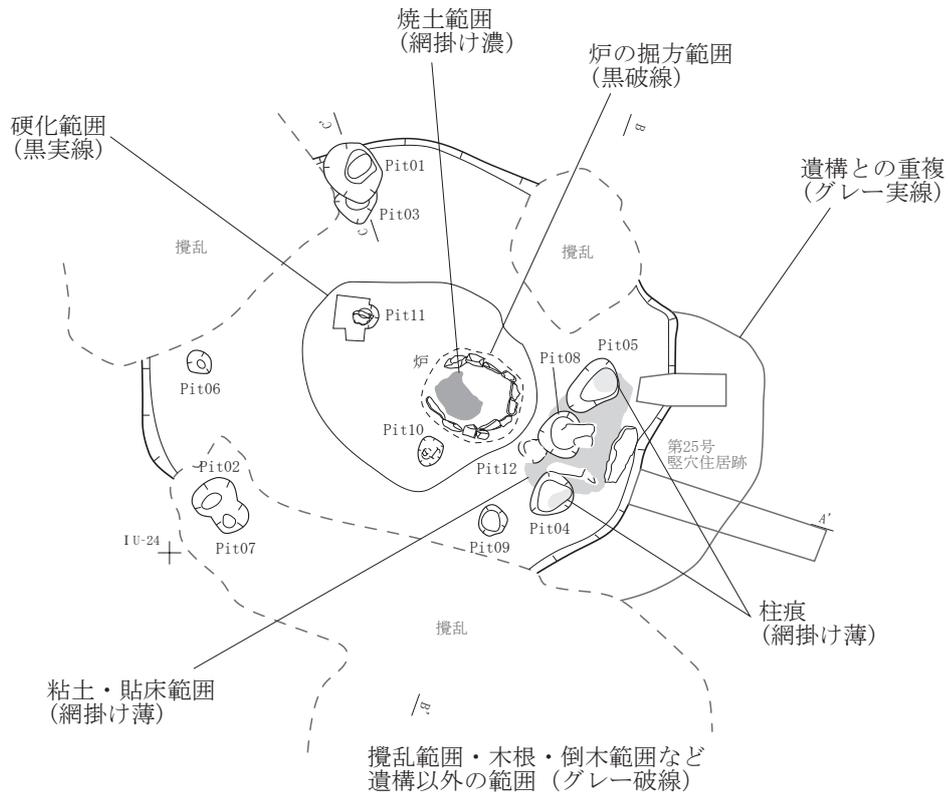
遺物の写真撮影 シルバーフォト・フォトショップいなみ

7 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

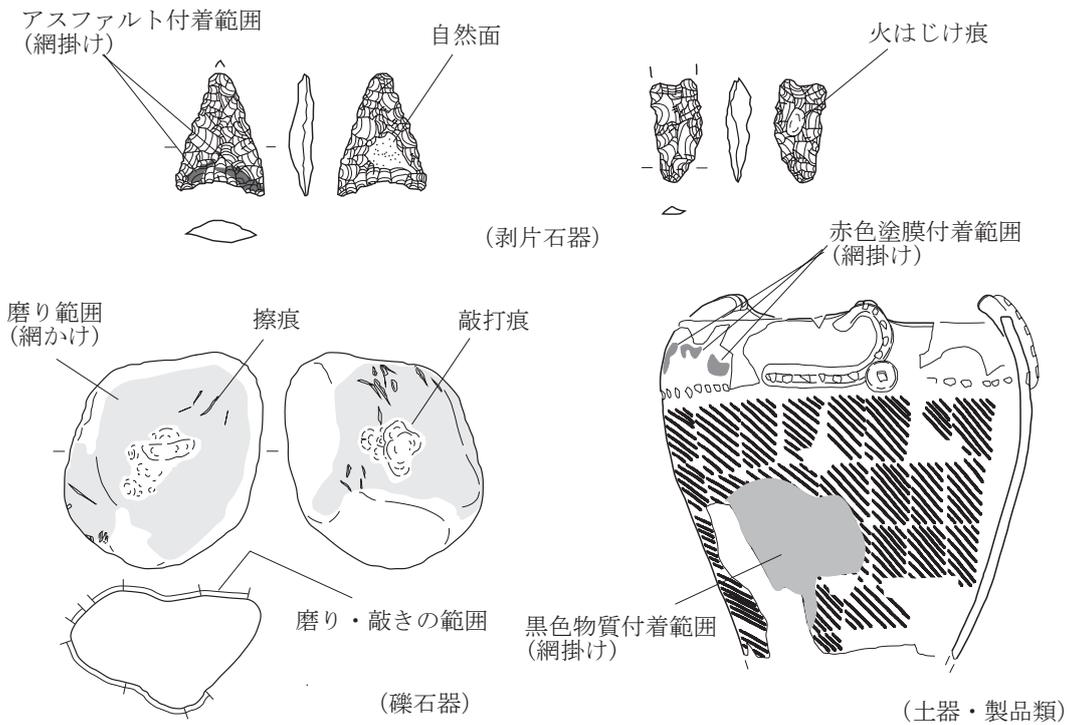
8 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

- 9 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た。(敬称略、順不同) 西目屋村教育委員会、弘前市教育委員会、福田 友之、阿部 昭典、根岸 洋、安達 香織、澤田 恭平
- 10 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「川原平」及び西目屋村役場発行の25,000分の1地形図「西目屋村管内図」を複写して使用した。
- 11 計測原点の座標値は、世界測地系に基づき、平面直角座標第X系による。
- 12 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 13 全体図等の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。
- 14 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。なお遺構番号は整理作業段階で付け直したのものもあるが、発掘作業段階で用いた遺構の略号を()内に合わせて記した。遺構に使用した略号は、以下の通りである。
- S I = 竪穴住居跡、S K = 土坑、S Q = 配石遺構、S N = 焼土跡、S R = 土器埋設遺構、
S P = 小ピット(柱穴)
- 15 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 16 遺構実測図の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。遺構図における各種範囲を示す線や網掛け等については右図に示した。
- 17 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 18 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2006年度版』(小山正忠、竹原秀雄)を使用した。
- 19 遺物に使用した略号は、以下の通りである。
- ・P = 土器・土製品、△・S = 石器・石製品・自然礫、▲・C = 炭化物、○ = 分析資料
- 20 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器(立物1/4・破片1/3・ミニチュア1/2)、礫石器は1/3(礫石器のうち台石・石皿類は1/4・1/6)、土製品・石製品・剥片石器は1/2に統一し、挿図毎にスケール等を示した。網掛けの指示は右図の通りである。
- 21 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、表毎に指示内容を示した。()内の数値は破損品の現存値である。
- 22 遺構属性表内の重複関係で使用した記号については、以下の通りである。
- (例) SI01 > → SI01 が本遺構より新しい
> SI01 → SI01 が本遺構より古い
? SI01 → SI01 との新旧関係が不明
- 23 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付したが、縮尺は統一していない。
- 24 引用・参考文献について巻末に収めた。

(遺構図の凡例)



(遺物実測図の凡例)



目次

序	
例言	
目次・図版目次・写真目次	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	4
第4節 遺跡周辺の地形と地質	7
第2章 検出遺構と出土遺物	18
第1節 竪穴住居跡	18
第2節 土坑	81
第3節 その他の遺構	107
1 配石遺構	107
2 焼土跡	107
3 土器埋設遺構	107
4 小ピット(柱穴)	108
第4節 遺構外出土遺物	115
1 土器	115
2 石器	127
3 その他の遺物	132
第3章 自然科学分析	138
第1節 放射性炭素年代測定	138
第2節 炭化種実同定分析	148
第3節 土器付着炭化物分析	152
第4節 土器付着赤色塗膜の材質分析	157
第4章 総括	161
第1節 検出遺構について	161
第2節 出土遺物について	173
引用・参考文献	187
遺物観察表	189
写真図版	203
報告書抄録・奥付	

図版目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	1	図54	第26号竪穴住居跡	79
図2	遺跡周辺の地形図	11	図55	土坑(1)	83
図3	河成段丘の分布	11	図56	土坑(2)	85
図4	基本層序	12	図57	土坑(3)	87
図5	遺構配置図	13・14	図58	土坑(4)	91
図6	調査区域図及び周辺の地形	17	図59	土坑(5)	93
図7	第1号竪穴住居跡(1)	19・20	図60	土坑(6)	97
図8	第1号竪穴住居跡(2)	23	図61	土坑(7)	99
図9	第1号竪穴住居跡(3)	24	図62	土坑出土遺物(1)	101
図10	第1号竪穴住居跡(4)	25	図63	土坑出土遺物(2)	102
図11	第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	26	図64	土坑出土遺物(3)	103
図12	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	27	図65	土坑出土遺物(4)	104
図13	第1号竪穴住居跡出土遺物(3)	28	図66	土坑出土遺物(5)	105
図14	第1号竪穴住居跡出土遺物(4)	29	図67	土坑出土遺物(6)	106
図15	第1号竪穴住居跡出土遺物(5)	30	図68	その他の遺構	109
図16	第1号竪穴住居跡出土遺物(6)	31	図69	小ピット群配置図	111
図17	第2号竪穴住居跡(1)	33	図70	その他の遺構出土遺物	112
図18	第2号竪穴住居跡(2)	34	図71	遺構外出土土器重量・分布	116
図19	第2号竪穴住居跡出土遺物(1)	35	図72	遺構外出土土器(1)西斜面①	117
図20	第2号竪穴住居跡出土遺物(2)	36	図73	遺構外出土土器(2)西斜面②	118
図21	第3号竪穴住居跡	37	図74	遺構外出土土器(3)西斜面③	119
図22	第3号竪穴住居跡出土遺物	38	図75	遺構外出土土器(4)西斜面④	120
図23	第4号竪穴住居跡(1)	39・40	図76	遺構外出土土器(5)南斜面①	122
図24	第4号竪穴住居跡(2)・出土遺物	43	図77	遺構外出土土器(6)南斜面②	123
図25	第5号竪穴住居跡	45	図78	遺構外出土土器(7)南斜面③	124
図26	第5号竪穴住居跡出土遺物	46	図79	遺構外出土土器(8)南斜面④	125
図27	第6号竪穴住居跡	47	図80	遺構外出土土器(9)その他	126
図28	第6号竪穴住居跡出土遺物	48	図81	遺構外出土土器(1)西斜面①	129
図29	第7号竪穴住居跡・出土遺物	49	図82	遺構外出土土器(2)西斜面②	130
図30	第8号竪穴住居跡	51	図83	遺構外出土土器(3)西斜面③	131
図31	第8号竪穴住居跡出土遺物	52	図84	遺構外出土土器(4)西斜面④	132
図32	第9号竪穴住居跡・出土遺物	53	図85	遺構外出土土器(5)南斜面①	133
図33	第10号竪穴住居跡	55	図86	遺構外出土土器(6)南斜面②	134
図34	第10号竪穴住居跡出土遺物	56	図87	遺構外出土土器(7)その他①	135
図35	第11号竪穴住居跡	57	図88	遺構外出土土器(8)その他②	136
図36	第11号竪穴住居跡出土遺物	58	図89	遺構外出土その他の遺物	137
図37	第12号竪穴住居跡・出土遺物	59	図90	竪穴住居跡集成(1)大型	162
図38	第13号竪穴住居跡・出土遺物	60	図91	第1号竪穴住居跡新旧関係	163
図39	第15・16号竪穴住居跡(1)	61	図92	第4号竪穴住居跡柱穴配置	165
図40	第15・16号竪穴住居跡・出土遺物	63	図93	竪穴住居跡集成(2)小・中型	167
図41	第17号竪穴住居跡・出土遺物	64	図94	第7号土坑遺物出土状況	168
図42	第18号竪穴住居跡・出土遺物	65	図95	遺構の時期変遷(1)竪穴住居跡	171
図43	第19号竪穴住居跡	67	図96	遺構の時期変遷(2)土坑	172
図44	第19号竪穴住居跡出土遺物	68	図97	出土土器時期別比率	173
図45	第20号竪穴住居跡・出土遺物	69	図98	土器集成(1)側面圧痕	175
図46	第21号竪穴住居跡	70	図99	土器集成(2)隆帯①	176
図47	第21号竪穴住居跡出土遺物	71	図100	土器集成(3)隆帯②	177
図48	第22号竪穴住居跡・出土遺物	72	図101	土器集成(4)隆帯③	178
図49	第23号竪穴住居跡(1)	73	図102	土器集成(5)隆帯④	179
図50	第23号竪穴住居跡(2)・出土遺物	74	図103	土器集成(6)刺突	181
図51	第24号竪穴住居跡・出土遺物	75	図104	土器集成(7)沈線	182
図52	第25号竪穴住居跡	77	図105	狩猟文土器	183
図53	第25号竪穴住居跡出土遺物	78	図106	出土土器器種組成	185

写真目次

写真1	調査区遠景・現況・作業状況①	203	写真29	土坑(10)	231
写真2	作業状況②・基本層序	204	写真30	土坑(11)	232
写真3	竪穴住居跡(1)	205	写真31	土坑(12)	233
写真4	竪穴住居跡(2)	206	写真32	土坑(13)	234
写真5	竪穴住居跡(3)	207	写真33	土坑(14)・その他の遺構(1)	235
写真6	竪穴住居跡(4)	208	写真34	その他の遺構(2)	236
写真7	竪穴住居跡(5)	209	写真35	竪穴住居跡出土遺物(1)	237
写真8	竪穴住居跡(6)	210	写真36	竪穴住居跡出土遺物(2)	238
写真9	竪穴住居跡(7)	211	写真37	竪穴住居跡出土遺物(3)	239
写真10	竪穴住居跡(8)	212	写真38	竪穴住居跡出土遺物(4)	240
写真11	竪穴住居跡(9)	213	写真39	竪穴住居跡出土遺物(5)	241
写真12	竪穴住居跡(10)	214	写真40	竪穴住居跡出土遺物(6)	242
写真13	竪穴住居跡(11)	215	写真41	竪穴住居跡出土遺物(7)	243
写真14	竪穴住居跡(12)	216	写真42	竪穴住居跡出土遺物(8)	244
写真15	竪穴住居跡(13)	217	写真43	竪穴住居跡出土遺物(9)	245
写真16	竪穴住居跡(14)	218	写真44	竪穴住居跡出土遺物(10)・土坑出土遺物(1)	246
写真17	竪穴住居跡(15)	219	写真45	土坑出土遺物(2)	247
写真18	竪穴住居跡(16)	220	写真46	土坑出土遺物(3)	248
写真19	竪穴住居跡(17)	221	写真47	土坑出土遺物(4)	249
写真20	土坑(1)	222	写真48	土坑出土遺物(5)・その他の遺構出土遺物	250
写真21	土坑(2)	223	写真49	遺構外出土遺物(1)	251
写真22	土坑(3)	224	写真50	遺構外出土遺物(2)	252
写真23	土坑(4)	225	写真51	遺構外出土遺物(3)	253
写真24	土坑(5)	226	写真52	遺構外出土遺物(4)	254
写真25	土坑(6)	227	写真53	遺構外出土遺物(5)	255
写真26	土坑(7)	228	写真54	遺構外出土遺物(6)	256
写真27	土坑(8)	229	写真55	遺構外出土遺物(7)	257
写真28	土坑(9)	230	写真56	遺構外出土遺物(8)	258

表目次

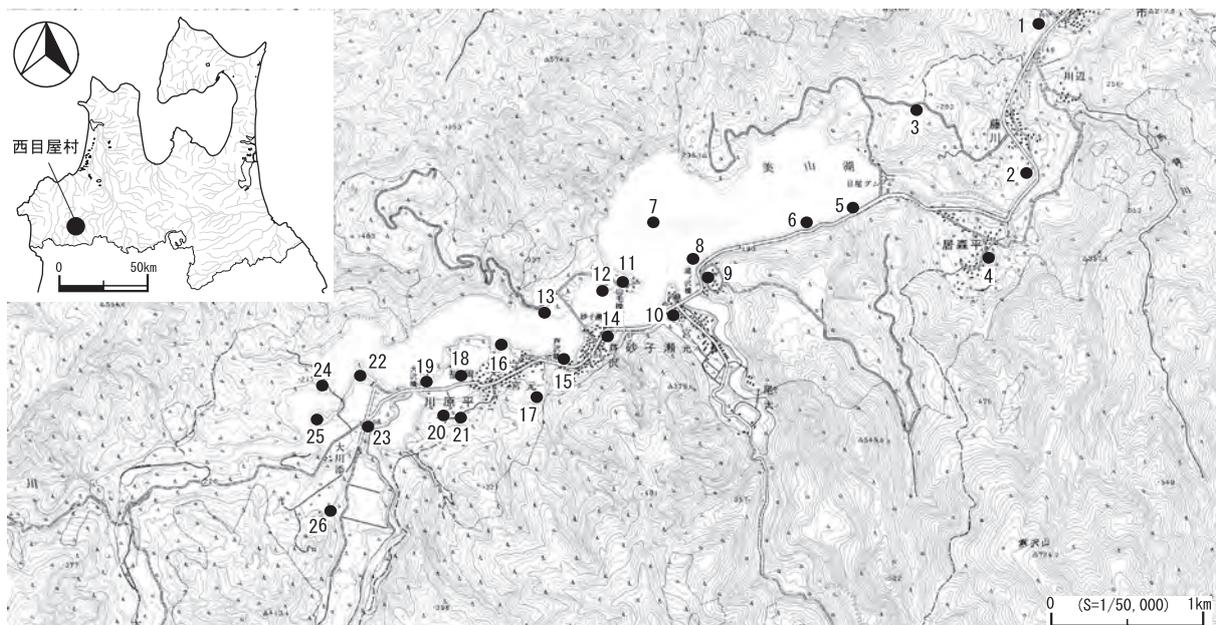
表1	竪穴住居跡属性	80	土器観察表(7)	195
表2	土坑属性	100	土器観察表(8)	196
表3	SP属性(1)	113	土器観察表(9)	197
表4	SP属性(2)	114	土器観察表(10)	198
表5	竪穴住居跡構造一覧	161	石器観察表(1)	199
土器観察表(1)		189	石器観察表(2)	200
土器観察表(2)		190	石器観察表(3)	201
土器観察表(3)		191	石器観察表(4)	202
土器観察表(4)		192	土製品観察表	202
土器観察表(5)		193	石製品観察表	202
土器観察表(6)		194	銭貨観察表	202

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

平成14年に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所から青森県教育庁文化財保護課へ、津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の3者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、県文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区と確定した。川原平(6)遺跡は、平成24～26年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した。

なお、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事のための発掘に関する通知は、平成24年9月に国土交通省津軽ダム工事事務所長から提出され、青森県教育委員会から事前の記録保存のための発掘調査を実施するよう指示がなされている。



番号	遺跡番号	遺跡名	青森県教委報告書(年度)	時代	種別	番号	遺跡番号	遺跡名	青森県教委報告書(年度)	時代	種別
1	343006	稲葉(2)遺跡		平安	散布地	14	343020	芦沢(1)遺跡	500集(11)	縄文(中・後)	散布地
2	343024	瀬の上遺跡		縄文(後・晩)	散布地	15	343021	芦沢(2)遺跡	540集(14)	縄文(中・後)	集落跡
3	343007	芦沼遺跡		縄文(後)	散布地	16	343035	川原平(6)遺跡	本書 567集(15)	縄文(後)、平安	集落跡
4	343015	寒沢遺跡		縄文	散布地	17	343023	川原平(5)遺跡		縄文	散布地
5	343026	水上(3)遺跡	466集(09), 528集(13)	縄文(後・晩)	散布地	18	343022	川原平(4)遺跡	409集(06), 527集(13), 539集(14), 566集(15)	縄文(中・後)	集落跡
6	343029	水上(4)遺跡	466集(09), 500集(11)	縄文(中・後)	散布地	19	343009	川原平(1)遺跡	409集(06), 564・565集(15)	縄文(後・晩)	集落跡
7	343014	砂子瀬村元遺跡		縄文(中)	散布地	20	343010	川原平(2)遺跡		縄文(後)	散布地
8	343025	水上(2)遺跡	514集(12), 528集(13)	縄文(中・後)	集落跡	21	343016	川原平(3)遺跡		縄文	散布地
9	343017	水上(1)遺跡	409集(06), 452集(08)	縄文(中・後・晩)	集落跡	22	343018	大川添(1)遺跡	500集(11)	縄文(中～晩)	集落跡
10	343008	砂子瀬遺跡	466集(09), 482集(10), 513集(12), 543集(14)	縄文(前・中・後)	集落跡	23	343019	大川添(2)遺跡	409集(06), 482集(10), 515集(12)	縄文(前～後)	集落跡
11	343032	鬼川辺(1)遺跡	541集(14)	縄文	散布地	24	343030	大川添(3)遺跡	544集(14)	縄文、平安	集落跡
12	343033	鬼川辺(2)遺跡	541集(14)	縄文	散布地	25	343031	大川添(4)遺跡	542集(14)	縄文	集落跡
13	343034	鬼川辺(3)遺跡	541集(14)	縄文	集落跡	26	343011	焼山遺跡		縄文	散布地

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

川原平(6)遺跡の調査は、平成24年度に調査区東側部分、25年度に北側部分、26年度に西側・南側部分を実施した。調査は、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、集落の時期・構造等を把握できるような進め方をした。

(1) 測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定

測量業者に委託して設置した基準杭をもとに、調査区内に4×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、南から北にローマ数字とアルファベット(A～Y)、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土座標(世界測地系)は、IA-0グリッドがX=58700・Y=-51140である。測量原点には、平成23年度川原平(4)遺跡において設置した3級基準点(基1-1、3-3)を使用し、本調査区付近に4級基準点として3点を設置した(K(6)-1・2・3)。レベル原点も、基準点同様、既存の基準点より移動し、本遺跡使用の基準点に移動して使用した。

(2) 基本層序

遺跡の基本層序については、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。詳細については第1章第4節に記した。

(3) 表土等の調査

遺跡範囲内の表土等の調査は、トレンチ掘りにより確認したところ、水田耕作により表土が大幅に削平されていることが明らかとなったため、重機を併用して表土剥ぎを行った。出土した遺物は、適宜地区単位でグリッド・層位毎に取り上げた。

(4) 遺構の調査

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に「遺構実測支援システム(遺構くん)」(株式会社CUBIC)を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図、出土遺物の形状実測図などは、簡易遣り方測量等で縮尺1/10・1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎又は堆積土一括で取り上げたが、床面・底面及び炉の出土遺物については、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/10・1/20のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル各フィルム及び約1800万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託して行った。大型の竪穴住居跡等の完掘写真撮影には高所作業車を使用して撮影した。

2 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡26軒、土坑46基、配石遺構1基、焼土跡1基、土器埋設遺構3基、小ピット（柱穴）267基が検出され、土器・石器等の遺物が段ボール箱で102箱出土した。縄文時代の集落の時期・構造等を解明するため、竪穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の様相等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

（1）図面類の整理

遺構の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図や炉の実測図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

（2）写真類の整理

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付け、ハードディスク・DVD等に保存した。

（3）遺物の洗浄・注記と接合・復元

調査年度毎に遺構出土遺物及び包含層遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

（4）報告書掲載遺物の選別

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃棄時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

（5）遺物の観察・図化

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。

（6）自然科学分析等

遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定、同じく炭化種実の同定を業者に委託して行った。また土坑内（SK07）からまとめて出土した土器の内面に付着する炭化物の安定同位体分析・放射性炭素年代測定、遺構内から出土した土器の表面や内面に付着する赤色塗膜の材質分析を併せて行った。

（7）遺構・遺物のトレース・版下作成

遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、手作業と「遺構実測支援システム（トレースくん）」（株式会社CUBIC）を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、手作業とデジタル機器による作業を併用した。

（8）遺構の検討・分類・整理

遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期

や同時性・性格等について検討を加えた。また、発掘調査後の整理作業に伴い、発掘調査時に付した遺構名に欠番・変更等が生じたため、それぞれの遺構の記載中に示した。

(9) 遺物の検討・分類・整理

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・機種構成・個体数等について検討した。

(10) 調査成果の検討

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造について検討・整理した。

第3節 調査の経過

1 発掘作業の経過

平成24～26年度の3カ年にわたって発掘調査が行われ、発掘調査体制は以下の通りである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

(平成24年度) 所長	柿崎 隆司 (平成26年3月定年退職)
次長 (総務GM)	高橋 雅人 (現中南教育事務所長)
調査第三GM	白鳥 文雄 (平成26年3月定年退職)
文化財保護主幹	新山 隆男 (調査担当者)
文化財保護主査	佐藤 純子 (調査担当者 現梵珠少年自然の家社会教育主事)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼 邦彦	青森県文化財保護審議会委員 (考古学)
〃	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文学部准教授 (考古学)
〃	柴 正敏	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 (地質学)
〃	佐々木辰雄	日本地質学会会員・故人 (地質学)

(平成25年度) 所長	柿崎 隆司 (平成26年3月定年退職)
次長 (総務GM)	高橋 雅人 (現中南教育事務所長)
調査第三GM	白鳥 文雄 (平成26年3月定年退職)
文化財保護主幹	新山 隆男 (調査担当者)
文化財保護主幹	能代谷征則 (調査担当者 現中南教育事務所主幹)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼 邦彦	青森県文化財保護審議会委員 (考古学)
〃	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文学部准教授 (考古学)
〃	山口 義伸	日本第四紀学会会員 (地質学)

(平成26年度) 所長	三上 盛一
次長 (総務GM)	高橋 雅人 (現中南教育事務所長)
調査第二GM	川口 潤
文化財保護主幹	新山 隆男 (調査担当者)
文化財保護主事	荒谷 伸郎 (調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	葛西 勵	前青森短期大学教授 (考古学)
-----	------	-----------------

- 〃 関根 達人 国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）
- 〃 松山 力 日本地質学会会員（地質学）
- 〃 島口 天 青森県立郷土館主任学芸主査（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は以下の通りである。

（平成24年度）

- 9月11日 調査を開始した。トレンチ掘削により遺構・遺物の分布を確認しながら進めた。
- 9月中旬 遺構・遺物の分布が調査区全体に及ぶことがわかったため、重機を併用して表土剥ぎを進めていくこととした。検出した遺構は検出順に遺構番号を付して精査を行った。
- 9月19日 株式会社キタコンに委託して、基準点・仮BM設置測量を行った。
- 10月25日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中撮影を行った
- 10月26日 予定の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で21箱分出土した。

（平成25年度）

- 5月8日 調査を開始した。前年度の調査により、遺構・遺物の分布を確認していたため、それに配慮しながら、表土剥ぎを進めていくこととした。遺構・遺物の分布が希薄な部分は、重機を併用しながら進めた。検出した遺構は、前年度の遺構番号の続き番号を付して精査を行った。
- 6月4日 調査員山口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。
- 6月28日 予定の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で14箱分出土した。なお、次年度も調査が継続されるため、検出した遺構はブルーシート等で養生した。

（平成26年度）

- 5月1日 調査を開始した。前年度の調査で検出した遺構の精査及び重機を併用して表土剥ぎを進めていくこととした。検出した遺構は、前年度の遺構番号の続き番号を付して精査を行った。
- 5月27日 調査員関根氏による、考古学に関する現地指導を受けた。
- 6月25日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中撮影を行った。
- 7月11日 予定の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で67箱分出土した。

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は、平成24年度の調査終了時から実施し、平成25～27年度には整理・報告書作成体制を整えて本格的な作業を行った。整理・報告書作成体制は以下の通りである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

- | | | |
|----------|---------|---------------|
| （平成25年度） | 文化財保護主幹 | 新山 隆男 |
| | 文化財保護主査 | 佐藤 純子 |
| （平成26年度） | 文化財保護主幹 | 新山 隆男 |
| | 文化財保護主査 | 佐藤 純子 |
| | 文化財保護主事 | 荒谷 伸郎 |
| （平成27年度） | 文化財保護主幹 | 新山 隆男（報告書担当者） |

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は以下の通りである。

(平成24年度)

11月上旬～ 写真類の整理作業、図面類の整理作業、遺物の洗浄・注記作業を行った。

11月中旬 炭化物サンプルを整理して、(株) 加速器分析研究所へ放射性炭素年代測定を委託した。

(平成25年度)

1月上旬～ 平成24年度出土分の遺物を中心に整理作業を開始した。遺物は分別・集計・計量等を行った後、接合・復元作業、実測・拓本等の図化作業を行った。また、平成24年度調査にかかる遺構図面の修正作業も開始した。

2月上旬～ 土器付着炭化物分析を(株) パレオ・ラボに委託した。

(平成26年度)

4月上旬～ 平成25年度出土分の遺物を中心に整理作業を開始した。遺物は分別・集計・計量等を行った後、接合・復元作業、実測・拓本等の図化作業を行った。また、平成25年度調査にかかる遺構図面の修正作業も開始した。

4月下旬～ 土器付着物(赤色塗膜)分析を(株)パレオ・ラボに委託した。

9月上旬～ 平成26年度出土分の遺物を中心に整理作業を開始した。遺物は分別・集計・計量等を行った後、接合・復元作業、実測・拓本等の図化作業を行った。また、平成26年度調査にかかる遺構図面の修正作業も開始した。

9月下旬～ 地形・地質に関する原稿執筆を調査員 山口 義伸氏に依頼した。

11月中旬 炭化物サンプルを整理して、(株) パレオ・ラボへ放射性炭素年代測定を委託した。土器復元を(株) 文化財ユニオンへ委託した。

12月中旬 漆製品(土器)の保存処理を(株) 吉田生物研究所へ委託した。

1月下旬～ シルバーフォト・フォトショップいなみに委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。

(平成27年度)

4月上旬～ 遺構・遺物実測図の最終修正作業及び実測図のトレース作業を行った。

5月上旬～ 土器実測を(株) アルカに委託した。

11月上旬～ 調査成果を総合的に検討して、図版組み及び報告書の原稿作成を行った。

1月下旬～ シルバーフォトに委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。

1月下旬～ 原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3月25日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。

最後に記録類・出土品を整理して収納をした。

第4節 遺跡周辺の地形及び地質について

調査員 山口 義 伸

川原平(6)遺跡は白神山地内の、中津軽郡西目屋村川原平字宮元地内に所在し、岩木川上流の美山湖南岸に発達する河成段丘上に立地している。美山湖は、支流である湯ノ沢川のやや下流側に築堤された1960年完成のダム湖であって、湖面は満水時で標高180m以上となる。岩木川上流は深いV字谷をもつ起伏量の大きい山容を呈するが、渇水期の美山湖南岸には河成段丘の発達が認められる(巻頭カラー写真参照)。大正6年発行の5万分の1地形図(図2)をみると、大沢川及び湯ノ沢川との合流点において岩木川の流路が北側に大きく湾曲し、南岸の張り出した河成段丘面上には西目屋村砂子瀬及び同村川原平の各集落が所在している。また、大沢川との合流点の上流側と湯ノ沢川との合流点の下流側には山地斜面の崩落跡が認められ、流域沿いの氾濫原の一部が水田として利用されていた。

白神山地を蛇行する暗門川は鬼川辺沢や横倉沢など多くの枝谷を集めて流下し、やや下流において支流の大川と合流している。さらに下流側の美山湖周辺では、大沢川、湯ノ沢川などの支流とも合流して本流の岩木川となっている。白神山地は山地地盤の隆起と河川の下刻作用によってV字谷をもつ険しい山容の壮年期山地であって、暗門の滝のように流紋岩や花崗閃緑岩など浸食から取り残された硬質部分が懸谷状の滝として多くみられる。また、白神山地内には山地斜面の崩壊及び地すべりの多発地が存在し、その分布は浸食や風化にさらされ滑材となりやすい砂岩・泥岩、そして頁岩の堆積地域に集中している(青森県史, 2001)。

この地域の地質を概観すると、新第三系中新統の藤倉川層、砂子瀬層、そして大和沢層が広く分布し、白神山地及び弘前市南部の基盤をなしている。藤倉川層は美山湖南方に広く分布していて、緑色～紫緑色の火山礫凝灰岩を主体とし、一部デイサイト質溶結凝灰岩を伴っている。砂子瀬層及び大和沢層は美山湖北方に広く分布していて、砂子瀬層は砂岩・砂質シルト岩を主体とし、安山岩～デイサイト質火砕岩を挟在している。大和沢層は細粒凝灰岩を主体とし、珪藻質泥岩あるいは珪質泥岩と互層をなしている。大和沢層は風化による粘土化が進行して地すべりを誘発しており、その崩落箇所が美山湖北岸に数箇所認められる(鎌田・根本, 2004)。

図3には美山湖周辺、特に湯ノ沢～蟹沢間における河成段丘の分布を示した。美山湖周辺には砂礫層を主体とする川原平台地が分布し、高位段丘と低位段丘に区分できる(水野・堀田, 2003)。今回、25,000分の1地形図「川原平」及び1,000分の1津軽ダム貯水池平面図(平成8年12月作成)をもとに現地踏査し、面の高度、開析度、堆積物等から判断して概ね4段に区分した。ただ、段丘構成層中に指標テフラを確認できず、各段丘面の形成時期に関しては不明である。豊島(1994)によると、奥羽・出羽両山地の諸河川には地殻変動とは関係なく、最終氷期極相期の約2万年前に堆積段丘が離水し、それに伴う浸食段丘が形成されたという、気候変化による地形の存在を指摘している。そして、連続性の良い浸食段丘が形成されるためには下刻速度が鈍化し、ほぼ同じ河床高度を保つ側刻作用が繰り返され、同時に下刻分を補填する多量の土砂の堆積が必要であると考えている。また地すべりに関しては、渡部・八木(1994)が湯ノ沢川上流域に200箇所の地すべり地形を調査し、地すべり堆内からは十和田一八戸軽石層(To-HP)、白頭山一苦小牧火山灰、十和田a降下火山灰等の降下火山灰を確認している。地すべり地形には尾根の末端部が滑落したような初生すべりと初生すべり末端部に形

成された二次的なものがみられるとし、初生地すべりは最終氷期極相期から約1.3万年前のTo-HP降下時期にかけて、現河床に沿った二次的、三次的な地すべり地形は完新世に形成されたものと推測している。

以上のことから、美山湖周辺に分布する以下の河成段丘のうち、I面は水野・堀田(2003)の高位段丘に相当し、約2万年前までに形成された堆積段丘(豊島;1994)に対応すると考えられる。また、IIa面は山間河谷において幅広く連続性のよい河成段丘として分布することから、水野・堀田(2003)の低位段丘、豊島(1994)の浸食段丘に対応すると考えられる。なお、岩木川南岸の、支流大沢川～湯ノ沢川間の山地内に平頂な面(標高280～330m)が存在するが、やせ尾根の状態であって、段丘かどうかは不明である。

I面は岩木川と支流大沢川との合流点付近にあって、本流に面した山地斜面の前縁に分布している。合流点の上流側が標高230～250m、下流側が標高220～240mであって、山地斜面に平行して200～300mの幅で分布している。面を刻む小谷によりやや起伏し、また背後の山地斜面からの崖錐堆積物や地すべり等による移動物質の供給もあってやや勾配のある段丘面をなし、下位のIIa面とは15m超の段丘崖で接している。大沢川沿いの露頭で確認したところ、段丘構成層は角礫～亜角礫からなる礫層が主体であって、基底部は確認していないが、基盤岩の高度分布から推して7～8mの厚さを有する。礫層は挟在する塊状の暗灰色粗粒砂層(厚さ約1.5m)を境にして上下2層に区分できる。上部礫層(厚さ約2m)は径20～30cm大の礫が、下部礫層(3m以上)は径30～50cm大と礫径の大きい凝灰岩質や安山岩質の礫が目立つ。礫の円磨度の低さを考慮すると、最終氷期極相期に供給された岩屑によって形成されたと考えられる。

IIa面は岩木川南岸に分布するほか、上流域に地すべり多発地を有する大沢川や湯ノ沢川の各支流沿いにも認められる。段丘面は各支流との合流点付近に扇状地形に展開しているが、本流の浸食・運搬作用により面的な広がり合流点よりも下流側に延伸している。段丘面の高度は大沢川より上流側が標高207～212m、大沢川～蟹沢間が200～205m、芦沢～山毛櫛沢間が190～200m、と下流側ほど高度を下げていく。大沢川流域に分布する段丘面は合流点から約2km上流まで分布し、扇頂部付近の高度は230mにも達している。なお、IIa面前縁には一段低いIIb面が小規模に分布していて、暗門川流域では標高198～199mのIIb面に大川添(4)遺跡が立地し、IIa面とは約10m、現河床とは15～16mの段丘崖で接している。また、大沢川～芦沢間では197～198mのIIb面に川原平(4)遺跡A区が立地し、IIa面とは2～3mの急斜面で接している。

IIa面の構成層は砂礫層が主体であって、最終氷期極相期以降の温暖期の降水と地すべりの多発により、大量の土砂が供給されたことが要因と考えられる(豊島, 1994)。芦沢(2)遺跡周辺の露頭で確認したところ、層厚は約6～7mで、段丘末端に向かってしだいに薄くなっていく。層相から3層に区分され、下部が円礫(径10～30cm大)を主体とする砂礫層(厚さ2～3m)、中部が淘汰不良の砂と砂礫の互層(厚さ約2m)、そして上部が細粒～中粒砂と砂質シルト(厚さ約1m)、と上方ほど細粒化している。なお、山地斜面下には最上部に亜円礫～亜角礫を包含する粘土質砂(厚さ約2m)の崖錐性堆積物が認められる。

下位のIIb面については、川原平(4)遺跡A区において東西方向に延びるマウンド状の砂礫堆が露出し、砂礫堆に並行する谷状凹地がIIa面との境界をなしている。発掘調査終了後の工事現場で確認し

たところ、円礫（径10～30cm大）を主体とする砂礫層（厚さ約1.5～2m）が堆積し、直下には白色細粒凝灰岩からなる基盤岩が露出していた。おそらく、このマウンド状の砂礫層が蛇行河川のポイントバーのような中洲状の砂礫堆で、境界部に認められる谷状凹地が流路跡であったと考えられる。

Ⅲ面は岩木川南岸の、支流大沢川～蟹沢間に小規模に分布するのみであって、Ⅱb面同様にポイントバー的な環境下であったと考えられる。川原平(4)遺跡E区が立地するⅢ面は標高185～186mの平坦面であって、Ⅱb面とは14～15mの段丘崖で接し、崖下には流路跡と思われる谷状凹地が認められる。なお、現河床とは5～6mの段丘崖で接している。段丘構成層は黄褐色中粒砂を基質とする砂礫層（厚さ2～3m）と下部の円礫層（径30～60cm大）である。段丘末端部ではこの円礫層が凸状に盛り上がり地表面に露出している。

Ⅳ面は岩木川流域の氾濫原であって、概ね湯ノ沢川付近までは確認でき、下流側ではダム湖に水没している。面の高度は、暗門川～甲沢間では標高178～185m、大沢川付近では180～185m、芦沢より下流側では178～182mである。氾濫原は約180mを境に2段に区分でき、上位のⅣa面は甲沢、大沢川、湯ノ沢川など地すべり多発地を有する支流との合流点付近に広く分布し、谷壁の崩落地直下にも形成されている。下位のⅣb面は本流域沿いに分布している。

さて、川原平(6)遺跡は美山湖南岸にあって、蟹沢東岸に展開するⅡb面上に立地している（図3）。段丘面は標高197～199mの平坦面であって、背後のⅡa面（標高200～205m）とほぼ連続的に分布している。蟹沢東岸のⅡb面は、岩木川本流の蛇行と蟹沢の開析により、美山湖に張り出すように分布しており、北端部は急崖となっている。津軽ダム貯水池平面図（1/1000）をみると、調査区域内はほとんどが休耕地であって、全体的に区画整備による削平が行なわれ、南側の一部に段差が認められる。調査区南端は約2mの高度差のある斜面となっており、Ⅱa面とⅡb面の境界をなす東西方向の谷状凹地が存在する可能性がある。また、蟹沢に臨む調査区西端には斜面崩壊あるいは地すべりによると思われる弧状の痕跡が2箇所連続しており、河床には崩落物によるマウンドが認められる。東端部にも弧状の崩壊地形があって、崩壊箇所の頂部周辺（ⅡI～G-28～33）は引張亀裂に起因する軟弱な地盤となっている。

調査区内の基本土層をみると、遺構確認及び遺物包含層であるⅡb層直下にはシルト岩の角礫・破片を多量に包含するⅢ層が堆積している。このⅢ層は芦沢(2)遺跡や川原平(1)遺跡北端部、川原平(4)遺跡A地区でも確認しているが、Ⅱa面の段丘構成層にはなく、またⅡb面でも岩木川本流に面した段丘末端部にのみ堆積している。堆積状況から推して、地すべりあるいは斜面崩壊に係る土石流・泥流に起因すると考えられる。

次に、本調査区内の基本層序については、北端部の第15号土坑付近と、西斜面部及び南斜面部の3箇所を確認している（図4）。上述したように、調査区以内は水田整備に関する削平が行なわれており、耕作土直下に第Ⅲ層が堆積していることが多い。

第Ⅰ層；黒褐色土（10YR2/3）。耕作土である。全体的に砂質であり、粘性・湿性がなく、多少固さはあるが脆い。耕作による攪乱が認められ、大量の円礫が包含されている。

第Ⅱ層；黒褐色土（10YR3/3）。多少粘性・湿性がありやや腐植質である。本層（第Ⅱb層）は砂質粘土粒等の混入により全体的に砂質である。平坦面では削平により欠如することが多いが、遺構の覆土や東西両端の傾斜地には厚く堆積し、縄文時代中期末葉～後期初頭の遺物を包含する。ただ、

南斜面には上位層として、円礫混じりの暗褐色砂質土（第Ⅱa層）が認められ、下部には黄褐色砂質シルトの薄層が堆積している。この第Ⅱa層は斜面下方ほど厚く堆積し、上部が平坦となっていることから整地用の盛り土の可能性もある。

第Ⅲ層；暗褐色砂質粘土（10YR3/3）。シルト岩の角礫～亜角礫（径2～10cm大）や破片を多量に包含している。この礫の混入状況により下部の礫質部分を第Ⅲb層、破片あるいは細粒化している部分を第Ⅲa層として細分している。なお、第Ⅲb層には凝灰岩や安山岩、花崗閃緑岩などの円礫も包含されている。概ね第15号土坑以北の本流側では第Ⅲa層と第Ⅲb層が、以南の標高の高い方では第Ⅲa層のみの堆積となっている。シルト礫の混入は本遺跡東方の芦沢(2)遺跡や西方の川原平(1)遺跡北端部でも認められ、比較的近距离で発生した地すべりあるいは斜面崩壊に伴う土石流・泥流に起因するものと考えられる。

第Ⅳ層；にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）。概ね第15号土坑よりも南側ではシルト～粘土質であり、北側では砂質となっている。本層と第Ⅴ層は下位の砂礫層（第Ⅵ層）の凹地内の堆積物と考えられ、川原平(4)遺跡A地区でも同様の凹地に砂層と細礫層の互層を確認している。

第Ⅴ層；灰黄褐色砂（10YR5/2）。細礫と砂の互層をなし、下位の砂礫層の凹地部での堆積が目立つ。

第Ⅵ層；灰黄褐色砂礫層（10YR5/2）。Ⅱb面の段丘構成層であって、淘汰不良の砂～細礫を基質とし、安山岩や凝灰岩などの円礫（径10～30cm大）が多量に包含されている。砂礫層の上面は凹凸が激しく、地表面に露出することもあり、調査区北側付近で確認できた。

引用・参考文献

- 豊島正幸（1994）わが国における最終氷期後半の広域的な侵食段丘の形成，季刊地理学vol. 46
- 渡部寿郎・八木浩司（1994）白神山地東部・湯ノ沢川上流域におけるテフクロロジーからみた最終氷期の地すべり地形発達，季刊地理学vol. 55
- 箕浦幸治・小菅正裕・柴 正敏・根本直樹・山口義伸（1998）青森県の地質，青森県
- 水野 裕・堀田報誠（2003）土地分類基本調査（5万分の1），地形分類図「川原平」，青森県
- 鎌田耕太郎・根本直樹（2004）土地分類基本調査（5万分の1），表層地質図「川原平」，青森県
- 青森県（2001）青森県史 自然編 地学
- 青森県教育委員会（2014）鬼川辺(1)遺跡・鬼川辺(2)遺跡・鬼川辺(3)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第541集
- 青森県教育委員会（2014）芦沢(2)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第540集
- 青森県教育委員会（2014）川原平(4)遺跡A地区 青森県埋蔵文化財調査報告書第527集

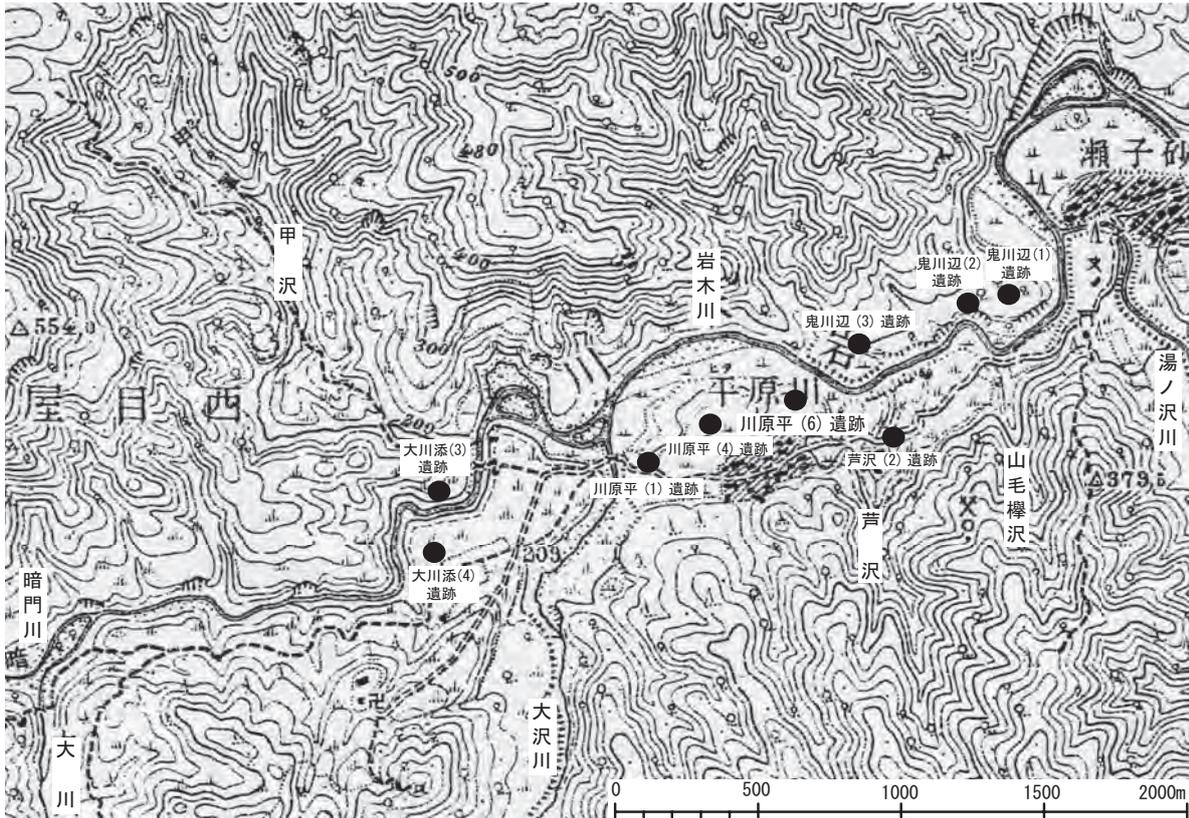


図2 遺跡周辺の地形図（大正6年発行の5万分の1地形図「川原平」を拡大して複写）

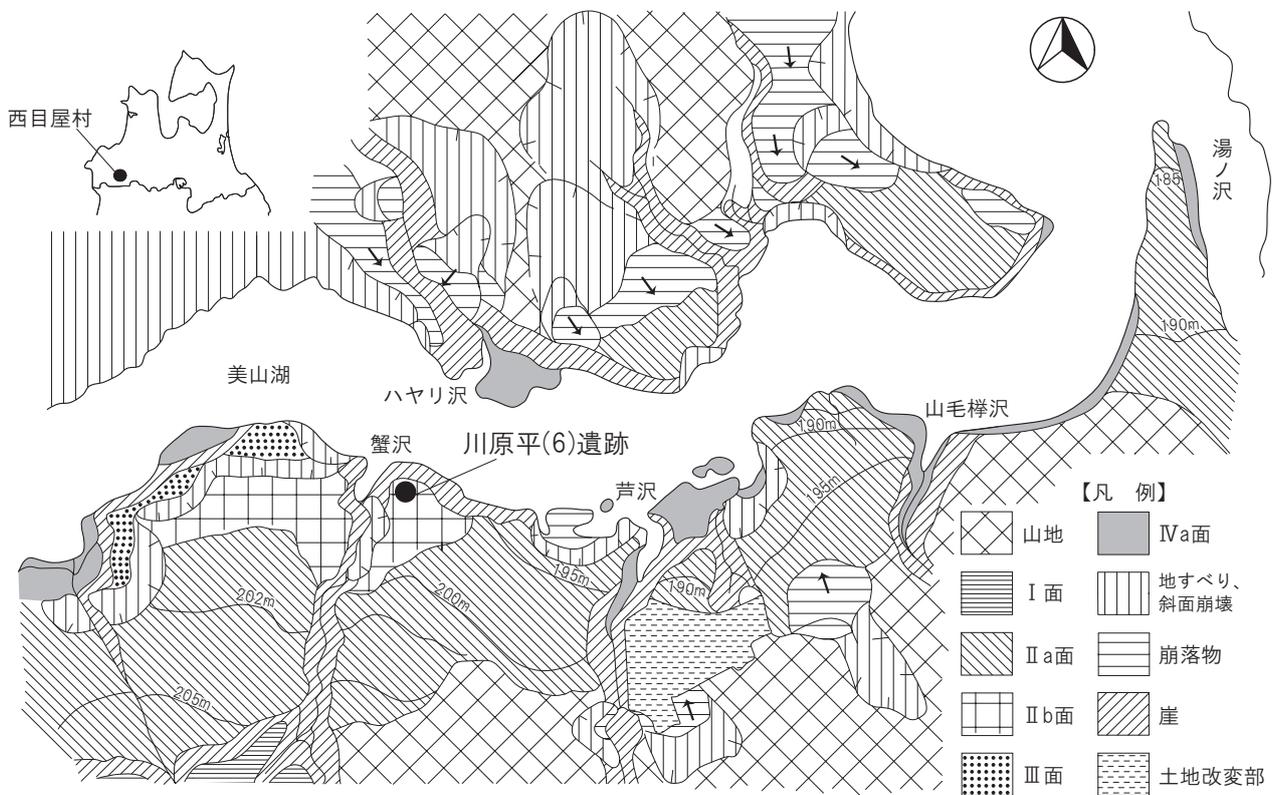
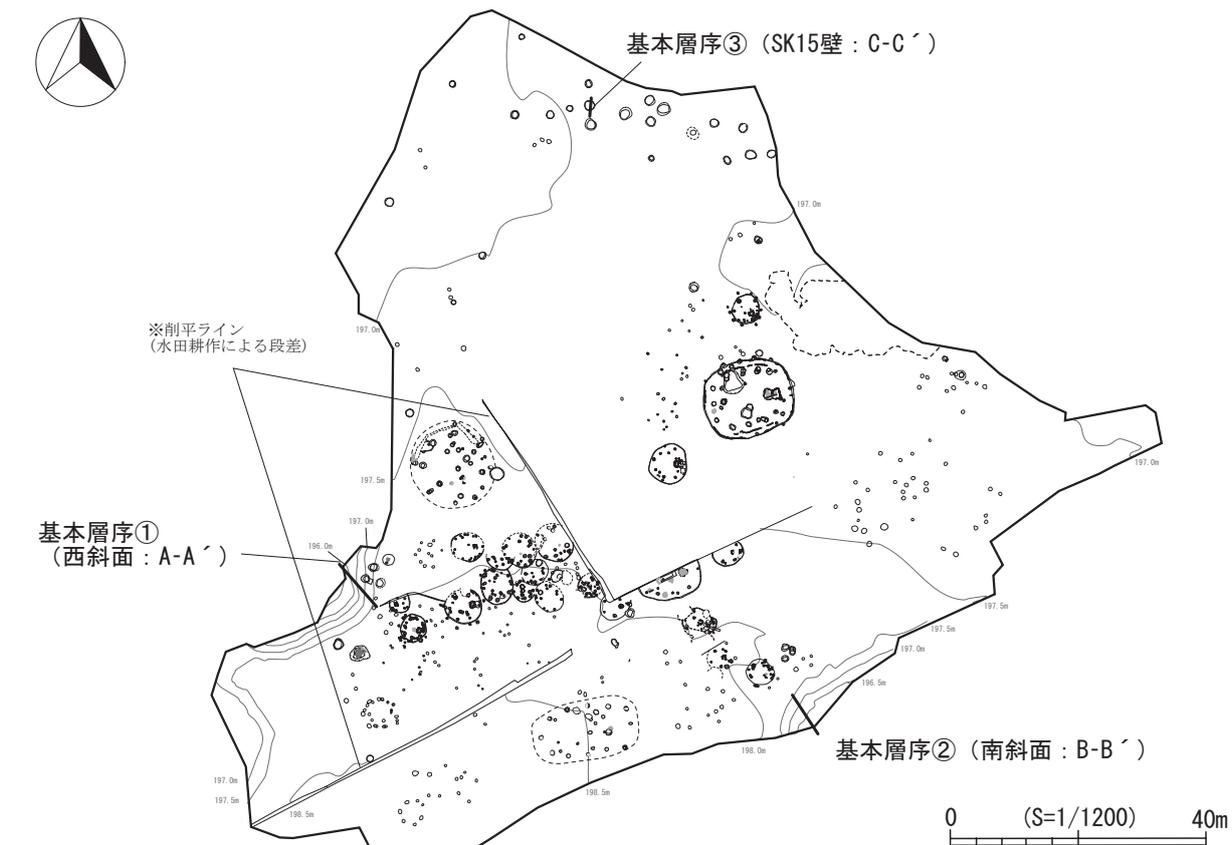
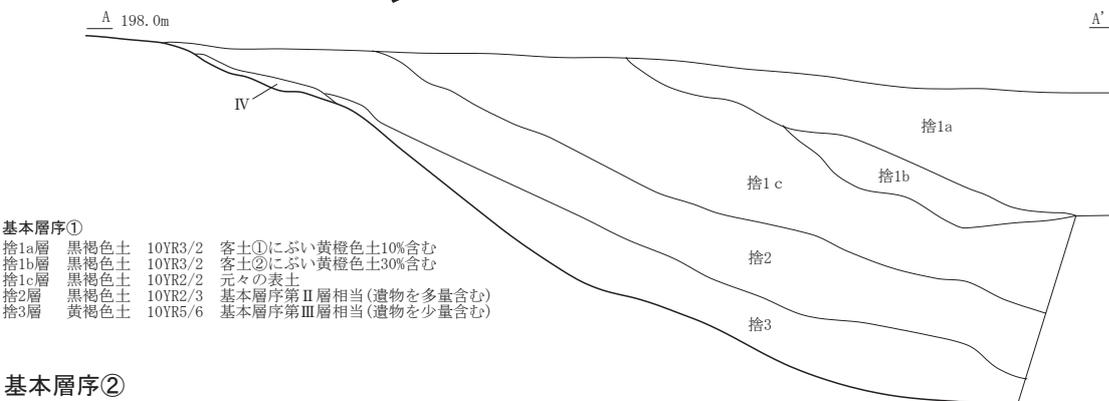


図3 河成段丘の分布



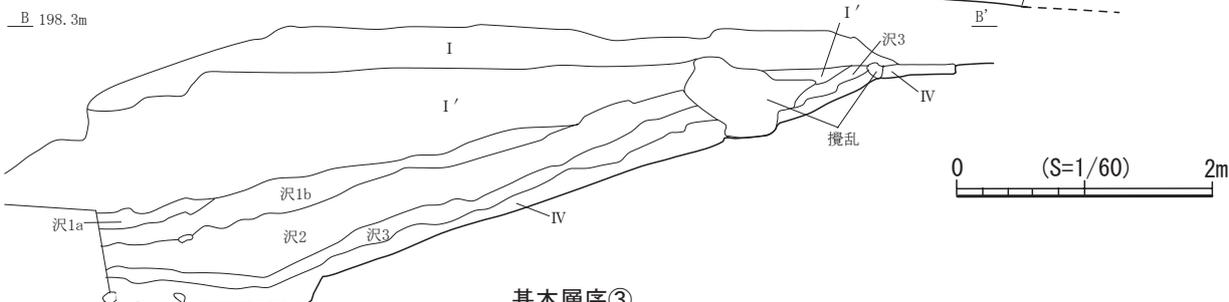
基本層序①



基本層序①

捨1a層	黒褐色土	10YR3/2	客土①にぶい黄褐色土10%含む
捨1b層	黒褐色土	10YR3/2	客土②にぶい黄褐色土30%含む
捨1c層	黒褐色土	10YR2/2	元々の表土
捨2層	黒褐色土	10YR2/3	基本層序第II層相当(遺物を多量含む)
捨3層	黄褐色土	10YR5/6	基本層序第III層相当(遺物を少量含む)

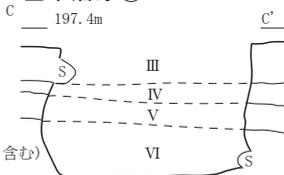
基本層序②



基本層序②

第I層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	現表土
第I'層	暗褐色土	10YR3/3	沢埋没土(旧表土)
沢1a層	黒褐色土	10YR2/3	旧表土か
沢1b層	黒褐色土	10YR2/3	自然堆積層(無遺物層)
沢2層	黒褐色土	10YR1.7/1	基本層序第II層相当(遺物を多く含む)
沢3層	黄褐色土	10YR5/6	第IV層と沢2層の漸移層

基本層序③



基本層序③

第III層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~15mm)10%含む
第IV層	にぶい黄褐色土	10YR3/2	礫(φ10~30mm)3%含む
第V層	灰黄褐色土	10YR5/2	小礫(φ3~10mm未満)含む、砂質
第VI層	灰黄褐色土	10YR5/2	礫(φ10~70mm)50%含む

図4 基本層序

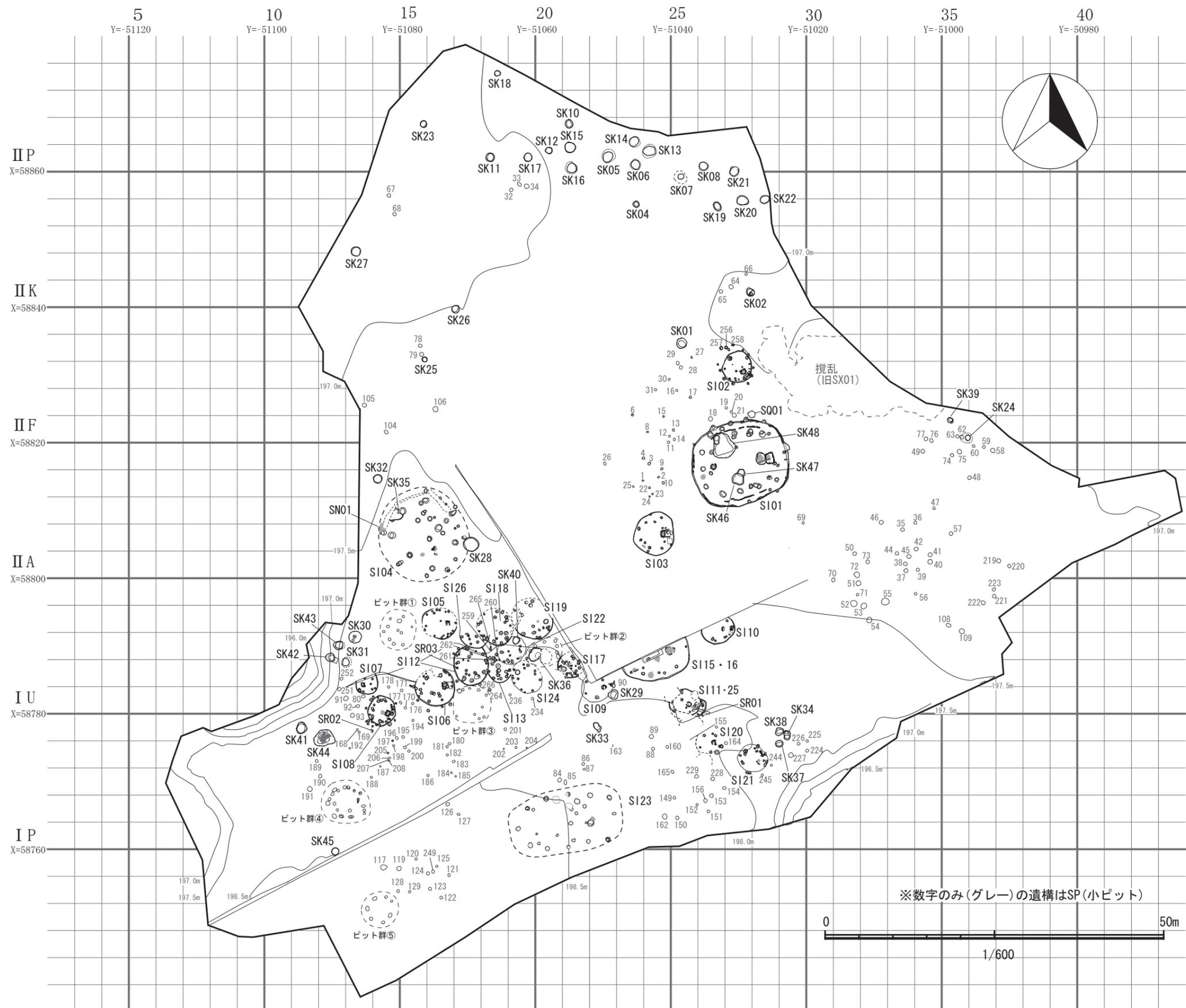


図5 遺構配置図



図6 調査区域図及び周辺の地形

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、平成24年度に3棟、26年度に23棟、合計26棟検出した。第8号竪穴住居跡は、3棟の重複関係が認められたため、アルファベット大文字のA・B・Cを付して区別し、SI12として調査したものは、第12号と第26号竪穴住居跡に分割した。また、第15号と第16号竪穴住居跡は1棟の竪穴住居跡として報告する。SI14は、調査段階で欠番とした。なお、Pit計測値及び炉石・配石の重量を図版内の表に示した。

第1号竪穴住居跡 (SI-01 : 図7～16、写真3～5、35～37)

[位置・確認] II D～G-26～29グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で黒色の大型不整形プランを確認した。

[重複] 第46～48号土坑と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 東西方向に約14.2m、南北方向に約12.3mの楕円形で、床面積は約141.1㎡である。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約35cmで、地山(第Ⅳ層)を直接床面としている。

[炉・焼土] 床面から炉を3基、焼土跡を4基検出した。炉1(石囲炉)は床面東側におよそ41個の石で長方形に組み立てられており、外径は約172×136cmである。被熱範囲は炉内の西側に偏り、約128×58cmの範囲で底面(第Ⅳ層)が被熱しており深度は最大で20cm程度である。炉石重量は、多くが10kg未満であり、10kg以上のものが9個あった(S-02・04・12・16・18・20・25・28・32)。最大重量はS-32で、約50kgであった。炉2(石囲炉)は床面西側におよそ20個の石でほぼ円形に組み立てられており、外径は約88×84cmである。約54×50cmの範囲で底面(第Ⅳ層)が被熱しており深度は約6cmである。炉石重量は、全て10kg未満であった。なお、炉2は焼土3の上に作られたものと考えられる。炉3は炉1に東側一部を壊されており、第Ⅳ層相当の土で覆われていた。約195×128cmの掘方底面に約128×88cmの被熱範囲があり、深度は最大で12cmである。焼土1は床面南側のPit02(Pit38)と03の間に位置し、約66×60cmのほぼ円形の掘方覆土がまだらに被熱している。焼土2は床面西側のPit05と06の間に位置し、床面が約76×64cmの範囲で楕円形に被熱し深度は4cmである。焼土3は炉2に中央部を壊されており、本来は床面が約106×102cmの範囲でほぼ円形に被熱し深度は6cm程度であったと考えられる。焼土4は炉3の覆土上が約61×40cmの範囲で楕円形に被熱し深度は約15cmである。

[柱穴・溝] 柱穴状の小ピットは40基確認した。主柱穴は床面北側から西側を通って南側にU字状に連なる小ピット群であると考えられるが、北側の小ピットは2基重複するものが多い。また、Pit19・20・26・27は北側壁面を斜位に掘削する特徴をもつものである。溝は一部途切れるものの幅10～15cm、深さ8～10cmの壁溝である。床面北側と南側には壁から約100cm内側に同規模の溝がある。

[堆積土] 溝の堆積土も合わせて5層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われるが住居跡東側の第1層に礫などが混じることがあってa～eに細分した。

[出土遺物] 土器が30251g、石器が58341g出土した。このうち土器は55点を図示した。床面及び小ピット堆積土から出土した土器は8点を図示し、いずれも縄文時代中期末葉～後期初頭の土器であると考えられるが、Pit06堆積土中から出土したもの(図11-1)は縄文時代中期中葉(大木10式併行期)で、炉1の底面及び堆積土中から出土したもの(図11-8)は縄文時代後期初頭に含まれるもの

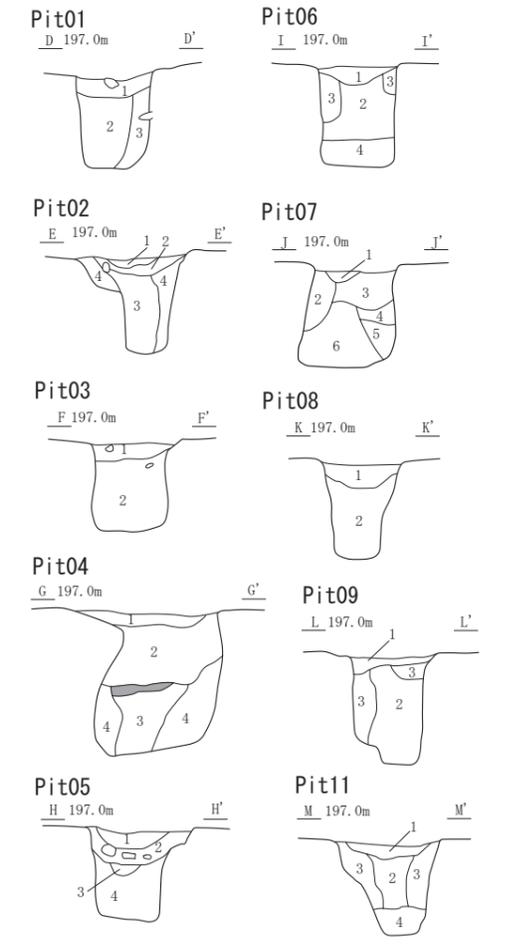
第1号竖穴住居跡

II G-26

II G-29



No.	開口部	深さ
01	68×72	101
02	67×58	93
03	75×88	87
04	92×94	126
05	87×85	233
06	68×70	97
07	75×74	95
08	58×66	98
09	58×76	100
10	54×52	81
11	66×62	100
12	61×80	53
13	欠番	
14	欠番	
15	64×71	49
16	51×49	29
17	95×91	29
18	54×70	25
19	57×91	37
20	55×75	35
21	43×37	35
22	21×19	22
23	66×61	—
24	66×73	53
25	43×38	57
26	38×68	68
27	35×69	62
28	32×38	30
29	36×33	12
30	45×45	17
31	46×41	23
32	—×77	23
33	86×94	91
34	40×57	85
35	欠番	
36	—×63	54
37	欠番	
38	67×—	91
39	26×38	—
40	49×46	9



第1号竖穴住居跡 (S101)

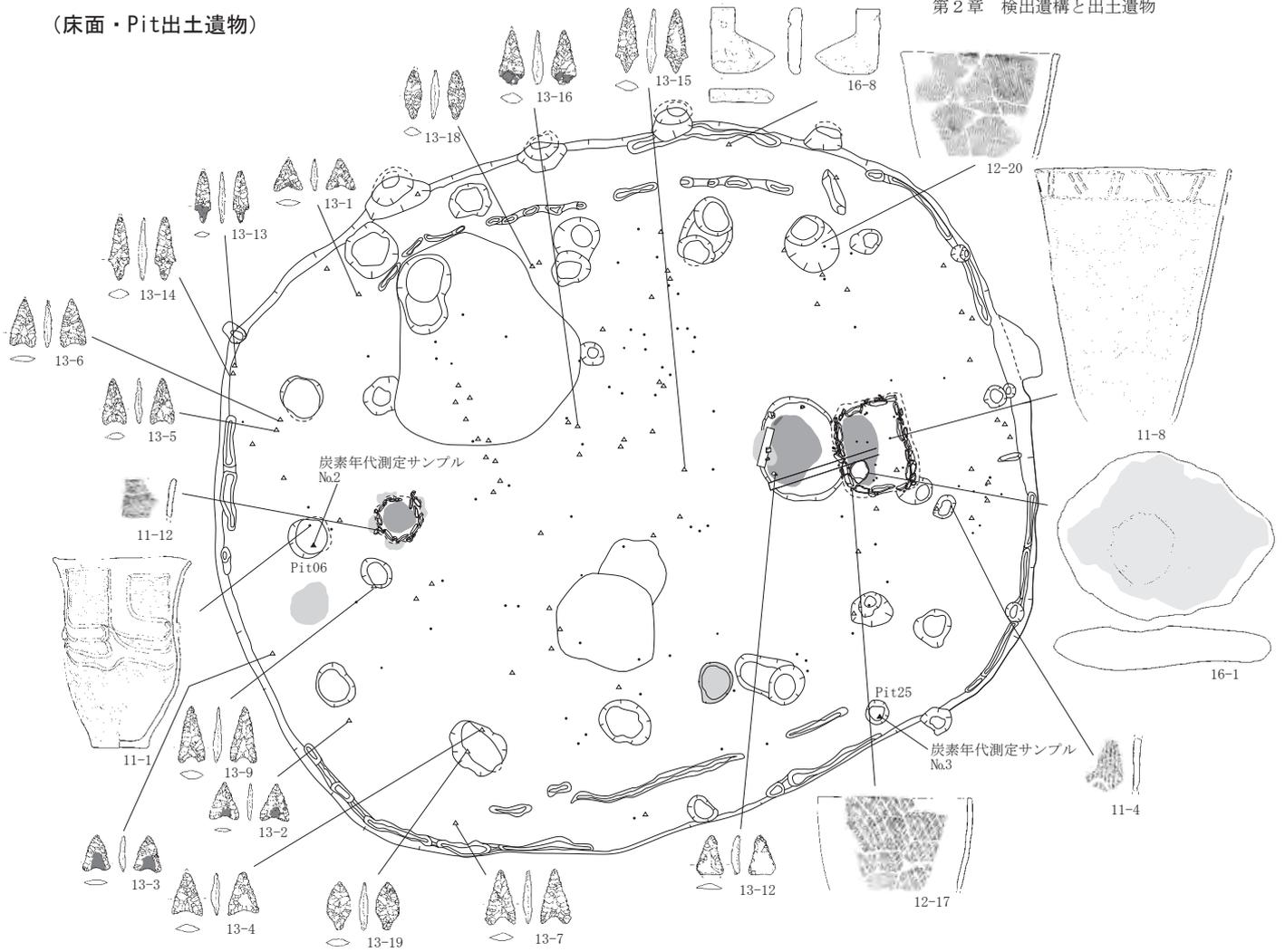
第1層	暗褐色土	10YR3/4	褐色土(7.5YR4/6)10%との混合土、礫(φ30~55mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)1%
第1a層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ20~60mm)5%、炭化物フワック(φ1~25mm)3%
第1b層	黒褐色土	10YR2/3	礫(φ15~180mm)25%、炭化物フワック(φ1~18mm)3%
第1c層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ15~25mm)1%、炭化物粒(φ1~9mm)1%
第1d層	褐色土	10YR4/4	礫(φ15~25mm)10%、炭化物粒(φ1~5mm)1%
第1e層	褐色土	10YR4/4	礫(φ15~20mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ18~140mm)10%、炭化物粒(φ1~7mm)1%
第3層	褐色土	10YR4/4	礫(φ15~30mm)1%、炭化物粒(φ1~6mm)2%
第3a層	褐色土	10YR4/4	礫(φ15~70mm)2%、炭化物粒(φ1~5mm)3%
第3b層	褐色土	10YR4/4	暗褐色土(10YR3/4)10%、礫(φ10~70mm)1%、炭化物粒(φ1~3mm)2%
第4層	褐色土	10YR4/6	礫(φ1~30mm)1%、炭化物粒(φ1~7mm)2%
第5層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	壁溝、炭化物粒(φ1~2mm)2%
Pit17			
第6層	褐色土	10YR4/6	礫(φ12~22mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
Pit32			
第7層	褐色土	10YR4/6	礫(φ3~5mm)3%、炭化物粒(φ1~5mm)2%

Pit01	第1層	褐色土	10YR4/6	礫(φ11~100mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)1%
	第2層	褐色土	10YR4/4	礫(φ30~40mm)1%
	第3層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ20~98mm)1%、炭化物粒(φ1~3mm)1%
Pit02	第1層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~50mm)1%、炭化物粒(φ1mm)1%
	第2層	褐色土	10YR4/6	炭化物粒(φ1~2mm)1%
	第3層	褐色土	10YR4/4	礫(φ10~80mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)2%
	第4層	褐色土	10YR4/6	礫(φ10~20mm)1%、炭化物粒(φ1~10mm)2%
Pit03	第1層	褐色土	10YR4/4	礫(φ5~60mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
	第2層	黄褐色土	10YR5/6	褐色土(10YR4/4)との混合土、礫(φ10~60mm)3%、炭化物粒(φ1~3mm)2%
Pit04	第1層	褐色土	10YR4/4	炭化物粒(φ1~5mm)2%
	第2層	褐色土	10YR4/6	礫(φ5~50mm)2%、炭化物粒(φ1~4mm)2%
	第3層	褐色土	10YR4/6	黒褐色土(10YR2/3)10%との混合土、礫(φ30~90mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
	第4層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~50mm)1%、炭化物粒(φ1~4mm)1%
Pit05	第1層	褐色土	10YR4/4	炭化物フワック(φ1~25mm)3%
	第2層	褐色土	10YR4/6	礫(φ30~220mm)20%、炭化物粒(φ1mm)1%
	第3層	暗褐色土	10YR3/4	小礫(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ1mm)1%
	第4層	褐色土	10YR4/4	炭化物粒(φ1~10mm)1%

Pit06	第1層	褐色土	10YR4/6	礫(φ15~20mm)1%、炭化物フワック(φ1~15mm)7%
	第2層	黄褐色土	10YR5/6	炭化物粒(φ1~10mm)5%
	第3層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	炭化物フワック(φ1~20mm)5%
	第4層	褐色土	10YR4/4	しまり無し
Pit07	第1層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土(10YR2/3)5%との混合土、炭化物粒(φ1~2mm)1%
	第2層	褐色土	10YR4/6	炭化物粒(φ1~6mm)2%
	第3層	褐色土	10YR4/4	炭化物粒(φ1~3mm)3%
	第4層	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土(10YR5/6)5%との混合土
	第5層	褐色土	10YR4/6	炭化物粒(φ1~4mm)1%
	第6層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物フワック(φ1~11mm)2%
Pit08	第1層	暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土(10YR2/3)10%、黄褐色土(10YR5/8)5%との混合土、炭化物粒(φ1~5mm)3%
	第2層	暗褐色土	10YR3/4	褐色土(10YR4/4)、黄褐色土(10YR5/8)との混合土
Pit09	第1層	褐色土	10YR4/4	炭化物粒(φ1~2mm)1%
	第2層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物粒(φ1~5mm)3%
	第3層	褐色土	10YR4/6	暗褐色土(10YR3/4)20%との混合土、炭化物粒(φ1~2mm)2%
Pit11	第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ6~60mm)1%、炭化物粒(φ1~7mm)2%
	第2層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物フワック(φ1~21mm)5%
	第3層	黄褐色土	10YR5/8	褐色土(10YR4/4)30%との混合土、炭化物粒(φ1~5mm)3%
	第4層	褐色土	10YR4/4	炭化物粒(φ1~3mm)1%

図7 第1号竖穴住居跡(1)

(床面・Pit出土遺物)



(覆土出土遺物)

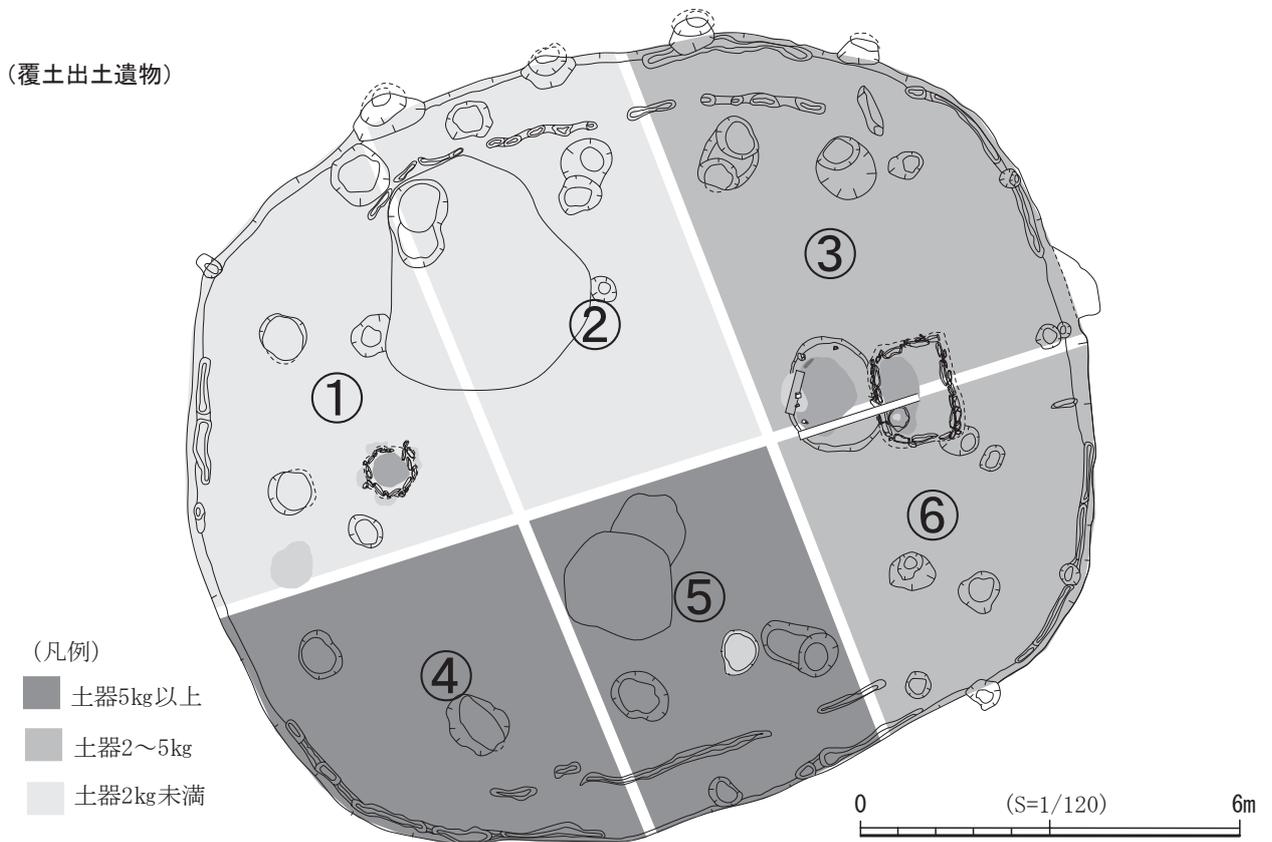


図8 第1号竖穴住居跡(2)

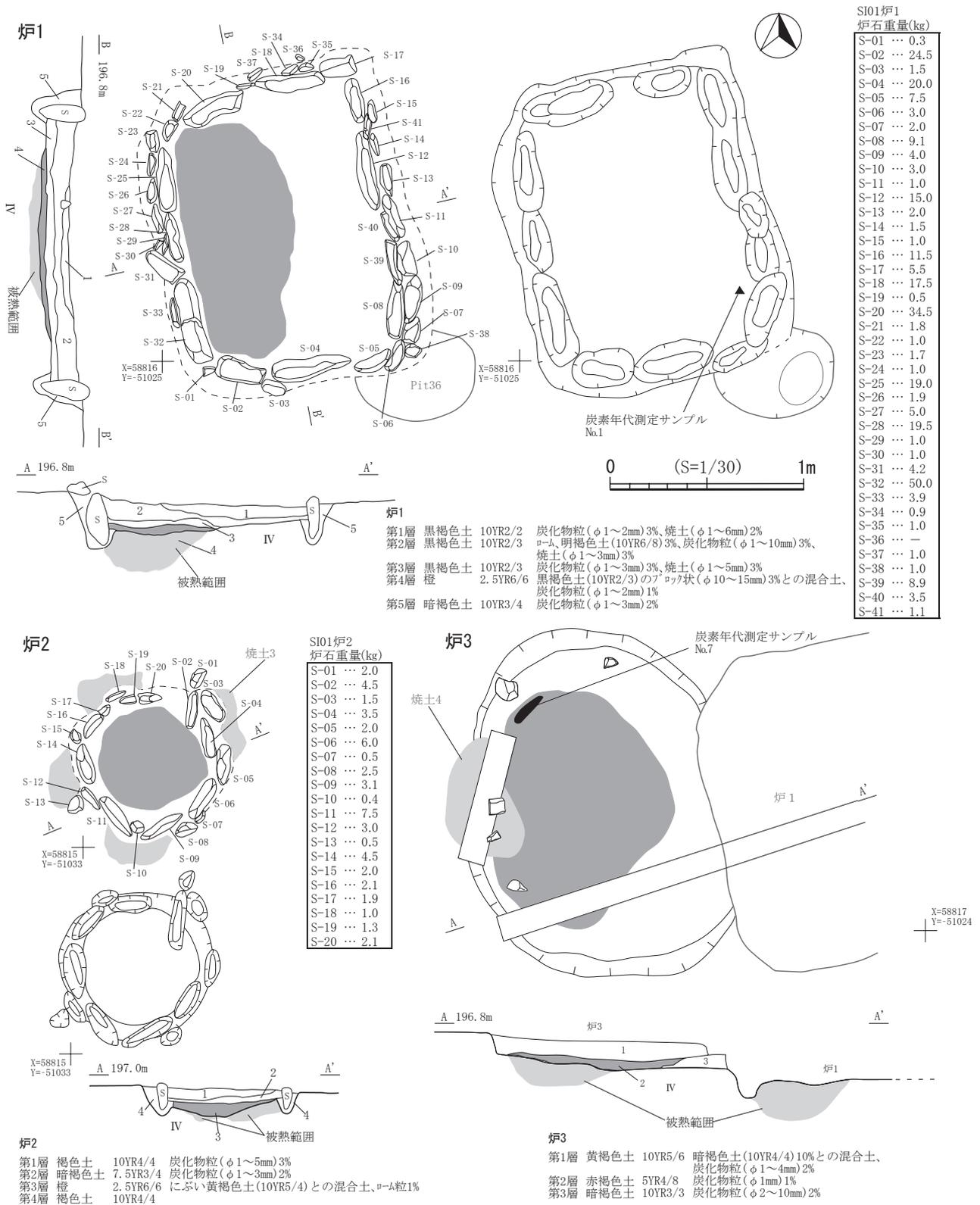


図9 第1号竪穴住居跡(3)

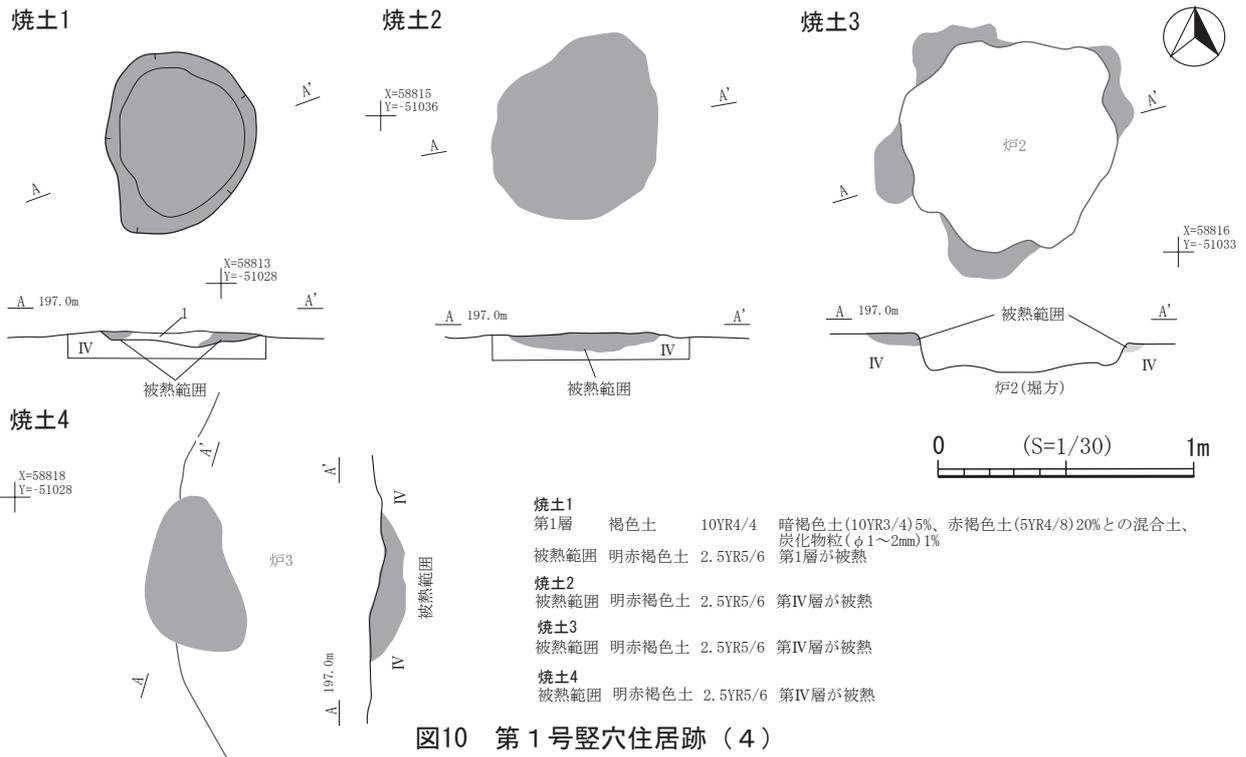
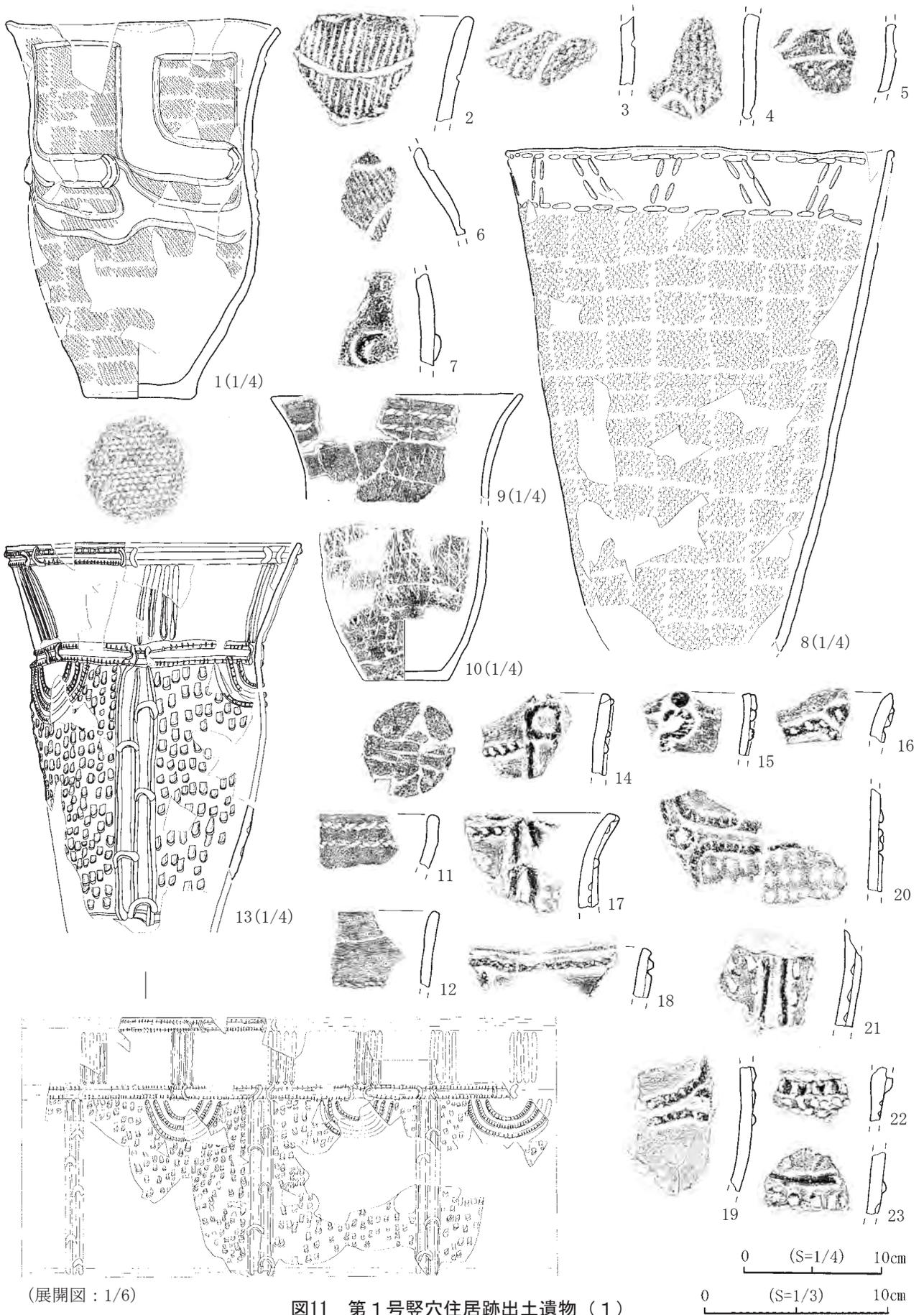


図10 第1号竪穴住居跡(4)

と考えられ、若干の時期差がある。堆積土中から出土した土器は、セクションラインをもとに①～⑥とエリアを決めて6分割して取り上げた(図8)。出土重量は、①エリアが約1.7kg、②エリアが約1.3kg、③エリアが約2.7kg、④エリアが約5.5kg、⑤エリアが約5.8kg、⑥エリアが約2.0kgである。堆積土出土土器の時期は床面および小ピットから出土したものと同時期のものが多いが、縄文時代後期初頭～前葉に比定できるものも含まれる。図11-13は、隆帯で施された文様の他、胴部には縄文ではなく刺突文が施されるという特徴をもつ。図12-21～23、26～29の土器底面には網代痕が確認できる。図12-32は深鉢形の底部破片であるが、内面に赤色塗膜が付着するという特徴をもつ。石器は68点を図示した。床面や焼土面から出土した石鏃が15点と最も多かった。図13-1～3・5・13・14・16にはアスファルトの付着が確認できる。出土地点も住居の西半部に偏って出土するという特徴がある(図8)。他は石槍、石錐、削器、搔器、石核、磨り石、敲击石、磨り・敲击の複合痕をもつ礫、台石を図示した(図13～16)。図13-22は石錐としたが、火はじけ痕が確認できる。図13-36は接合資料である。図14-10は、剥片素材(珪質頁岩)の敲击石である。二次加工剥片及び微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。その他の遺物として堆積土から土偶2点(図16-6・7)、円盤状土製品4点(図16-9～12)、床面から鳥形のような形状に整形した礫(凝灰岩)の両面に線刻を施した線刻石製品1点(図16-8)が出土した。

[小結] 炉1・3、Pit06・25から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、炉1は $3,902 \pm 20$ 、炉3は $1,485 \pm 19$ 、Pit06は $3,962 \pm 20$ 、Pit25は $3,887 \pm 20$ (いずれも暦年校正用yrBP)との値が得られた(第3章第1節)。炉3の年代測定値が極端に新しい結果が得られたが、炉3には、この他に炭化物が全く確認されなかったため、後世の混入である可能性も考えられる。また、焼土1の土壌から確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミがわずかに得られた(第3章第2節)。また、堆積土から出土した小型土器(図12-32)内面に付着する赤色塗膜を分析したところ漆層が観



(展開図: 1/6)

図11 第1号竖穴住居跡出土遺物(1)

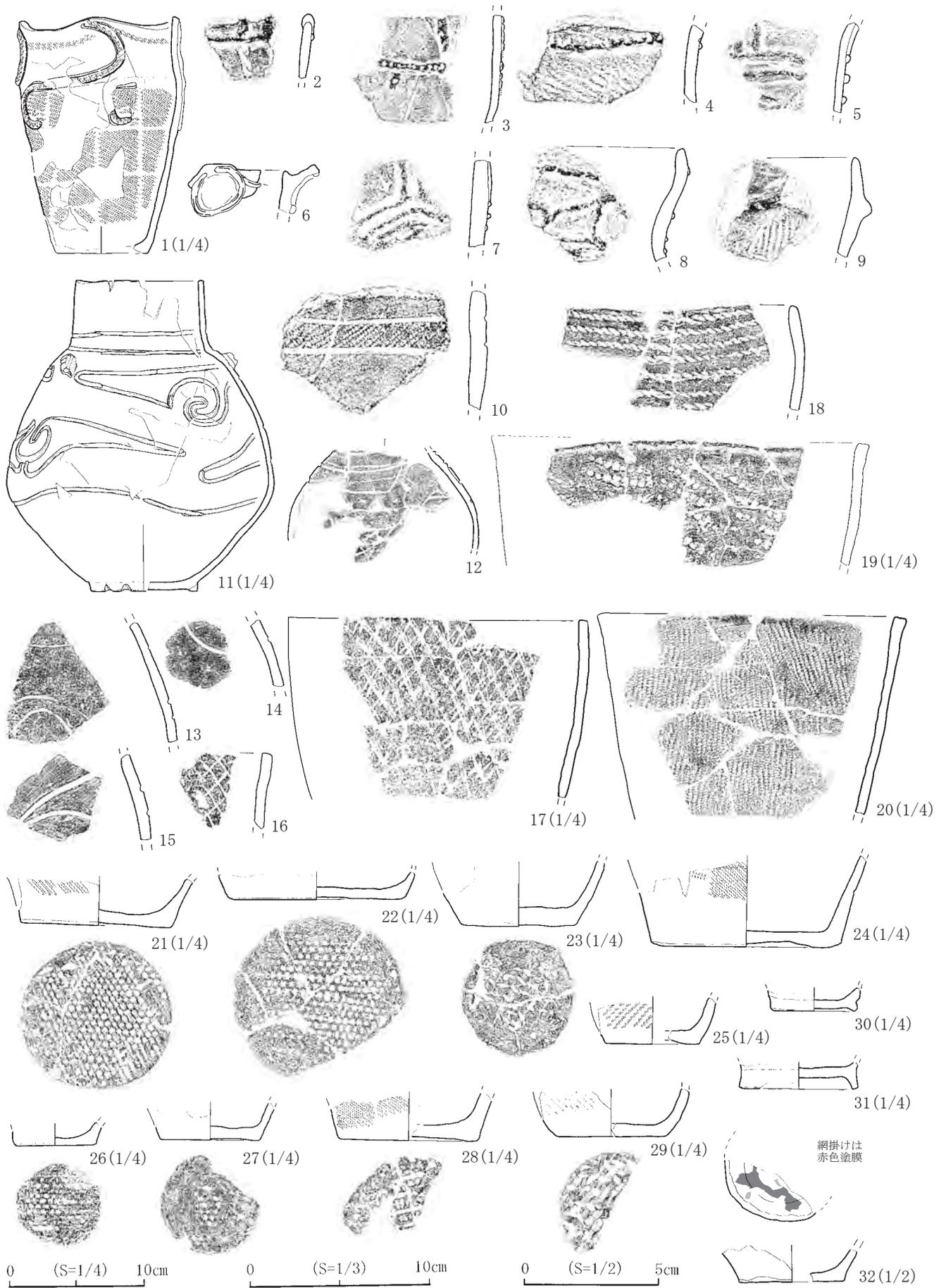


图12 第1号竖穴住居跡出土遺物(2)

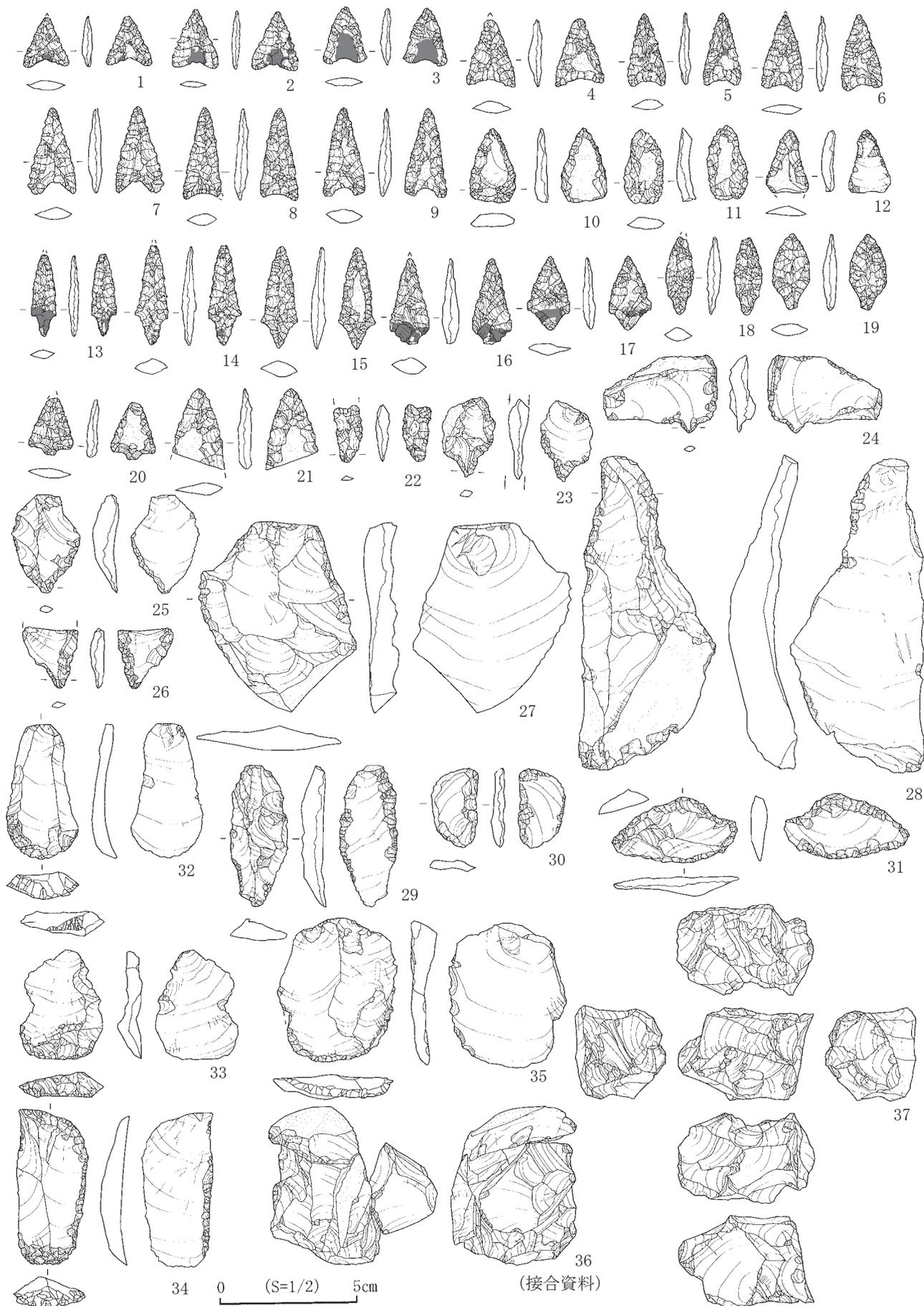


图13 第1号竖穴住居跡出土遺物(3)

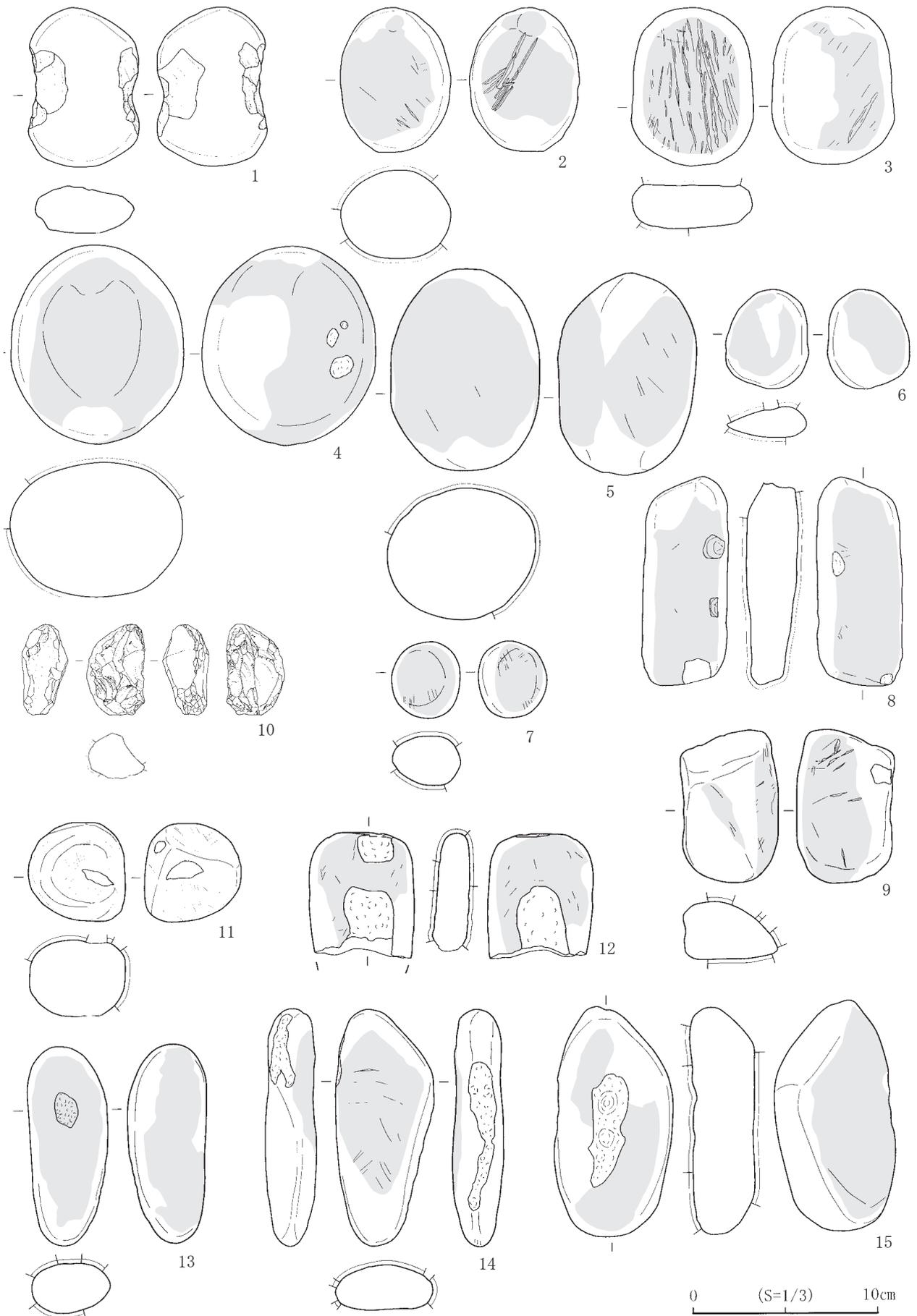


图14 第1号竖穴住居跡出土遺物(4)

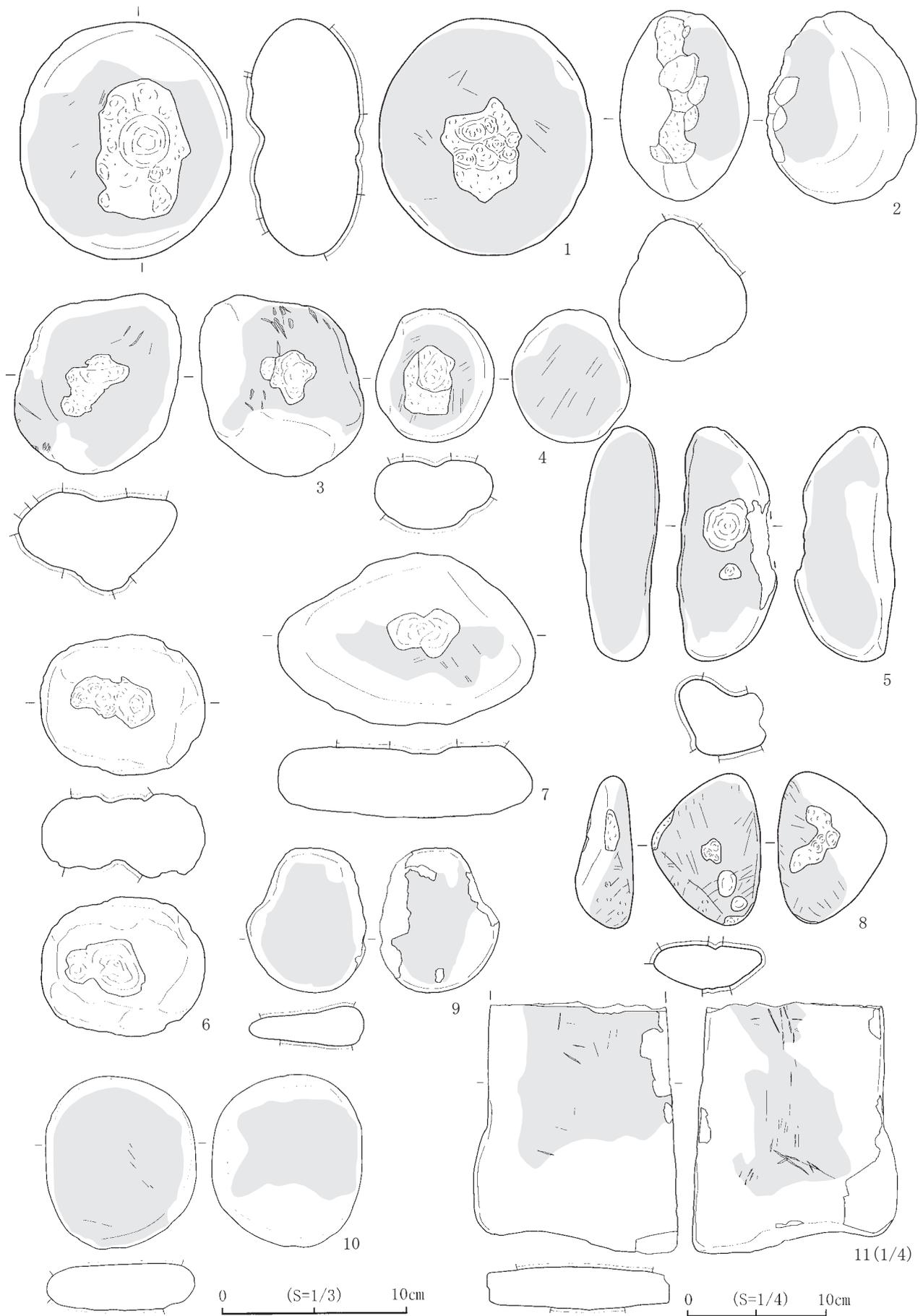


图15 第1号竖穴住居跡出土遺物(5)

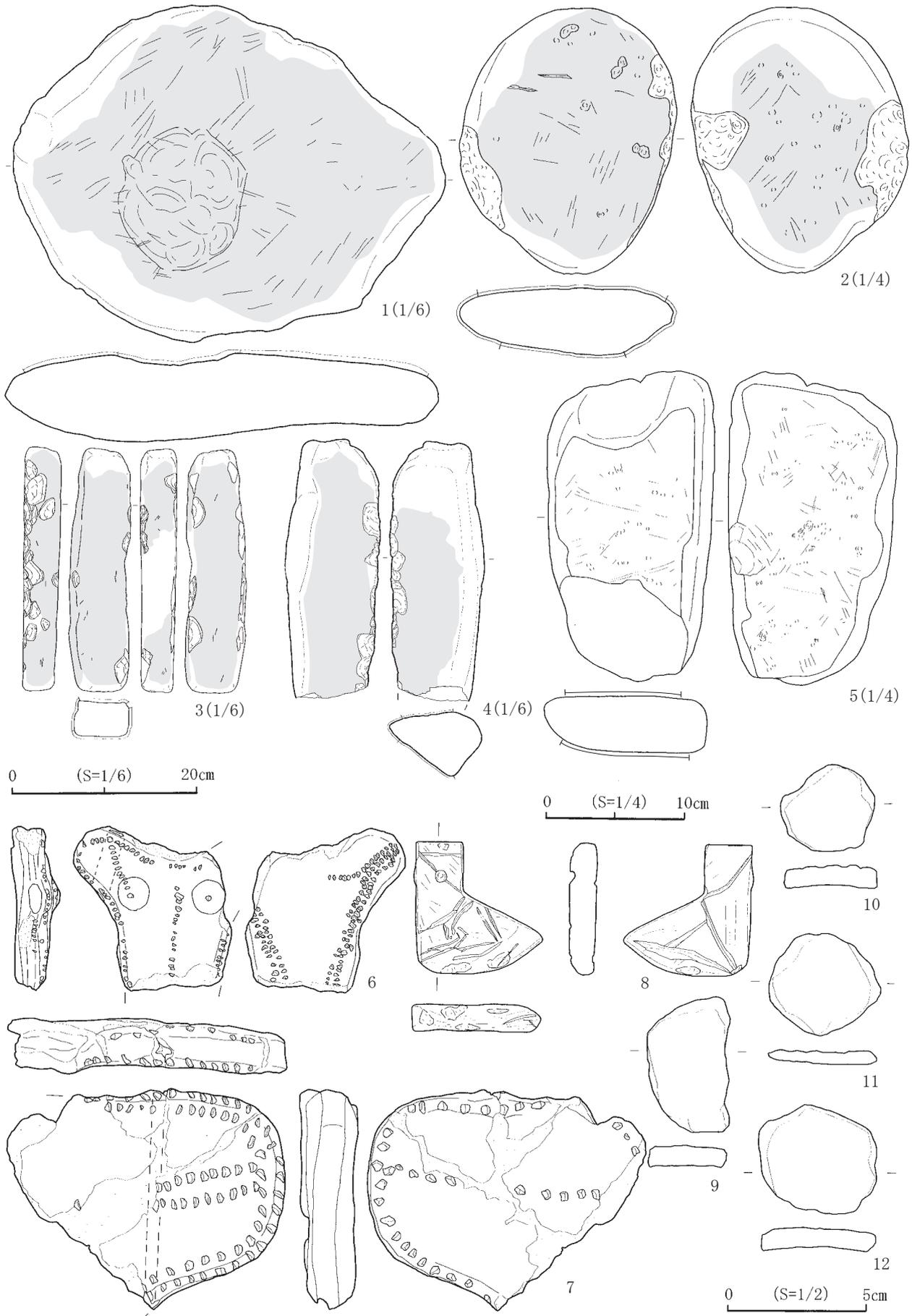


図16 第1号竪穴住居跡出土遺物(6)

察された（第2章第4節）。出土遺物や年代測定から縄文時代中期末葉から後期初頭に帰属する遺構であると考えられるが、柱穴や溝の配置等から住居は建て替えもしくは増築されている可能性がある。

第2号竪穴住居跡（SI02：図17～20、写真6・7・38・39）

[位置・確認] IIH・I-27・28グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で黒色の円形プランを確認した。

[平面形・規模] 東西方向に約4.4m、南北方向に約4.7mのほぼ円形で、床面積は約14.5㎡である。

[壁・床面] 確認面からの深さ（壁高）は約20cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[炉] 床面南東寄りに炉（石囲炉）を検出した。およそ20個の石で長方形に組み立てられ、外径は約94×74cmである。被熱範囲は炉内の北西寄り約44×19cmの範囲で堆積土第4層が被熱しており深度は4cm程度である。長方形の短辺には10kgを越える大型礫が据えられ、S-02が約14kg、S-10が約23kgであった。南東側長辺の礫はやや低く据えられるという特徴をもつ。また、被熱範囲の直上には土器片（図19-2）が敷き詰められるような形状で出土した。

[付帯施設] 床面東壁際で配石を検出した。床面（第Ⅳ層）を掘り込み、長円形の礫を約26cmの間隔で平行に配している。埋設土器を床面西側（埋設土器1：図19-9）とほぼ中央部（埋設土器2：図19-10）で確認した。いずれも正立状態で埋設されていた。炉のすぐ南東側に径120×80cm、床面からの深さ約10cmの掘り込み部を検出した。掘り込み部底面からは楕円形の小ピット3基を検出した。

[柱穴] 床面に8基、住居跡上端周辺に13基の小ピットを検出した。主柱穴の配置は不明である。

[堆積土] 3層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われる。

[出土遺物] 土器が11031g、石器が41166g出土した。このうち土器は14点、石器は11点を図示した。床面北西側からは縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての土器数個が押しつぶされたような形状で出土した（図19-1・3～8）。その中には脚付きの石皿も含まれる（図20-11）。埋設土器はいずれも縄文時代中期末葉～後期初頭配に比定されるもので、埋設土器1は粗製の深鉢形（図19-9）、埋設土器2は壺形（図19-10）である。炉に敷き詰められていた土器（図19-2）は、縄文時代中期末葉（大木10式併行期）に比定される。配石付近からは、内面に赤色塗膜が付着した土器が出土した（図19-14）。図示した石器内訳は、石鏃、石錐、搔器、磨製石斧、磨り石、磨り・敲きの複合痕をもつ礫、石皿である（図20）。磨製石斧の石材は図20-5が緑色岩、図20-6が青色片岩である。敲き石、石核、台石、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 炉の焼土層から確認された炭化種実と思われる試料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった（第3章第2節）。また、配石付近から出土した深鉢形土器（図19-14）内面に付着する赤色塗膜を分析したところ漆層が観察された（第2章第4節）。出土遺物から縄文時代中期末葉から後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

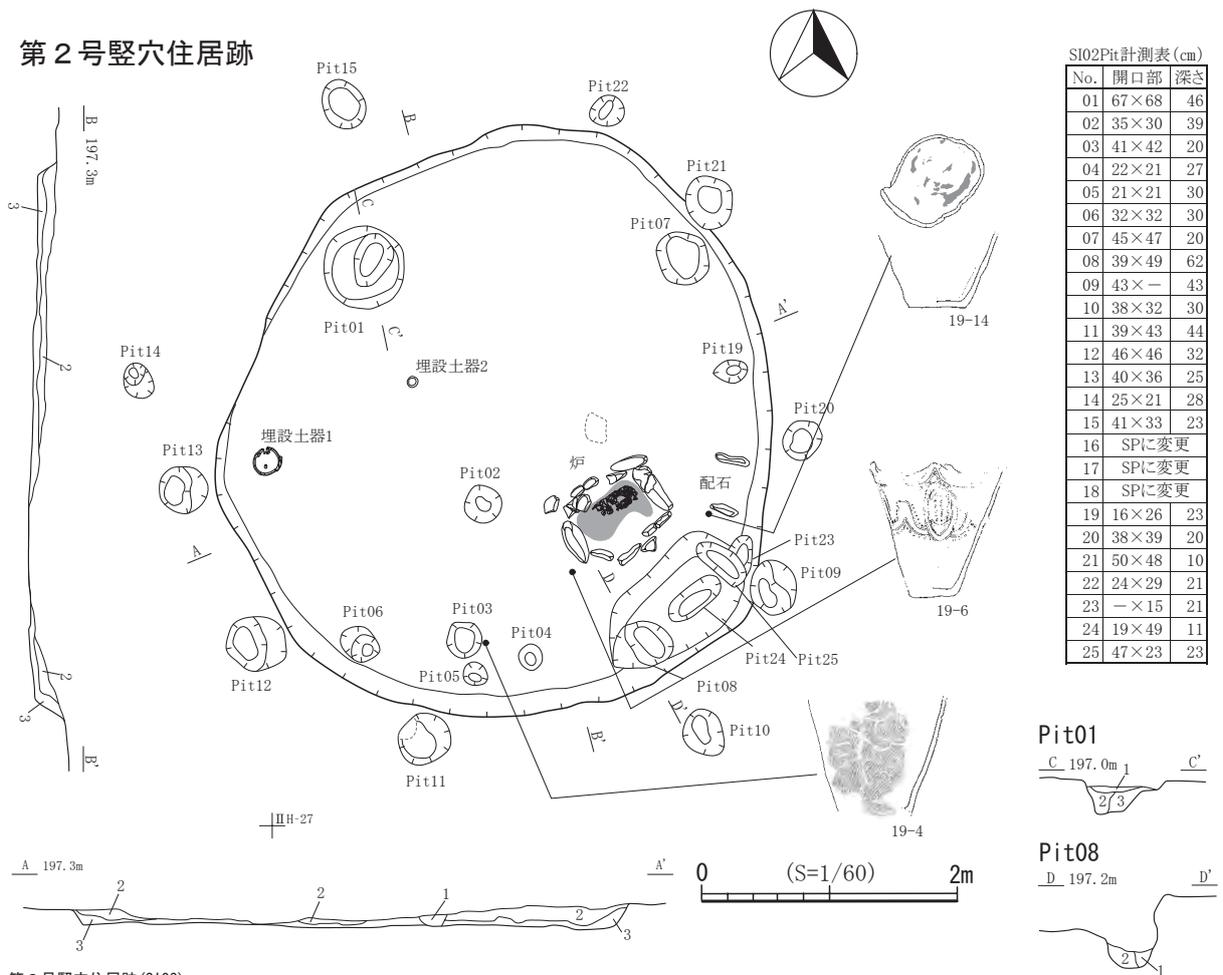
第3号竪穴住居跡（SI03：図21・22、写真7・39）

[位置・確認] IIB・C-24・25グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で黒色の円形プランを確認した。

[平面形・規模] 東西方向に約6.1m、南北方向に約6.5mのほぼ円形で、床面積は約29.2㎡である。

[壁・床面] 確認面からの深さ（壁高）は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

第2号竖穴住居跡



SI02Pit計測表 (cm)

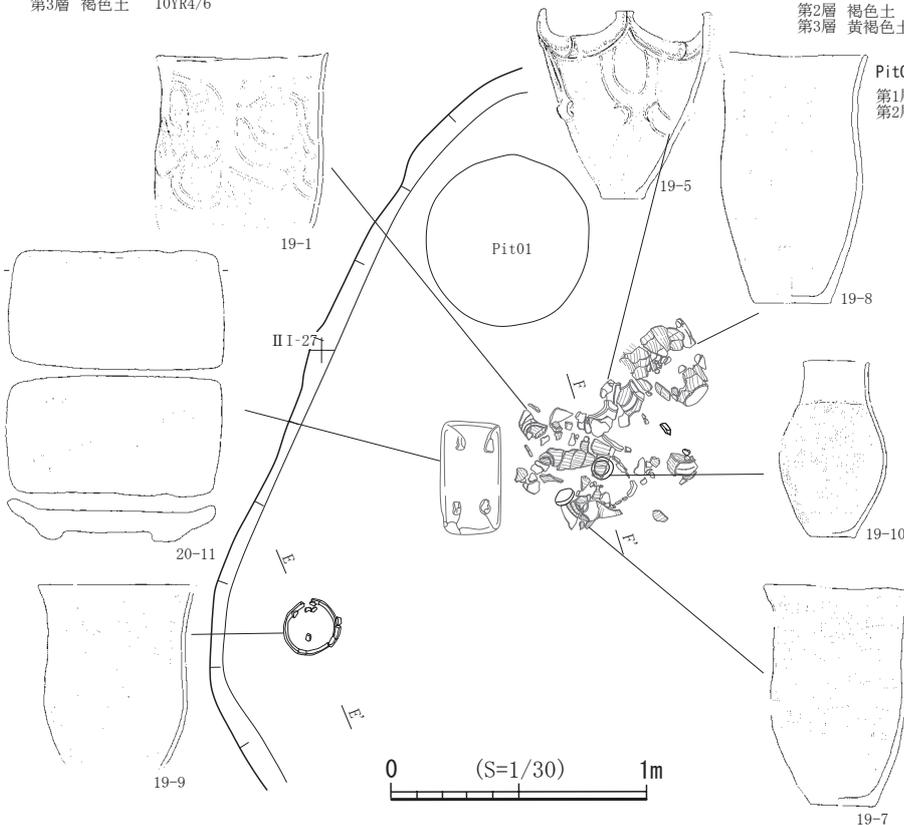
No.	開口部	深さ
01	67×68	46
02	35×30	39
03	41×42	20
04	22×21	27
05	21×21	30
06	32×32	30
07	45×47	20
08	39×49	62
09	43×-	43
10	38×32	30
11	39×43	44
12	46×46	32
13	40×36	25
14	25×21	28
15	41×33	23
16	SPに変更	
17	SPに変更	
18	SPに変更	
19	16×26	23
20	38×39	20
21	50×48	10
22	24×29	21
23	-×15	21
24	19×49	11
25	47×23	23

第2号竖穴住居跡 (SI02)

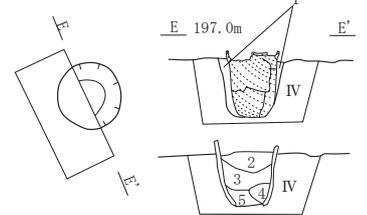
- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 小礫 (φ1~2mm) 1%、炭化物粒 (φ1~2mm) 1%、黒褐色土 (10YR3/2) 10%との混合土、小礫 (φ1~3mm) 1%、炭化物粒 (φ1~5mm) 1%
- 第2層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土 (10YR3/3) 15%との混合土、小礫 (φ1~10mm) 1%、炭化物粒 (φ1~3mm) 1%
- 第3層 褐色土 10YR4/6

- Pit01 第1層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 黄褐色土 (10YR5/6) 5%との混合土、炭化物粒 (φ1~5mm) 1%
- 第2層 褐色土 10YR4/6 炭化物粒 (φ1~3mm) 1%
- 第3層 黄褐色土 10YR5/6 小礫 (φ1~5mm) 1%、炭化物粒 (φ1~2mm) 1%

- Pit08 第1層 褐色土 10YR4/6 明黄褐色土 (10YR6/8) 5%との混合土
- 第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物粒 (φ1~2mm) 1%



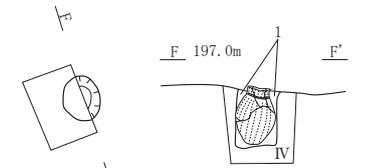
埋設土器1



埋設土器1

- 第1層 褐色土 10YR4/4 掘方、炭化物粒 (φ1~2mm) 1%
- 第2層 褐色土 10YR4/6 炭化物粒 (φ1~2mm) 1%
- 第3層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒 (φ1~2mm) 1%
- 第4層 明黄褐色土 10YR6/6 ロ-Δ7 ロツク (φ10~20mm) 60%
- 第5層 褐色土 10YR4/4 炭化物粒 (φ1~3mm) 2%

埋設土器2



埋設土器2

- 第1層 褐色土 10YR4/4 掘方、炭化物粒 (φ1~2mm) 1%

図17 第2号竖穴住居跡 (1)

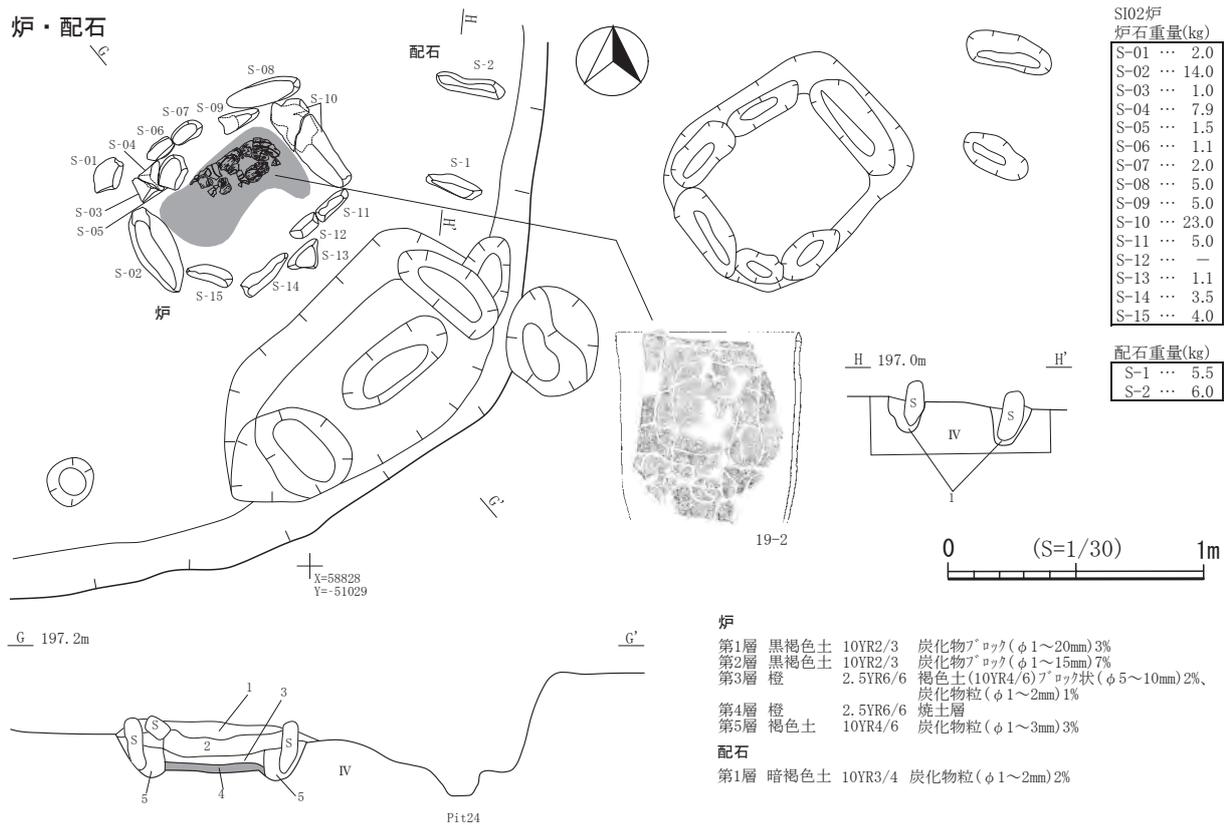


図18 第2号竪穴住居跡(2)

[炉]住居東壁寄りに炉を検出した。「口」字状の石囲部と「ハ」字状の石組部の組み合わせで、石囲部は10個の石で長方形に組み立てられており、外径は約103×61cm、石囲内部の被熱範囲は約64×30cm、被熱深度は7cmである。使用された礫は10kgを越える大型礫が多く、東側長辺の礫はやや低く据えられるという特徴をもつ。石組部は6個の石で組み立てられており、最大幅は108cmであった。石囲部と石組部を合わせた全長は126cmで、石組部東側には約60×40cmの範囲で硬化している部分を確認した。

[付帯施設]住居北側壁際で埋設土器(図22-5)を確認した。床面の掘方に深鉢形土器を正立状態で埋設している。

[柱穴]床面に12基の小ピットを検出した。住居の主軸を東-西とした場合、Pit10-01、Pit08-04が対をなす4本による台形状の配置であった可能性が考えられる。

[堆積土]2層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われる。

[出土遺物]土器が4572g、石器が3799g出土した。このうち土器は6点、石器は8点を図示した。埋設土器は縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての単軸絡条体第1類Rが斜位に施文されるものであり、底面には網代痕が確認できる(図22-5)。また、炉の北側堆積土からは、アルファベット状の沈線文を施した縄文時代中期末葉(大木10式併行期)の土器が出土した(図22-1)。図示した石器内訳は、石鏃、削器、搔器、磨り石、台石である(図22-7~14)。石鏃2点には広範囲にアスファルトの付着が確認できた(図22-7・8)。図22-10は削器であるが、火はじけ痕が確認できる。石核、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結]炉の堆積土から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、3,894±20(暦年較正用

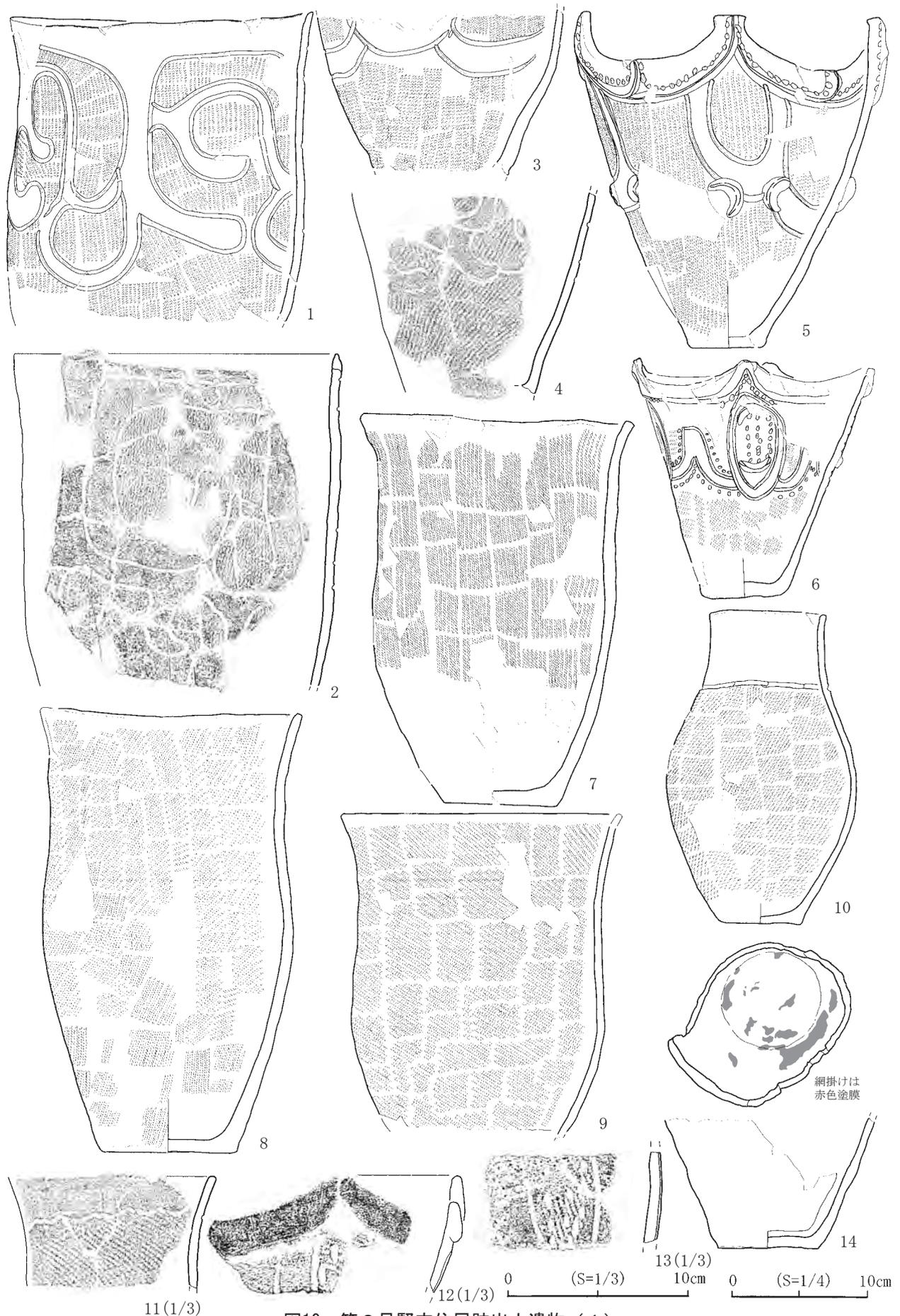


図19 第2号竪穴住居跡出土遺物(1)

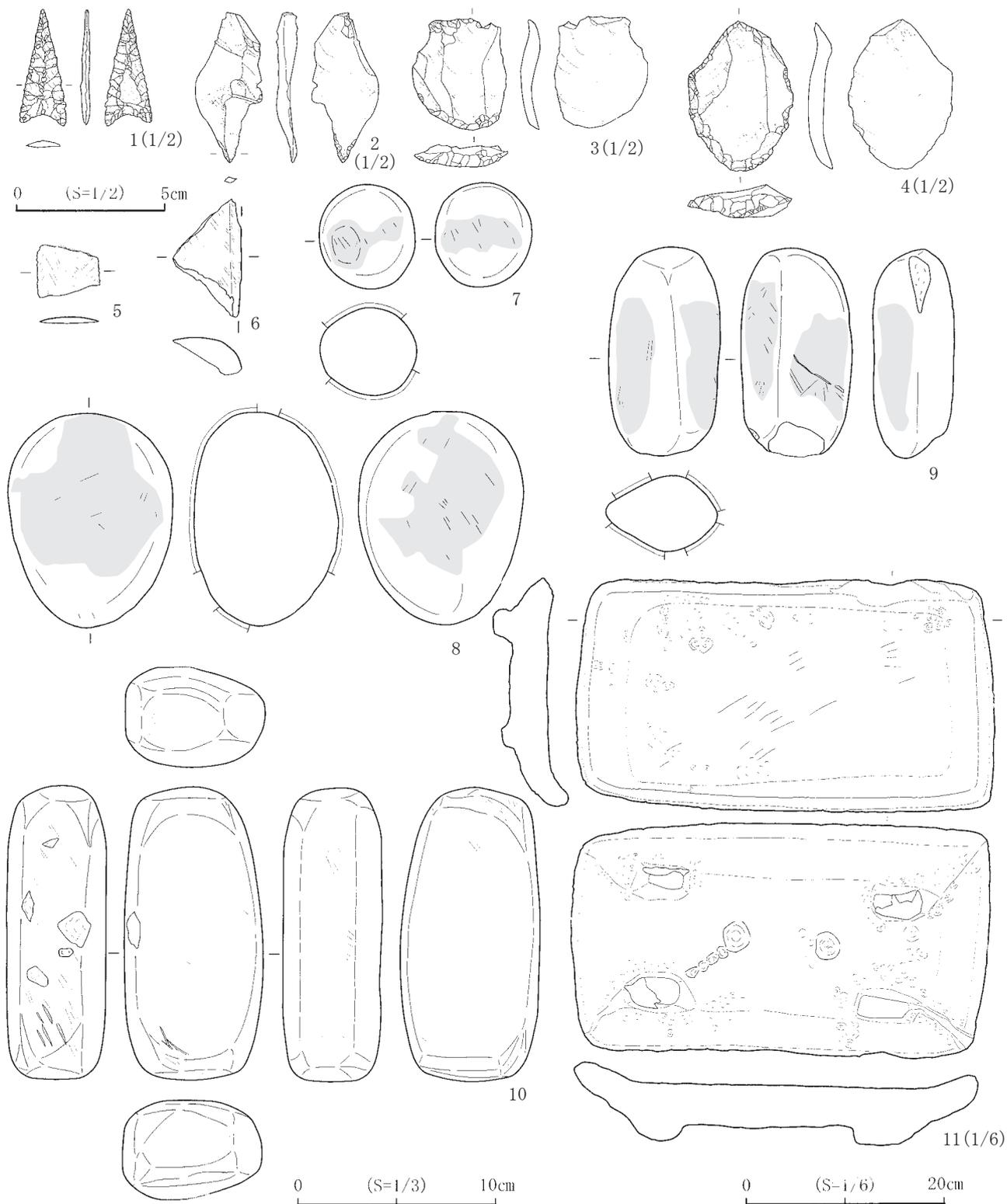
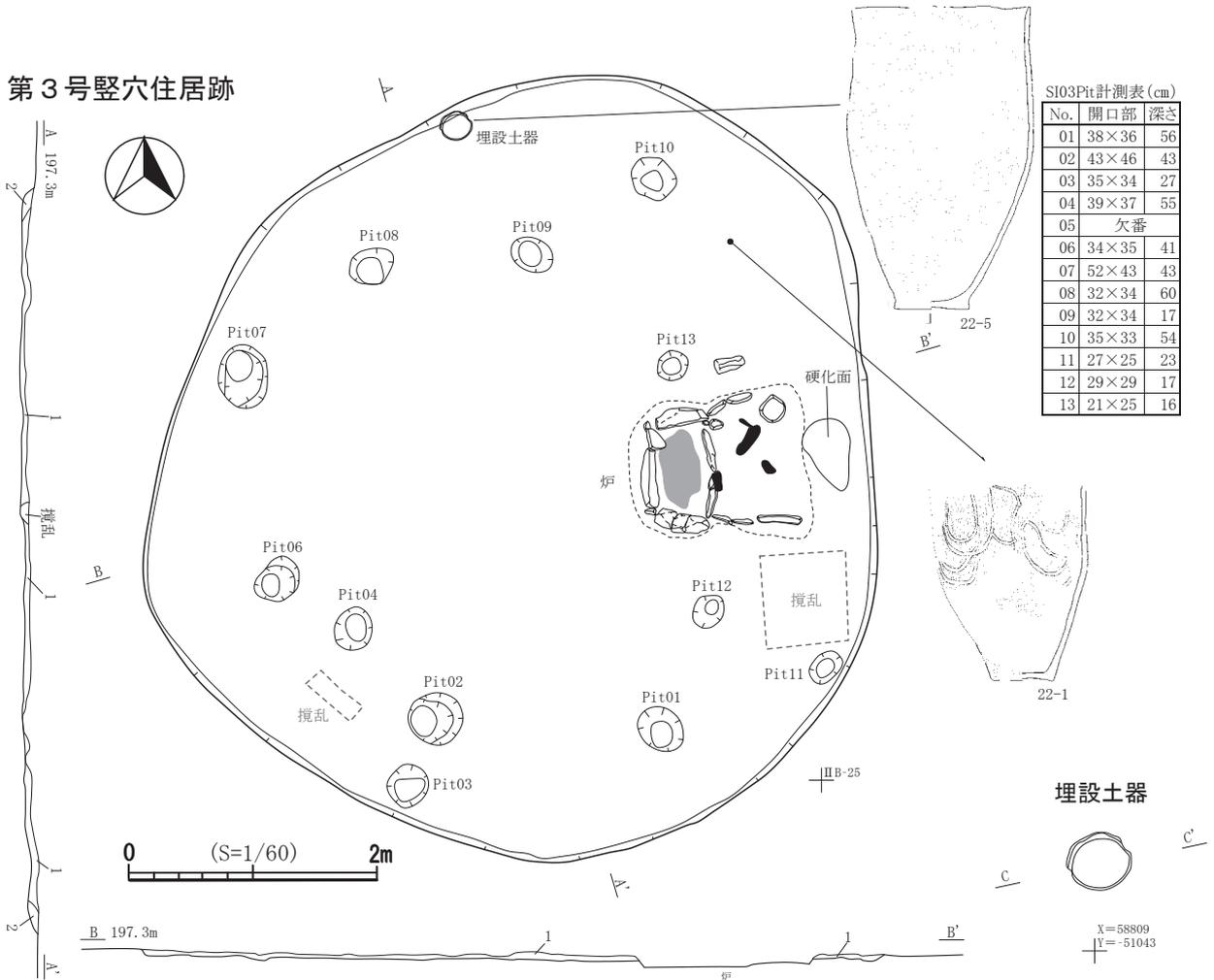


図20 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)

yrBP)との値が得られた(第3章第1節)。また、炉の焼土層から確認された炭化種実を同定分析したところ、ウルシ属-ヌルデがわずかに得られた(第3章第2節)。出土遺物や年代測定から縄文時代中期末葉から後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第3号竖穴住居跡



第3号竖穴住居跡(SI03)

- 第1層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 黒褐色土をブロック状で3%含む、粘性強い
- 第2層 明黄褐色土 10YR6/6 壁崩落土、粘性強い

埋設土器 1

- 第1層 褐色土 10YR4/6 掘方、炭化物粒(φ1~2mm)2%
- 第2層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒(φ1~2mm)1%
- 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物粒(φ1~2mm)1%
- 第4層 黄褐色土 10YR5/6 μ -A粒(φ2~6mm)10%

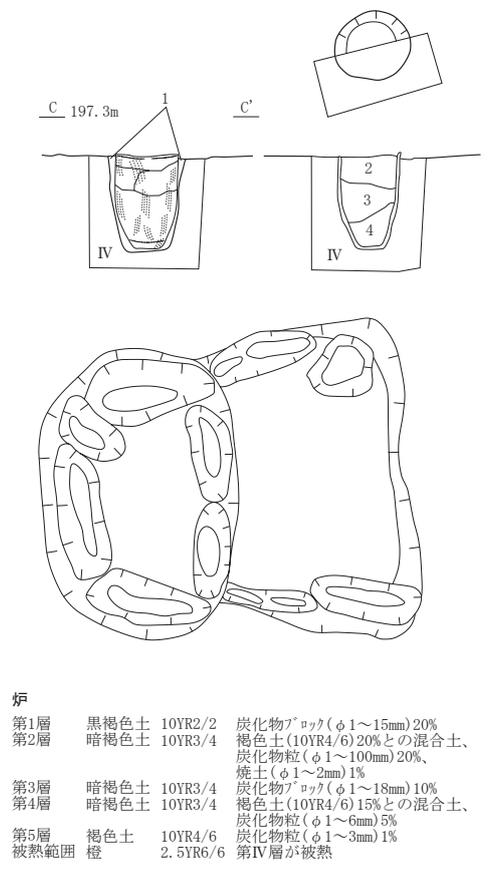
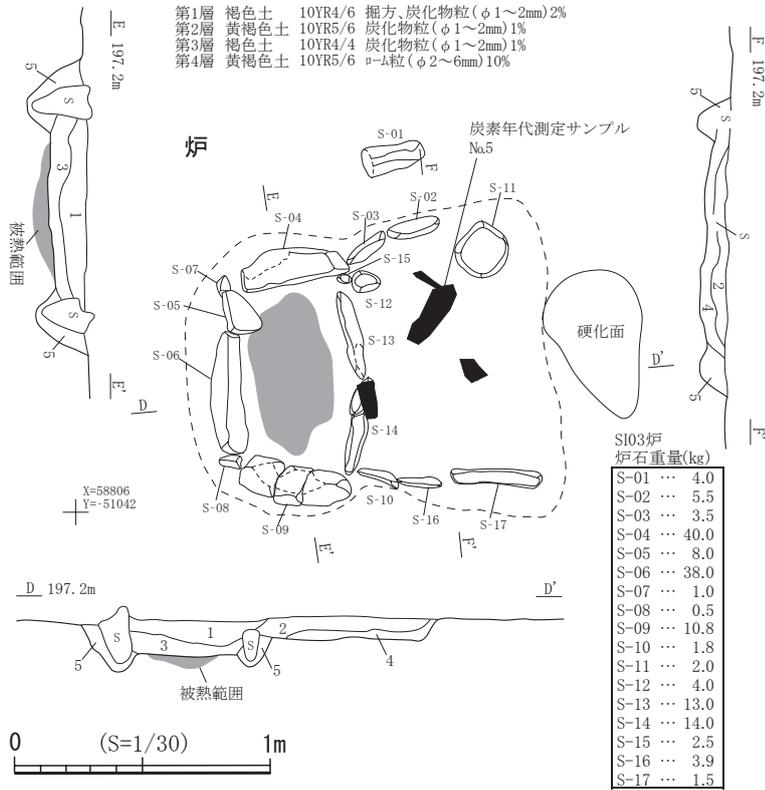


図21 第3号竖穴住居跡

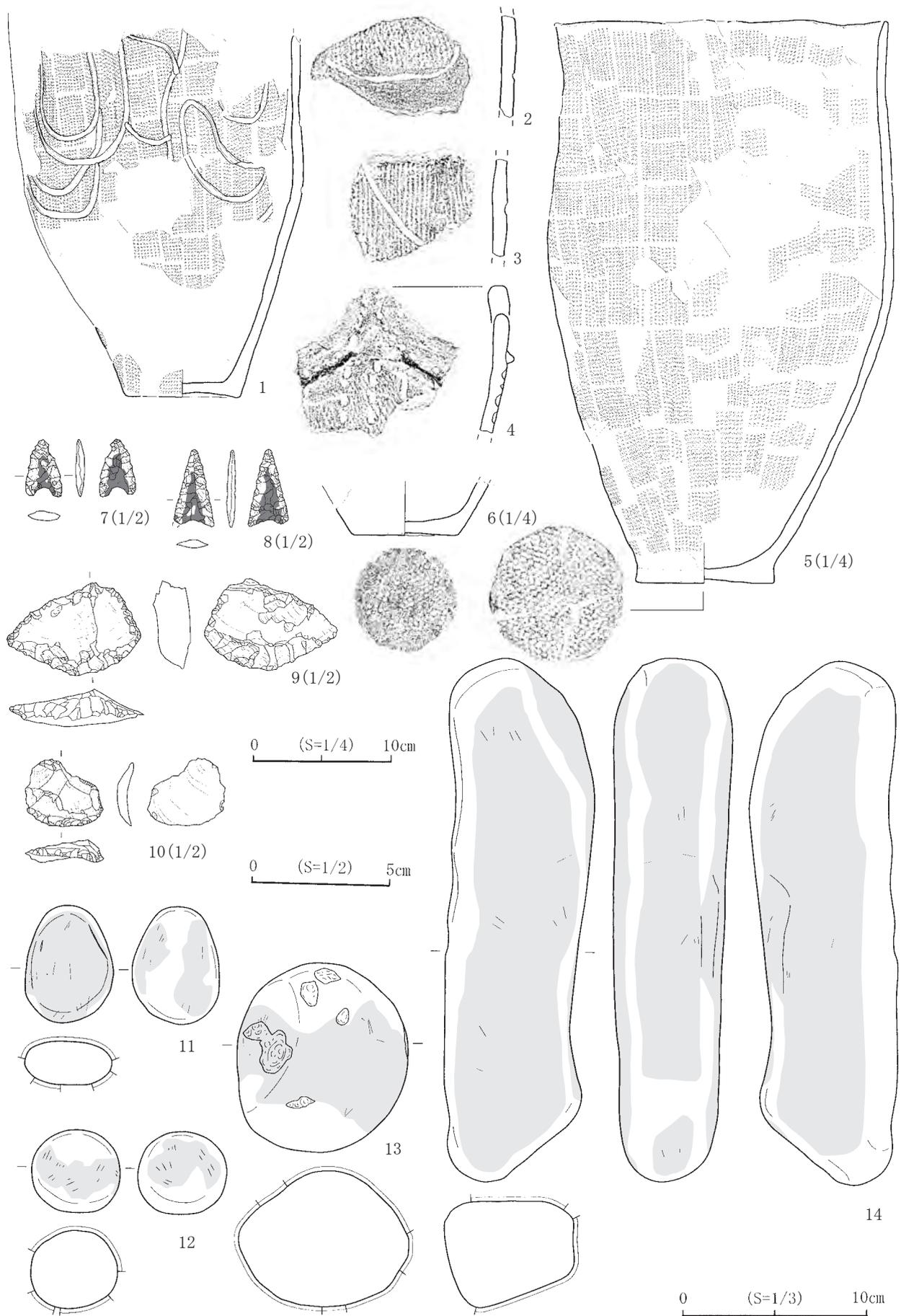


图22 第3号竖穴住居跡出土遺物

第4号竖穴住居跡

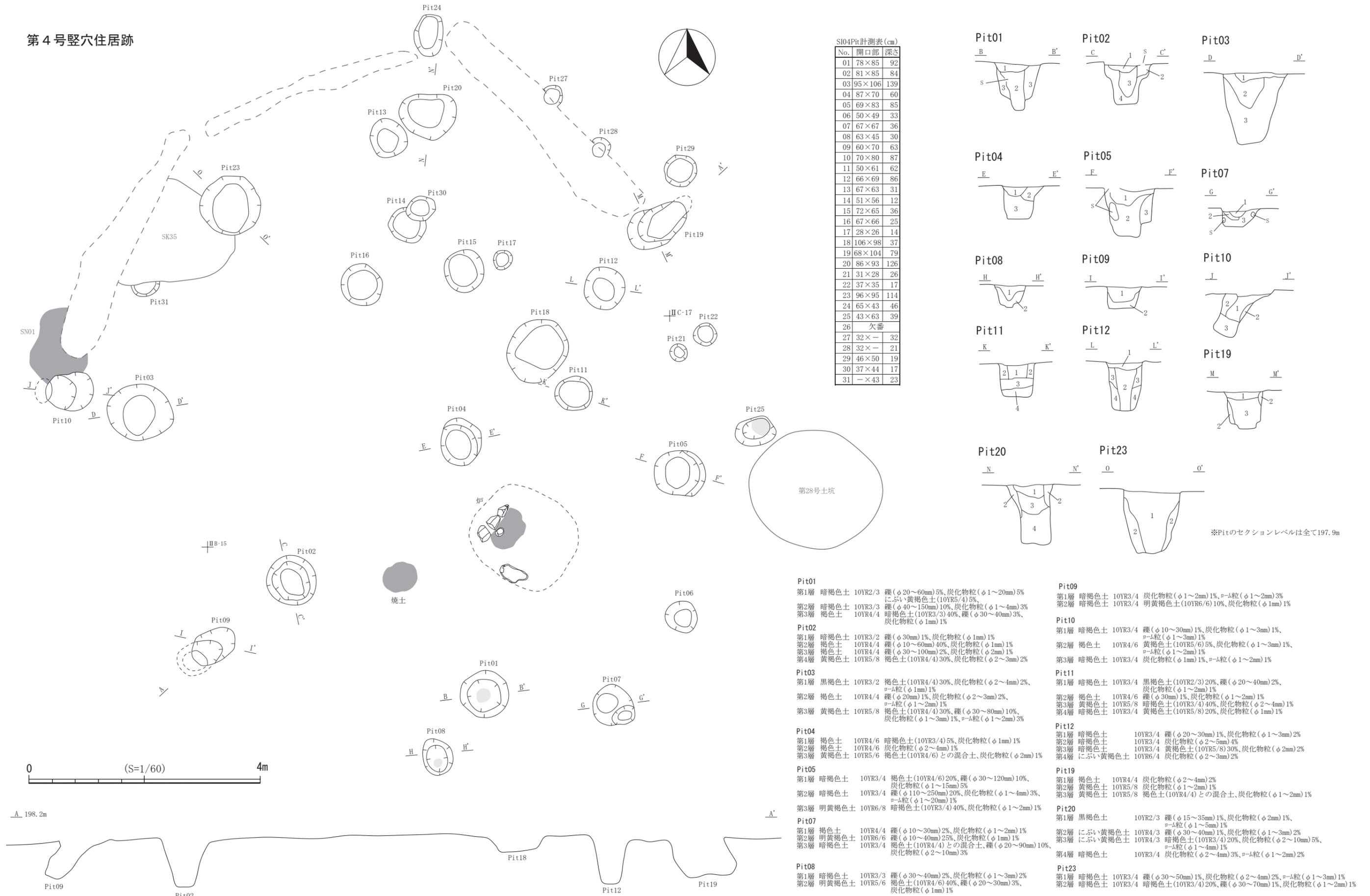
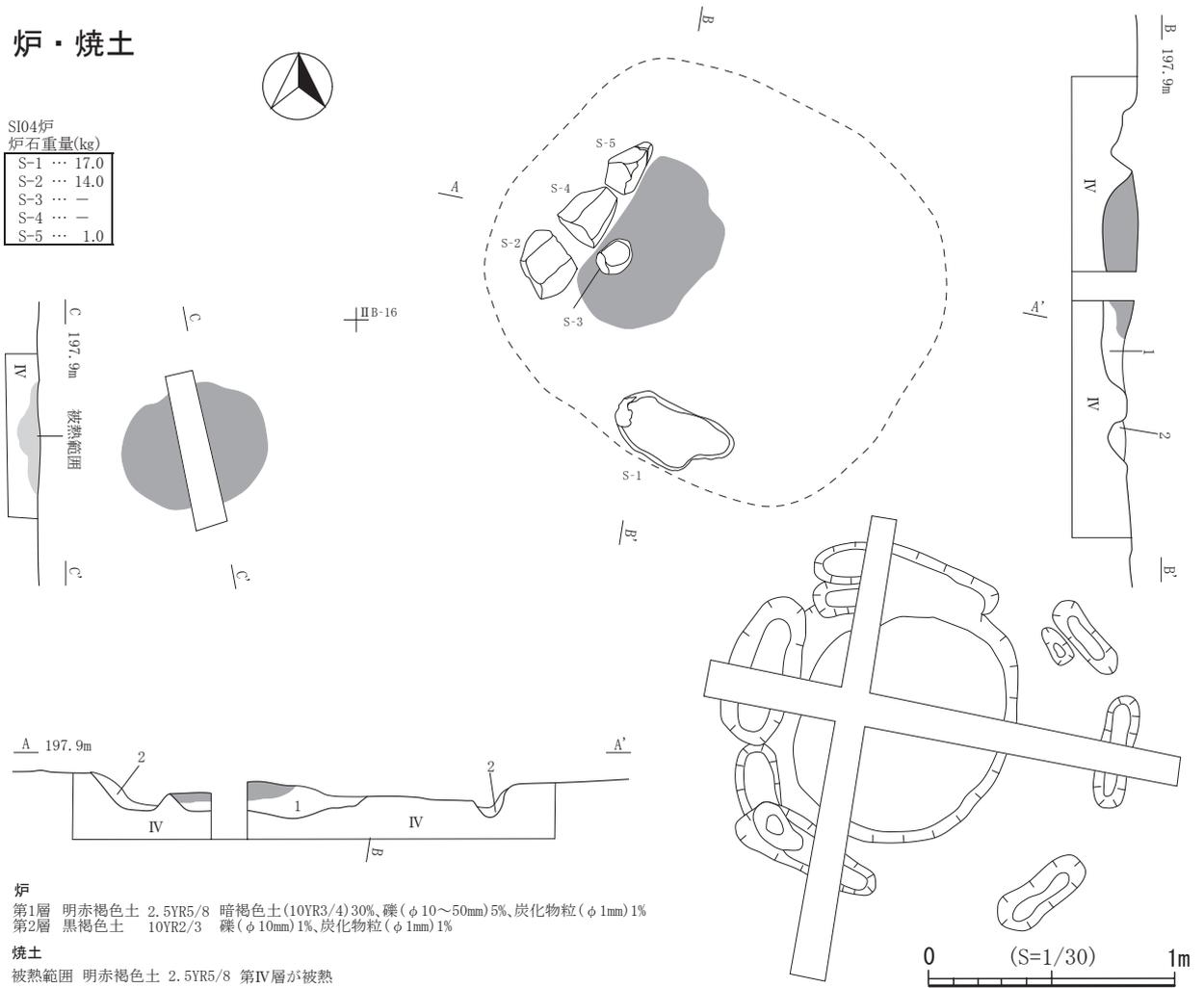


図23 第4号竖穴住居跡(1)

炉・焼土

SI04炉
炉石重量(kg)

S-1	…	17.0
S-2	…	14.0
S-3	…	—
S-4	…	—
S-5	…	1.0



炉
第1層 明赤褐色土 2.5YR5/8 暗褐色土(10YR3/4)30%、礫(φ10~50mm)5%、炭化物粒(φ1mm)1%
第2層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ10mm)1%、炭化物粒(φ1mm)1%
焼土
被熱範囲 明赤褐色土 2.5YR5/8 第IV層が被熱

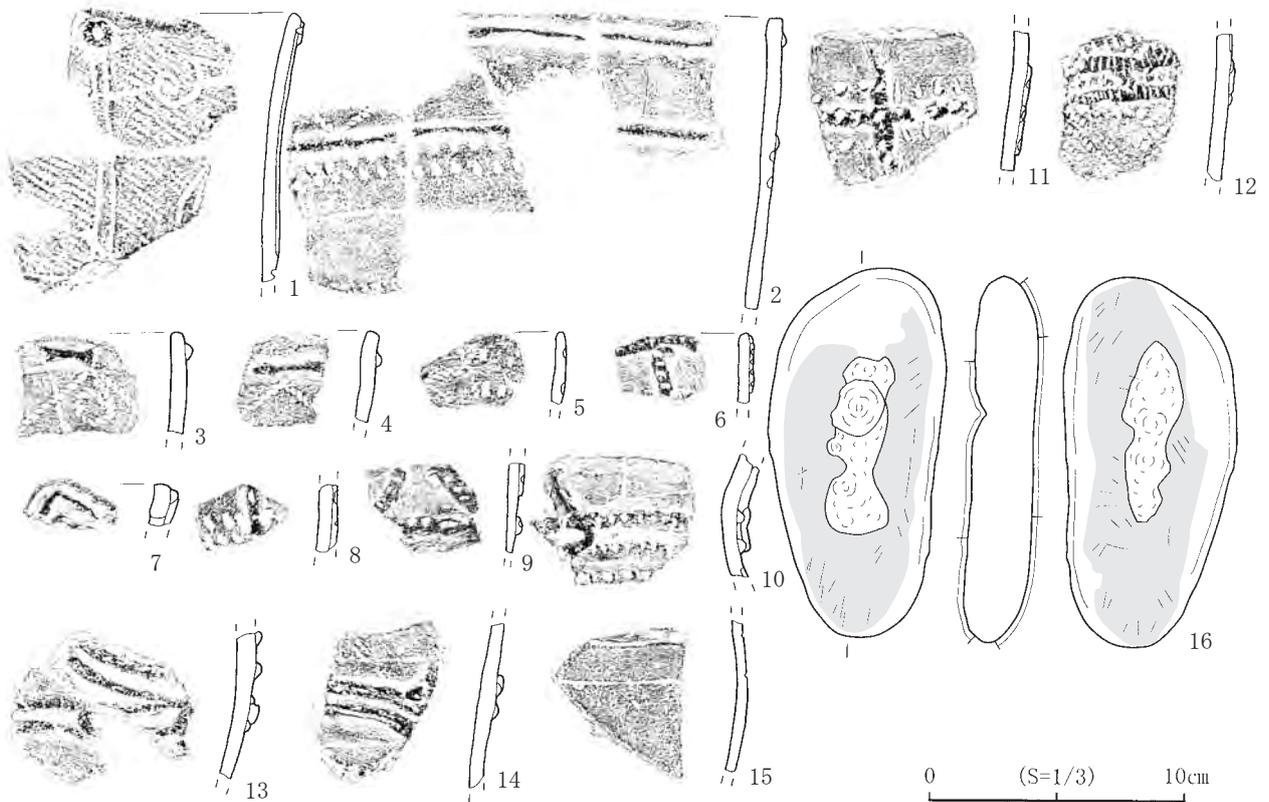


図24 第4号竖穴住居跡(2)・出土遺物

第4号竪穴住居跡 (SI04 : 図23・24、写真8・9・40)

[位置・確認] II A~C-14~17グリッドに位置し、第III層下面で石囲炉と小ピットを確認した。

[重複] 柱穴(小ピット)が第35号土坑、第1号焼土跡が重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形・規模は不明であるが、推定径約12~13mのほぼ円形となる可能性がある。

[壁・床面] 壁は竪穴部欠損により不明である。地山である第IV層を床面としている。

[炉・焼土] 床面から炉を1基、焼土跡を1基検出した。炉(石囲炉)は床面中央部からやや南壁寄り
で検出した。3個の礫が残存していたがほぼ円形に組みれていたものと考えられ、外径は約170×150
cmである。被熱範囲は炉内の北西寄り約72×56cmの範囲で底面(第IV層)が被熱しており深度は15cm
程度である。石で長方形に組み立てられ、外径は約103×61cm、石囲内部の被熱範囲は約64×30cm、
被熱深度は7cmである。焼土1は炉のすぐ西側に位置し、約60×46cmの範囲で楕円形に被熱し深度は
8cmである。

[柱穴] 床面に33基の小ピットを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit05-01、Pit12-
02、Pit20-03が対をなし、Pit23も含めて支柱穴であったと考えられる。また、支柱を支えたと
思われる斜位に掘削された小ピットを検出した(Pit01=Pit08、Pit03=Pit10、Pit12=Pit19、
Pit02=Pit09、Pit20=Pit24、Pit05=Pit25)。

[堆積土] 竪穴部欠損のため不明である。

[出土遺物] 土器が2393g、石器が20983g出土した。このうち土器は15点、石器は1点を図示した。
土器は全て小ピット堆積土中から出土したものであり、ほとんどが縄文時代後期初頭に比定されるも
のであった(図24-1~14)。図示した石器内訳は、磨り・敲きの複合痕をもつ礫のみである(図24-
16)。台石、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 炉の焼土層から確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミとクリがわずかに得ら
れた(第3章第2節)。柱穴の出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第5号竪穴住居跡 (SI05 : 図25・26、写真8・9・40)

[位置・確認] I X-16・17グリッドに位置し、第III層下面で石囲炉と小ピットを確認した。

[平面形・規模] 竪穴部一部欠損により全体形は明確ではないが、推定径約4×5mのほぼ円形となる
可能性がある。床面積は18㎡ほどと考えられる。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

[炉] 住居東壁寄りに炉を検出した。検出した8個の礫のうち東側のみが埋設されて残存していたが、
元々は長方形に組み立てられていたと考えられ、外径は約88×65cmである。被熱範囲は約40×28cmの範囲で
被熱しており深度は3cm程度である。炉石重量はほとんどが10kg未満のものであった。

[付帯施設] 住居北東側壁際で埋設土器(図26-1)を確認した。床面の掘方に深鉢形土器を正立状態
で埋設しており、土器内中程には、扁平な自然礫を確認した。

[柱穴] 床面に16基の小ピットを検出した。住居の主軸を東-西とした場合、Pit03-16、Pit05-17が対
をなす4本柱であった可能性が考えられる。

[堆積土] 竪穴部がほとんど欠損していたため不明である。

[出土遺物] 土器が1403g、石器が1604g出土した。このうち土器は3点、石器は3点を図示した。埋

第5号竖穴住居跡

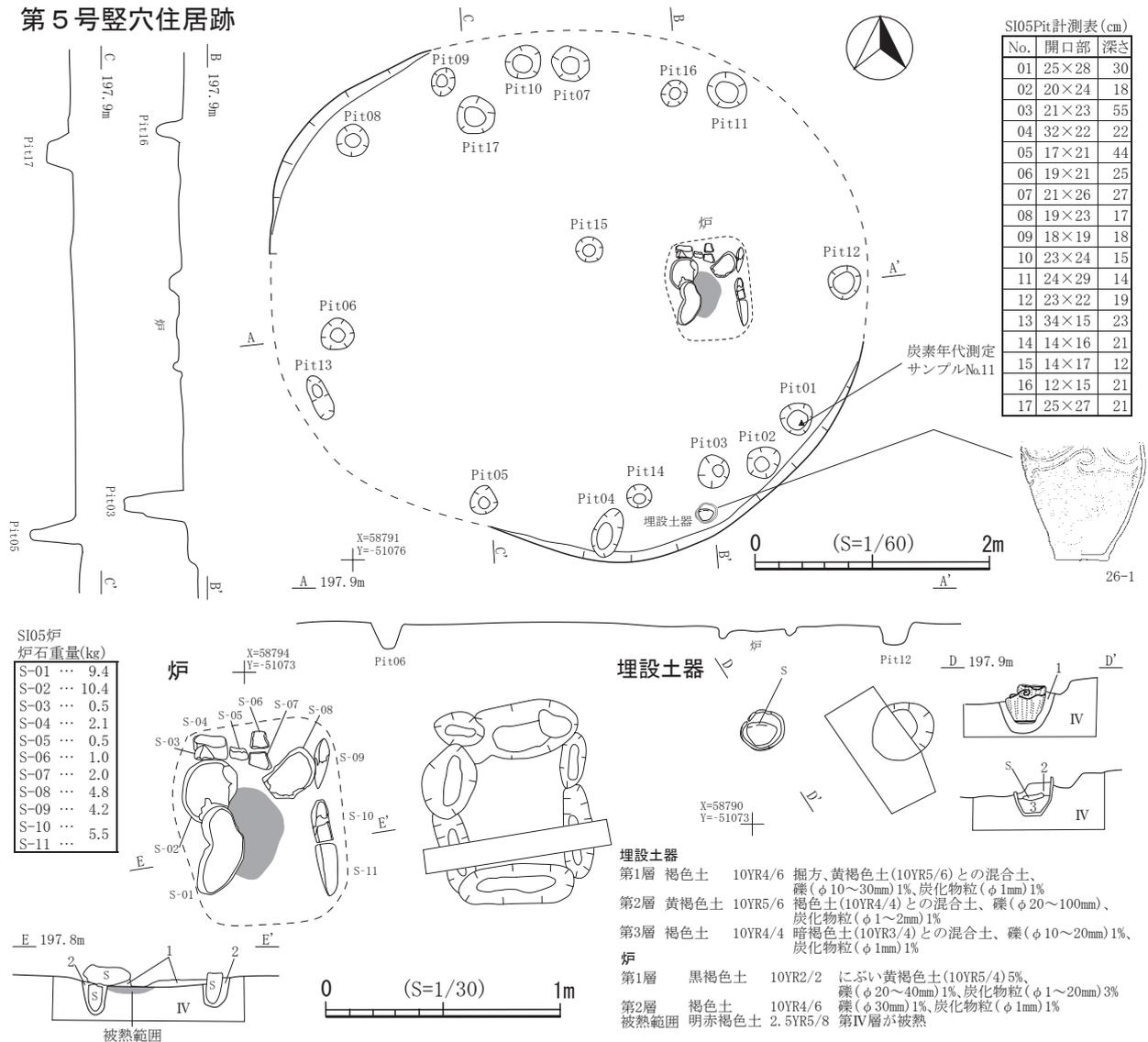


図25 第5号竖穴住居跡

設土器は縄文時代中期末葉（大木10式併行期）に比定される深鉢形で、口縁部付近が欠損している（図26-1）。図示した石器内訳は、磨り・敲きの複合痕をもつ礫のみである（図26-4～6）。磨り石、敲き石、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結]Pit01堆積土から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,833 \pm 21$ （暦年校正用 yrBP）との値が得られた（第3章第1節）。また、炉の堆積土層（ベルト）から確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミがわずかに得られた（第3章第2節）。年代測定ではやや新しい値が出たが、埋設土器から縄文時代中期末葉の遺構であると考えらる。

第6号竖穴住居跡（SI06：図27・28、写真9・40）

[位置・確認]IU・V-15・16グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で石囲炉と黒色の円形プランを確認した。

[重複]遺構との重複はないが、住居北側に本遺構よりも古い倒木痕を確認した。

[平面形・規模]竖穴部一部欠損により全体形は明確ではないが、推定径約6×5.5mのほぼ円形とな

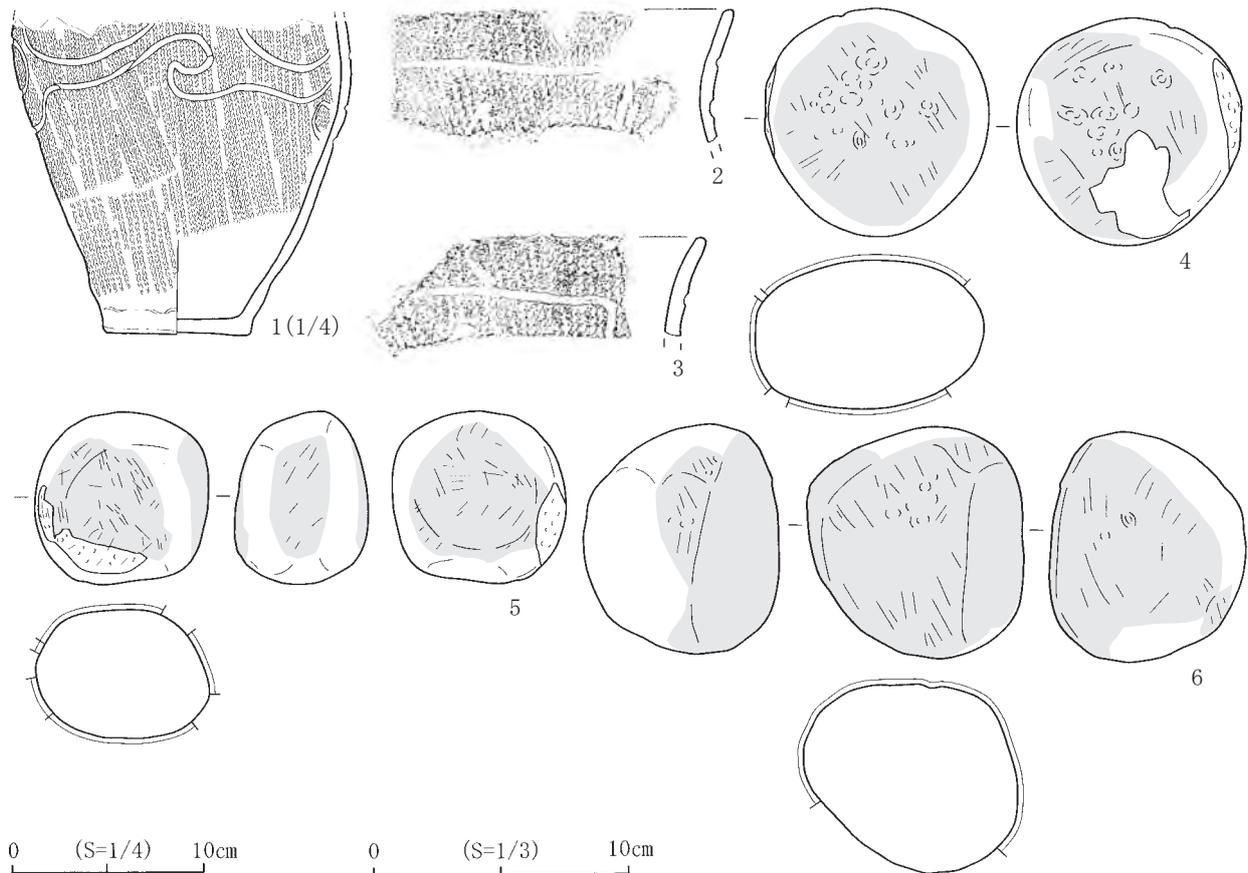


図26 第5号竪穴住居跡出土遺物

る可能性がある。床面積は24㎡ほどと考えられる。

[壁・床面]確認面からの深さ（壁高）は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

[炉]住居東壁寄りに炉を検出した。「口」字状の石囲部と掘込部の組み合わせで、石囲部は10個の礫で長方形に組み立てられ、外径は約124×80cm、石囲内部の被熱範囲は約52×50cm、被熱深度は5cmである。炉石重量は、多くが10kg未満であり、10kg以上のものが3個あった（S-03・06・08）。最大重量はS-08で、約31kgであった。石囲炉東側の礫は、周囲の礫より低く埋設されていることを確認した。掘込部は径130×100cmの方形の落ち込みで住居上端からの深さは20cmであり、石囲部底面からは5cm程度高くなっている。石囲部と掘込部を合わせた全長は180cmである。

[付帯施設]埋設土器を床面北側（埋設土器1：図28-5）と住居南東壁寄り（埋設土器2：図28-4）で確認した。いずれも正立状態で埋設している。

[柱穴]床面に22基、住居跡上端周辺に8基の小ピットを検出した。住居の主軸を東-西とした場合、Pit24-25、Pit13-07が対をなす4本柱であった可能性が考えられる。重複する小ピットもあり、建て替えや他の遺構との重複も考えられる。

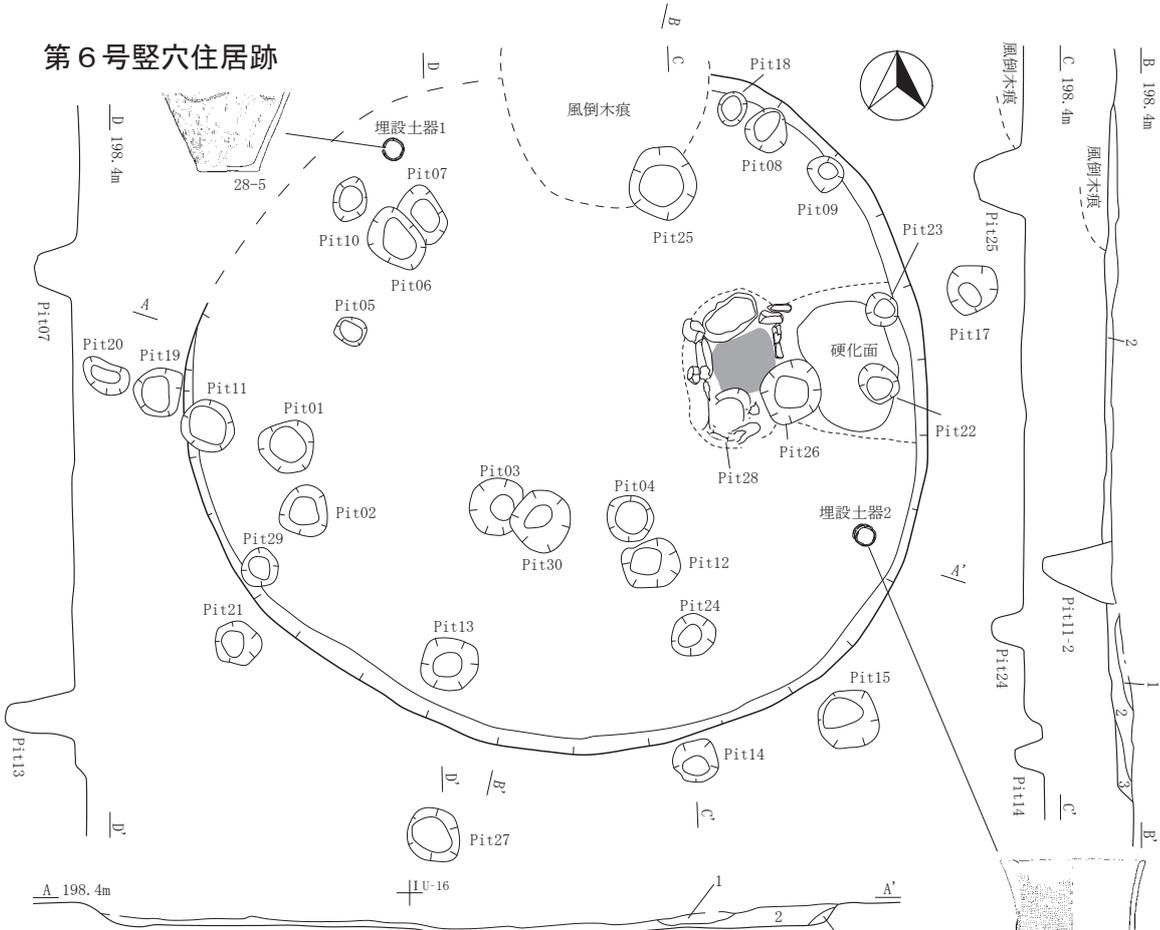
[堆積土]3層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われる。

[出土遺物]土器が3525g、石器が14446g出土した。このうち土器は5点、石器は4点を図示した。埋設土器1・2とも縄文時代中期末葉～後期初頭配に比定される粗製の深鉢形で、埋設土器1の底面には網代痕が確認された（図28-5）。図示した石器内訳は、石鏃、敲き石、磨り・敲きの複合痕をも

第6号竖穴住居跡

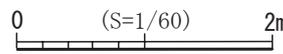
SI06Pit計測表 (cm)

No.	開口部	深さ
01	37×39	53
02	30×32	25
03	41×35	64
04	32×30	15
05	17×18	31
06	39×39	32
07	41×-	35
08	33×27	34
09	21×23	49
10	28×22	63
11	34×37	33
12	32×42	59
13	35×38	60
14	29×28	23
15	39×45	44
16	SPに変更	
17	33×32	32
18	20×18	17
19	33×30	40
20	17×33	10
21	31×30	43
22	28×25	31
23	19×21	20
24	27×29	28
25	56×46	42
26	51×42	38
27	37×38	30
28	34×48	18
29	29×27	31
30	49×45	55

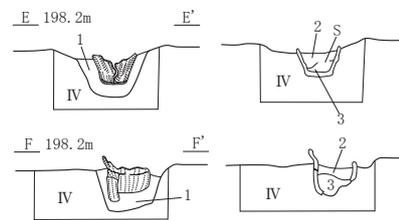
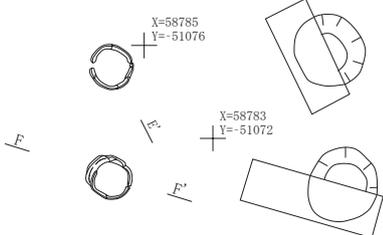


第6号竖穴住居跡(SI06:A・Bライン)

- 第1層 褐色土 10YR4/6 礫(φ40~100mm)10%、炭化物粒(φ1~100mm)2%
- 第2層 黄褐色土 10YR5/6 褐色土(10YR4/6)20%、礫(φ20~80mm)3%、炭化物粒(φ2~4mm)2%
- 第3層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ30~60mm)2%、炭化物粒(φ1~2mm)1%



埋設土器1・2



埋設土器 1

- 第1層 褐色土 10YR4/6 掘方、礫(φ20~60mm)5%
- 第2層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ10~15mm)1%、炭化物粒(φ1mm)1%
- 第3層 褐色土 10YR4/6 礫(φ10~50mm)20%、炭化物粒(φ1mm)1%

埋設土器 2

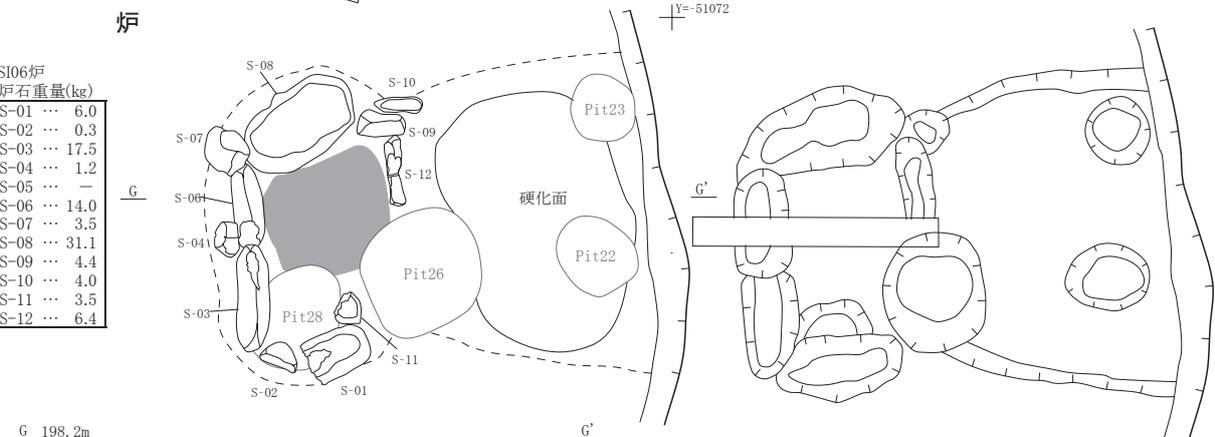
- 第1層 褐色土 10YR4/6 掘方、炭化物粒(φ1mm)1%
- 第2層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒(φ1mm)1%
- 第3層 褐色土 10YR4/6 炭化物粒(φ1mm)1%

炉

SI06炉

炉石重量(kg)

S-01	6.0
S-02	0.3
S-03	17.5
S-04	1.2
S-05	-
S-06	14.0
S-07	3.5
S-08	31.1
S-09	4.4
S-10	4.0
S-11	3.5
S-12	6.4



炉

- 第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~60mm)2%、炭化物粒(φ1~5mm)3%
- 第2層 褐色土 10YR4/4 明赤褐色土(5YR5/8)2%、礫(φ20mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%、p-A粒(φ1~5mm)2%
- 第3層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒(φ1mm)1%
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物粒(φ1mm)1%
- 被熱範囲 赤褐色土 5YR4/8 第IV層が被熱

図27 第6号竖穴住居跡

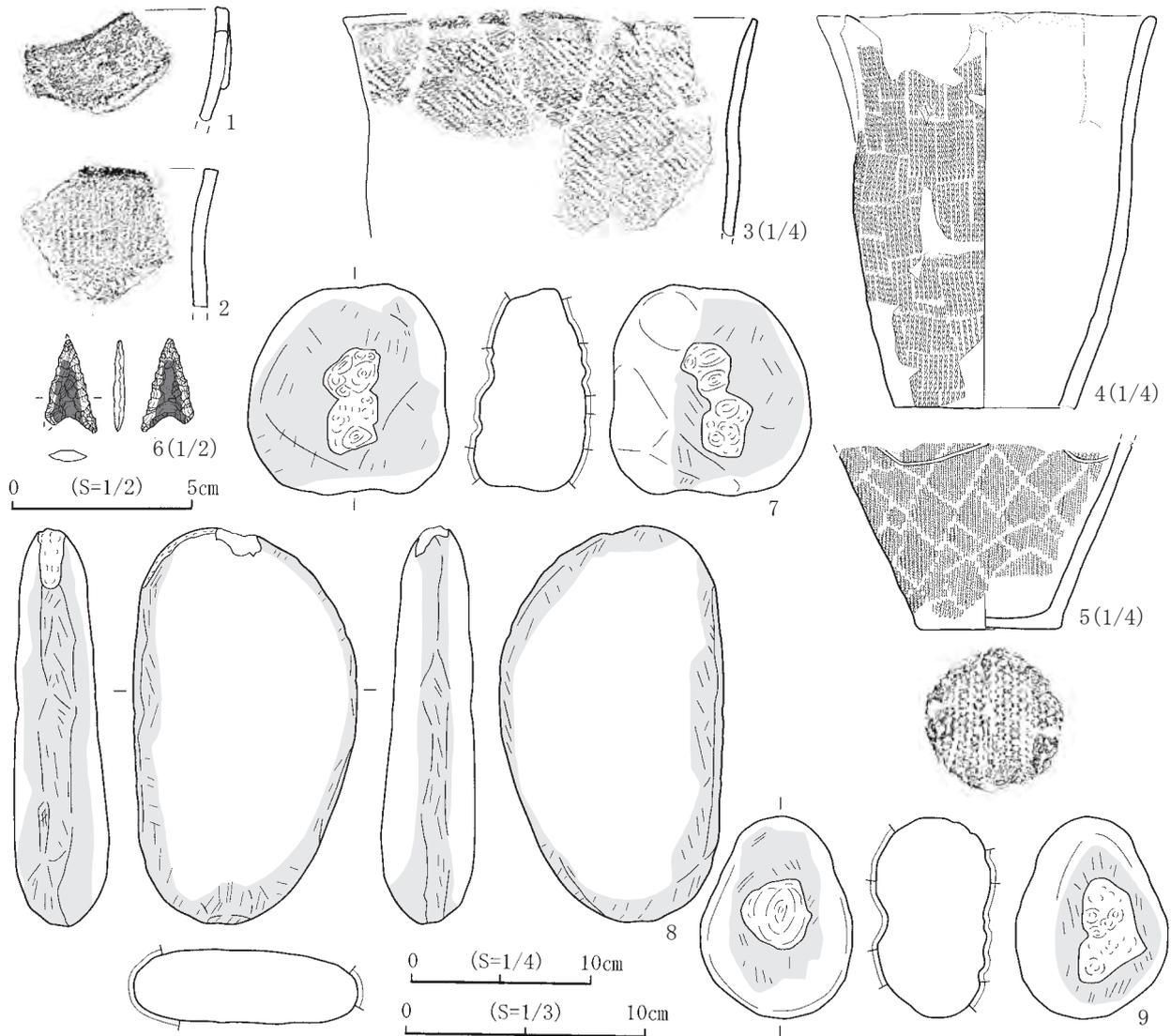


図28 第6号竪穴住居跡出土遺物

つ礫である(図28-6~9)。石鏃(図28-6)にはアスファルトの付着が確認できた。削器、台石、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 炉の底面から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,794 \pm 21$ (暦年較正用 yrBP) との値が得られた(第3章第1節)。出土遺物や年代測定から縄文時代中期末葉から後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第7号竪穴住居跡 (SI07 : 図29、写真10・11・40)

[位置・確認] IV-13・14グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で石囲炉と黒色の円形プランを確認した。

[重複] 遺構との重複はないが、住居北側が耕地造成に伴う削平で失われている。

[平面形・規模] 竪穴部一部欠損により全体形は明確ではないが、東西に3.5mの隅丸方形となる可能性がある。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

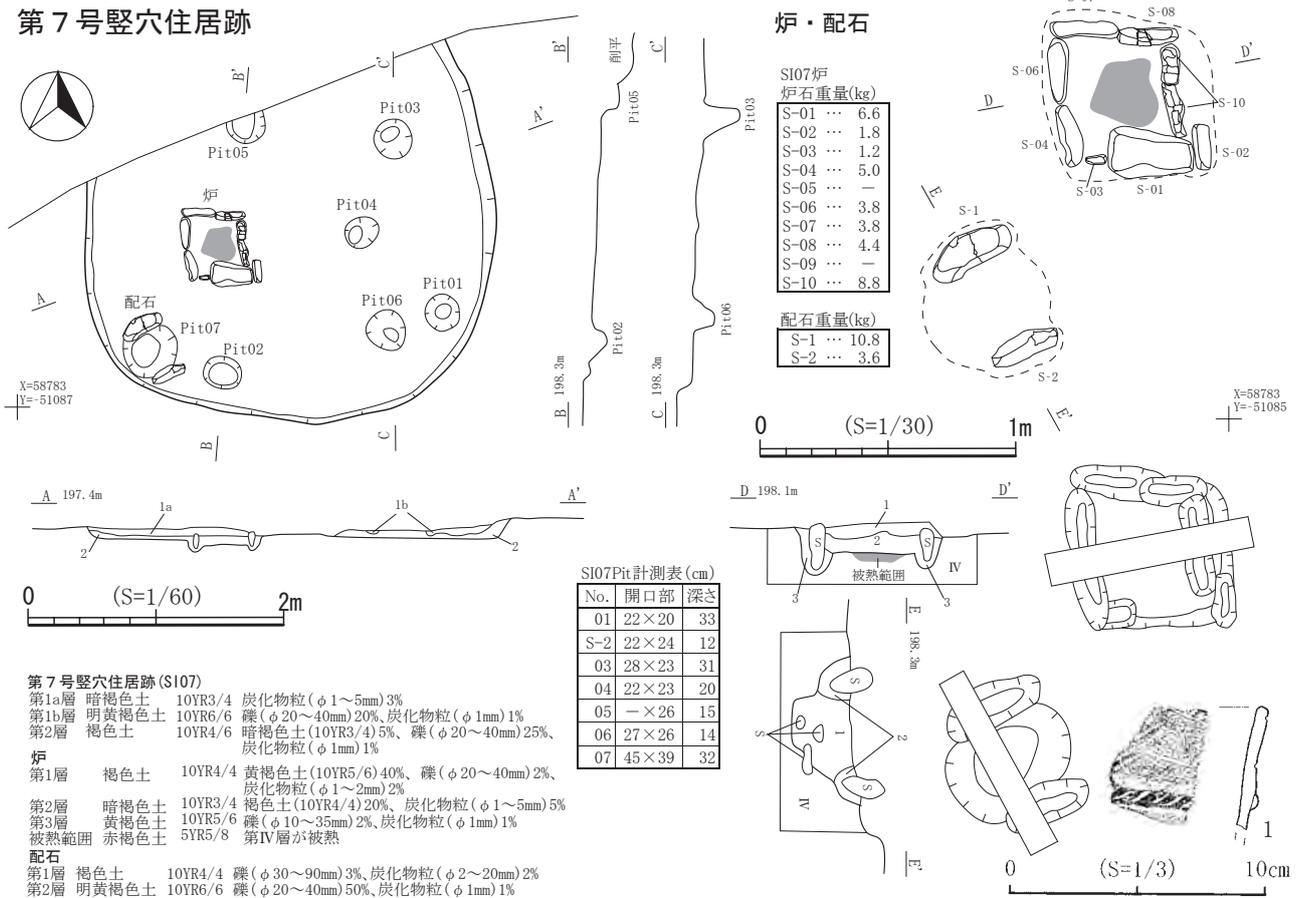


図29 第7号竪穴住居跡・出土遺物

[炉]床面中央やや南寄りに炉（石囲炉）を検出した。8個ほどの礫でほぼ方形に組み立てられており、外径は約68×64cmである。被熱範囲は炉内の27×26cmの範囲で被熱しており深度は3cm程度である。炉石重量は全て10kg未満であった。

[付帯施設]住居南西壁際で配石を検出した。Pit07堆積土を掘り込み、長円形の礫を約28cmの間隔で平行に配している。北側 (S-1) に埋設した礫の方が大きく、重量は約10kgであった。

[柱穴]床面に6基の小ピットを検出した。住居の主軸を東-西とした場合、Pit03-06、Pit05-02が対をなす4本柱であった可能性が考えられる。

[堆積土] 2層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われる。第1b層は攪乱気味である。

[出土遺物]土器が39g出土し、1点を図示した (図29-1)。

[小結]炉の堆積土2層から確認された炭化種実と思われる試料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった (第3章第2節)。少量の出土遺物であったが、出土遺物から後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第8号竪穴住居跡 (SI08 : 図30・31、写真10・11・41)

[位置・確認] IT・U-13・14グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で黒色の円形プランを確認した。

[重複]本遺構は3回の建て替え(重複)が認められ、第8号竪穴住居跡A→B→Cの順で古くなるものと考えられる。

[平面形・規模]第8号竪穴住居跡Cは東西に約4.1m、南北に約4.6mのほぼ円形で、床面積は約12.8㎡である。第8号竪穴住居跡A・Bの平面形・規模は不明である。

[壁・床面]確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。第8号竪穴住居跡Aは第8号竪穴住居跡B・C堆積土を、第8号竪穴住居跡Bは第8号竪穴住居跡C堆積土を、第8号竪穴住居跡Cは地山である第Ⅳ層をそれぞれ床面としている。

[炉]第8号竪穴住居跡Aは住居ほぼ中央から地床炉を検出した。被熱範囲は約60×55cm、被熱深度は10cmである。第8号竪穴住居跡Bは住居東寄りから元々は石囲炉と考えらるる炉を検出した。掘方規模は約90×84cm、内部の被熱範囲は約48×44cm、被熱深度は8cmである。第8号竪穴住居跡Cは住居東壁寄りから石囲炉を検出した。12個ほどの礫で長方形に組まれており、外径は約94×72cm、石囲内部の被熱範囲は約46×38cm、被熱深度は4cmである。炉石重量は、多くが10kg未満であり、10kg以上のものが4個あった(S-05・13・15・17)。最大重量はS-17で、約21kgであった。石囲炉東側の礫は、周囲の礫より低く埋設されていることを確認した。

[付帯施設]第8号竪穴住居跡C住居南西壁際で配石を検出した。床面(第Ⅳ層)を掘り込み、長円形の礫を約24cmの間隔で平行に配している。北側に埋設した礫(S-1)が大きく、重量は約9kgであった。

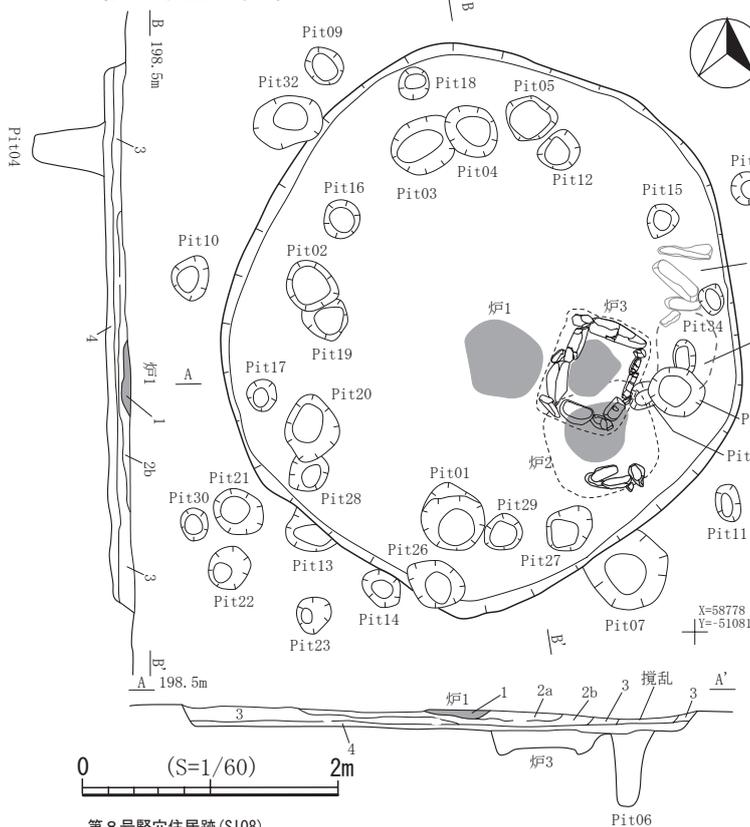
[柱穴]床面に20基、住居跡上端周辺に12基の小ピットを検出した。第8号竪穴住居跡Aは、住居の主軸を東-西とした場合、Pit08-11、Pit04-01、Pit32-21が対をなす6本柱、第8号竪穴住居跡Bは、住居の主軸を東-西とした場合、Pit34-07、Pit03-13が対をなす4本柱、第8号竪穴住居跡Cは、住居の主軸を東-西とした場合、Pit15-27、Pit04-20が対をなす4本柱であった可能性が考えられる。

[堆積土]2層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われる。

[出土遺物]第8号竪穴住居跡A・B・C合わせ、土器が5769g、石器が1808g出土した。このうち土器は12点、石器は6点を図示した。第8号竪穴住居跡C床面から出土した深鉢形(図31-1)は縄文時代中期末葉(大木10式併行期)に比定される。図31-6の深鉢形破片には補修孔と思われる穿孔が確認できる。図示した石器内訳は、石鏃、磨り石、磨り・敲きの複合痕をもつ礫である(図31-13～18)。13の石鏃にはアスファルトの付着が確認された。石錐、磨製石斧片、敲き石、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結]炉の堆積土2層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,874 \pm 23$ (暦年較正用yrBP)との値が得られた(第3章第1節)。また、住居跡堆積土中から出土した土器(図31-11)に付着する炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,775 \pm 25$ (暦年較正用yrBP)との値が得られた(第3章第1節)。炉2(焼土)の1層(焼土層)から確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミとクリがわずかに得られた(第3章第2節)。床面出土遺物から第8号竪穴住居跡Cは縄文時代中期末葉に帰属する遺構であると考えられる。その後、第8号竪穴住居跡Bが構築され、縄文時代後期初頭～前葉にかけて同遺構は廃絶し、第8号竪穴住居跡Aがつくられた可能性が考えられる。

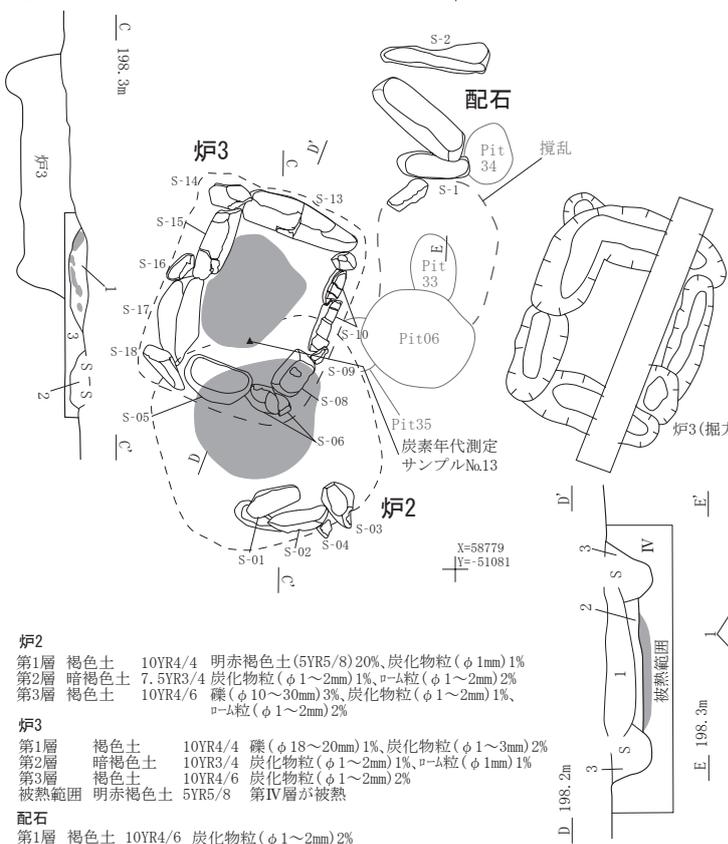
第8号竖穴住居跡



第8号竖穴住居跡 (SI08)

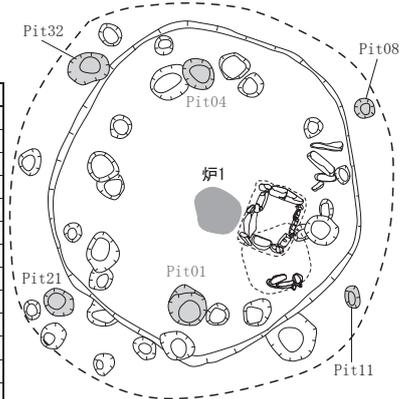
- 第1層 明赤褐色土 2.5YR5/8 炉1, 暗褐色土 (10YR3/4) 20%, 小礫 (φ 20~25mm) 10%, 炭化物粒 (φ 1~5mm) 5%
- 第2a層 褐色土 10YR4/4 炭化物粒 (φ 1~5mm) 2%
- 第2b層 暗褐色土 10YR3/4 礫 (φ 15~100mm) 2%, 炭化物粒 (φ 1~5mm) 2%
- 第3層 黄褐色土 10YR5/6 礫 (φ 15~50mm) 2%, 炭化物粒 (φ 2~5mm) 2%
- 第4層 褐色土 10YR4/6 礫 (φ 10~100mm) 5%, 炭化物粒 (φ 1~5mm) 2%, v-A粒 (φ 1~3mm) 2%

炉・配石



- 炉2**
 第1層 褐色土 10YR4/4 明赤褐色土 (5YR5/8) 20%, 炭化物粒 (φ 1mm) 1%
 第2層 暗褐色土 7.5YR3/4 炭化物粒 (φ 1~2mm) 1%, v-A粒 (φ 1~2mm) 2%
 第3層 褐色土 10YR4/6 礫 (φ 10~30mm) 3%, 炭化物粒 (φ 1~2mm) 1%, v-A粒 (φ 1~2mm) 2%
- 炉3**
 第1層 褐色土 10YR4/4 礫 (φ 18~20mm) 1%, 炭化物粒 (φ 1~3mm) 2%
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物粒 (φ 1~2mm) 1%, v-A粒 (φ 1mm) 1%
 第3層 褐色土 10YR4/6 炭化物粒 (φ 1~2mm) 2%
 被熱範囲 明赤褐色土 5YR5/8 第IV層が被熱
- 配石**
 第1層 褐色土 10YR4/6 炭化物粒 (φ 1~2mm) 2%

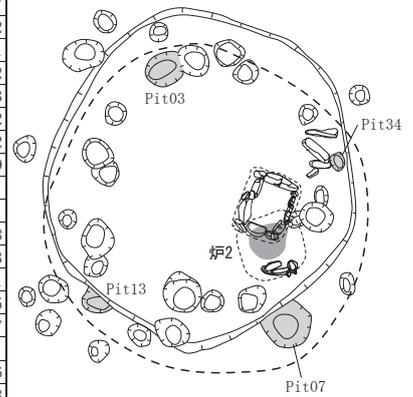
第8号竖穴住居跡A



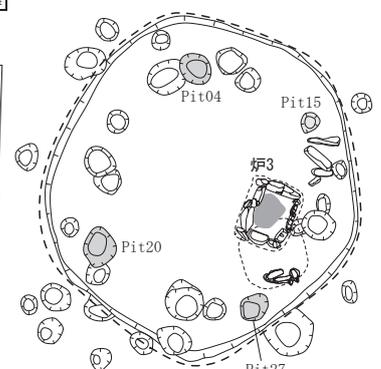
SI08Pit計測表 (cm)

No.	開口部	深さ
01	49×47	69
02	36×36	64
03	42×45	66
04	36×36	60
05	31×37	9
06	36×40	58
07	61×63	43
08	21×20	17
09	24×24	11
10	31×27	20
11	24×15	21
12	25×29	30
13	35×-	25
14	26×27	17
15	20×21	57
16	27×26	47
17	21×18	12
18	20×20	21
19	27×33	22
20	47×37	53
21	32×33	42
22	27×29	52
23	21×22	49
24	SPに変更	
25	SPに変更	
26	31×42	48
27	30×30	53
28	-×26	11
29	27×25	15
30	20×18	27
31	SPに変更	
32	37×49	36
33	-×17	18
34	21×17	36
35	18×-	14

第8号竖穴住居跡B



第8号竖穴住居跡C



※第8号竖穴住居跡A・B・Cの縮尺は1/100

SI08炉

炉石重量(kg)	
S-01	4.0
S-02	3.1
S-03	3.1
S-04	0.2
S-05	10.1
S-06	4.4
S-07	-
S-08	7.4
S-09	0.4
S-10	4.9
S-11	-
S-12	1.5
S-13	20.0
S-14	7.9
S-15	11.5
S-16	1.2
S-17	21.5
S-18	2.0

配石重量(kg)	
S-1	7.0
S-2	7.5

図30 第8号竖穴住居跡

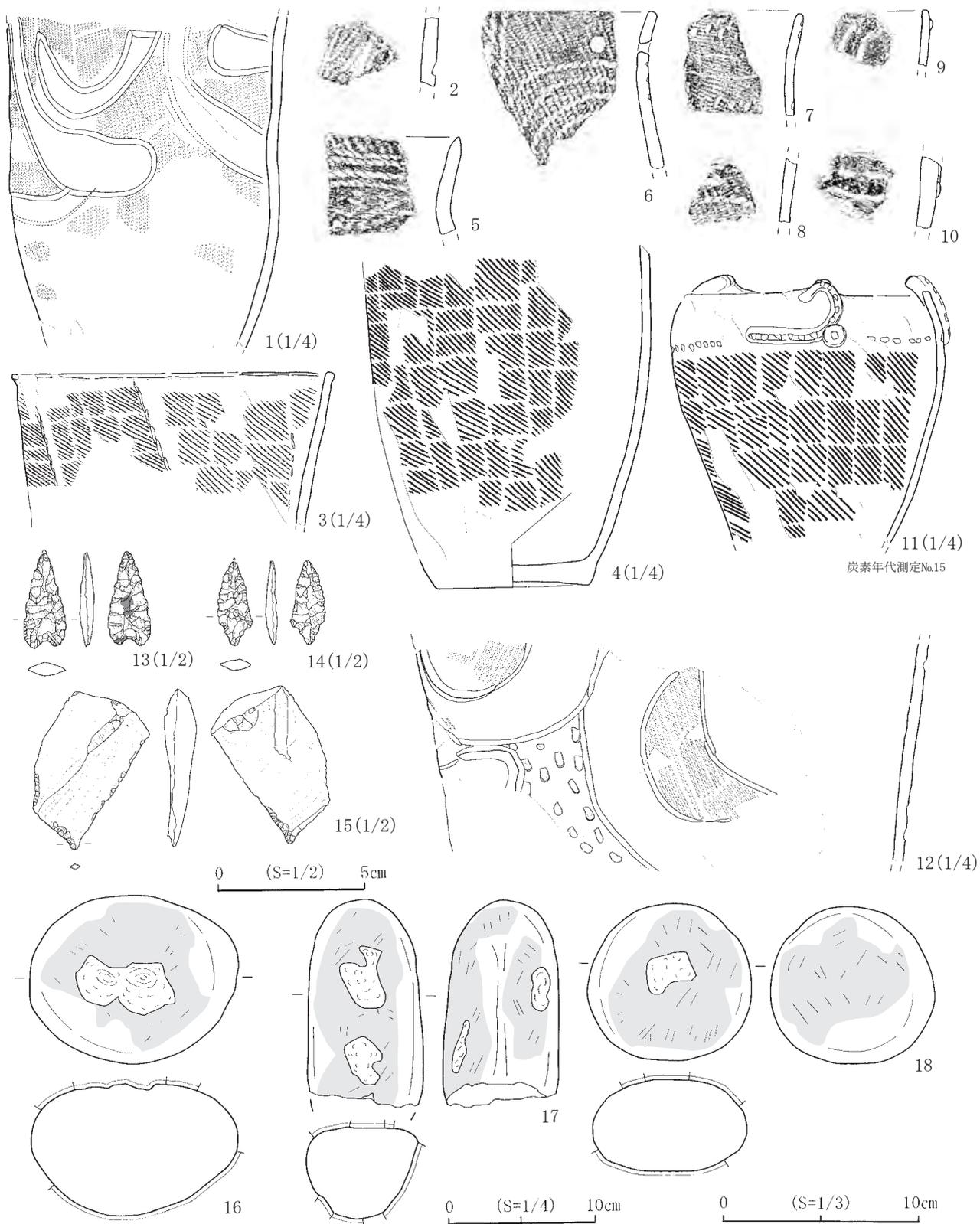


図31 第8号竪穴住居跡出土遺物

第9号竪穴住居跡 (SI09 : 図32、写真12・13・40)

[位置・確認] IU・V-21・22グリッドに位置し、北側が耕地造成に伴う削平で失われている。耕作土 (I層)直下で確認した。西側から南側にかけては床面下まで削平されていた。IV層を掘りこんで構築

第9号竖穴住居跡

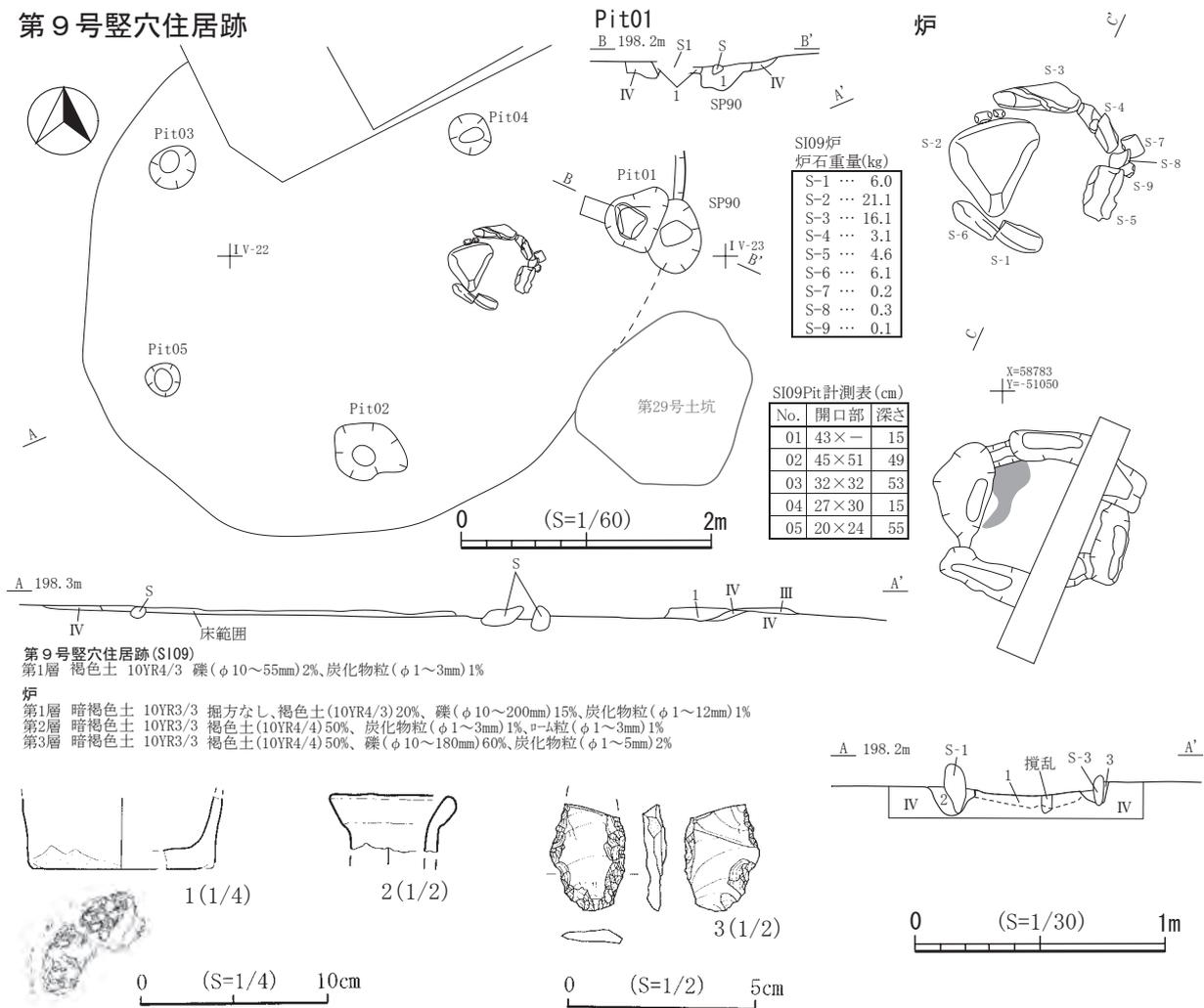


図32 第9号竖穴住居跡・出土遺物

されたものと考えられる。

[重複] S P90と重複し、本遺構が新しい。また、第29号土坑と重複していたと考えられるが、新旧は明確にできなかった。

[平面形・規模] 平面形は削平により不明である。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

[炉] 炉は石囲炉である。礫を設置する部分のみが掘り窪められて構築されている。S-1とS-5の間でも掘方を確認したため、礫は本来全周していたものと考えられる。この礫の抜き取りについては、攪乱によるものである可能性が高い。焼土はS-2の下の一部でしか形成されておらず、これ以外の部分では被熱により地山IV層が変質したと考えられる土層(炉1層)を捉えられた。この変質部分の深度は最大で約5cmである。また、S-2の下で焼土を確認できたことから、炉使用時にはS-2は立った状態で据えられていたと考えられる。

[付帯施設] 配石等は確認できなかった。しかし、Pit01で確認した礫が攪乱等により倒れてしまったものと仮定すれば、ここに他の住居跡にみられる配石に類するものがあつた可能性も指摘できる。

[柱穴] 5基確認した。いずれも柱痕は確認できなかった。

[堆積土] 単層である。

[出土遺物]土器が87g、石器が3g出土した。このうち土器は2点、石器は1点を図示した。土器の図32-1の底面には網代痕がつき、2は無文のミニチュア壺形破片である。図示した石器内訳は、二次加工剥片である(図32-3)。

[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭から前葉に帰属する遺構であると考えられる。(荒谷)

第10号竪穴住居跡 (SI10: 図33・34、写真12・13・41)

[位置・確認]IW・X-26・27グリッドに位置し、北西半が耕地造成に伴う削平で失われている。耕作土(I層)直下で確認した。IV層を掘りこんで構築されている。

[重複]他遺構との重複は確認できなかったが、近接して対で柱穴が構築されることから、建て替えの可能性はある。

[平面形・規模]平面形は削平により全形は不明だが、楕円形に近い形状であったと考えられる。

[壁・床面]確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

[炉]住居の東壁寄りに炉を検出した。石囲炉部と掘込部の組み合わせである。石囲炉は礫を設置する部分を掘り窪めて構築されており、東側は礫が抜き取られている。焼土は地山に形成され、深度は最大で約7cmである。炉石重量は10kg以上のものが2点確認された(S-2・4)。掘込部は炉の東側にある。掘込部は礫と土坑状の落ち込み、及び地山土を主体とした貼床範囲(粘土範囲)で構成される。貼床範囲は掘込部の南西側に施され、本来は配石S-8を覆い隠していたと考えられる。貼床の厚さは約5cmである。土坑状の落ち込みには礫と共に土器の小片が敷かれているような状態で出土した。この配石部は礫の据え付け部分以外にも掘方を持ち(図33)、小ピット状の落ち込みからは土器の底部(図34-7)が出土している。

[柱穴]8基確認した。いずれも柱痕は確認できなかった。

[堆積土]4層に分層した。

[出土遺物]土器が4117g、石器が659g出土した。このうち土器は9点、石器は3点を図示した。配石部堆積土中から出土した粗製の深鉢形(図34-7)は縄文時代中期末葉～後期初頭に比定されるものである。底面には網代痕がつく。図34-9はミニチュア土器である。図示した石器内訳は、石錐、削器である(図34-10～12)。搔器、石核、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結]炉の堆積土3層から確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミ、クリ、ブドウ属、ニワトコ、タデ属、ササゲ属アズキ亜属がわずかに得られた(第3章第2節)。出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(荒谷)

第11号竪穴住居跡 (SI11: 図35・36、写真13・41・42)

[位置・確認]IU・V-25グリッドに位置し、耕作土(I層)直下で確認した。IV層を掘りこんで構築されている。

[重複]第25号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模]攪乱により全形は不明だが、楕円形に近い形状と考えられる。

[壁・床面]確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

第10号竪穴住居跡

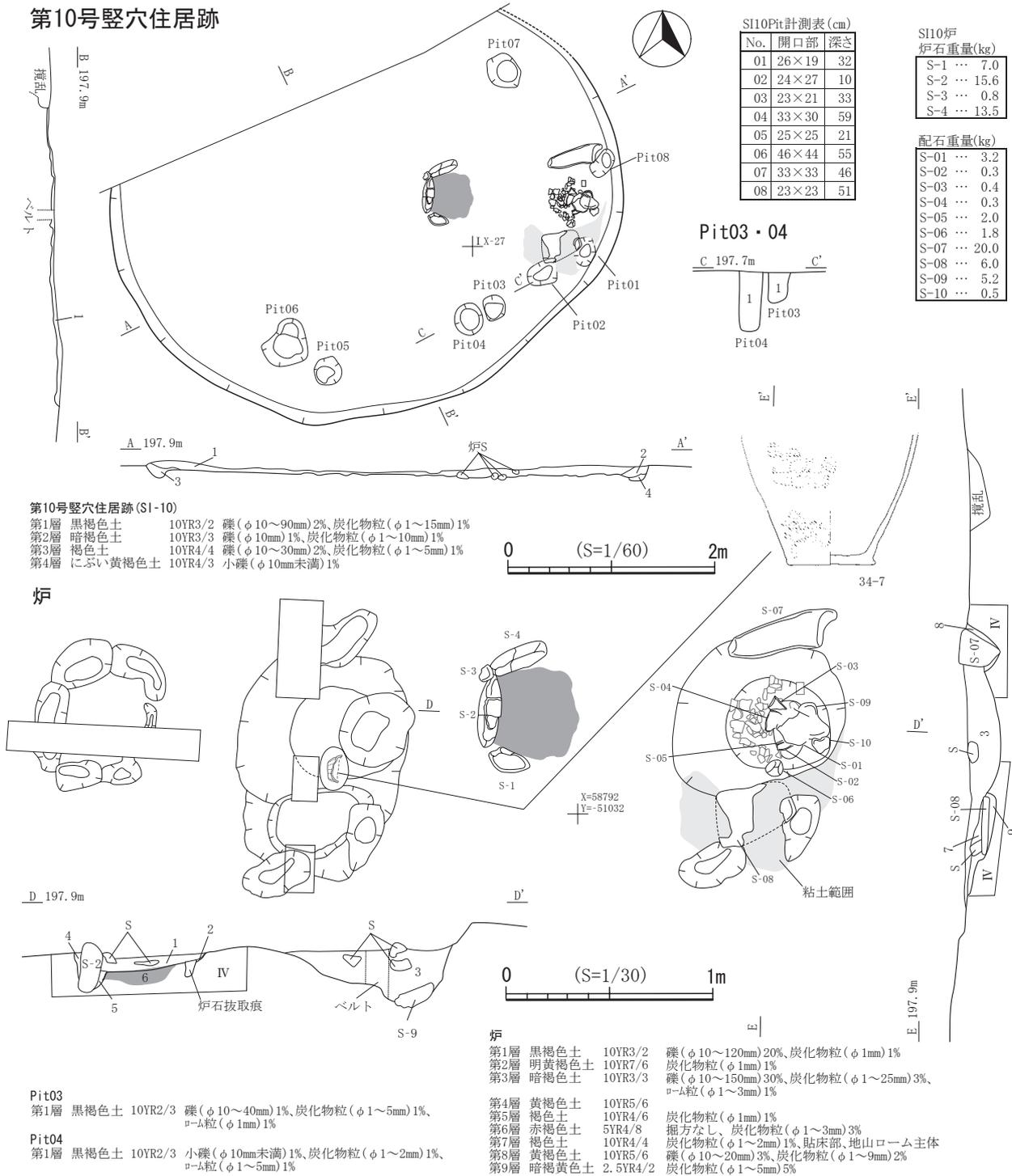


図33 第10号竪穴住居跡

[炉]住居の東壁寄りに炉を検出した。石囲炉部と掘込部の組み合わせである。石囲炉は礫を設置する部分を掘り窪めて構築されており、焼土形成の深度は最大で約10cmである。礫は西側の一部で礫が途切れているが、礫を据えた掘形は全周することから、本来はここにも礫が据えられていたものと考えられる。この礫の抜き取りは意図的なものか攪乱によるものなのかは判断できなかった。炉石重量は全て10kg未満であった。掘込部は炉の東側にある。掘込部は礫と地山土を主体とした貼床範囲(粘土

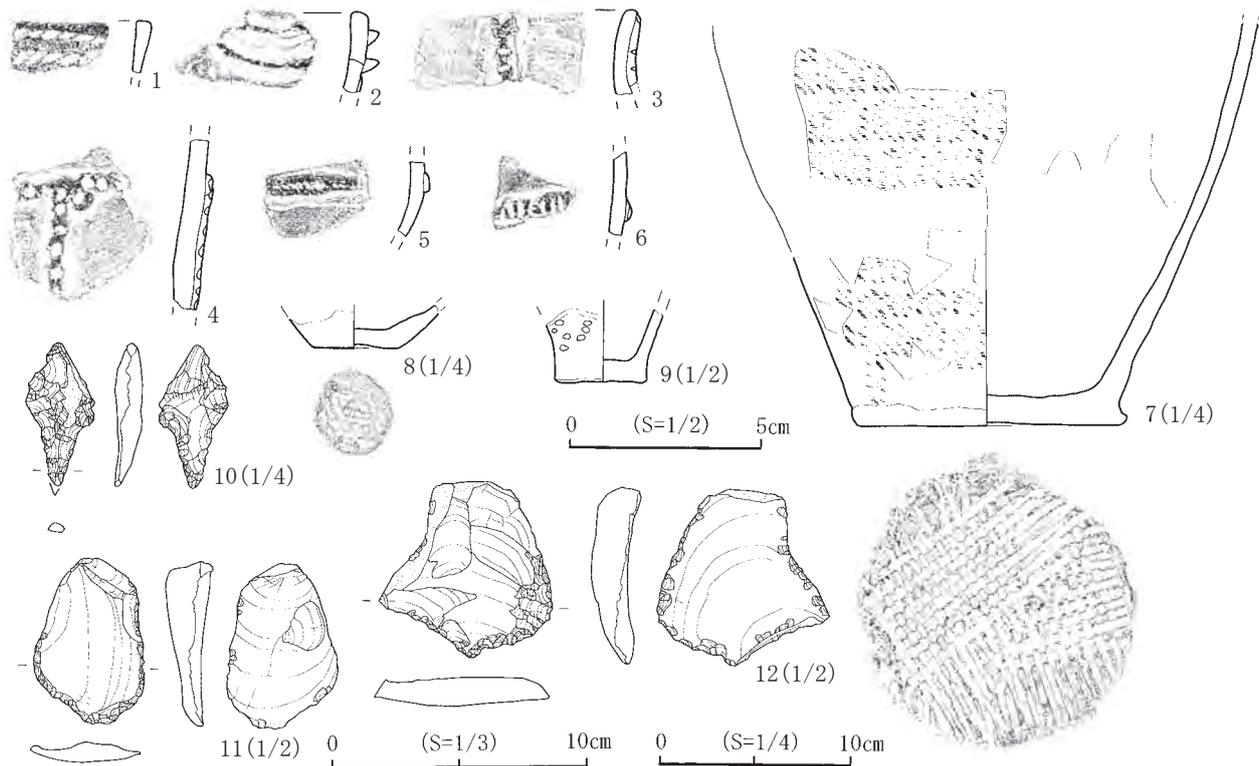


図34 第10号竪穴住居跡出土遺物

範囲)で構成される。貼床は掘方に設置された礫を固定するように、その周囲に約5cmの厚さで施されている。また、配石S-2は、本来配石S-1のように立っていた可能性がある。配石S-4は掘形を持たないため配石とは扱えないが、壁に立てかけるように置かれていた可能性を考慮し、図示した。また、この掘込部掘方底面で焼土範囲を確認し、貼床下焼土範囲として調査した。本遺構に伴う可能性に加え、重複関係から第25号竪穴住居跡に伴う炉であった可能性も指摘できる。

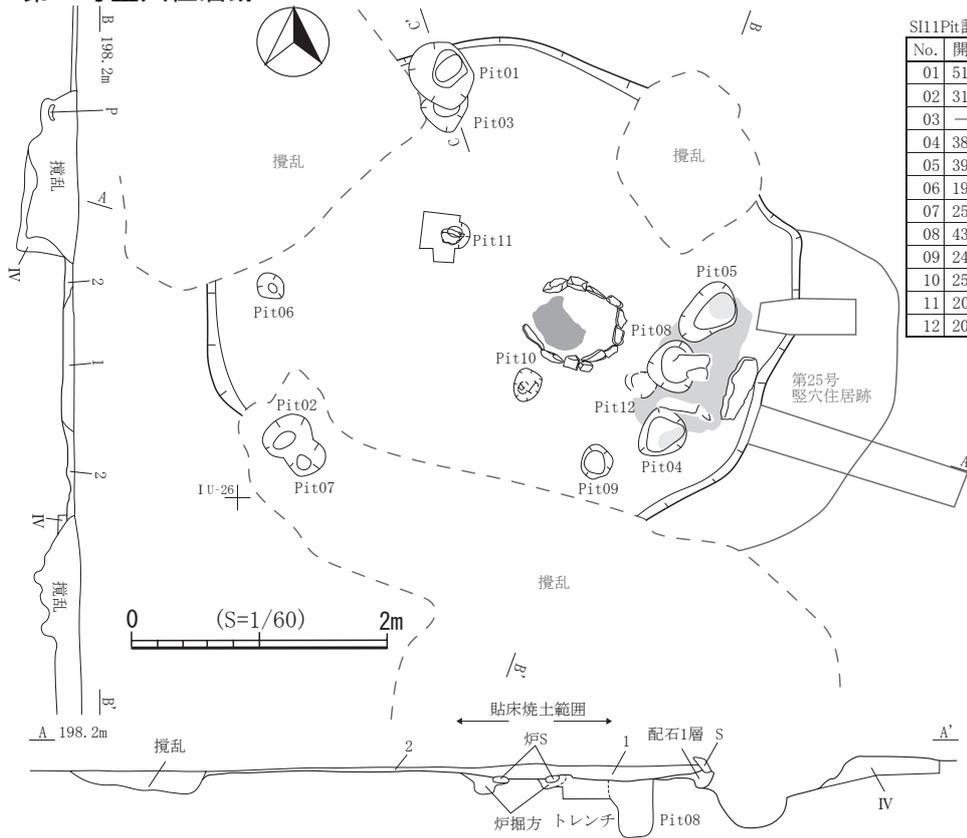
[柱穴]12基確認した。いずれも柱痕は確認できなかった。Pit10とPit11については、床面から突出するように礫を据えていたと考えられる。

[堆積土]2層に分層した。

[出土遺物]土器が1230g、石器が9491g出土した。このうち土器は7点、石器は6点を図示した。土器は全て破片資料で、縄文時代後期初頭に比定されるものが多い(図36-1~5)。図示した石器内訳は、石鏃、石錐、削器、石錘、台石である(図36-9~13)。図36-13の台石には黒色付着物が確認できる。石核、磨製石斧片、敲き石、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物や重複関係から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(荒谷)

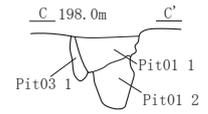
第11号竖穴住居跡



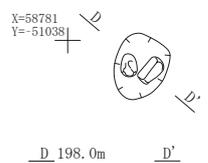
S111Pit計測表 (cm)

No.	開口部	深さ
01	51×49	68
02	31×38	38
03	—×36	44
04	38×37	23
05	39×43	17
06	19×20	25
07	25×30	57
08	43×37	42
09	24×25	24
10	25×21	44
11	20×—	51
12	20×22	21

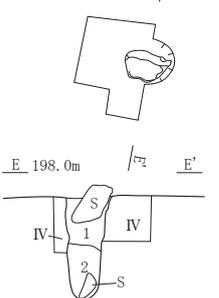
Pit01・03



Pit10



Pit11



- Pit01**
第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~15mm)1%、炭化物粒(φ1~16mm)1%
第2層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土(10YR3/4)40%、小礫(φ10mm未満)1%、炭化物粒(φ1~15mm)1%
- Pit03**
第1層 にぶい黄褐色土 10YR4/3 小礫(φ10mm未満)1%、炭化物粒(φ1~10mm)1%
- Pit04**
第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫(φ10~25mm)1%、炭化物粒(φ1~7mm)2%
- Pit05**
第1層 にぶい黄褐色土 10YR4/3 礫(φ10~35mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
- Pit08**
第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫(φ10~340mm)40%、炭化物粒(φ1~8mm)1%
第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物粒(φ1~5mm)1%
第3層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒(φ1~12mm)1%
- Pit10**
第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~100mm)60%、炭化物粒(φ1~3mm)1%、
 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%
Pit11
第1層 暗褐色土 10YR3/3 褐色土(10YR4/4)との混合土、礫(φ100mm)40%、炭化物粒(φ1~5mm)1%、 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%
第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~100mm)15%、炭化物粒(φ1~3mm)1%

第11号竖穴住居跡(S111)

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~110mm)3%、炭化物粒(φ1~7mm)2%
第2層 黒褐色土 10YR3/2 礫(φ10~25mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)1%

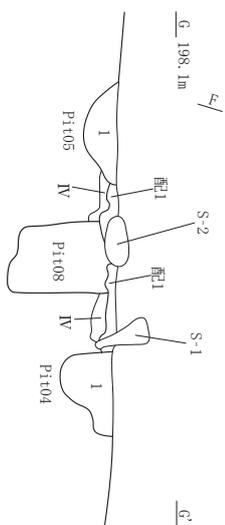
炉

- 第1層 赤褐色土 5YR4/6 掘方なし、褐色焼土(7.5YR4/4)40%、褐色焼土(10YR4/4)30%、炭化物粒(φ1mm)1%
第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10mm)1%
第3層 褐色土 10YR4/6 炭化物粒(φ1~2mm)1%
第4層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/3)との混合土、礫(φ10mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)1%、 ν - Δ 粒(φ1~3mm)1%
被熱範囲 明赤褐色土 5YR5/6 貼床下(第IV層)が被熱

配石

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ20mm)2%、炭化物粒(φ1~3mm)1%、 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%
第1a層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物粒(φ1~3mm)1%
第1b層 暗褐色土 10YR3/3 にぶい赤褐色土(5YR4/3)20%、炭化物粒(φ1~6mm)2%
第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~20mm)1%

炉・配石



S111炉
炉石重量(kg)

S-01	7.0
S-02	3.6
S-03	2.1
S-04	1.6
S-05	1.9
S-06	1.9
S-07	1.5
S-08	4.1
S-09	1.2
S-10	2.1
S-11	3.9
S-12	4.2

配石重量(kg)

S-1	—
S-2	7.1
S-3	5.2
S-4	—

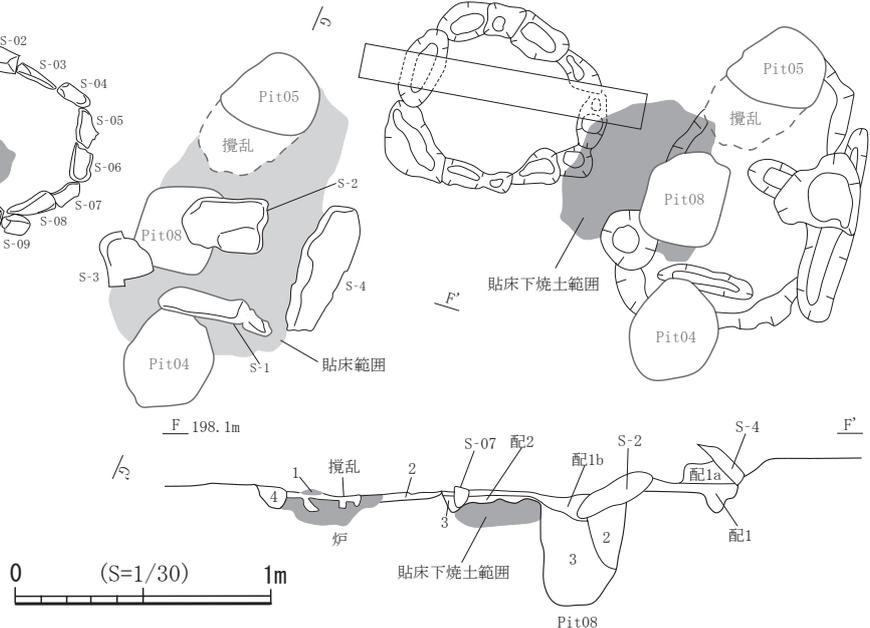


図35 第11号竖穴住居跡

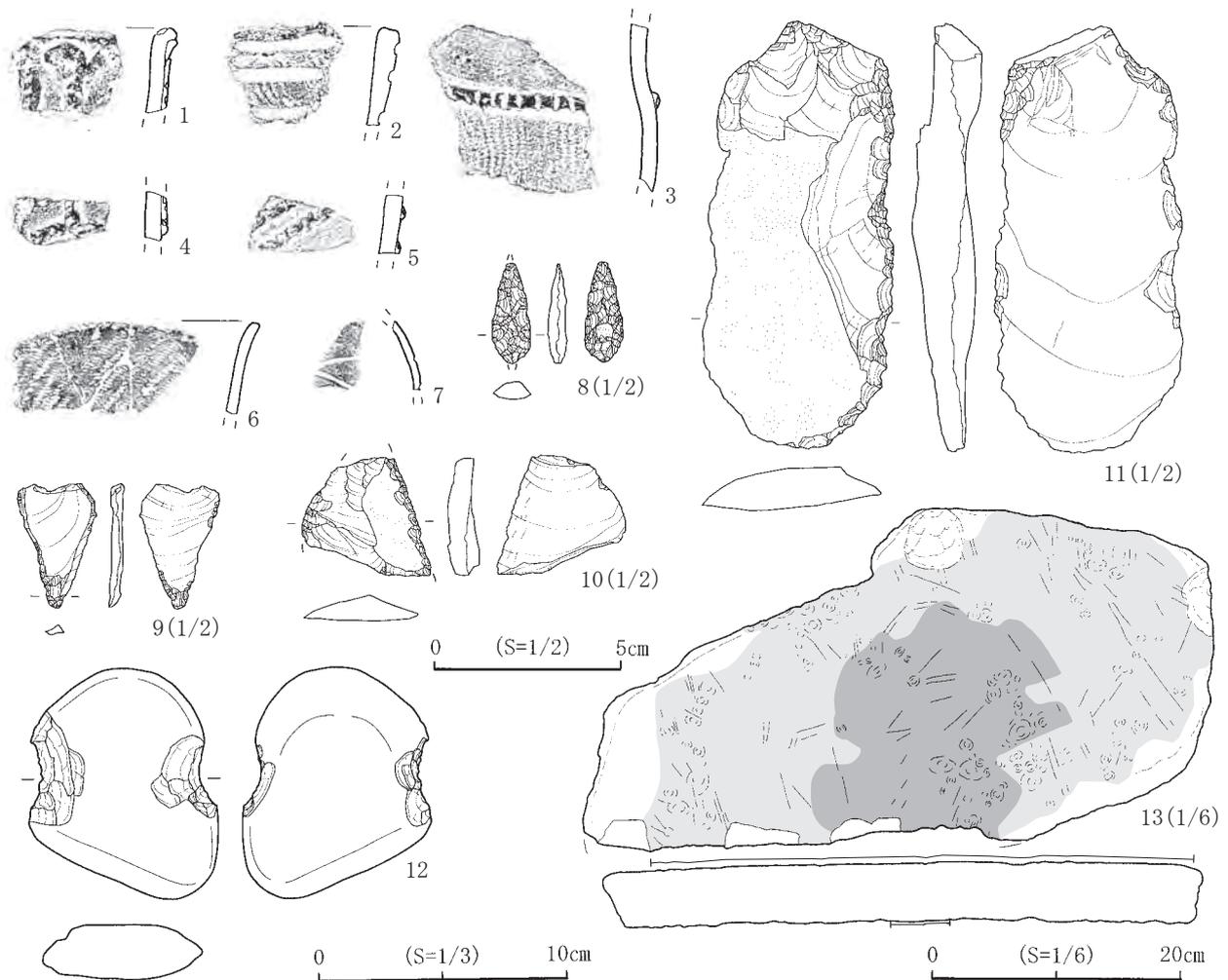


図36 第11号竪穴住居跡出土遺物

第12号竪穴住居跡 (SI12 : 図37、写真14・15・40)

[位置・確認] IV・W-17・18グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で黒色の円形プランを確認した。

[重複] 第13号竪穴住居跡、第3号土器埋設遺構と重複し本遺構が新しい。また、第26号竪穴住居跡と重複し本遺構が古い。

[平面形・規模] 東西に約5.2m、南北に約5.9mのほぼ円形で、床面積は約25.4㎡である。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[付帯施設] 住居南東壁際で掘り込みを確認した。82×60cmの長方形の落ち込みで深さは24cmである。落ち込み東側に長円形の礫埋設を確認した。炉に関連する施設であった可能性が考えられる。

[柱穴] 床面に24基、住居跡上端周辺に5基の小ピットを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit01-34、Pit21-05が対をなす4本柱であった可能性が考えられる。

[堆積土] 単層である。貼床部であった可能性もある。

[出土遺物] 土器が590g、石器が185g出土した。このうち土器は3点、石器は1点を図示した。土器は全て柱穴堆積土中から出土した深鉢形の破片資料である(図37-1~3)。3の底面には網代痕が

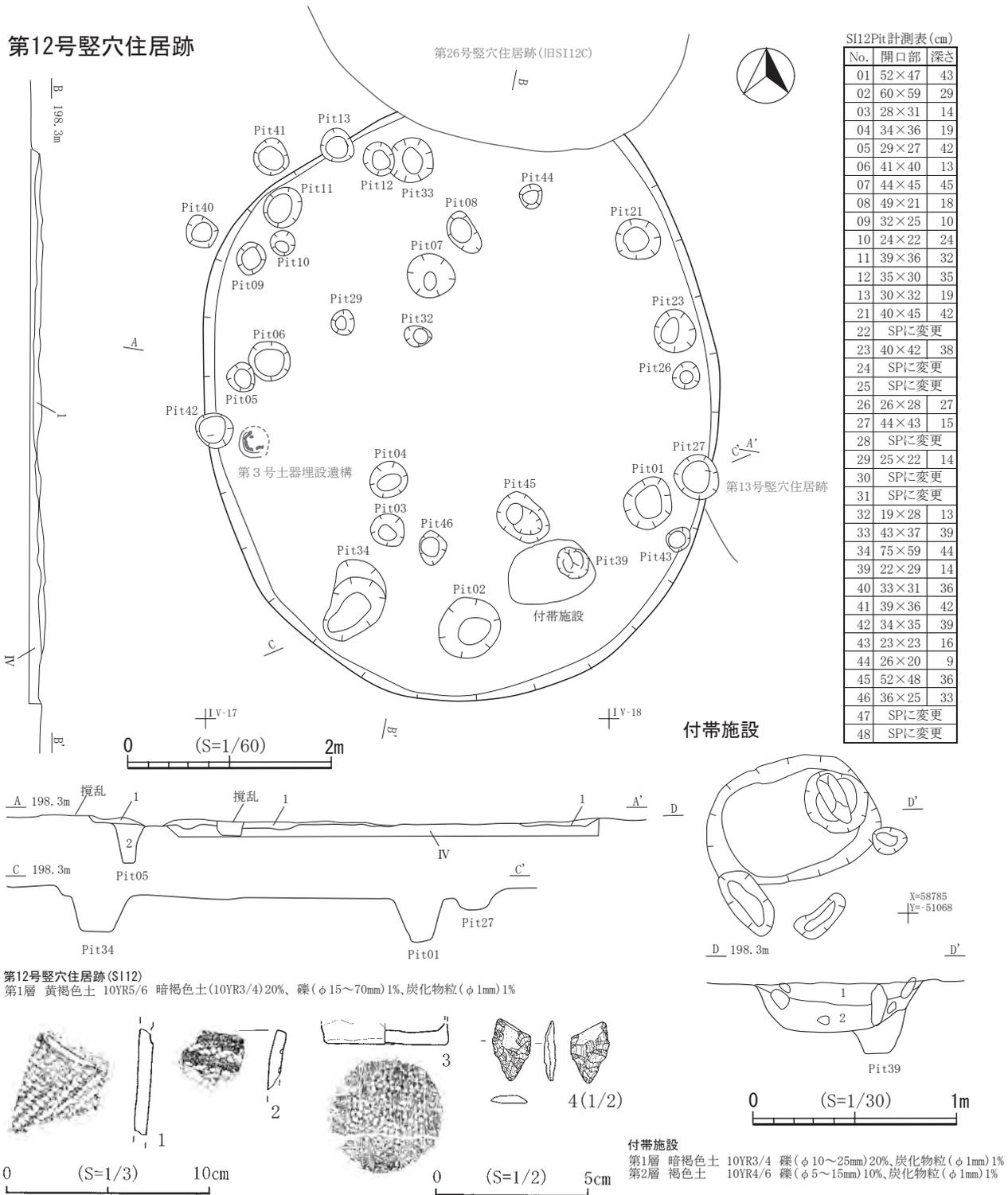


図37 第12号竖穴住居跡・出土遺物

く。図示した石器は石鏃片である(図37-4)。搔器、石核、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物から縄文時代中期末葉から後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第13号竖穴住居跡

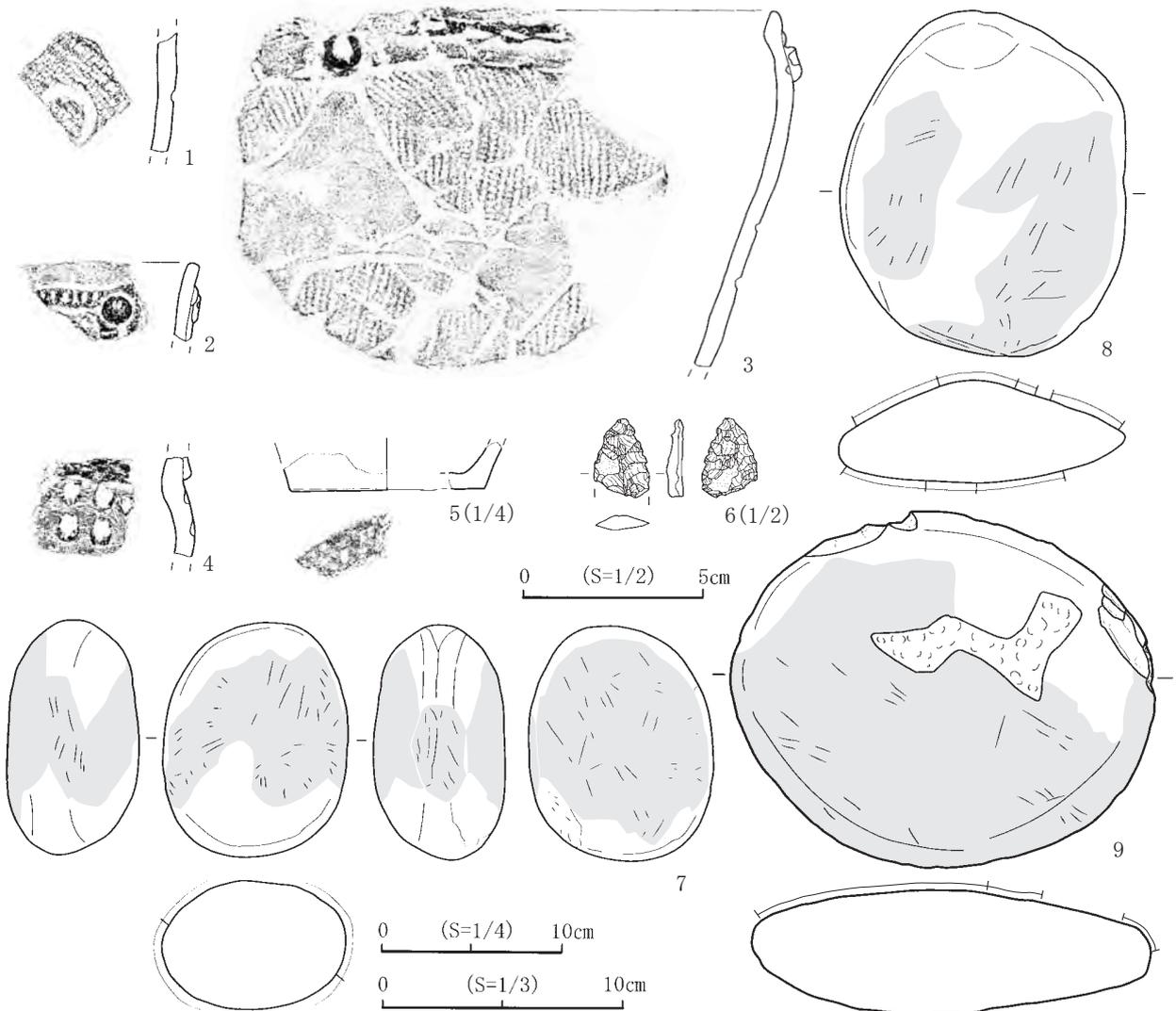
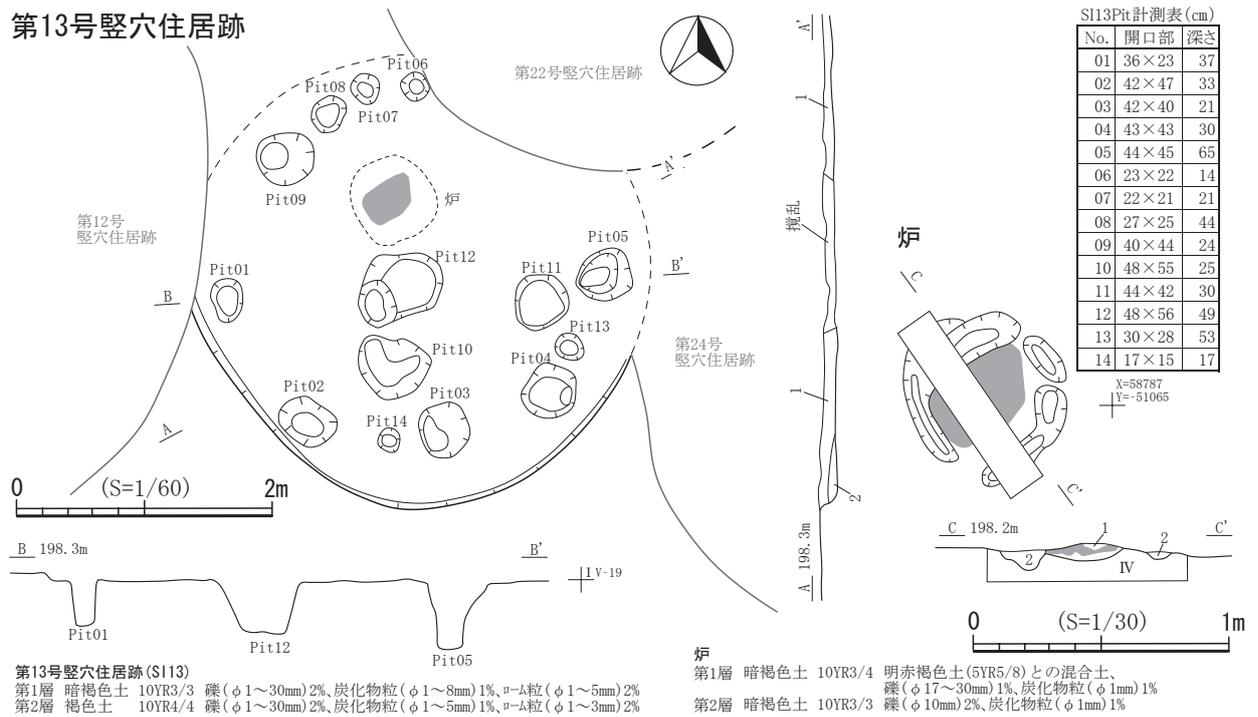


図38 第13号竖穴住居跡・出土遺物

第15・16号竪穴住居跡

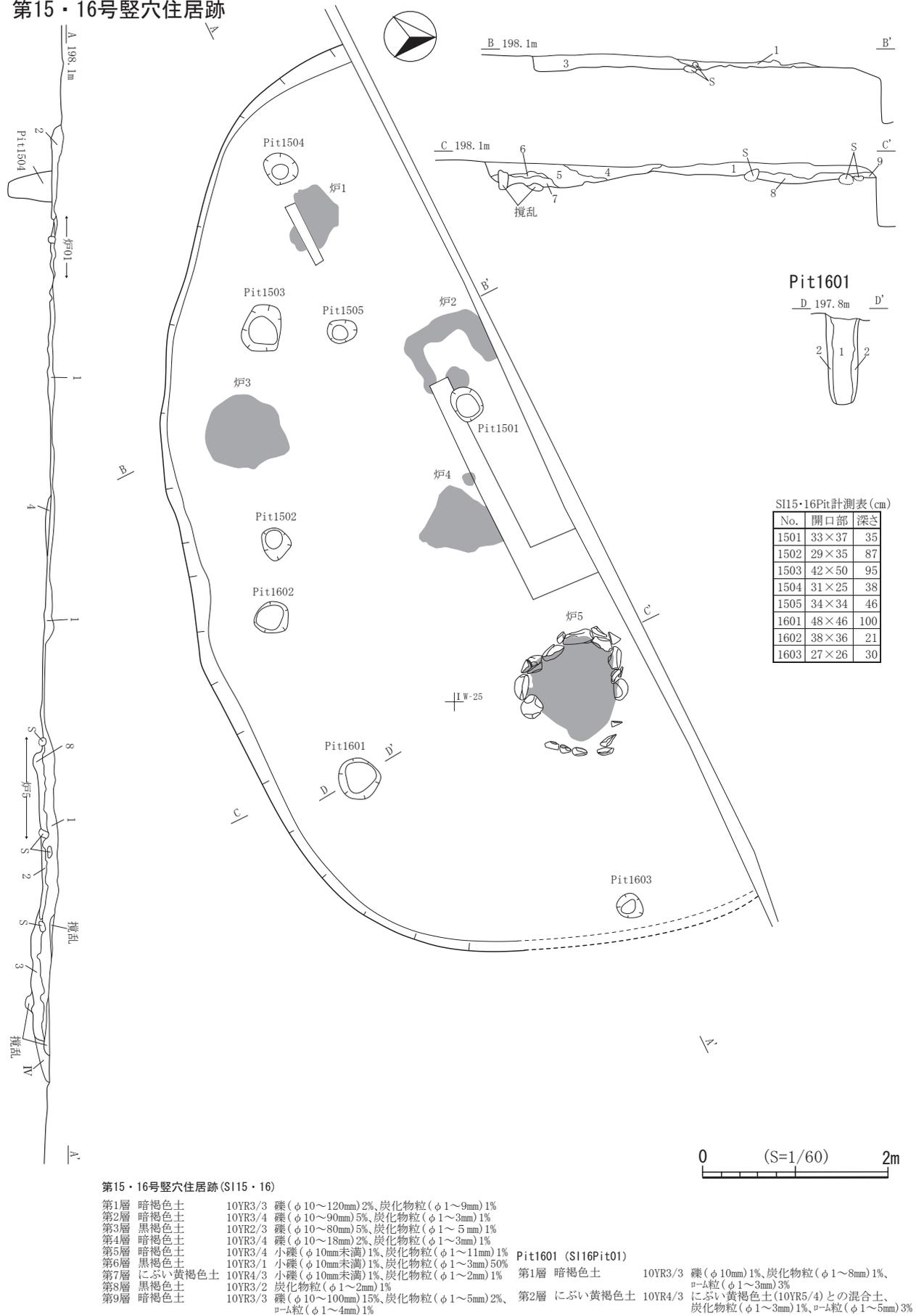


図39 第15・16号竪穴住居跡 (1)

第13号竪穴住居跡 (SI09 : 図38、写真14・15・42)

[位置・確認] I U-18・19グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で黒色の不整形プランを確認した。

[重複] 第12号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。また、第22・24号竪穴住居跡と重複していたと考えられるが、新旧は明確にできなかった。

[平面形・規模] 遺構の重複により全体形は明確ではないが、径3.5mほどのほぼ円形の可能性がある。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[炉] 床面中央やや北寄りで礫が抜き取られた炉を検出した。炉の外径は約70×64cm、被熱範囲は約38×30cm、被熱深度は8cmである。

[柱穴] 床面に15基の小ピットを検出した。Pit01・05が主柱穴であると考えられる。

[堆積土] 2層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われる。

[出土遺物] 土器が945g、石器が15537g出土した。このうち土器は5点、石器は5点を図示した。柱穴確認面(住居床面)から出土した深鉢形(図38-3)は、縄文時代後期初頭に比定される。図38-5の土器底面には網代痕が確認できる。図示した石器内訳は、石鏃、磨り・敲きの複合痕をもつ礫、台石である(図38-6～9)。石核、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第15・16号竪穴住居跡 (SI15・16 : 図39・40、写真15・42)

[位置・確認] 調査時には2棟の竪穴住居跡の重複の可能性を考慮したが整理時に1棟の竪穴住居跡であったと認識を改めた。I V・W-23～25グリッドに位置し、北側が耕地造成に伴う削平で失われている。耕作土(I層)直下で確認した。Ⅳ層を掘りこんで構築されている。

[平面形・規模] 削平により全形は不明だが、楕円形に近い形状と考えられる。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[炉] 炉は5基検出した。石囲炉1基(炉5)に加え、床面に被熱範囲が4か所ある(炉1～4)。この被熱範囲は、いずれも床面上に形成されており、掘方は持たない。焼土形成の深度は浅く、最大のもので約3cmにとどまる。石囲炉は、礫を設置する部分が掘り窪められて構築されており、礫内側の焼土形成部分は周囲の床面より約5cm低くなっている。焼土形成の深度は最大で約15cmである。炉石重量は、多くが10kg未満であり、10kg以上のものが2個あった(S-02・06)。最大重量はS-06で約18kgであった。

[柱穴] 8基確認した。小ピット番号は、頭に調査時のSI番号を付して区別した。Pit1601に関しては、柱痕を確認した。

[堆積土] 12層に分層した。

[出土遺物] 土器が931g、石器が320g出土した。このうち土器は5点、石器は2点を図示した。土器は堆積土中から出土した深鉢形の破片である(図40-1～6)。図40-6はミニチュア土器の底部破片である。図示した石器内訳は、二次加工剥片、磨り・敲きの複合痕をもつ礫である(図40-7・8)。敲き石、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(荒谷)

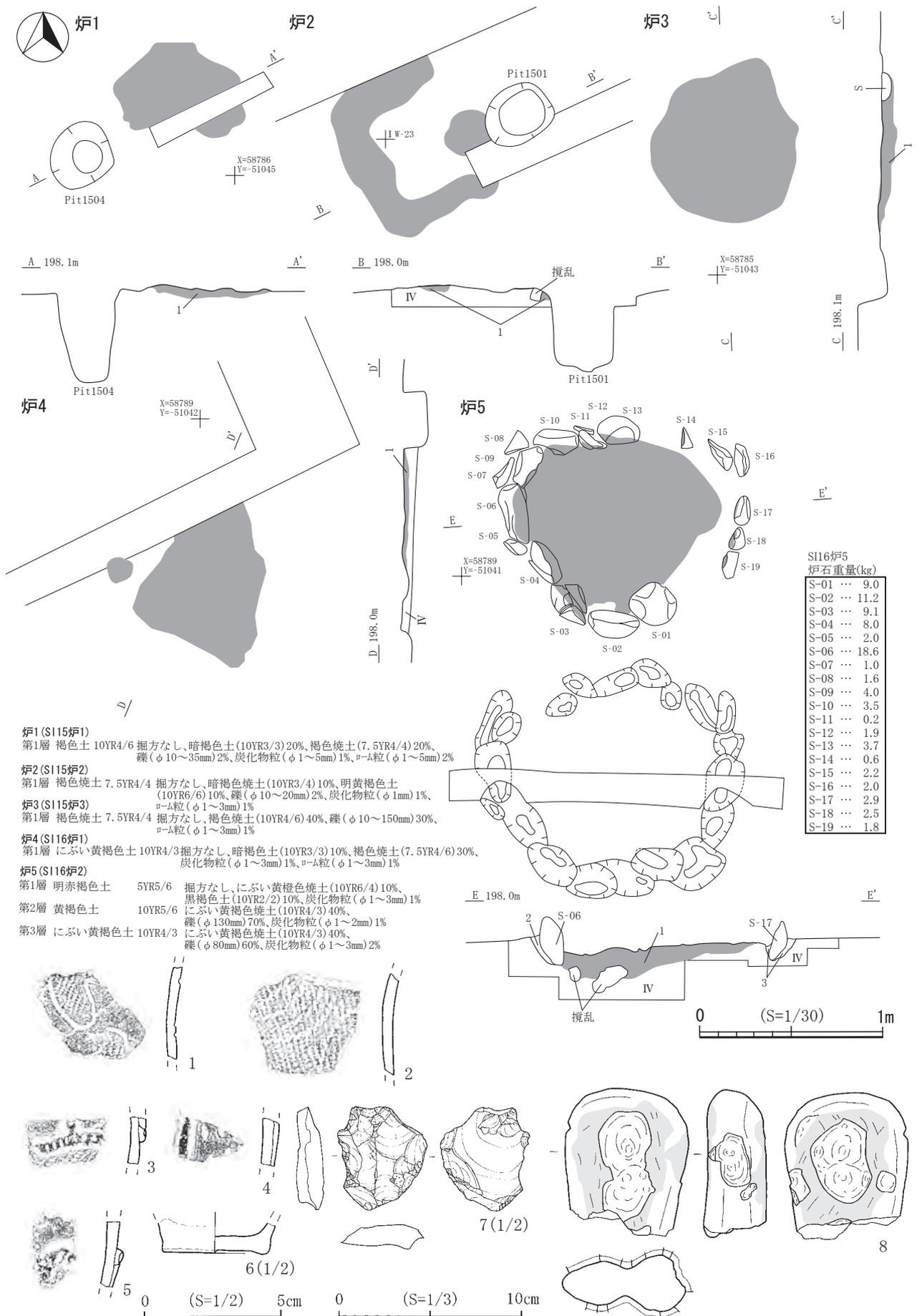


図40 第15・16号竪穴住居跡・出土遺物

第17号竖穴住居跡

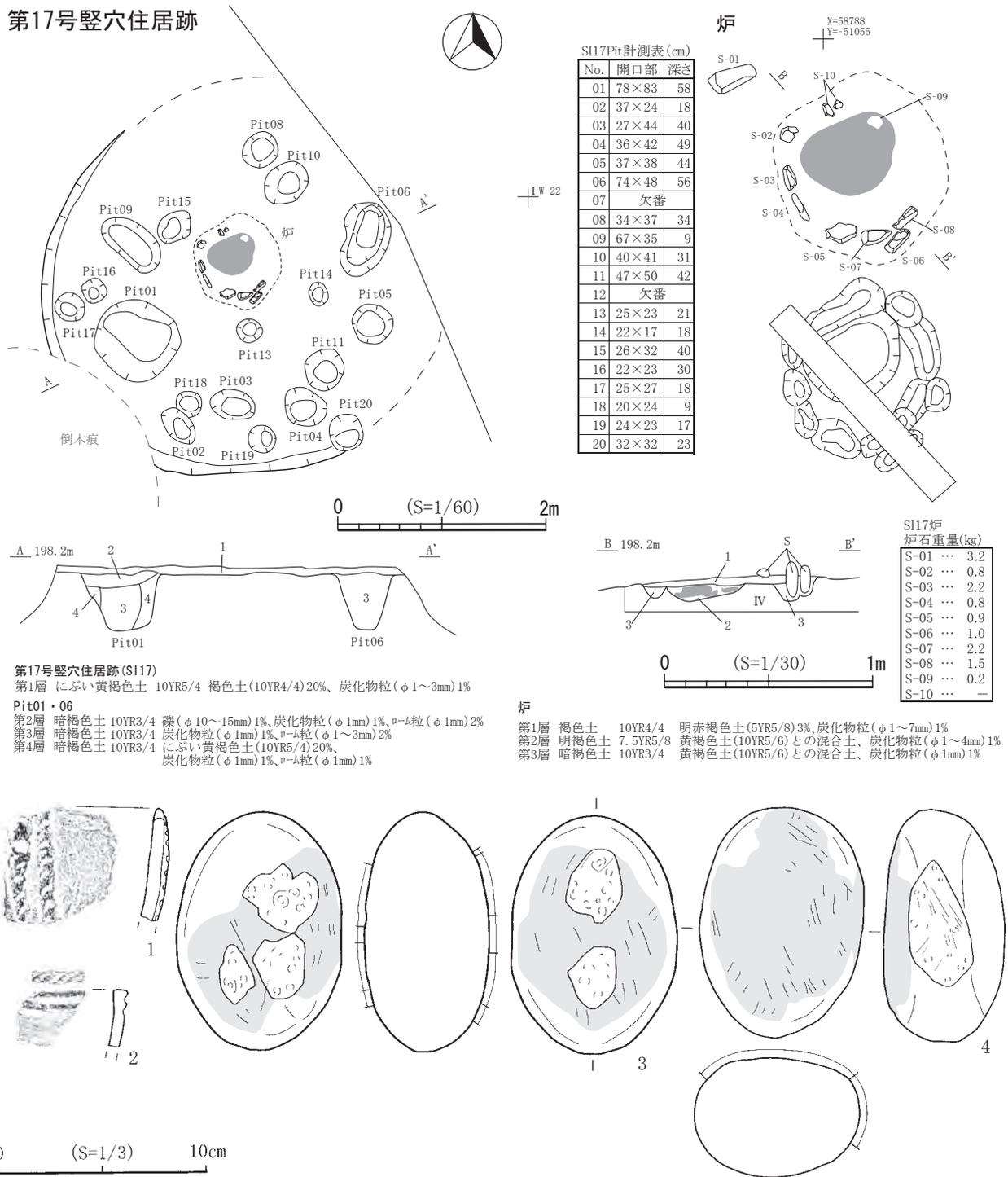


図41 第17号竖穴住居跡・出土遺物

第17号竖穴住居跡 (SI17 : 図41、写真16・19・42)

[位置・確認] IV・W-21グリッドに位置し、第III層下面で黒色の円形プランを確認した。

[重複] 遺構との重複はないが、住居東側が耕地造成に伴う削平で失われている。

[平面形・規模] 竖穴部一部欠損により全体形は明確ではないが、径4mほどのほぼ円形と考えられる。

東西方向に約6.1m、南北方向に約6.5mのほぼ円形で、床面積は約29.2㎡である。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

第18号竪穴住居跡

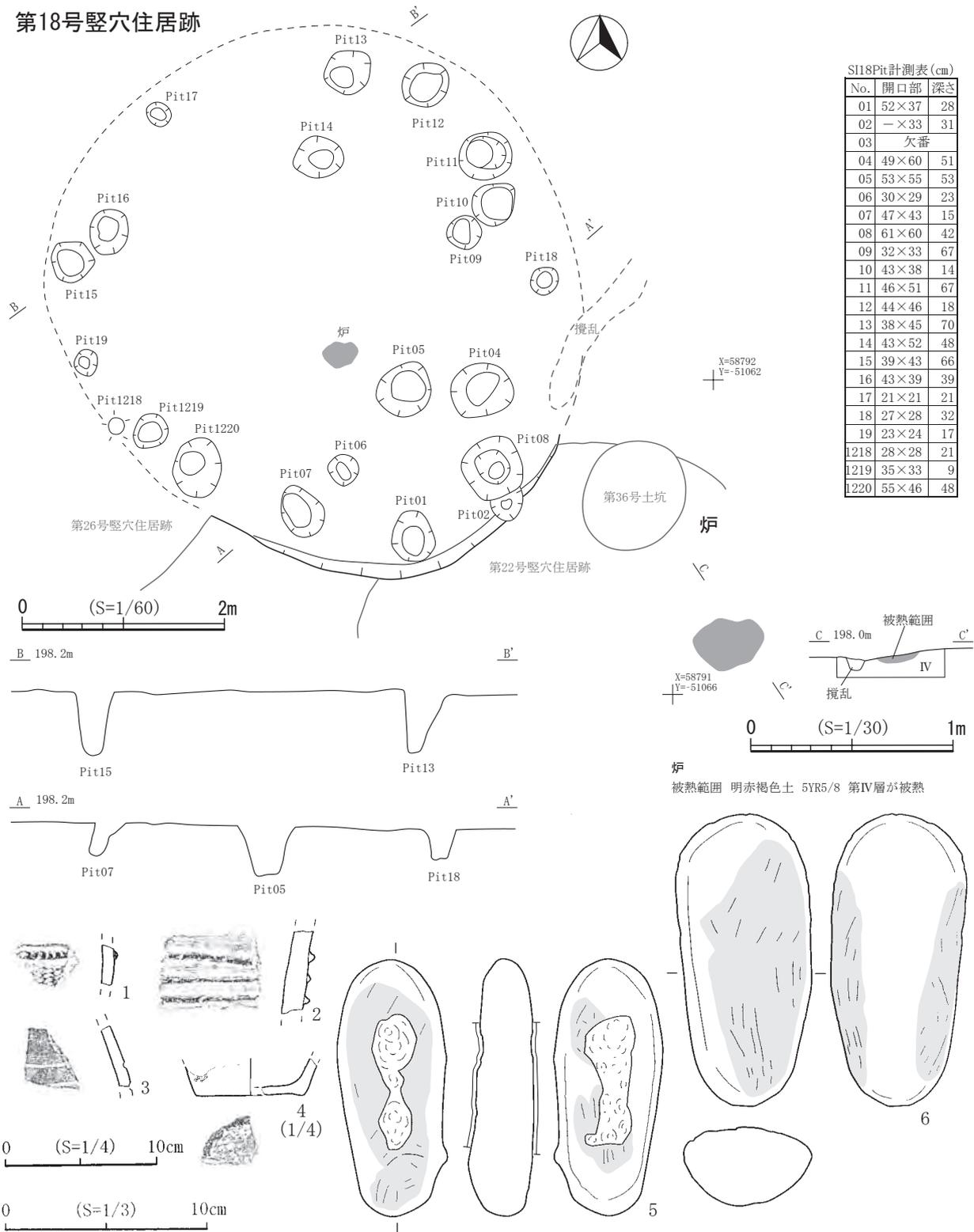


図42 第18号竪穴住居跡・出土遺物

[炉]住居ほぼ中央に炉（石囲炉）を検出した。9個の礫が残存しほぼ円形に組み立てられており、外径は約90×76cm、石囲内部の被熱範囲は約44×40cm、被熱深度は8cmである。炉石重量は全て10kg未満であった。

[柱穴]床面に18基の小ピットを検出した。Pit01・06が主柱穴であると考えられる。

[堆積土]単層の自然堆積層であると思われる。

[出土遺物]土器が150g、石器が2576g出土した。このうち土器は2点、石器は2点を図示した。土器は、柱穴堆積土中から出土した深鉢形の破片である(図41-1・2)。図示した石器は、磨り・敲きの複合痕をもつ礫である(図41-3・4)。磨り石、二次加工剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 炉の堆積土1層から確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミ、クリがわずかに得られた(第3章第2節)。出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第18号竪穴住居跡 (SI18: 図42、写真16・42)

[位置・確認] IW・X-18・19グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で焼土と小ピットプランを確認した。

[重複] 第22号竪穴住居跡と重複し本遺構が古い。また、第26号竪穴住居跡と重複していたと考えられるが、新旧は明確にできなかった。

[平面形・規模] 竪穴部一部欠損により全体形は明確ではないが、径5mほどのほぼ円形と考えられる。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[炉] 住居ほぼ中央に炉(地床炉)を検出した。被熱範囲は約35×28cmの不整形で、深度は3cmで床面(第Ⅳ層)が被熱している。

[柱穴] 床面に21基の小ピットを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit18-07、Pit13-15が対をなす4本柱であった可能性が考えられる。

[堆積土] 竪穴部欠損により不明である。

[出土遺物] 土器が498g、石器が30100g出土した。このうち土器は4点、石器は2点を図示した。土器は、柱穴堆積土中から出土した深鉢形の破片である(図42-1~4)。図42-4の土器底面には網代痕が確認できる。図示した石器内訳は、磨り石、磨り・敲きの複合痕をもつ礫である(図42-5・6) 石核、敲き石、台石、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第19号竪穴住居跡 (SI09: 図43・44、写真17・43)

[位置・確認] IX-19・20グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で黒色の不整形プランを確認した。

[重複] 遺構との重複はないが、住居東側が耕地造成に伴う削平で失われている。

[平面形・規模] 竪穴部一部欠損により全体形は明確ではないが、径6mほどのほぼ円形と考えられる。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面と考えたが、Pit01・03が堆積土上位から掘り込まれているようであり、貼床をしていた可能性がある。

[炉] 住居中央からやや南東寄りに炉(地床炉)を検出した。被熱範囲は約34×30cmのほぼ円形で、下部掘り込みの堆積土第1層が深度は2cmで被熱している。

[柱穴] 床面に16基の小ピットを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit01-03、Pit06-16が対をなす4本柱であった可能性が考えられる。Pit04・05・07には柱痕が確認された。

第19号竖穴住居跡

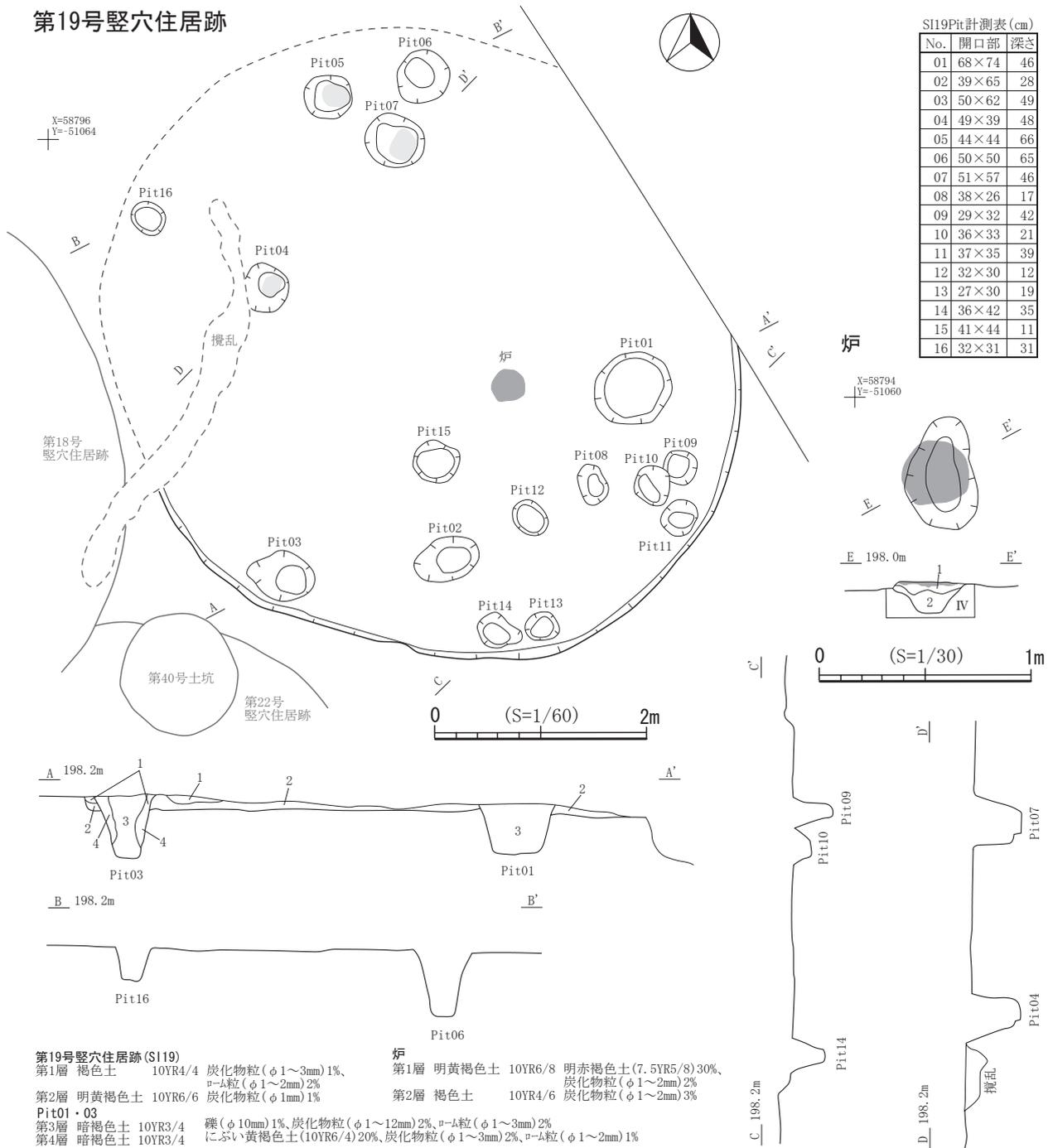


図43 第19号竖穴住居跡

[堆積土] 2層に分層したが、貼床である可能性も考えられる。

[出土遺物] 土器が634 g、石器が3033 g 出土した。このうち土器は5点、石器は2点を図示した。柱穴 (Pit02) 堆積土中から出土した深鉢形は、縄文時代後期初頭に比定される (図44-1)。図44-4・5の底面には網代痕が確認できる。図示した石器内訳は、磨り石、磨り・敲きの複合痕をもつ礫である (図44-6・7)。図44-7は磨り石であるが、黒色付着物が確認できる。敲き石、二次加工剥片も出土したが図示しなかった。

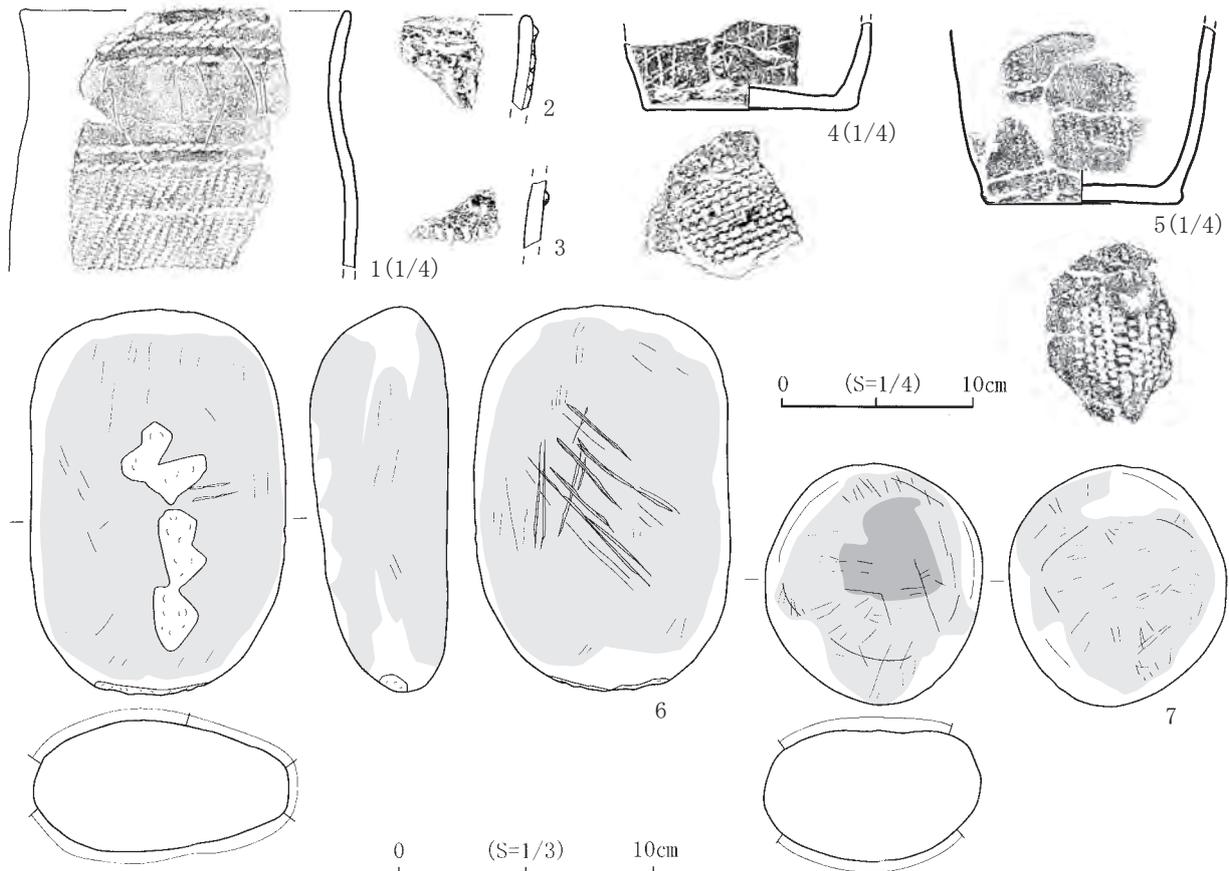


図44 第19号竪穴住居跡出土遺物

[小結] 炉の堆積土1層から確認された炭化種実と思われる試料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった(第3章第2節)。出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第20号竪穴住居跡 (SI20 : 図45、写真17・19・43)

[位置・確認] IT-26・27グリッドに位置し、耕作土(I層)直下で確認した。削平、攪乱により覆土の多くが失われているが、IV層を掘りこんで構築されたものと考えられる。

[平面形・規模] 削平により全形・規模ともに不明である。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

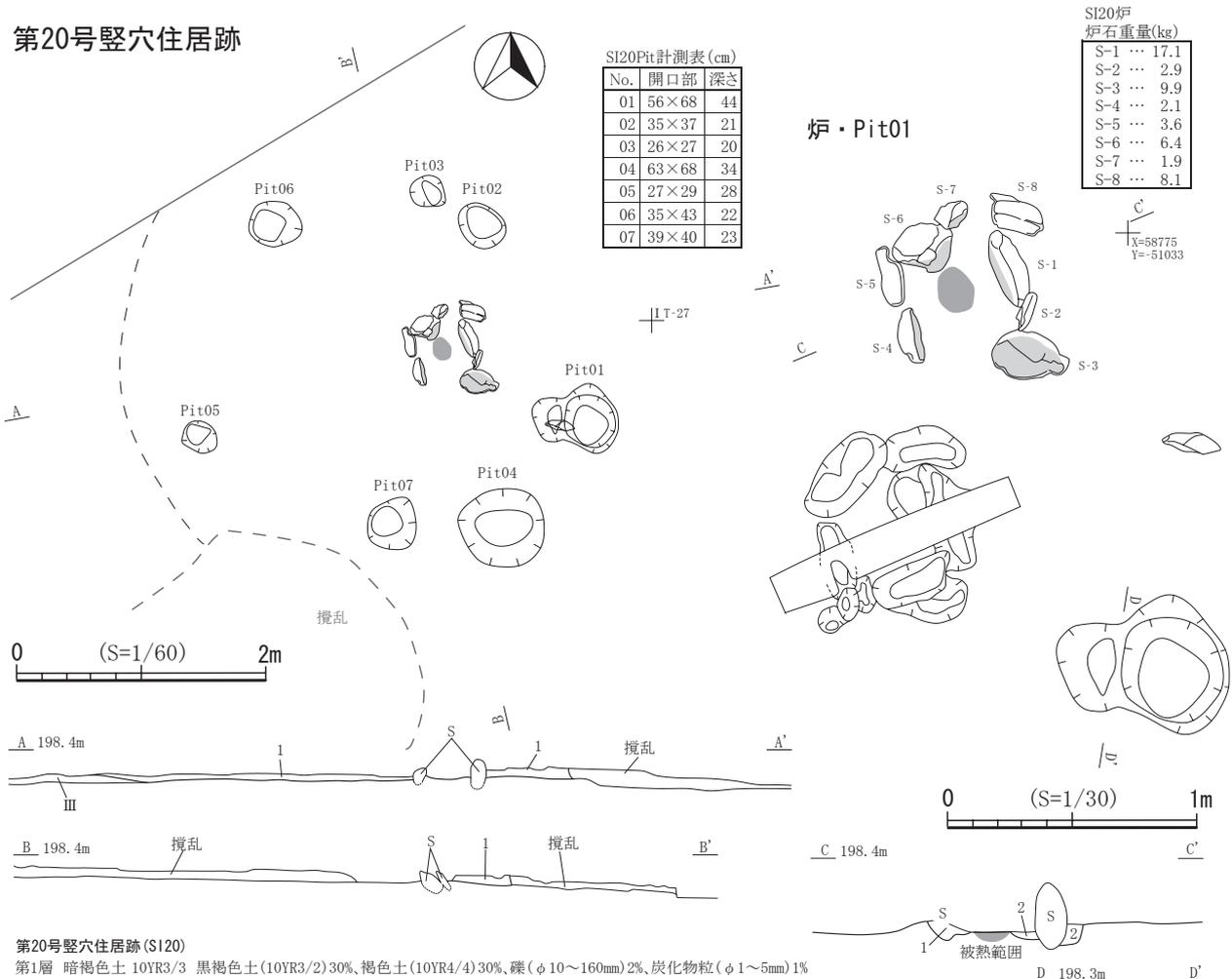
[炉] 炉は石囲炉である。礫を設置する部分が掘り窪められて構築されている。焼土形成の深度は最大で約8cmである。礫は削平により動いた(起こされた)と考えられるものが多く、原位置に留まっている可能性が高いのはS-1とS-2の2点のみである。炉石重量は約17kgのS-1を除き、10kg未満であった。

[付帯施設] Pit01については礫を埋置しており、他の住居跡で見られる配石に類する施設であった可能性がある。

[柱穴] 床面に7基の小ピットを検出した。住居の主軸を東-西とした場合、Pit02-07、Pit06-05が対をなす4本による台形状の配置であった可能性が考えられる。

[堆積土] 炉の周囲でわずかに残存する。

第20号竖穴住居跡



第20号竖穴住居跡 (SI20)

第1層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土(10YR3/2)30%、褐色土(10YR4/4)30%、礫(φ10~160mm)2%、炭化物粒(φ1~5mm)1%

炉

第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10mm)2%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~120mm)60%、炭化物粒(φ1mm)1%
 被熱範囲 褐色土 10YR4/4 第IV層が被熱

Pit01

第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ10~35mm)2%、炭化物粒(φ1~10mm)1%、
 p-4粒(φ1~2mm)1%
 第2層 黒褐色土 10YR2/3 褐色土(10YR4/4)40%、礫(φ10~25mm)2%、
 炭化物粒(φ1~2mm)1%、p-4粒(φ1~2mm)1%

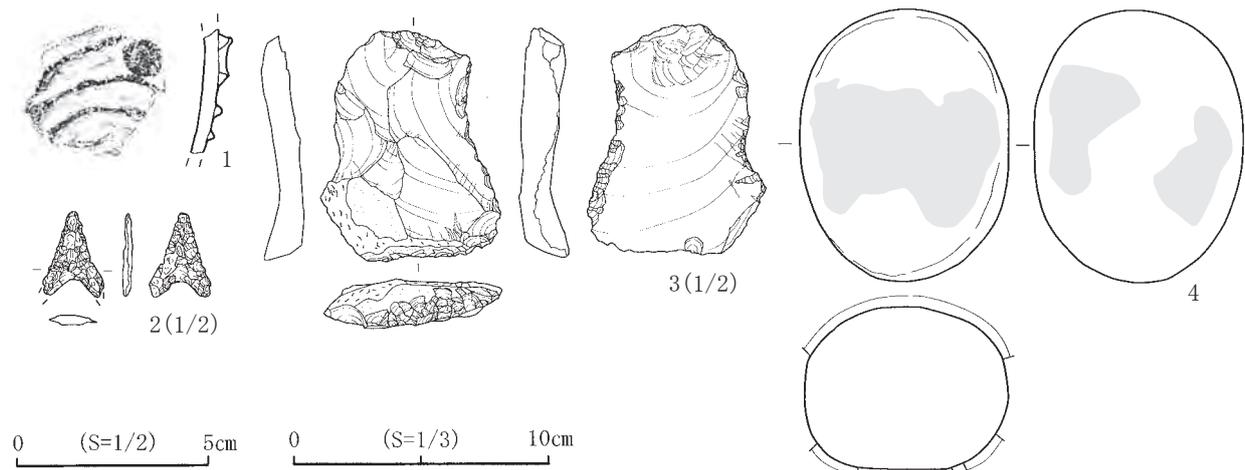


図45 第20号竖穴住居跡・出土遺物

[出土遺物]土器が99g、石器が1002g出土した。このうち土器は1点、石器は3点を図示した。土器は堆積土中から出土した深鉢形破片である(図45-1)。図示した石器内訳は、石鏃、搔器、磨り石である(図45-2~4)。図45-2の石鏃にはアスファルトの付着が確認できる。石核、二次加工剥片、

第21号竖穴住居跡

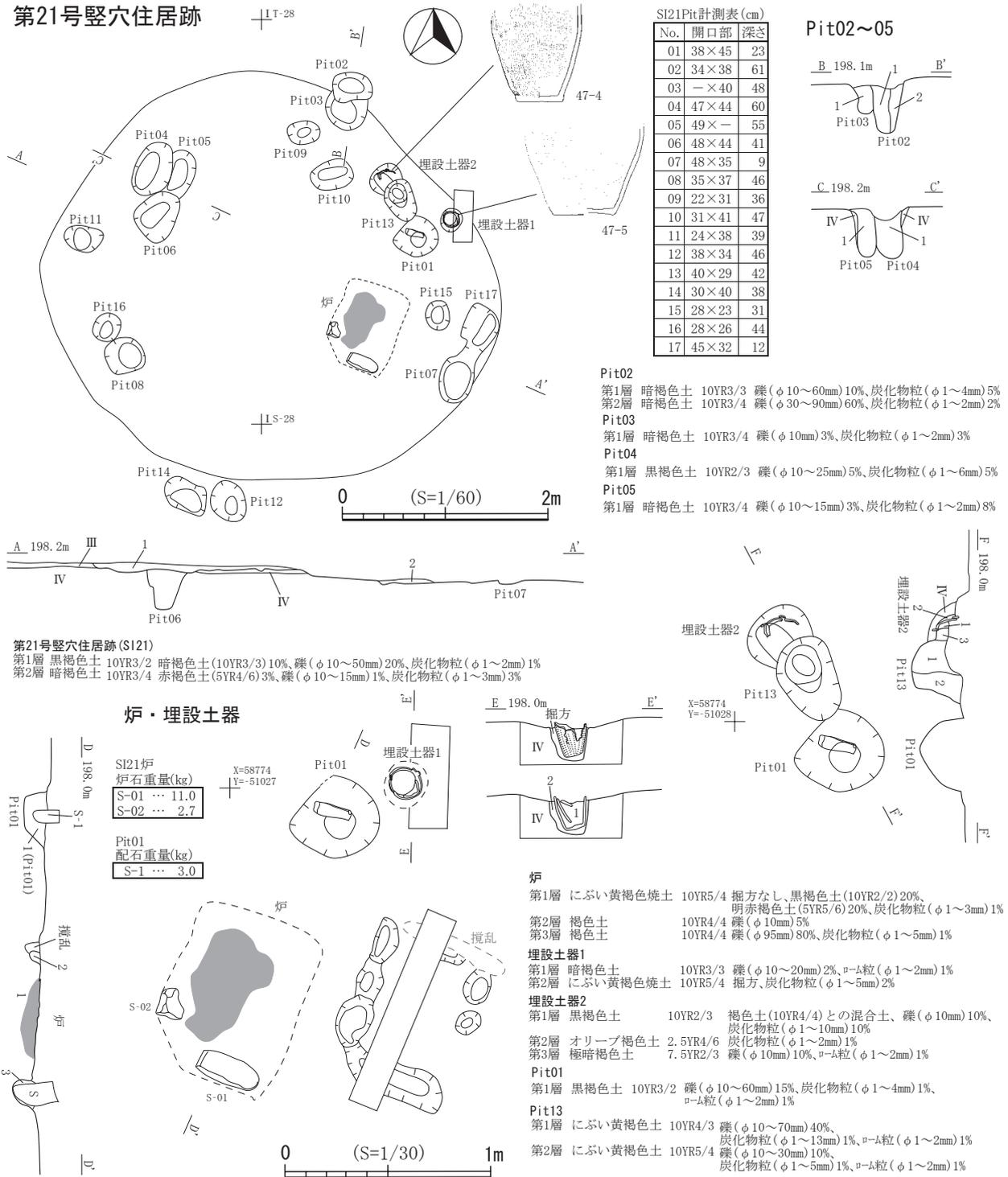


図46 第21号竖穴住居跡

微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

(荒谷)

第21号竖穴住居跡 (SI21 : 図46・47、写真19・43)

[位置・確認] I S-27・28グリッドに位置し、耕作土 (I層) 直下で確認した。削平、攪乱により覆土

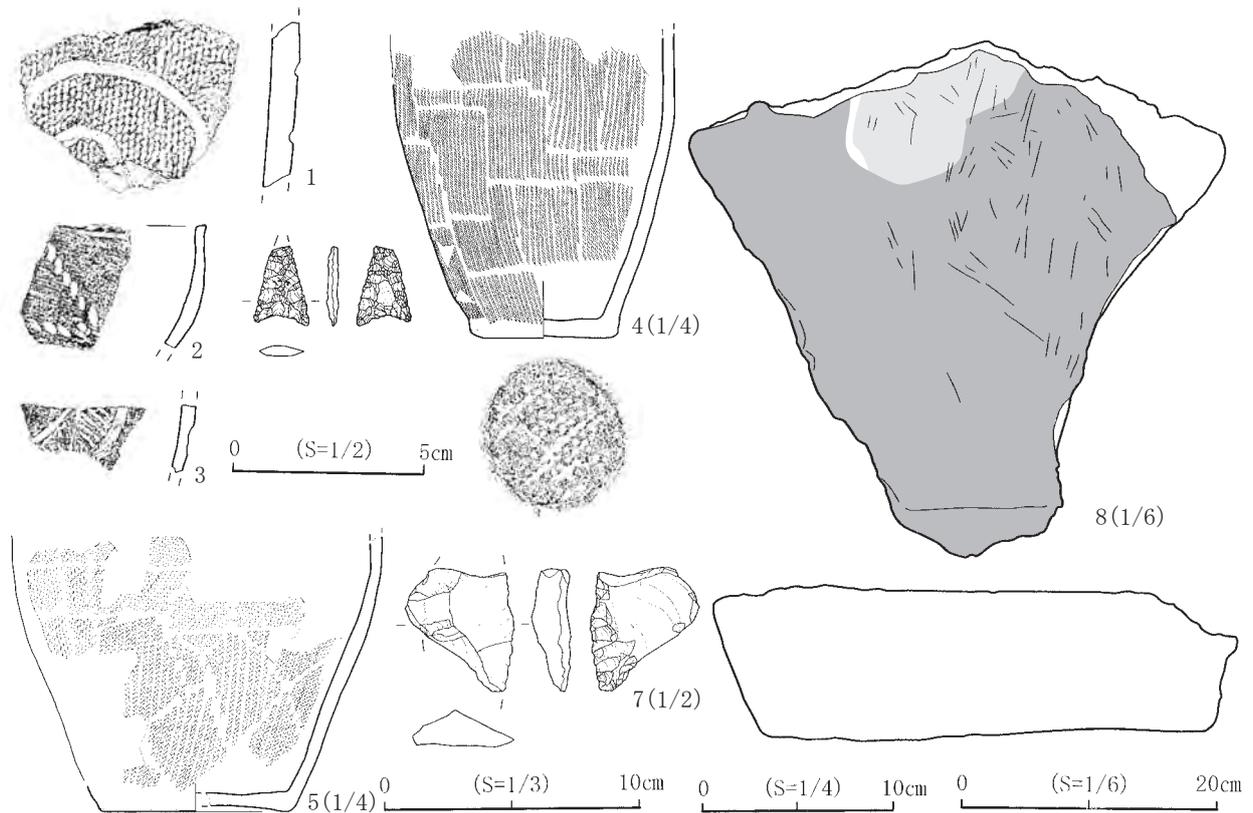


図47 第21号竪穴住居跡出土遺物

の多くが失われているが、IV層を掘りこんで構築されたものと考えられる。

[平面形・規模]削平により全形・規模ともに不明である。

[壁・床面]確認面からの深さ（壁高）は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

[炉]焼土と近接して埋設された礫2点を確認した。この2点以外にも焼土の周囲には礫を埋設したと考えられる掘形を検出したことから、本来は他の住居同様の石囲炉であったと考えられる。焼土形成の深度は最大で約8cmである。

[付帯施設]炉の北側で埋設土器を2基確認した。内、西側の埋設土器2はPit13に切られている。

Pit13が建て替わりに伴う新段階の柱穴とすれば、埋設土器2は旧段階に伴うものと考えられる。

[柱穴]7基確認したが、Pit04については平面形が他に比べてやや大きく、覆土もしまりがなかったことから、攪乱の可能性が高い。また、Pit01については礫が埋設されており、この礫は他の住居跡でみられる配石の一部であった可能性がある。

[堆積土]炉の西側でわずかに残存する。

[出土遺物]土器が1802g、石器が2425g出土した。このうち土器は5点、石器は3点を図示した。埋設土器1は、縄文時代中期末葉（大木10式併行期）に比定される深鉢形である（図47-4）。図47-4の深鉢形底部には網代痕が確認できる。図示した石器内訳は、石鏃、削器、台石である（図47-6～8）。図47-6の石鏃にはアスファルトが付着している。また、図47-8の台石には、広範囲に黒色付着物が確認できる。石核、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結]焼土から確認された炭化種実と思われる試料を同定分析したが、同定可能な種実は得られな

第23号竖穴住居跡

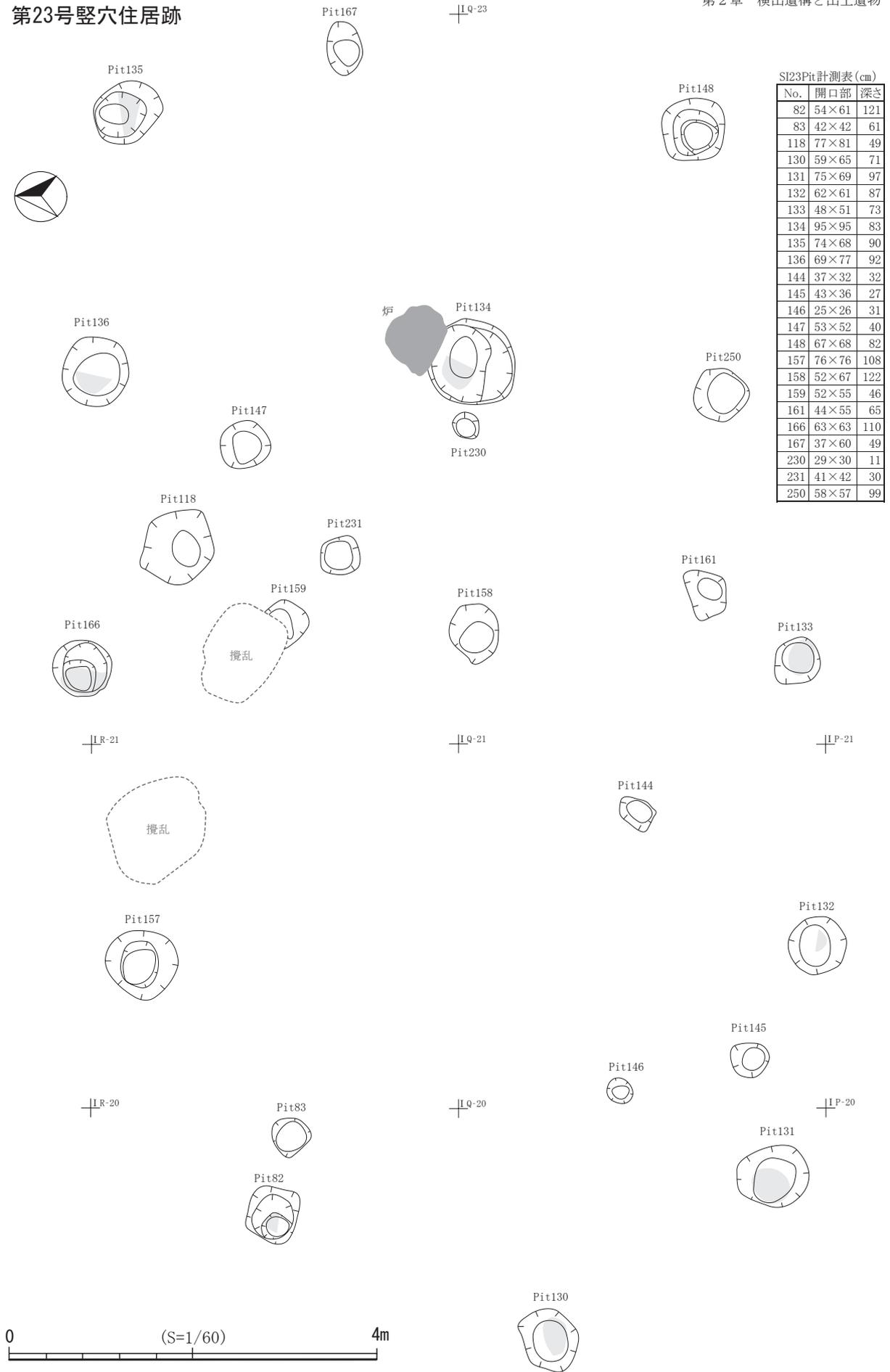


図49 第23号竖穴住居跡 (1)

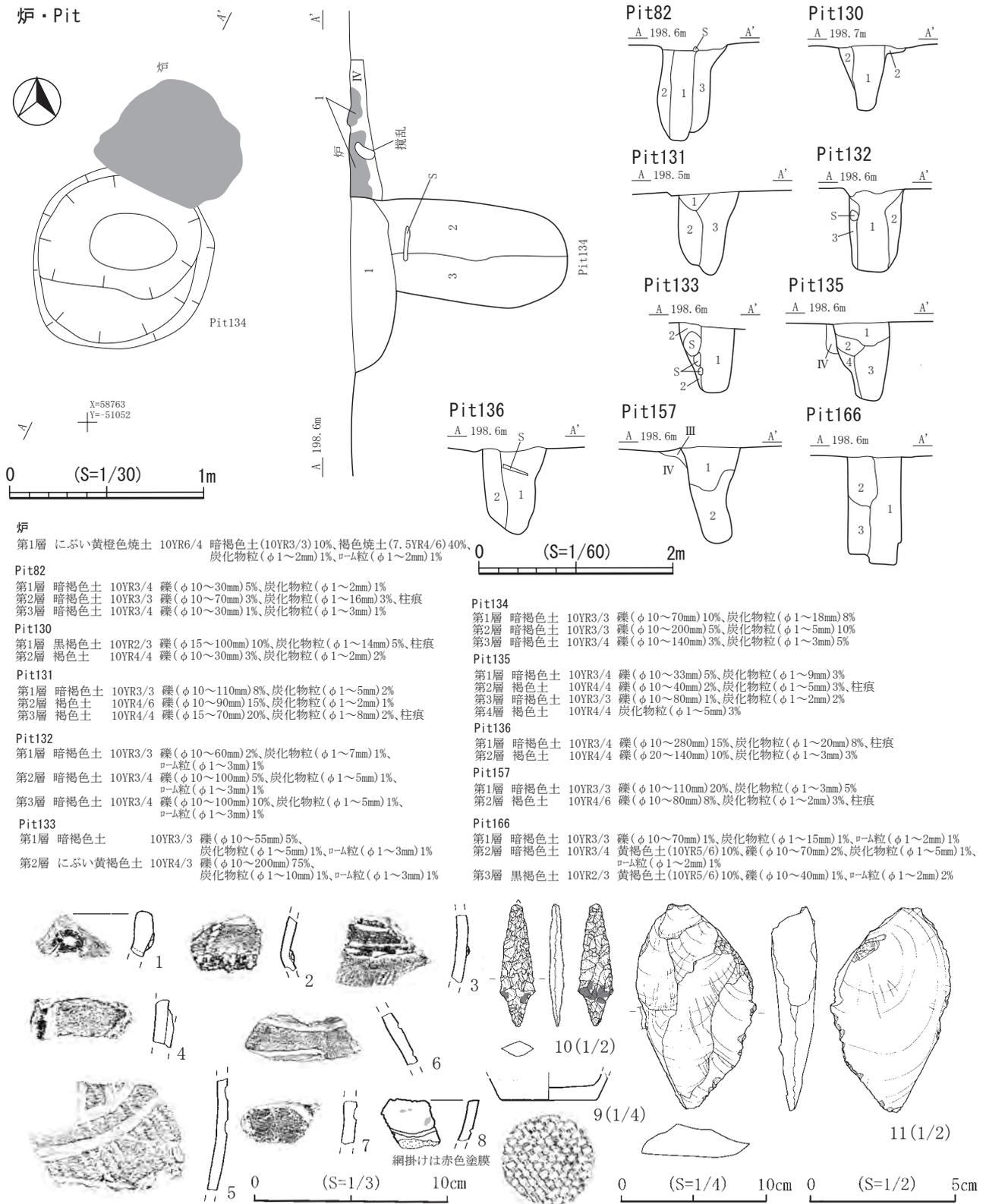


図50 第23号竖穴住居跡(2)・出土遺物

[壁・床面]確認面からの深さ(壁高)は不明である。地山である第IV層の上に貼床をしている。

[炉]確認できなかった。

[柱穴]床面に11基の小ピットを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit03-01、Pit06-07

第24号竖穴住居跡

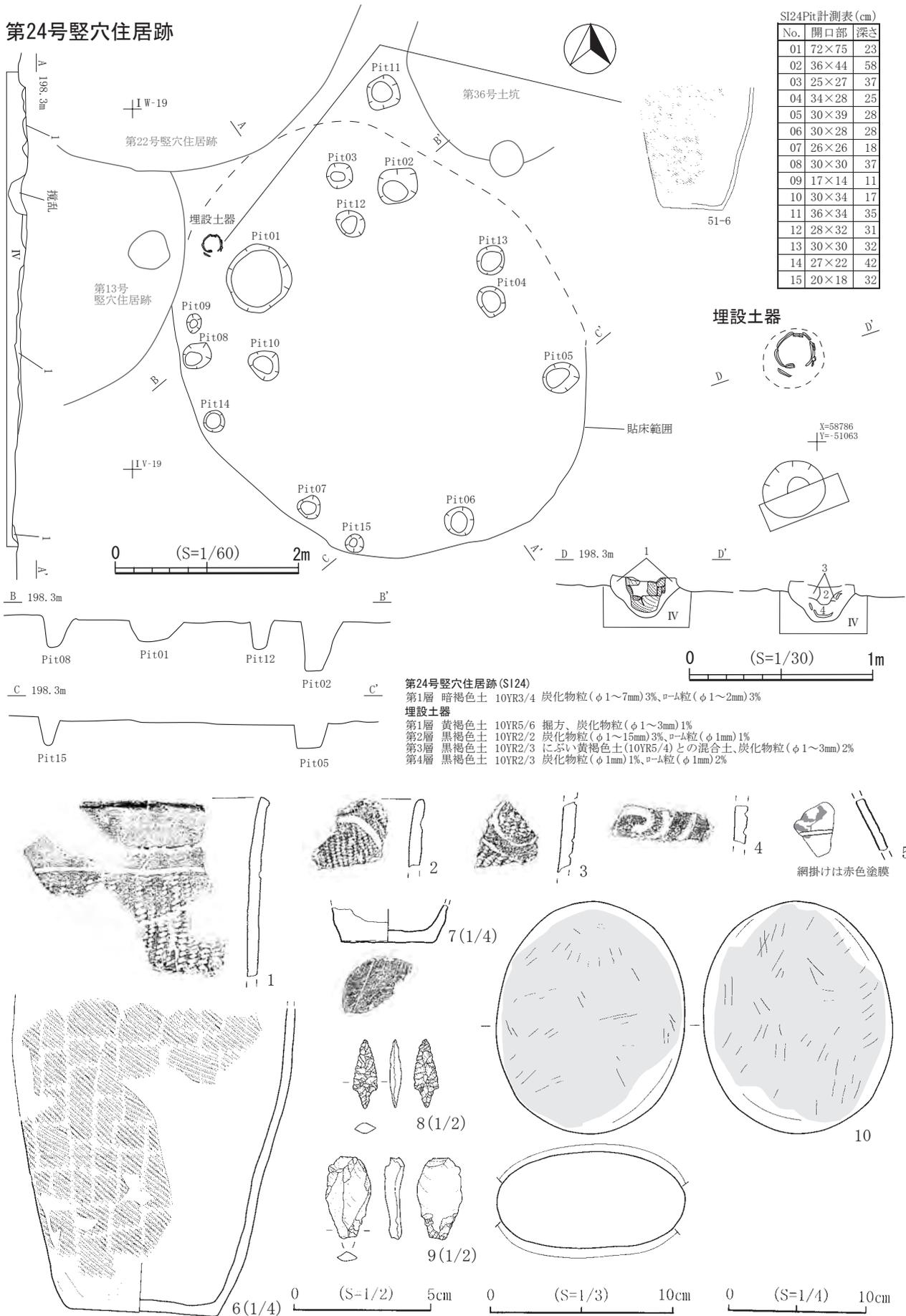


図51 第24号竖穴住居跡・出土遺物

が対をなす4本柱で、台形状の配置であった可能性が考えられる。

[堆積土]単層である。貼床部であった可能性がある。

[出土遺物]土器が529g、石器が753g出土した。このうち土器は2点、石器は2点を図示した。土器は、柱穴堆積土中、貼床から出土した深鉢形の破片である(図48-1・2)。図示した石器内訳は、石錘、磨り・敲きの複合痕をもつ礫である(図48-3・4)。

[小結]出土遺物や年代測定から縄文時代中期末葉から後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第23号竪穴住居跡 (SI23 : 図49・50、写真19・43)

[位置・確認]IP~R-19~22グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で焼土跡小ピットプランを確認した。

[平面形・規模]竪穴部欠損により不明である。

[壁・床面]竪穴部欠損により壁高は不明である。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[炉]SP134と重複して炉(地床炉)を検出した。新旧関係は炉の方が古い。被熱範囲は約70cm程度の不整形で、深度は約10cmで床面(第Ⅳ層)が被熱している。

[柱穴]23基確認した。なお、Pit番号は現場で付したSP番号をそのまま使用する。住居の主軸を東-西とした場合、Pit135-148、Pit136-250、Pit166-133、Pit157-132、Pit182-131が対をなす。深さは浅いものでも70cm台、深いものだと120cmを越える。

[堆積土]竪穴部欠損により不明である。

[出土遺物]土器が1423g、石器が52g出土した。このうち土器は9点、石器は2点を図示した。土器は、柱穴堆積土中から出土した深鉢形の破片が多く(図50-1~9)、無文に沈線が施される縄文時代後期初頭~前葉に比定されるものが多い。図50-8の深鉢形口縁部破片には、赤色付着物が確認できる。図50-9の土器底面には網代痕がつく。図示した石器は、石鏃(図50-10)と微細剥離痕を有する剥片(図50-11)である。

[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭から前葉に帰属する遺構であると考えられる。(荒谷)

第24号竪穴住居跡 (SI24 : 図51、写真19・43)

[位置・確認]IV・W-19・20グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で黒色の不整形プランを確認した。

[重複]第13号竪穴住居跡と重複し本遺構が新しい。また、第22号竪穴住居跡と重複していたと考えられるが、新旧は明確にできなかった。

[平面形・規模]遺構の重複により全体形は明確ではないが、径4.5mほどのほぼ円形の可能性がある。

[壁・床面]確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[炉]確認できなかった。

[付帯施設]埋設土器を床面北西側で確認した(図51-6)。正立状態で埋設している。

[柱穴]床面に14基の小ピットを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit02-08、Pit05-15が対をなす4本柱であった可能性が考えられる。

[堆積土]単層である。貼床部であった可能性もある。

[出土遺物]土器が1205g、石器が1077g出土した。このうち土器は7点、石器は3点を図示した。埋設土器は、粗製の深鉢形(図51-6)で、縄文時代中期末葉~後期初頭に比定される。図51-5の壺

第25号竖穴住居跡

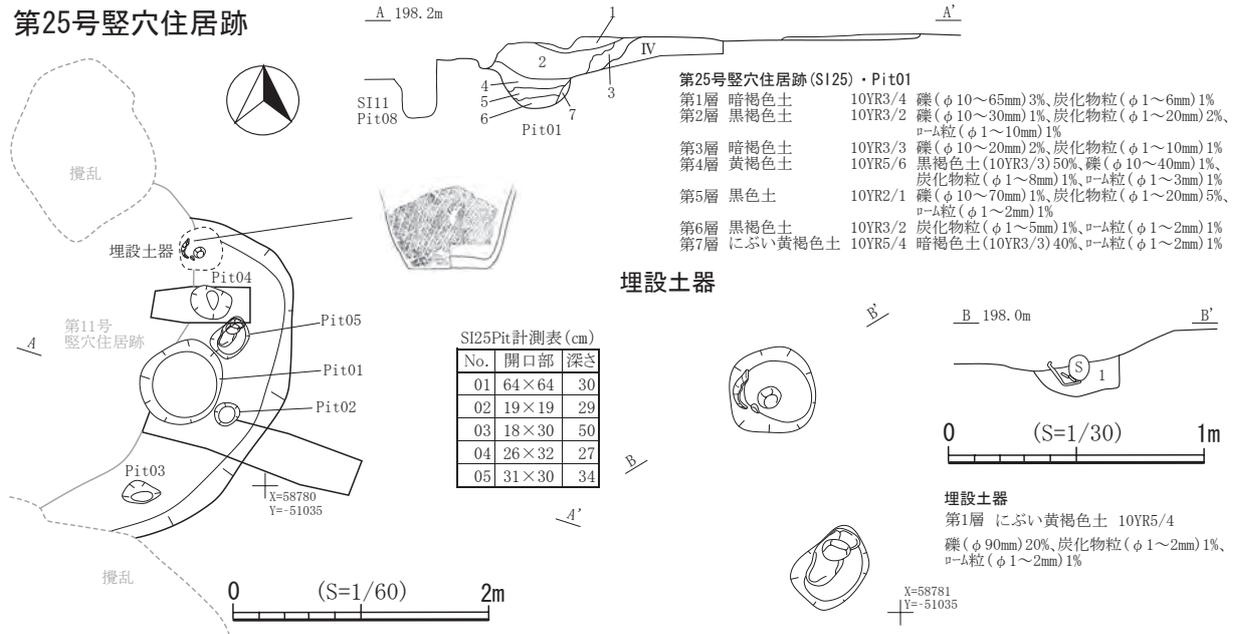


図52 第25号竖穴住居跡

片破片には、赤色付着物が確認できる。図51-6の土器底面は、器面調整された痕跡が確認できる。図示した石器内訳は、石鏃、石錐、磨り石である (図51-8~10)。図51-8の石鏃にはアスファルトが付着している。石核、台石、二次加工剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物から縄文時代中期末葉から後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第25号竖穴住居跡 (SI25 : 図52・53、写真18・19・44)

[位置・確認] IU-26グリッドに位置し、耕作土 (I層) 直下で確認した。IV層を掘りこんで構築されている。

[重複] 第11号竖穴住居跡と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 重複により全形は不明である。

[壁・床面] 確認面からの深さ (壁高) は約10cmである。地山である第IV層を床面としている。

[炉] 第11号竖穴住居跡の炉の掘込部に施された貼床の下で、地山が被熱して形成された焼土 (貼床下焼土範囲) を確認した。これが本住居の炉であった可能性がある。しかし、第11号竖穴住居跡の炉により大部分が失われているため全容は不明である。礫を埋設した掘方等も確認できなかった。焼土形成の深度は最大で約5cmである。

[付帯施設] 炉の北側で埋設土器を確認した。球状の礫が土器の内部に1点と、これとは別に掘方にも1点が埋設されていた。

[柱穴] 5基確認した。いずれも柱痕は確認できなかった。また、第11号竖穴住居跡のPit09・10は本住居に伴う可能性がある。Pit05は礫が2点出土した。埋設されたものかどうかは不明である。

[堆積土] Pit01の堆積土を含む、7層に分層した。壁は残存部分が少ないものの、なだらかに立ち上がると考えられる。2層に分層した。いずれも自然堆積層であると思われる。

[出土遺物] 土器が1150g、石器が3837g出土した。このうち土器は8点、石器は6点を図示した。埋

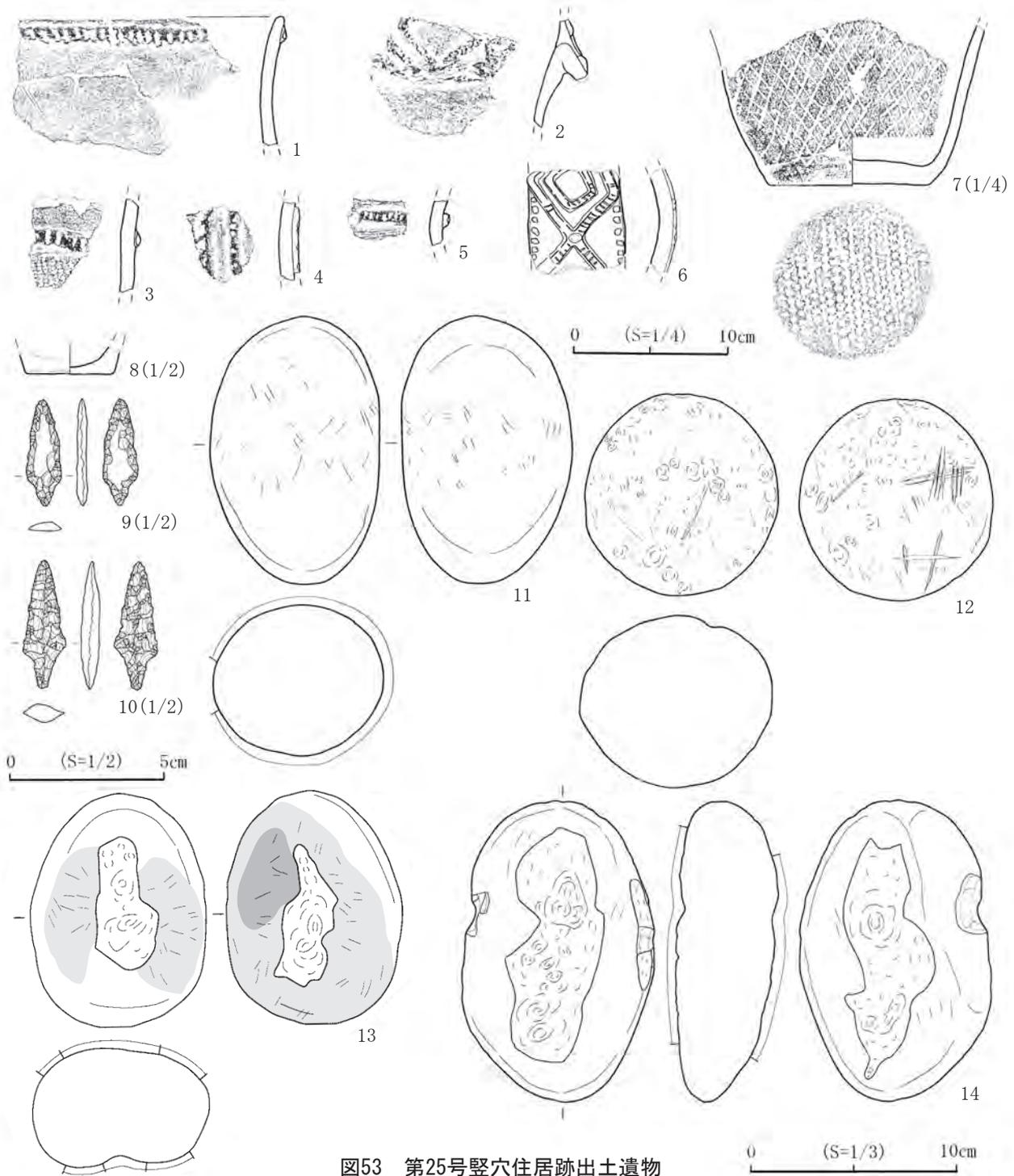


図53 第25号竪穴住居跡出土遺物

設土器は網目状撚糸文が施される深鉢形であり（図53-7）、底面には網代痕が確認できる。図53-6は、把手部と考えられる破片であるが、文様の特徴から縄文時代後期初頭に比定される。図示した石器内訳は、石鏃、磨り石、敲击石、磨り・敲击の複合痕をもつ礫、台石である（図53-9～14）。図53-10の石鏃にはアスファルトが付着している。図53-13の磨り+敲击の複合痕をもつ礫には、黒色付着物が確認できる。二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片も出土したが図示しなかった。

[小結] 出土遺物から後期初頭から前葉に帰属する遺構であると考えられる。

（荒谷）

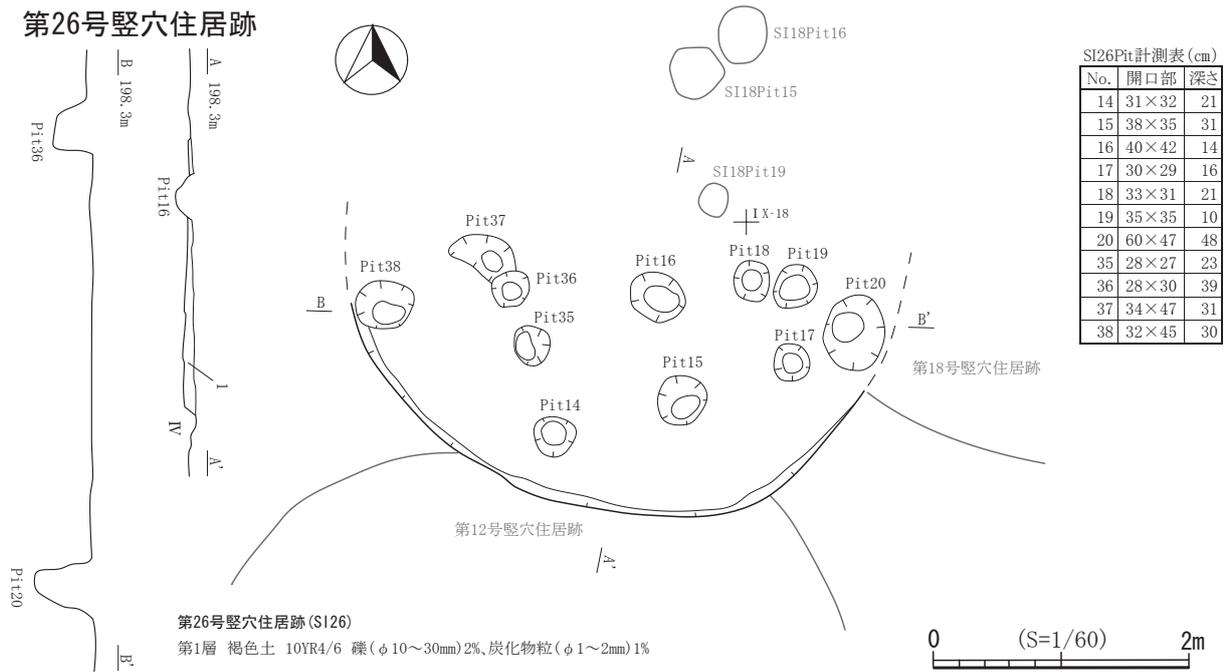


図54 第26号堅穴住居跡

第26号堅穴住居跡 (SI26 : 図54、写真14)

[位置・確認] IW-17・18グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で黒色の不整形プランを確認した。

[重複] 第12号堅穴住居跡と重複し本遺構が新しい。また、第18号堅穴住居跡と重複していたと考えられるが、新旧は明確にできなかった。

[平面形・規模] 堅穴部一部欠損により全体形は明確ではないが、径4.5mほどと考えられる。

[壁・床面] 確認面からの深さ(壁高)は約10cmである。地山である第Ⅳ層を床面としている。

[炉] 確認できなかった。

[柱穴] 床面に14基の小ピットを検出した。支柱穴の配置は不明である。

[堆積土] 単層の自然堆積層であると思われる。

[出土遺物] 確認されなかった。

[小結] 出土遺物が無く遺構の帰属時期は不明である。

表 1 竪穴住居跡属性

遺構名	計測値(cm)			グリッド	遺物出土状況(重量:g)			図版		写真		重複関係	時期(縄文時代)	備考 (炉・付帯施設など)
	開口部	底面部	深さ		土器	石器	その他	遺構	遺物	遺構	遺物			
SI01	1422×1231	1395×1199	35	II D~G-26~29	30251	58341	241	7~10	11~16	3~5	35~37	SK46~48>	中期末葉~後期初頭	炉3、焼土4
SI02	473×441	4419×4164	20	II H・I-27・28	11031	41166		17~18	19~20	6~7	38・39		中期末葉~後期初頭	炉、配石、埋設土器2
SI03	651×592	638×580	10	II B・C-24・25	4572	3799		21	22	7	39		中期末葉~後期初頭	炉、埋設土器
SI04	(1390×1321)	-	-	II A~C-14~17	2393	20983		23~24	24	8・9	40	>SK35、SN01	後期初頭	炉、焼土
SI05	(514×457)	-	10	I X-16・17	1403	1604		25	26	8・9	40		中期末葉	炉、埋設土器
SI06	(593×-)	(572×-)	10	I U・V-15・16	3525	14446		27	28	9	40		中期末葉~後期初頭	炉、埋設土器2
SI07	(357×-)	(346×-)	10	I V-13・14	39	-		29	29	10・11	40		後期初頭	炉、配石
SI08A	-	-	10	I T・U-13・14				30	31	11	41	SI08A>B>C	後期初頭~前葉以降	炉
SI08B	-	-	10	I T・U-13・14	5769	1808		30	31	10・11	41	SI08A>B>C	後期初頭~前葉	炉
SI08C	462×408	432×394	10	I T・U-13・14				30	31	10・11	41	SI08A>B>C	中期末葉	炉、配石
SI09	-	-	10	I V-21・22	87	3		32	32	12・13	40	>SP90、? SK29	後期初頭~前葉	炉、配石?
SI10	(501×-)	(473×-)	10	I X-26・27	4117	659		33	34	12・13	41		後期初頭	炉
SI11	-	-	10	I U・V-25	1230	9491		35	36	13・18	41・42	>SI25	後期初頭	炉
SI12	593×516	578×489	10	I V・W-17・18	590	185		37	37	14・15	40	SI26>SI13、SR03	中期末葉~後期初頭	炉?
SI13	(355×-)	-	10	I U-18・19	945	15537		38	38	14・15	42		後期初頭	炉
SI14	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-		-	-
SI15・16	(1043×-)	(1008×-)	10	I V・W-23~25	931	320		39・40	40	15	42		後期初頭	炉5
SI17	(388×376)	-	10	I V・W-21	150	2576		41	41	16・19	42		後期初頭	炉
SI18	(570×507)	-	10	I W・X-18・19	498	30100		42	42	16	42	>SI22、? SI26	後期初頭	炉
SI19	(640×521)	-	10	I X-19・20	634	3033		43	44	17	43		後期初頭	炉
SI20	-	-	10	I T-26・27	99	1002		45	45	17・19	43		後期初頭	炉、配石?
SI21	-	(418×390)	10	I S-27・28	1802	2425		46	47	19	43		中期末葉~後期初頭	炉、埋設土器2
SI22	-	(424×401)	10	I W-19	529	753		48	48	18	43	>SI18	中期末葉~後期初頭	
SI23	-	-	-	I P~R-19~22	1423	52		49・50	50	19	43		後期初頭~前葉	炉
SI24	-	(452×-)	10	I V・W-19・20	1205	1077		51	51	18・19	43	>SI13	中期末葉~後期初頭	埋設土器
SI25	-	-	10	I U-26	1150	3837		52	53	18・19	44	SI11>	後期初頭	炉?埋設土器
SI26	-	-	10	I W-17・18	-	-		54	-	14	-	>SI12	不明	

第2節 土坑

土坑は46基検出した。SK03と09は土坑として精査したが、近現代の遺物が出土したため攪乱扱いとし欠番とした。また、SX02・05、第1号竪穴住居跡の土坑1・2・3として精査したものは、整理段階で土坑として扱うこととし、以下のとおり番号を変更した。なお、記述に関しては、「検出状況（位置・確認）」「重複」「規模・形状」「堆積状況」「出土遺物」「小結（分析結果・時期・その他の特記事項等）」の順に記載する。

（遺構番号の変更）SX02→第44号土坑 SX05→第45号土坑

SI01土坑1→第46号土坑 同土坑2→第47号土坑 同土坑3→第48号土坑

第1号土坑（SK01：図55、写真20）

[位置・確認] II I-25グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

[形状・規模] トレンチにより全体形は不明であるが平面形はほぼ円形であると考えられる。規模は開口部が150cm程度、底面で100cm程度、深さは55cmである。壁は底面から緩く外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 堆積土は3層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 堆積土から石核が1点（4179g）出土した。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第2号土坑（SK02：図55、写真20）

[位置・確認] II K-28グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が95×90cm、底面が105×97cm、深さは41cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南東寄りに小ピット状の落ち込みがある。

[堆積土] 5層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第4号土坑（SK04：図55、写真20）

[位置・確認] II N-23グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が119×114cm、底面が65×62cm、深さは32cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第5号土坑（SK05：図55、写真20）

[位置・確認] II P-22グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部が148×137cm、底面が202×192cm、深さは90cmで

ある。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 堆積土から土器片(34g)が出土した。

[小結] 縄文時代の遺構であると考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

第6号土坑 (SK06: 図55・62、写真21・44)

[位置・確認] II P-23グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が129×124cm、底面が158×155cm、深さは76cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層され、自然堆積の様相を示し、第3層は壁の崩落による堆積であると考えられる。

[出土遺物] 遺物は、堆積土第5層上面西壁際から縄文時代晩期前葉～中葉に比定される深鉢形の土器が1点(555g)出土した(図62-1)。外面に炭化物が付着している。

[小結] 出土遺物から縄文時代晩期前葉～中葉にかけての遺構であると考えられる。

第7号土坑 (SK07: 図55・62、写真21・44・45)

[位置・確認] II O-25グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部が85×78cm、底面が190×184cm、深さは101cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物は、土器が6689g、石器が3077g出土した。土器は、ほぼ完全形のものが9点(図62-2～10)、堆積土第5層上面に壁際を半周するような形で並べられるような状態で出土した(図55)。2～4は縄文時代晩期前葉の大洞B2式期に比定され、5・6は大洞B～BC式期、7・8は縄文時代晩期中葉の大洞C式に比定されるものである。9・10は粗製の深鉢形で、10は縄文時代晩期前葉、9は晩期中葉～後葉に比定される。2は内面、3・6は外面、4・5・7・10は内外面にそれぞれ炭化物が付着している。石器は堆積土から磨石と台石(図62-11)がそれぞれ1点出土した。

[小結] 堆積土第5層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、 $2,948 \pm 21$ (暦年較正用yrBP)との値が得られた(第3章第1節)。また、土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、9(P-1)は $2,850 \pm 22$ 、7(P-3)は $3,058 \pm 23$ 、2(P-7)は $3,140 \pm 22$ 、10(P-8)は $2,932 \pm 21$ 、3(P-9)は $3,100 \pm 20$ (いずれも暦年較正用yrBP)との値が得られた(第3章第3節)。同じく、土器に付着した炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析を行ったところ、7・9・10はC3植物、2はC3植物・草食動物付近、3はC3植物付近の窒素安定同位体比がやや高い位置にプロットされた(第3章第3節-図1から引用)。なお、5(P-5)の土器内土壌から確認された炭化種実と思われる試料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった(第3章第2節)。出土遺物や年代測定から縄文時代晩期前葉～中葉に帰属する遺構であると考えられる。土器の配置状況から使用された時期が複数回に分かれる可能性がある。

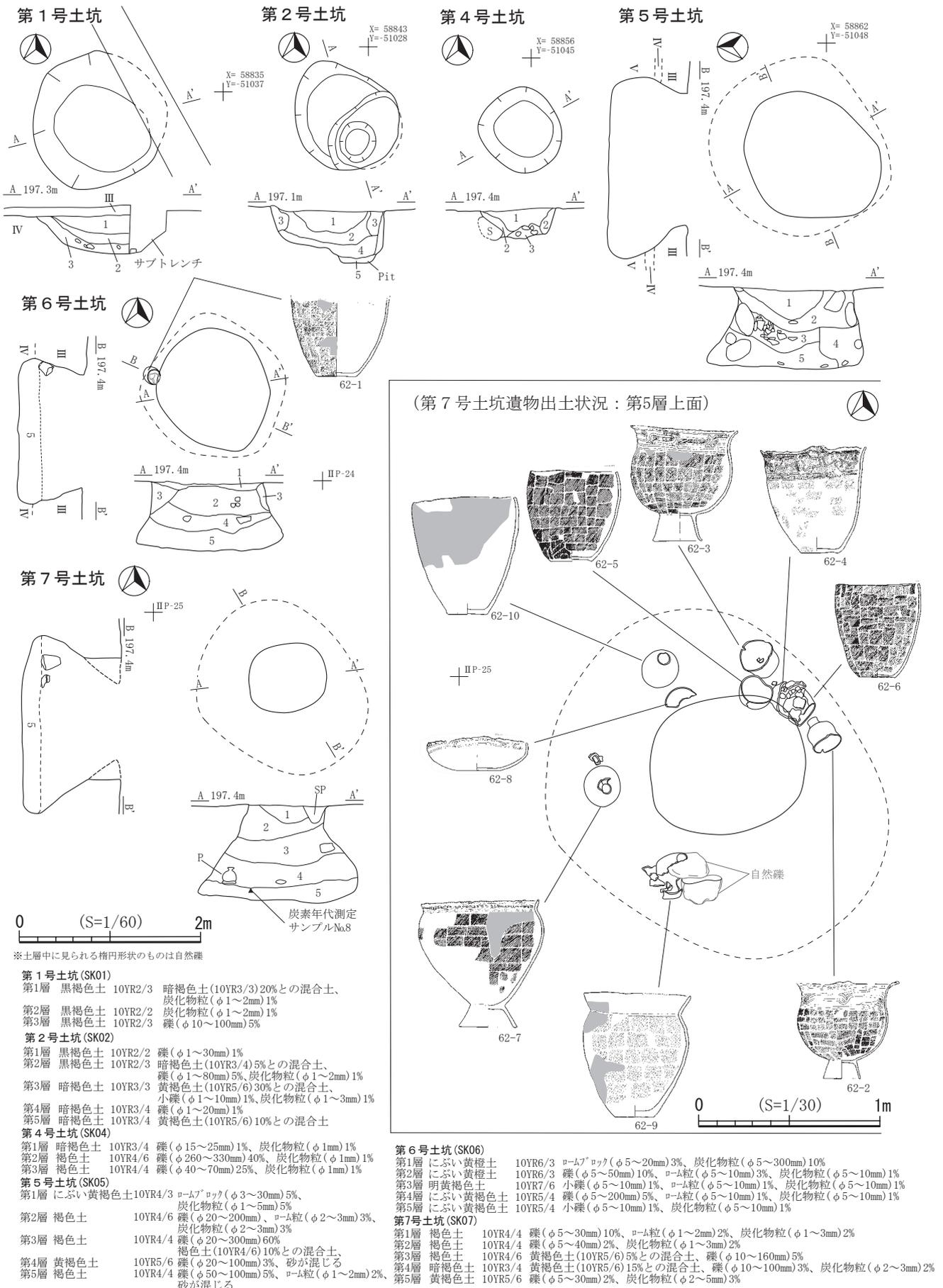


図55 土坑(1)

第8号土坑 (SK08 : 図56・62・63、写真22・45)

[位置・確認] II P-26グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が116×106cm、底面が145×130cm、深さは83cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物は、土器が2750g、石器が1709g出土した。土器は、ほぼ完形のもので7点(図62-12~14、図63-1~4)、堆積土第4層上面に壁際を半周するような形で並べられるような状態で出土した(図56)。図62-12~13、図63-1・2は縄文時代晩期前葉の大洞B2式期に比定され、図63-3・4は粗製の深鉢形で縄文時代晩期前葉~中葉に比定される。図62-12~13、図63-1・2には内・外面、図63-3・4には外面にそれぞれ炭化物が付着している。石器は堆積土から磨石2点と磨り+敲き石1点のうちそれぞれ1点を図示した(図63-5・6)。

[小結] 図62-13の土器内土壌から確認された炭化種実と思われる試料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった(第3章第2節)。出土遺物から縄文時代晩期前葉~中葉に帰属する遺構であると考えられる。

第10号土坑 (SK10 : 図56、写真22)

[位置・確認] II Q-21グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が127×110cm、底面が98×70cm、深さは25cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第11号土坑 (SK11 : 図56、写真23)

[位置・確認] II P-18グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が124×117cm、底面が128×125cm、深さは112cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物は出土はなかった。

[小結] 底面付近から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 $2,725 \pm 20$ (暦年較正用 yrBP) との値が得られた(第3章第1節)。出土遺物はなかったが、年代測定の結果から縄文時代晩期中葉頃の遺構であると考えられる。

第12号土坑 (SK12 : 図56・63、写真23・45)

[位置・確認] II P-20グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が102×100cm、底面が90×82cm、深さは103cmである。壁の断面形は袋状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、やや丸みを帯びている。

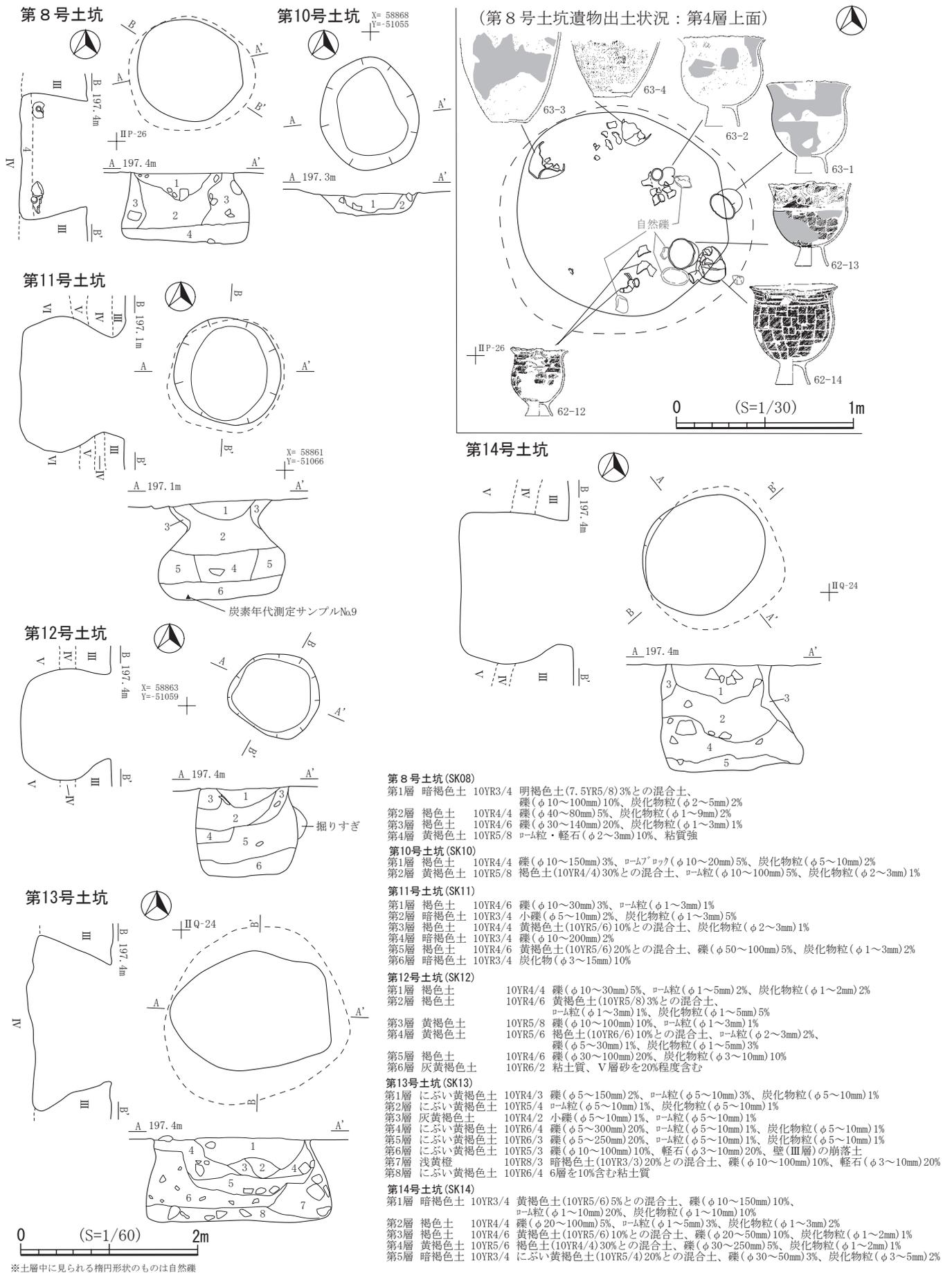


図56 土坑(2)

[堆積土] 6層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 堆積土から石器が出土(336g)した。微細剥離痕を有する剥片1点(図63-7)、敲石1点である。

[小結] 縄文時代の遺構であると考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

第13号土坑 (SK13 : 図56、写真23)

[位置・確認] II P-24グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は開口部が179×132cm、底面が205×200cm、深さは96cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、部分的に凹凸がある。

[堆積土] 8層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第14号土坑 (SK14 : 図56・63、写真23・45)

[位置・確認] II Q-23グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が135×132cm、底面が160×158cm、深さは121cmである。壁の断面形は壁の崩落により形状が崩れているが、元々はフラスコ状を呈していたものと推察される。底面はほぼ平坦であるが、部分的に凹凸がある。

[堆積土] 5層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 堆積土から石器が出土(83g)した。石核1点(図63-8)、敲石1点である。

[小結] 縄文時代の遺構であると考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

第15号土坑 (SK15 : 図57、写真24)

[位置・確認] II P-21グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が160×155cm、底面が145×140cm、深さは105cmである。壁の断面形は壁の崩落により形状が崩れているが、元々はフラスコ状を呈していたものと推察される。底面はほぼ平坦であるが、部分的に凹凸がある。

[堆積土] 5層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

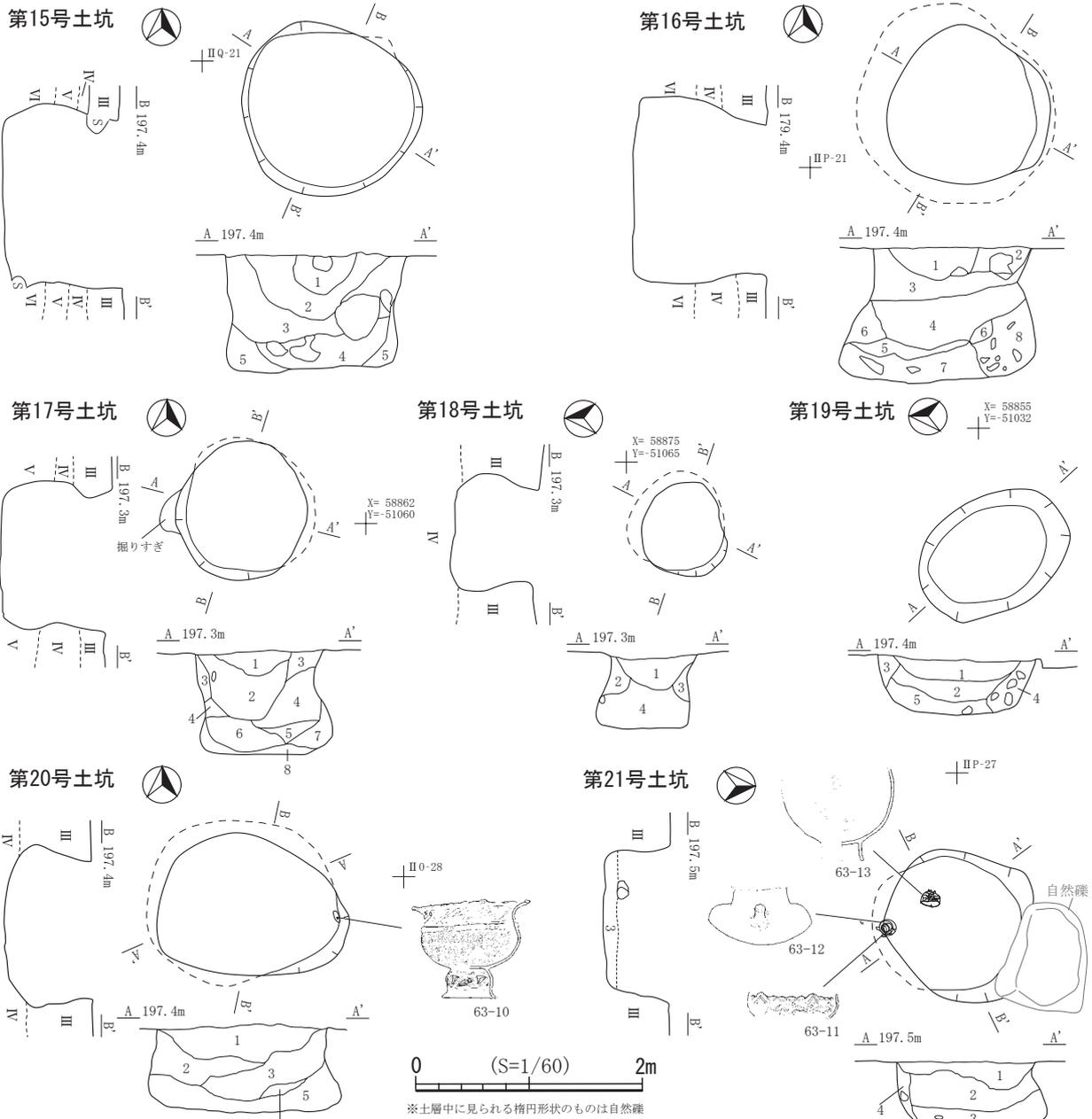
第16号土坑 (SK16 : 図57・63、写真24・45)

[位置・確認] II P-21グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が139×135cm、底面が175×173cm、深さは118cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 堆積土から石器が出土(8g)した。微細剥離痕を有する剥片1点(図63-9)である。



第15号土坑 (SK15)
 第1層 におい黄褐色土 10YR5/3 礫(φ5~150mm)15%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第2層 におい黄褐色土 10YR6/4 礫(φ5~150mm)7%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第3層 明黄褐色土 10YR6/8 礫(φ5~450mm)30%、炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第4層 黄褐色土 10YR5/8 礫(φ5~300mm)20%、炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第5層 におい黄褐色土 10YR5/4 小礫(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%

第16号土坑 (SK16)
 第1層 褐色土 10YR4/6 礫(φ5~100mm)20%、 μ -A粒(φ5~10mm)3%、炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第2層 黄褐色土 10YR5/8 礫(φ5~300mm)50%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第3層 におい黄褐色土 10YR5/3 礫(φ5~150mm)10%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第4層 におい黄褐色土 10YR5/3 礫(φ5~100mm)5%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%、やや粘性あり
 第5層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ5~50mm)5%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%、やや砂質
 第6層 におい黄褐色土 10YR6/3 礫(φ5~50mm)5%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%、粘性あり
 第7層 褐色土 10YR4/4 礫(φ5~300mm)10%、 μ -A粒(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ5~10mm)1%、粘性あり
 第8層 におい黄褐色土 10YR5/3 礫(φ15~200mm)20%、砂質

第17号土坑 (SK17)
 第1層 褐色土 10YR4/4 小礫(φ3~5mm)2%、 μ -A粒(φ3~10mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ5~80mm)5%、 μ -A粒(φ3~10mm)5%、炭化物粒(φ1~3mm)2%
 第3層 褐色土 10YR4/6 黄褐色土(10YR5/6)10%との混合土、礫(φ10~40mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)2%
 第4層 褐色土 10YR4/4 礫(φ5~50mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)2%
 第5層 褐色土 10YR4/6 礫(φ10~15mm)1%、軽石(φ5~100mm)5%
 第6層 褐色土 10YR4/4 小礫(φ3~10mm)3%、 μ -A粒(φ5~10mm)5%、軽石(φ100mm)3%
 第7層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒(φ1~3mm)3%、粘土質
 第8層 褐色土 10YR4/4 礫(φ30~40mm)1%、炭化物粒(φ3~5mm)3%、粘土質と砂質の混合土

第18号土坑 (SK18)
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土(10YR5/6)10%との混合土、小礫(φ2~10mm)3%、炭化物粒(φ1~3mm)3%
 第2層 におい黄褐色土 10YR5/4 暗褐色土(10YR3/4)20%との混合土、礫(φ3~20mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第3層 褐色土 10YR4/6 μ -A粒(φ1~10mm)3%、炭化物粒(φ1~3mm)3%
 第4層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~80mm)10%、 μ -A粒(φ1~10mm)3%、炭化物粒(φ1~5mm)5%

第19号土坑 (SK19)
 第1層 褐色土 10YR4/4 μ -A粒(φ1~2mm)5%、炭化物粒(φ1~2mm)1%、軽石(φ5~15mm)2%
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ5~15mm)2%、 μ -A粒(φ1~3mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第3層 黄褐色土 10YR5/8 μ -A粒(φ1~3mm)5%
 第4層 黄褐色土 10YR5/8 礫(φ20~150mm)20%、 μ -A粒(φ1~3mm)2%
 第5層 黄褐色土 10YR5/8 炭化物粒(φ1~2mm)1%、軽石(φ5~10mm)2%

第20号土坑 (SK20)
 第1層 明黄褐色土 10YR6/6 黒褐色土(10YR3/2)30%との混合土、 μ -A粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ5~30mm)5%、 μ -A粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%、しまりなし
 第3層 黄褐色土 10YR5/6 μ -A粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%、しまりなし
 第4層 灰黄褐色土 10YR4/2 μ -A粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第5層 におい黄褐色土 10YR4/3 μ -A粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%、しまりなし

第21号土坑 (SK21)
 第1層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/3)20%、黄褐色土(10YR5/6)5%との混合土、礫(φ5~30mm)2%、 μ -A粒(φ1~5mm)3%、炭化物粒(φ1~3mm)3%
 第2層 褐色土 10YR4/4 黄褐色土(10YR5/6)5%との混合土、礫(φ5~30mm)5%、 μ -A粒(φ1~5mm)2%、炭化物粒(φ1~3mm)1%
 第3層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ10~60mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第4層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~40mm)3%

図57 土坑(3)

[小結]縄文時代の遺構であると考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

第17号土坑 (SK17 : 図57、写真24)

[位置・確認] II P-19グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が122×120cm、底面が118×115cm、深さは90cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]遺物の出土はなかった。

[小結]遺構の帰属時期は不明である。

第18号土坑 (SK18 : 図57、写真24)

[位置・確認] II S-18グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が78×70cm、底面が90×85cm、深さは65cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]遺物の出土はなかった。

[小結]遺構の帰属時期は不明である。

第19号土坑 (SK19 : 図57、写真25)

[位置・確認] II N-26グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形は楕円形である。規模は開口部が128×107cm、底面が101×70cm、深さは45cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]遺物の出土はなかった。

[小結]遺構の帰属時期は不明である。

第20号土坑 (SK20 : 図57・63、写真25・45)

[位置・確認] II N-27グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形は楕円形である。規模は開口部が158×125cm、底面が145×120cm、深さは72cmである。壁の断面形は壁の崩落により形状が崩れているが、元々はフラスコ状を呈していたものと推察される。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が403g、石器が564g出土した。土器は、縄文時代晩期前葉（大洞B2式期）に比定されるほぼ完形の台付鉢1点（図63-10）が底面の東壁際から出土した（図57）。10の内外面には炭化物が付着している。石器は堆積土から出土した磨石2点である。

[小結]出土遺物から縄文時代晩期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第21号土坑（SK21：図57・63、写真25・26・45）

[位置・確認] II 0・P-27グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が131×120cm、底面が132×115cm、深さは56cmである。壁の断面形は壁の崩落により形状が崩れているが、元々はフラスコ状を呈していたものと推察される。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 土器が790g、石器が14g出土した。土器は、縄文時代晩期前葉に比定される台付鉢1点（図63-13）と、大洞B2式期に比定される浅鉢形（図63-11）と注口土器（図63-12）が堆積土第3層上面の南壁寄りから出土した（図57）。石器は堆積土から出土した二次加工剥片1点（図63-14）である。

[小結] 出土遺物から縄文時代晩期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第22号土坑（SK22：図58・63、写真26・45）

[位置・確認] II N・0-28グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部が125×107cm、底面が140×128cm、深さは52cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 土器が444g、石器が295g出土した。土器は、縄文時代晩期前葉（大洞B2式期）に比定されるほぼ完形の深鉢形1点（図63-15）が底面の東壁際から出土した（図58）。石器は堆積土から出土した微細剥離痕を有する剥片6点、磨石1点（図63-16）である。

[小結] 出土遺物から縄文時代晩期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第23号土坑（SK23：図58、写真26）

[位置・確認] II Q-15グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が100×90cm、底面が111×102cm、深さは85cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、部分的に丸みを帯びている。

[堆積土] 3層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第24号土坑（SK22：図58・64、写真27・46）

[位置・確認] II F-35グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が80×77cmと小さく初めはSPとして精査したほどである。底面が170×148cm、深さは133cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦で、部分的に凹凸がある。

[堆積土] 3層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 土器が4077g出土した。土器は、堆積土第3層上面に破片が敷き詰められるような状態で

出土し(図58)、接合した結果、深鉢形3点となった(図64-1~3)。全て縄文時代後期前葉に比定されるものであり、1と2は十腰内I式期に比定される。1は内外面、2・3は外面のみに炭化物が付着している。

[小結]接合した土器(図64-1)の表面から採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,639 \pm 23$ (暦年較正用yrBP)との値が得られた。また、この土器の直下、第3層上面から採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,638 \pm 22$ (暦年較正用yrBP)との値が得られた(いずれも第3章第1節)。出土遺物や年代測定の結果から縄文時代後期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第25号土坑 (SK25 : 図58、写真27)

[位置・確認] II I-15グリッドに位置し、第III層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が78×72cm、底面が60×58cm、深さは22cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 単層の自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 土器が98g、石器が3g出土した。石器は微細剥離痕を有する剥片が2点である。

[小結] 縄文時代の遺構であると考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

第26号土坑 (SK26 : 図58、写真28)

[位置・確認] II J-17グリッドに位置し、第III層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は開口部が120×106cm、底面が95×80cm、深さは20cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

[堆積土] 2層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第27号土坑 (SK27 : 図58・64、写真28)

[位置・確認] II M-13グリッドに位置し、第III層下面で確認した。

[形状・規模] 攪乱により全体形は不明であるが、平面形はほぼ円形になるものと考えられる。規模は開口部が135cm程度、底面が120cm程度、深さは26cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸がある。

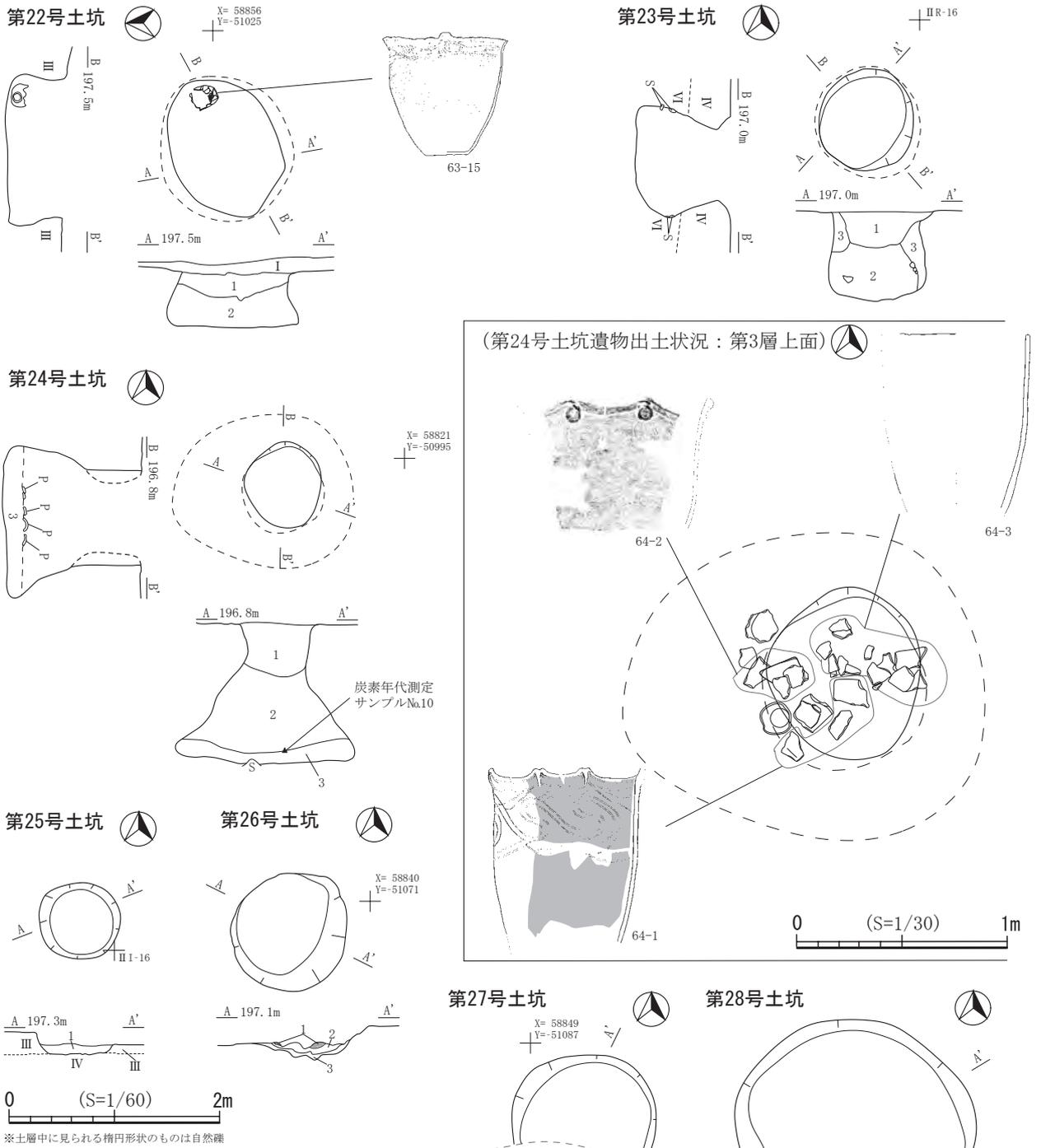
[堆積土] 2層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 土器が322g、石器が2g出土した。土器は縄文時代晩期前葉に比定される深鉢形である(図64-4)。石器は微細剥離痕を有する剥片が1点である。

[小結] 出土遺物から縄文時代晩期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第28号土坑 (SK28 : 図58、写真28)

[位置・確認] II B-17グリッドに位置し、第III層下面で確認した。



- 第22号土坑 (SK22)**
 第1層 褐色土 10YR4/4 小礫(φ5~10mm)2%、 ν - Δ 粒(φ1~5mm)10%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/6 ν - Δ 粒(φ1~10mm)20%、礫(φ5~30mm)2%
- 第23号土坑 (SK23)**
 第1層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)10%との混合土、礫(φ5~50mm)3%、 ν - Δ 粒(φ1~3mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)2%
 第2層 褐色土 10YR4/6 礫(φ20~100mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第3層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ5~20mm)2%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
- 第24号土坑 (SK-24)**
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~20mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 暗褐色土(10YR3/3)30%との混合土、礫(φ10~20mm)2%
 第2層 褐色土 10YR4/6 ν - Δ 粒(φ5~10mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)2%
 第3層 褐色土 10YR4/6 礫(φ20~40mm)3%、 ν - Δ 粒(φ5~10mm)3%、炭化物粒(φ1~2mm)2%
- 第25号土坑 (SK-25)**
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 小礫(φ5~10mm)2%、 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~5mm)2%
- 第26号土坑 (SK-26)**
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/4 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第3層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒(φ1~2mm)1%

- 第27号土坑 (SK-27)**
 第1層 暗褐色土 10YR3/2 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第2層 にぶい黄褐色土 10YR4/3 礫(φ10~80mm)5%、 ν - Δ 粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
- 第28号土坑 (SK28)**
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土(10YR2/2)20%、礫(φ10~20mm)1%、 ν - Δ 粒(φ1~10mm)2%、炭化物粒(φ1~8mm)30%
 第2層 にぶい黄褐色土 10YR4/3 礫(φ1~2mm)18%、黒褐色土(10YR2/2)2%との混合土

図58 土坑(4)

[重複]第4号竪穴住居跡の範囲内と重複するが、新旧関係は不明である。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が228×205cm、底面が192×190cm、深さは20cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、部分的に凹凸がある。

[堆積土]2層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]遺物の出土はなかった。

[小結]遺構の帰属時期は不明である。

第29号土坑 (SK29 : 図59・64、写真28・46)

[位置・確認]IU-22グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[重複]第9号竪穴住居跡の範囲内と重複するが、新旧関係は不明である。

[形状・規模]平面形は不整形である。規模は開口部が144×140cm、底面が94×80cm、深さは20cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸がある。

[堆積土]堆積土は2層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]縄文時代中期末葉～後期初頭に比定される深鉢形(図64-5)を含む土器が593g出土した。

[小結]出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第30号土坑 (SK30 : 図59・64・65、写真29・46)

[位置・確認]IW-13グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が186×173cm、底面が195×188cm、深さは107cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土]2層に分層され、第4層が自然堆積でその他は人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が5665g、石器が432g出土した。土器は、堆積土第2層南壁際に斜位に埋設されていた(図59)深鉢形(図64-6)の他、同層から出土した深鉢形(図65-1)、底面近くから出土した深鉢形(図65-2・3)がある。全て縄文時代中期前葉(円筒上層a式期)に比定される。図65-2・3は同一固体であると考えられ、第48号土坑出土遺物と遺構間接合した。石器は堆積土から出土した石筥1点(図65-4)、削器2点(図65-5・6)、磨石が1点である。

[小結]出土遺物から縄文時代中期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第31号土坑 (SK31 : 図59・65、写真29・47)

[位置・確認]IV-12・13グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が135×120cm、底面が168×160cm、深さは118cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土]5層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が474g、石器が314g出土した。土器は、堆積土から出土した深鉢形土器の把手部を図示した(図65-8)。石器は堆積土から出土した石核1点、微細剥離痕を有する剥片1点、敲き石(図65-9)が1点である。

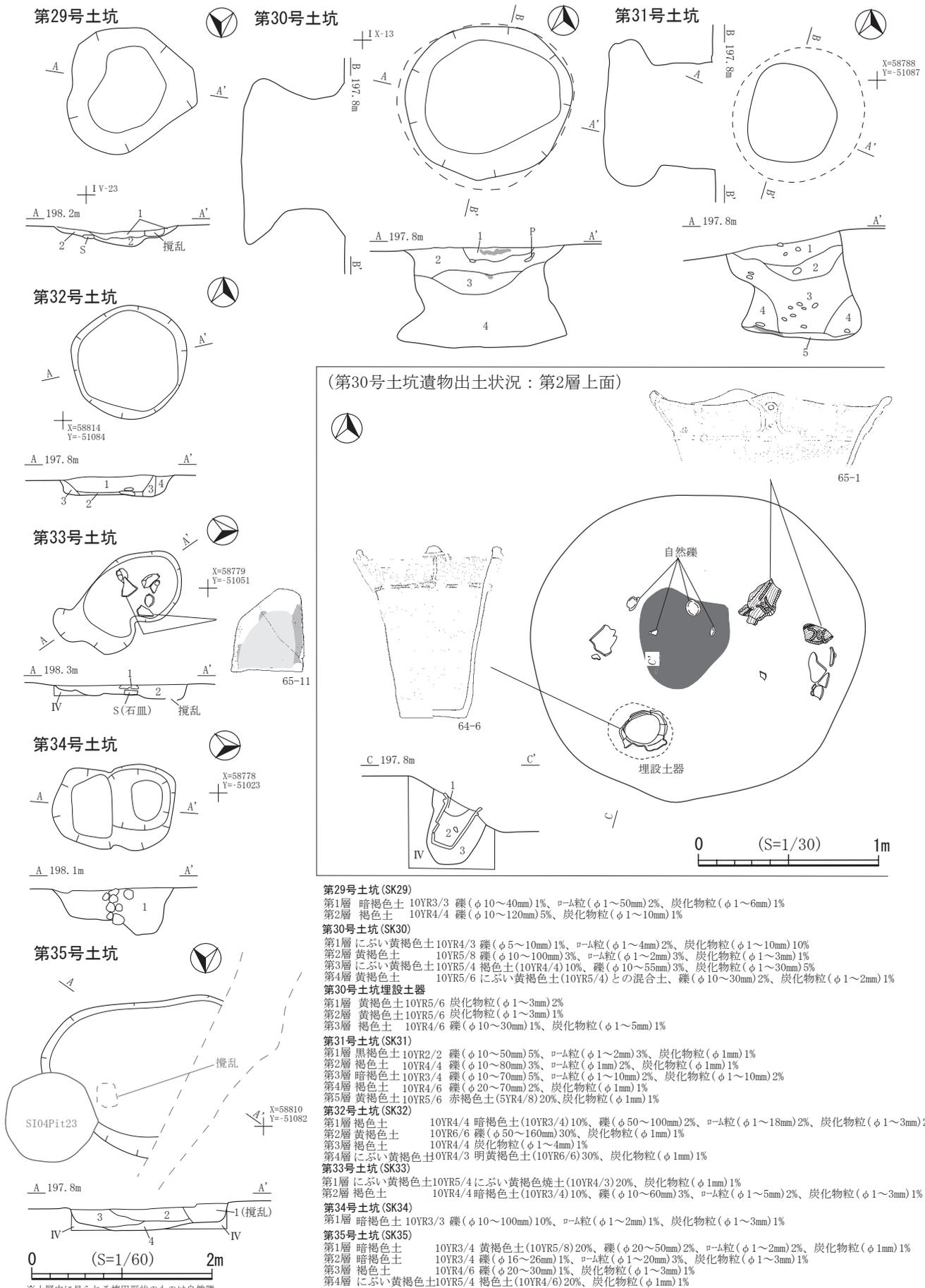


図59 土坑(5)

[小結] 出土遺物から縄文時代中期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第32号土坑 (SK32 : 図59、写真30)

[位置・確認] II D-14グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が130×128cm、底面が110×108cm、深さは25cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第33号土坑 (SK33 : 図59・65、写真30・47)

[位置・確認] I T-22グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は開口部が130×105cm、底面が100×82cm、深さは20cmである。壁は底面からやや外傾して立ち上がる。底面は凹凸があり、北側は段差状になる。

[堆積土] 3層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 土器が413g、石器が3665g出土した。土器は、堆積土から出土した縄文時代後期初頭～前葉に比定されるほぼ完形の深鉢形土器を図示した(図65-10)。石器は堆積土から出土した石皿1点(図65-11)、台石1点である。11には煤状の黒色物質が付着している。

[小結] 完形土器(図65-10)の表面から採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、3,758±22(暦年較正用yrBP)との値が得られた。出土遺物や年代測定の結果から縄文時代後期初頭～前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第34号土坑 (SK34 : 図59、写真31)

[位置・確認] I T-29グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は開口部が135×90cm、底面が50×45cm、深さは52cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸があり、北側が小ピット状に深くなる。

[堆積土] 単層で自然堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

第35号土坑 (SK35 : 図59・65、写真31・47)

[位置・確認] II C-14グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[重複] 第4号竪穴住居跡Pit23と重複し、本遺構が古い。

[形状・規模] 平面形は攪乱により一部壊されており、全体形は不明である。規模は開口部が175cm程度、底面が140cm程度、深さは23cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が250 g 出土した。いずれも破片である (図65-13・14)。

[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭～前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第36号土坑 (SK36 : 図60・66、写真31・47)

[位置・確認] I W-19・20グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[重複]SP253・255と重複し、本遺構が古いものと考えられる。

[形状・規模]攪乱によって東側が一部壊されているが、平面形はほぼ円形になるものと考えられる。規模は開口部が230cm程度、底面が215cm程度、深さは28cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

[堆積土]3層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が1599 g、石器が9488 g 出土した。土器は、いずれも破片である (図66-1～3)。石器は削器1点 (図66-4)、二次加工剥片2点、微細剥離痕を有する剥片11点、石錘2点 (図64-5・6)、磨り石3点 (図66-7・8・10)、磨り+敲き石1点 (図66-9)、台石2点である。

[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭～前葉に帰属する遺構であると考えられる。

第37号土坑 (SK37 : 図60・66、写真47)

[位置・確認] I S-28・29グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が113×106cm、底面が78×50cm、深さは55cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は丸みを帯びている。

[堆積土]単層で自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が63 g、石器が631 g 出土した。土器はいずれも破片である。石器は、二次加工剥片2点、微細剥離痕を有する剥片1点、敲き石 (凹み石) 1点 (図66-12) である。

[小結]縄文時代の遺構であると考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

第38号土坑 (SK38 : 図60)

[位置・確認] I T-28・29グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が117×115cm、底面が87×58cm、深さは52cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は丸みを帯びている。

[堆積土]単層で自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]遺物の出土はなかった。

[小結]遺構の帰属時期は不明である。

第39号土坑 (SK39 : 図60、写真31)

[位置・確認] II F-35グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が86×70cm、底面が48×42cm、深さは24cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土]単層で自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]遺物の出土はなかった。

[小結]遺構の帰属時期は不明である。

第40号土坑 (SK40 : 図60、写真31)

[位置・確認] I W-19グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が106×100cm、底面が98×85cm、深さは20cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]堆積土第1層に5個の礫が含まれていたが、1点が弱い擦痕のある台石(1667g)である。

[小結]遺構の帰属時期は不明である。

第41号土坑 (SK41 : 図60・66、写真32・47)

[位置・確認] I T-11グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形は楕円形である。規模は開口部が153×70cm、底面が160×146cm、深さは137cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層され、自然堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が106g出土した。いずれも破片である(図66-13・14)。

[小結]出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属する遺構であると考えられる。

第42号土坑 (SK42 : 図60・66、写真32・47)

[位置・確認] I W-12グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形は不整形である。規模は開口部が152×150cm、底面が96×93cm、深さは62cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が386g、石器が602g出土した。土器はいずれも破片である(図66-15)。石器は、石鏃1点(図66-16)、削器1点(図66-17)、二次加工剥片2点、微細剥離痕を有する剥片2点である。

[小結]出土遺物から縄文時代中期末葉に帰属する遺構であると考えられる。

第43号土坑 (SK43 : 図60・66、写真32・48)

[位置・確認] I W-12グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が138×120cm、底面が125×110cm、深さは90cmである。壁の断面形はフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が2992g出土した。いずれも破片である(図66-18・19)。

[小結]出土遺物から縄文時代中期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

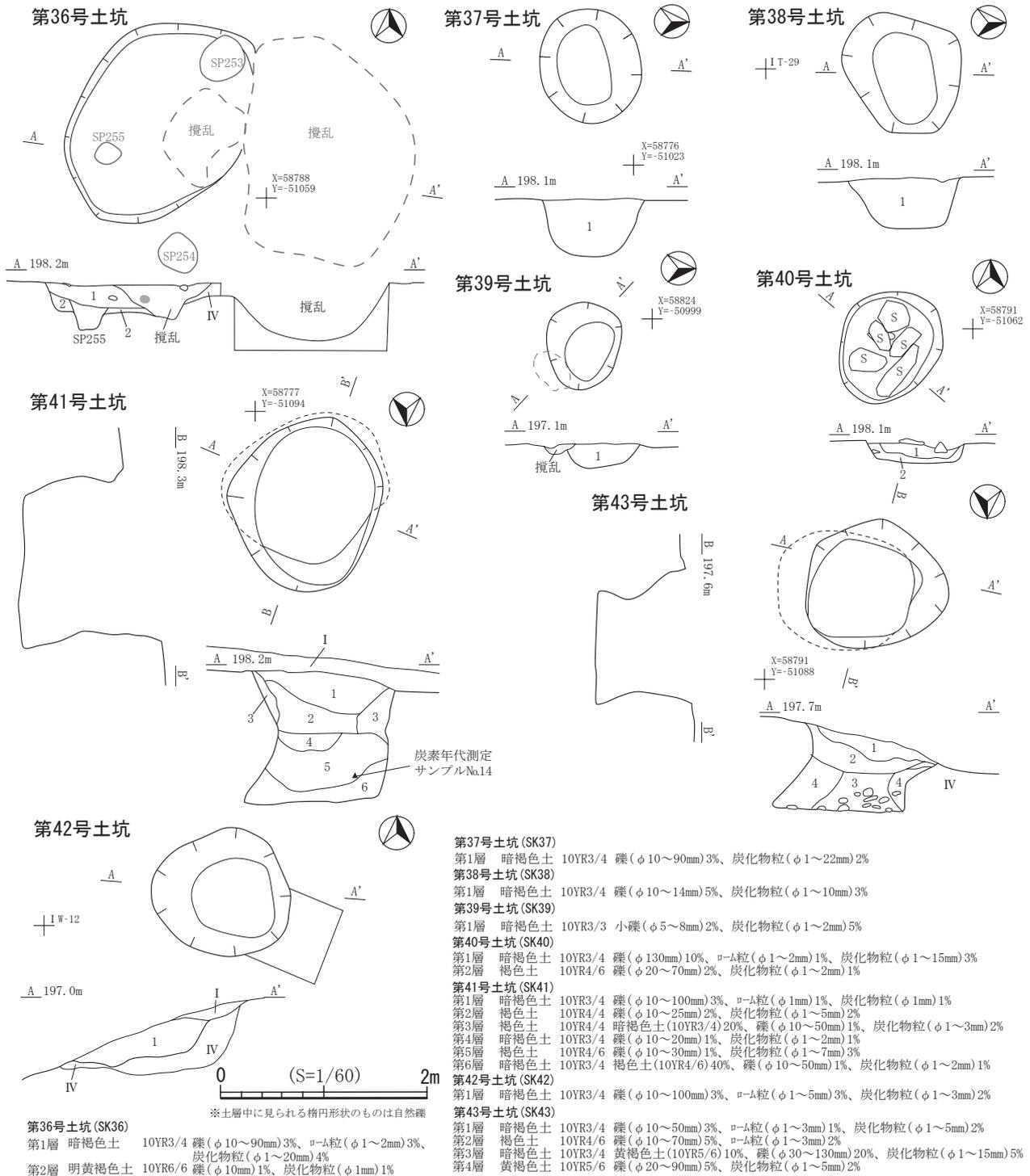


図60 土坑 (6)

第44号土坑 (SK44、旧SX02 : 図61・67、写真32)

[位置・確認] IT-12グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は開口部が296×245cm、底面が265×210cm、深さは40cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸である。

[堆積土] 2層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が19g、石器が214g出土した。土器はいずれも破片である(図67-1)。石器は、微細剥離痕を有する剥片1点、磨り石1点である。

[小結]出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第45号土坑 (SK45、旧SX05：図61・67、写真32・47)

[位置・確認]IP-12グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模]平面形はほぼ円形である。規模は開口部が107×105cm、底面が97×95cm、深さは38cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土]3層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が61g出土した。赤色塗膜が付着する破片である(図67-2)。

[小結]出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第46号土坑 (SK46、旧SI01土坑1：図61・67、写真33)

[位置・確認]II D-27グリッドに位置し、第1号竪穴住居跡床面(第Ⅳ層)で確認した。

[重複]第1号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。また、第47号土坑と重複するが新旧関係は不明である。

[形状・規模]平面形は不整形である。規模は開口部が170×160cm、底面が140×135cm、深さは22cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は凹凸である。

[堆積土]2層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が440g、石器が488g出土した。土器はいずれも破片である(図67-3)。石器は、磨り石1点、磨り・敲き石が1点である。

[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第47号土坑 (SK47、旧SI01土坑2：図61・67、写真33・47)

[位置・確認]II D-27グリッドに位置し、第1号竪穴住居跡床面(第Ⅳ層)で確認した。

[重複]第1号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。また、第46号土坑と重複するが新旧関係は不明である。

[形状・規模]平面形は不整形である。規模は開口部が105cm程度、底面が83cm程度、深さは23cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は凹凸である。

[堆積土]4層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物]土器が1476g出土した。いずれも破片である(図67-4～7)。

[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第48号土坑 (SK48、旧SI01土坑3：図61・67、写真33・48)

[位置・確認]II E・F-26・27グリッドに位置し、第1号竪穴住居跡床面(第Ⅳ層)で確認した。

[重複]第1号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

[形状・規模]平面形は不整形である。規模は開口部が378×315cm、底面が310×263cm、深さは48cmで

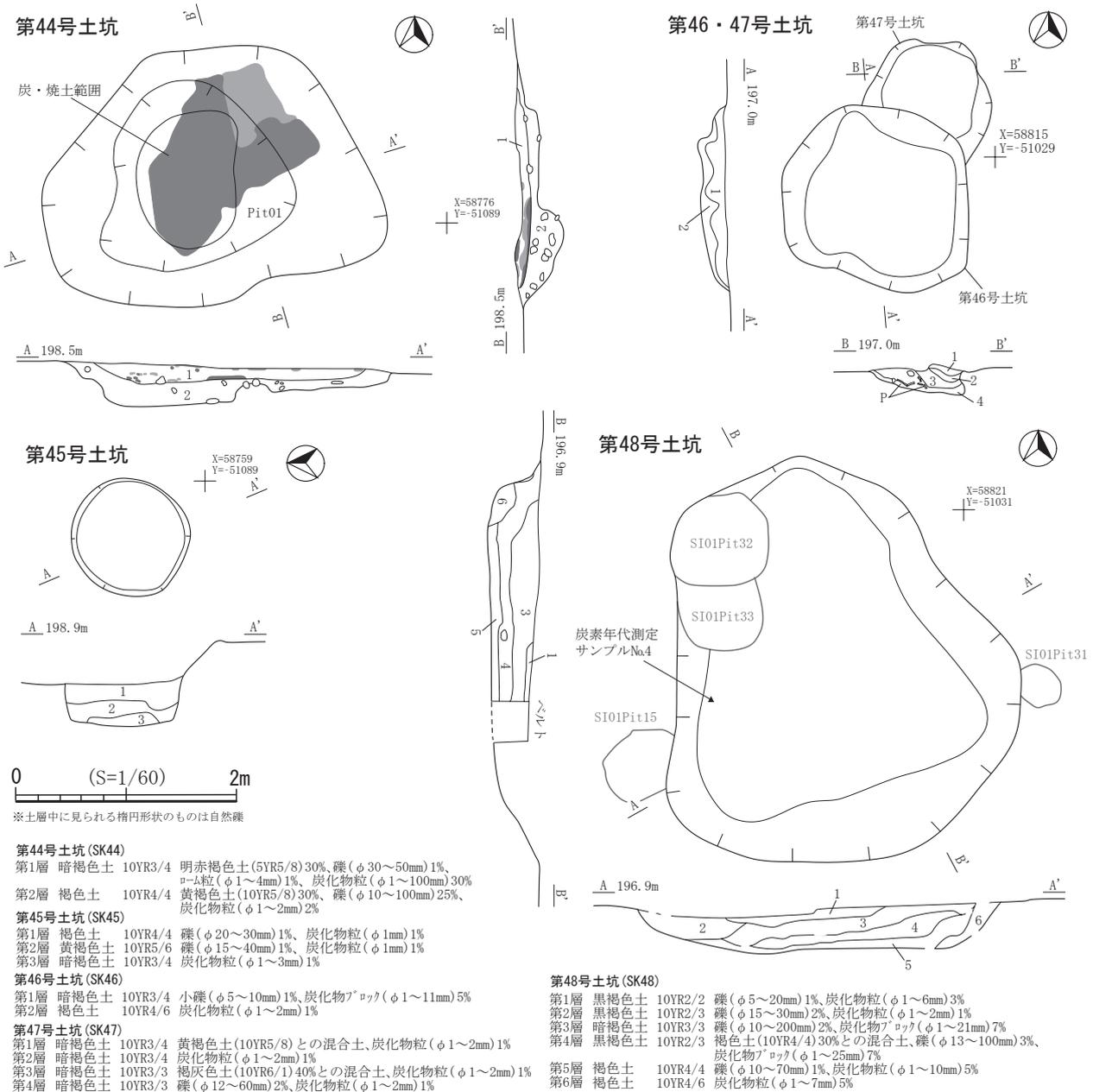


図61 土坑(7)

ある。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、部分的に凹凸がある。

[堆積土] 6層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 土器が2348g、石器が18447g出土した。土器はいずれも破片であり(図67-8~16)、16には外面に赤色塗膜が付着する。17は切断土器である。頸部切断面の1カ所はY字状にしてあり、切断した蓋部と底部が一直線になるよう、2カ所に穿孔が施されている。石器は、搔器1点(図67-19)、削器6点(図67-18)、二次加工剥片15点、微細剥離痕を有する剥片29点、磨り石6点(図67-21)、磨り・敲き石が1点(図67-22)、敲き石(凹み石)2点(図67-20)、台石1点である。その他の遺物として円盤状土製品1点(図67-23)である。

[小結] 堆積土が出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、 $3,910 \pm 21$ (暦年較正用yrBP)との値が得られた。出土遺物から縄文時代後期初頭~前葉に帰属する遺構であると考えられる。

表2 土坑属性

遺構名	形状		計測値(cm)			グリッド	遺物出土状況		図版		写真		重複関係	備考 (帰属時期など)
	平面	断面	開口部	底面部	深さ		土器(重量:g)	石器等(器種)	遺構	遺物	遺構	遺物		
SK01	円	逆台	150×147	-	28	II I-25		石核1	55		20			
SK02	円	逆台	119×114	105×97	22	II K-27			55		20			
SK03														
SK04	円	逆台	82×81	56×55	38	II N-23			55		20			
SK05	楕円	フラ	148×137	192×192	100	II P-22	34		55		20			
SK06	円	フラ	129×124	158×155	76	II P-23	555		55	62	21	44		晩期前葉～中葉
SK07	楕円	フラ	132×116	184×184	101	II O-25	6689	磨石1、台石1	55	62	21	44・45		晩期前葉～中葉
SK08	円	フラ	116×106	145×130	83	II P-26	2750	磨石2、磨り+敲き1	56	62・63	22	45		晩期前葉～中葉
SK09														
SK10	円	逆台	121×104	95×75	32	II Q-21			56		22			
SK11	円	フラ	124×117	124×121	122	II P-18			56		23			晩期中葉
SK12	円	袋	82×78	99×92	103	II P-20		微細1、敲石1	56	63	23	45		
SK13	不整	フラ	179×132	225×209	96	II P-24			56		23			
SK14	円	フラ	132×130	158×149	121	II Q-23		石核1、敲石1	56	63	23	45		
SK15	円	フラ	154×148	138×130	111	II P-21			57		24			
SK16	円	フラ	139×135	175×154	118	II P-21		微細1	57	63	24	45		
SK17	円	フラ	122×120	106×101	96	II P-19			57		24			
SK18	円	フラ	77×70	83×75	84	II S-18			57		24			
SK19	楕円	逆台	123×106	93×77	55	II N-26			57		25			
SK20	楕円	フラ	169×124	162×143	76	II N-27	403	磨石2	57	63	25	45		晩期前葉
SK21	円	フラ	131×-	115×-	61	II O・P-27	790	二次1	57	63	25・26	45		晩期前葉
SK22	楕円	フラ	120×103	134×122	57	II N・O-28	444	微細6、磨石1	58	63	26	45		晩期前葉
SK23	円	フラ	82×77	82×80	87	II Q-15			58		26			
SK24	円	フラ	77×70	170×137	133	II F-35	4077		58	64	27	46		後期前葉
SK25	円	逆台	72×70	60×55	27	II I-15	98	微細2	58		27			
SK26	不整	逆台	120×112	90×81	29	II J-17			58		28			
SK27	円	逆台	133×-	120×-	21	II M-13	322	微細1	58	64	28			晩期前葉
SK28	円	逆台	228×205	192×190	20	II B-17			58		28			
SK29	不整	逆台	144×140	94×80	20	I U-22	593		59	64	28	46	? SI09	中期末葉～後期初頭
SK30	円	フラ	186×173	195×188	107	I W-13	5665	石鏃1、削器2、磨石1	59	64・65	29	46		中期前葉
SK31	円	フラ	135×120	168×160	118	I V-12・13	474	石核1、微細1、敲石1	59	65	29	47		中期前葉
SK32	円	箱	130×128	110×108	25	II D-14			59		30			
SK33	不整	逆台	130×105	100×82	20	I T-22	413	石皿1、台石1	59	65	30	47		後期初頭～前葉
SK34	不整	箱	135×90	50×45	52	I T-29			59	65	31			
SK35	不明	逆台	175×-	140×-	23	II C-14	250		59	65	31	47	SI04pit23>	後期初頭～前葉
SK36	円	逆台	230×-	215×-	28	I W-19・20	1599	削器1、二次2、微細11、石鏃2、磨石3、磨り+敲き1、台石2	60	66	31	47	SP253・SP255>	後期初頭～前葉
SK37	円	逆台	113×106	78×50	55	I S-28・29	63	二次2、微細1、敲石1	60	66		47		
SK38	円	逆台	117×115	87×58	52	I T-28・29			60					
SK39	円	逆台	86×70	48×42	24	II F-35			60		31			
SK40	円	逆台	106×100	98×85	20	I W-19			60		31			
SK41	楕円	フラ	153×70	160×146	137	I T-11	106		60	66	32	47		中期中葉
SK42	不整	逆台	152×150	96×93	62	I W-12	386	石鏃1、削器1、二次2、微細2	60	66	32	47		中期末葉
SK43	円	フラ	138×120	125×110	90	I W-12	2992		60	66	32	48		中期前葉
SK44	不整	逆台	296×245	265×210	40	I T-12	19	微細1、磨石1	61	67	32			中期末葉～後期初頭、旧SX02
SK45	円	箱	107×105	97×95	38	I P-12	61		61	67	32	47		中期末葉～後期初頭、旧SX05
SK46	不整	逆台	170×160	140×135	22	II D-27	440	磨石1、磨り+敲き1	61	67	33		SI01>	後期初頭、旧SI01土坑1
SK47	不整	逆台	105×-	83×-	23	II D-27	1476		61	67	33	47	SI01>	後期初頭、旧SI01土坑2
SK48	不整	逆台	378×315	310×263	48	II E・F-26・27	2348	搔器1、削器6、二次15、微細29、磨石6、磨り+敲き1、敲石2、台石1、円盤土1	61	67	33	48	>SI01	後期初頭～前葉、旧SI01土坑3

(形状凡例)

平面形:「円」=円形、「楕円」=楕円形、「不整」=不整円形・不整形

断面形:「逆台」=逆台形、「フラ」=フラスコ状、「袋」=袋状、「箱」=箱形

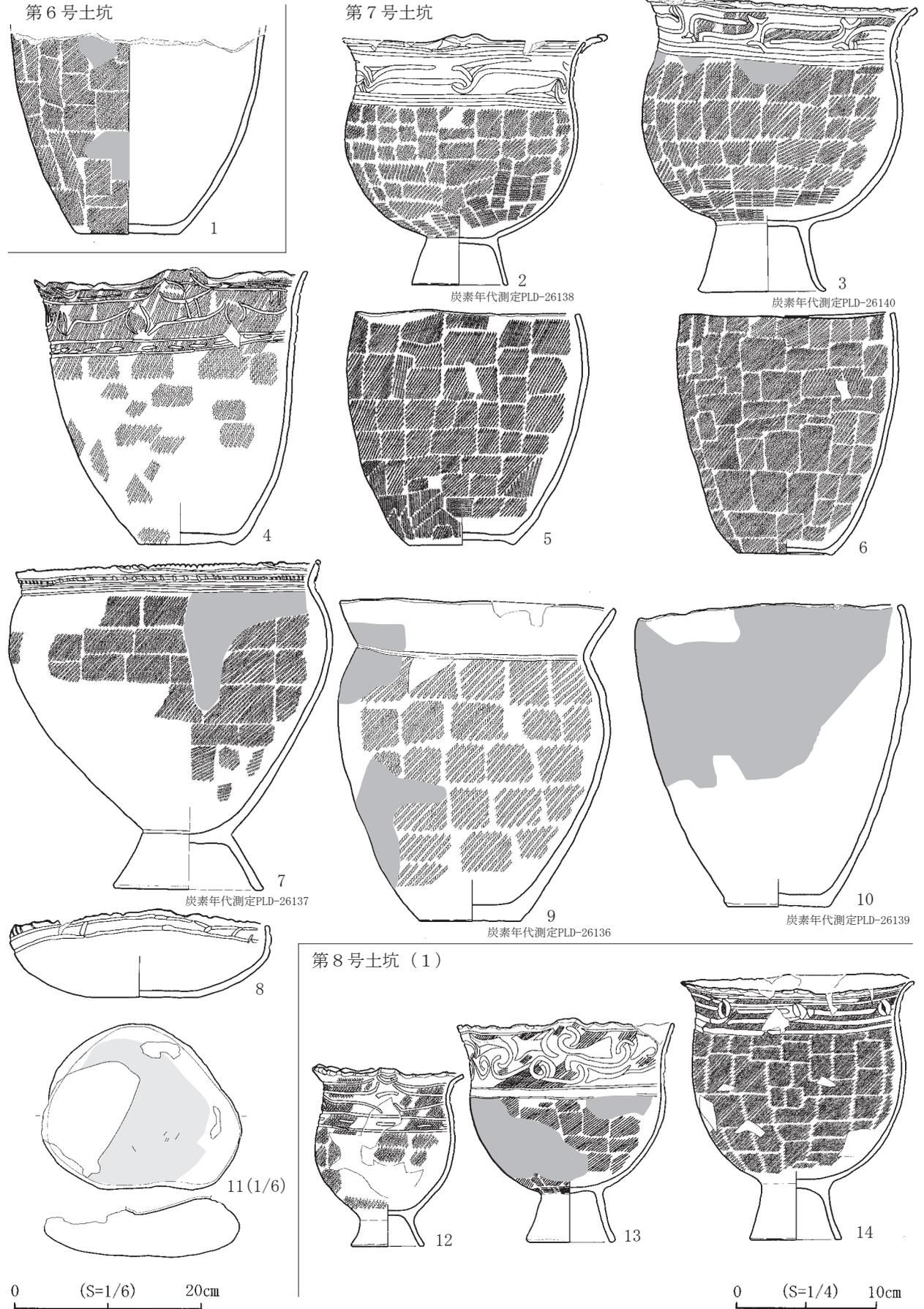


图62 土坑出土遺物 (1)

第8号土坑(2)

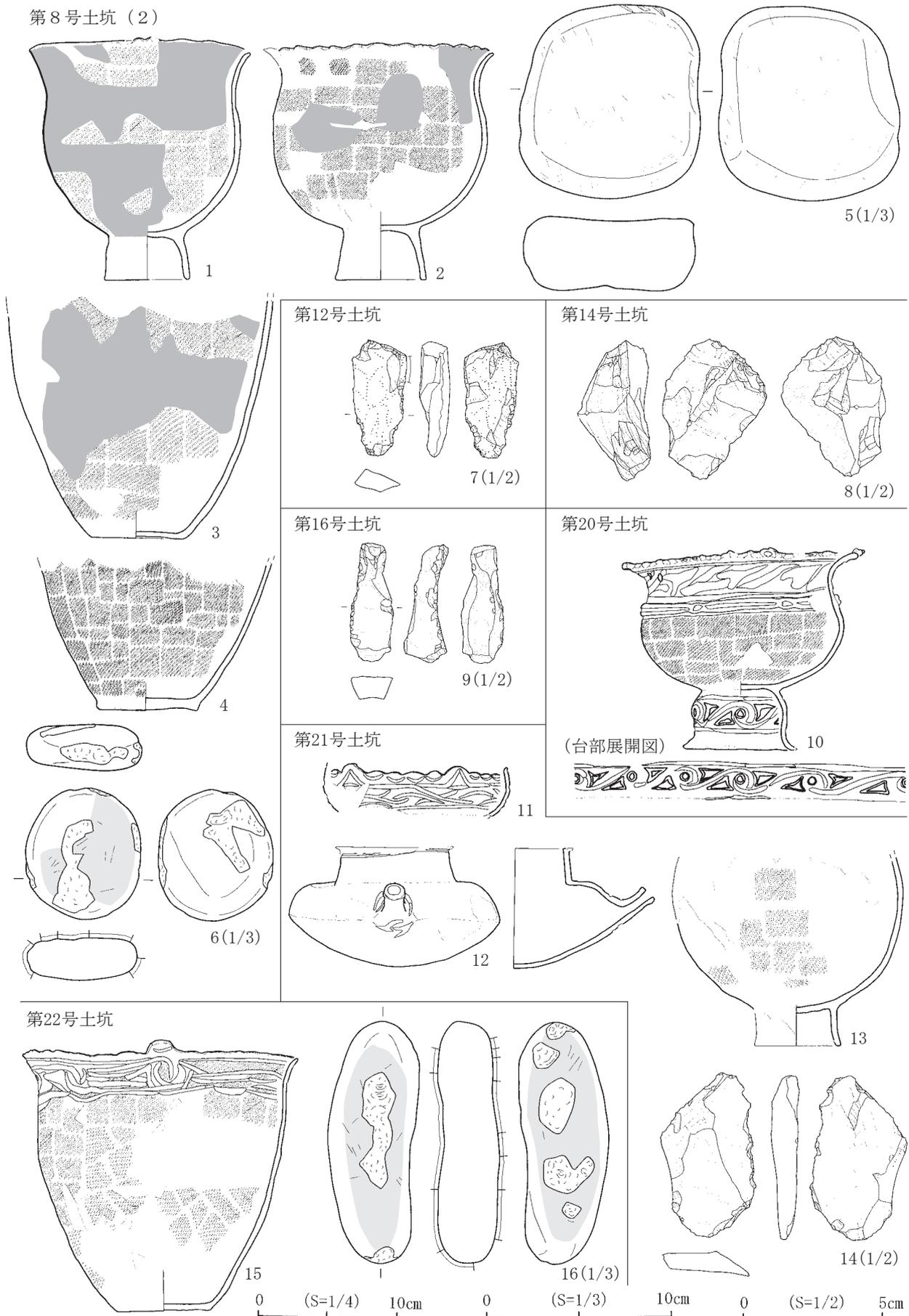
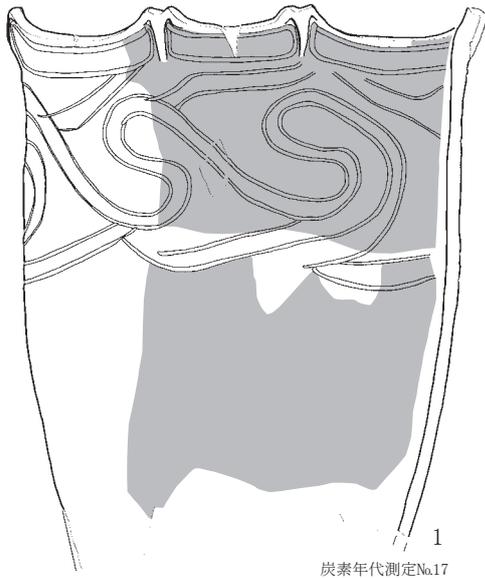
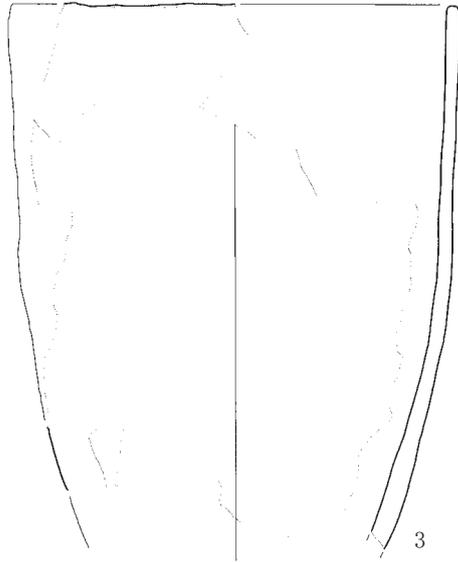
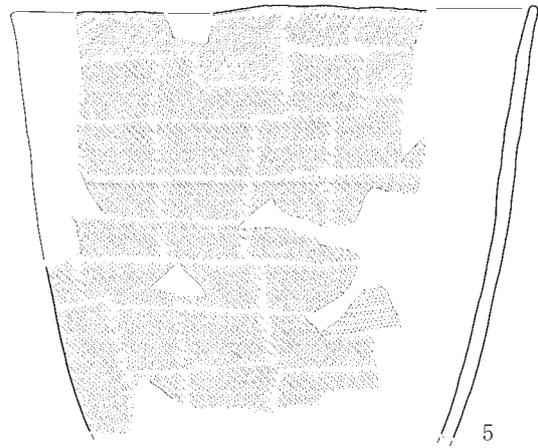


図63 土坑出土遺物(2)

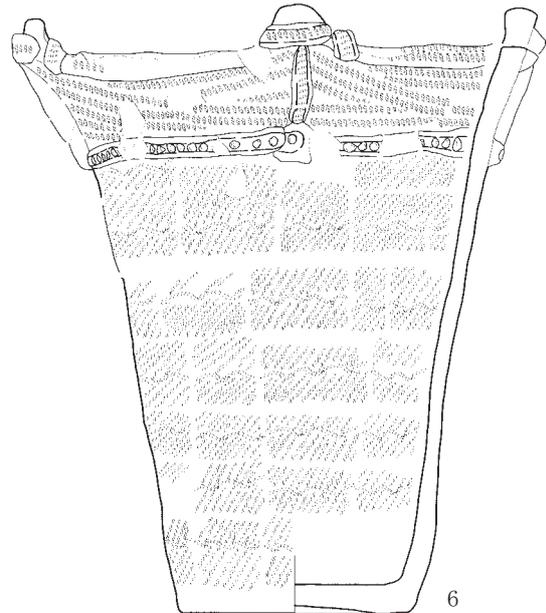
第24号土坑



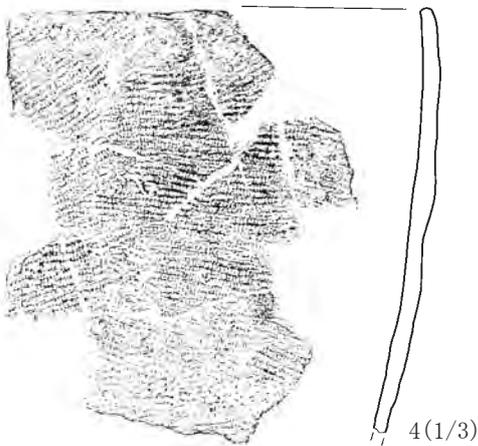
第29号土坑



第30号土坑 (1)



第27号土坑

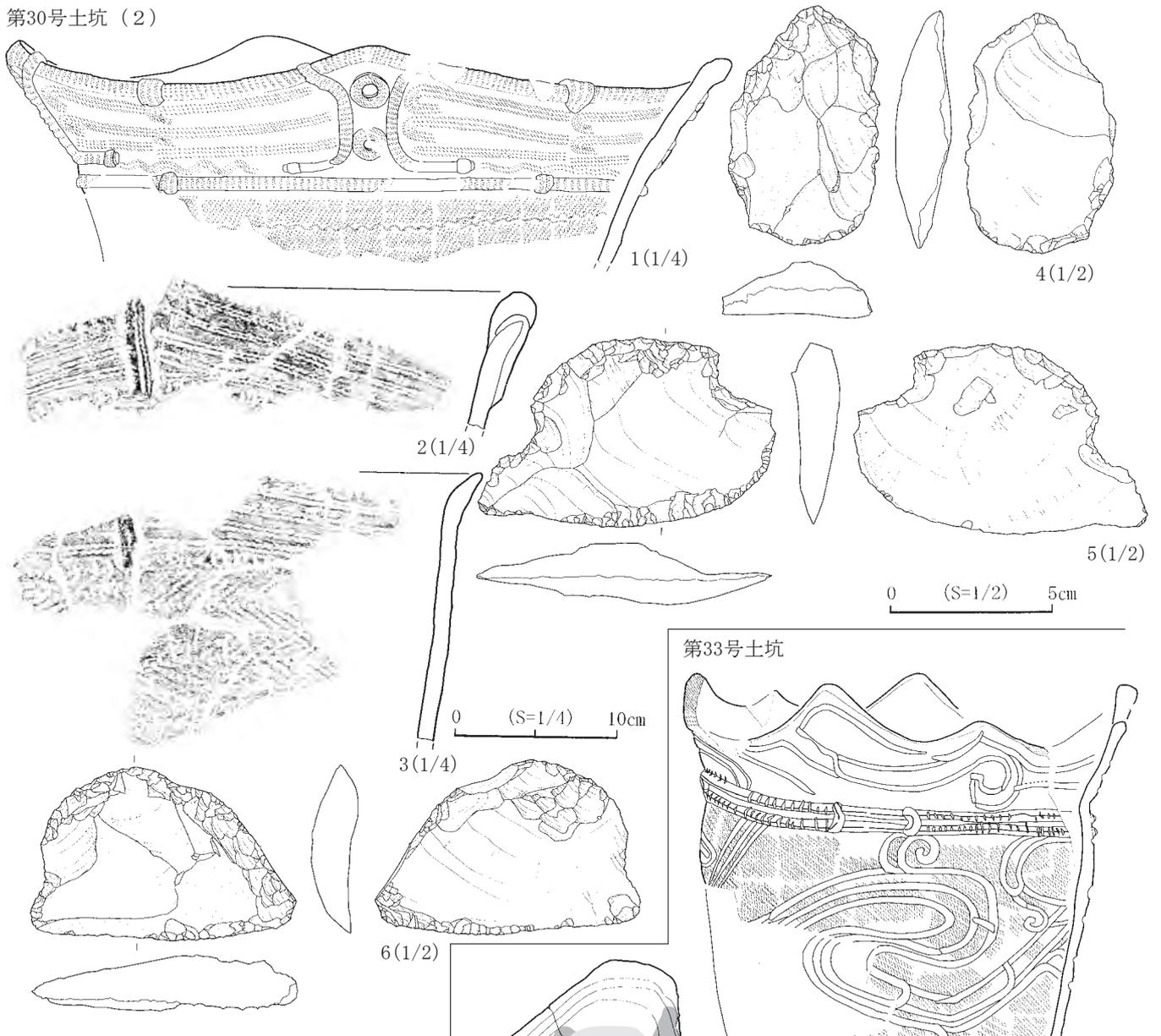


0 (S=1/3) 10cm

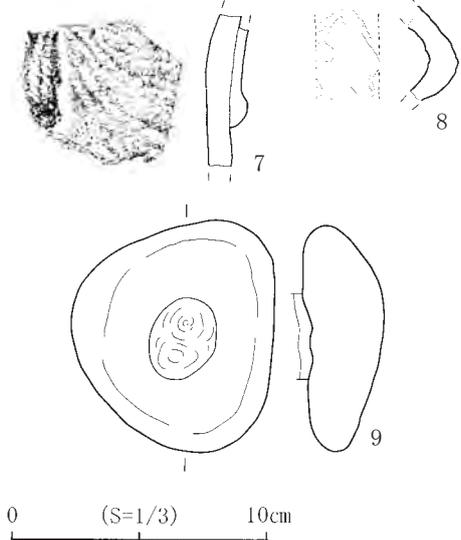
0 (S=1/4) 10cm

図64 土坑出土遺物 (3)

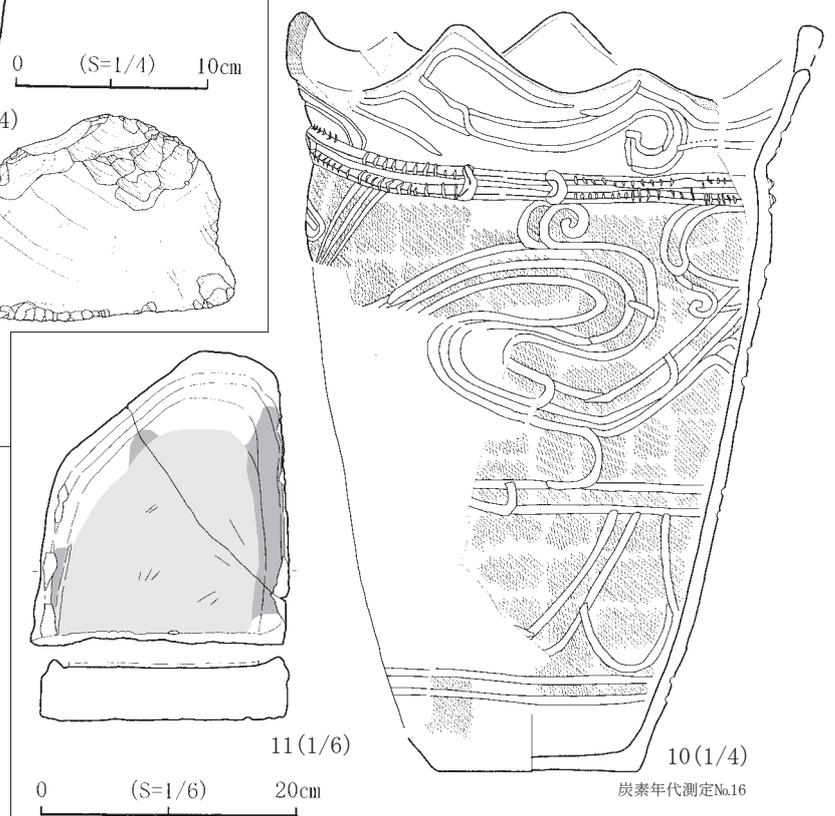
第30号土坑 (2)



第31号土坑



第33号土坑



第34号土坑



第35号土坑



図65 土坑出土遺物 (4)



図66 土坑出土遺物（5）

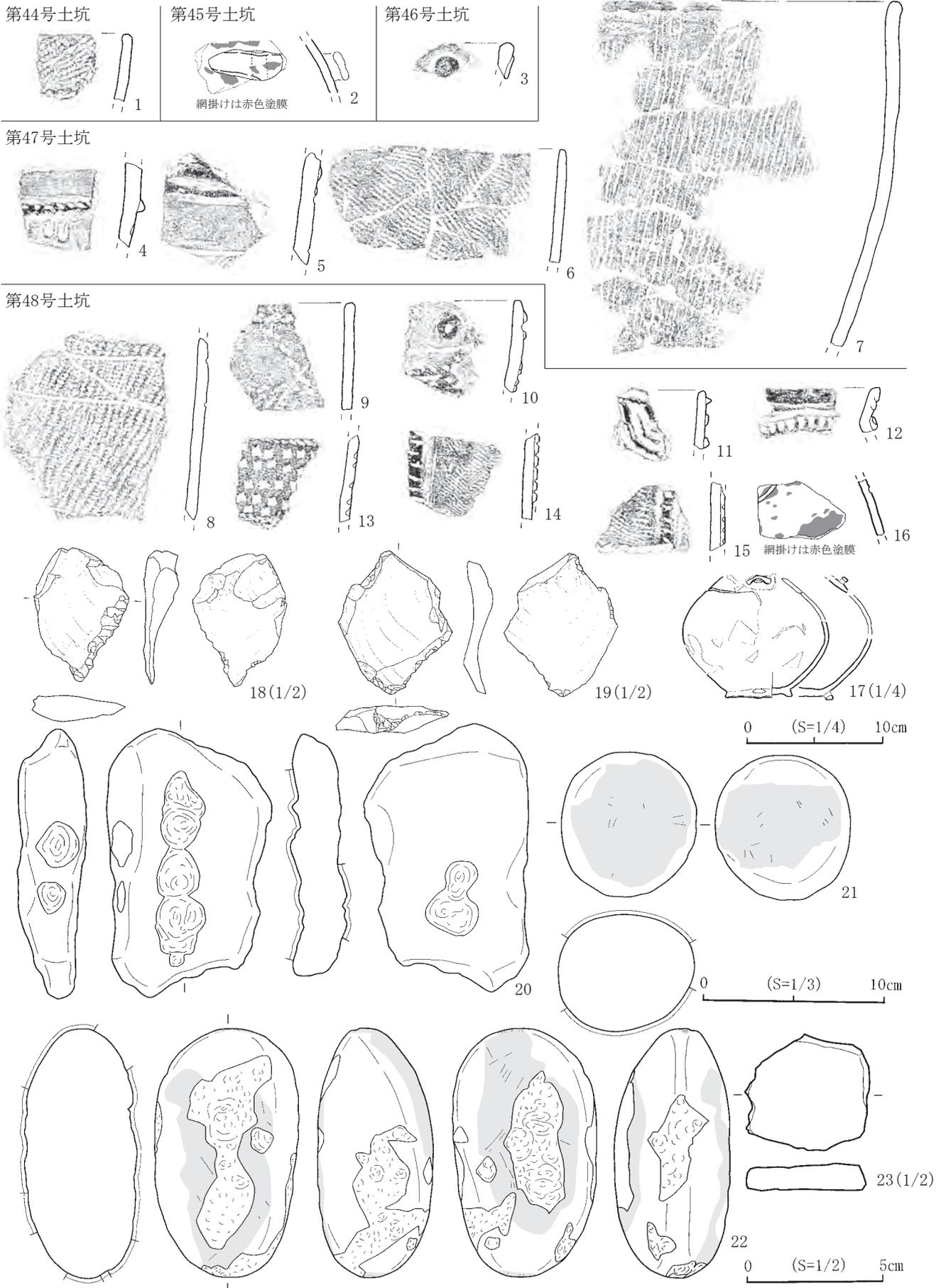


図67 土坑出土遺物(6)

第3節 その他の遺構

その他の遺構として、配石遺構1基、焼土跡1基、土器埋設遺構3基、小ピット（柱穴）256基を検出した。整理段階において、遺構番号を変更したものがあため以下に記す（小ピットについては「小ピット属性表」に記した）。なお、記述に関しては、「検出状況（位置・確認）」「重複」「規模・形状」「堆積状況」「出土遺物」「小結（分析結果・時期・その他の特記事項等）」の順に記載する。

（遺構番号の変更）

SI06西側埋設土器→第2号土器埋設遺構

SI12埋設土器→第3号土器埋設遺構

1 配石遺構

第1号配石遺構（SQ01：図68、写真33）

[位置・確認] II G-27グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で長さ50cm程度の埋設された長円形礫と、黒色不整円形プランを確認した。

[形状・規模] 配石部の礫は元々2個が「ハ」字状に埋設されていたようであり、配石部掘方は約60×30cmで、深さ14cm程度であった。配石部掘方の間隔は、広い方で約30cm、狭い方で約10cmであった。配石部の下は土坑部であり、平面形は不整円形で、規模は開口部が116×104cm、底面が60×48cm、深さは40cmである。壁は底面から緩く外傾して立ち上がる。底面は丸みを帯びている。

[堆積土] 4層に分層され、人為堆積の様相を示す。

[出土遺物] 遺物の出土はなく、配石部礫も自然礫である。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

2 焼土跡

第1号焼土跡（SN01：図68、写真34）

[位置・確認] II B-14グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[重複] 第4号竪穴住居跡Pit10重複し、本遺構が古い。

[形状・規模] 東側一部は攪乱によって壊されているため全体形は明らかではないが、平面形は不整円形を呈するものと考えられる。規模は一辺120cm程度の範囲が被熱しているものと考えられ、被熱深度は最大で15cmである。

[出土遺物] 遺物の出土はなかった。

[小結] 遺構の帰属時期は不明である。

3 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構（SR01：図68・70、写真33・48）

[位置・確認] I U-26グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 径約14cm、ほぼ円形状の掘方に深鉢形土器（底部付近）を正立状態で埋設している。

[堆積土] 土器内、掘方ともに単層である。

[出土遺物] 埋設された土器は、底径が7.2cm、残存する器高が7cm程度の小型の深鉢形土器で、単節LRが縦回転で施文される（図70-14）。

[小結] 出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第2号土器埋設遺構 (SR02、旧SI06西側埋設土器：図68・70、写真34・48)

[位置・確認] IU-14グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。

[形状・規模] 径約44cm、ほぼ円形状の掘方に深鉢形土器（底部付近）を正立状態で埋設している。

[堆積土] 土器内、掘方ともに単層である。

[出土遺物] 埋設された土器は、底径が13.5cm、残存する器高が10.5cm程度の深鉢形土器で、単節RLが縦回転で施文される。底面には網代痕が確認できる（図70-15）。

[小結] 出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

第3号土器埋設遺構 (SR03、旧SI12埋設土器：図68・70、写真34・48)

[位置・確認] IV-17グリッドに位置し、第12号竪穴住居跡床面（第Ⅳ層）で確認した。

[重複] 第12号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古いものと考えられる。

[形状・規模] 径約46cm、ほぼ円形状の掘方に深鉢形土器（口縁部付近）を倒立状態で埋設している。

[堆積土] 土器内、掘方ともに単層である。

[出土遺物] 埋設された土器は、残存する器高が10cm程度の深鉢形土器で、円筒上層a式期の特徴が見られる（図70-16）。

[小結] 出土遺物から縄文時代中期前葉に帰属する遺構であると考えられる。

4 小ピット（柱穴）

柱穴状の小ピットは256基検出した。確認面は、調査区北側・東側が第Ⅲ層上面で、南・西側は第Ⅲ層下面である。規模は開口部40cm前後、深さは30cm前後のものが最も多く検出された。堆積土は黒褐色・暗褐色の小礫が混じるものが中心である。遺物が出土した小ピットもあるが、時期は縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての土器片が多い。遺物が出土していない小ピットも、堆積土の様相や掘り込み面などから同時期に近いものがほとんどであると考えられる。なお、個々の検出状況（グリッド）や規模の計測値等は「小ピット属性一覧表」（表3・4）に記した。

また、規則的に配置され、本来であれば竪穴住居跡と推察されるが、削平等で炉や竪穴部が欠損したと考えられる小ピット（柱穴）の集まりについては「小ピット群」として抽出し、以下、詳細について記述していくこととする。

第1号小ピット群（図69、写真34）

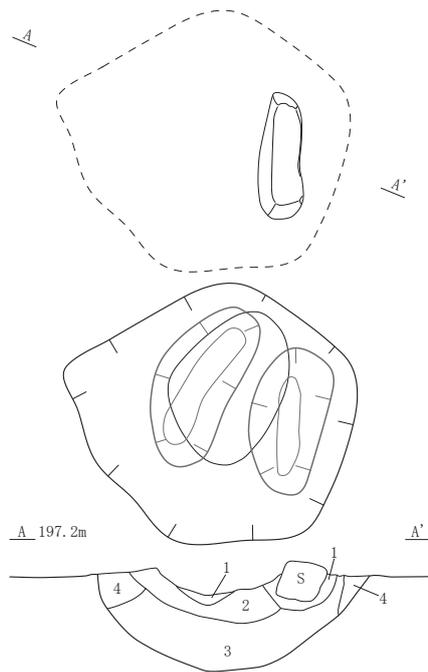
[位置・確認] IW・X-14・15グリッドに位置し第Ⅲ層下面で確認した。SP94～103・107の11基が含まれる。

[柱穴配置] 主軸を北東-南西とした場合、SP99-107、SP96-94が対をなす4本主であった可能性が考えられる。

[堆積土] 暗褐色土中心の単層で、柱痕は確認できなかった。

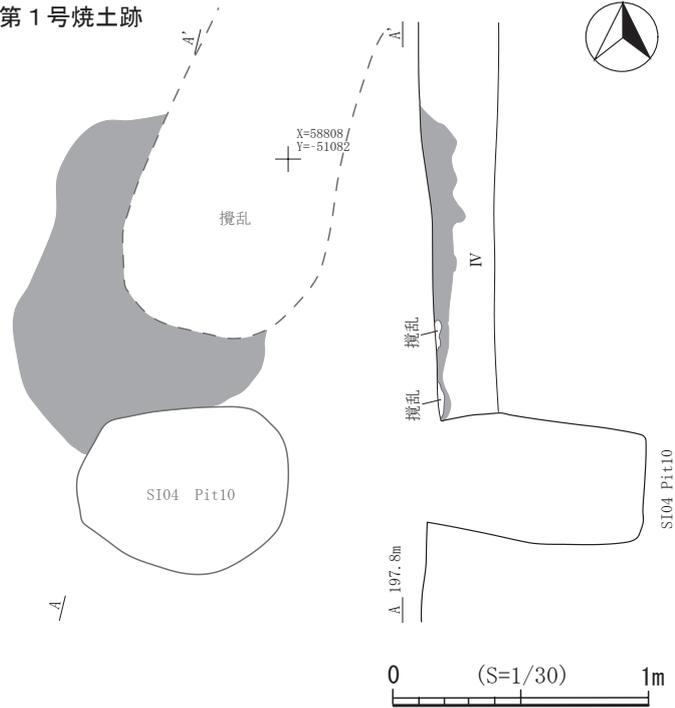
[出土遺物] SP95から土器片が出土した（15g）。

第1号配石遺構



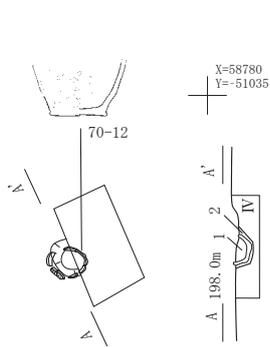
- 第1号配石遺構 (SQ-01)
 第1層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4)との混合土、小礫(φ2~8mm)1%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/6 礫(φ3~12mm)2%、炭化物粒(φ1~2mm)1%
 第3層 褐色土 10YR4/6 礫(φ5~20mm)5%、炭化物粒(φ1~2mm)3%
 第4層 黄褐色土 10YR5/8 褐色土(10YR4/6)との混合土、小礫(φ3~10mm)2%、炭化物粒(φ1~2mm)1%

第1号焼土跡



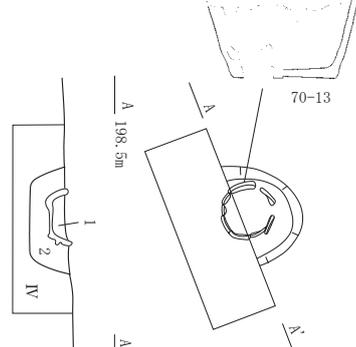
- 第1号焼土跡 (SN-01)
 被熱範囲 明赤褐色土 5YR5/6 第IV層が被熱

第1号土器埋設遺構



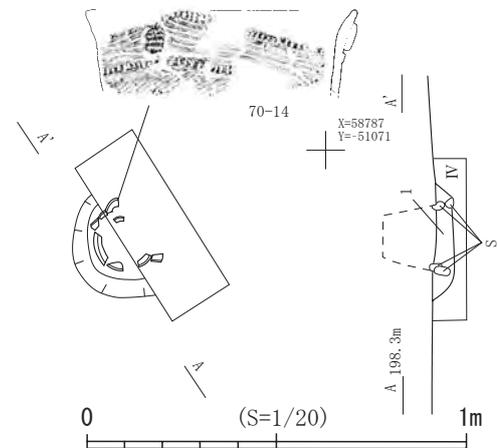
- 第1号土器埋設遺構 (SR01)
 第1層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 p-A粒(φ1~2mm)1%、炭化物粒(φ1~18mm)20%
 第2層 黄褐色土 10YR5/6 掘方、炭化物粒(φ1mm)1%

第2号土器埋設遺構



- 第2号土器埋設遺構 (SR02)
 第1層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒(φ1~3mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/6 掘方、炭化物粒(φ1mm)1%

第3号土器埋設遺構



- 第3号土器埋設遺構 (SR03)
 第1層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ10~30mm)2%、p-A粒(φ1mm)1%、炭化物粒(φ1~3mm)1%

図68 その他の遺構

[小結] 出土遺物から縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての遺構であると考えられる。

第2号小ピット群 (図69・70、写真48)

[位置・確認] I V・W-19・20グリッドに位置し、第III層下面で確認した。SP137~143・253~255の10基が含まれる。

[重複] SP253・254が第36号土坑と重複し、SPが新しい。

[柱穴配置] 主軸を北東-南西とした場合、SP140-143、SP137-254が対をなす4本主であった可能性が

考えられる。

[堆積土]暗褐色・黒褐色土中心の単層で、柱痕は確認できなかった。

[出土遺物]SP138・140・142・143・253・254から土器片が出土し(178g)、1点を図示した(図70-3)。SP139からは二次加工剥片が1点出土した。

[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭～前葉にかけての遺構であると考えられる。

第3号小ピット群(図69・70、写真48)

[位置・確認]IT・U-17・18グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。SP172～175・179・232・247・248・267の9基が含まれる。

[柱穴配置]主軸を東-西とした場合、SP232-175、SP256-172が対をなす4本主であった可能性が考えられる。

[堆積土]暗褐色土中心の単層で、柱痕は確認できなかった。

[出土遺物]SP174から土器片が出土した(12g)。SP232からは搔器が1点出土した(図70-9)。

[小結]出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての遺構であると考えられる。

第4号小ピット群(図69・70、写真34・48)

[位置・確認]IQ・R-12・13グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。SP209～218、235～243の19基が含まれる。

[柱穴配置]主軸を北東-南西とした場合、SP211-239、SP237-242、SP217-236が対をなす6角形の配置であった可能性が考えられる。

[堆積土]暗褐色土中心の単層で、柱痕は確認できなかった。

[出土遺物]SP209・210・211・213・214・216・217・218・237・240・241・242・243から土器片が出土し(450g)、3点を図示した(図70-6・7・11)。SP218から削器が1点(図70-8)、SP211・217・240から二次加工剥片が合わせて5点、SP211・213から微細剥離痕を有する剥片が合わせて2点、SP237から磨り石が1点(図70-10)出土した。

[小結]出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての遺構であると考えられる。

第5号小ピット群(図69、写真34)

[位置・確認]IM・N-13・14グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。SP110～116の7基が含まれる。

[柱穴配置]主軸を北東-南西とした場合、SP110-113、SP116-114が対をなす4本主であった可能性が考えられる。

[堆積土]暗褐色・黒褐色土中心の単層で、柱痕は確認できなかった。

[出土遺物]遺物は、SP110から二次加工剥片が1点出土した。

[小結]縄文時代の遺構であると考えられるが、詳細な帰属時期は不明である。

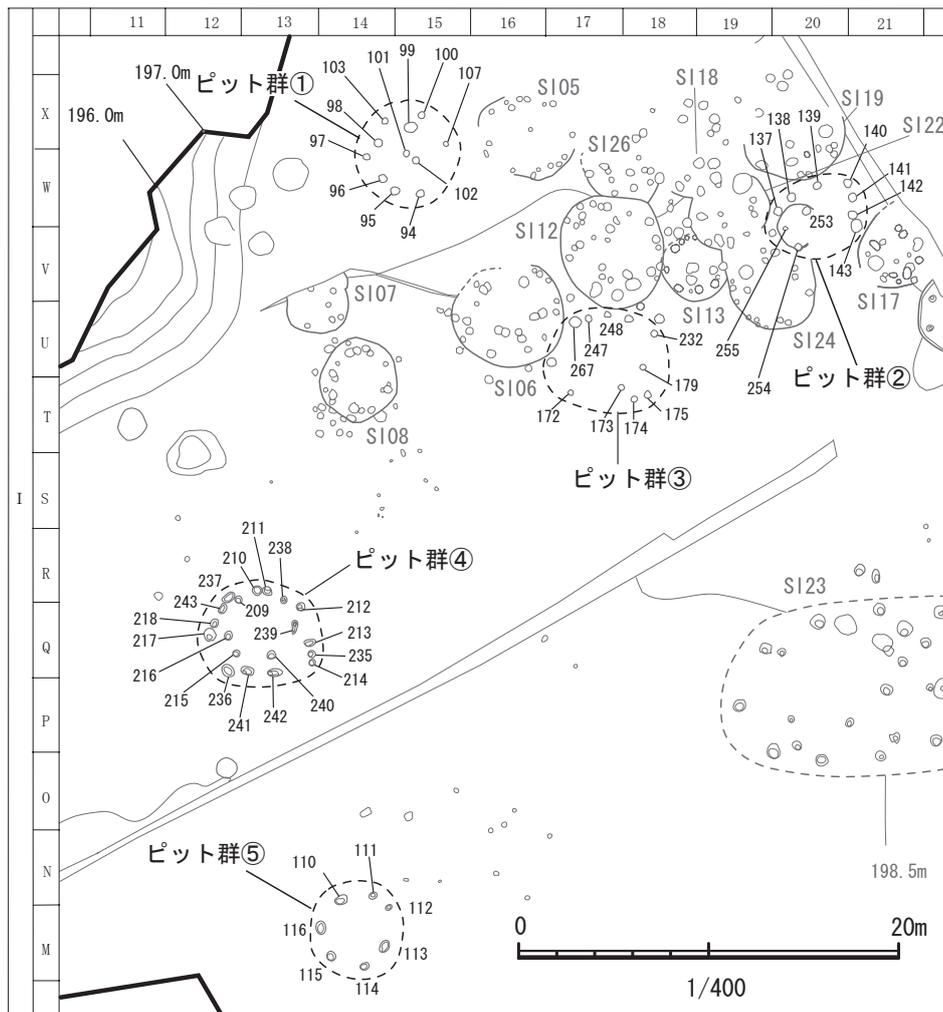
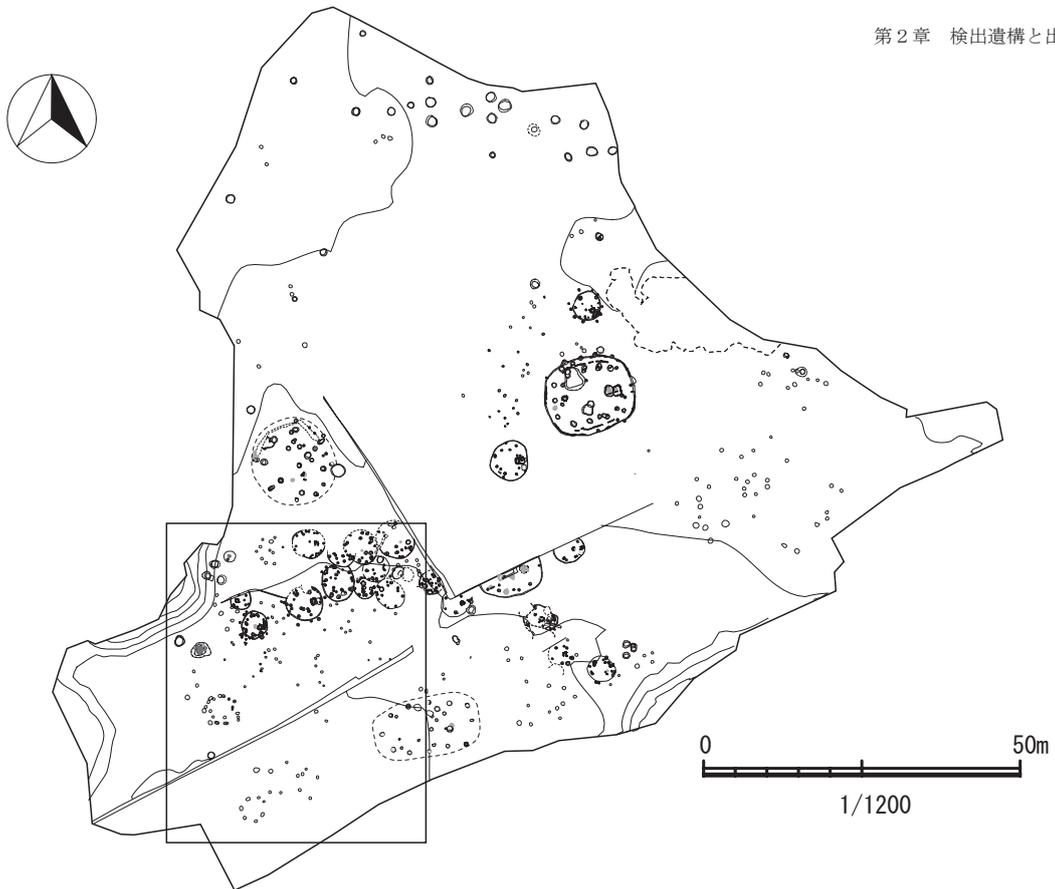
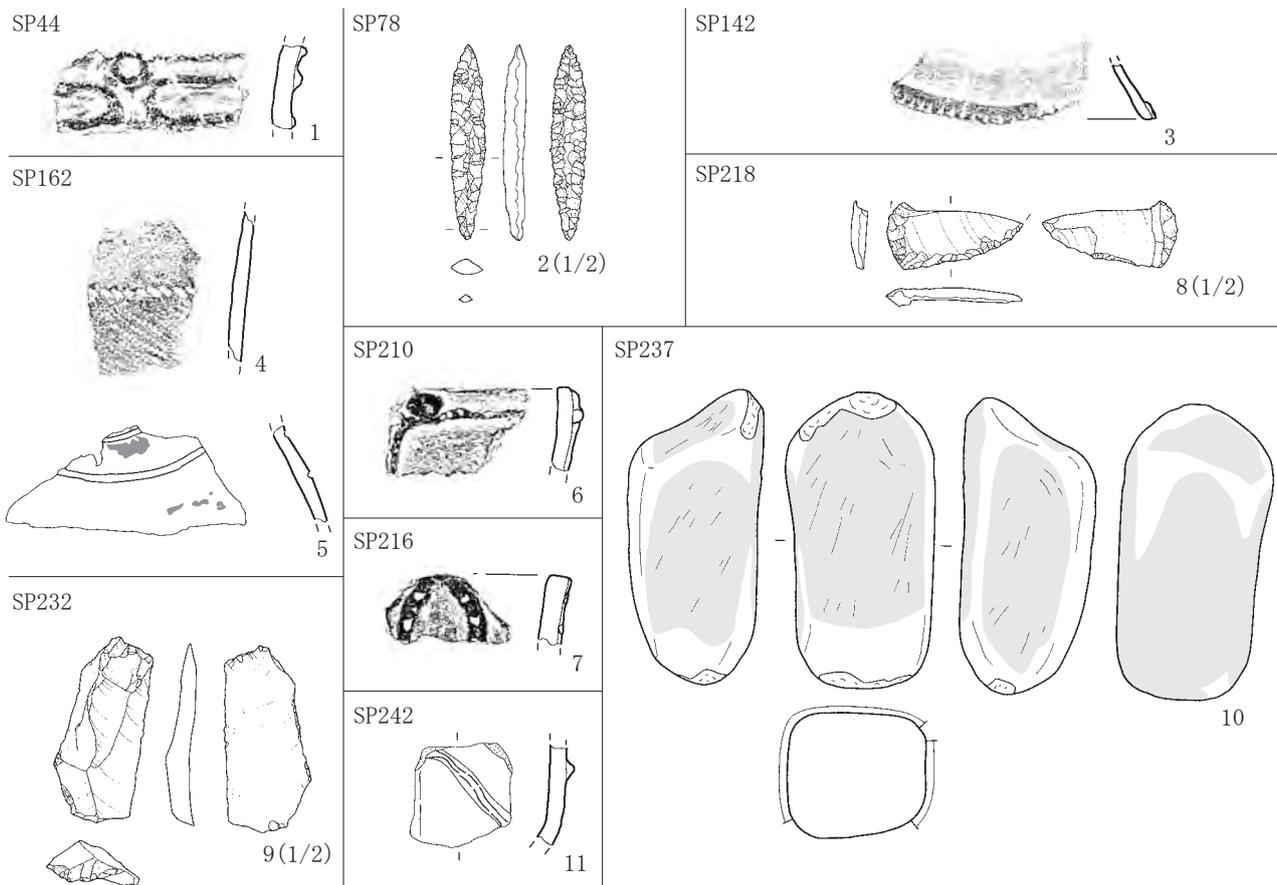


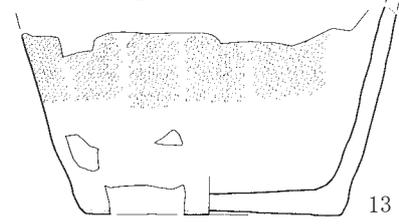
図69 小ピット群配置図



第1号土器埋設遺構



第2号土器埋設遺構



第3号土器埋設遺構

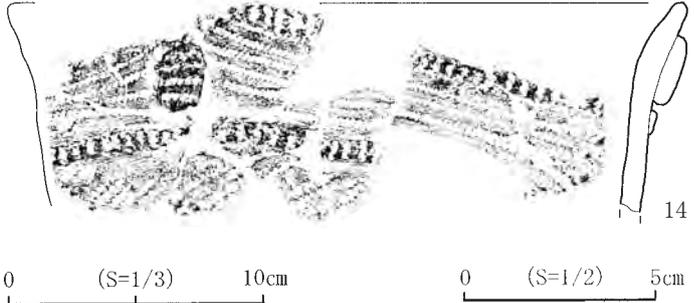


図70 その他の遺構出土遺物

表3 SP属性(1)

遺構名	計測値(cm)			グリッド	備考(出土遺物・重複等)
	開口部	底面部	深さ		
SP1	25×21	13×11	14	II C-24	
SP2	30×23	13×12	2	II D-24	土器19g
SP3	38×38	7×6	38	II E-24	
SP4	41×34	18×10	11	II E-24	
SP5	欠番				
SP6	30×30	20×13	43	II G-23	
SP7	欠番				
SP8	30×23	16×11	20	II F-24	
SP9	34×32	22×20	29	II E-24	
SP10	37×34	26×24	34	II D-24	
SP11	41×34	13×9	19	II F-25	
SP12	28×28	13×11	21	II F-25	
SP13	37×32	13×12	19	II F-25	
SP14	41×33	18×16	33	II F-25	
SP15	25×26	13×13	27	II G-24	
SP16	33×30	19×14	34	II H-25	
SP17	36×31	14×13	25	II G-25	
SP18	64×58	45×38	18	II F-26	
SP19	37×37	21×18	42	II G-27	
SP20	37×30	25×14	22	II G-27	
SP21	60×57	48×39	21	II F-27	
SP22	27×28	16×15	29	II D-24	
SP23	21×24	14×14	25	II D-24	
SP24	22×21	12×11	27	II P-24	
SP25	31×27	21×14	12	II D-23	
SP26	52×40	36×34	8	II E-22	
SP27	33×31	12×10	14	II I-25	
SP28	36×30	20×12	17	II H-25	
SP29	30×27	13×12	30	II H-25	
SP30	38×33	19×18	14	II H-25	
SP31	30×32	18×18	27	II H-24	
SP32	47×45	27×25	16	II O-19	
SP33	62×45	26×21	23	II O-19	
SP34	72×62	38×35	36	II O-19	
SP35	56×53	22×12	44	II B-33	土器23g
SP36	40×35	16×8	38	II C-34	土器9g
SP37	60×54	10×7	28	II A-33	
SP38	55×50	11×8	48	II A-33	土器332g
SP39	45×44	28×8	30	II A-34	
SP40	67×65	30×24	27	II A-34	
SP41	59×59	15×13	37	II A-34	土器49g
SP42	56×50	20×13	24	II B-34	
SP43	欠番				
SP44	50×44	20×18	28	II A-33	土器76g
SP45	60×57	38×34	19	II A-33	
SP46	59×55	19×16	24	II C-32	
SP47	38×34	20×15	26	II C-34	
SP48	54×54	33×24	17	II D-36	
SP49	57×54	32×32	26	II E-34	
SP50	54×51	24×19	30	II A-31	
SP51	70×68	42×40	48	I Y-31	
SP52	89×84	67×60	36	I Y-31	微細
SP53	81×80	63×58	28	I Y-31	
SP54	77×72	44×44	46	I X-32	
SP55	105×100	89×81	42	I Y-32	
SP56	35×34	20×13	33	I Y-34	
SP57	52×50	42×34	28	II B-35	
SP58	63×60	14×9	32	II E-36	
SP59	42×39	21×16	20	II E-36	土器38g、微細
SP60	38×35	12×10	31	II E-36	土器359g、微細
SP61	SK24に変更				
SP62	60×53	14×12	55	II F-35	
SP63	47×44	18×14	58	II F-35	
SP64	62×56	13×12	33	II K-27	
SP65	50×48	16×13	25	II K-26	
SP66	38×33	9×7	50	II L-27	
SP67	44×39	23×21	45	II O-14	
SP68	48×46	21×20	25	II N-14	
SP69	34×33	24×20	28	II C-29	
SP70	57×47	18×16	38	I Y-30	
SP71	29×29	17×12	41	I Y-31	
SP72	78×78	44×25	41	II A-31	
SP73	50×46	37×30	22	II A-32	
SP74	47×41	20×13	26	II E-35	
SP75	61×56	39×38	29	II E-35	
SP76	51×45	20×20	26	II F-34	
SP77	50×50	16×14	37	II F-34	微細
SP78	50×42	44×33	19	II I-15	石錐
SP79	53×52	45×42	29	II I-15	
SP80	63×51	30×28	35	I U-13	土器52g
SP81	第7号竪穴住居跡Pit07に変更				
SP82	第23号竪穴住居跡に変更				
SP83	第23号竪穴住居跡に変更				
SP84	66×60	45×42	14	I R-20	土器3g
SP85	78×44	37×30	49	I R-21	土器16g
SP86	45×44	26×24	45	I S-21	土器48g
SP87	35×34	20×20	35	I S-21	土器34g
SP88	51×49	26×23	49	I S-24	
SP89	70×69	49×48	49	I T-24	土器8g
SP90	66×53	25×21	25	I V-22	>SI09
SP91	74×71	56×54	27	I U-12	土器14g
SP92	58×48	31×14	25	I U-13	
SP93	68×67	28×20	25	I T-13	
SP94	45×44	33×32	61	I W-15	第1号小ピット群
SP95	52×47	24×20	47	I W-14	第1号小ピット群、土器15g
SP96	47×45	31×29	52	I W-14	第1号小ピット群
SP97	40×37	27×24	36	I X-14	第1号小ピット群
SP98	47×46	29×26	18	I X-14	第1号小ピット群
SP99	72×59	52×35	57	I X-14	第1号小ピット群
SP100	40×40	32×20	45	I X-15	第1号小ピット群
SP101	41×34	27×26	37	I X-14	第1号小ピット群
SP102	41×38	23×18	28	I X-15	第1号小ピット群
SP103	38×33	25×22	21	I X-14	第1号小ピット群
SP104	61×57	39×28	17	II F-14	
SP105	64×60	45×45	43	II G-13	土器110g、二次3、微細3
SP106	83×75	63×61	24	II G-16	土器159g、微細
SP107	31×29	15×13	50	I X-15	第1号小ピット群、土器85g、二次
SP108	70×54	38×31	28	I X-35	土器25g
SP109	79×78	57×49	44	I X-35	土器33g、二次、微細
SP110	64×56	47×28	25	I N-14	第5号小ピット群、土器31g、二次
SP111	35×31	21×20	14	I N-14	第5号小ピット群
SP112	35×33	22×19	14	I N-14	第5号小ピット群
SP113	67×57	46×33	14	I M-14	第5号小ピット群
SP114	48×41	33×27	16	I M-14	第5号小ピット群
SP115	52×49	36×35	14	I M-13	第5号小ピット群
SP116	75×59	51×34	25	I M-13	第5号小ピット群
SP117	94×90	59×41	55	I O-14	土器85g
SP118	第23号竪穴住居跡に変更				
SP119	70×67	45×40	30	I O-15	二次
SP120	42×41	29×22	27	I O-15	
SP121	46×37	25×23	20	I O-16	
SP122	48×46	30×23	17	I N-16	
SP123	50×42	29×18	23	I N-16	
SP124	52×45	26×25	21	I O-16	
SP125	39×38	23×22	31	I O-16	
SP126	50×48	33×30	32	I Q-16	
SP127	50×37	20×19	46	I Q-17	
SP128	48×46	26×18	44	I N-15	
SP129	41×37	17×15	22	I N-15	
SP130	第23号竪穴住居跡に変更				
SP131	第23号竪穴住居跡に変更				
SP132	第23号竪穴住居跡に変更				
SP133	第23号竪穴住居跡に変更				
SP134	第23号竪穴住居跡に変更				
SP135	第23号竪穴住居跡に変更				
SP136	第23号竪穴住居跡に変更				
SP137	48×47	28×28	48	I W-19	第2号小ピット群
SP138	50×48	23×20	21	I W-19	第2号小ピット群、土器7g
SP139	48×43	20×20	32	I W-20	第2号小ピット群、二次
SP140	51×47	27×26	46	I W-20	第2号小ピット群、土器6g
SP141	52×47	27×25	53	I W-20	第2号小ピット群

表4 SP属性(2)

遺構名	計測値(cm)			グリッド	備考(出土遺物・重複等)
	開口部	底面部	深さ		
SP142	53×49	40×28	23	I W-20	第2号小ピット群、土器119g
SP143	77×62	52×41	63	I W-20	第2号小ピット群、土器65g
SP144	第23号竪穴住居跡に変更				
SP145	第23号竪穴住居跡に変更				
SP146	第23号竪穴住居跡に変更				
SP147	第23号竪穴住居跡に変更				
SP148	第23号竪穴住居跡に変更				
SP149	45×44	19×15	25	I Q-25	
SP150	55×48	35×26	51	I Q-25	
SP151	49×48	20×18	63	I Q-26	
SP152	37×33	21×19	31	I Q-25	土器10g
SP153	60×48	42×25	35	I Q-26	
SP154	47×46	29×30	58	I R-26	
SP155	37×35	23×22	32	I T-26	
SP156	62×54	23×21	51	I Q-26	土器20g
SP157	第23号竪穴住居跡に変更				
SP158	第23号竪穴住居跡に変更				
SP159	第23号竪穴住居跡に変更				
SP160	47×47	21×17	57	I S-25	土器7g、二次、台石
SP161	第23号竪穴住居跡に変更				
SP162	76×70	50×47	53	I Q-24	土器67g
SP163	25×-	18×-	31	I S-22	
SP164	46×43	17×15	39	I S-27	土器151g
SP165	40×38	21×18	41	I R-25	土器17g
SP166	第23号竪穴住居跡に変更				
SP167	第23号竪穴住居跡に変更				
SP168	27×24	15×15	25	I T-13	土器10g
SP169	28×27	13×13	32	I T-13	
SP170	37×32	25×20	21	I U-15	土器9g
SP171	39×37	25×20	28	I U-15	
SP172	28×27	18×15	20	I T-17	第3号小ピット群
SP173	32×30	19×14	29	I T-17	第3号小ピット群
SP174	32×31	14×10	22	I T-17	第3号小ピット群、土器12g
SP175	38×35	16×15	32	I T-18	第3号小ピット群
SP176	32×31	15×14	23	I U-15	
SP177	37×31	18×18	26	I U-15	土器12g
SP178	36×35	18×13	17	I V-14	
SP179	31×28	16×13	23	I U-18	第3号小ピット群
SP180	41×34	24×19	31	I S-16	
SP181	34×30	20×15	30	I S-16	
SP182	34×32	21×16	32	I S-16	
SP183	40×34	25×18	29	I S-16	
SP184	26×25	14×10	18	I R-16	
SP185	24×22	13×13	20	I R-17	
SP186	36×32	20×18	12	I R-15	
SP187	20×20	14×10	24	I S-14	
SP188	31×21	15×12	13	I R-14	
SP189	40×36	26×24	29	I S-11	
SP190	52×43	26×26	30	I R-11	
SP191	69×63	41×39	32	I R-11	
SP192	24×23	17×15	19	I S-13	
SP193	欠番				
SP194	28×28	14×11	31	I T-15	
SP195	38×33	17×15	25	I T-15	
SP196	44×36	32×18	25	I T-14	土器28g
SP197	25×24	17×15	23	I T-14	
SP198	31×27	-	-	I T-14	
SP199	42×38	14×14	26	I S-15	
SP200	34×32	17×16	26	I S-15	
SP201	40×37	20×16	18	I T-18	
SP202	28×26	16×15	19	I S-18	
SP203	32×29	11×9	25	I S-19	
SP204	27×27	18×14	23	I S-19	土器59g
SP205	28×25	15×15	22	I S-14	
SP206	32×21	18×11	28	I S-14	
SP207	23×23	15×11	26	I S-14	土器2g
SP208	20×18	13×13	9	I S-14	
SP209	34×33	21×17	28	I R-12	第4号小ピット群、土器25g
SP210	48×48	38×35	25	I R-12	第4号小ピット群、土器23g
SP211	47×44	26×19	54	I R-13	第4号小ピット群、土器135g、二次、微細

遺構名	計測値(cm)			グリッド	備考(出土遺物・重複等)
	開口部	底面部	深さ		
SP212	42×40	17×7	42	I R-13	第4号小ピット群
SP213	54×36	34×28	44	I Q-13	第4号小ピット群、土器19g、微細
SP214	34×31	23×23	28	I Q-13	第4号小ピット群、土器2g
SP215	37×35	27×20	31	I Q-12	第4号小ピット群
SP216	39×38	28×23	30	I Q-12	第4号小ピット群、土器65g
SP217	64×61	25×25	51	I Q-12	第4号小ピット群、土器30g、二次3
SP218	42×41	24×18	30	I Q-12	第4号小ピット群、土器7g、削器
SP219	56×56	38×36	10	II A-37	
SP220	49×45	32×31	38	II A-37	
SP221	53×49	34×31	53	I Y-36	
SP222	55×54	36×35	51	I Y-36	土器149g、微細
SP223	48×42	34×24	40	I Y-36	
SP224	43×41	24×18	35	I S-30	
SP225	33×32	24×18	37	I S-30	
SP226	41×38	27×24	43	I S-29	二次
SP227	70×64	32×29	36	I S-29	
SP228	57×50	28×21	55	I R-26	
SP229	55×51	25×23	62	I R-26	
SP230	第23号竪穴住居跡に変更				
SP231	第23号竪穴住居跡に変更				
SP232	36×34	21×18	36	I U-18	第3号小ピット群、搔器
SP233	欠番				
SP234	35×35	22×21	25	I U-19	
SP235	39×37	22×21	35	I Q-13	第4号小ピット群、土器168g
SP236	62×61	32×32	41	I U-19	土器137g
SP237	55×45	42×36	41	I R-12	第4号小ピット群、土器19g、磨り石
SP238	28×25	11×5	14	I R-13	第4号小ピット群
SP239	71×21	14×13	39	I Q-13	第4号小ピット群
SP240	37×36	27×25	17	I Q-13	第4号小ピット群、土器11g、二次
SP241	53×34	21×12	18	I Q-12	第4号小ピット群、土器11g
SP242	78×39	20×18	49	I Q-13	第4号小ピット群、土器82g
SP243	50×40	28×19	29	I R-12	第4号小ピット群、土器22g
SP244	31×21	22×18	44	I S-28	
SP245	32×31	13×13	35	I R-28	
SP246	欠番				
SP247	35×30	21×17	27	I U-17	第3号小ピット群
SP248	30×27	18×13	25	I U-17	第3号小ピット群
SP249	48×41	26×25	23	I O-16	
SP250	第23号竪穴住居跡に変更				
SP251	50×47	40×31	21	I U-12	
SP252	44×43	21×15	57	I V-12	
SP253	39×38	31×23	42	I W-20	第2号小ピット群、土器28g、SK36Pit01から変更、>SK36
SP254	37×30	27×25	43	I V-20	第2号小ピット群、土器12g、SK36Pit02から変更
SP255	24×22	19×10	14	I W-19	第2号小ピット群、SK36Pit03から変更、>SK36
SP256	43×40	28×26	25	II I-27	SI02Pit16から変更
SP257	44×37	25×10	18	I I-26	SI02Pit17から変更
SP258	41×28	22×19	28	II I-27	SI02Pit18から変更
SP259	32×28	21×16	37	I W-18	SI12Pit22から変更
SP260	48×46	25×23	56	I W-18	SI12Pit24から変更、土器13g
SP261	60×47	21×18	30	I W-18	SI12Pit25から変更
SP262	39×35	32×30	7	I W-18	SI12Pit28から変更
SP263	41×32	35×14	22	I U-18	第3号小ピット群、SI12Pit30から変更
SP264	44×41	27×23	29	I U-18	SI12Pit31から変更
SP265	20×18	14×14	14	I W-18	SI12Pit47から変更
SP266	35×34	30×28	9	I V-18	SI12Pit48から変更
SP267	57×53	37×35	32	I U-17	第3号小ピット群、SI06Pit16から変更

第4節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、調査区西側斜面部・南側斜面部（沢）に形成された遺物包含層（図71）出土遺物を中心に扱う。表記は「西斜面」「南斜面」とした。また、表土・耕作土、風倒木と思われる痕跡や、トレンチから出土したもの、調査時にSXなどで精査したものの遺構として認定できなかった範囲から出土したものなども合わせて遺構外遺物として取り扱うこととする。これらの表記は「その他」とした。また、出土地点については全てグリッドに振り替えており、参考として調査時に取り上げた旧遺構名やトレンチ名等を観察表に付した。出土層位は基本層序の第Ⅰ～Ⅲ層であるが、西・南斜面部の層番で取り上げたものについてはそのままの表記とした。層位の対応については、第1章第4節「基本層序」を参照いただきたい。なお、出土地点・層位がはっきりしない遺物については、不明・一括などという表記にした。

遺物（土器）の分布状況について概観してみる（図71）と、西斜面部のIM-X-7～13グリッド付近、南斜面部のIQ-S-28～32グリッド付近に土器を中心とした遺物の集中が窺える。層位は基本層序第Ⅱ層からの出土が多かった。また、その他として、SX01として精査した範囲からも遺物が出土している。なお、SX01は土（粘土）を採取した跡地に周囲の土壌（遺物包含層）を近現代になってから埋め戻した範囲であったと考えられる（第3章第1節 参照）ため、層位は攪乱ということとした。

土器については、出土地点によって若干の時期差が認められたため、主な地点ごとに記載することとし、合わせて石器・その他の遺物についても、主な地点ごとに記載していくこととする。なお、個々の遺物の詳細については、巻末の遺物観察表にまとめた。

1 土器

遺構外から出土した土器の総重量は、およそ133kgである。出土地点によって若干の時期差が認められたため、西斜面部、南斜面部、その他に分けて記載する。

西斜面部（図72～75、写真49～51・54・55）

IN-X-7～13グリッドを本範囲とする。本範囲の出土土器重量はおよそ54kgで、最も多く出土したのはIV-12グリッドからであり、重量はおよそ15kgであった。本範囲は、調査区西側に開析する蟹沢に向かって緩斜面となっており、遺構が密集する平坦面の落ち際付近に第Ⅱ～Ⅲ層のいわゆる遺物包含層を形成する範囲である。復元個体は少なく、多くは破片資料である。時期別にみると、縄文時代中期・後期の資料の他、晩期の資料が少量ではあるが出土している。

縄文時代中期の土器は、前葉と末葉に属するものが出土した（図72-1～16）。特に中期前葉の土器は本範囲のみから出土している。図72-1は時期・観察表との整合、2～6は円筒上層a式である。いずれの破片にも口縁部文様帯には側面圧痕が施される。6は把手部であるが把手内部は未貫通である。図72-7～16は縄文時代中期末葉（大木10式併行期）～後期初頭の資料であると考えられる。7・13・14はアルファベット状の曲線文や方形区画状の区画文が施される。12～16には鱗状の隆帯・隆線文が外面及び内面に貼付される類である。

縄文時代後期の土器は初頭と前葉に属するものが出土した（図72-17～29、図73、図74-1～3）。図72-17～29、図73-1～28は縄文時代後期初頭～前葉の資料であり、出土数が最も多かった。隆帯で文様構成するものが多く見られるが、側面圧痕が施されるもの（図72-17～27）、小円形状の隆帯もし

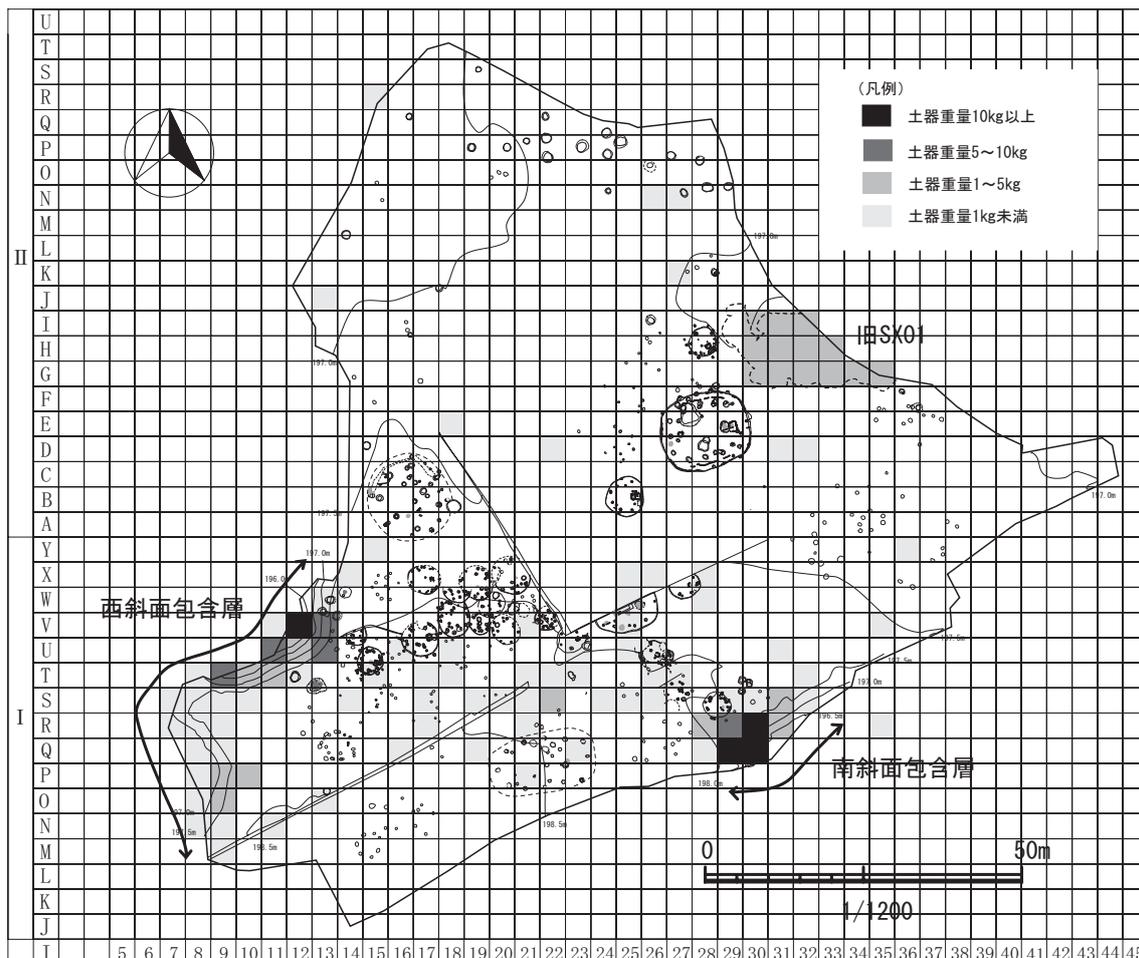


図71 遺構外出土土器重量・分布

くはボタン状の貼付が施されるもの（図72-23～25、図73-6～19）がある。隆帯で文様構成するものには、三角形の区画文（図72-28・29）、渦巻き状（図73-1・2）、馬蹄形状（図73-8）、U字・逆U字状（図73-23・27）のものも見られる。隆帯上に刺突列を施すもの（図72-25、図73-6～9・11・13・16・17・20・21・22・24・26～28）の他、刻目を施すもの（図73-10・12・14・15・18・25・26）、LR側面圧痕を施すもの（図73-2）、RL回転施文を施すもの（図73-19）もある。また、狩猟文土器で樹木をかたどった隆帯文を施す例もある（図73-29）。図73-30は異形土器として扱ったが、台形状の器形をしているものの、上部も下部も空洞となっており器種名を付けかねた。体部には円形状もしくは半円形状の透かし孔が確認できる。図73-31・32、図74-1～3は、縄文時代後期前葉に比定されるものである。いずれも無文に沈線文を施す類であり、横位沈線を施すもの（図74-2）、波頭状または曲線状の沈線を施すもの（図73-31・32、図74-1・3）がある。

縄文時代晩期の土器は前葉に属するものが少量出土した（図74-19・20）。出土地点は離れているものの同一個体になるものと考えられる。いずれの破片にも横位沈線・三叉状の沈線文が施されている。

縄文時代中期末葉～後期前葉までの広範囲に比定される地文のみ・底部破片等をまとめた（図74-4～18、図75-1～12）。図74-4～18は縄文時代中期末葉～後期初頭までに比定される地文のみの一群である。単節のLRまたはRL原体を縦回転させるもの（図74-4・6～9・12・14～16）、無節の

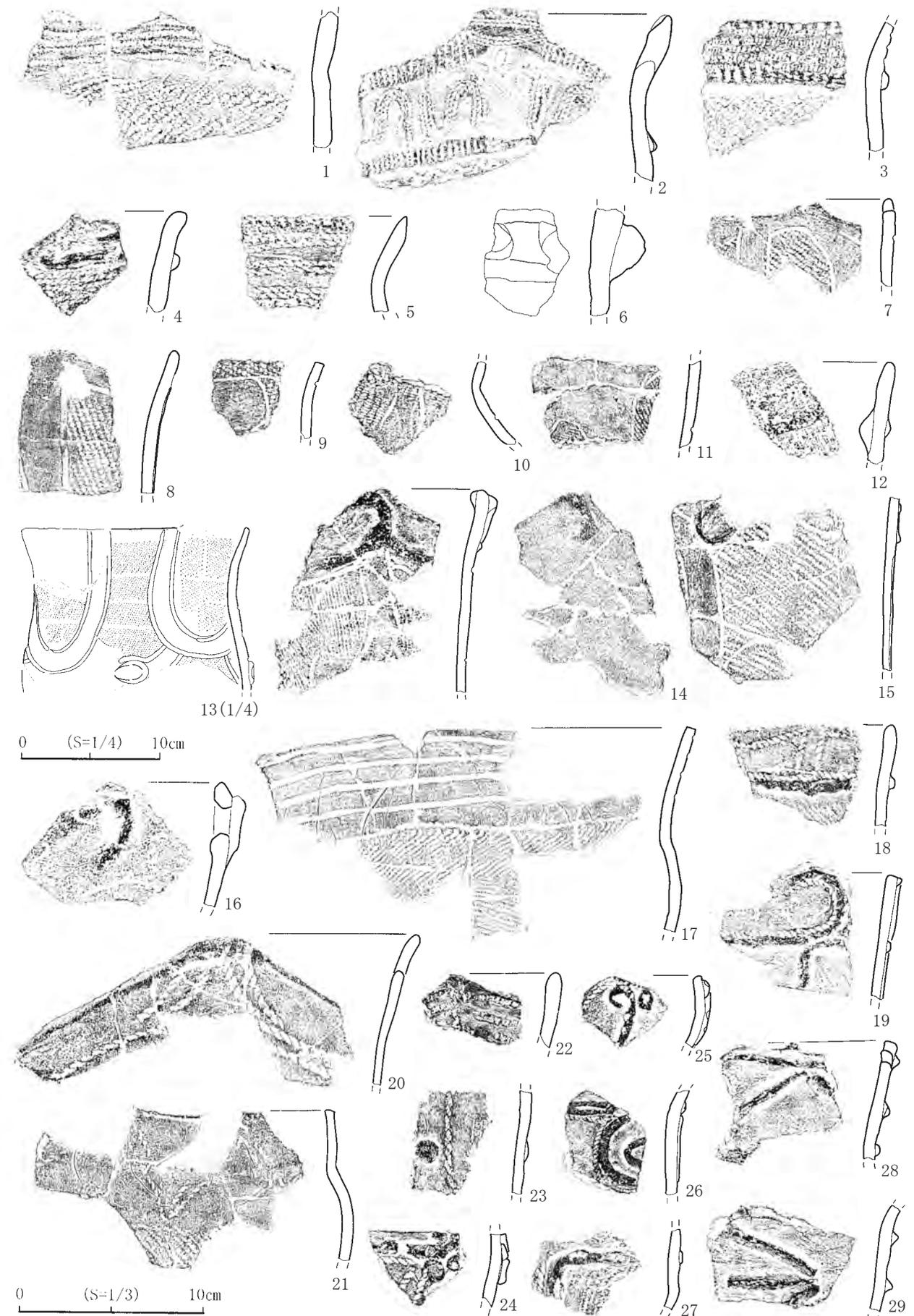


图72 遺構外出土土器 (1) 西斜面①



图73 遺構外出土土器 (2) 西斜面②

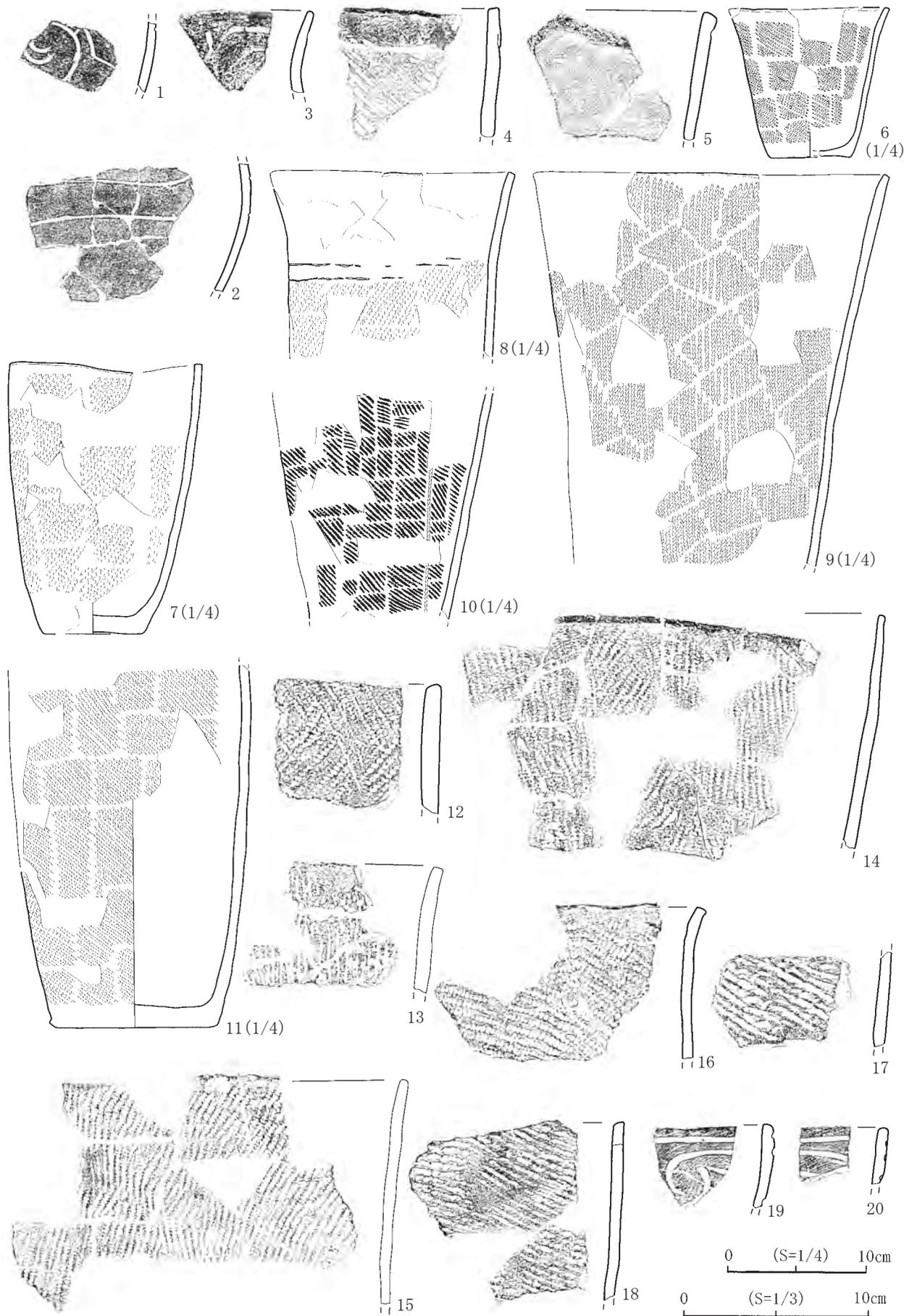


图74 遺構外出土土器 (3) 西斜面③

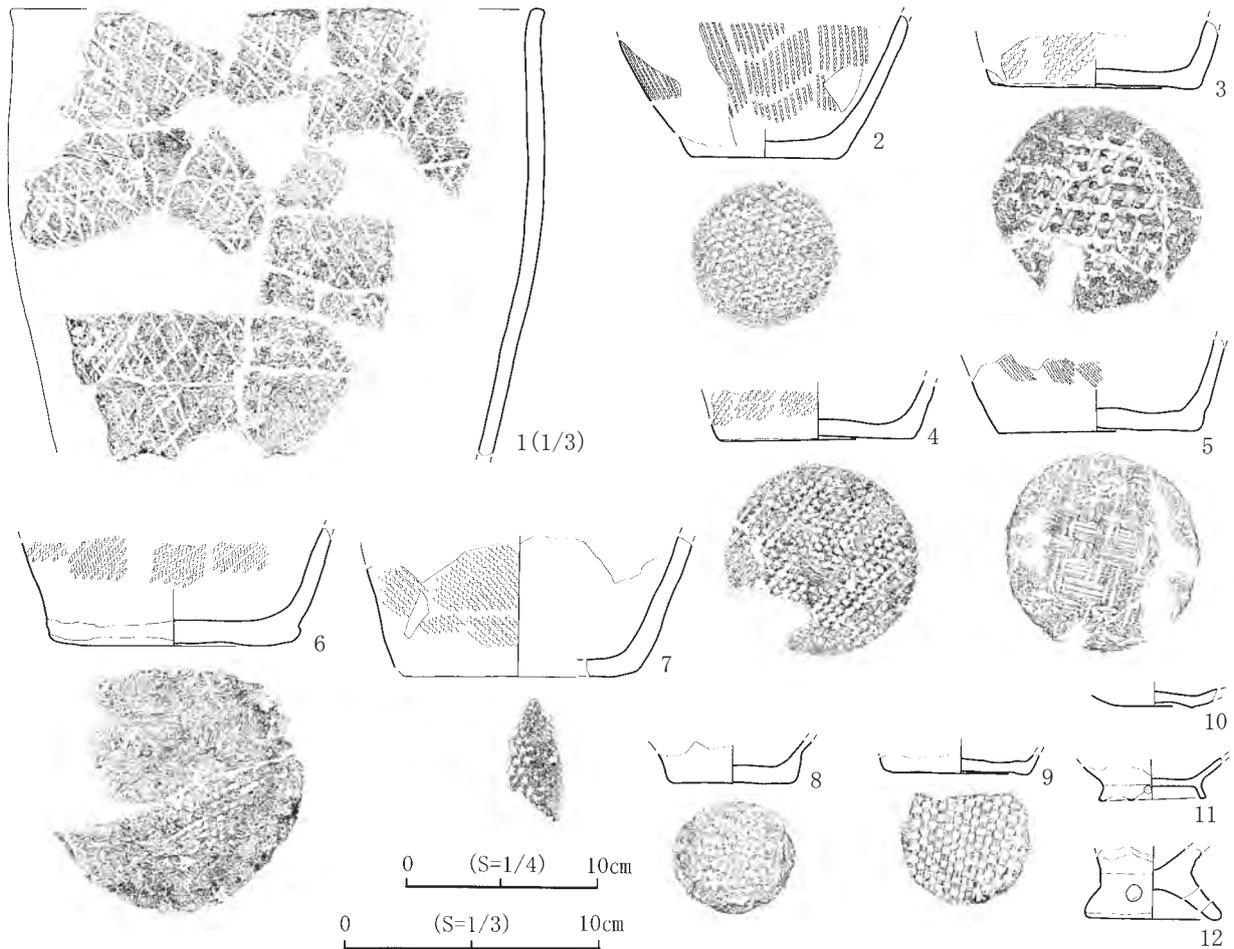


図75 遺構外出土土器（4）西斜面④

L原体を縦回転させるもの（図74-17・18）、単軸絡条体第1類を施文するもの（図74-10・11・13、図75-2）などがある。10は縦位に側面圧痕が施されるため後期初頭に属する可能性が高い。また、網目条捺糸文を施すもの（図75-1）は後期前葉まで幅をもたせたい。図75-2～12は底部破片である。2～9には、底面に網代痕（編物痕）が見られる。11と12は後期前葉の台付鉢形の台部であり、12の台部には穿孔が見られる。

南斜面部（図76～79、写真51～53・55・56）

I Q～S-28～32グリッドを本範囲とする。本範囲の出土土器重量はおよそ61kgで、最も多く出土したのはI Q-29・30、I R-30グリッドからであり、いずれの重量はおよそ15kg前後であった。本範囲は、調査区南側から東側に抜ける沢状の落ち込みに向かって緩斜面となっており、遺構が密集する平坦面の落ち際付近に第Ⅱ～Ⅲ層のいわゆる遺物包含層を形成する範囲である。復元個体は少なく、多くは破片資料である。時期別にみると、縄文時代中期末葉～後期前葉にかけての資料が出土している。

縄文時代中期の土器は、末葉（大木10式併行期）に属するもののみが出土した（図76-1～6）。アルファベット状の曲線文（1～5）や平行沈線文（6）が施されるものである。

縄文時代後期の土器は初頭と前葉に属するものが出土した（図76-7～36、図77、図78、図79-1～8）。図76-7～36、図77、図78、図79-1～3は縄文時代後期初頭の資料であり、出土数が最も多かった。隆帯で文様構成するものが多く見られるが、側面圧痕が施されるもの（図76-12～17）、小円

形状の隆帯もしくはボタン状の貼付が施されるもの（図76-17・27～30・32～36、図77-1・3～5・10・11）、口唇部内面に鱗状の隆帯を貼付けるもの（図76-7～10）、波状口縁に大きな透かし孔を有するもの（図76-18～20、23）、地文に刺突文を施文するもの（図77-1～6）がある。裏面に鱗状隆帯を有する図76-8・9は、表面に沈線文しか確認できないため中期末葉に属する可能性が考えられる。隆帯で文様構成するものには、三角形の区画文（図77-11～13）、S字状に蛇行するもの（図77-1・9・10）が見られる。また、隆帯上に刺突列を施すもの（図76-27・28・30・32、図77-1・4・5・7・8・10・13・14・15・17・25・32～34）のほか、刻目を施す例もある（図76-16、図77-3・9・11・12・16・18～20・23・26・27・30）。図76-33は、隆帯上にR L回転施文、図77-22は、隆帯上にL R側面圧痕が施されている。図78-1は狩猟文土器である。口径21.0cm、底径10.4cm、器高25.7cmの深鉢形である。最大径は胴部上半にあり、およそ25cmである。文様帯は口縁部から胴部上半までであり、1単位が2条の横位隆帯（隆帯間R L側面圧痕）を口唇部1単位、胴部上半2単位を貼付けて区画している。文様帯には隆帯により樹木状、方形状、弓矢状、円形・楕円形状、動物状の文様を貼付けしている。楕円形状の上部および動物状の下部には突起状の貼付が認められる。文様帯の地文はアルファベット状の充填縄文であり、古い要素が窺える。胴部下半は単節R Lを縦回転に施文している。この他に、樹木状の隆帯を貼付けた破片も確認された（図77-35）。その他、沈線に円形刺突列を施すもの（図79-1）、円形刺突列で文様構成するもの（図79-2・3）があるが、これらは後期初頭よりも新しい可能性がある。図79-4～8は、縄文時代後期前葉に比定されるものである。無文に横位沈線のみを施すもの（4・5・8）、波頭状または曲線状の沈線を施すもの（6・7）がある。

縄文時代中期末葉～後期前葉までの広範囲に比定される地文のみ・底部破片等をまとめた（図79-9～19）。9～13は縄文時代中期末葉～後期初頭までに比定される地文のみの一群である。複節のR L R原体を横回転縦回転させるもの（13）、単節のR L原体を縦回転もしくは斜回転させるもの（9・12・14・15）などがある。12の頸部付近には側面圧痕が横位に施されており、後期初頭に属する可能性が高い。14～19は底部破片である。14～17には、底面に網代痕（編物痕）が見られる。18と19は台付鉢形の台部であり、後期前葉に比定される。

その他（図80、写真54～56）

旧SX01およびその他の遺構外から出土したものをまとめる。その他の遺構外出土土器重量はおよそ18kgで、最も多く出土したのはⅡG～I-30～35グリッドの旧SX01からであり、重量はおよそ6kgであった。復元個体はほとんどなく、多くは破片資料である。時期別にみると、縄文時代中期末葉～後期前葉の資料が出土している。

縄文時代中期の土器は、末葉（大木10式併行期）に属するもののみが出土した（図80-1～3）。アルファベット状・横位の沈線文を施すもの（1・2）、口唇部内面に鱗状隆帯を貼付けるもの（3）、である。

縄文時代後期の土器は初頭と前葉に属するものが出土した（図80-4～18）。4～16は縄文時代後期初頭の資料であり、側面圧痕が施されるもの（5～7）、渦巻き状の隆帯で文様を施すもの（8）、地文に刺突文を施文するもの（11）がある。4の隆帯は、鱗状隆帯が変化してきたものと考えられる。また、隆帯により何らかの文様を施した破片が4点出土した（12～15）。樹木をかたどったと考えら

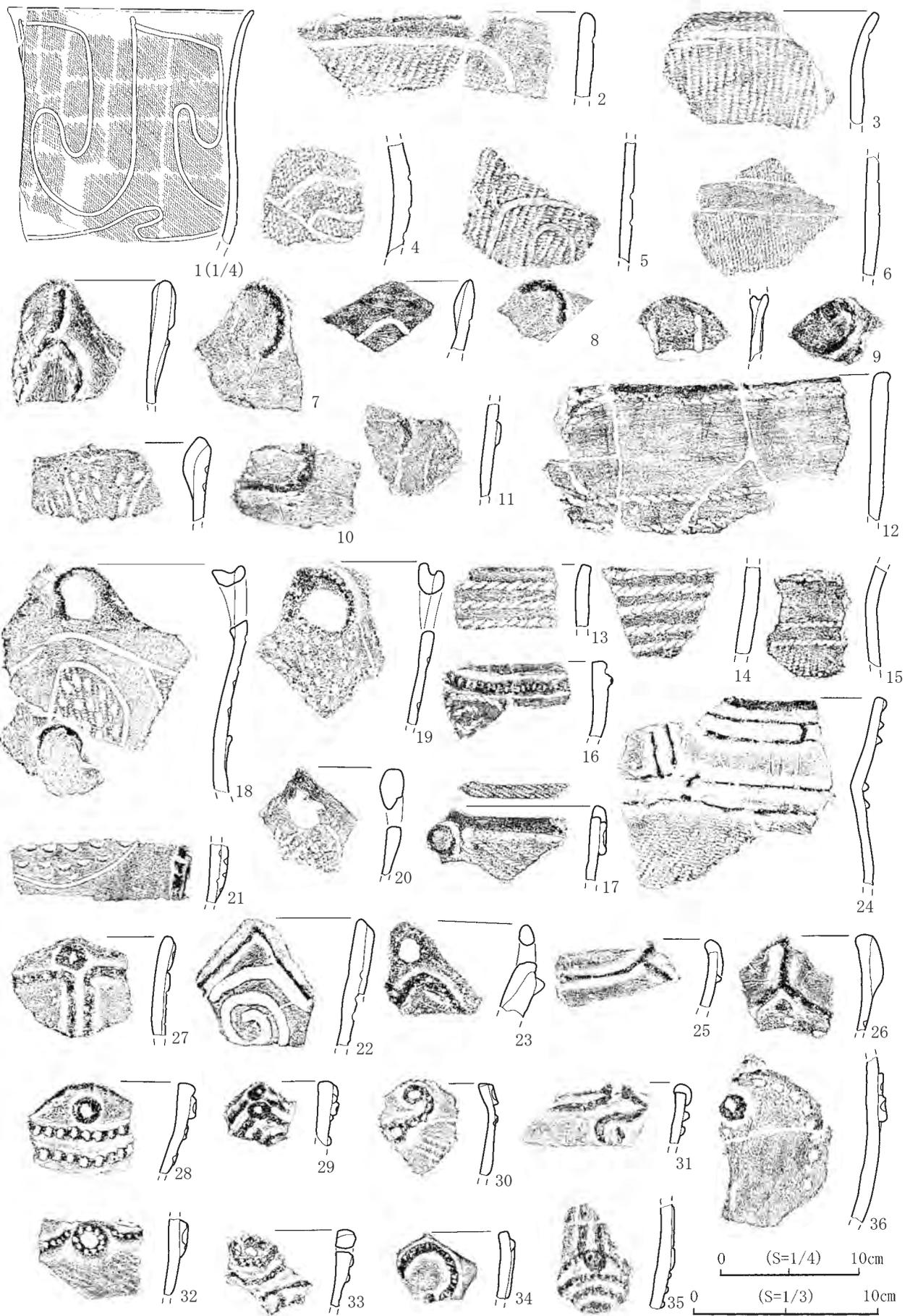


图76 遺構外出土土器(5)南斜面①

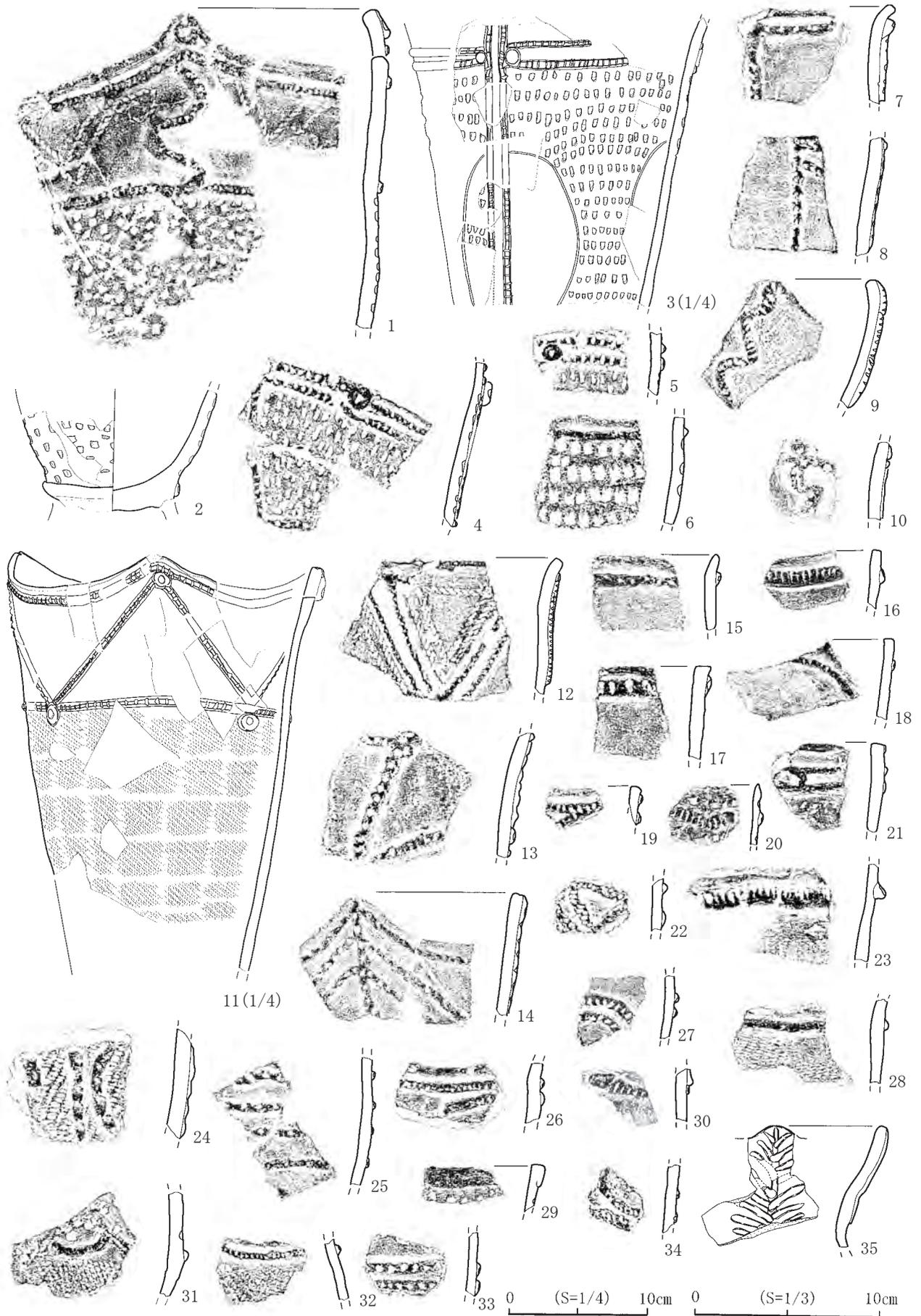


图77 遺構外出土土器 (6) 南斜面②

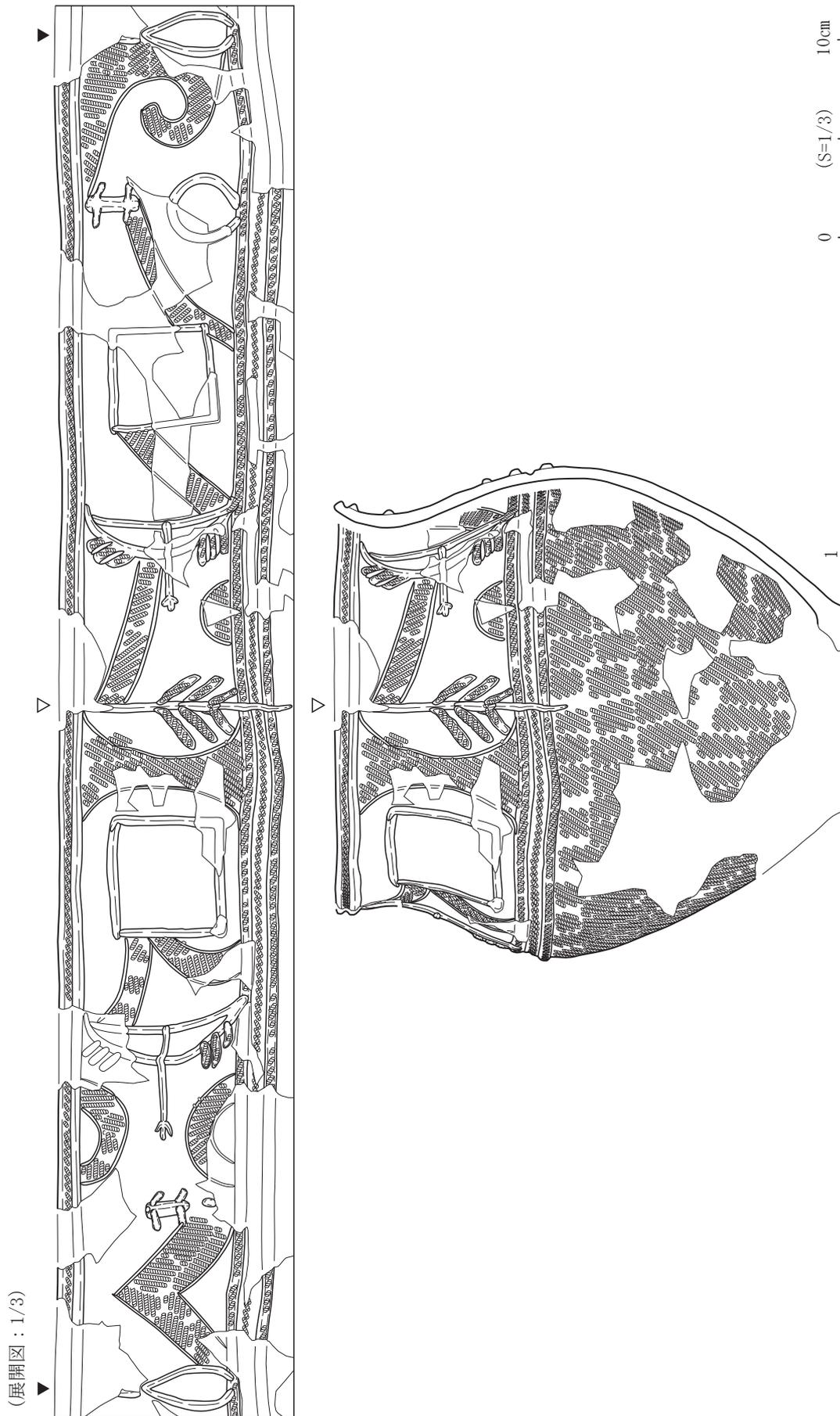


図78 遺構外出土土器(7)南斜面③

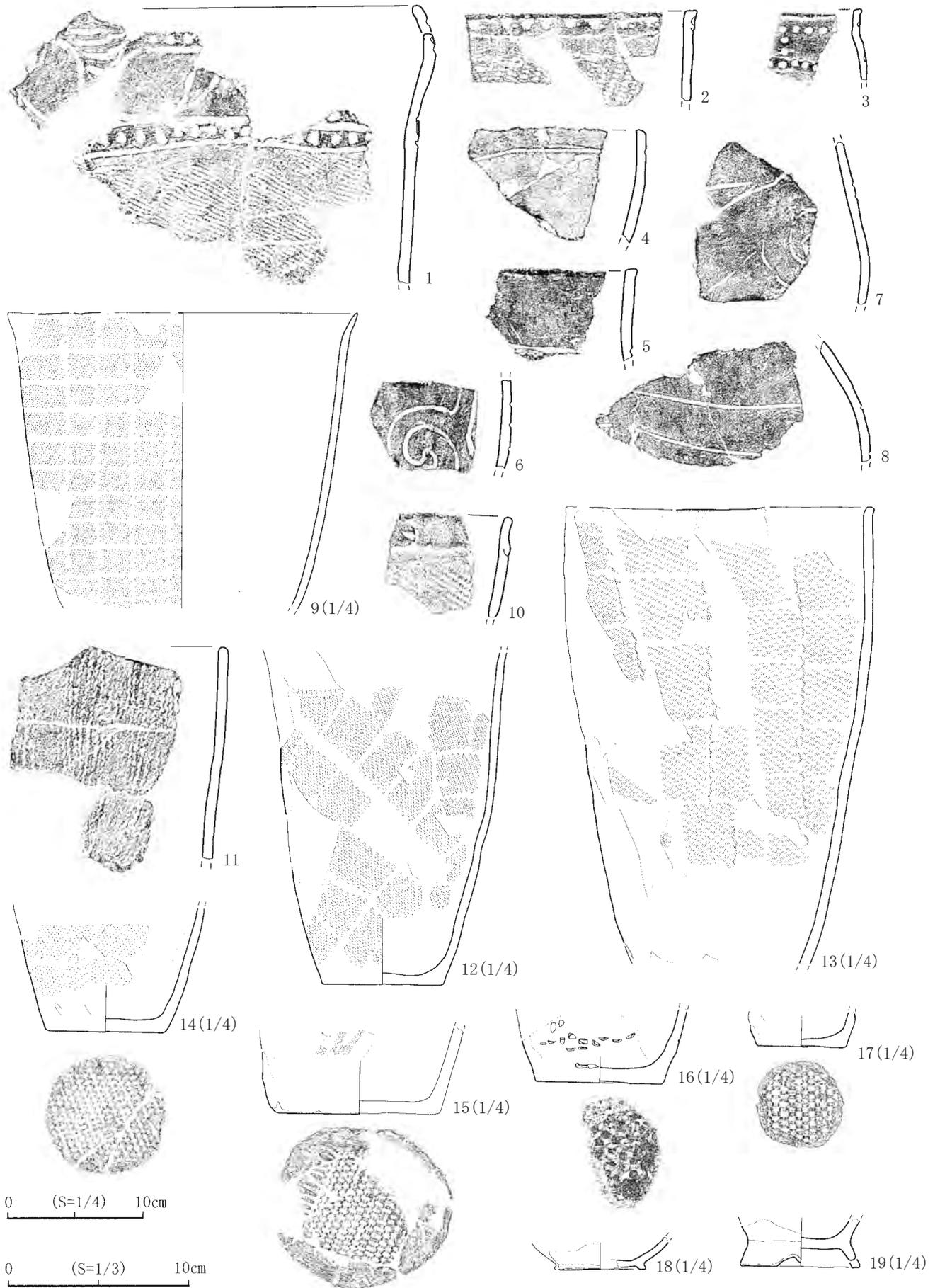


图79 遺構外出土土器 (8) 南斜面④

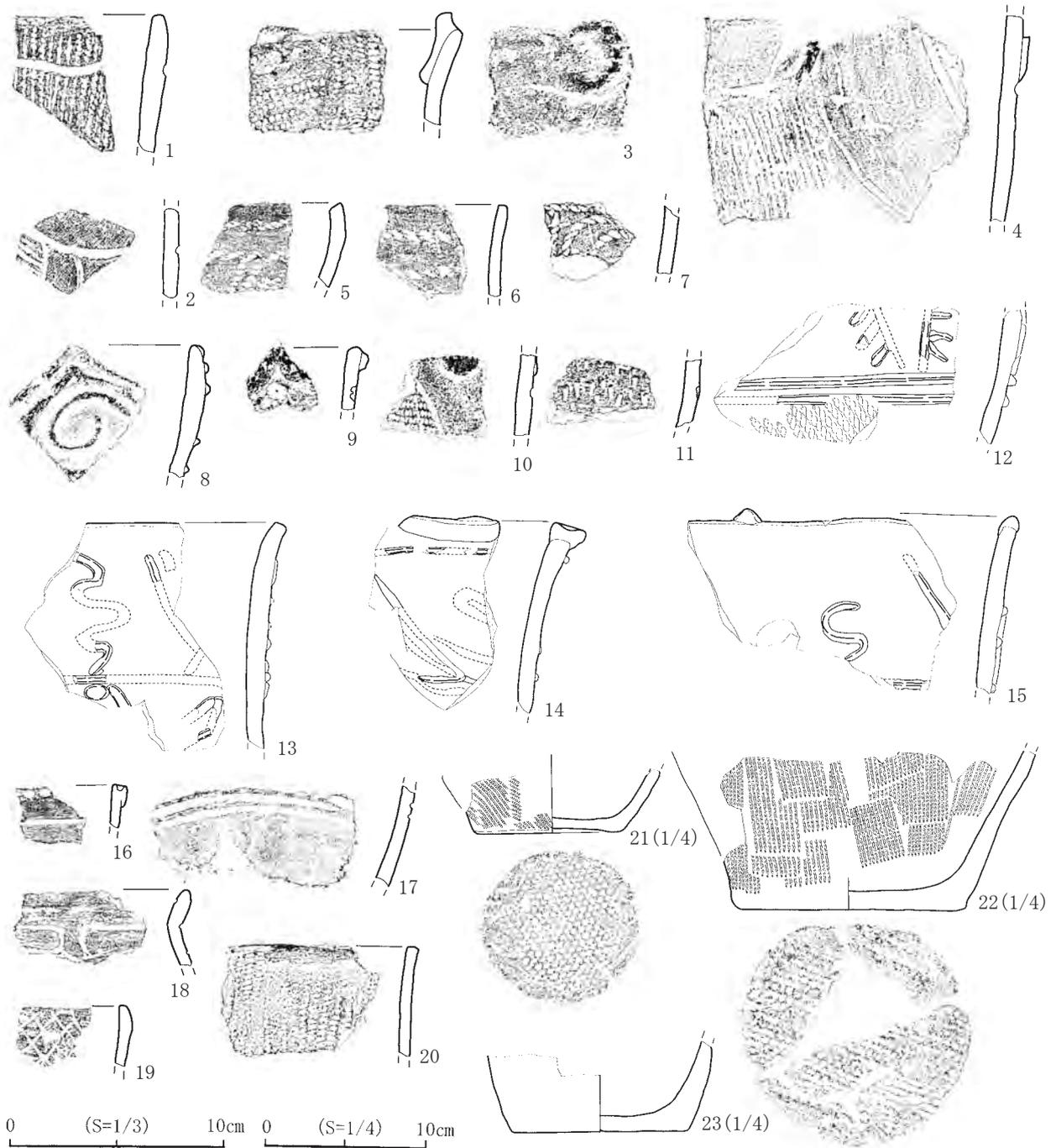


図80 遺構外出土土器(9)その他

れるもの(12)、S字状の曲線文が描かれたもの(13・15)。横位・斜位の文様を施したもの(14)である。14は口唇部を肥厚させ、15には口唇部に突起がつく。いずれも焼成が良好で橙色の焼き色である。図80-17・18は後期前葉の資料である。無文に横位沈線が施されるもの(17)、巴状の沈線文が施されるもの(18)である。

縄文時代中期末葉～後期前葉までの広範囲に比定される地文のみ・底部破片等は、単節のRL原体を斜回転させるもの(20)、網目状撚糸文を施すもの(19)、底部破片では、底面に網代痕(編物痕)が見られるもの(21・22)、無文の調整底のもの(23)がある。

2 石器

遺構外から出土した石器は大きく分けて、剥片石器1213点（約26kg）、礫石器241点（約202kg）である。詳細な出土地点・層位、計測値、石材等については観察表にまとめた。以下、器種ごとに記載していく。

剥片石器

剥片石器は、西斜面部で約13kg、南斜面部で約5kg、その他の遺構外で約8kgが出土した。出土数が多かったのが西斜面部ではIV-12グリッド（約1.4kg）、南斜面部ではIQ・R-29・30グリッドの中でもIR-30グリッドが最も多かった（約1.9kg）、その他の遺構外では、旧SX01からの出土が目立った。以下、器種ごとに詳細を記載していく。

石鏃は、西斜面部26点・南斜面部8点、その他遺構外17点、計51点出土し19点を図示した（図81-1～11、図85-1～4、図87-1～4）。無茎鏃（7点、図81-1～3、図85-1、図87-1～3）、有茎鏃（11点、図81-4～10、図85-2～4、図87-4）に大別され、円基鏃が1点である（図81-11）。石材は、図87-1は石英、図81-1・3は黒曜石で、他は全て珪質頁岩製である。図81-5・6・9、図85-1にはアスファルトの付着が確認できる。図87-3には火はじけの痕跡がある。

石匙は、西斜面部のみから6点出土し、3点を図示した（図81-12～14）。縦型（図81-12）と横型（図81-13・14）に分けられる。図81-13のつまみ部にはアスファルトが広範囲に付着している。

石錐は、西斜面部25点・南斜面部4点、その他遺構外22点、計51点出土し6点を図示した（図81-15・16、図85-5、図87-5～7）。剥片の一端部に二次加工により錐部を作出するもの（図81-15、図85-5、図87-6・7）また、図81-16、図87-5は、石鏃のように全面調整加工するものである。

削器は、不定型剥片の側縁に連続的な二次加工で刃部を作出するもので、西斜面部36点・南斜面部10点、その他遺構外40点、計86点出土し11点を図示した（図81-17～20、図85-6～8、図87-8～10・12）。西斜面部から出土したものには、石錐としてもよいもの（図81-17）、縦型剥片の1側縁に刃部（図81-18）、半周にかけて刃部（図81-19）を作出するものがある。図81-20は、両側縁に抉りを入れるつくりとなっている。南斜面部から出土したものには、V字状に刃部を作出するもの（図85-8）。小さな剥片素材を使用し、周縁を加工しているもの（図85-6）がある。その他の遺構外から出土したものには、小さな剥片素材を使用し、周縁を加工するもの（図87-8・9・11）、下端部のみを加工するもの（図87-10）がある。

搔器は、下端部に急角度な二次加工で刃部を作出するもので、西斜面部15点・南斜面部3点、その他遺構外12点、計30点出土し7点を図示した（図81-21・22、図85-9・10、図87-11・13・14）。西斜面部から出土した2点（図81-21・22）は、小型で縦長の剥片素材を使用するものである。南斜面部から出土したもの（図85-10）は、大きめの剥片素材を使用し、下端部のほか一側縁のみを調整加工する特徴がある。その他の遺構外から出土したもの（図87-14）は、小型の剥片素材を刃部のみ加工するものである。

石核は、西斜面部40点・南斜面部15点、その他遺構外16点、計71点出土したが図示しなかった。

二次加工剥片は、不定型剥片の側縁における連続的な二次加工が削器より少ないもので、西斜面部140点・南斜面部42点、その他遺構外97点、計249点出土したが、図示しなかった。

微細剥離痕を有する剥片は、不定型剥片の側縁に使用痕とみられる微細な剥離のあるもので、西斜

面部250点・南斜面部87点、その他遺構外263点、計600点出土したが、図示しなかった。

礫石器

礫石器は、西斜面部で約146kg、南斜面部で約15kg、その他の遺構外で約41kgが出土した。圧倒的に西斜面部からの出土が多く、剥片石器同様、IV-12グリッドからの出土数(約82kg)が最も多かった。以下、器種ごとに詳細を記載していく。

磨製石斧は、西斜面部5点、その他遺構外2点、計7点出土し6点を図示した(図81-23~26、図87-15・16)。西斜面から出土した小型のもの(図81-23・24)の石材は緑色細粒岩凝灰岩、図81-25は頁岩、図81-26は輝緑岩である。図81-25には整形時の敲打痕が残存する。その他の遺構外から出土したものの石材は、図87-15が緑色細粒岩凝灰岩、図87-16が粘板岩である。

石錘は、西斜面部10点・南斜面部4点、その他遺構外2点、計16点出土し7点を図示した(図82-1・2、図85-11~13、図87-17・18)。全て短軸加工であり、図87-17は磨り+敲きの複合痕をもつ礫からの転用である。

磨り石は、西斜面部57点・南斜面部8点、その他遺構外13点、計78点出土し11点を図示した(図82-3~5、図85-14~18、図87-19~21)。西斜面で図示したものは3点(図82-3~5)で、ほぼ全面を磨るものである。図82-4には片面に太めの擦痕が一筋確認できる。南斜面で図示したものは5点(図85-14~18)で、多面を磨るものが多い中、図85-14は一面のみを磨るものである。その他の遺構外で図示したものは3点(図87-19~21)で、図87-19も一面のみを磨るものである。

敲き石は、西斜面部21点・南斜面部4点、その他遺構外6点、計31点出土し3点を図示した(図86-2、図88-1・3)。南斜面で図示したものは1点(図86-2)で不定型な礫の4面に敲打痕が確認できる。その他の遺構外で図示したのは2点(図88-1・3)で、図88-1は剥片素材の敲き石である。

磨り+敲き複合痕をもつ礫は、西斜面部52点・南斜面部18点、その他遺構外9点、計79点出土し28点を図示した(図82-6~12、図83、図86-1・3~10、図88-2・4~6)。西斜面で図示したのは15点(図82-6~12、図83-1~8)で、図82-6・10・12は三角柱状または棒状の礫を使用している。図82-7・8は小型の円礫・楕円礫を使用している。ほとんどのものが両面に磨りと敲きの痕跡が見られる中、図82-12のみ片面のみの使用である。また、図82-11、図83-3・5・7・8は凹み状になっている。南斜面で図示したものは9点(図86-1・3~10)で、86-1は円礫の両面を使用している。図86-9は、破損後の円筒状礫を使用したものと考えられ、両面に磨りと敲きの痕跡が見られる。図86-3は、浅い凹み状になっている。その他の遺構外で図示したものは4点(図88-2・4~6)で、図88-6は棒状の礫が使用されている。図88-5は、上下の端部も使用されているという特徴がある。

台石は西斜面部28点・南斜面部1点、その他遺構外4点、計33点出土し5点を図示した(図84-1~4、図88-7)。図84-3・4は、両面を加工している。図88-7は破片であり、筋状の擦痕が確認できる。

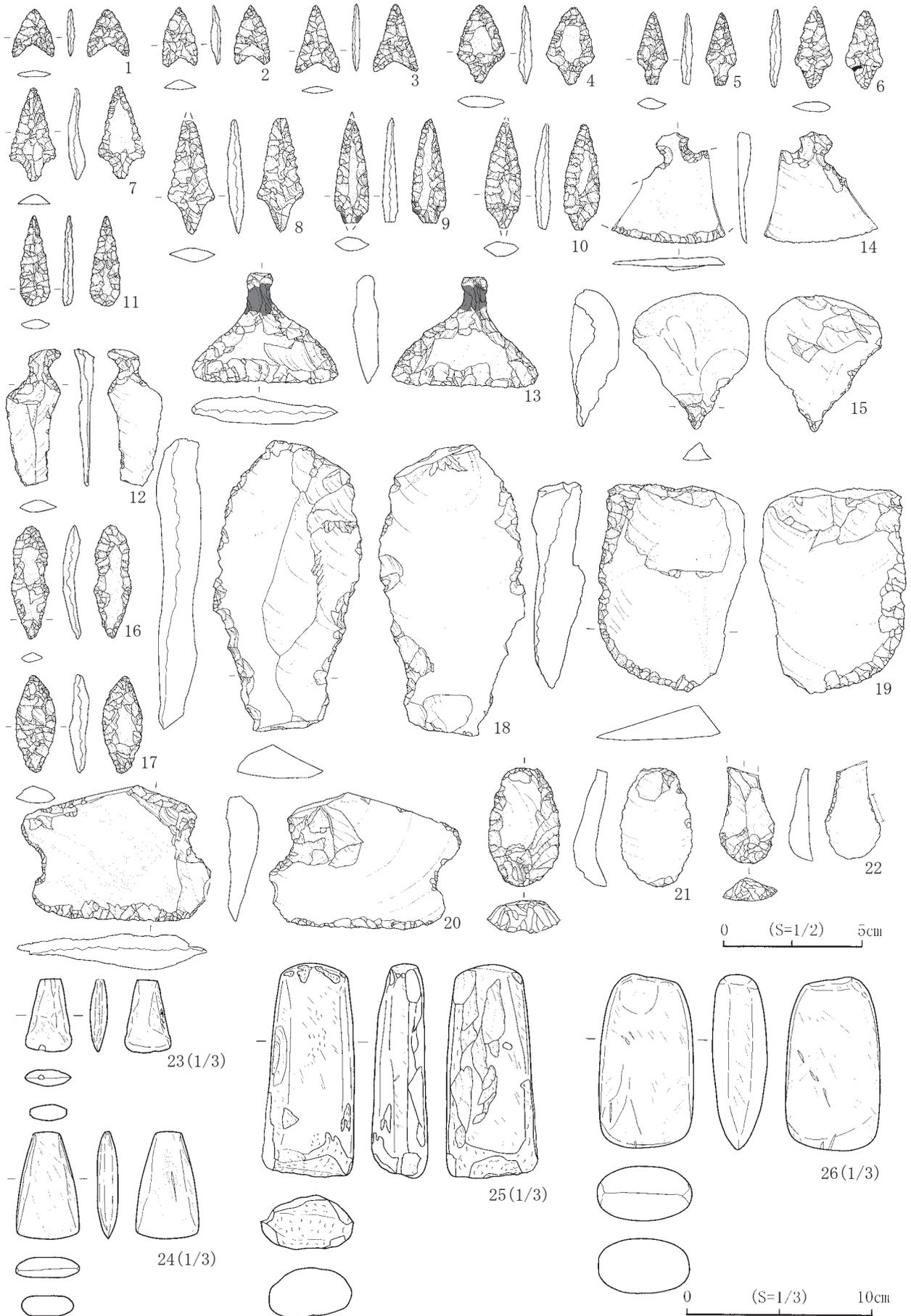


图81 遺構外出土石器 (1) 西斜面①

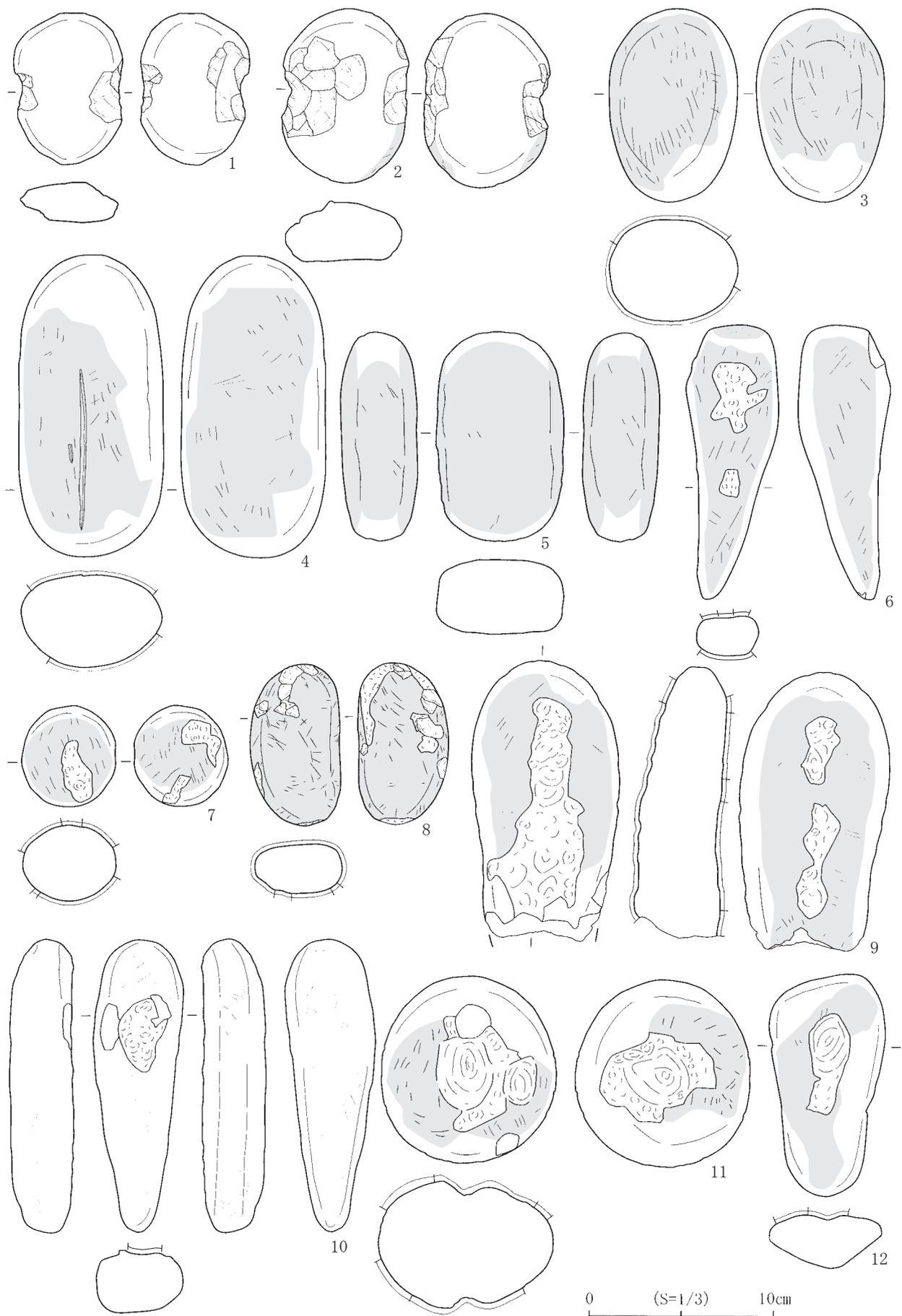


图82 遺構外出土石器(2)西斜面②



图83 遺構外出土石器 (3) 西斜面③

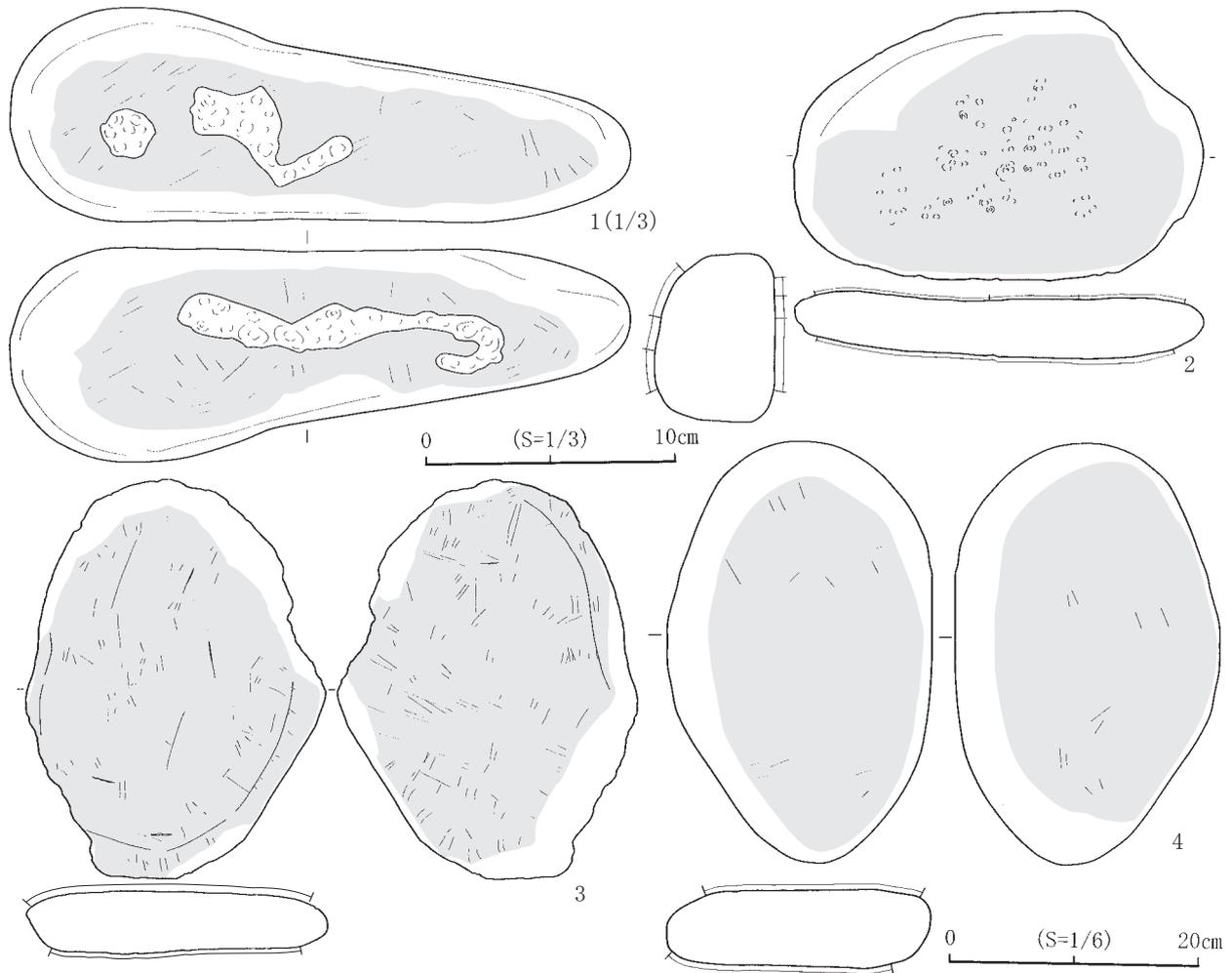


図84 遺構外出土石器 (4) 西斜面④

3 その他の遺物

土偶は、西斜面部2点、その他遺構外1点、計3点出土し全て図示した(図89-1・2・7)。1と7は頭部片であり、西斜面とその他の遺構外から出土した。表裏面には、輪郭に沿って刺突列が施され1の側頭部には刺突が2列となっている。7の顔面部には「十字」に刺突列が施される。後頭部には、縦・横位に貫通孔が施されるという特徴をもつ。2は体部片である。腕部が一部欠損している。表裏面に刺突が施され、部分的には刺突が2列になっている。表面の胸部と胴中央部には、小円形状の貼付がある。胸部には2点の貼付があったものと考えられる。なお、7の顔面部(十字部分)には赤色塗膜が付着していた。元々は広範囲に付着し、この部分のみ残存したものと考えられる。

石剣は、西斜面から1点のみ出土し図示した(図89-4)。断面形を楕円形状に加工したのち、一側縁のみ刃部状に加工していることから石剣とした。石材は粘板岩である。

有孔石製品は、その他の遺構外IT-15グリッド、第8号堅穴住居跡付近から1点のみ出土し図示した(図89-9)。長円形の礫素材を使用し、礫上部が穿孔されるものである。表面は研磨されており、石材は粘板岩である。

岩版は、西斜面から1点、南斜面から1点出土し、いずれも図示した(図89-3・5)3はやや台形状、5は三角形状になっている。いずれも表面は研磨され、端部を中心に敲打痕も確認される。線

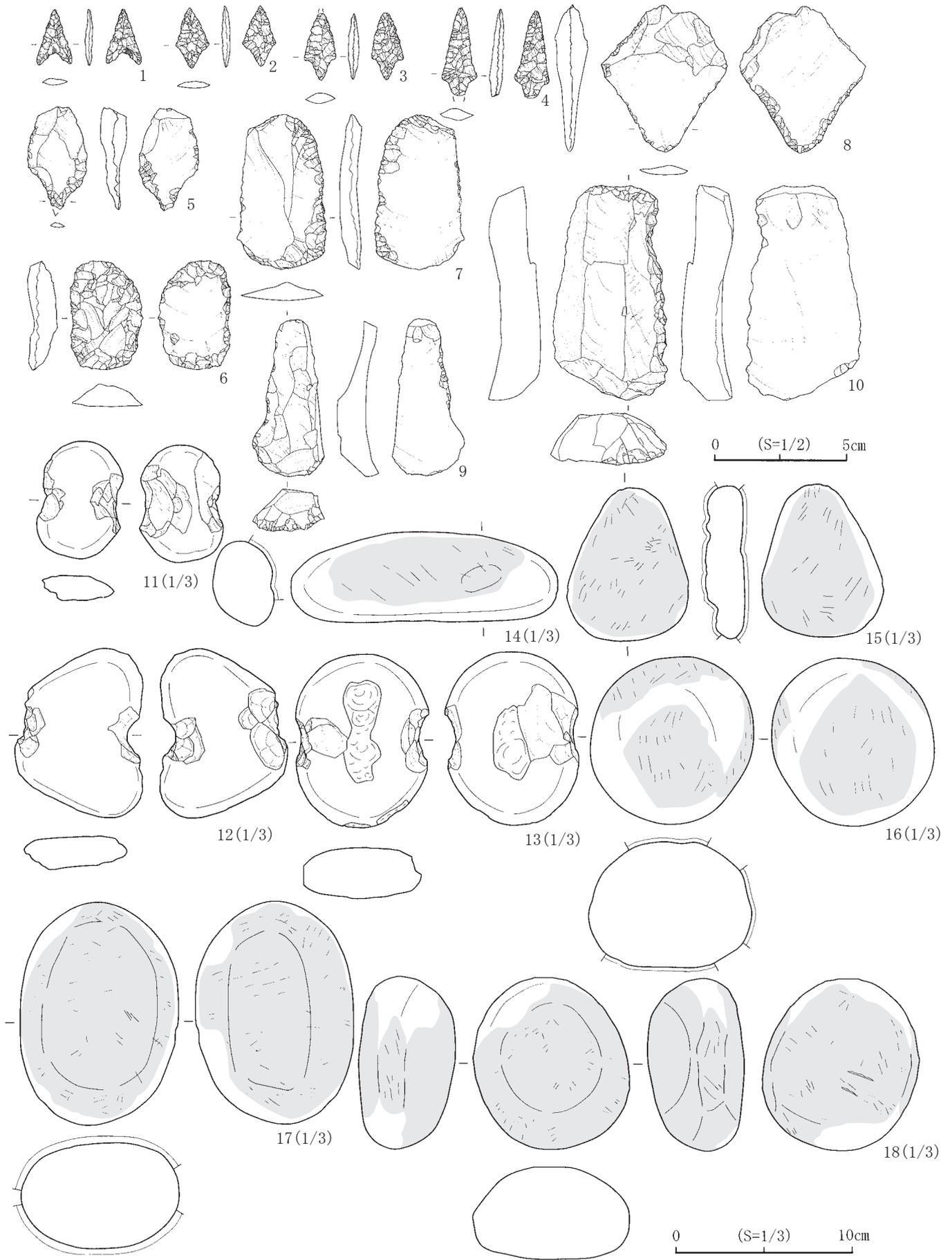


図85 遺構外出土石器 (5) 南斜面①

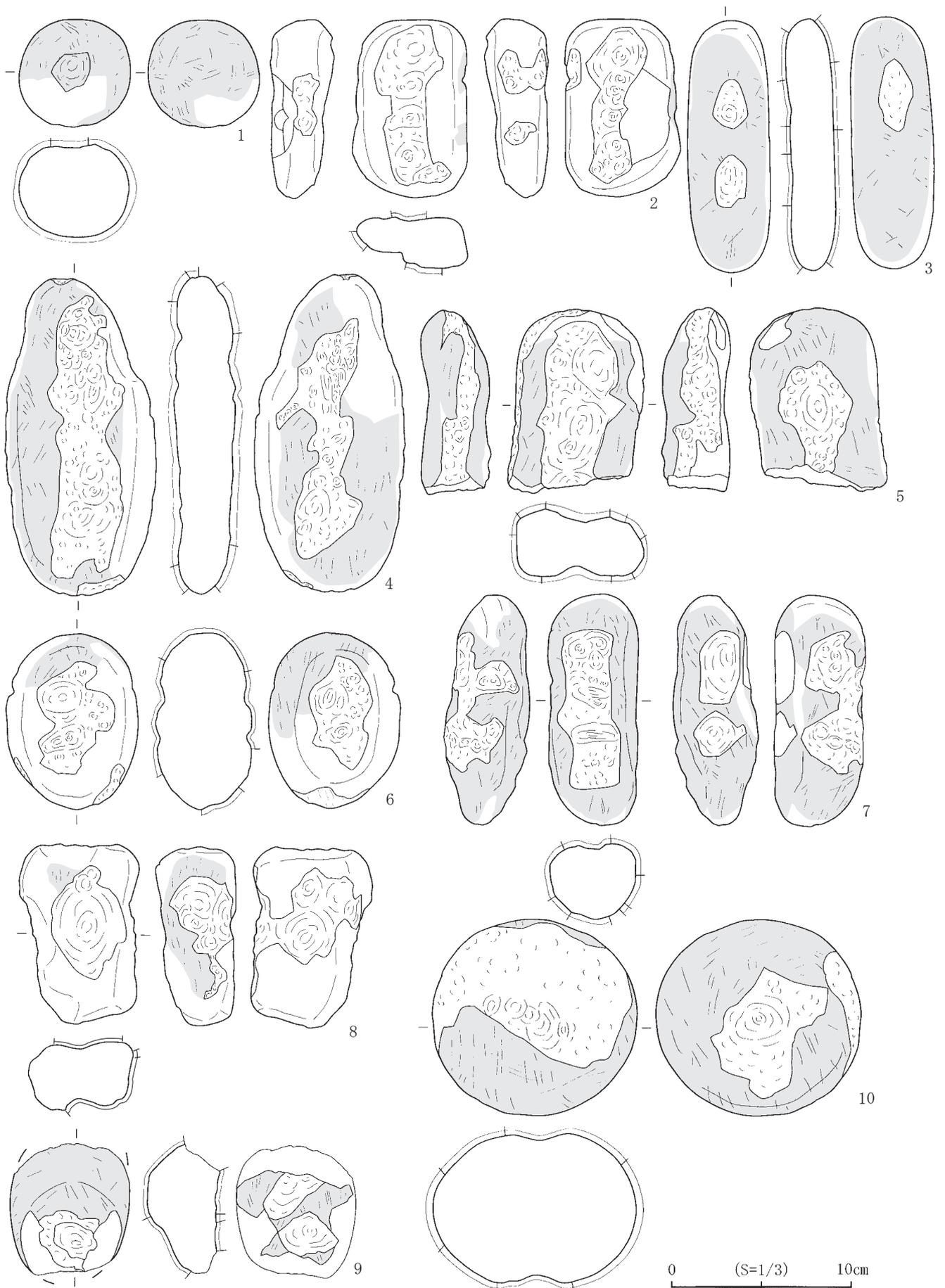


图86 遺構外出土石器(6)南斜面②

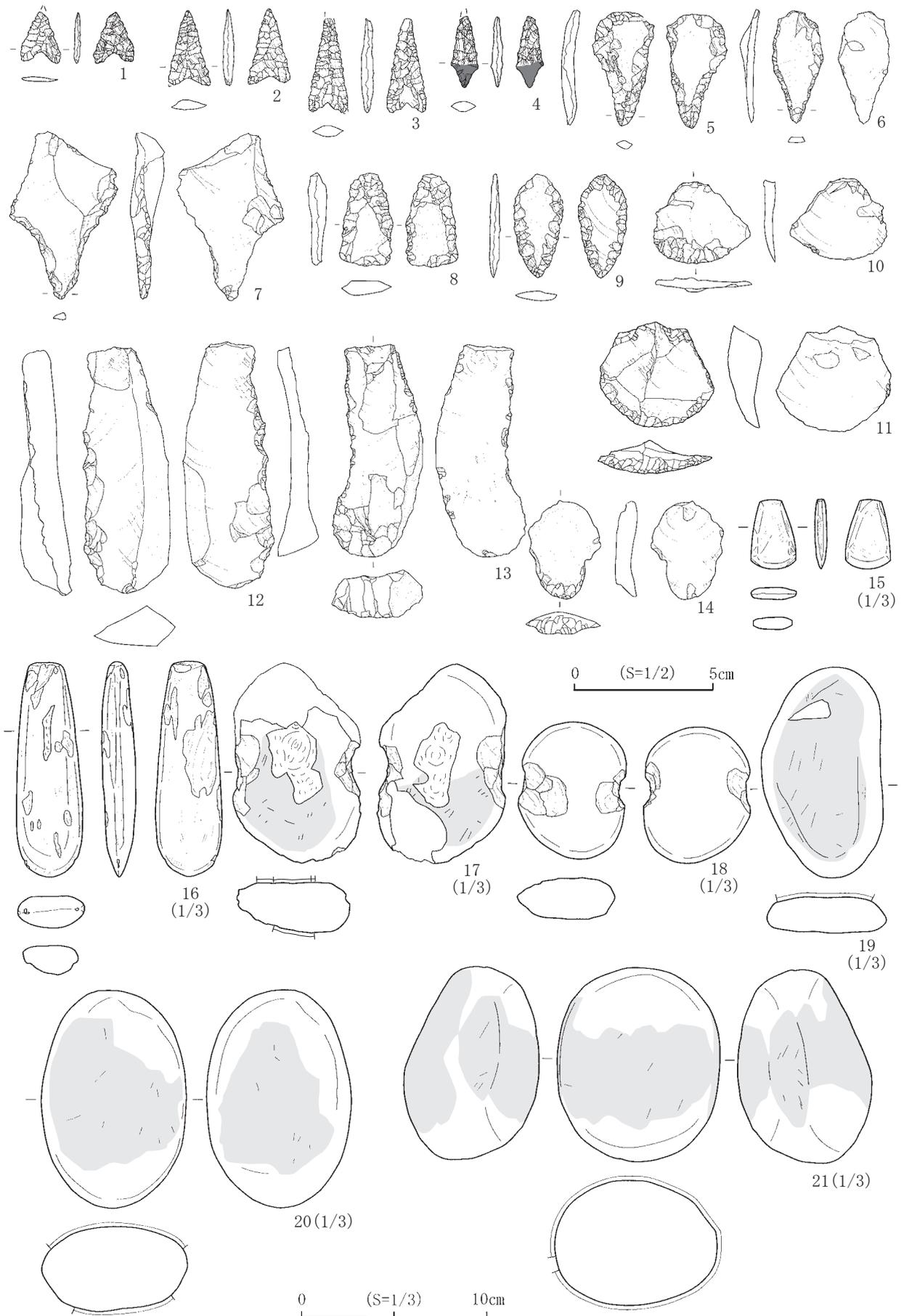


図87 遺構外出土石器 (7) その他①

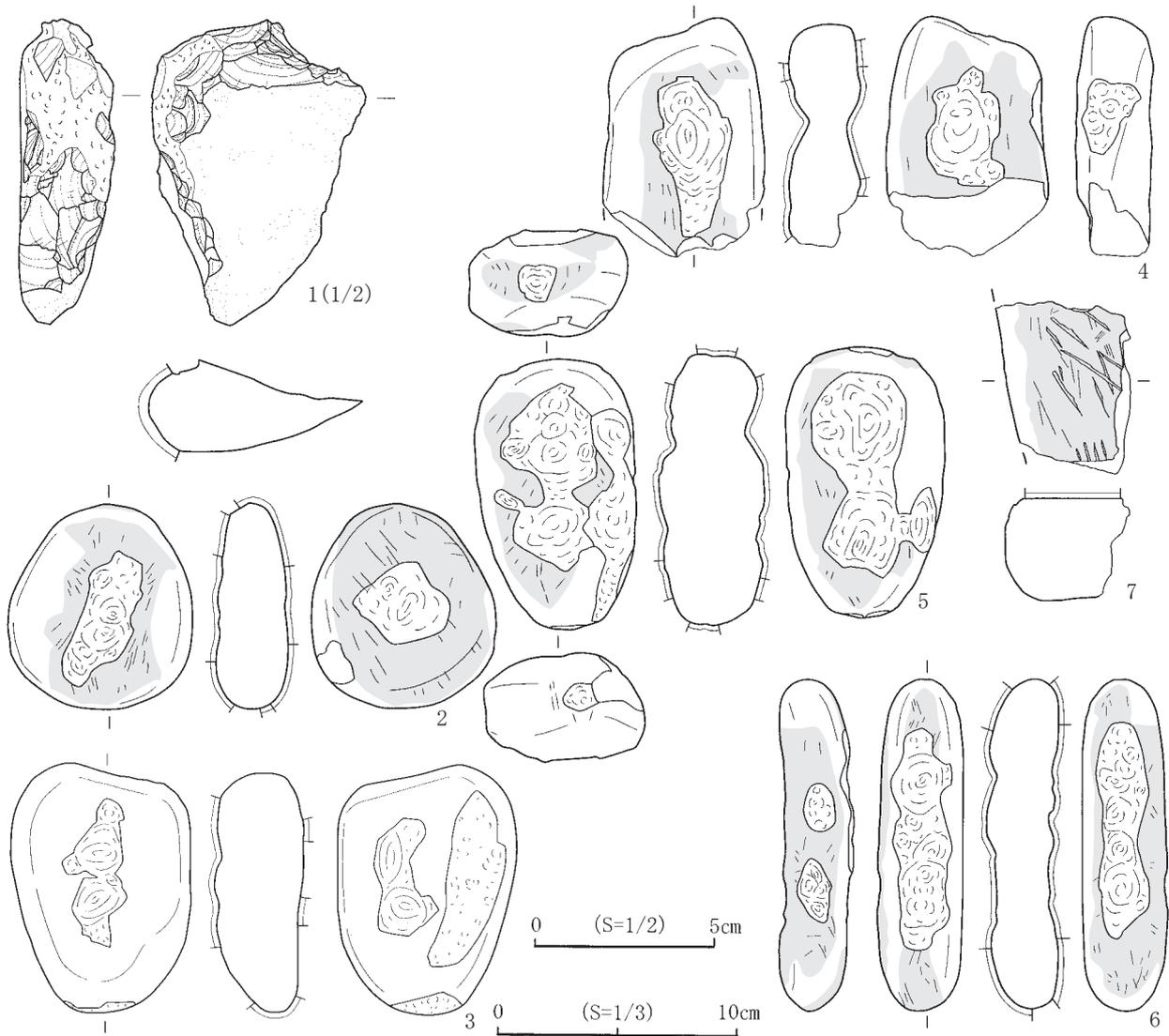


図88 遺構外出土石器(8)その他②

刻等は施されていない。使用石材はいずれも凝灰岩である。

円盤状石製品は、その他の遺構外(旧SX01)から1点出土し図示した(図89-8)。素材の周縁を打ち欠いた後研磨し、両面に擦痕が見られる。使用石材は凝灰岩である。

銭貨は、西斜面部から1点、その他の遺構外(旧SX01)から1点出土し、西斜面部から出土した完形の1点を図示した(図89-5)。鉄四文銭であると考えられる。

陶磁器は、西斜面(約1.4kg)およびその他の遺構外である旧SX01(約1.3kg)からの出土が際立って多かった。図示はしなかったが、近世・近代のものがほとんどで中世のものは含まれていなかった。

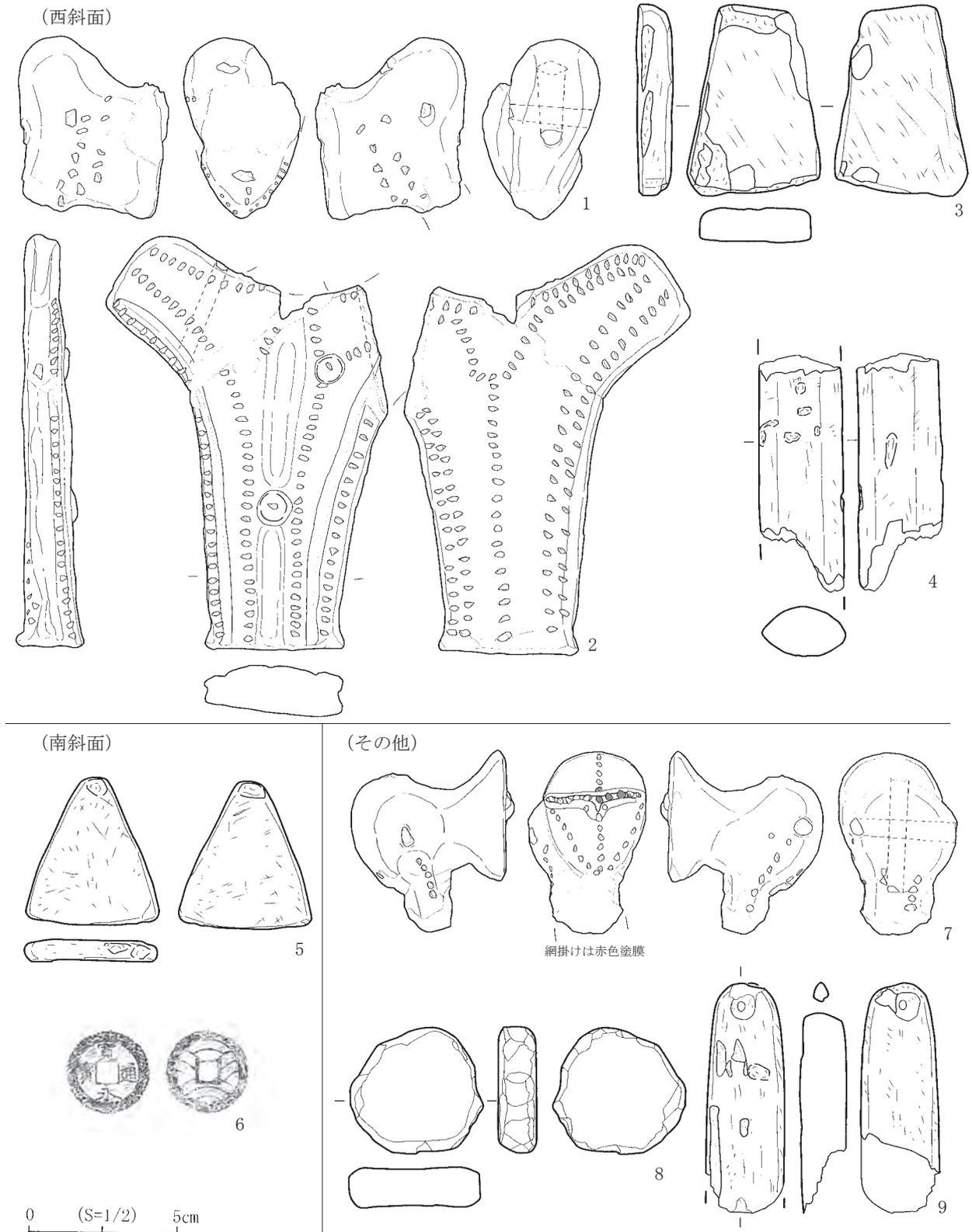


図89 遺構外出土その他の遺物

第3章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定

第1項 平成24年度分放射性炭素年代年代測定について

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

川原平(6)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字宮元(北緯40° 31′ 38″、東経140° 14′ 10″)に所在し、美山湖(旧岩木川)右岸の河岸段丘上に位置する。測定対象試料は、竪穴住居跡等から出土した木炭6点である(表1)。

竪穴住居跡SI01、SI03は、出土土器から縄文時代中期末葉～後期初頭と推定されている。SI01土坑3(SK48)は、SI01住居内の土坑として調査したが、住居跡堆積土に掘り込まれた新しい遺構の可能性も指摘される。SX01は粘土を採掘したような痕跡がある用途不明遺構で、試料Kawa(6)-06の周辺からは近世以降と見られる陶磁器片が出土している。

2 測定の意義

遺構の時期および集落の継続期間を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する(付表「処理前試料量」)。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する(付表「処理後試料量」)。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 必要量を採取、秤量(付表「燃焼量」)した試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する(付表「精製炭素量」)。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数と¹⁴Cカウント数を付表に示す。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は付表に記載する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

試料の測定結果を表1、2及び付表に示す。

試料の ^{14}C 年代を検討すると、SI01出土試料4点の値は $3960 \pm 20\text{yrBP}$ (Kawa(6)-02) から $3890 \pm 20\text{yrBP}$ (Kawa(6)-03) の狭い範囲に収まり、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致もしくは近接するものが含まれる。SI03出土のKawa(6)-05の値もSI01出土試料の値に重なる。SX01③エリア出土のKawa(6)-06の値は、他の5点との間に明瞭な年代差が認められる。

暦年較正年代 (1σ) は、Kawa(6)-01、同-03~05が縄文時代後期初頭頃、同-02が中期末葉から後期初頭頃、同-06は近世以降に相当し (小林編2008、佐原2005)、出土土器から推定される時期におおむね整合的な結果と見られる。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-130777	Kawa(6)-01	SI01 炉1 覆土	木炭	AAA	-22.76 ± 0.25	3,900 ± 20	61.52 ± 0.16
IAAA-130778	Kawa(6)-02	SI01Pit06 覆土	木炭	AAA	-23.22 ± 0.22	3,960 ± 20	61.07 ± 0.15
IAAA-130779	Kawa(6)-03	SI01Pit25 覆土	木炭	AAA	-25.09 ± 0.21	3,890 ± 20	61.63 ± 0.16
IAAA-130780	Kawa(6)-04	SI01土坑3 (SK48) 覆土	木炭	AAA	-27.12 ± 0.22	3,910 ± 20	61.46 ± 0.16
IAAA-130781	Kawa(6)-05	SI03 炉 覆土	木炭	AAA	-28.82 ± 0.23	3,890 ± 20	61.59 ± 0.16
IAAA-130782	Kawa(6)-06	SX01③エリア 床面直上	木炭	AAA	-26.41 ± 0.23	200 ± 20	97.53 ± 0.19

[#5921]

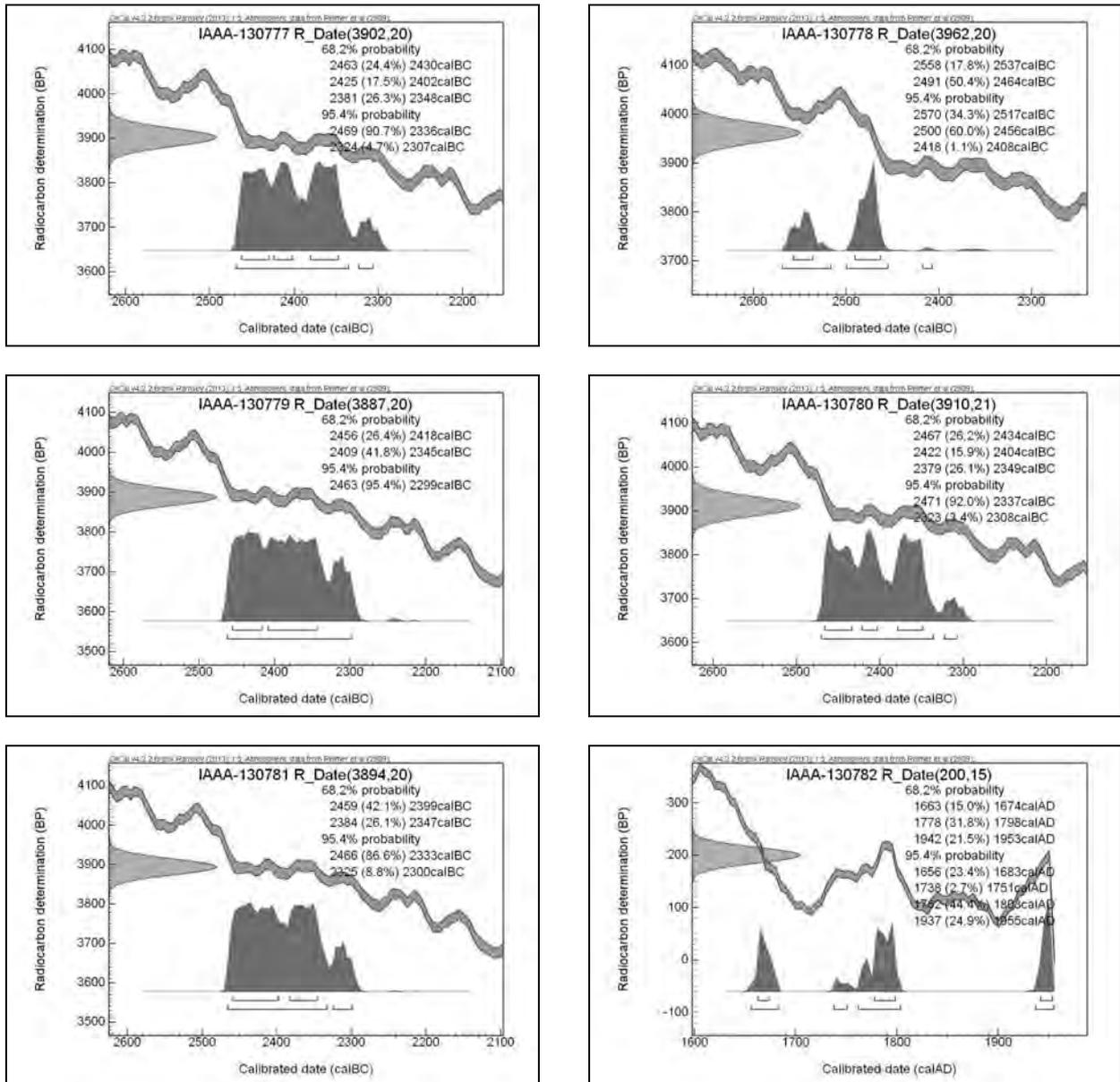
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-130777	3,870 ± 20	61.80 ± 0.16	3,902 ± 20	2463calBC - 2430calBC (24.4%) 2425calBC - 2402calBC (17.5%) 2381calBC - 2348calBC (26.3%)	2469calBC - 2336calBC (90.7%) 2324calBC - 2307calBC (4.7%)
IAAA-130778	3,930 ± 20	61.29 ± 0.15	3,962 ± 20	2558calBC - 2537calBC (17.8%) 2491calBC - 2464calBC (50.4%)	2570calBC - 2517calBC (34.3%) 2500calBC - 2456calBC (60.0%) 2418calBC - 2408calBC (1.1%)
IAAA-130779	3,890 ± 20	61.62 ± 0.15	3,887 ± 20	2456calBC - 2418calBC (26.4%) 2409calBC - 2345calBC (41.8%)	2463calBC - 2299calBC (95.4%)
IAAA-130780	3,950 ± 20	61.19 ± 0.16	3,910 ± 21	2467calBC - 2434calBC (26.2%) 2422calBC - 2404calBC (15.9%) 2379calBC - 2349calBC (26.1%)	2471calBC - 2337calBC (92.0%) 2323calBC - 2308calBC (3.4%)
IAAA-130781	3,960 ± 20	61.10 ± 0.15	3,894 ± 20	2459calBC - 2399calBC (42.1%) 2384calBC - 2347calBC (26.1%)	2466calBC - 2333calBC (86.6%) 2325calBC - 2300calBC (8.8%)
IAAA-130782	220 ± 20	97.25 ± 0.19	200 ± 15	1663calAD - 1674calAD (15.0%) 1778calAD - 1798calAD (31.8%) 1942calAD - 1953calAD (21.5%)	1656calAD - 1683calAD (23.4%) 1738calAD - 1751calAD (2.7%) 1762calAD - 1803calAD (44.4%) 1937calAD - 1955calAD (24.9%)

[参考値]

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



[参考] 暦年較正年代グラフ

第2項 平成25・26年度分放射性炭素年代測定について

(株) パレオ・ラボ

1. はじめに

川原平(6)遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、炭化材が8点と土器付着炭化物が3点の計11点である。調査所見で縄文時代中期末葉と推測されている住居跡SI01の石囲炉3からは、底面から出土した炭化材1点(広葉樹?、kawa(6)-07:PLD-28334)である。調査所見で縄文時代晩期前葉~中葉と推測されている土坑では、SK07の5層から出土した炭化材1点(クリ、kawa(6)-08:PLD-28335)と、SK11の床面直上から出土した炭化材1点(クリ、kawa(6)-09:PLD-28336)である。調査所見で縄文時代後期初頭~前葉と推測されている土坑では、SK33出土の弥栄平(2)式(第Ⅱ様式)土器の外面に付着していた炭化物1点(煤類、kawa(6)-16:PLD-28343)と、SK24出土の十腰内Ⅰ式(第Ⅳ様式)土器の外面に付着していた炭化物1点(煤類、kawa(6)-17:PLD-28344)と、この土器(kawa(6)-17)の直下から出土した炭化材1点(タケ垂科、kawa(6)-10:PLD-28337)である。調査所見と土器型式から縄文時代中期末葉~後期初頭と推測されている住居跡SI08からは、牛ヶ沢(3)式(第Ⅰ様式)土器外面の付着炭化物1点(煤類、kawa(6)-15:PLD-28342)と、石囲炉の2層で土器(kawa(6)-15)の10~15cm下から出土した炭化材1点(広葉樹、kawa(6)-13:PLD-28340)である。調査所見で縄文時代中期末葉の遺構と推測されている住居跡からは、SI05のPit01から出土した炭化材1点(広葉樹、kawa(6)-11:PLD-28338)と、SI06の石囲炉底面から出土した炭化材1点(クリ、kawa(6)-12:PLD-28339)である。調査所見で縄文時代中期中葉と推測されている土坑SK41からは、底面直上から出土した炭化材1点(クリ、kawa(6)-14:PLD-28341)である。炭化材はすべて部位不明で、最終形成年輪は残存していなかった。炭化材は実体顕微鏡で観察と同定を行った。土器付着炭化物は、ピンセットを用いて土器から直接採取した。採取位置を図版1に示す。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、表3に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を、図1、2に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) に着目して結果を整理する。なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林 (2008) を参照した。

住居跡SI01の石囲炉3では、底面から出土した炭化材 (kawa(6)-07: PLD-28334) は、544-623 cal AD (95.4%) であった。これは6世紀中頃～7世紀前半で、古墳時代後期の暦年代範囲に相当する。調査所見では縄文時代中期末葉と推測されており、遺構の推定時期よりもかなり新しい年代であった。遺構の検出状況から浅い土坑である可能性もあるが、測定を行った炭化材は底面焼土近くから出土しているため、この遺構に伴う試料である可能性が高い。

SK07の5層出土の炭化材 (kawa(6)-08: PLD-28335) は、1224-1056 cal BC (95.4%) であった。これは縄文時代晩期前葉の暦年代に相当し、調査所見による推定時期である縄文時代晩期前葉～中葉に対して整合的であった。

SK11の床面直上から出土した炭化材 (kawa(6)-09: PLD-28336) は、911-822 cal BC (95.4%) であった。これは縄文時代晩期中葉の暦年代に相当し、調査所見による推定時期の縄文時代晩期前葉～中葉に対して整合的であった。

SK33から出土した弥栄平(2)式 (第II様式) 土器の外表面付着炭化物 (kawa(6)-16: PLD-28343) は、2279-2250 cal BC (8.1%)、2230-2221 cal BC (1.4%)、2212-2130 cal BC (78.2%)、2086-2050 cal BC (7.8%) であった。これは縄文時代後期前葉の暦年代に相当し、調査所見による推定時期である縄文時代後期初頭～前葉に対して整合的であった。

SK24から出土した十腰内I式 (第IV様式) 土器の外表面付着炭化物 (kawa(6)-17: PLD-28344) は、2127-2090 cal BC (10.2%) および2045-1938 cal BC (85.2%) であった。また、この土器 (kawa(6)-17) の直下から出土した炭化材 (kawa(6)-10: PLD-28337) は、2125-2092 cal BC (8.6%) および2044-1938 cal BC (86.8%) であった。これらは縄文時代後期前葉の暦年代に相当し、調査所見による推定時期である縄文時代後期前葉に対して整合的であった。

住居跡SI08出土の牛ヶ沢(3)式 (第I様式) 土器の外表面から採取された付着炭化物 (kawa(6)-15: PLD-28342) は、2289-2135 cal BC (95.4%) であった。これは縄文時代後期前葉の暦年代に相当し、調査所見による推定時期である縄文時代中期末葉～後期初頭よりもやや新しい年代であった。また、この土器 (kawa(6)-15) の10～15cm下から出土した炭化材 (kawa(6)-13: PLD-28340) は、2464-2287 cal BC (95.4%) であった。これは縄文時代後期初頭～前葉の暦年代に相当し、調査所見による推定時期である縄文時代後期初頭に対して整合的であった。

住居跡SI05のPit01から出土した炭化材 (kawa(6)-11: PLD-28338) は、2431-2423 cal BC (0.8%)、2403-2380 cal BC (3.6%)、2349-2201 cal BC (91.0%) であった。これは縄文時代後期初頭～前葉の暦年代に相当し、調査所見による推定時期の中期末葉よりも新しい年代であった。

住居跡SI06の石囲炉底面から出土した炭化材 (kawa(6)-12: PLD-28339) は、2291-2193 cal BC (78.6%) および2177-2143 cal BC (16.8%) であった。これは縄文時代後期前葉の暦年代範囲に相当し、調査所見による推定時期の中期末葉よりも新しい年代であった。

土坑SK41の底面直上から出土した炭化材 (kawa(6)-14: PLD-28341) は、3092-2922 cal BC

(95.4%)であった。これは縄文時代中期中葉の暦年代範囲に相当し、調査所見による推定時期である縄文時代中期中葉に整合的であった。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ	前処理
PLD-28334	グリッド: II C-F-26~28 遺構: S101石囲炉3 (旧炉) 位置: 底面 試料No. kawa (6)-07	種類: 炭化材 (広葉樹?) 試料の性状: 最終形成年輪以外、 部位不明 部位: 不明 状態: dry	縄文中期末葉	前処理前重量: 23.22mg 燃焼量: 5.31mg 精製炭素量: 3.33mg 炭素回収量: 1.12mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28335	グリッド: II o-25 遺構: SK07 層位: 5層 試料No. kawa (6)-08	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、 部位不明 部位: 外側2年輪 状態: dry	縄文晩期前葉～中葉	前処理前重量: 43.36mg 燃焼量: 5.57mg 精製炭素量: 3.54mg 炭素回収量: 1.13mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28336	グリッド: II P-18 遺構: SK11 位置: 床面直上 試料No. kawa (6)-09	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、 部位不明 部位: 外側2年輪 状態: dry	縄文晩期前葉～中葉	前処理前重量: 17.44mg 燃焼量: 5.18mg 精製炭素量: 3.22mg 炭素回収量: 1.09mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28343	グリッド: I T-22 遺構: SK33 層位: 覆土 遺物No. 図65-10 試料No. kawa (6)-16	種類: 土器付着物・外面 (煤類) 状態: dry	縄文後期前葉 弥弥平(2)式 (第II様式)	前処理前重量: 16.18mg 燃焼量: 6.97mg 精製炭素量: 3.11mg 炭素回収量: 1.11mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28344	グリッド: II F-35 遺構: SK24 層位: 3層上面 遺物No. 図64-1 試料No. kawa (6)-17	種類: 土器付着物・外面 (煤類) 状態: dry	縄文後期前葉 十腰内I式 (第IV様式)	前処理前重量: 471.27mg 燃焼量: 5.89mg 精製炭素量: 3.58mg 炭素回収量: 1.15mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28337	グリッド: II F-35 遺構: SK24 層位: 底面、kawa (6)-17の直下 試料No. kawa (6)-10	種類: 炭化材 (タケ重科) 試料の性状: その他、部位不明 部位: 稈 状態: dry	縄文後期初頭～前葉	前処理前重量: 10.12mg 燃焼量: 3.69mg 精製炭素量: 2.29mg 炭素回収量: 1.11mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28342	グリッド: I T・U-13・14 遺構: S108 層位: 覆土 (P-5) 遺物No. 図31-11 試料No. kawa (6)-15	種類: 土器付着物・外面 (煤類) 状態: dry	縄文後期初頭 牛ヶ沢(3)式 (第I様式)	前処理前重量: 38.71mg 燃焼量: 16.02mg 精製炭素量: 8.67mg 炭素回収量: 1.12mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28340	グリッド: I T・U-13・14 遺構: S108石囲炉 層位: 2層 位置: kawa (6)-15の10~15cm下 試料No. kawa (6)-13	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪以外、 部位不明 部位: 外側2年輪 状態: dry	縄文中期末葉～後期初頭	前処理前重量: 14.18mg 燃焼量: 5.16mg 精製炭素量: 3.11mg 炭素回収量: 1.12mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28338	グリッド: I X-16 遺構: S105Pit01 層位: 覆土 試料No. kawa (6)-11	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪以外、 部位不明 部位: 外側2年輪 状態: dry	縄文中期末葉	前処理前重量: 12.93mg 燃焼量: 3.37mg 精製炭素量: 2.01mg 炭素回収量: 1.11mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28339	グリッド: I U・V-15・16 遺構: S106石囲炉 位置: 底面 試料No. kawa (6)-12	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、 部位不明 部位: 外側2年輪 状態: dry	縄文中期末葉	前処理前重量: 37.62mg 燃焼量: 5.41mg 精製炭素量: 3.33mg 炭素回収量: 1.11mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-28341	グリッド: I T-11 遺構: SK41 位置: 底面直上 試料No. kawa (6)-14	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、 部位不明 部位: 外側2年輪 状態: dry	縄文中期中葉	前処理前重量: 35.72mg 燃焼量: 5.32mg 精製炭素量: 3.29mg 炭素回収量: 1.11mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

表3 各測定での¹³C/¹²C比(‰)

測定番号	PLD-28334	PLD-28335	PLD-28336	PLD-28337	PLD-28338	PLD-28339	PLD-28340	PLD-28341	PLD-28342	PLD-28343	PLD-28344
1	1.0909	1.0916	1.0921	1.0882	1.0934	1.0921	1.0900	1.0917	1.0927	1.0934	1.0927
2	1.0916	1.0923	1.0931	1.0891	1.0939	1.0925	1.0898	1.0929	1.0923	1.0941	1.0940
3	1.0922	1.0923	1.0937	1.0891	1.0940	1.0927	1.0897	1.0920	1.0922	1.0940	1.0937
4	1.0921	1.0922	1.0937	1.0886	1.0935	1.0922	1.0900	1.0913	1.0922	1.0941	1.0933
5	1.0919	1.0928	1.0937	1.0892	1.0932	1.0921	1.0897	1.0913	1.0921	1.0946	1.0931
6	1.0924	1.0931	1.0947	1.0894	1.0936	1.0929	1.0896	1.0907	1.0926	1.0945	1.0930
7	1.0930	1.0929	1.0945	1.0886	1.0941	1.0932	1.0892		1.0916	1.0939	1.0928
8	1.0927	1.0926	1.0939	1.0882	1.0941	1.0932	1.0887		1.0909	1.0939	1.0923
9	1.0920		1.0935		1.0936	1.0925	1.0880				1.0919

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-28334 SI01石囲炉3 No. kawa (6)-07	9	-26.50 \pm 0.25	1485 \pm 19	1485 \pm 20	563-603 cal AD (68.2%)	544-623 cal AD (95.4%)
PLD-28335 SK07 No. kawa (6)-08	8	-26.16 \pm 0.23	2948 \pm 21	2950 \pm 20	1207-1124 cal BC (68.2%)	1224-1056 cal BC (95.4%)
PLD-28336 SK11 No. kawa (6)-09	9	-25.11 \pm 0.28	2725 \pm 20	2725 \pm 20	895-837 cal BC (68.2%)	911-822 cal BC (95.4%)
PLD-28343 SK33 No. kawa (6)-16 (土器番号460)	8	-24.75 \pm 0.20	3758 \pm 22	3760 \pm 20	2201-2141 cal BC (68.2%)	2279-2250 cal BC (8.1%) 2230-2221 cal BC (1.4%) 2212-2130 cal BC (78.2%) 2086-2050 cal BC (7.8%)
PLD-28344 SK24 No. kawa (6)-17 (土器番号333)	9	-25.71 \pm 0.26	3639 \pm 23	3640 \pm 25	2031-1963 cal BC (68.2%)	2127-2090 cal BC (10.2%) 2045-1938 cal BC (85.2%)
PLD-28337 SK24 No. kawa (6)-10	8	-29.44 \pm 0.22	3638 \pm 22	3640 \pm 20	2031-1963 cal BC (68.2%)	2125-2092 cal BC (8.6%) 2044-1938 cal BC (86.8%)
PLD-28342 SI08 No. kawa (6)-15 (土器番号450)	8	-26.52 \pm 0.25	3775 \pm 25	3775 \pm 25	2276-2254 cal BC (15.5%) 2227-2225 cal BC (1.4%) 2210-2191 cal BC (15.7%) 2181-2142 cal BC (35.6%)	2289-2135 cal BC (95.4%)
PLD-28340 SI08石囲炉 No. kawa (6)-13	9	-28.89 \pm 0.26	3874 \pm 23	3875 \pm 25	2453-2419 cal BC (18.7%) 2406-2377 cal BC (17.8%) 2350-2297 cal BC (31.7%)	2464-2287 cal BC (95.4%)
PLD-28338 SI05Pit01 No. kawa (6)-11	9	-25.06 \pm 0.19	3833 \pm 21	3835 \pm 20	2335-2324 cal BC (6.1%) 2306-2274 cal BC (24.5%) 2256-2209 cal BC (37.6%)	2431-2423 cal BC (0.8%) 2403-2380 cal BC (3.6%) 2349-2201 cal BC (91.0%)
PLD-28339 SI06石囲炉 No. kawa (6)-12	9	-26.05 \pm 0.21	3794 \pm 21	3795 \pm 20	2283-2248 cal BC (33.2%) 2233-2199 cal BC (29.0%) 2161-2153 cal BC (6.0%)	2291-2193 cal BC (78.6%) 2177-2143 cal BC (16.8%)
PLD-28341 SK41 No. kawa (6)-14	6	-26.90 \pm 0.32	4395 \pm 27	4395 \pm 25	3084-3066 cal BC (11.8%) 3028-3004 cal BC (16.1%) 2991-2930 cal BC (40.3%)	3092-2922 cal BC (95.4%)

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさしー縄文時代研究の編年体系ー」: 257-269, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

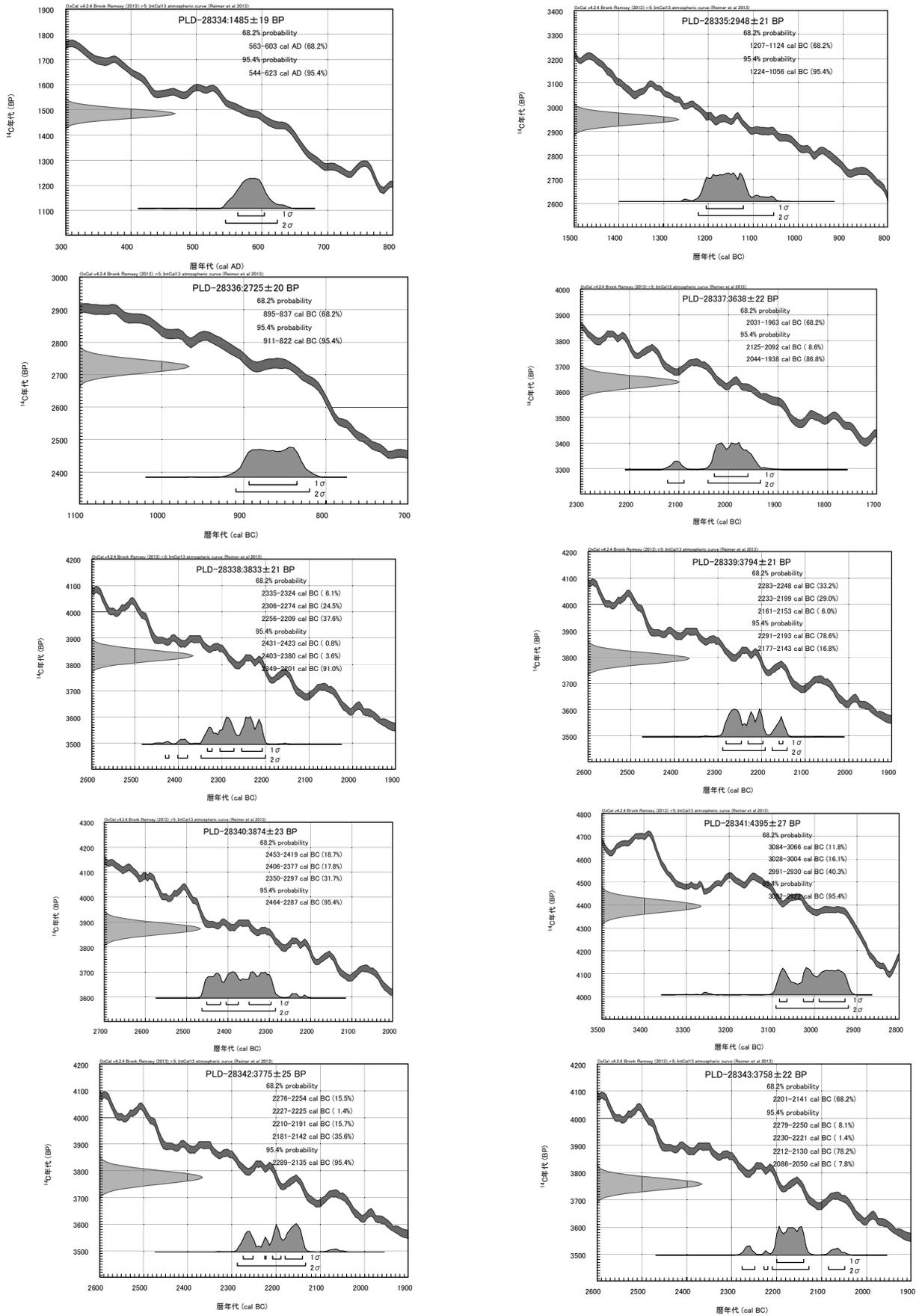


図1 暦年校正結果 (1)

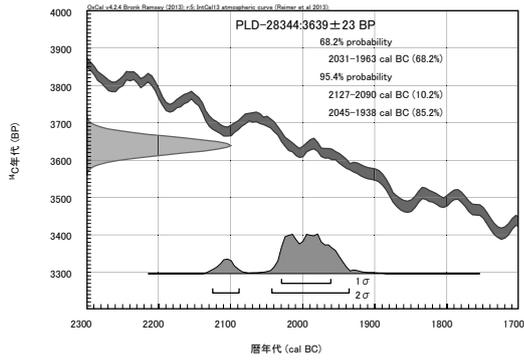
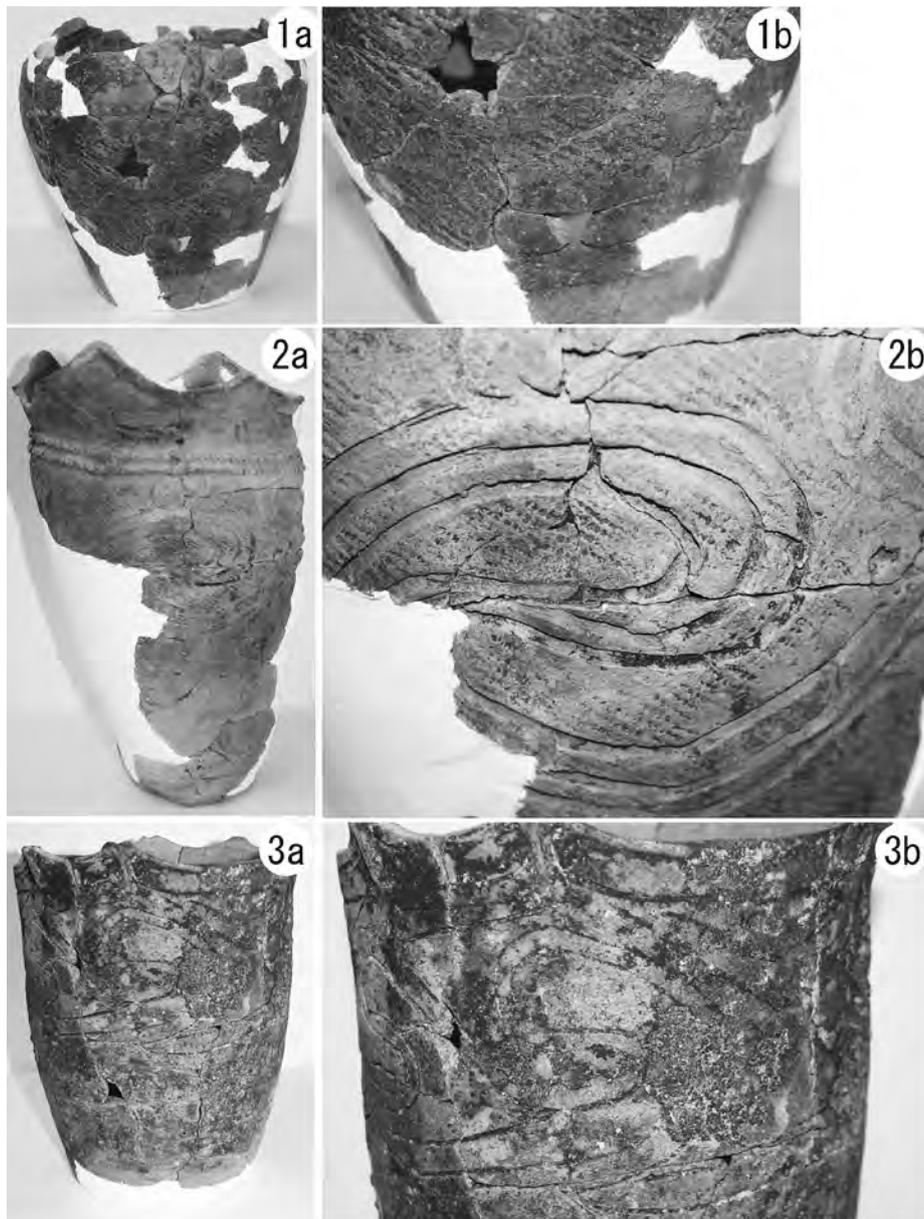


図2 暦年校正結果 (2)



図版1 土器附着炭化物の試料採取箇所

1. SI08出土、牛ヶ沢(3)式(第I様式) (外面煤類、No. kawa(6)-15 : PLD-28342)
 2. SK33出土、弥栄平(2)式(第II様式)土器 (外面煤類、No. kawa(6)-16 : PLD-28343)
 3. SK24出土、十腰内I式(第IV様式)土器 (外面煤類、No. kawa(6)-17 : PLD-28344)
- (a : 全体写真、b : 試料採取箇所)

第2節 炭化種実同定分析

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

青森県中津軽郡西目屋村に位置する川原平(6)遺跡は、岩木川右岸の標高約200mの河岸段丘上に立地する、縄文時代中期～晩期を中心とした集落遺跡である。ここでは、縄文時代中期末葉から後期初頭の竪穴住居跡や縄文時代晩期のフラスコ状土坑から出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物の一端を明らかにする。

2. 試料と方法

試料は、水洗抽出済みの40試料である。分析の対象とした遺構は、12年度調査の竪穴住居跡SI01とSI02、SI03の3軒、13年度調査のフラスコ状土坑SK07とSK08の2基、14年度調査の竪穴住居跡SI04とSI05、SI07、SI08、SI10、SI17、SI19、SI21の8軒である。竪穴住居跡は焼土や炉の覆土、フラスコ状土坑は完形土器内の土壌が取り上げられた。竪穴住居跡の時期は縄文時代中期末葉～後期初頭の範囲内、フラスコ状土坑の時期はいずれも縄文時代晩期前葉～中葉である。

土壌の採取から水洗、炭化物の抽出は、青森県埋蔵文化財調査センターが行った。水洗には最小1.0mm目の篩が用いられた。水洗量は、表を参照されたい。

炭化種実の同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のオニグルミ炭化核とクリ炭化果実・炭化子葉、ウルシ属-ヌルデ炭化内果皮、ブドウ属炭化種子、ニワトコ炭化核の5分類群、草本植物ではイヌタデ属炭化果実とササゲ属アズキ亜属炭化種子の2分類群の、計7分類群が得られた。また、種実以外には、炭化した子嚢菌が得られた(表1・2)。さらに、未炭化の種実も多種類得られたが、遺跡の立地から推定して、縄文時代当時の生の種実が残存しないと考えられるため、現生種実と判断した。

以下に、炭化種実の出土傾向を遺構別に記載する。

SI01焼土1：オニグルミがわずかに得られた。

SI02炉1：同定可能な種実は得られなかった。

SI03炉1：ウルシ属-ヌルデがわずかに得られた。

SI04炉1：オニグルミとクリがわずかに得られた。

SI05炉1：オニグルミがわずかに得られた。

SI07炉1：同定可能な種実は得られなかった。

SI08焼土：オニグルミとクリがわずかに得られた。

SI10炉：オニグルミがやや多く、クリとブドウ属、ニワトコ、イヌタデ属、ササゲ属アズキ亜属がわずかに得られた。

SI17炉1：オニグルミとクリがわずかに得られた。

SI19炉1：同定可能な種実は得られなかった。

SI21焼土：同定可能な種実は得られなかった。

表1 川原平(6)遺跡から出土した炭化種実(1) (括弧内は破片数)

分類群	重量(g)	12			13			14			
		SI01	SI02	SI03	SK08	SK07		SI10			
遺構名		②-2	③	④-2	①-6	②-5	②-6	①	②	③	④-2
試料番号		②-2	③	④-2	①-6	②-5	②-6	①	②	③	④-2
採取位置		焼土1	炉1	炉1	P-5	P-5					
層位		1層	焼土層	焼土層	土器内下層	土器内上層	土器内下層	1層			3層
時期		縄文中期末葉	縄文中期末葉～後期初頭	縄文中期末葉		縄文晩期前葉～中葉					縄文中期末葉～後期初頭
オニグルミ	炭化核	(1)							(44)		
クリ	炭化果実								(5)		
	炭化子葉								(3)		
ウルシ属-ヌルデ	炭化内果皮			1							
ブドウ属	炭化種子										1
ニワトコ	炭化核							2			
イヌタデ属	炭化果実										1
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子									1	
子囊菌	炭化子囊		17	1					1		6
スギ	種子				1						
カバノキ属	果実								1		
カエデ属	果実								1		
タラノキ	核								2		
アカザ属	種子						1				
センダングサ属	果実									1	1
キク科	果実								1		
イネ科	果実									1	
スギナ近似種	無性芽									(1)	

表2 川原平(6)遺跡から出土した炭化種実(2) (括弧内は破片数)

分類群	重量(g)	14									
		SI04	SI05	SI07	SI08	SI21	SI17	SI19			
遺構名		⑤-1	⑥-1	⑥-2	⑥-5	⑦-3	⑧-5	⑧-6	⑨-2	⑨-4	
試料番号		⑤-1	⑥-1	⑥-2	⑥-5	⑦-3	⑧-5	⑧-6	⑨-2	⑨-4	
採取位置		炉1	炉1	炉1 (ハコト)	炉1	焼土	焼土	焼土	炉1	炉1	
層位		焼土層	1層	1層	フク土	2層	2層	1層	1層	1層	
時期		縄文後期初頭			縄文中期末葉～後期初頭				縄文後期初頭	縄文中期末葉～後期初頭	
オニグルミ	炭化核	(1)			(9)		(1)			(2)	
クリ	炭化果実	(2)								(8)	
	炭化子葉		(1)				(4)				
子囊菌	炭化子囊						36	5			
イネ科	果実		1								
スギナ近似種	無性芽					1 (1)			9 (3)	1	

SK07のP-5：同定可能な種実は得られなかった。

SK08のP-5：同定可能な種実は得られなかった。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化クルミ科

すべて1/2以下の破片である。完形ならば側面観は広卵形。本来は縦方向の縫合線があるが、残存していない。表面には浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖り、光沢がある。最大の破片で、残存高10.6mm、残存幅12.5mm、残存厚4.0mm。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実・炭化子葉 ブナ科

果実は、完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕は残存していない。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。最大の破片で、残存高5.0mm、残存幅4.6mm。子葉は、完形ならば側面観が広卵形で、表面一面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。最大の破片で、残存高6.6mm、残存幅6.0mm、残存厚3.4mm。

(3) ウルシ属-ヌルデ *Toxicodendron* spp. - *Rhus javanica* L. 炭化内果皮 ウルシ科

上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形で、片方がやや膨れる。ざらついた質感がある。表面および断面構造の詳細な検討を行えなかったため、実体顕微鏡下でのウルシ属-ヌルデの同定に留めた。長さ2.5mm、幅3.4mm、厚さ1.9mm。

(4) ブドウ属 *Vitis* spp. 炭化種子 ブドウ科

上面観は楕円形、側面観は先端が尖る卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面には縦方向の2本の深い溝がある。種皮は薄く硬い。ヤマブドウ以外のブドウ属である。長さ4.3mm、幅3.9mm、厚さ3.0mm。

(5) ニワトコ (広義) *Sambucus racemosa* レンブクソウ科 (旧スイカズラ科) 炭化核

上面観は扁平、側面観は楕円形で基部がやや尖る。基部に小さな着点があり、縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走る。長さ2.4mm、幅1.4mm。

(6) イヌタデ属 *Persicaria* sp. 炭化果実 タデ科

上面観は円形、側面観は倒卵形。先端が突出する。表面は平滑で光沢がある。長さ1.4mm、幅1.0mm。

(7) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Caratotropis* 炭化種子 マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。小畑ほか(2007)に示されたアズキ亜属の特徴である、長楕円形の臍の内部の厚膜(Epihilum)が残存する。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄るが、残存していない。長さ5.4mm、幅3.7mm、厚さ3.6mm。小畑(2008)に示された現生種と大きさを比較すると、野生種と栽培種双方の可能性のある大きさである。

(8) 子囊菌 Ascomycotetes 炭化子囊

球形で表面は平滑。長さ1.4mm、幅1.5mm。

4. 考察

縄文時代中期末葉から後期初頭の堅穴住居跡11軒中、7軒から炭化種実が得られた。オニグルミが6軒、クリが4軒、ウルシ属-ヌルデとブドウ属、ニワトコ、イヌタデ属、ササゲ属アズキ亜属が各1軒から得られた。ウルシ属-ヌルデは断面の組織から種レベルの同定がされているが、今回産出したのは完形1点であるため、実体顕微鏡による同定に留めた。ウルシ属-ヌルデがウルシならば、中果皮の蠟が利用された可能性もある。川原平(6)遺跡では、当該期の漆塗土器が出土しており、ウルシの木が遺跡周辺に存在した可能性がある。

今回産出した炭化種実のほとんどは、中期末葉～後期初頭の堅穴住居跡であるSI10の炉の3層から得られた。3層は東側に位置する配石を伴う付属施設の覆土である。付属施設からはオニグルミの核やクリの果実などの食用にされない部位と、クリ炭化子葉やササゲ属アズキ亜属のように可食部位が共伴して産出している。ササゲ属アズキ亜属の大きさは、長さ5.4mm、幅3.7mm、厚さ3.6mmであった。周辺の芦沢(2)遺跡でも縄文時代中期中葉のSN01から1点(長さ4.1mm、幅2.9mm)出土している。県内の縄文時代の遺跡から出土したアズキ亜属炭化種子の大きさ(佐々木, 2012)と比較すると、青森市三内丸山遺跡の前期末葉～中期のアズキ亜属の平均値である長さ 3.4 ± 0.4 mm、幅 2.4 ± 0.2 mmよりは確実に大きく、八戸市田代遺跡の中期末葉～後期初頭の堅穴住居跡から出土したアズキ亜属の平均値である長さ 4.6 ± 0.6 mm、幅 3.1 ± 0.5 mmよりも大きい、最大の大きさである長さ5.4mm、幅3.8mm、厚さ3.2mmとほぼ同等の大きさであった。

縄文時代晩期前葉～中葉のフラスコ状土坑SK07とSK08から出土した完形土器それぞれ9個体のうち、今回検討した1個体の土器内には炭化種実が含まれていなかった。堆積当時から土器内に種実が含まれていなかった可能性や、堆積当時の炭化種実の含有量が少なかった可能性、SK08のP-5については水洗した体積が少量であったために種実がほとんど得られなかった可能性、未炭化の種実が入っ

ていたが分解して消失した可能性などが考えられる。

子囊菌がわずかに産出しているが、土壌中に含まれていたか、あるいは材などに付着していたものが堆積したと考えられる。

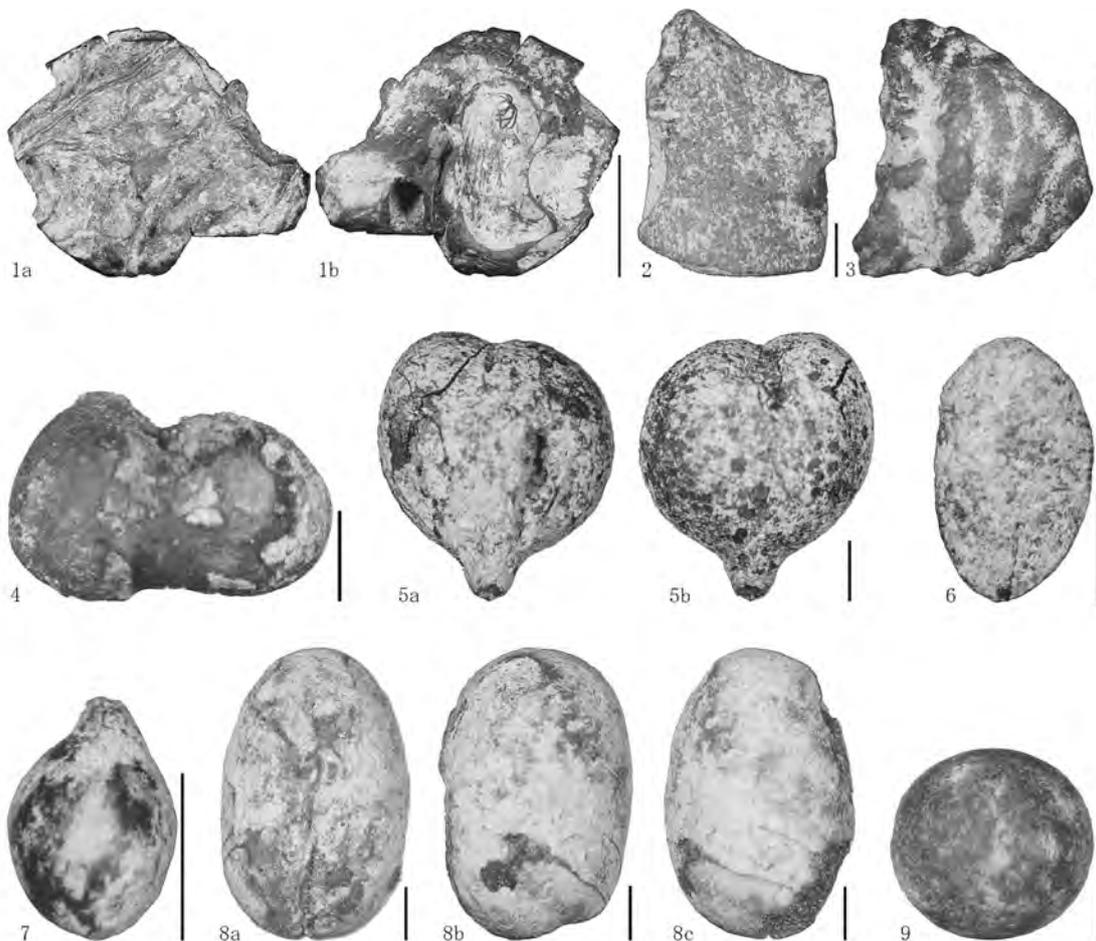
引用文献

小畑弘己 (2008) マメ科種子同定法. 小畑弘己編「極東先史古代の穀物3」: 225-252, 熊本大学.

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 (2007) 土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培. 植生史研究, 15-2, 97-114.

パレオ・ラボ (2014) 炭化種実同定分析. 青森県埋蔵文化財調査センター編「芦沢(2)遺跡」: 72-75, 青森県教育委員会.

佐々木由香 (2012) 縄文時代のマメ類利用の研究-三内丸山遺跡を中心にして-. 特別史跡三内丸山遺跡年報, 16, 61-69.



スケール 1, 3:5mm, 2, 4-9:1mm

図版1 川原平(6)遺跡から出土した炭化種実

1. オニグルミ炭化核 (SI10、炉、3層、No. ②)、2. クリ炭化果実 (SI10、炉、3層、No. ②)、3. クリ炭化子葉 (SI10、炉、3層、No. ②)、4. ウルシ属-ヌルデ炭化内果皮 (SI03、炉1、焼土層、No. ④-2)、5. ブドウ属炭化種子 (SI10、炉、3層、No. ④-2)、6. ニワトコ炭化核 (SI10、炉、1層、No. ①)、7. イヌタデ属炭化果実 (SI10、炉、3層、No. ④-2)、8. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (SI10、炉、3層、No. ③)、9. 子囊菌炭化子囊 (SI10、炉、3層、No. ②)

第3節 土器付着炭化物分析

株式会社 パレオ・ラボ

第1項 放射性炭素年代測定（AMS年代測定）

1. はじめに

川原平(6)遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて炭素窒素同位体比測定も行われている（第3節第2項参照）。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は、土坑SK07の底面から約15cm上（覆土5層）の壁際に設置されたような状況で出土した深鉢形土器5個体（P-1、P-3、P-7、P-8、P-9）の内面付着炭化物（PLD-26136～26140）である。なお、P-3とP-8は倒立状態で出土しており、土器内部は空洞の状態であった。測定用の試料は、メスを用いて、内面の付着炭化物を採取した。土器の型式学的な時期は、P-7～9は縄文時代晩期前葉、P-3は晩期中葉、P-1は晩期中葉～後葉である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による想定年代	前処理データ	前処理
PLD-26136	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 遺物No. P-1 (図62-9) 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:口縁部内面 器種:深鉢形 状態:dry	縄文時代晩期 中葉～後葉	前処理前重量:115.27mg 燃焼量:4.41mg 精製炭素量:2.59mg 炭素回収量:0.98mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-26137	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 遺物No. P-3 (図62-7) 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形(台付) 状態:dry	縄文時代晩期中葉 (大洞C式期)	前処理前重量:330.46mg 燃焼量:6.01mg 精製炭素量:3.09mg 炭素回収量:0.91mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-26138	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 遺物No. P-7 (図62-2) 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形(台付) 状態:dry	縄文時代晩期前葉 (大洞B2式期)	前処理前重量:191.72mg 燃焼量:5.24mg 精製炭素量:3.21mg 炭素回収量:0.90mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-26139	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 遺物No. P-8 (図62-10) 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形 状態:dry	縄文時代晩期前葉	前処理前重量:45.01mg 燃焼量:3.98mg 精製炭素量:1.90mg 炭素回収量:0.93mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-26140	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 遺物No. P-9 (図62-3) 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形(台付) 状態:dry	縄文時代晩期前葉 (大洞B2式期)	前処理前重量:200.11mg 燃焼量:5.76mg 精製炭素量:3.68mg 炭素回収量:0.86mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

3. 結果

表2に、測定回数と、炭素・窒素同位体比を求めるために質量分析計で測定した炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正に用いるために加速器で測定した炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%で

あることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	質量分析計で測定した $\delta^{13}\text{C}$ (‰)	加速器で測定した $\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP \pm 1 σ)	¹⁴ C年代 (yrBP \pm 1 σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
						1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-26136 遺物No. P-1	9	-26.3	-27.36 \pm 0.14	2850 \pm 22	2850 \pm 20	1048BC (68.2%) 976BC	1107BC (1.2%) 1101BC 1088BC (94.2%) 929BC
PLD-26137 遺物No. P-3	8	-26.1	-28.05 \pm 0.12	3058 \pm 23	3060 \pm 25	1385BC (38.2%) 1340BC 1316BC (30.0%) 1280BC	1404BC (94.6%) 1260BC 1240BC (0.8%) 1236BC
PLD-26138 遺物No. P-7	9	-24.3	-26.31 \pm 0.14	3141 \pm 22	3140 \pm 20	1441BC (68.2%) 1400BC	1495BC (4.1%) 1476BC 1459BC (83.4%) 1382BC 1341BC (7.9%) 1317BC
PLD-26139 遺物No. P-8	9	-25.8	-27.72 \pm 0.12	2932 \pm 21	2930 \pm 20	1207BC (1.5%) 1204BC 1196BC (42.3%) 1141BC 1134BC (20.0%) 1109BC 1098BC (4.4%) 1090BC	1211BC (95.4%) 1053BC
PLD-26140 遺物No. P-9	9	-25.8	-27.20 \pm 0.20	3098 \pm 21	3100 \pm 20	1412BC (31.6%) 1383BC 1341BC (36.6%) 1308BC	1425BC (95.4%) 1296BC

4. 考察

試料の暦年較正結果のうち、2σ暦年代範囲（95.4%の確率）に着目し、結果を整理する。なお、年代については、小林（2008）に示された縄文土器編年と暦年代の対応関係と、藤沼・関根（2008）に集成された測定例を参照した。

SK07出土の遺物No. P-1から採取された土器内面付着炭化物（PLD-26136）は、1107-1101 cal BC（1.2%）および1088-929 cal BC（94.2%）で、縄文時代晩期前葉～中葉の暦年代範囲を示した。遺物No. P-3から採取された土器内面付着炭化物（PLD-26137）は、1404-1260 cal BC（94.6%）および1240-1236 cal BC（0.8%）で、縄文時代後期末葉～晩期初頭の暦年代範囲を示した。遺物No. P-7から採取された土器内面付着炭化物（PLD-26138）は、1495-1476 cal BC（4.1%）、1459-1382 cal BC（83.4%）、1341-1317 cal BC（7.9%）で、縄文時代後期後葉～末葉の暦年代範囲を示した。遺物No. P-8から採取された土器内面付着炭化物（PLD-26139）は、1211-1053 cal BC（95.4%）で、縄文時代晩期初頭～前葉の暦年代範囲を示した。遺物No. P-9から採取された土器内面付着炭化物（PLD-26140）は、1425-1296 cal BC（95.4%）で、縄文時代後期末葉の暦年代範囲を示した。

遺物No. P-1とP-8は付着していた土器の型式学的な時期である縄文時代晩期前葉と中葉を含む年代範囲であったが、遺物No. P-3・7・9は想定年代よりも古い年代であった。ただし、遺物No. P-7とP-9の年代については、同様の¹⁴C年代を示した大洞B式の土器付着炭化物の測定例があり、縄文時代晩期前葉の範囲で捉えられる可能性もある。なお、同試料は、炭素・窒素安定同位体比およびC/N比からC₃植物の炭化物と考えられている（第3節第2項参照）。したがって、内容物の年代が海洋リザーバー効果等で古くなっている可能性は低い。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
 藤沼邦彦・関根達人 (2008) 亀ヶ岡式土器 (亀ヶ岡式系土器群). 小林達雄編「総覧縄文土器」: 530-535, アム・プロモーション.
 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

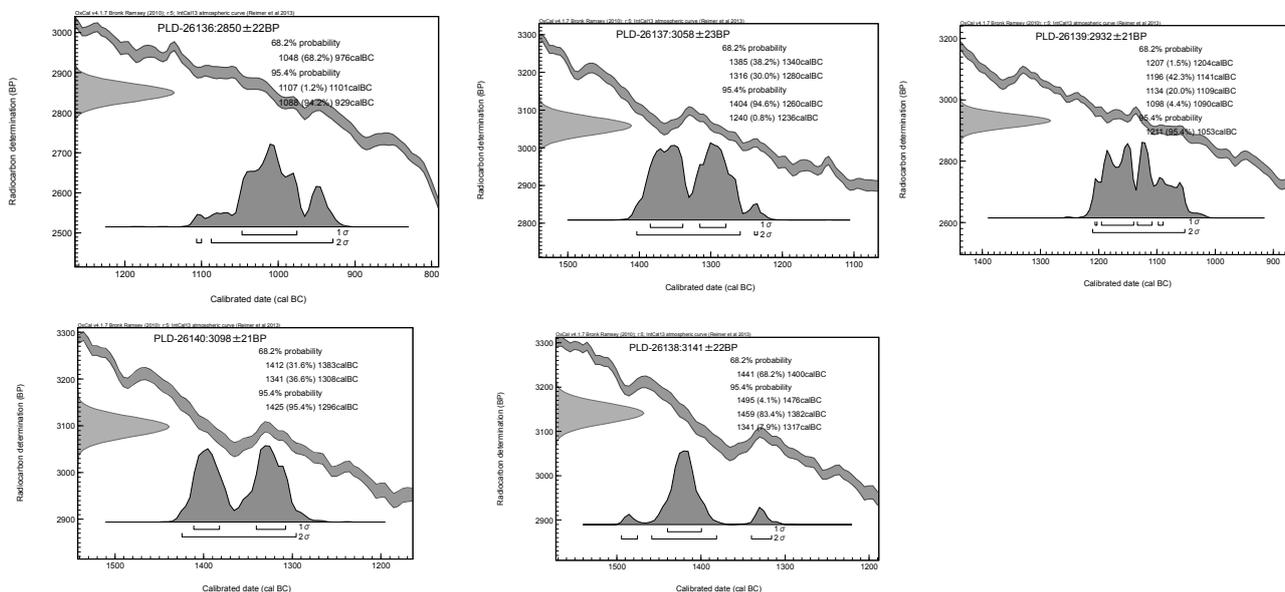


図1 暦年較正結果

第2項 炭素・窒素安定同位体比分析

1. はじめに

青森県の川原平(6)遺跡より出土した土器の内面付着炭化物の起源物質を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。

なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（第3節第1項参照）。

2. 試料および方法

試料は、川原平(6)遺跡から出土した土器内面付着炭化物5点（試料番号P-1、P-3、P-7、P-8、P-9）である。測定を実施するにあたり、各試料に対して、酸・アルカリ・酸洗浄（HCl:1.2N, NaOH:1.0N、P-8試料はHCl:1.2N, NaOH:0.1N）を施して試料以外の不純物を除去した後、測定を行った。炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。

また、炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{CPDB}$ ）および窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{NAir}$ ）の測定には、質量分析計DELTA V（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで CO_2 と N_2 を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度 1000°C 、還元炉温度 680°C 、分離カラム温度 45°C である。分離した CO_2 および N_2 はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

3. 結果

表1に、試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。図1には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、図2には炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。

図1において、試料番号P-1、P-3、P-8の土器付着炭化物3点はいずれも C_3 植物の位置にプロットされた。試料番号P-7の土器付着炭化物は C_3 植物・草食動物付近の窒素安定同位体比がやや高い位置にプロットされた。試料番号P-9の土器付着炭化物は C_3 植物付近の窒素安定同位体比がやや高い位置にプロットされた。

図2において、試料番号P-1、P-3、P-7、P-8の土器付着炭化物4点はいずれも C_3 植物・草食動物の位置にプロットされた。試料番号P-9の土器付着炭化物は堅果類の位置にプロットされた。

表1 結果一覧表

試料番号	出土位置	試料情報	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
P-1 (図62-9)	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:口縁部内面 器種:深鉢形	-26.3	2.75	57.9	3.97	17.0
P-3 (図62-7)	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形(台付)	-26.1	7.53	56.7	7.07	9.35
P-7 (図62-2)	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形(台付)	-24.3	9.04	64.1	3.64	20.5
P-8 (図62-10)	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形	-25.8	4.96	52.8	3.07	20.1
P-9 (図62-3)	遺構:SK07 位置:底面から約15cm上 層位:覆土5層	種類:土器付着炭化物 付着位置:胴部内面 器種:深鉢形(台付)	-25.8	8.55	67.6	2.38	33.1

4. 考察

試料番号P-1とP-3、P-8の土器付着炭化物は、図1でC₃植物、図2でC₃植物・草食動物に相当する位置にプロットされ、C₃植物に由来すると推定される。試料番号P-7の土器付着炭化物は、図1でC₃植物・草食動物付近、図2でC₃植物・草食動物に相当する位置にプロットされ、C₃植物に由来すると推定される。試料番号P-9の土器付着炭化物は、図1でC₃植物付近、図2で堅果類に相当する位置にプロットされ、C₃植物の堅果類に由来すると推定される。

参考文献

赤澤 威・南川雅男 (1989) 炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元. 田中 琢・佐原 眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」: 132-143, クバプロ.

坂本 稔 (2007) 安定同位体比に基づく土器付着物の分析. 国立歴史民俗博物館研究報告, 137, 305-315.

米田 穰 (2008) 丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析. 豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」: 261-263, 豊田市教育委員会.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B (課題番号16300290) 研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」, 85-95.

吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火焰土器の国 新潟」: 87-99, 新潟日報事業社.

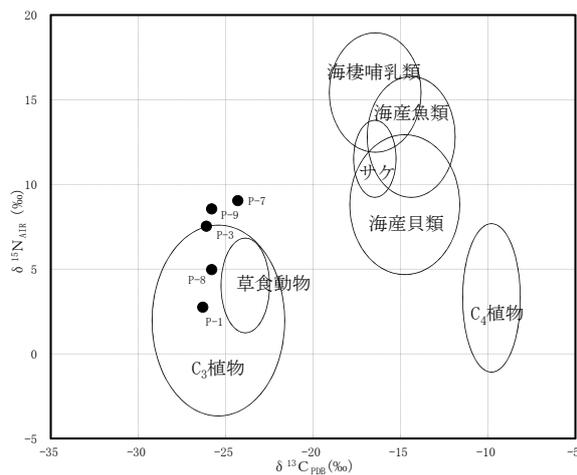


図1 炭素・窒素安定同位体比 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)

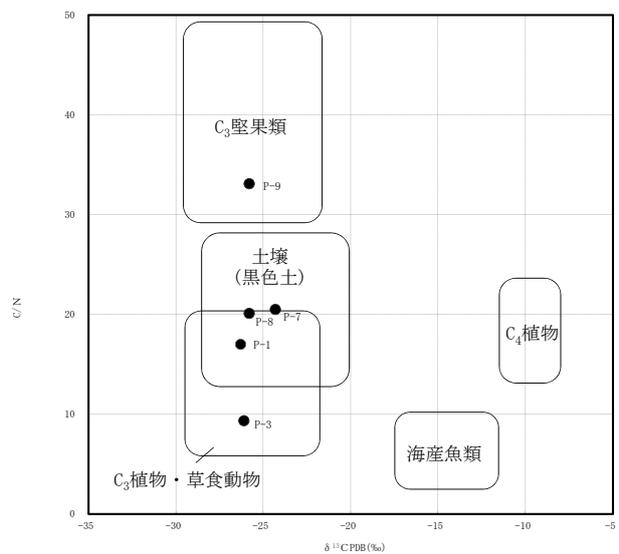


図2 炭素安定同位体比とC/N比の関係 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)

第4節 土器付着赤色塗膜の材質分析

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

川原平(6)遺跡より出土した縄文時代の土器に付着する赤色塗膜について、その材質と塗膜構造を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、竪穴住居跡SI02の床面直上より出土した深鉢形土器P-8（図19-14）の底部内面の赤色塗膜である試料No. 1、大形住居跡SI01の①エリア覆土より出土した小型（ミニチュア）土器底部内面の赤色塗膜である試料No. 2、SI01内の土坑SK03（SK48）の覆土2層より出土した器種不明土器の胴部外面の赤色顔料である試料No. 3の3点である（表1、図版1-1、2-1、3-1）。時期は、試料No. 1はSI02の帰属時期である縄文時代中期末葉～後期初頭と同時期、試料No. 2とNo. 3はSI01の帰属時期である縄文時代中期末葉～後期初頭よりも新しい時期と考えられている。各土器より塗膜および顔料を少量採取し、分析試料とした。

肉眼的特徴より漆の存在が予想された試料No. 1とNo. 2については、漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。赤色顔料が外面に塗布されたとみられる試料No. 3については、顔料の材質を調べるために蛍光X線分析を行った。また、3点すべてについて、赤色顔料の粒子形状を確認するべく、生物顕微鏡観察を行った。表1右側に実施した分析項目を示す。

表1 分析対象一覧

試料No.	出土遺構	出土層位	器種・部位	遺物番号	塗膜面	赤外分光分析	塗膜分析	蛍光X線分析	赤色顔料の顕微鏡観察
1	SI02	床面直上	深鉢形土器・底部	P-8	内面	○	○	—	○
2	SI01（①エリア）	覆土一括	小型土器・底部		内面	○	○	—	○
3	SI01内SK03（SK48）	覆土2層	器種不明土器・胴部		外面	—	—	○	○

[赤外分光分析（試料No. 1、No. 2）]

測定した塗膜は、試料No. 1がやや光沢のある暗褐色、試料No. 2が光沢のない黒色である（図版1-2、2-2）。赤外分光分析は、各付着物から手術用メスを用いて薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光（株）製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

[塗膜分析（試料No. 1、No. 2）]

試料No. 1はすでに剥落していた塗膜の一部、試料No. 2は土器に付着する塗膜を少量採取した。塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム（#2000）を用いて厚さ約50μm前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、主に赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム（#2000）を用いて厚さ約20μm前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

〔蛍光X線分析（試料No. 3）〕

試料は、器種不明土器の胴部外面の一部に付着する赤色顔料である。実体顕微鏡下でセロハンテープに極微量採取して分析試料とした。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type II を使用し、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

〔赤色顔料の顕微鏡観察

（試料No. 1～No. 3）

各試料について、実体顕微鏡下でセロハンテープに極微量採取して観察試料とした。なお、試料No.3は、蛍光X線分析用に採取した試料と共通である。生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

3. 結果および考察

以下に、分析結果について述べる。なお、図1の赤外吸収スペクトルは、縦軸が透過率（%）、横軸が波数（Wavenumber (cm⁻¹);カイザー）である。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（表2）。各試料の特徴は表4にまとめた。

〔試料No. 1、深鉢形土器内面〕（図版1）

赤色塗膜層は、漆層c1～c3層と赤色顔料層、漆層c4層の5層で構成されていた（図版1-3、4）。赤外分光分析では、CH基に由来する2927 (cm⁻¹)、2858 (cm⁻¹)の吸収が明瞭にみられ、また生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収（吸収No.7）が認められた（図1-1）。赤外分光分析の結果から、漆の可能性が高い。塗膜剥落の恐れがあり胎部を含んだ塗膜試料の採取が困難であったため、下地にあたる層の存在は未確認であるが、後述の試料No.2と同様であれば、生漆が土器胎部に直接塗布されていたと推定される。漆層c3層とc4層の間に観察された赤色顔料層は、現状は粉状で漆が混和されていなかった。塗膜断面の

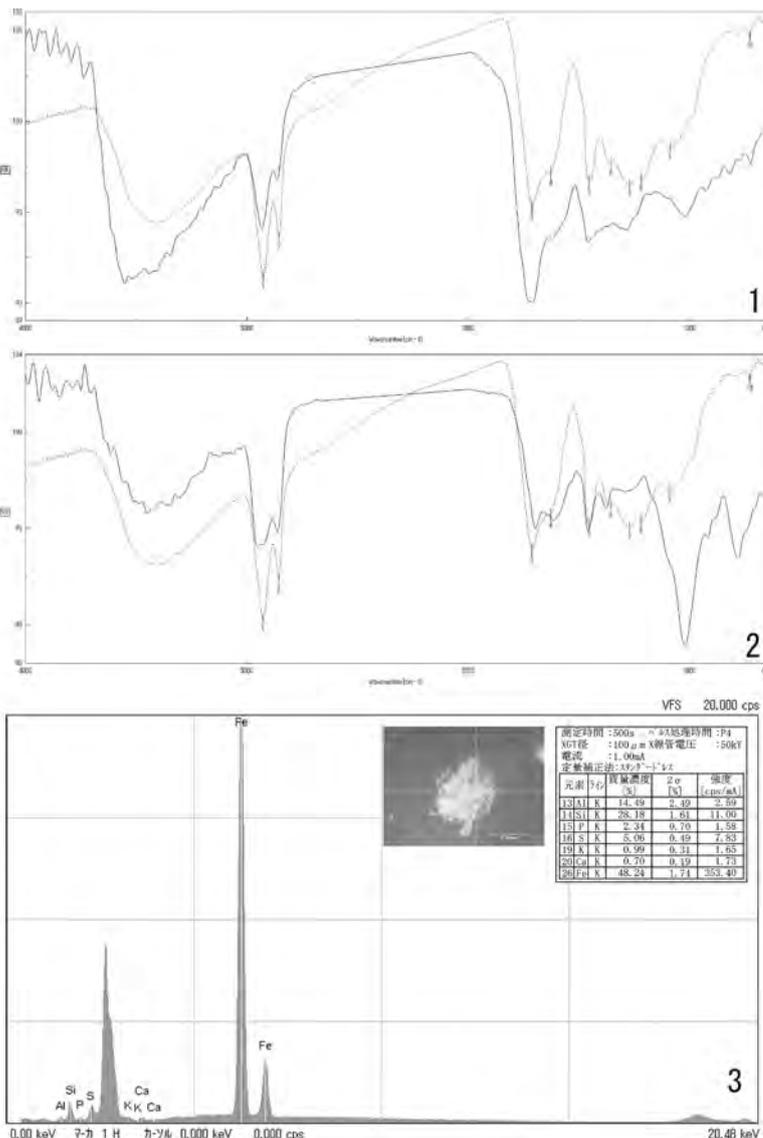


図1 赤外分光スペクトル（実線：付着物、点線：生漆）および蛍光X線スペクトル
 1. 試料No.1の赤外分光スペクトル 2. 試料No.2の赤外分光スペクトル
 3. 試料No.3の蛍光X線スペクトル

表2 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

観察より（図版1-4、明色部分が赤色顔料）、上層の漆層c4層が塗られた段階でこの赤色顔料層の赤色顔料が遊離して混ざり込んでいたとみられるため、赤色顔料層は何らかの物質で固定されていたとしても、それほど強く固定されていたわけではないと考えられる。塗膜を肉眼観察すると、この赤色顔料層を境にc4層にあたる漆層が剥落している箇所がみられる。赤色顔料のX線分析では、鉄（ Fe_2O_3 ）が検出された（表3）。また、塗膜断面とは別に極微量採取した赤色顔料を生物顕微鏡で観察すると、パイプ状粒子が観察され（図版1-5）、パイプ状ベンガラであることが確認された。

以上、深鉢形土器は、内面のみならず漆層および赤色顔料層が計5層塗られた製品であった。赤色顔料層の上にも漆層が存在していた。

〔試料No. 2、小型土器内面〕（図版2）

断面観察では、胎部a層と、漆層c1層、赤色顔料層が観察された（図版2-3、4）。土器の肉眼観察では、赤色顔料層の上にも塗膜が一部確認できるが、少量であり、赤外分光分析用試料は採取できたものの、断面観察用の試料はうまく採取できなかった。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール（ $\text{C}_{15}\text{H}_{22}\text{O}_2$ ）の吸収（吸収No. 6～No. 8）は認められなかったが、生漆に見られるCH基に由来する2927（ cm^{-1} ）、2858（ cm^{-1} ）の吸収が明瞭に見られ、吸収No. 9（1030 cm^{-1} ）付近に漆などの劣化に伴うゴム質の大きな吸収がみられた（図1-2）。赤外分光分析の結果から、劣化した漆の可能性が考えられる。下地にあたる層は観察されず、生漆が土器胎部に直接塗布されていたと考えられる。塗膜を肉眼観察すると、この赤色顔料層より上層の漆層（仮にc2層とする）はほとんど剥落している。赤色顔料のX線分析では、鉄（ Fe_2O_3 ）が検出された（表3）。また、塗膜断面とは別に極微量採取した赤色顔料を生物顕微鏡で観察すると、パイプ状粒子が観察され（図版2-5）、パイプ状ベンガラであることが確認された。

以上、小型土器は、内面のみならず漆層および赤色顔料層が少なくとも3層塗られた製品であった。赤色顔料層の上にも漆層が存在していた。

〔試料No. 3、器種不明土器外面〕（図版3）

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1-3に示す。鉄（Fe）、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）が主に検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図版3-2に示す。直径約1 μm のパイプ状粒子が認められた。

鉄が多く検出されており、赤色顔料はベンガラと考えられる。また、パイプ状粒子が検出されており、いわゆるパイプ状ベンガラであった。赤色顔料は現状では粉状の状態であり、赤色漆ではなく別の固着剤が使用されていたと考えられる。

4. おわりに

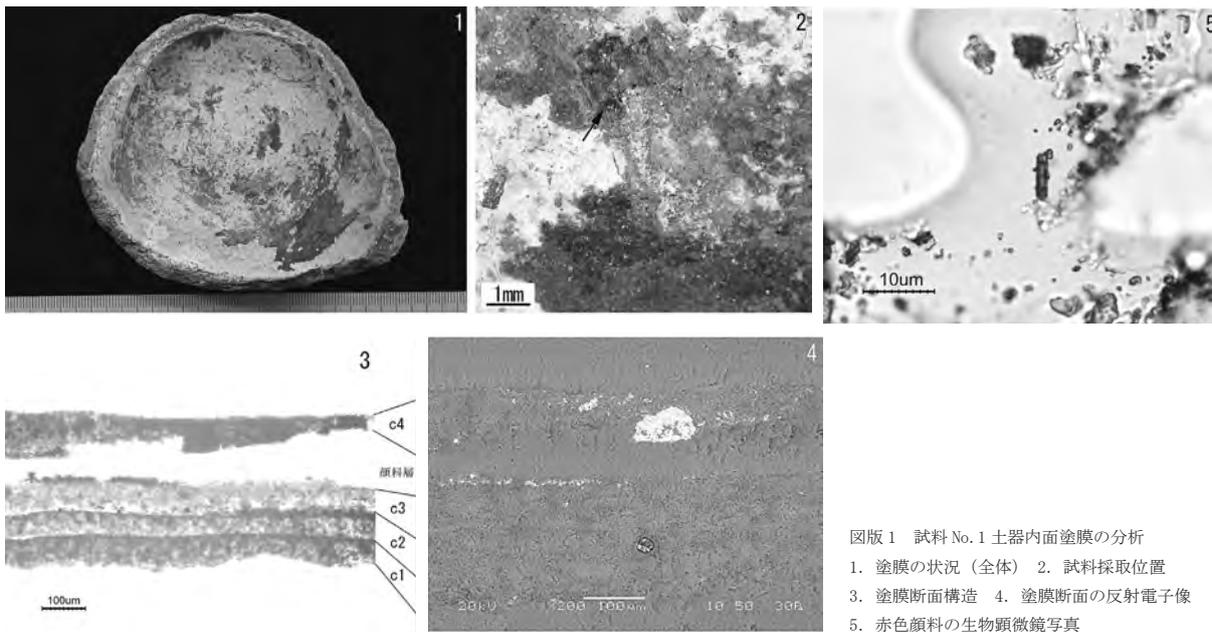
川原平(6)遺跡から出土した縄文時代の土器に付着する赤色塗膜について、その材質と塗膜構造を検討した結果、深鉢形土器内面（試料No. 1）と小型土器内面（試料No. 2）には漆層が観察され、赤色顔料はベンガラで漆層の間に粉状に存在した。器種不明土器外面（試料No. 3）はベンガラであった。ベンガラは、いずれもパイプ状ベンガラであった。

表3 赤色顔料層のX線分析結果（mass%）

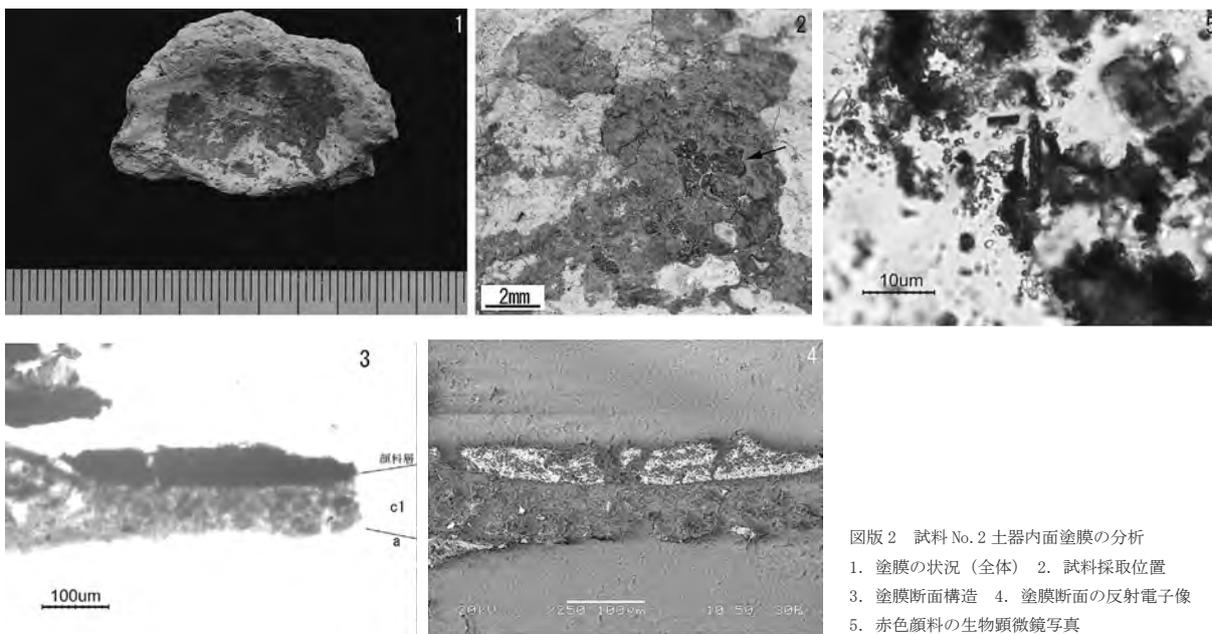
試料No.	塗膜層	C	Al_2O_3	SiO_2	Fe_2O_3	total
1	赤色顔料層	28.59	—	3.81	67.61	100.0
2	赤色顔料層	34.60	2.57	1.89	60.94	100.0
	a層	48.73	7.26	33.99	10.03	100.0

表4 塗膜分析結果

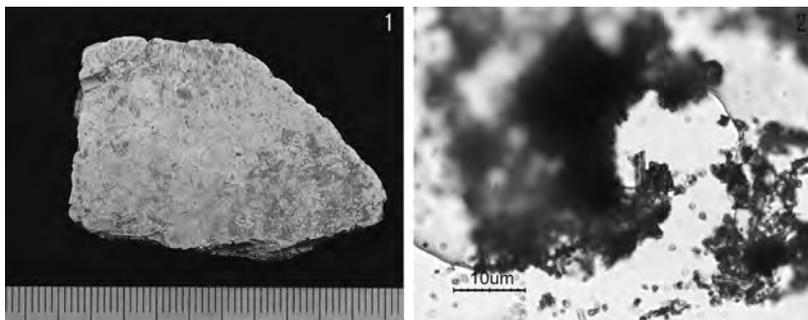
試料No.	下地	漆塗膜層	備考
1	無し?	4層	c3層とc4層の間に赤色顔料層（パイプ状ベンガラ）
2	無し	2層?	間に赤色顔料層（パイプ状ベンガラ）
3	—	—	パイプ状ベンガラ



図版1 試料 No. 1 土器内面塗膜の分析
 1. 塗膜の状況(全体) 2. 試料採取位置
 3. 塗膜断面構造 4. 塗膜断面の反射電子像
 5. 赤色顔料の生物顕微鏡写真



図版2 試料 No. 2 土器内面塗膜の分析
 1. 塗膜の状況(全体) 2. 試料採取位置
 3. 塗膜断面構造 4. 塗膜断面の反射電子像
 5. 赤色顔料の生物顕微鏡写真



図版3 試料 No. 3 土器外面赤色顔料の分析
 1. 赤色顔料の状況(全体)
 2. 赤色顔料の生物顕微鏡写真

第4章 総括

第1節 検出遺構について

調査の結果、竪穴住居跡26棟、土坑46基、その他の遺構として配石遺構1基・焼土跡1基・土器埋設遺構3基、小ピット267基を検出した。以下、それぞれの遺構について若干の考察を含めながら総括していくこととする。

1 竪穴住居跡について

竪穴住居跡は、合計26棟を検出した。3棟の重複が認められた第8号竪穴住居跡はA・B・Cとし、調査時点では2棟として把握した第15・16号竪穴住居跡、第12・26号竪穴住居跡は、それぞれを1棟と換算した。住居跡の構造等については表5でまとめたが、規模によって以下のように分類することができる。

大型—長軸径（推定含む）が10m以上のもの

中型—長軸径（推定含む）が4～10m未満のもの

小型—長軸径（推定含む）が4m未満のもの

以下、それぞれの詳細について考察を含めながらまとめていくこととする。

大型（図90～92）

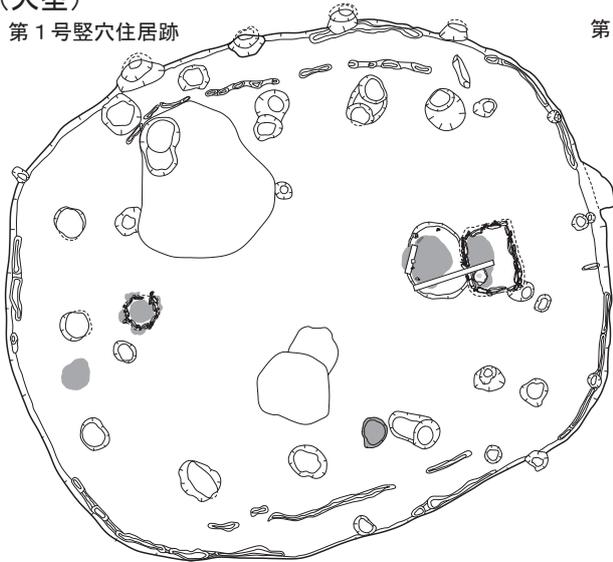
第1・4・15・16・23号竪穴住居跡が本類に含まれる（図90）。平面形は楕円形に近い形状になるものが多く、第4号竪穴住居跡のみが円形に近い形状になるものと推測される。床面積は第1号竪穴住居跡で140㎡を越えるものであり、他の住居跡でも推定ではあるが第4・23号竪穴住居跡について

表5 竪穴住居跡構造一覧

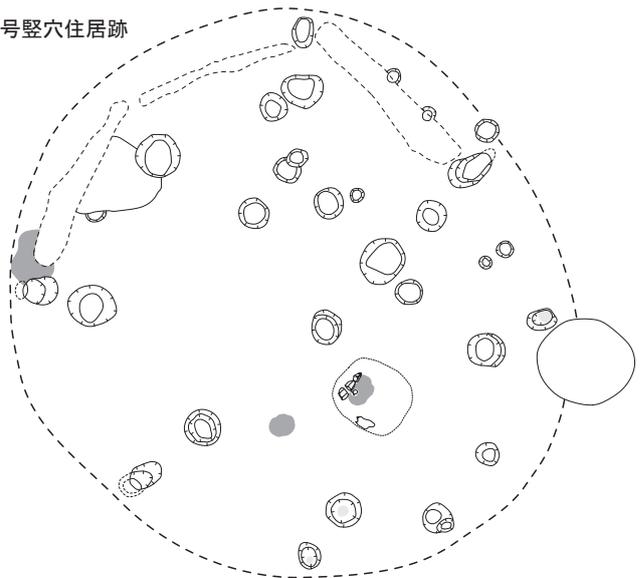
遺構名	平面形	床面規模	床面積	柱穴配置	炉	付帯施設	軸方向	時期(縄文時代)
SI01	楕円形	13.9×12.0m	141.1㎡	11本柱?	石囲炉2、地床炉4	—	北～東へ81°	中期末葉～後期初頭
SI02	円形	4.4×4.2m	14.5㎡	不明	石囲炉+掘込部	配石、埋設土器2	北～西へ46°	中期末葉～後期初頭
SI03	円形	6.4×5.8m	29.2㎡	4本柱	石囲炉+石組部	埋設土器	北～東へ88°	中期末葉～後期初頭
SI04	円形か	推定12.0m	—	7本柱?	石囲炉、地床炉	—	北～西へ42°	後期初頭
SI05	円形か	4.8×—m	約18㎡	4本柱	石囲炉	埋設土器	北～東へ86°	中期末葉
SI06	円形か	5.7×—m	約24㎡	4本柱	石囲炉+掘込部	埋設土器2	北～東へ84°	中期末葉～後期初頭
SI07	隅丸方形	3.4×—m	—	4本柱?	石囲炉	配石	北～西へ86°	後期初頭
SI08A	—	推定5.0m	—	6本柱?	地床炉	—	北～西へ86°	後期初頭～前葉以降
SI08B	—	推定4.0m	—	4本柱?	石囲炉?	—	北～西へ70°	後期初頭?
SI08C	円形	4.3×3.9m	12.8㎡	4本柱	石囲炉	配石	北～西へ71°	中期末葉
SI09	—	推定7.0m	—	4本柱?	石囲炉	配石?	北～東へ86°	後期初頭～前葉
SI10	楕円形か	4.7×—m	—	不明	石囲炉+石組部?	—	北～東へ86°	後期初頭
SI11	楕円形か	4.5×—m	—	4本柱?	石囲炉+石組部?	—	北～西へ67°	後期初頭
SI12	円形	5.8×4.9m	25.4㎡	4本柱	石囲炉?	—	北～西へ18°	中期末葉～後期初頭
SI13	円形か	推定3.5m	—	2本柱?	石囲炉	—	北～西へ9°	後期初頭
SI15・16	楕円形か	10.1×—m	—	不明	石囲炉、地床炉4	—	不明	後期初頭
SI17	円形か	3.6×—m	—	2本柱?	石囲炉	—	北～西へ26°	後期初頭
SI18	円形か	推定5.5m	—	4本柱	地床炉	—	北～西へ41°	後期初頭
SI19	円形か	推定6.0m	—	4本柱	地床炉	—	北～西へ31°	後期初頭
SI20	—	推定3.5m	—	4本柱	石囲炉	配石?	北～西へ79°	後期初頭
SI21	円形か	4.2×3.9m	—	不明	石囲炉	埋設土器2	北～西へ72°	中期末葉～後期初頭
SI22	円形	4.2×4.0m	約13㎡	4本柱	—	—	北～西へ17°	中期末葉～後期初頭
SI23	—	推定15.0m	—	10本柱?	地床炉	—	北～東へ82°	後期初頭～前葉
SI24	円形か	4.5×—m	—	4本柱	—	埋設土器	北～西へ40°	中期末葉～後期初頭
SI25	—	推定2.5m	—	不明	地床炉?	埋設土器	不明	後期初頭～前葉
SI26	—	推定4.5m	—	不明	—	—	不明	不明

(大型)

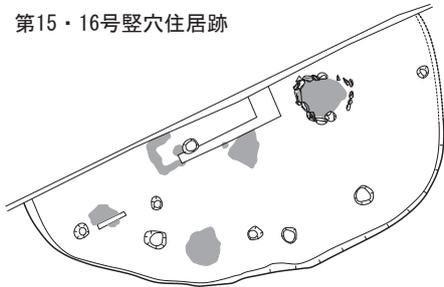
第1号竪穴住居跡



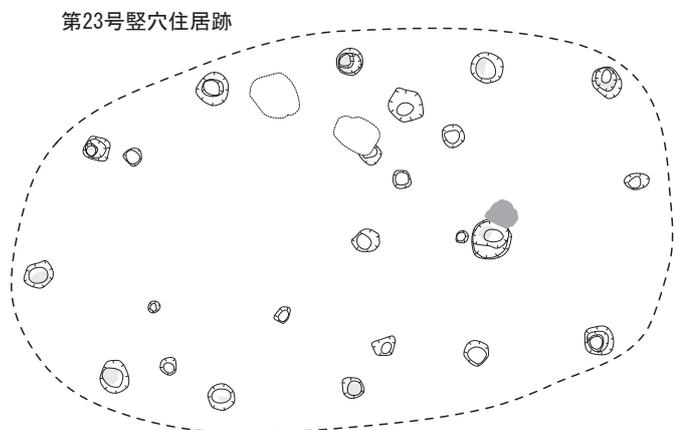
第4号竪穴住居跡



第15・16号竪穴住居跡



第23号竪穴住居跡



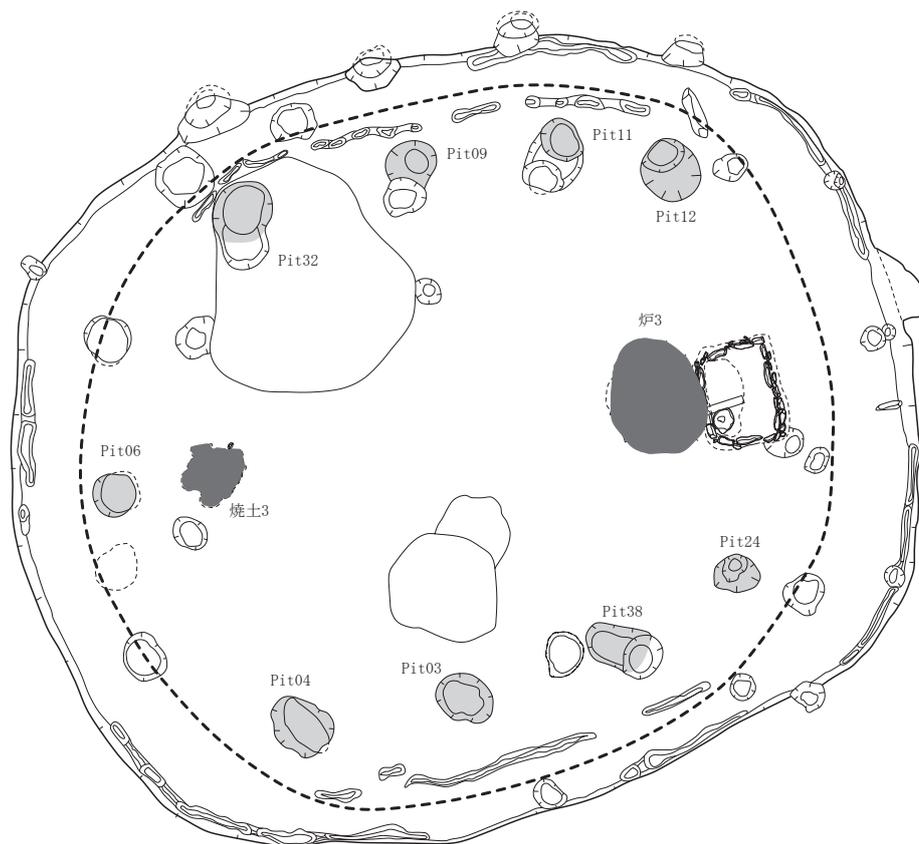
0 (S=1/180) 5m

図90 竪穴住居跡集成(1)大型

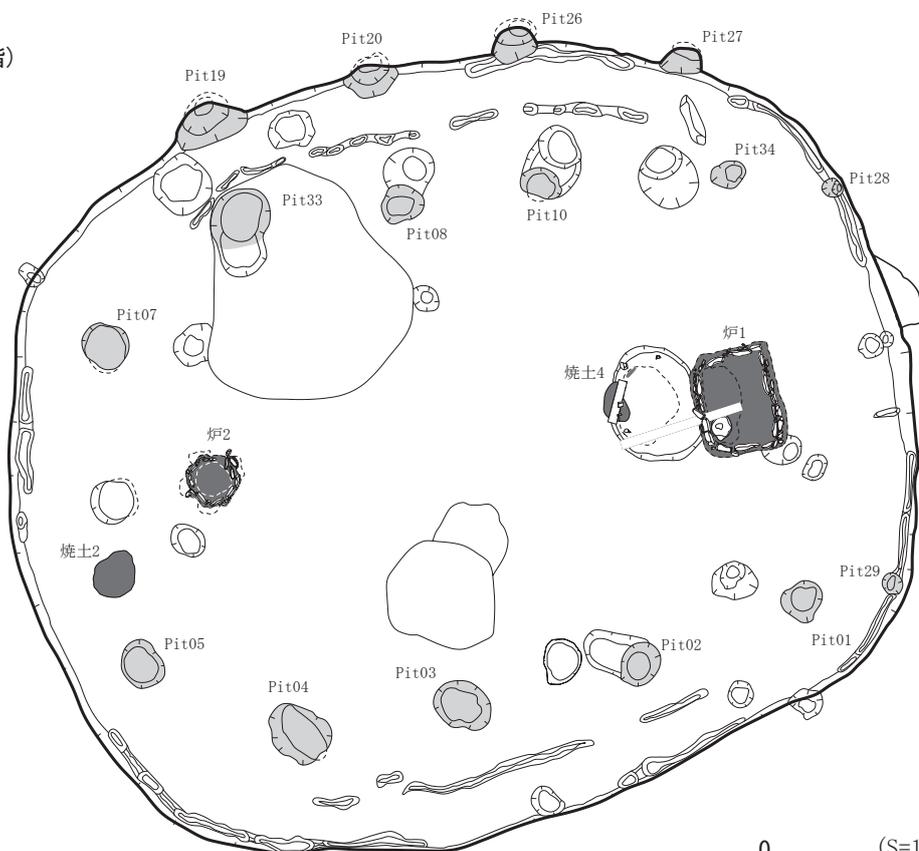
は同規模、第15・16号竪穴住居跡は約70㎡になるものと考えられる。炉は、石囲炉を伴うものが第1・4・15・16号竪穴住居跡で、同遺構には床面が焼ける焼土跡も確認されている。第1号竪穴住居跡には方形と円形の石囲炉2基が住居東側と西側にそれぞれ確認された。なお、第23号住居跡については、地床炉と考えられる焼土跡が1カ所のみであった。主軸方向については、第1・15・16・23号が東-西で、第4号竪穴住居跡が北西-南東であった。帰属時期については、第1号竪穴住居跡は、建て替え・拡幅等があったものと思われ、その期間も含めて縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。第4・15・16号竪穴住居跡は縄文時代後期初頭、第23号竪穴住居跡は縄文時代後期初頭～前葉であると考えられる。青森県内で同時期(大木10式併行期)の大形住居跡(長軸径10mを越えるもの)が検出されているのは、青森市三内丸山遺跡の第10・19号竪穴住居跡、鯉ヶ沢町餅ノ沢遺跡の第2・3号竪穴住居跡がある。なお、縄文時代後期初頭及び前葉期の大形住居跡(長軸径10mを越えるもの)は現在のところ報告されていない。柱穴配置については、第1・4号竪穴住居跡が特徴的な配置となっているため、詳細について記述していくこととする。

まず、第1号竪穴住居跡は、前述した通り、建て替え・拡幅等があった住居跡であるものと考えられる。その理由として、一回り小さい溝跡プランが床面で確認された点、炉1と炉3が重複している

(旧段階)



(新段階)



0 (S=1/120) 5m

図91 第1号竪穴住居跡新旧関係

点、住居北側に配置される小ピット（柱穴）が重複もしくは2個並列する点があげられる。ただ、床面に段差がついたり壁が壊されたりして建て替え・拡張が行われたわけではないため、新旧を明確にすることは困難である。しかしながら、内側を巡る溝跡であるとか、主軸方向がほとんど変わらないという要素などから、図91のように新旧関係を考察してみた。旧段階は、炉3と焼土3、柱穴配置は対になるPit12-24、Pit11-38、Pit09-03、Pit32-04にPit06を加えた9本が支柱穴と考えられる。旧段階住居跡の年代を決めるのはPit06から出土した深鉢形（図11-1）であるが、アルファベット状の沈線文と鱗状隆帯が貼り付けされる特徴などから縄文時代中期末葉（大木10式併行期）に比定される。新段階は、炉1・2、柱穴配置は対になるPit34-01、Pit10-02、Pit08-03、Pit33-04、Pit07-05の10本が支柱穴と考えられる。さらに、新段階には北側の壁からオーバーハングするように斜位に掘削された小ピットが検出されたが、これらは支柱穴を支える柱の痕跡であると考えられ、Pit27-34、Pit36-10、Pit20-08、Pit19-33がセットになるものと考えられる。類似するような小ピットの構造は餅ノ沢遺跡第3号竪穴住居跡にも見られ、当該期の特徴的な構造であるのかも知れない。新段階住居跡の年代を決めるのは、炉1の床面から出土した深鉢形（図11-8）であり、口縁部に長めの刺突のみで横位・斜位に施文していることから縄文時代後期初頭に比定される。後期初頭の文様構成のうち、側面圧痕・隆帯は古い構成要素という論考がある（榎本2008）。また、詳細は後述するが、刺突で文様を施すものは、ほとんどが側面圧痕や隆帯の文様構成に付随するということから、長めの刺突文を用いる図11-8も後期初頭の古い段階であると考えられる。また、柱穴から出土した炭化材を年代測定した結果（図8及び第3章第1節参照）、旧段階に含まれると考えられるPit06は3962±20yrBP、新段階に含まれると考えられるPit25は3887±20yrBP（いずれも暦年較正用）である。これは、それぞれの住居の帰属時期にほぼ一致する数値であり、その時期差は約75年、多く見積もっても115年程度であるとの結果が得られた。つまり、第1号竪穴住居跡は、中期末葉から後期初頭にかけて、建て替え・拡張は行ったものの、ほぼ連続して使用された住居跡である可能性が高いという考え方ができる。

第4号竪穴住居跡は、前述した第1号竪穴住居跡新段階の北側壁に見られた斜位に掘削された小ピットが付随する柱穴配置であるという特徴をもつ。ただ、図92の模式図に示した通り、第4号竪穴住居跡は、第1号竪穴住居跡とは異なって、北東・南西の両壁面に斜位掘削小ピットが付随するという違いがある。まず、支柱穴配置は、対になるPit05-01、Pit12-02、Pit20-03にPit23を加えて7本柱と考えられる。これに斜位掘削小ピットを組み合わせると、北東側はPit05-25、Pit12-19、Pit20-24、南西側はPit01-08、Pit02-09、Pit03-10がセットになるものと考えられる。その他の構造として、住居主軸ライン（北から西へ42°傾く）の南東側を対となって跨がるように設置されたPit06-07は出入り口の可能性が考えられる。

中型（図93）

第2・3・5・6・8（A・B・C）・9・10・11・12・18・19・21・22・24・26号竪穴住居跡が本類に含まれる。平面形はほとんどが円形を呈するものと考えられ、第10号と第11号竪穴住居跡のみ楕円形になる可能性がある。床面規模は長軸径が4～7m未満に収まるものがほとんどで、床面積も最大で29㎡（第3号竪穴住居跡）程度である。支柱穴の配置は4本柱になるものがほとんどで、第8号竪穴住居跡Aのみが6本柱になる可能性がある。主軸方向は若干の差はあるものの大きく2方向に

(模式図)

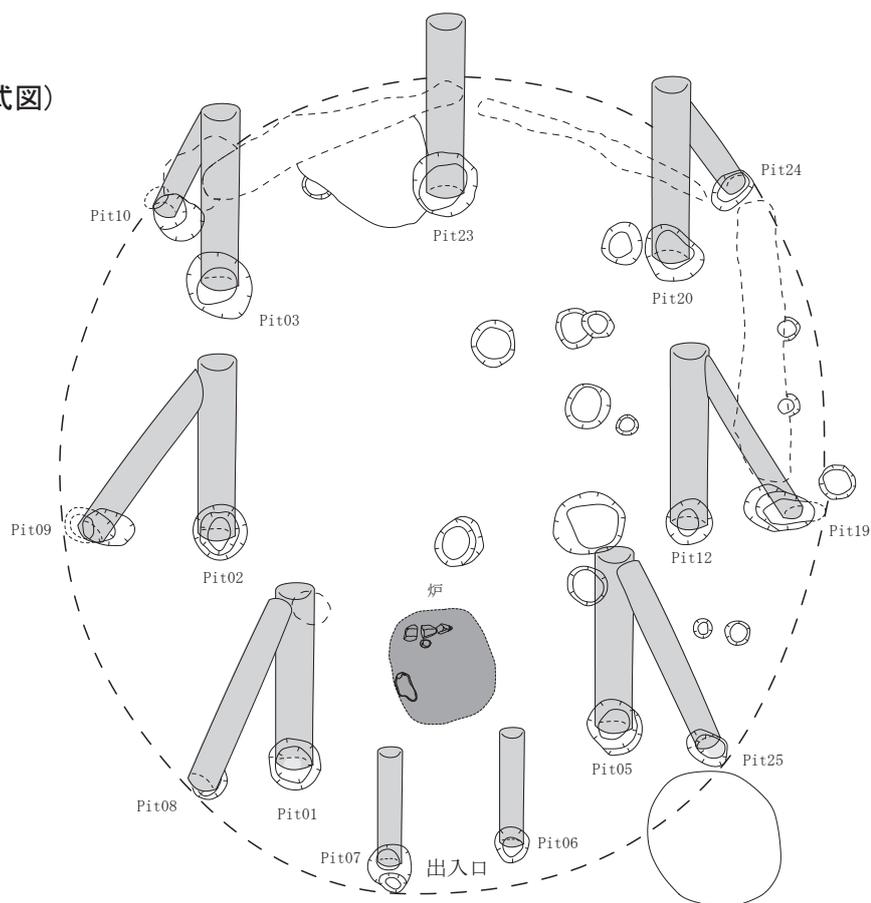


図92 第4号竪穴住居跡柱穴配置

分けられ、東－西方向（第3・5・6・8・9・10・11・21号竪穴住居跡）と北西－南東方向（第2・12・18・19・22・24号竪穴住居跡）である。帰属時期については、縄文時代中期中葉が第5・第8C号竪穴住居跡、縄文時代後期初頭が第8B・11・18・19号竪穴住居跡、後期初頭～前葉以降が第8A号竪穴住居跡で、それ以外は縄文時代中期末葉～後期初頭になるものと考えられる。炉・付帯施設については特徴的な要素が見られるものがあったため、詳細について記述していくこととする。

まず、炉についてだが、図93からもわかるように、炉の位置は全ての住居跡において主軸ライン上の東寄りもしくは南東寄りに偏ることがわかる。また、いわゆる「複式炉系列の炉」と考えられるものが第2・3・6・10・11号竪穴住居跡の5棟で確認できる。青森県内の複式炉を集成し分類した論考（坂本2008）を引用すると、A類（石囲炉＋掘り込み）とB類（石囲炉＋石組＋掘り込み）に分類できる。A類は、第2・6号竪穴住居跡、B類は、第3・10・11号竪穴住居跡が含まれる。なお、第2号竪穴住居跡は石囲土器片敷炉の可能性もあり、坂本のE類に含まれる可能性もある。

次に、付帯施設のうち住居床面で検出された埋設土器、いわゆる「埋甕」についてであるが、第2・3・5・6・21・24号竪穴住居跡で確認された。図93からもわかるが、埋設土器は住居の壁際から検出されるものが多く、第2・6・21号竪穴住居跡については、1棟の住居床面から2個体の埋設土器が確認されている。埋設土器の用途は不明であるが、いずれの埋設土器も炉から割と離れた位置に設置されており、少なくとも炉に関連するものではないということが言えるだろう。青森県内の屋内埋設土器を集成した論考（成田1998）によると、同時期（大木10式併行期）の屋内埋設土器が確認された遺跡は、上蛇沢(2)遺跡、弥栄平(1)遺跡、葦窪遺跡、野場(5)遺跡の4遺跡のみで、いずれも

1棟の竪穴住居跡のみからの検出であり、複数棟から検出された遺跡は川原平(6)遺跡のみということになる。また、共通点として、本遺跡も含め青森県内で検出された屋内埋設土器は全て正立状態で埋設されており、時期は違うものの倒立状態、いわゆる「伏甕」での検出例が多い近隣の岩手県の埋設土器（中期中頃）とは様相が異なる（阿部2008）。

最後に、付帯施設のうち「二」の字状に設置する配石についてであるが、第2・8C号竪穴住居跡で検出された。図93からもわかるように、炉のすぐ北東側壁寄りにいずれの配石も設置されるという特徴をもつ。近隣の遺跡である水上(2)遺跡からも同時期（大木10式併行期）で同様の配石が検出されており、設置位置は様々であるが、炉に近接するという点では共通点がある。

小型（図93）

第7・13・17・20・25号竪穴住居跡が本類に含まれる。平面形はほとんどが円形であると考えられ、第7号竪穴住居跡のみやや隅丸方形になるものと推察される。床面規模はほとんどが長軸径3m台になるが、第25号竪穴住居跡のみが2m台になるものと考えられる。支柱穴の配置は、第7・20号竪穴住居跡が4本柱、第13・17号は2本柱になるものと推定される。炉はほとんどが石囲炉であり、中型の住居跡で見られた「複式炉系列の炉」は確認されなかった。付帯施設が確認されたのは第7号竪穴住居跡の配石のみで、埋設土器が確認された住居跡はなかった。主軸方向は若干の差はあるものの大きく2方向に分けられ、東－西方向（第7・20号竪穴住居跡）と北西－南東方向（第13・17号竪穴住居跡）である。帰属時期は、全て縄文時代後期初頭であると考えられる。

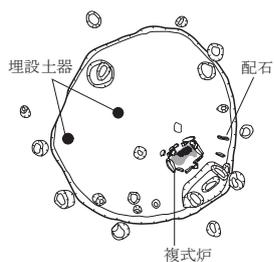
2 土坑について

土坑は、用途不明な遺構（SX）から変更になった2基（第44・45号土坑）、第1号竪穴住居跡内土坑として精査した3基（第46～48号土坑）を含め、合計46基を検出した。ここでは、土坑の属性をもとに特徴等を総括し、特殊な土坑については考察を含めながら詳細を記述していくこととする。なお、個々の属性については第2章第2節の記載のほか、表2に一覧としてまとめた。

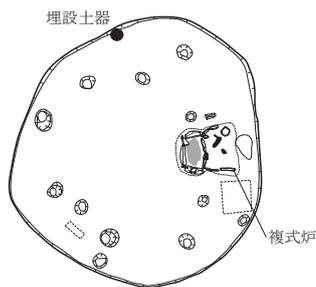
まず、形状であるが、平面形は円形のものが29基と一番多く、次いで不整形10基、楕円形6基、不明1基である。断面形は、逆台形状が22基、フラスコ状（袋状含む）が21基とほぼ半々で、箱形状が3基であった。規模については、底面長軸径が200cmを越えるものが4基（第13・36・44・48号土坑）で、150～200cm未満のものが11基（第5・6・7・14・16・20・24・28・30・31・41号土坑）であった。小型のものでは50cm未満のものが1基（第39号土坑）確認されている。深さは、100cmを越えるものが11基（第5・7・11・12・14・15・16・24・30・31・41号土坑）で、全て断面フラスコ状のものであった。遺物が出土した土坑は28基あり、中でも個体土器が出土するものが13基あった。時期別の内訳（いずれも縄文時代）は、中期前葉（円筒上層a式）が3基（第30・31・43号土坑）、中期中葉が1基（第41号土坑）、中期末葉が1基（第42号土坑）、中期末葉～後期初頭が3基（第29・44・45号土坑）、後期初頭が2基（第46・47号土坑）、後期初頭～前葉が4基（第33・35・36・48号土坑）、後期前葉（十腰内I式）が1基（第24号土坑）、晩期前葉が4基（第20・21・22・27号土坑）、晩期前葉～中葉が3基（第6・7・8号土坑）、晩期中葉が1基（第11号土坑）であった。第7号土坑からは9個体の土器が出土しており、詳細については後述する。また、第36・48号土坑からは土器片の他、石器も多量に出土しており、土坑として使われなくなった後、遺物が廃棄された可能性が高

(中型)

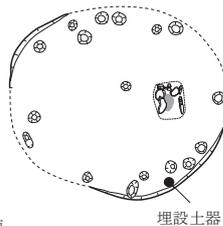
第2号竖穴住居跡



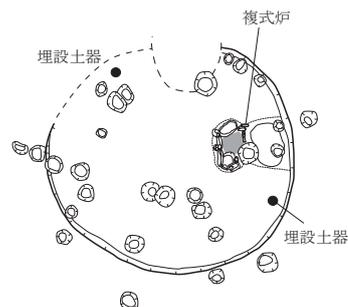
第3号竖穴住居跡



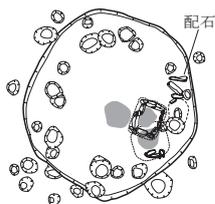
第5号竖穴住居跡



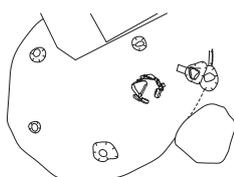
第6号竖穴住居跡



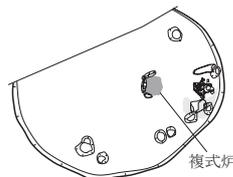
第8号竖穴住居跡



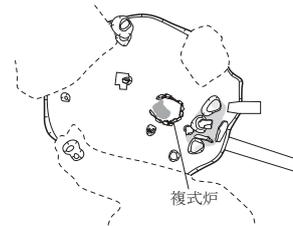
第9号竖穴住居跡



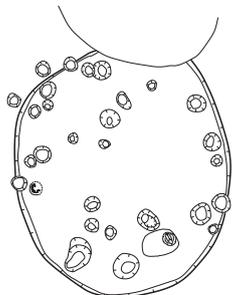
第10号竖穴住居跡



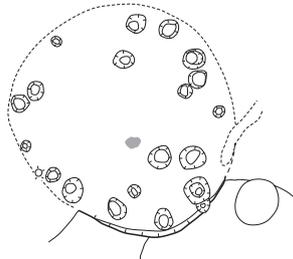
第11号竖穴住居跡



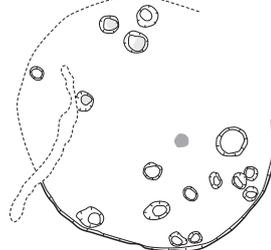
第12号竖穴住居跡



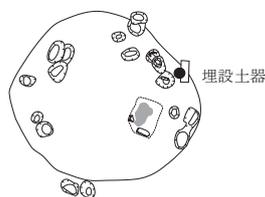
第18号竖穴住居跡



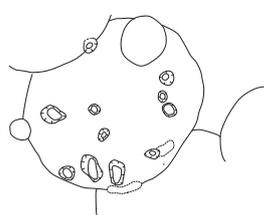
第19号竖穴住居跡



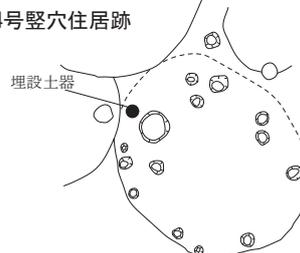
第21号竖穴住居跡



第22号竖穴住居跡

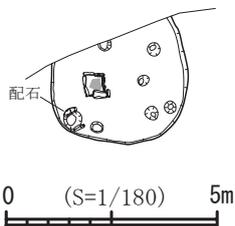


第24号竖穴住居跡

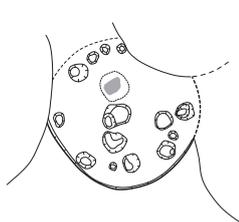


(小型)

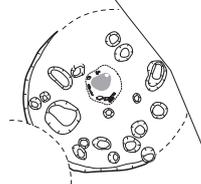
第7号竖穴住居跡



第13号竖穴住居跡



第17号竖穴住居跡



第20号竖穴住居跡

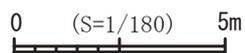
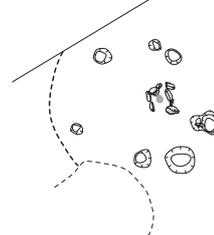


図93 竖穴住居跡集成 (2) 小・中型

い。第48号土坑からは切断土器(図67-17)が出土している。第40号土坑には、大きめの礫が5個含まれていて、1個は台石として使われていたようである。遺構との重複関係にあったものは5基(第35・36・46~48号土坑)で、第1号竖穴住居跡と重複関係にあった第46~48号土坑は、いずれも新しい土坑であるものと考えられる。

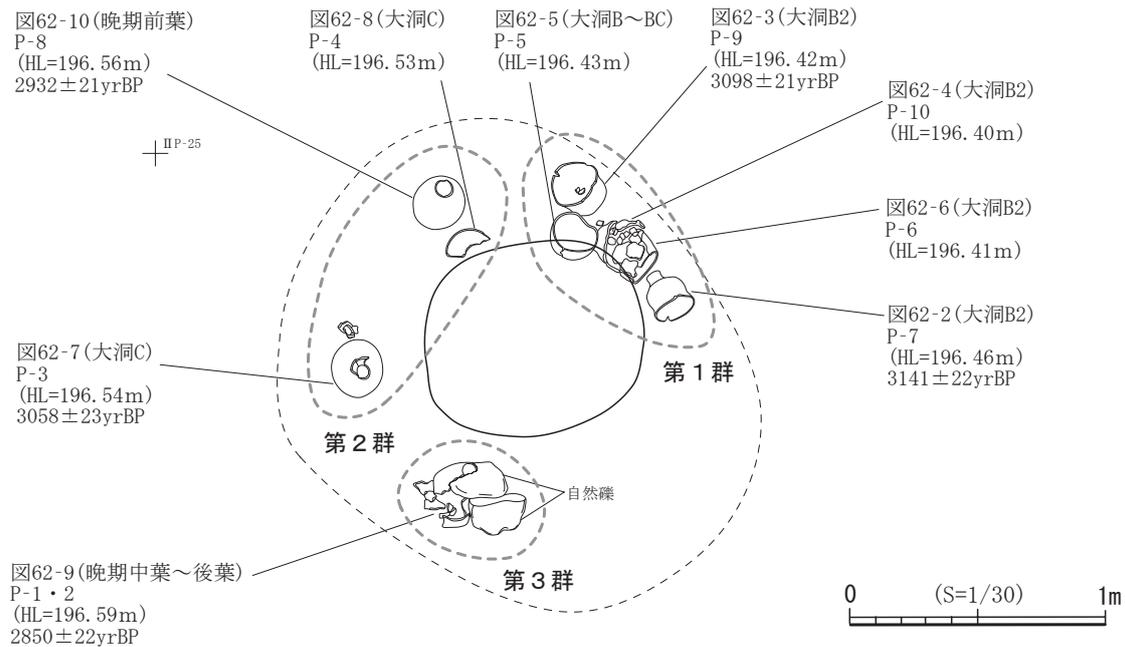


図94 第7号土坑遺物出土状況

縄文時代晩期前葉～中葉にかけての土器が9個体出土した第7号土坑について詳細を述べていくこととする。まず、出土状況であるが、堆積土第5層上面に壁際を半周するように並べられたような状態でほぼ完形の土器を9個体確認した。初めはこの第5層上面が土坑底面と判断したが、遺物を取り上げた後確認したところ、この下10～15cmが土坑掘方底面であることがわかった。この状況は、同時期の完形土器が7個体出土した第8号土坑にも言えることであり、いずれの土坑も底面から10～20cm程度堆積土が埋まったところに土器を並べて置いたということが言える。また、第7号土坑出土遺物については、出土状況を肉眼で観察した時には、9個体が同レベルで同時期に並べたものであると考えたが、取り上げて詳細を確認してみると土器型式に違いがあることに気づいたため、遺物取り上げ時のレベリング数値を元に詳細なレベル値（土器接地面レベル値）を割り出してみた（図94）。その結果、平均で約10cm程度、最大で19cmのレベル差があることがわかったため、レベル値を元にして出土した9個体の土器を第1～3群にグループ分けして考えてみることにした（図94）。第1群はレベル値が196.40～196.46mに収まるもので、粗製土器のP-5（図62-5）を除き、全て大洞B2式に比定されるものである。第2群はレベル値が196.53～196.56mに収まるもので、粗製土器のP-8（図62-10）を除き大洞C式に比定されるものである。第3群はP-1・2で取り上げたものであるが接合すると1個体になったもの（図62-9）であり、レベル値が196.59mと一番高い値が出たものである。粗製土器のため、詳しい時期は明確ではないが、縄文時代晩期中葉～後葉に比定されるものである。また、土器に付着する炭化物により、9個体のうち5個体について放射性炭素年代測定を実施してみた。第1群からはP-7・9、第2群からはP-3・8、第3群はP-1について実施した結果、測定結果が土器型式よりは全体的に古い値が出たものの、第1群が最も古く、次に第2群、そして第3群が最も新しいという結果が得られた（第3章第3節及び図94参照）。これらの成果から言えることとして、まず、第1群の土器5個体が一番最初に第7号土坑北東壁際に置かれ、その後、時間差をおいて第2群の3個

体が北西壁際に置かれ、最後に第3群の1個体が置かれたということが推察できる。景観的に第2群を置く際には第1群が、第3群を置く際には第1・2群の土器がむき出しになって見えていたものと考えられる。最後に、第7号土坑の用途について考察してみる。出土した9個体中P-4(図62-8)を除く8個体の内外面に炭化物が付着していたため、その成分について5個体を分析した結果、C3植物や草食動物付近という結果が得られた(第3章第3節)。つまり、普段食していたと考えられるものを土器で煮炊きし、吹きこぼれた物が炭化したという結果であり、土坑内に置かれた土器群は特別な土器というわけではなく、普段使用していた土器であるということが言える。それでは、これらの土器は貯蔵用に置かれた物なのかと言うと、P-3・4については、明らかに倒立状態で土器が置かれており、土器内に食物を入れて貯蔵すると仮定するならば、あり得ない置き方ということが言える。少し時期は古くなるが、近隣の芦沢(2)遺跡からは、縄文時代後期後葉～末葉にかけての土器1個体を倒立させて壁際に置くという土坑が2基検出されており(第20・39号土坑)、このように倒立させる置き方は意図的であるということが推察されるが、詳細は分かっていない。

3 その他の遺構について

配石遺構1基・焼土跡1基・土器埋設遺構3基、小ピット267基を検出した(図68～70、表3・4)。1基のみの検出であったが、配石遺構について類例も含めながら詳細を述べていく。まず、検出された位置であるが、大型の竪穴住居跡である第1号竪穴住居跡の北側に近接するような場所で見つかっている。検出状況としては、土坑のプラン上に1個の長円形大型礫が埋設されているという状況であった。このように土坑の堆積土に礫を配した配石遺構は、近隣の大川添(3)遺跡で2基確認されている(第1・2号配石遺構)。配した礫は本遺跡検出のものは2個であったと推察されるが、大川添(3)遺跡は2基とも5～6個の礫が使用されており、違いが見受けられる。土坑部の規模であるが、本遺跡配石遺構の開口部が約60×30cmという規模は、大川添(3)遺跡第1号配石遺構とほぼ同規模である。配石遺構の帰属時期であるが、出土遺物がないため詳細は不明ではあるが、第1号竪穴住居跡が縄文時代中期末葉～後期初頭であり、その住居跡に近接するという点と、大川添(3)遺跡の配石遺構が、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡に近接するという点が類似しており、いずれも同時期に近い時期の配石遺構であるということが推察できるが、今後、時期決定できる遺物の共伴が期待されるものである。

4 遺構の時期変遷について

最後に、帰属時期が特定できる遺構について時期変遷をまとめてみる。なお、煩雑さを避けるため、竪穴住居跡と土坑を区別して考察してみた。以下、詳細について述べる。

まず、竪穴住居跡の時期変遷について見ていく。本遺跡において、竪穴住居を構築して集落形成していた時期は、縄文時代中期末葉～後期前葉にかけての限定された時期であったことが明らかとなった。竪穴住居を構築した位置や出土遺物などから判断すると、集落自体が途絶えることなく継続していったものと考えられるが、継続していった中でどのように変遷していったのかを考察してみたいと思う。まず、変遷の分岐点として設定したのが、土器の様相も大きく変化してくる縄文時代後期初頭である。土器の詳細については第2節で述べることにするが、隆帯や刺突などにより土器の文様構成

が行われるようになる後期初頭を境にして、集落形成のあり方を比較してみることにする(図95)。最初に、縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての集落の様子を概観してみる。この時期に含まれる竪穴住居跡は、第1(旧段階)・2・3・5・6・8C・12・21・22・24号竪穴住居跡の10棟である。特徴として言えることは、第1号竪穴住居跡(旧段階)を除き、全てが中型の竪穴住居跡であるということである。また、集中的な配置と言うよりもそれぞれの住居が散在しているという印象を受ける。炉の形態は、いわゆる「複式炉系列の炉」が10棟中3棟に見られる(第2・3・6号竪穴住居跡)。付帯施設が付随するものも多く、埋設土器を伴うものが6棟(第2・3・5・6・21・24号竪穴住居跡)、配石を伴うものが2棟(第2・8号竪穴住居跡)であった。次に、縄文時代後期初頭～前葉にかけての集落の様子を概観してみる。この時期に含まれる竪穴住居跡は、第1(新段階)・4・7・8A・B・9・10・11・13・15・16・17・18・19・20・23・25号竪穴住居跡の16棟である。また、同時期と考えられる第2・4号小ピット群も加えると合計17棟を数える。重複している住居もあることから、全てが同時期に存在していたとは言えないが、本遺跡における集落の最盛期であったと言える。特徴として、大型な住居や中期末葉～後期初頭には見られなかった小型の住居が増え、住居の規模が多様化する点が挙げられる。また、中型の住居を中心として、遺跡の南西側に列をなすように構築される点も特徴的である。炉の形態も変化を見せ、「複式炉系列の炉」は2棟のみ(第10・11号竪穴住居跡)、中期末葉～後期初頭の住居跡には見られなかった地床炉も4棟(第8A・18・19・23号竪穴住居跡)と増加する。なお、炉の設置位置は、主軸上の中心からいずれかに偏るという特徴がある。付帯施設が付随する住居も配石が伴う1棟のみとなる(第7号竪穴住居跡)。なお、本類に含まれる第23号竪穴住居跡は、後期前葉の特色がより強くなる住居跡であり、後期前葉期になるとこの住居のみが構築されているという景観が推察される。

次に土坑の時期変遷について見ていく。本遺跡において土坑が構築されていた時期というのは、縄文時代中期前葉～中葉、中期末葉～後期初頭、後期初頭～前葉、晩期前葉～中葉と、長期にわたることが明らかとなった。それぞれの時期について概観すると、縄文時代中期前葉～中葉期と晩期前葉～中葉期には一群を為して土坑を構築しており、縄文時代中期末葉～後期前葉にかけての時期は集落内に散在して構築されるという特徴がある(図96)。まず、中期前葉～中葉期の土坑は、調査区の西側に一群を為す4基である(第30・31・41・43号土坑)。いずれも断面フラスコ状の土坑であり、底面径は150cmを越える規模である。詳細な時期は、第41号土坑のみ中期中葉(円筒上層d・e式期)で、他は中期前葉(円筒上層a式期)である。この一群のすぐ東側からは同時期と考えられる第3号土器埋設遺構も検出されており、調査区西側一帯を中期前葉～中葉にかけて土地利用したことが明らかとなった。次に縄文時代中期末葉～後期初頭の土坑は4基(第29・42・44・45号土坑)、後期初頭～前葉の土坑は7基(第24・33・35・36・46・47・48号土坑)である。前述した通り、いずれの土坑も散在するような配置で構築されており、中期末葉～後期初頭期の土坑は、集落の西側中心に構築されている印象を受ける。土坑の断面形状は逆台形や箱形でフラスコ状は含まれない。後期初頭～前葉にかけての土坑は、竪穴住居跡と重複するものが多く、第46～48号土坑は第1号竪穴住居跡と、第35号土坑は第4号竪穴住居跡と重複し、いずれも住居が廃絶してから構築されたものと考えられる。第24号土坑は唯一後期前葉(十腰内I式期)に比定されるもので、構築場所も集落から離れた調査区東端に位置する。同時期の竪穴住居跡も1棟のみ(第23号竪穴住居跡)であるため、後期前葉期になるとこ

(中期末葉～後期初頭)



(後期初頭～前葉)

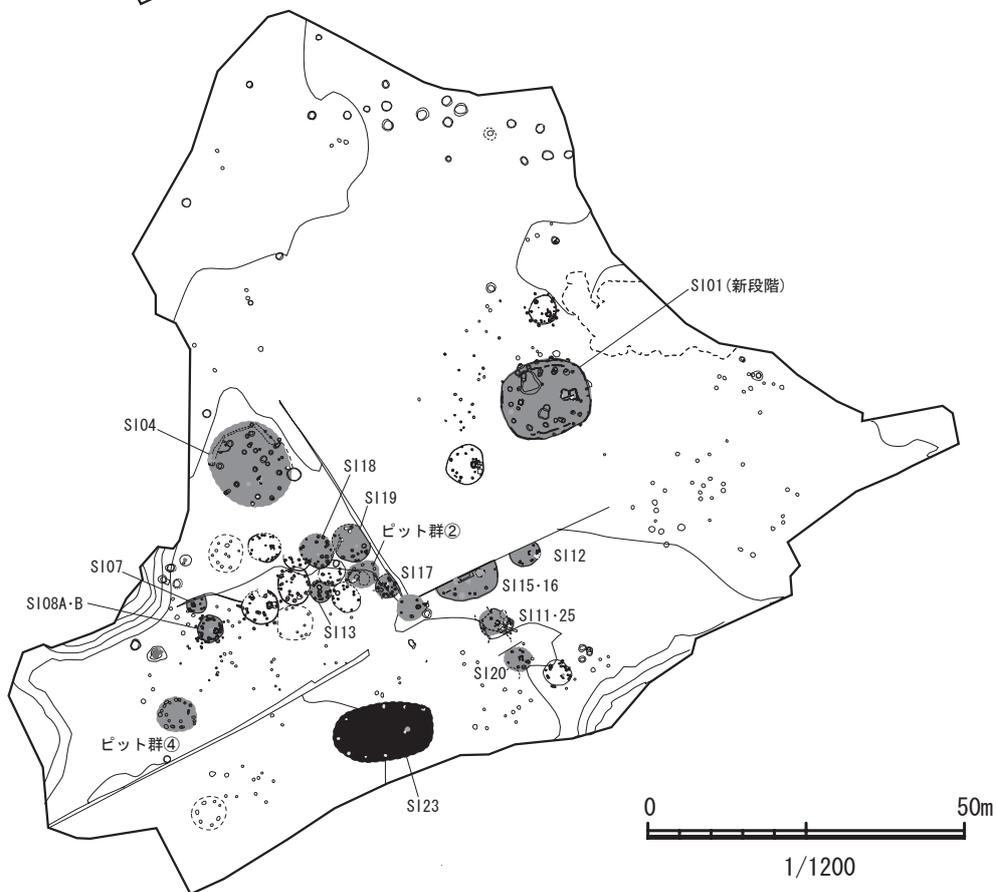


図95 遺構の時期変遷 (1) 竪穴住居跡

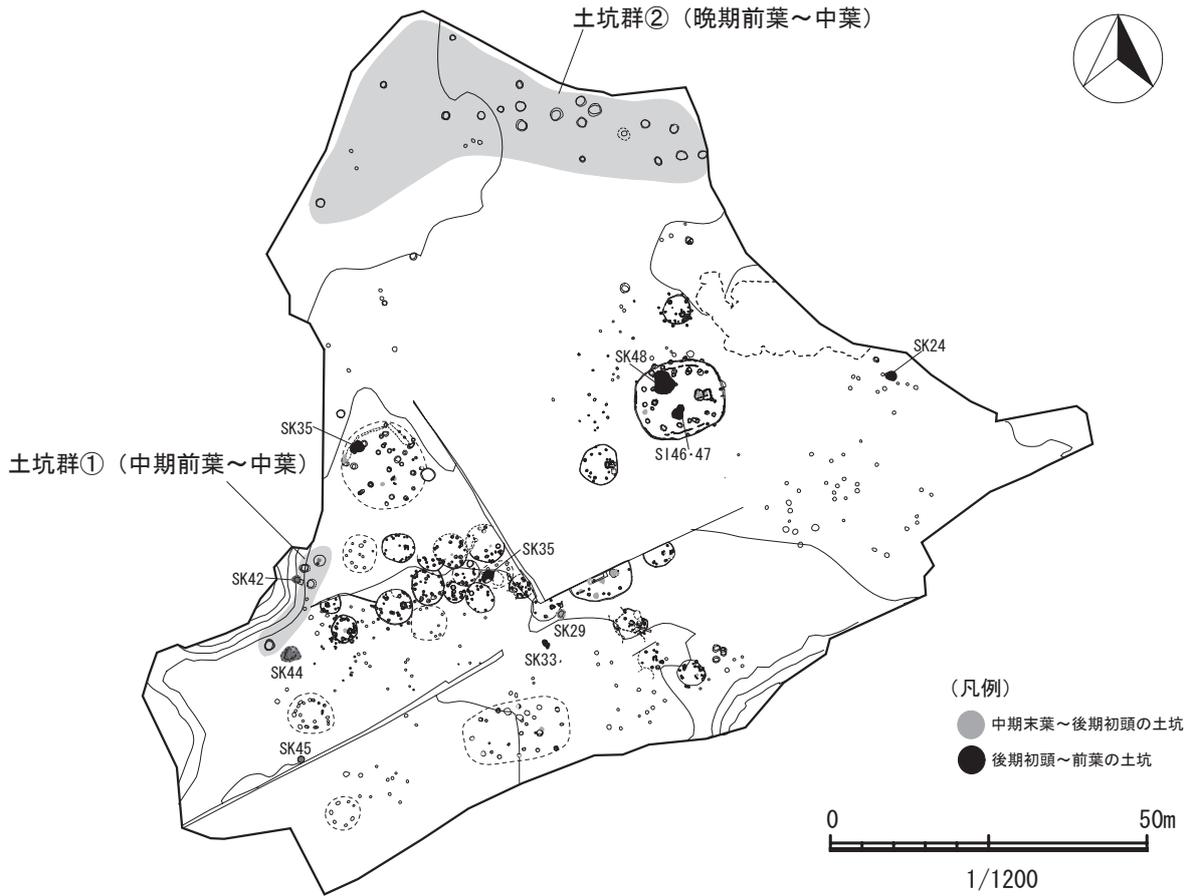


図96 遺構の時期変遷(2) 土坑

の辺りの土地利用は減少してくるということが言えるだろう。最後に、縄文時代晚期前葉～中葉期の土坑は、調査区北側に一群を為す8基(第6・7・8・11・20・21・22・27)であるが、遺物の出土がなかったものの、周辺の12基(第4・5・10・12・13・14・15・16・17・18・19・23号土坑)も同時期の土坑である可能性が高い。断面形状は、2基(第4・10号土坑)を除き全てフラスコ状の土坑であり、底面径は150cmを越えるものが7基、150cm未満のものが11基で、最小のものは75cm程度であった(第18号土坑)。時期の内訳は、晚期前葉(大洞B2式期)の土坑が8基中6基(第7・8・20・21・22・27号土坑)と圧倒的に多く、晚期中葉(大洞C式期)が2基(第7・11号土坑)と減少する。第7号土坑は前述した通り、晚期前葉～中葉にかけて継続して使用された土坑であると考えられる。

第2節 出土遺物について

調査の結果、土器・石器等が段ボール箱で102箱分出土した。以下、土器・石器・その他の遺物に分けて総括する。

1 土器

川原平(6)遺跡から出土した土器の総重量は247,211gであった。その内、時期が判別できる土器重量は227,324gであり、内訳は遺構内から173,454g、遺構外から53,870gであった。全て縄文時代の土器である。時期別の内訳については、図97の表とグラフで示した通りであるが、以下、詳細について記載していく。

まず、調査区全体における時期別比率を見てみると、最も比率が高いのが縄文時代中期末葉～後期初頭にかけてであり33.44%を占める。次いで後期初頭の29.25%であるが、後期初頭～前葉の12.40%も含め、後期初頭前後の時期別比率を合計すると、約75%ということになる。第1節「遺構の総括」でも述べた通り、本遺跡における集落の最盛期は縄文時代後期初頭であるものと考えられ、土器の出土数においても後期初頭前後が大多数を占めるということが言える。その他、中期末葉が8.94%、後期前葉が13.02%とまとまった比率となっており、一時期のみ土地利用がなされたと考えられる中期前葉～中葉は合計1.3%、同じく晩期は後期後葉～晩期初頭を含めても合計で1.5%程度であった。また、遺構内・遺構外に分けて時期別比率を概観してみると、遺構内については、全体の比率と時期別構成要素がほぼ同じであるのに対して、遺構外は、中期前葉～中葉、後期後葉を含む晩期の比率が皆無に近い状況となる。この結果は、同時期の土器がいかに遺構内のみから出土していたのかを示しているものと言える。また、後期初頭前後の土器については、遺構内・遺構外とも高い比率ではあるが、遺構外における後期前葉の比率が17.11%と、割と高い数値が得られた。後期前葉に比

時期	中期前葉	中期中葉	中期末葉	中期末葉～後期初頭	後期初頭	後期初頭～前葉	後期前葉	後期後葉～晩期初頭	晩期前葉	晩期前葉～中葉	晩期中葉	晩期中葉～後葉	合計
数量(個)	15	2	66	291	201	178	30	5	27	6	2	1	824
重量(g)	8762	52	10677	31059	93767	10885	5339	369	8425	1696	1231	1192	173455
比率(%)	1.82	0.24	8.01	35.32	24.39	21.60	3.64	0.61	3.28	0.73	0.24	0.12	100.00

時期	中期前葉	中期中葉	中期末葉	中期末葉～後期初頭	後期初頭	後期初頭～前葉	後期前葉	後期後葉～晩期初頭	晩期前葉	晩期前葉～中葉	晩期中葉	晩期中葉～後葉	合計
数量(個)	16	4	177	618	594	159	324	0	2	0	0	0	1894
重量(g)	558.42	303.48	4044.72	24683.81	14404.06	3988.10	5868.84	0	18.70	0	0	0	53870.11
比率(%)	0.84	0.21	9.35	32.63	31.36	8.39	17.11	0	0.11	0	0	0	100.00

時期	中期前葉	中期中葉	中期末葉	中期末葉～後期初頭	後期初頭	後期初頭～前葉	後期前葉	後期後葉～晩期初頭	晩期前葉	晩期前葉～中葉	晩期中葉	晩期中葉～後葉	合計
数量(個)	31	6	243	909	795	337	354	5	29	6	2	1	2718
重量(g)	9320.35	355.78	14721.70	55743.13	108171.09	14873.25	11207.36	369.22	8443.53	1696.22	1231.30	1191.70	227324.61
比率(%)	1.14	0.22	8.94	33.44	29.25	12.40	13.02	0.18	1.07	0.22	0.07	0.04	100.00

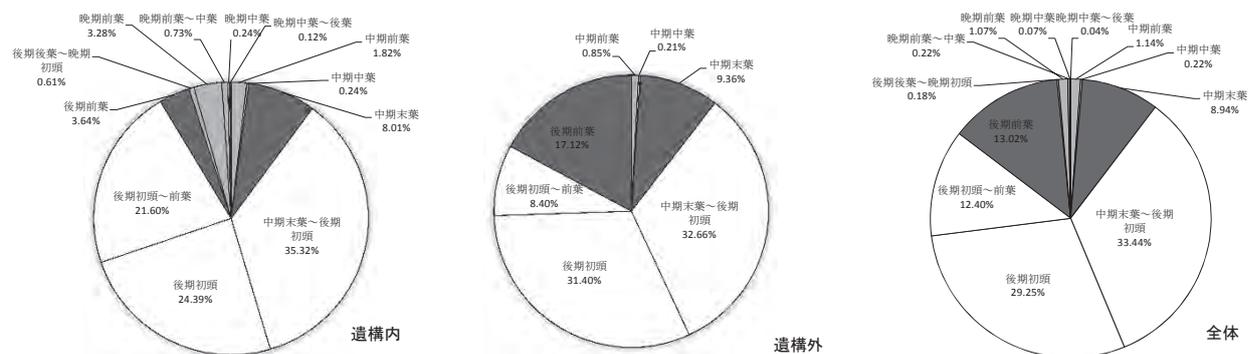


図97 出土土器時期別比率

定される遺構は竪穴住居跡1棟、土坑1基のみであったが、調査区全体が水田耕作により削平された際に、同時期の遺構が壊されたことを裏付けることにつながる結果かも知れない。

次に、今回の調査で最も出土量の多かった、縄文時代後期初頭及びその前後の時期の土器を集成し、その特性や詳細な時期等についてまとめることとする。なお、集成した土器群には地文のみの粗製土器や底部破片等については含めていない。また、狩猟文土器については別途集成し、その特性や詳細な時期などについて考察する。

後期初頭及びその前後の時期の土器（図98～105）

ここで扱う土器は、縄文時代中期末葉～後葉（33.44%）、後期初頭（29.25%）、後期初頭～前葉（12.40%）計75.09%（個数2,041個、重量178,787g）の内、掲載された一部の特徴ある土器についてである。文様の特徴により、側面圧痕、隆帯、刺突、沈線という属性により分類して集成を試みた。なお、属性が複合するものについては、主となる文様を判断した上で分類した。以下、分類ごとに詳細を述べていく。時期の考察については、入江・十腰内式土器様式についてまとめた成田氏の論考（成田1989）と、十腰内I式土器の編年をまとめた榎本氏の論考（榎本2008）を参考にする。

側面圧痕（図98）

側面圧痕のみで文様構成されたものを集成した（図98）。遺構内から17点（図98-1～17）、遺構外から12点（図98-18～29）を取り上げた。遺構内の内訳は第1・2・4・8・10・12・15・16・19・21号竪穴住居跡、第36・48号土坑、SP83・162である。遺構外は、西斜面部から4点、南斜面部から5点、その他の遺構外から3点である。全て深鉢形であり、文様帯は28を除き、口唇部から頸部にかけて施文される。口縁部形態は平口縁のものが多く、波状口縁のものも若干含まれる（18・20）。側面圧痕は横位に1条のみを頸部付近に、または2～3条を口唇部と頸部付近に横位平行に施文するなど、多種多様である。22・23は横位に多条施文するものである。また、曲線状や斜位に施文するものもある。側面圧痕が施される類は、縄文時代後期初頭の中でも古い段階に位置付けられ、成田氏の牛ヶ沢(3)式、榎本氏の第I様式に相当するものと考えられる。

隆帯（図99～102）

隆帯については文様構成の中で一番数量の多い要素であった。よって、隆帯の特徴を元にさらに細分して集成を試みた。以下、細分毎に記述していくこととする。

まず、隆帯と側面圧痕が組み合わせられたものを集成した（図99-1～14）。遺構内から4点（図99-1～4）、遺構外から11点（図99-5～15）を取り上げた。遺構内の内訳は、第1・4・8号竪穴住居跡である。遺構外は、西斜面部から7点、南斜面部から4点である。全て深鉢形であり、文様帯は口唇部から頸部にかけて施文されるものと考えられる。隆帯は、横位直線状、斜位直線状、曲線状などに貼付けされ、その隆帯に沿って側面圧痕が施されるものもあれば、側面圧痕が独立して文様を構成するものもあり、多種多様である。隆帯上に側面圧痕（1）、刺突（9・11・13）、刻目（12・15）が施されるものもある。

次に鱗状隆帯から変化したものと考えられる一群である（図99-16～25）。遺構内から2点（図99-16・17）、遺構外から8点（図99-18～25）を取り上げた。遺構内は第2号竪穴住居跡のみで、遺構外は、西斜面部から2点、南斜面部から6点である。全て深鉢形であり、口縁部形態は波状口縁になる

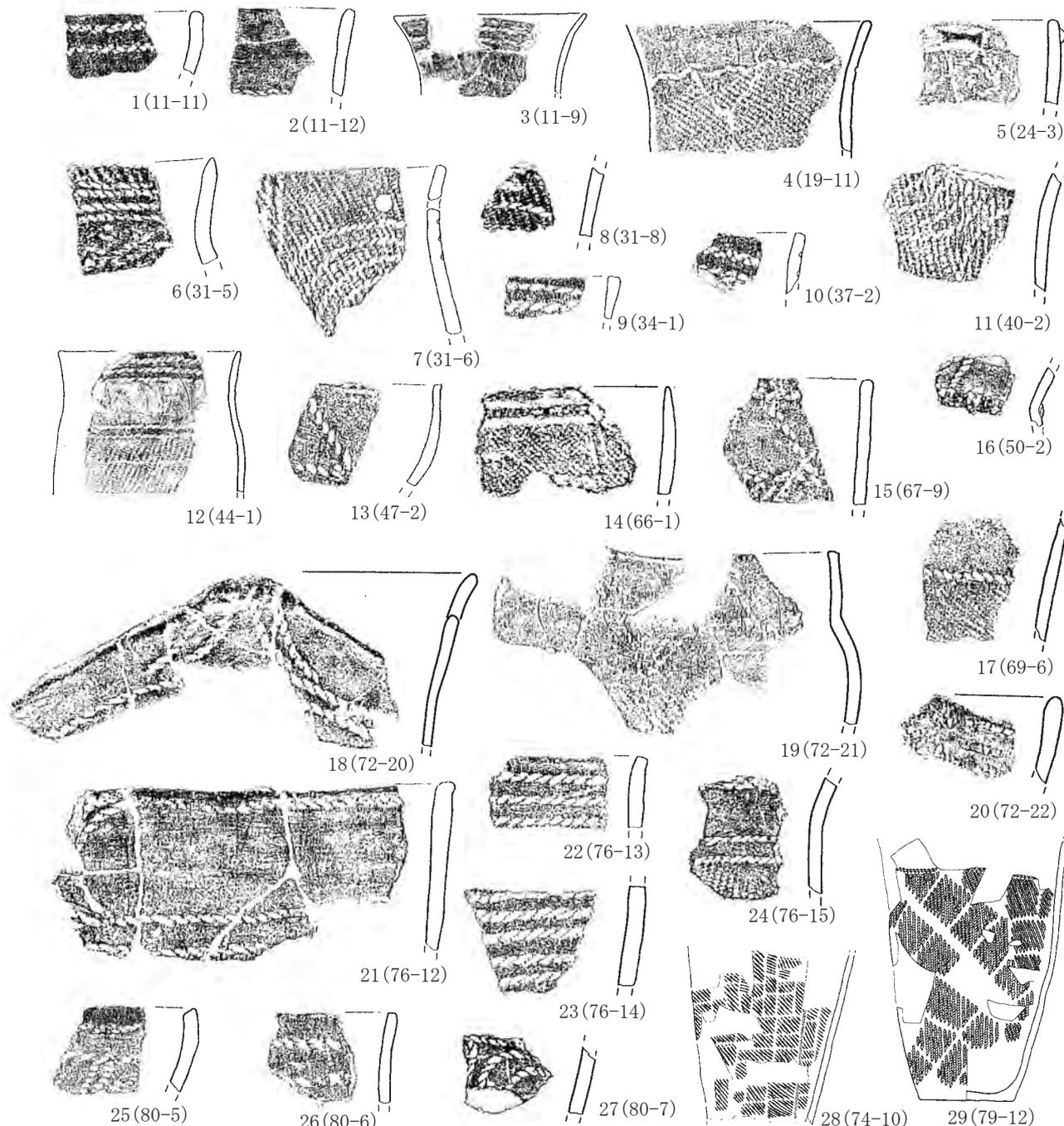


図98 土器集成（1）側面圧痕

ものが多い。文様帯は口縁部が中心であると考えられるが、口唇部から胴部中程まで施文されるものもある（16・17）。隆帯は口唇部に貼付けられるものがほとんどで、鱗状から変化したような逆C字状になるものが多く、「人」字状に広がっていくような特徴がある。逆C字状は、隆帯と側面圧痕が組み合わされた一群にも見られ（1・7）、本群から発展していった形状であるものと推察される。また、口唇部内面にも逆C字状隆帯が貼付されるものも10点中5点に確認することができた（18・21・23・24・25）。16・17には鱗状隆帯そのものが外面胴部中程に貼付けされる。隆帯上に側面圧痕や刺突といった施文は、内外面いずれの隆帯にも確認されなかったが、隆帯沿いや沈線の区画内に地文縄文や刺突文が施されるものは4点ある（16・17・21・25）。

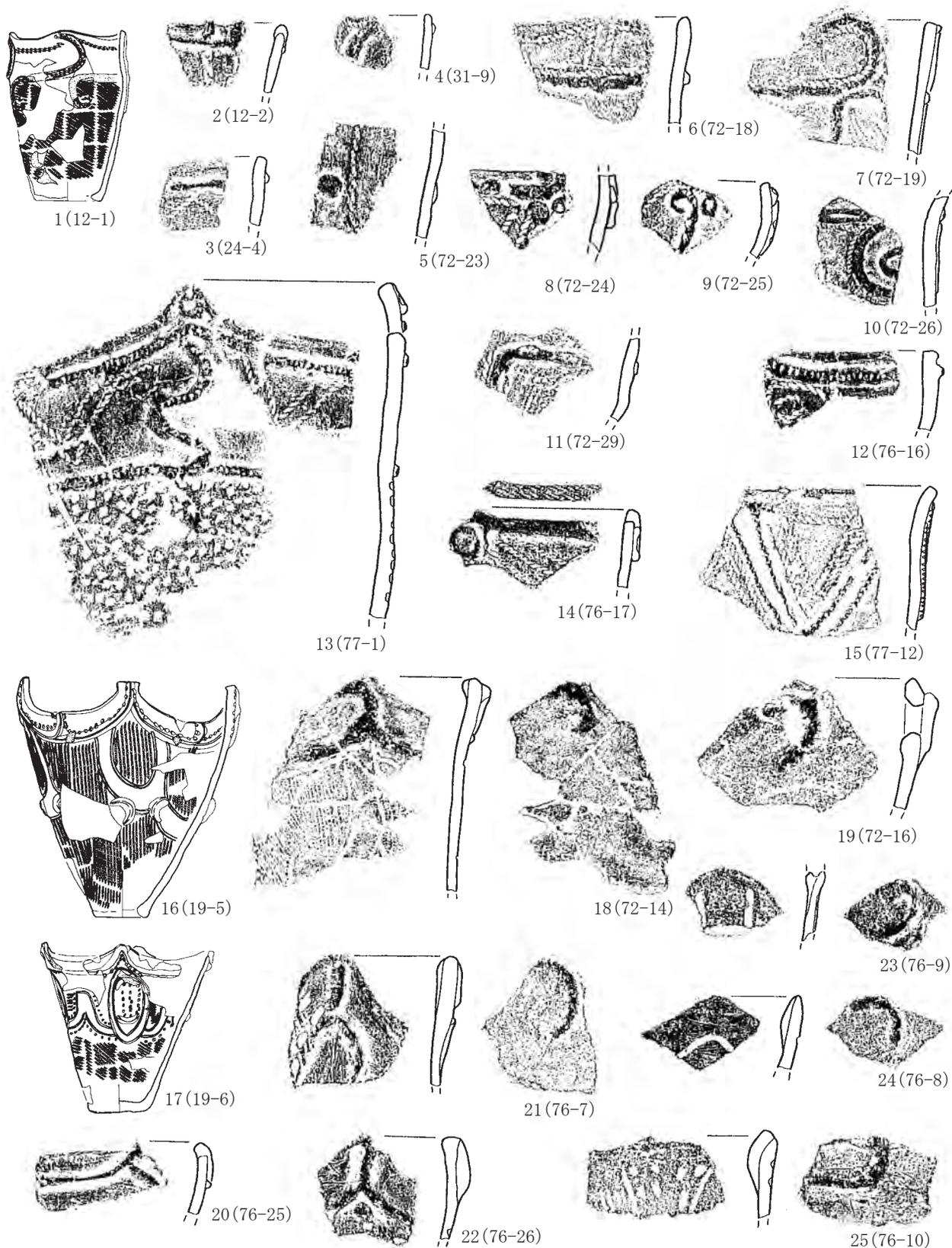


図99 土器集成(2)隆帯①

次に、ボタン状及び小円形状の隆帯が貼付けされる一群である(図100)。ボタン状隆帯としたものは、平べったくした円形の粘土塊をそのまま貼付けした後、中心部を若干凹ませたものを指し、小円



図100 土器集成 (3) 隆帯②

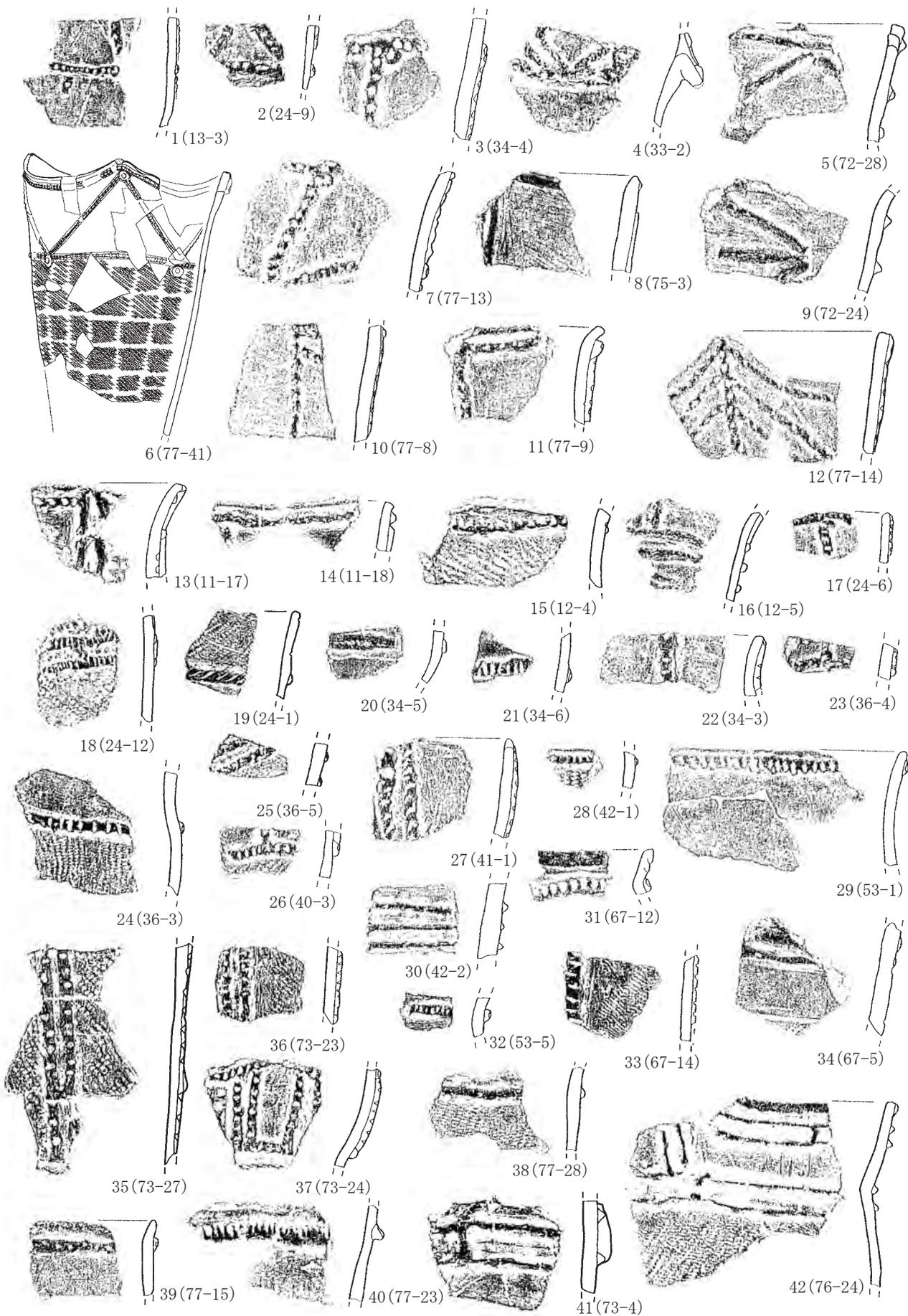


図101 土器集成(4)隆帯③

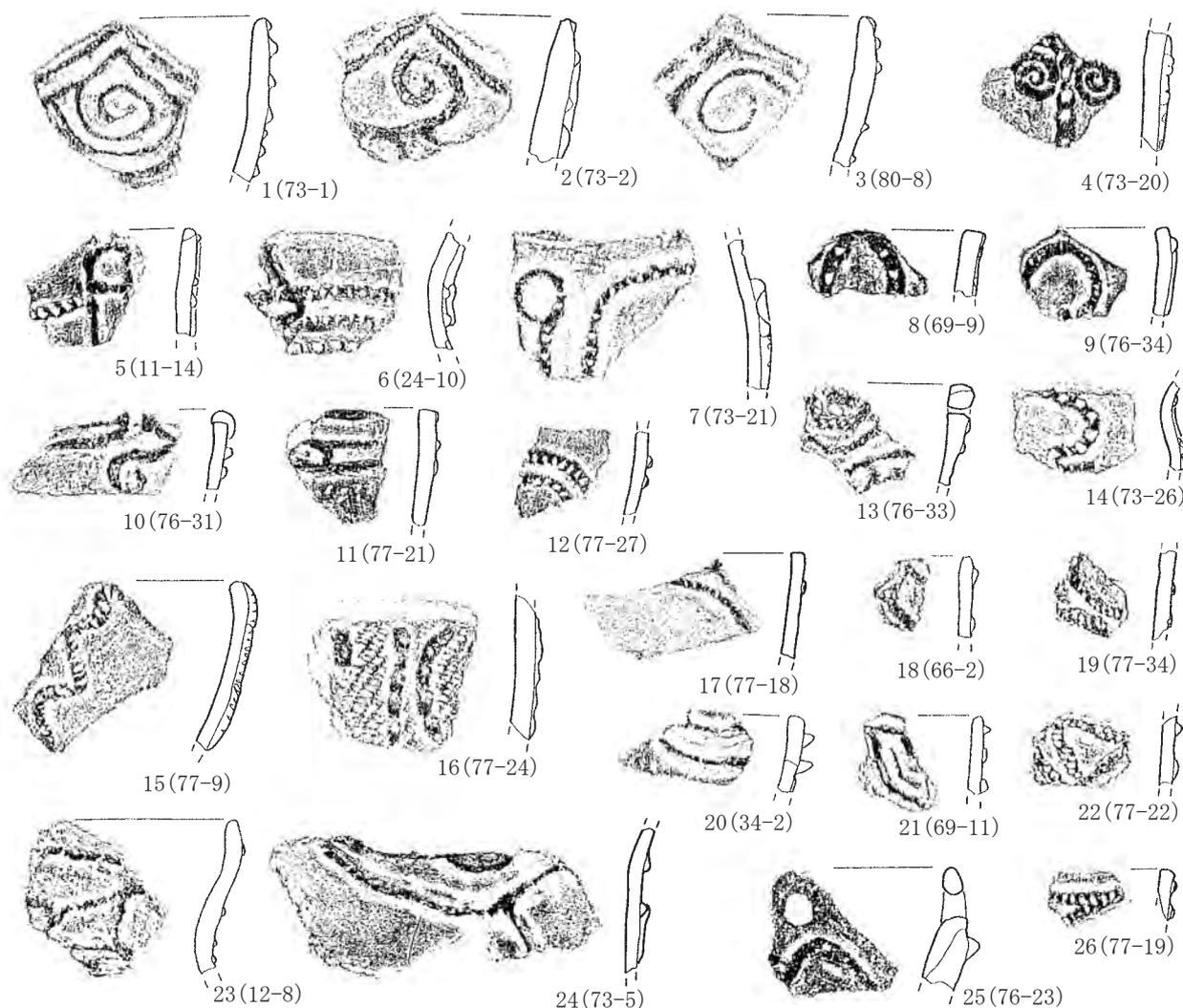


図102 土器集成（5）隆帯④

形状隆帯というのは、棒状の粘土紐を小円形状に丸めて貼付けたものを指しており、ここではまとめて集成したものの作り自体には違いがある。遺構内から17点（図100-1～17）、遺構外から24点（図100-18～41）を取り上げた。遺構内の内訳は、第1・4・8・11・13・20・23号竪穴住居跡、第46・48号土坑、SP44・210である。遺構外は西斜面部が14点、南斜面部が9点、その他の遺構外が1点である。全て深鉢形であり、文様帯は口唇部から頸部にかけてであり、ボタン状及び小円形状隆帯が貼付けされるのは文様帯の中でも、口唇部付近が多いようである。文様構成の中で言うと、隆帯により波状に展開された頂部に貼付けられたり、方形状に展開する文様の境目上部に貼付けられたり、文様帯の中では目立つ位置に貼付けされる傾向がある。小円形状隆帯の中には、隆帯上に刺突（34）や刻目（31）を施すものもある。また、上下2個1対で貼付けするものもある（26・31・35）。

次に、区画状及び直線状の隆帯を有する一群である（図101）。遺構内から26点（図101-1～4、13～34）、遺構外から16点（図101-5～12、35～42）を取り上げた。遺構内の内訳は、第1・4・10・11・16・17・18・25号竪穴住居跡、第44・47・48号土坑である。遺構外は、西斜面部7点、南斜面部9点である。全て深鉢形であると考えられ、口縁部形態は平口縁が多く、緩い波状口縁のものもある

(6・12)。文様帯は口唇部から頸部にかけてのことが多い。6は頸部に施した横位隆帯と、波状の口唇部に沿って施された隆帯の間に斜位の隆帯を貼付けることにより三角形の区画状隆帯を形成するというものである。このように、口唇部から頸部の文様帯は、斜位または縦位の隆帯を貼付けることにより、三角形、もしくは方形状の区画のような文様を形成するものが多いようである。41・42は区画の幅や隆帯自体も細くなっていく特徴をもつものである。これらには隆帯上の刺突などは見られない。

最後に曲線状の隆帯を有する一群である(図102)。遺構内から7点(図102-5・6・8・18・20・21・23)、遺構外から19点(図102-1～4・7・9～17・19・22・24～26)を取り上げた。遺構内の内訳は、第1・4・10号竪穴住居跡、第36・48号土坑、SP216である。遺構外は、西斜面部6点、南斜面部12点、その他の遺構外1点である。全て深鉢形であると考えられる。口縁部形態は波状口縁のものが多い。文様帯は明らかではないが、口縁部付近に施文されるものが多いようである。渦巻き状に施文されるもの(1～3)は、隆帯の幅自体が狭くなり、ボタン状や小円形状隆帯とは異質な印象を受ける。円形状の隆帯も多く見られるが、円の径が大きくなったり(8・9)、蕨状に縦位隆帯と組み合わせられたりするものもある(4・5・7)。隆帯上に刺突などを施すものもあるが、全体的に少ない。

隆帯が施される本類の時期であるが、側面圧痕同様、縄文時代後期初頭の中でも古い段階に位置付けられ、成田氏の牛ヶ沢(3)式、榎本氏の第I様式に相当するものと考えられる。ただ、鱗状隆帯から変化したものと考えられる一群は、縄文時代中期末葉(大木10式併行期)の要素に近いものと言えるため、隆帯の中でも最も古い段階に位置付けられるものと考えられる。また、隆帯での区画が小さくなったり、隆帯自体の幅が細くなったりするものについては、次の段階への変換期と捉えることができるものとする。

刺突(図103)

刺突で文様構成をしたり、地文として刺突文を施したりするものを集成した(図103)遺構内から21点(図103-1～3・5・9～16・18・21～23・30・32・34・36・37)、遺構外から16点(図103-4・6～8・17・19・20・24～29・31・33・35)を取り上げた。遺構内の内訳は、第1・2・3・4・8・13・15・16・19・25号竪穴住居跡、第47・48号土坑である。遺構外は、西斜面部が3点、南斜面部が12点、その他の遺構外が1点である。全て深鉢形である。口縁部形態は平口縁、波状口縁の両方が見られ、波状口縁のものは波頂部に円形の透かし孔があるものも見られる(29・31)。文様帯は口唇部から頸部が中心であるが、縦位の隆帯などで底部付近まで展開するものもある(9・19)。刺突で文様構成するものは長円形状の刺突列で文様構成するもの(1)、円形状の刺突列を縦・横位に施すものがある(4～8)。地文として体部に刺突文を施すものは、多くが頸部下から底部にかけて満遍なく施文するものであるが、円形状の沈線区画内のみに刺突文を施すものもある(29・31・33・36)。刺突文が施される類例として、青森県内だと蓬田町山田(2)遺跡、八戸市葦窪遺跡の2遺跡のみが挙げられる。そもそも、刺突文が施される土器として新潟県の三十稲葉式土器が著名であるが、本遺跡出土の土器は三十稲葉式土器とは器形にしても文様構成にしても違いが見受けられる。三十稲葉式土器そのものないし地域変容したものが客体的に分布する範囲は、隣接する福島県や山形県南部・宮城県南部に限られ、それよりも北側の東北北部では、在地系土器に刺突だけが受容される

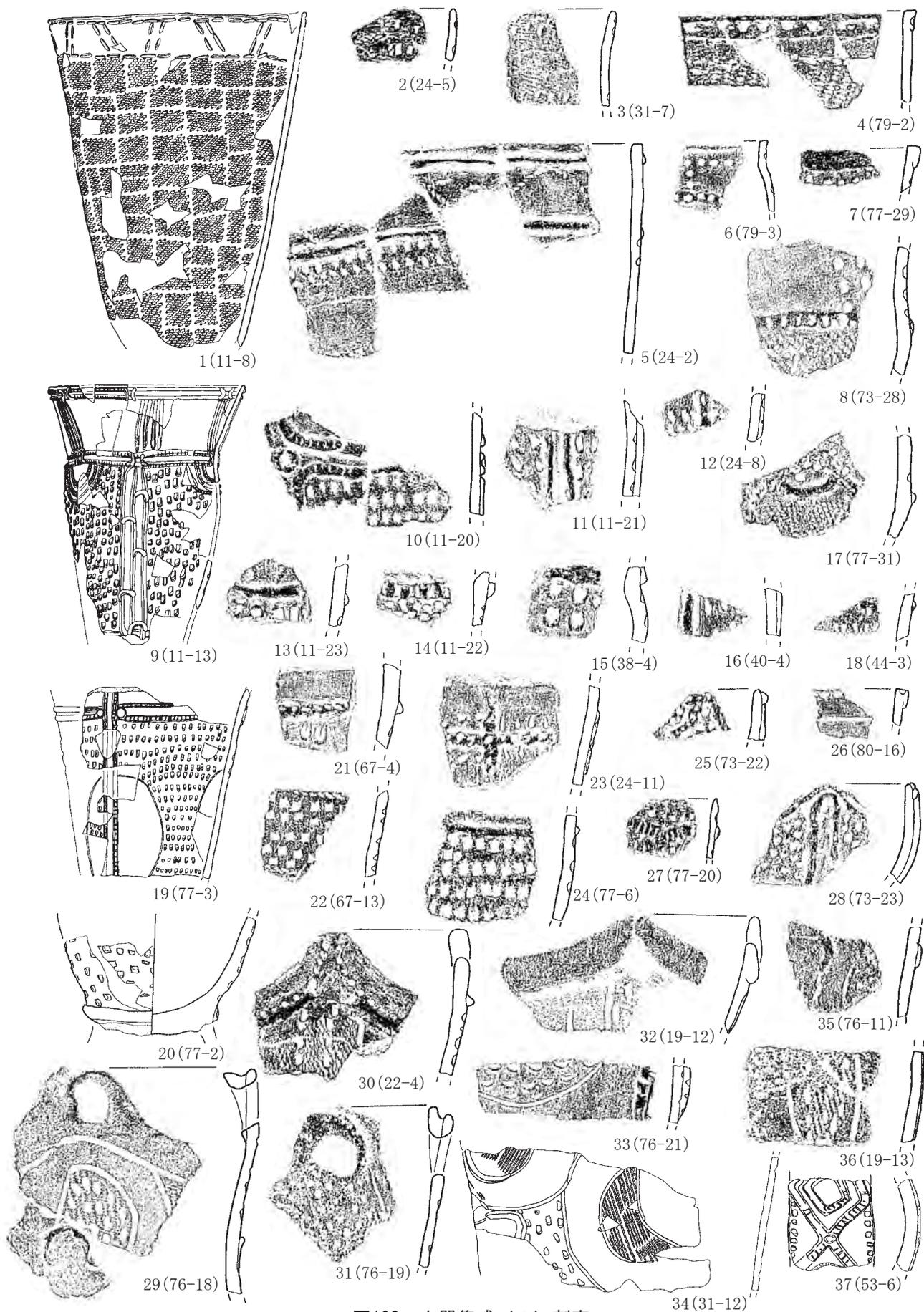


图103 土器集成 (6) 刺突

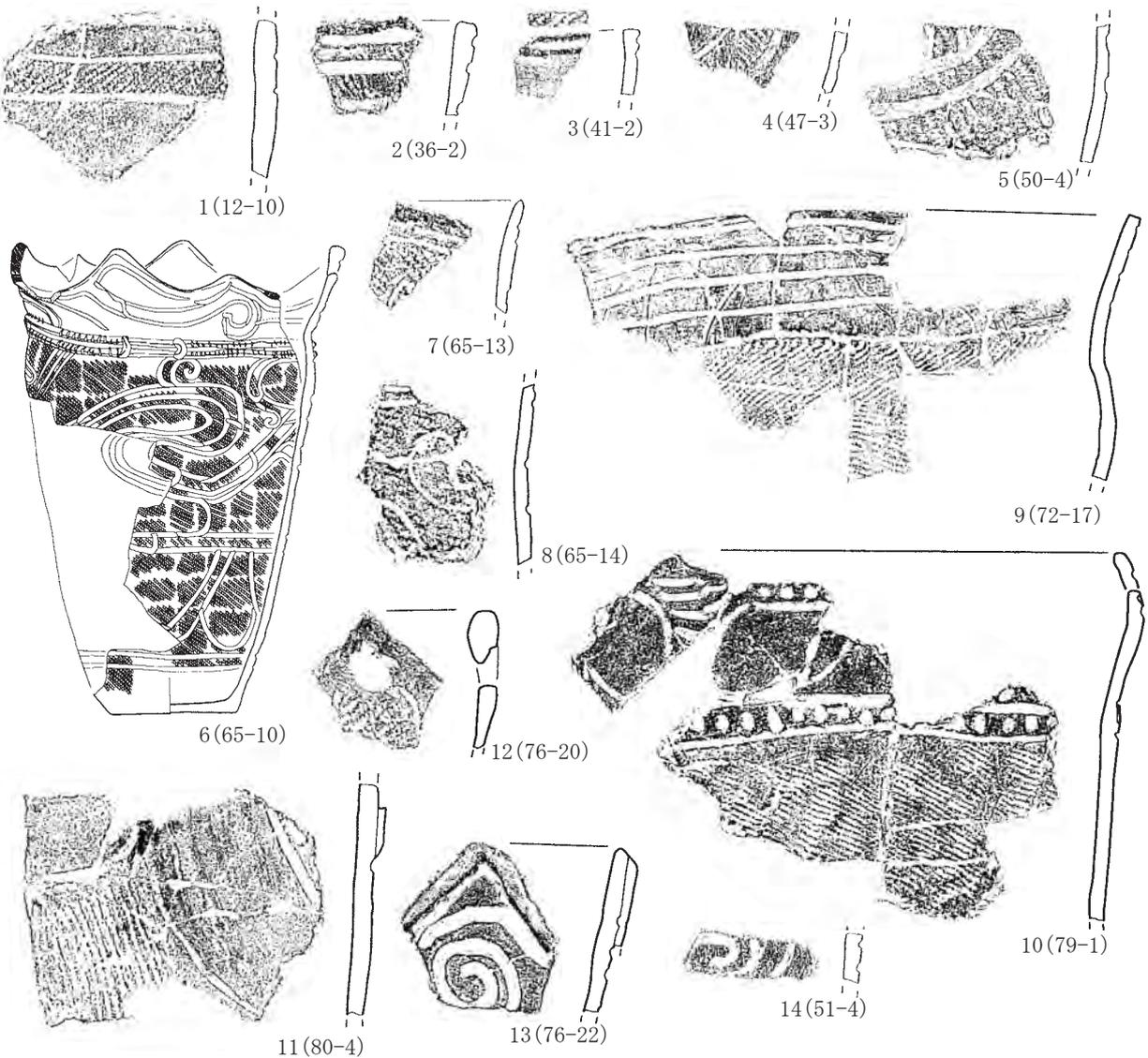
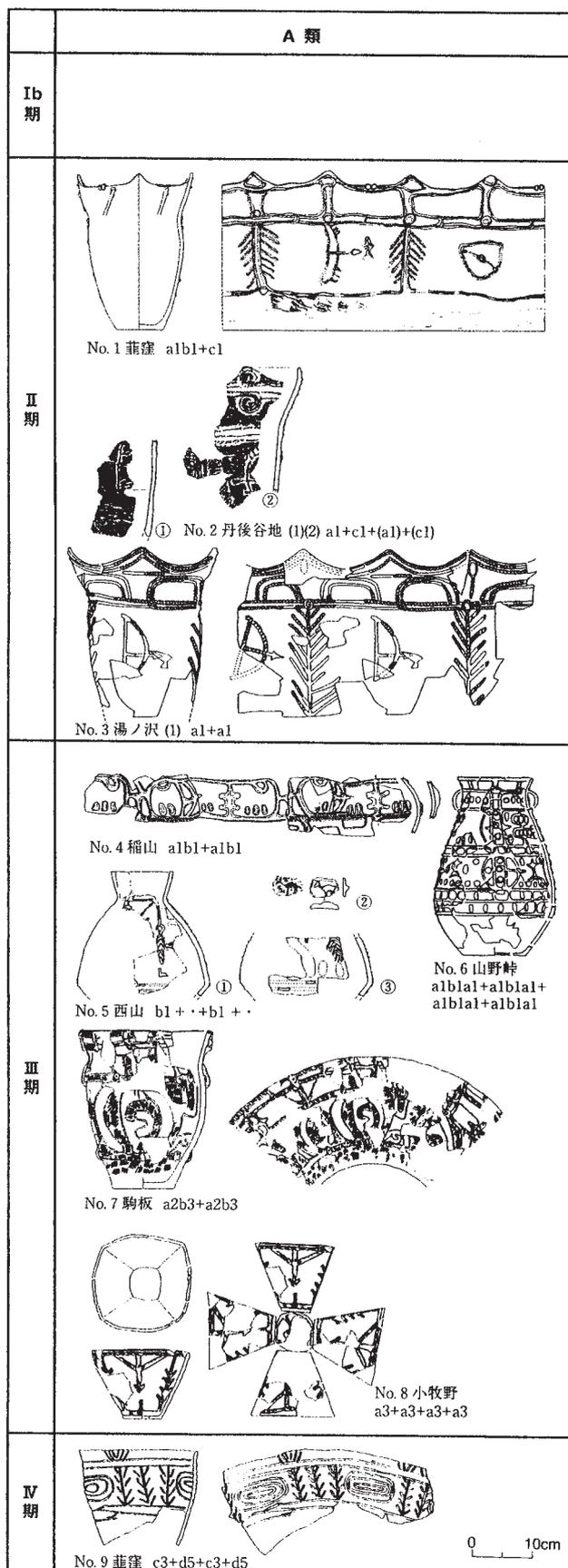


図104 土器集成（7）沈線

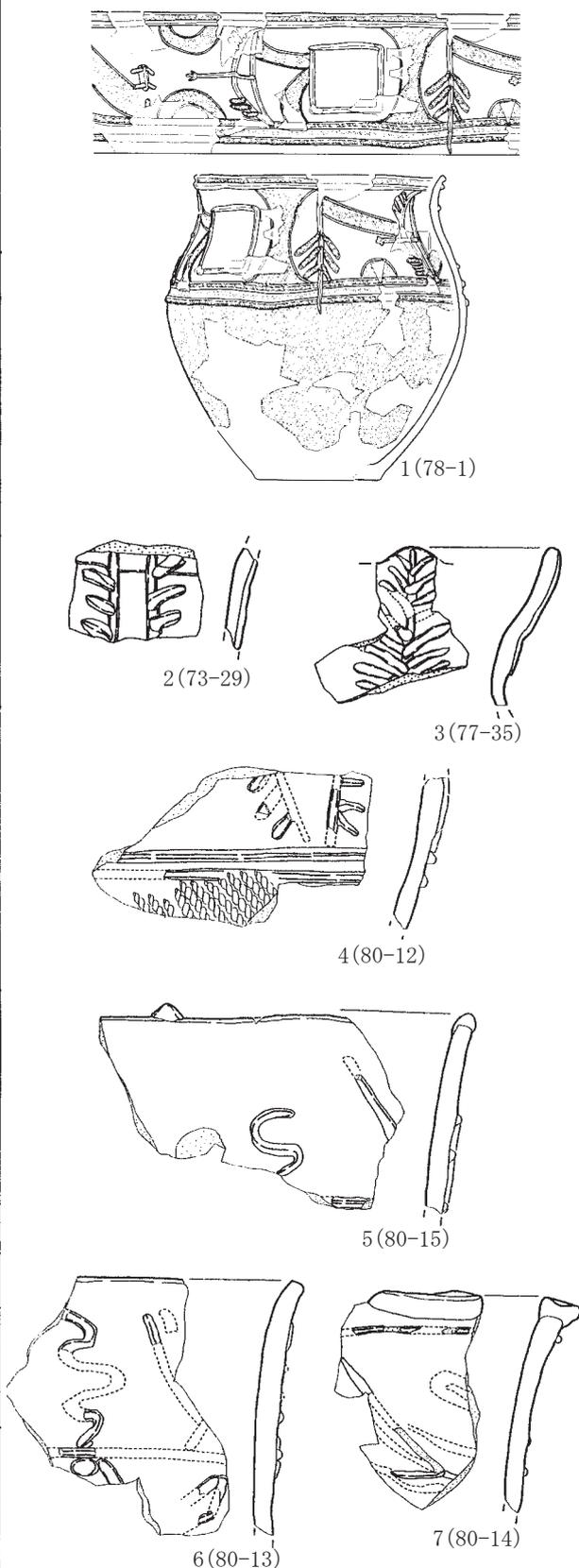
など部分的な広がり方を示すとの論考もある（阿部2012）。時期については、器形や隆帯での文様構成などを概観したときに、成田氏の牛ヶ沢(3)式、榎本氏の第Ⅰ様式との差違は認められず、同時期に属するものと考えられる。

沈線（図104）

沈線で文様構成するものを集成した（図104）。遺構内から9点（図104-1～8・14）、遺構外から5点（図104-9～13）を取り上げた。遺構内の内訳は、第1・11・17・21・23・24号竪穴住居跡、第33・35号土坑である。遺構外は、西斜面部が1点、南斜面部が3点、その他の遺構外が1点である。全て深鉢形であると考えられる。口縁部形態は平口縁と波状口縁がある。文様帯は口唇部から頸部にかけてのものが多く、6は底部近くまで施文される特徴がある。9には口唇部から頸部にかけて横位の多条沈線が施される。10は沈線で文様構成された中の横位沈線間に刺突列が確認できる。13・14は渦巻き状の沈線文である。時期についてだが、6は、青森県弥栄平(2)遺跡や岩手県馬立Ⅰ遺跡に



(川原平(6)遺跡)



※図は『総覧縄文土器』『狩猟文』(斎野 2008)から引用

※縮尺は1が1/6、他は1/3

図105 狩猟文土器

類例が見られ、成田氏の弥栄平(2)式、榎本氏の第Ⅱ様式に属するものと言える。ただ、9には頸部に横位の側面圧痕、11には鱗状隆帯から変化したような隆帯が見られることから古い段階に属することが考えられる。

狩猟文土器 (図105)

いわゆる「狩猟文土器」と呼称される弓矢・動物などを意匠化した文様が施されるものをここでは扱う。遺構外のみから7点(図105)としたが、狩猟の様子が明確となっているのは1のみで、2～4は樹木状の様子のみがわかるものであり、これを「樹木文」と呼称する場合もある(福田2001)が、ここでは狩猟文土器の一群として扱う。また、5～7については、曲線状の隆帯で何らかの文様を構成するものであるが、土器の焼き色が橙色(5YR6/8)で、硬質な焼成具合が1～4に類似しており、本群に含めて扱うこととする。出土地点は1・3が南斜面部、2が西斜面部、4～7はその他の遺構外(旧SX01)である。1は、口縁部から底部まで残存する部分を有し、破片も全体の50～60%揃うことから全体形を復元したものである。ちなみに狩猟文を構成する口縁部～胴部上半についてはほぼ90%以上の破片が残存し、復元率が高かった。なお、土器の法量および文様の詳細については、第2章第4節「遺構外出土遺物」と巻末の土器観察表に記載した。ここでは、本遺跡から出土した狩猟文土器の特徴や詳細な時期について、東北地方と渡島半島出土の狩猟文土器を集成した斎野氏の論考を元に考察していくこととする(斎野2008)。まず、狩猟文土器の文様構成としては、人体文が施文されるかどうかで大別されるようであり、本遺跡出土のものは、1を観察する限り人体文は確認されない。この人体文が施文されないものを斎野氏はA類としており、本遺跡出土のものも同類に属するということになる。よって、今回は、A類に属する資料と比較しながら文様構成、詳細な時期について検討していくこととする(図105)。

最初に、復元率の高かった1について見ていく。文様構成において類似点が多く認められたのは葦窪遺跡出土No.1の資料である。類似点の1点目として、樹木状の枝の向きが下向きであるという点があげられる。枝状の数については葦窪遺跡の資料が圧倒的に多いが、樹木状の文様が確認できる湯ノ沢(1)遺跡No.3や葦窪遺跡No.9(沈線文)の資料は枝が上向きになっており違いが認められる。ちなみに本遺跡出土資料の枝状の貼付け上にはR L原体を回転施文するという特徴が見られ、このような施文は葦窪遺跡資料には見られないが、湯ノ沢(1)遺跡の資料には樹木状全体に斜縄文が施文されているようである(小山1997)。また、丹後谷地(1)・(2)遺跡No.2の隆帯上には縄文が施文されていると報告されている。類似点の2点目として、葦窪遺跡No.1は、弓矢状の弓先が動物状の貼付けに向けているということと、弓の上下それぞれに3本の装飾的貼付けが認められる点である。全体形は明らかではないが、丹後谷地(1)・(2)遺跡No.2の資料にも弓上部に類似した貼付けが認められる。ただ、本遺跡出土資料には、3本の貼付け上に縄文の回転施文が施される点、弓先が三つ叉に割れる点、弓矢が向かって左側を向く点が違いとしてあげられる。ちなみに、本遺跡出土資料にはもう一本の弓矢状貼付けがあり(図78参照)、その弓先も三つ叉に割れていて、向かって左側に位置する樹木状の貼付けに向けている。また、動物状の貼付けももう一個体あり、これは、円形状の貼付けの直上に位置しており、罨で捕獲しようとする見方もできる。次に時期についてであるが、類似点が多い葦窪遺跡の資料をはじめ、丹後谷地(1)・(2)遺跡、湯ノ沢(1)遺跡の資料は斎野氏の言うⅡ期(後期初頭期：牛ヶ沢(3)式・観音堂式並行期)とされている。ただ、1が大きく違う点として、地文縄文が施文される

点である。A類の中で地文縄文が施文されるのはⅢ期（後期初頭：沖附(2)式・弥栄平(2)式並行期）に属する駒板遺跡No.7のみということになるが、文様構成に類似点がほとんど見受けられず、この時期寄りでないことは明らかであると言える。ポイントとなってくるのは文様帯に施文されるのが、アルファベット状の沈線文であり、沈線区画内にはR L原体の充填縄文が施される点である。この要素は縄文時代中期末葉（大木10式併行期）の特徴であり、A類では空欄となっているI b期（中期末葉の後半期：大木10式新段階並行期）寄りであると言えるだろう。そうすると、青森県内では最も古い狩猟文土器ということになり、編年の空白を埋める発見になったと言えるだろう。

次に、破片資料の図105-2～7について見ていく。まず、2～4については、樹木状の貼付けが確認でき、前述した観点に合わせて見ていくと、枝状が下向きなのが4で、上向きなのが2・3である。ただ、いずれの樹木状にも縄文施文は見られない。5～7については文様要素が不明な一群である。S字状に蛇行する貼付けと直線状の貼付けにより何かを表現しているものと考えられるが破片資料ということもあって詳細はわからない。それぞれの資料の時期であるが、4を除く資料については無文地に貼付けされていることからⅡ期に属するものと考えられる。4については、充填縄文らしき施文が見られることから、I b期寄りである可能性が考えられる。

2 石器

石器は、遺構内から1,432点、遺構外から882点、計2,314点が出土し、総重量が553,969.4gであった。剥片石器、礫石器とも各器種の内訳は図106の表とグラフに示す。以下、詳細について記載する。

剥片石器は合計1,885点で、石器全体の81.46%であり大多数を占めている。器種別に見ていくと、石鏃85点（4.51%）、石槍1点（0.05%）、石匙6点（0.32%）、石錐66点（3.50%）といった、いわゆる定型石器の類は、剥片石器全体の比率で見るとそれぞれ5%に満たないほどの少量である

剥片石器

器種	石鏃	石槍	石匙	石錐	削器	搔器	石核	二次加工	微細剥離	敲き石	小計	剥片	合計
数量(個)	85	1	6	66	141	45	103	464	954	20	1885	3242	5127
重量(g)	95.7	2.4	62.1	377.6	2,215.7	597.0	14,845.5	8,797.7	12051.5	2,076.6	41,121.8	41388	82,509.7
比率(%)	4.51	0.05	0.32	3.50	7.48	2.39	5.46	24.62	50.61	1.06	100.00		
剥片比率(%)	1.66	0.02	0.12	1.29	2.75	0.88	2.01	9.05	18.61	0.39	36.38	63.23	136.38
全体の比率(%)	3.67	0.04	0.26	2.85	6.09	1.94	4.45	20.05	41.23	0.86	81.46		

礫石器

器種	磨製石斧	石錘	磨り石	敲き石	磨り+敲き	台石	石皿	合計
数量(個)	11	20	143	44	124	81	6	429
重量(g)	992.8	4211.7	62798.4	20355.6	8822.1	334308.3	30725.4	512847.6
比率(%)	2.56	4.66	33.33	10.26	28.90	18.88	1.40	100.00
全体の比率(%)	0.48	0.86	6.18	1.90	5.36	3.50	0.26	18.54

石器全体の合計	
数量(個)	2314
重量(g)	553,969.4
比率(%)	100

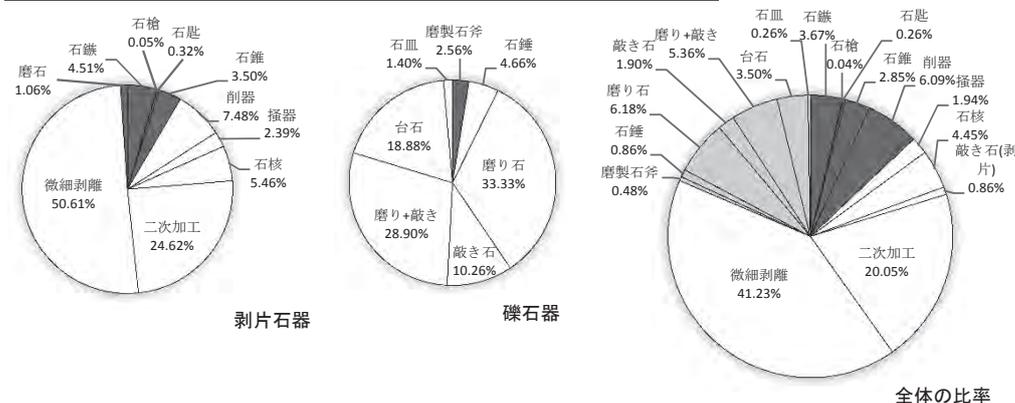


図106 出土石器器種組成

ことがわかる。一方、不定型石器の類である削器141点(7.48%)、搔器45点(2.39%)、石核103点(5.46%)はそれほどの比率ではないが、二次加工剥片464点(24.62%)、微細剥離痕を有する剥片954点(50.61%)は、この2器種で剥片石器全体の約75%を占めることがわかる。また、加工・使用痕の無いただの剥片が3,242点出土しており、剥片石器を含めた比率で約63%がただの剥片ということになる。このような偏った比率は、近隣の大川添(1)・(2)遺跡、川原平(4)遺跡A区でも報告されている。本遺跡も含め、近隣の遺跡では剥片石器の素材となる珪質頁岩が容易に採取できたことが推察されるが、本遺跡から約1km西に位置する大川添(3)遺跡では、遺跡北側に「大童子層」という珪質頁岩層があると報告されている。また、剥片素材の敲き石が20点出土している。これは剥片石器全体の比率からすると約1%であるが、近隣の遺跡では1~2点程度の報告はあるものの、本遺跡からはまとまった数量が出土したと言える。石材は99%が珪質頁岩で、その他の石材としては、石鏃に使用された石英と黒曜石がある。黒曜石は未加工剥片の中にも2点含まれるが、原産地は不明である。剥片石器で特筆されるものとしては、第1号竪穴住居跡の床面・炉から出土した石鏃15点が挙げられる(図8・13)。出土地点としては、竪穴住居跡の西側半分に集中するという傾向があり、凹基無茎鏃が8点、平基有茎鏃が4点、凸基有茎鏃が2点で、炉3火床面から出土した1点は基部欠損により詳細は不明である。また、7点にアスファルトが付着しているのを確認した。アスファルトは基部付近の両面に付着しているものが多い。1棟の竪穴住居跡からこれだけの石鏃が出土する例は珍しいが、無茎鏃も有茎属も同時期に存在し、使用されていたということが推察される発見であったと言える。

礫石器は429点で、石器全体の割合で見ると18.68%と少ないことがわかる。本類の中では磨り石が143点(33.33%)、磨り+敲きの複合痕をもつ礫が124点(28.90%)と多数ではあるが、石器全体の比率で見ると、磨り石は6.18%、磨り+敲きの複合痕をもつ礫は5.36%と10%にも満たないことがわかる。その他、礫石器の比率で見ると磨製石斧が11点で2.56%、石錘が20点で4.66%、石皿が6点で1.4%と10%以下で、敲き石が44点で10.26%、台石が81点で18.88%と10%以上とまとまった数量が出土している。今回、図示した礫石器の石材は、凝灰岩が55点と一番多く、次いで緑色凝灰岩31点、安山岩26点である。これらの石材は磨製石斧を除く器種に用いられている。一方、磨製石斧には多様な石材が用いられており、緑色細粒岩凝灰岩、輝緑岩、粘板岩、青色片岩、緑色岩などが使用されている。いずれの石材も近隣で採取するのは困難な石材であると考えられるが、特に緑色岩は西目屋村内では産出しないようであり、北海道から搬入された可能性がある。

3 その他の遺物

土製品が9点、石製品が7点、銭貨が2点、陶磁器が約2.7kg出土した。銭貨・陶磁器はいずれも遺構外から出土したものであり、第2章第4節で述べた通りである。ここでは、本遺跡の主要時期である縄文時代中期中葉から後期前葉にかけて遺構内・外から出土した土製品・石製品について詳細をまとめることとする。

土製品は、土偶5点、円盤状土製品4点である。

土偶5点の内訳は、第1号竪穴住居跡堆積土出土のものが2点(図16-6・7)、遺構外からは西斜面部から2点(図89-1・2)、その他の遺構外から1点(図89-7)である。いずれも板状土偶で、

頭部は顔面が突き出して膨らむタイプである。頭部には貫通孔が確認できる。体部を中心とした文様構成は刺突列が主体であり、部分的に2列になっている箇所もある。近隣の川原平(4)遺跡A区や鱈ヶ沢町の餅ノ沢遺跡で類似した土偶が出土しており、青森県内から出土した縄文時代中期末葉～後期前葉にいたる土偶の変遷をまとめた成田氏の論考(成田2008)によると、本遺跡出土の土偶は、縄文時代中期末葉に含まれるものが多いものと考えられる。ただ、第1号竪穴住居跡は、前述したように最終的には縄文時代後期初頭以降に廃絶したものと考えられ、堆積土から出土した土偶については、後期初頭以降の可能性が高いものと考えられる。図16-6は、刺突の単位自体も小さく、列も限定的になってくるという特徴をもち、野場(5)遺跡や長者森遺跡から出土した土偶の特徴と類似する。これらの土偶を成田氏は縄文時代後期初頭～前葉期に含めており、第1号竪穴住居跡出土の土偶も同時期である可能性がある。

円盤状土製品は第1号竪穴住居跡から出土した4点である(図16-9～12)。1点のみ全体形がわからないものがあるが、いずれも土器片を径4cm前後の円形状に加工したものと考えられる。図16-11は、網代痕が確認できるもので、土器の底部片を加工したことが推察される。

石製品は、線刻石製品1点、有孔石製品1点、石剣1点、三角形岩版2点、円盤状石製品2点である。線刻石製品と円盤状石製品1点が遺構内から出土しており、他は遺構外からの出土である。なお、遺構外から出土した石製品については第2章第4節で詳細を記述したため、ここでは、遺構内出土の2点について述べるものとする。

線刻石製品(図16-8)は、第1号竪穴住居跡北東側床面直上から出土した(図8)。形状は鳥形のような不整形であるが、両面を研磨し、下部は敲打により丸みを帯びさせようとする加工がされている。線刻は両面に施され、長短の直線状線刻により何らかの文様を描こうとしたものなのかも知れないが、詳細は不明である。上部(頭部)には斜位に施された線刻上に穿孔しようとした痕跡があるが貫通はしていない。石材は凝灰岩である。

円盤状石製品(図67-23)は、第48号土坑堆積土から出土した。直径4.5cm程度の円形状で、その他の遺構外から出土したものと同様同大きさである。周縁を打ち欠いて整形しており、石材は安山岩である。

引用・参考文献

- | | | |
|----------|------|--|
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『牛ヶ沢(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集 |
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『葦窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集 |
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『弥栄平(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第81集 |
| 青森県教育委員会 | 1986 | 『弥栄平遺跡(1)』青森県埋蔵文化財調査報告書第98集 |
| 青森県教育委員会 | 1993 | 『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集 |
| 青森県教育委員会 | 1995 | 『上蛇沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第177集 |
| 青森県教育委員会 | 2000 | 『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集 |
| 青森県教育委員会 | 2006 | 『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集 |
| 青森県教育委員会 | 2010 | 『山田(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第469集 |

- 青森県教育委員会 2011 『大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第500集
- 青森県教育委員会 2012 『大川添(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第515集
- 青森県教育委員会 2013 『川原平(4)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第527集
- 青森県教育委員会 2013 『水上(2)遺跡Ⅱ・水上(3)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第528集
- 青森県教育委員会 2014 『大川添(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第544集
- 青森県教育委員会 2014 『大川添(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第542集
- 青森県教育委員会 2014 『芦沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第540集
- 秋田県教育委員会 2005 『日廻岱B遺跡』秋田県文化財調査報告書第394集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 『馬立Ⅰ・太田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第123集
- 阿部昭典 2012 「縄文後期初頭における集落構造と住居形態の変容と地域間関係」『三十稲葉式土器文化の世界』新潟県・津南町教育委員会、信濃川火焰街道連携協議会
- 阿部勝則 2008 「埋甕(東北地方)」『総覧縄文土器』(株)アム・プロポーション
- 榎本剛治 2008 「十腰内Ⅰ式土器」『総覧縄文土器』(株)アム・プロポーション
- 岡本洋 2014 「青森県の埋設土器・埋設遺構集成」『北日本縄文時代埋設土器・埋設遺構集成』北日本縄文文化研究会
- 小山彦逸 1997 「縄文時代の狩猟土器について」『青森県考古学 第10号』青森県考古学会
- 小笠原雅行 2008 「円筒上層式土器」『総覧縄文土器』(株)アム・プロポーション
- 小保内裕之 2008 「陸奥大木系土器(榎林式・最花式・大木10式併行土器)」『総覧縄文土器』(株)アム・プロポーション
- 海道澄子 2004 「秋田県における大形住居の集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第18号』秋田県埋蔵文化財センター
- 斎野裕彦 2008 「狩猟文」『総覧縄文土器』(株)アム・プロポーション
- 菅谷通保 1987 「縄文時代特殊住居論批判―「大形住居」研究の展開のために―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第6号』東京大学文学部考古学研究室
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年研究』雄山閣出版
- 鈴木克彦・中村哲也 2011 「青森県の大形住居集成」『北日本縄文時代大型住居集成』北日本縄文文化研究会
- 高橋誠・谷口康浩 2006 「環状炉穴群と大形住居」『國學院大學考古学資料館紀要 第18号』秋田県埋蔵文化財センター
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4』小学館
- 成田滋彦 1998 「屋内埋設土器考―青森県の事例を中心に―」『史跡三内丸山遺跡 年報2』青森県教育委員会
- 成田滋彦 2008 「北上川流域における十腰内土偶―青森の嫁は船に乗って北上川をくだったのか―」『第5回 土偶研究会 宮城県発表会資料』土偶研究会
- 福田友之 2001 「狩猟土器・動物形内臓土器」『月刊考古学ジャーナルNo.468』(株)ニューサイエンス社
- 藤沼邦彦・関根達人 2008 「亀ヶ岡式土器(亀ヶ岡式系土器群)」『総覧縄文土器』(株)アム・プロポーション
- 本間 宏 1987 「縄文時代後期初頭群の研究(1)」『よねしろ考古』第3号

土器観察表(1)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
11-1	SI01Pit06、SI01①エリア	床面、覆土	口縁～底部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(アルファベット状)、鱗状隆帯、LR(縦回転)、底面網代痕	P-3、口径19.8、器高28.1、底径7.6
11-2	SI01Pit12	覆土	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、単軸絡条体第1類L(斜位)	
11-3	SI01Pit12	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、RL?(斜回転?)	
11-4	SI01Pit23	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉?	沈線(アルファベット状?)、RL(斜回転)	
11-5	SI01Bライン	1層	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、地文不明	
11-6	SI01④エリア	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉?	沈線(アルファベット状)、RL(縦回転?)	
11-7	SI01⑥エリア	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	鱗状隆帯	
11-8	SI01炉1	床面、覆土	口縁～底部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、刺突文(横位・斜位)、RL(縦回転)	P-3~9・11~15、口径28.0、器高(37.6)
11-9	SI01⑤エリア	覆土	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、R側面圧痕(横位2条)、網目状捺糸文(単軸絡条体第1類L?)	図11-10と同一、口径(17.7)、器高(7.6)
11-10	SI01⑤エリア	覆土	胴～底部	深鉢形	後期初頭	網目状捺糸文(単軸絡条体第1類L?)、調整底	図11-9と同一、器高(11.4)、底径(6.0)
11-11	SI01⑤エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	RL側面圧痕(横位2条)	
11-12	SI01炉2	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	LR側面圧痕(横位)	
11-13	SI01④エリア	覆土	口縁～底部	深鉢形	後期初頭	平口縁、横位隆帯(口唇・頸部2条一単位C字・逆C字状隆帯で区画)、隆帯上刻目、縦位隆帯(口唇～頸部4条一単位U字状隆帯(頸部下)隆帯状刻目、縦位隆帯(体部、3条一単位逆U字状連続)刺突文(体部)	口径(21.5)、器高(28.8)
11-14	SI01Aライン	1層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(円形状、縦位2条、横位1条)、横位隆帯上刺突	
11-15	SI01⑥エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(逆S字状)、隆帯上刻目	
11-16	SI01⑤エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(クラック状)、隆帯上刺突	
11-17	SI01Bライン	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位逆U字連鎖状、横位)隆帯上円形刺突	
11-18	SI01⑤エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	隆帯(方形区画状)、隆帯上刻目?	
11-19	SI01⑤エリア	覆土	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(曲線状)、隆帯上刻目	
11-20	SI01①エリア	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(円形状、曲線状)、隆帯上刻目、刺突文	
11-21	SI01Cライン	1層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位2条)、刺突文	
11-22	SI01⑤エリア	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刺突?、刺突文	
11-23	SI01④エリア	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、刺突文	
12-1	SI01⑤エリア	覆土	口縁～底部	深鉢形(小)	後期初頭	LR側面圧痕(波状)、隆帯(逆S字状)、隆帯上LR側面圧痕、LR(縦回転)	口径12.0、器高17.9、底径(6.8)
12-2	SI01④エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	隆帯(口唇突起状、横位)、RL?側面圧痕	
12-3	SI01④エリア	覆土	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(方形区画状)、隆帯上刻目	
12-4	SI01③エリア	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刺突、LR?(縦回転?)	
12-5	SI01①エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	隆帯(2条一単位縦位・横位)	
12-6	SI01⑤エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	隆帯(円形状)	
12-7	SI01②エリア	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	隆沈線文(2条一単位縦位・横位曲線状)	
12-8	SI01④エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	波状口縁、隆帯(入組状)	
12-9	SI01③エリア	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁?、隆帯(斜位)、沈線(円形状?)、RL(横回転)充填	
12-10	SI01⑥エリア	覆土	口縁部付近	深鉢形	後期初頭～前葉	沈線(平行)、LR(横回転)充填	
12-11	SI01④エリアAライン	覆土3層	口縁～底部	壺形	後期前葉	沈線(横位、S字状入組文)、無文、高台状	口径9.6、器高23.5、底径7.9
12-12	SI01④エリア	覆土	胴部	壺形	後期前葉	沈線(横位、S字状入組文?)、無文	
12-13	SI01③エリア	覆土	胴部	壺形	後期前葉	沈線(入組文?)、無文	
12-14	SI01③エリア	覆土	胴部	壺形?	後期前葉	沈線(曲線状)、無文	
12-15	SI01⑤エリア	覆土	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(入組文?)、無文	
12-16	SI01③エリア	覆土	口縁部?	深鉢形	後期初頭～前葉	網目状捺糸文(単軸絡条体第1類L?)	
12-17	SI01⑥エリア	床面直上	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭～後期前葉	平口縁、網目状捺糸文(単軸絡条体第1類R)	P-43
12-18	SI01Bライン	1層	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭?	平口縁、単軸絡条体第1類L(横位)	
12-19	SK47(SI01SK2)、SI01⑤エリア	覆土	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭?	平口縁、単軸絡条体第1類R?(斜位)	P-30、口径(28.0)、器高(9.0)
12-20	SI01②エリア	床面直上	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	RL(斜・縦回転)	P-8、口径(23.0)、器高(15.1)
12-21	SI01④エリア	覆土	底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	LR?(縦回転?)、網代痕	底径(11.3)
12-22	SI01②・③エリア	床面直上、覆土	底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	網代痕	P-8、底径13.0
12-23	SI01Cライン	床面直上	底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	地文不明、網代痕→調整	P-65、底径8.6
12-24	SI01⑤エリア	覆土	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	RL?(縦回転?)	底径14.2
12-25	SI01④エリア	覆土	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	RL(縦回転)	底径(7.1)

土器観察表(2)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
12-26	SI01④エリア	覆土	底部	深鉢形(小)	中期末葉～後期初頭	網代痕	底径(6.1)
12-27	SI01⑤エリア	覆土	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	地文不明、網代痕→調整	底径7.5
12-28	SI01⑤エリア	覆土	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	LR(縦回転)、網代痕	底径(10.4)
12-29	SI01③エリア	覆土	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	L(縦回転)、網代痕	底径(8.0)
12-30	SI01①エリア	覆土	底部	壺形?	後期初頭～前葉?	高台状	底径6.0
12-31	SI01⑤エリア	覆土	胴～底部	壺形?	後期初頭～前葉	高台状	底径(9.0)
12-32	SI01①エリア	覆土	胴～底部	ミニチュア	中期末葉～後期初頭?	地文不明、内面赤色塗膜付着	底径(3.9)
19-1	SI02	床面直上	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(S・J字状)、RL(斜・縦回転)充填	P-2、口径22.5、器高(23.3)
19-2	SI02炉	焼土層	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉	平口縁、小突起、沈線(J字状)、単軸絡条体第1類L(斜位)充填	口径(24.0)、器高(25.0)
19-3	SI02Pit02	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、単軸絡条体第1類L(縦位)	器高(12.5)
19-4	SI02	床面直上	胴部～底部	深鉢形	中期末葉	沈線(J字状)、単軸絡条体第1類L(縦位)、内面黒色付着物	P-14、器高(15.1)
19-5	SI02	床面直上	口縁～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	波状口縁、隆帯(波状)、隆帯上部円形刺突、沈線(J字状)、鱗状隆帯、単軸絡条体第1類L(縦位)	P-2、口径22.4、器高25.3、底径(5.1)
19-6	SI02	床面直上	口縁～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	波状口縁、隆帯(波状)、隆帯下部円形刺突、沈線(O字・鉤状)、沈線内円形刺突文、鱗状隆帯、LR?(縦回転)	P-13、口径18.0、器高18.3、底径6.2
19-7	SI02	床面直上	口縁～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、単軸絡条体第1類R(縦位)	P-2、口径19.6、器高29.0、底径(8.4)
19-8	SI02	床面直上	口縁～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、RL(縦・斜回転)	P-1、口径(19.3)、器高33.2、底径9.6
19-9	SI02埋設1	床面	口縁～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、LR(縦回転)	口径20.4、器高(24.5)
19-10	SI02、SI02埋設2	床面	口縁～底部	壺形	中期末葉～後期初頭	平口縁、沈線(横位)、RLR(縦・斜回転)	P-19、口径8.4、器高23.4、底径6.0
19-11	SI02Pit04	覆土	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、L側面圧痕(波状)、LR(縦回転)	
19-12	SI02Pit04	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁(折返し)、沈線(縦位2条)、刺突文・LR(縦回転)充填	
19-13	SI02	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭?	沈線(円形状?)、刺突文・LR(縦回転?)充填	P-5
19-14	SI02	床面直上	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	RL(縦・斜回転)、内面赤色塗膜付着	P-8
22-1	SI03	覆土	胴～底部	深鉢形	中期末葉	沈線(J字状)、単軸絡条体第1類L(縦位)	P-2、器高(27.5)、底径(8.5)
22-2	SI03炉	前提部 礫掘方	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(曲線状)、単軸絡条体第1類L(縦位)充填	
22-3	SI03	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(曲線状)、単軸絡条体第1類R(斜位)	
22-4	SI03	床面	口縁部	深鉢形	後期初頭?	波状口縁、隆帯(波状)、隆帯上部円形刺突、刺突列(縦位2条)、沈線(縦位)、単軸絡条体第1類R?(縦位)充填?	P-9
22-5	SI03埋設	床面	口縁～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、単軸絡条体第1類L(縦位)、網代痕	口径(23.8)、器高41.8、底径9.6
22-6	SI03	覆土	胴部～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	地文不明、網代痕	P-3
24-1	SI04Pit23	覆土	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、ボタン(円環)状貼付、沈線(方形状、渦巻状)、LR(縦回転)	
24-2	SI04Pit23	覆土	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、L側面圧痕(鋸歯状)、刺突文	
24-3	SI04Pit24	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、L側面圧痕(鋸歯状、渦巻状)	
24-4	SI04Pit13	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、L側面圧痕(三角形状)	
24-5	SI04Pit05	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、L側面圧痕、刺突文	
24-6	SI04Pit05	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁?、隆帯(波状、縦位)、縦位隆帯上刻目	
24-7	SI04Pit01	1層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(波状)	
24-8	SI04Pit05	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位)、刺突文	
24-9	SI04Pit05	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(三角形状)、隆帯状刺突(円形状)	
24-10	SI04Pit08	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(小円形状、斜位、横位2条)、横位隆帯上刻目	
24-11	SI04Pit18	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(十字状)、隆帯上刺突、刺突文	
24-12	SI04Pit03	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(巴状)、隆帯上・隆帯上部刻目	
24-13	SI04Pit01	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(入組状)、ボタン状貼付?	
24-14	SI04Pit01	1層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位2条)、ボタン状貼付?	
24-15	SI04Pit23	覆土	胴部	深鉢形?	後期前葉	沈線(横位2条)、無文	
26-1	SI05埋設	床面	胴～底部	深鉢形	中期末葉	沈線(波頭状)、単軸絡条体第1類L(斜位)、調整底	器高(17.8)、底径7.6
26-2	SI05Pit14	覆土	口縁部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(横位、アルファベット状?)、単軸絡条体第1類L(縦・斜位)	
26-3	SI05Pit07	覆土	口縁部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(方形状?)、単軸絡条体第1類L(縦・斜位)	
28-1	SI06	覆土	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭?	波状口縁(折返し)	P-20

土器観察表(3)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
28-2	SI06	床面直上	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、単軸絡条体第1類L(縦位)	P-27
28-3	SI06	覆土	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、LR(縦回転)	P-1,25
28-4	SI06 SI06埋設2	床面直上	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、単軸絡条体第1類R(縦・斜位)	P-27、口径(19.1)、器高(22.2)
28-5	SI06埋設1	床面	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	沈線(曲線)、0段多条RL(縦・斜回転)、底面網代痕	器高(10.5)、底径7.7
29-1	SI07配石	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、沈線(曲線状)、隆帯(横位)、隆帯上刻目、RL(縦回転)?	
31-1	SI08	床面直上	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(J字状)、単軸絡条体第1類L(縦・斜位)	P-1、器高(23.1)
31-2	SI08Pit07	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状?)、RL(縦回転)?	
31-3	SI08	覆土	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、連続刺突列(斜位)、R?(縦回転)	図31-4と同一、P-5、口径(22.0)、器高(10.6)
31-4	SI08	覆土	胴～底部	深鉢形	後期初頭	R?(縦回転)、調整底	図31-3と同一、P-5、器高(23.4)、底径10.6
31-5	SI08Pit32	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、口唇刻目?、L側面圧痕(多条)?	
31-6	SI08	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、R?側面圧痕(多条円形状)、LR(縦回転)、補修孔有	
31-7	SI08Pit11	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	連続刺突列(横位)、LR(横・斜回転)?	
31-8	SI08Pit06	覆土	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	RL側面圧痕(曲線状)、LR(縦回転)	
31-9	SI08Pit01	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁?、L側面圧痕、隆帯(曲線状)	
31-10	SI08Pit06	覆土	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(巴状?)、地文不明	
31-11	SI08	覆土	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁部、突起状隆帯(逆C字状)、隆帯上刺突、ボタン状貼付、L?(縦回転)	P-5、口径(17.0)、器高(18.5)
31-12	SI08	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	沈線(円形区画状)、鱗状隆帯、刺突文・単軸絡条体第1類L(斜位)充填	P-6,7,10
32-1	SI09Pit13	覆土	底部	深鉢形	後期初頭～前葉?	無文?、網代痕	
32-2	SI09Pit02	覆土	口縁部	壺形(ミニ)	後期初頭～前葉	平口縁、無文	
34-1	SI10Pit06	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、RL側面圧痕?	
34-2	SI10Pit06	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(2条一単位曲線状)	
34-3	SI10	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(縦位)、隆帯状刻目	
34-4	SI10Pit06	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(方形区画状)、隆帯上刺突(円形状)	
34-5	SI10	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上L側面圧痕	
34-6	SI10配石炉	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭?	隆帯(横位)、隆帯上刻目	
34-7	SI10配石	炉3層 炉9層	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	L(縦回転)、網代痕	P-2、器高(21.4)、底径13.6
34-8	SI10	覆土	底部	壺形?	後期初頭～前葉	無文、網代痕	器高(2.3)、底径4.4
34-9	SI10	覆土	底部	ミニチュア	中期末葉～後期初頭?	RL?(縦回転)?	
36-1	SI11	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(縦・斜位)、隆帯上刺突、ボタン状貼付	
36-2	SI11Pit11	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭～前葉	平口縁?、沈線(横位2条)、LR(縦回転)?	
36-3	SI11	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刻目、RL(斜回転)	
36-4	SI11	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位・横位)、隆帯上刻目	
36-5	SI11	2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(斜位)、隆帯上刺突	
36-6	SI11	不明	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、単軸絡条体第1類L(斜位)	
36-7	SI11	覆土	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(曲線状)、無文?、内面黒色塗膜付着	
37-1	SI12Pit26	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉?	沈線(曲線状)、RL(縦回転)	
37-2	SI12Pit07	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、RL側面圧痕(横位2条)	
37-3	SI12Pit39	覆土	底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	網代痕	
38-1	SI13Pit12	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、RL?(縦回転)	
38-2	SI13Pit12	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(方形区画状)、隆帯上刺突、ボタン(円環)状貼付	
38-3	SI13Pit11	確認面	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、隆帯上刺突、ボタン(円環)状貼付、沈線(円弧状)、RL(縦・斜回転)	P-4
38-4	SI13Pit12	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、刺突文	
38-5	SI13	覆土	底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	網代痕	
40-1	SI16	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、RL(縦回転)充填	
40-2	SI16	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	RL側面圧痕(曲線状)、RL(縦回転)	
40-3	SI15	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位・横位)、隆帯上刻目、RL(縦回転)	
40-4	SI15	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位)、刺突文	
40-5	SI16	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位、端部曲線状)、隆帯上刻目	
40-6	SI15	覆土	底部	ミニチュア	後期初頭～前葉	高台状	底径3.9
41-1	SI17Pit06	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(縦位2条)、隆帯上刻目	
41-2	SI17Pit13	覆土	口縁部	深鉢形	後期～前葉?	平口縁、口唇部LR回転施文?、沈線(横位2条)	
42-1	SI18Pit08	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刻目、RL(斜回転)	

土器観察表(4)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
42-2	SI18Pit08	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位3条)	
42-3	SI18Pit04	覆土	胴部	深鉢形	後期前葉?	沈線(曲線状?)、無文	
42-4	SI18Pit10	覆土	底部	深鉢形	中期末葉~後期前葉	RL(縦回転)?、網代痕→調整?	
44-1	SI19Pit02	覆土	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、RL側面圧痕(横位3条・2条)、RL(斜回転)	
44-2	SI19Pit03	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(方形区画状)、隆帯上刻目、ボタン状貼付?	
44-3	SI19Pit01	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刺突?、刺突文	
44-4	SI19Pit07	覆土	底部	深鉢形	後期初頭~前葉	網目状撚糸文(単軸絡条体第1類L)、網代痕	
44-5	SI19Pit01	覆土	胴~底部	深鉢形	中期末葉~後期初頭	地文不明、底面網代痕	器高(9.5)、底径(10.0)
45-1	SI20	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(多条曲線状)、ボタン状貼付	
47-1	SI21	1層	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、RL(斜回転)	
47-2	SI21Pit04・05	1層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、L側面圧痕(横位、斜位)	
47-3	SI21Pit06	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	沈線(曲線状)、単軸絡条体第1類R?(斜位?)充填	
47-4	SI21埋設1	床面	胴~底部	深鉢形	中期末葉~後期初頭	単軸絡条体第1類R(縦位)、網代痕	器高(16.1)、底径9.8
47-5	SI21埋設2	床面	胴~底部	深鉢形	中期末葉~後期初頭	RL(縦・斜回転)、調整底	器高(14.7)、底径(10.0)
48-1	SI22Pit01	覆土	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(縦位)、RL(縦回転)	
48-2	SI22	貼床	胴~底部	深鉢形	中期末葉~後期初頭	RL(縦回転)、調整底	器高(10.1)、底径(8.6)
50-1	SI23(SPI18)	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、口唇RL側面圧痕?、ボタン状貼付?	
50-2	SI23(SP83)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	LR側面圧痕(縦位)、隆帯(横位)、隆帯上刻目	
50-3	SI23(SPI134)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	R側面圧痕(横位)、隆帯(横位)、隆帯上刺突、RL(縦回転)?	
50-4	SI23(SPI134)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭?	隆帯(縦位)	
50-5	SI23(SPI135)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭~前葉	沈線(曲線状)、LR(縦回転)?	
50-6	SI23(SPI157)	覆土	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(曲線状)、無文	
50-7	SI23(SPI136)	覆土	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(曲線状)、無文	
50-8	SI23(SPI134)	覆土	胴部	壺形?	後期前葉	沈線(曲線状)、無文、外面赤色塗膜付着	
50-9	SI23(SPI130)	覆土	底部	深鉢形	中期末葉~後期初頭?	網代痕	底径(6.6)
51-1	SI24Pit08・24	覆土	口縁~胴部	深鉢形	中期末葉?	平口縁、沈線(横位)、RL(斜回転)	
51-2	SI24Pit02	覆土	口縁部	深鉢形	中期末葉?	沈線(曲線状)、RL(斜回転)	
51-3	SI24	床面	胴部	深鉢形	中期末葉?	沈線(曲線状)、RL(縦・斜回転)充填?	P-1
51-4	SI24	貼床	胴部	深鉢形	後期初頭~前葉	沈線(渦巻状)、無文?	
51-5	SI24Pit14	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭~前葉	沈線(横位)、無文、外面赤色塗膜付着	
51-6	SI24埋設	床面	胴~底部	深鉢形	中期末葉~後期初頭	0段RL(横回転)、調整底	器高(23.0)、底径10.8
51-7	SI24	覆土	底部	深鉢形	後期初頭~前葉	地文不明、調整底	P-2、底径(6.8)
53-1	SI25	覆土、2層	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、隆帯上刻目	
53-2	SI25Pit01	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁(折返し)、隆帯(方形状?)、隆帯上刻目	
53-3	SI25Pit01	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刻目、RL(斜回転)	
53-4	SI25	2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位2条)、隆帯上刺突(円形)	
53-5	SI25Pit01	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刻目	
53-6	SI25Pit01	覆土	把手部?	壺形?	後期初頭?	隆帯(方形状)、隆帯上刻目、側縁部連続刺突(円形)	
53-7	SI25埋設	床面	胴~底部	深鉢形	後期初頭~前葉	網目状撚糸文(単軸絡条体第1類L)、網代痕	器高(10.5)、底径10.3
53-8	SI25Pit01	覆土	底部?	ミニチュア	後期初頭~前葉?	無文?、調整底	底径2.8
62-1	SK06	5層上	胴~底部	深鉢形	晩期前葉~中葉	LR(横・斜回転)、調整底、内面・外面に炭化物付着	P-1、器高(14.6)、底径7.2
62-2	SK07	5層上	口縁~底部	台付鉢形	晩期前葉(大洞B2)	平口縁?、小突起(2個?)、入組三叉文、LR(横・斜回転)、内面に炭化物付着	P-7、口径17.3、器高18.3、底径6.6
62-3	SK07	5層上	口縁~底部	台付鉢形	晩期前葉(大洞B2)	平口縁(小波状)、入組三叉文、LR(横・斜回転)、内面・外面に炭化物付着	P-9、口径19.8、器高21.8、底径9.2
62-4	SK07	5層上	口縁~底部	深鉢形	晩期前葉(大洞B2)	波状口縁、突起(2個?)、玉抱三叉文、刺突列、LR(横・斜回転)、上げ底状、内面・外面に炭化物付着	P-10、口径19.6、器高20.0、底径6.9
62-5	SK07	5層上	口縁~底部	深鉢形	晩期前葉(大洞B~BC)	平口縁、LR(横・斜回転)、上げ底状、内面・外面に炭化物付着	P-5、口径15.8、器高17.1、底径7.2
62-6	SK07	5層上	口縁~底部	深鉢形	晩期前葉(大洞B~BC)	平口縁、LR(横回転)、上げ底状、外面に炭化物付着	P-6、口径15.2、器高17.7、底径6.8
62-7	SK07	5層上	口縁~底部	台付深鉢形	晩期中葉(大洞C)	平口縁(小波状)、小突起(8個?)貼付、羊歯状文(刻目状)、LR(横回転)、内面・外面に炭化物付着	P-3、口径27.4、器高24.2、底径10.6
62-8	SK07	5層上	口縁~底部	皿形	晩期中葉(大洞C)	平口縁(小波状)、沈線(横位2条、斜位2~3条1単位)	P-4、口径18.0、器高6.4、底径8.0
62-9	SK07	5層上	口縁~底部	深鉢形	晩期中葉~後葉	平口縁、LR(横回転)、調整底、内面・外面に調整痕	P-1・2、口径19.8、器高23.4、底径7.2

土器観察表(5)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
62-10	SK07	5層上	口縁～底部	深鉢形	晩期前葉?	平口縁、無文、調整底、内面・外面に炭化物付着	P-8、口径18.7、器高23.0、底径7.4
62-12	SK08	4層上 底面直上	口縁～底部	台付鉢形(小)	晩期前葉(大洞B2)	波状口縁、突起(1個)、入組三叉文、刺突列、LR(横回転)、内面・外面に炭化物付着	P-1～4、口径10.9、器高13.3、底径5.2
62-13	SK08	4層上	口縁～底部	台付鉢形	晩期前葉(大洞B2)	波状口縁、突起(1個)、入組(渦巻状)三叉文、LR(横回転)、内面・外面に炭化物付着	P-5、口径15.6、器高16.4、底径6.0
62-14	SK08	4層上	口縁～底部	台付鉢形	晩期前葉(大洞B2)	波状口縁、突起(1個)、入組三叉文?、RL(縦回転)?、内面・外面に炭化物付着	P-6、口径16.7、器高19.4、底径6.6
63-1	SK08	4層上	口縁～底部	台付鉢形	晩期前葉(大洞B2)	平口縁、突起(1個)、LR(横回転)、内面・外面に炭化物付着	P-7、口径16.0、器高17.9、底径6.0
63-2	SK08	4層上	口縁～底部	台付鉢形	晩期前葉(大洞B2)	波状口縁、補修孔、RL(縦回転)?、内面・外面に炭化物付着	P-8、口径(16.6)、器高17.6、底径6.5
63-3	SK08	4層上	胴～底部	深鉢形	晩期前葉～中葉	LR(横回転)、調整底、外面に炭化物付着	P-10、器高(17.6)、底径6.7
63-4	SK08	4層上	胴～底部	深鉢形	晩期前葉～中葉?	LR(横回転)、上げ底状、外面に炭化物付着	P-9、器高(11.0)、底径7.2
63-10	SK20	覆土	口縁～底部	台付鉢形	晩期前葉(大洞B2)	平口縁(小波状)、突起(8個?)、入組三叉文、隆帯(横位)、隆帯上刺突、LR(横回転)、台部透かし孔、内面・外面に炭化物付着	P-1、口径17.2、器高14.8、底径8.2
63-11	SK21	3層	口縁部	浅鉢形?	晩期前葉(大洞B2)	小波状口縁、突起、入組三叉文	P-1、口径(13.0)、器高(3.5)
63-12	SK21	3層	口縁～底部	注口形	晩期前葉(大洞B2)	沈線(頸部・注口部)	P-1、口径8.5、器高8.7
63-13	SK21	2層	胴～底部	台付鉢形	晩期前葉?	LR(横回転)	P-2、器高(13.9)、底径(6.0)
63-15	SK22	2層	口縁～底部	深鉢形	晩期前葉(大洞B2)	平口縁(小波状)、突起(1個?)、玉抱三叉文、LR(横・斜回転)、調整底	P-1、口径19.9、器高19.9、底径6.7
64-1	SK24(SP61)	3層上	口縁～底部	深鉢形	後期前葉(十腰内I)	波状口縁(6単位)、波頂部隆帯(縦位)貼付、沈線(S字状文)、内面・外面に炭化物付着	P-2・3・5・11、口径25.5、器高(30.2)
64-2	SK24(SP61)	3層上	口縁～胴部	深鉢形	後期前葉(十腰内I)	波状口縁、波頂部隆帯(円形状)貼付、沈線(S字状文)、外面に炭化物付着	P-10
64-3	SK24(SP61)	3層上、表土、覆土	口縁～底部	深鉢形	後期前葉	平口縁、無文、外面に炭化物付着	P-9・10、口径(23.4)、器高(29.0)
64-4	SK27	底面直上	口縁部	深鉢形	晩期前葉	平口縁、LR(横・斜回転)	P-3
64-5	SK29	1層	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、口唇部LR(横回転)、他LR(縦回転)	口径(27.7)、器高(22.9)
64-6	SK30埋設	2層(南壁)	口縁～底部	深鉢形	中期前葉(上層a)	突起(大小2個)、隆帯(横位2条、縦位1条)、突起・隆帯上側面圧痕(R)、円形刺突、区画内単軸絡条体第1類R押圧?、LR(横回転)、結節R(横位)	口径27.0、器高32.2、底径12.2
65-1	SK30	底面2層	口縁～胴部	深鉢形	中期前葉(上層a)	波状口縁、突起、隆帯(X状、円環状、横位1条)、口唇・隆帯・突起上側面圧痕(LR)、区画内側面圧痕LR(横回転)、LR(横回転)、結節R(横位)	P-4～7、口径(44.9)、器高(14.3)
65-2	SK30 SK43	底面直上 4層	口縁部	深鉢形	中期前葉(上層a)	波状口縁、単軸絡条体第1類L+R、連続刺突(横位)、LR・RL(結束第1種)	P-9、図65-3と同一
65-3	SK30	底面直上	口縁～胴部	深鉢形	中期前葉(上層a)	波状口縁、波頂部肥厚、隆帯(縦位、タスキ状)、隆帯上L+R側面圧痕	P-9、11～15、18、図65-2と同一
65-7	SK31	底面直上	口縁部	深鉢形	中期前葉(上層a)	隆帯(縦位)、隆帯上LR(縦回転)、LR(縦・斜回転)	P-2
65-8	SK31	覆土下層	把手部	深鉢形	中期前葉(上層a)	無文?	
65-10	SK33 IS-22	覆土I層	口縁～底部	深鉢形	後期初頭～前葉	波状口縁、頸部隆帯(横位2条、縦区画2条1単位)、隆帯上刻目、沈線(入組文、下部三角形区画文?)、RL(横・斜回転)	口径(28.2)、器高40.1、底径10.6
65-12	SK34	1層	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭?	平口縁、LR(縦回転)	
65-13	SK35	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭～前葉	波状口縁、沈線(横位2条、曲線状)、LR(縦・斜回転)	図65-14と同一?
65-14	SK35	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭～前葉	沈線(横位2条、円形状)、LR(斜回転)	図65-13と同一?
66-1	SK36	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、L側面圧痕(横位2条)、LR(縦回転)	
66-2	SK36	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁?、隆帯(方形状)	
66-3	SK36	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位・横位)、横位隆帯上刻目、ボタン状貼付?、地文不明	
66-13	SK41	覆土	口縁部	深鉢形	中期中葉(上層e)	波状口縁、口唇部肥厚(RL側面圧痕)、RL(横回転)	P-2
66-14	SK41	覆土	胴部	深鉢形	中期中葉(上層d)	隆帯(陶骨文、RL(横回転))	P-1
66-15	SK42	1層	胴部	深鉢形	中期末葉?	沈線(横位)、単軸絡条体第1類R(縦位)充填?	
66-18	SK43	4層	胴部	深鉢形	中期前葉(上層a)	LR側面圧痕?(横位)、隆帯(横位)、隆帯上LR回転施文?	
66-19	SK43	4層	胴～底部	深鉢形	中期前葉?	地文不明	器高(25.8)、底径20.7
67-1	SK44(SX02)	覆土	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭?	平口縁、LR(横回転)	
67-2	SK45(SX05)	覆土	把手部	壺形	後期初頭～前葉?	把手部貫通孔、外面赤色塗膜付着	
67-3	SK46(SI01SK1)	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	波状口縁、ボタン状貼付	
67-4	SK47(SI01SK2)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刺突、刺突文	
67-5	SK47(SI01SK2)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭?	沈線(横位2条)、隆帯(横位)、地文不明	
67-6	SK47(SI01SK2)	覆土	口縁～胴部	深鉢形(小)	中期末葉～後期初頭	平口縁、単軸絡条体第1類L(横位・斜位)	

土器観察表(6)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
67-7	SK47 (SI01SK2)	覆土	口縁~胴部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	平口縁、単軸絡糸体第1類R(縦位)	
67-8	SK48 (SI01SK3)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭~ 前葉?	沈線(横位平行)、RL(縦回転)、内面付着物	
67-9	SK48 (SI01SK3)	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、側面圧痕(RL)	
67-10	SK48 (SI01SK3)	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、ボタン状貼付、隆帯(横位)、隆帯上刺突	
67-11	SK48 (SI01SK3)	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、隆帯(横位、曲線状)	
67-12	SK48 (SI01SK3)	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁(折返し2段)、隆帯(横位)、隆帯上刺突	
67-13	SK48 (SI01SK3)	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	側面圧痕(RL)、刺突文	
67-14	SK48 (SI01SK3)	2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位)、隆帯上刻目、単軸絡糸体第1類R? (斜位)?	図67-15と同一
67-15	SK48 (SI01SK3)	4層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位)、隆帯上刻目、単軸絡糸体第1類R (斜・横位)?	図67-14と同一?
67-16	SK48 (SI01SK3)	2層	胴部	壺形	後期前葉	沈線(曲線状)、外面赤色塗膜付着	
67-17	SK48 (SI01SK3)	底面、2層	胴~底部	切断蓋付	後期前葉?	頸部切断(1カ所Y字状)、蓋部把手状穿孔、 底部穿孔(2カ所)、	P-1、器高(9.2)、 底径4.9
70-1	SP44	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(円形状、巴文状)	
70-3	SP142	覆土	台部	台付 鉢形?	後期初頭前葉	隆帯(横位)、隆帯上刻目	
70-4	SP162	覆土	胴部	深鉢形	後期初頭	LR側面圧痕(横位)、LR(縦回転)	
70-5	SP162	覆土	胴部	壺形	後期初頭~前葉	沈線(曲線状)、無文、外面赤色塗膜付着	
70-6	SP210	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、ボタン状貼付、隆帯(方形区画状)、 隆帯上刻目?	
70-7	SP216	覆土	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(逆U字状)、隆帯上刺突	
70-11	SP242	覆土	把手部	壺形?	後期初頭~ 前葉?	隆帯(斜位)	
70-12	SR01	埋設土器	胴~底部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	LR(縦回転)?、調整底	底径5.4
70-13	SR02 (SI06西側)	埋設土器	胴~底部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	RL(縦回転)、網代痕	底径13.4
70-14	SR03(SI12)	埋設土器	口縁部	深鉢形	中期前葉(上層a)	波状口縁、隆帯(縦位楕円形状、横位)、口唇・ 隆帯上LR側面圧痕、単軸絡糸体第1類R側面圧痕、 LR(横回転)	
72-1	西斜面	捨1層 捨2層	胴部	深鉢形	中期前葉 (上層a?)	自条自巻側面圧痕(横位)、LR(横回転)	I O-9
72-2	西斜面	Ⅲ層	口縁部	深鉢形	中期前葉(上層a)	波状口縁、突起部R側面圧痕(横位2~3条)、口唇 単軸絡糸体第1類R側面圧痕、R側面圧痕(横S字状3条1 単位)、隆帯(横位)、隆帯上R側面圧痕、地文不明	I T-9
72-3	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	中期前葉(上層a)	平口縁、口唇LR側面圧痕?、単軸絡糸体第1類 R側面圧痕?、隆帯(横位)、隆帯上LR側面圧痕?、 RL(横回転)	I V-12
72-4	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	中期前葉 (上層a?)	波状口縁?、隆帯、RL側面圧痕?、他不明	I T-10
72-5	西斜面	Ⅱ層	口縁部	深鉢形	中期前葉(上層a)	平口縁、口唇L側面圧痕、 単軸絡糸体第1類LR側面圧痕(横位)	I X-13
72-6	西斜面	捨2層	把手部	深鉢形	中期前葉(上層a)	把手部未貫通	I S-9
72-7	西斜面	捨1層	口縁部	深鉢形	中期末葉	波状口縁、波頂部刻目、沈線(アルファベット状)、 LR(縦回転)磨消	I O-9
72-8	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	中期末葉?	波状口縁、沈線(方形区画状)、RL(横回転)充填	I U-13
72-9	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	中期末葉?	平口縁、口唇RL回転、沈線(曲線状?)、RL(横回転)	I U-13
72-10	西斜面	捨1層	胴部	壺形?	中期末葉	沈線(曲線状)、0段RL(縦回転)?磨消	I O-9
72-11	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	中期末葉?	沈線(曲線状)、0段LR(縦回転)充填?	I V-12
72-12	西斜面	捨1層	口縁部	深鉢形	中期末葉	平口縁? 鱗状、隆帯、内面鱗状隆帯	I O-9
72-13	西斜面	捨1層 捨2層	口縁~胴部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(アルファベット状)、鱗状隆帯、 RL(縦回転)	I O-9、口径(16.6)、 器高(12.0)
72-14	西斜面	捨1層	口縁~胴部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	波状口縁、隆帯(曲線)、沈線(アルファベット状)、 単軸絡糸体第1類L(縦位・斜位)	I O-9
72-15	西斜面	捨1層	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(縦位)、鱗状隆帯、LR(縦回転)	I O-9
72-16	西斜面	捨1層	口縁部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	波状口縁、有孔、隆帯(孔に沿って半円状)、沈線?	I O-9
72-17	西斜面	捨2層	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、沈線(横位多条)、LR側面圧痕(横位)、 LR(横回転)	I V-12
72-18	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁?、LR側面圧痕(斜位、縦位、横位)、 隆帯(横位)、単軸絡糸体第1類L(縦位)?	I V-12
72-19	西斜面	Ⅱ層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁?、隆帯(曲線、方形区画状)、 L側面圧痕(隆帯沿い)、LR(縦回転)?	I W-12
72-20	西斜面	捨1層	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、LR側面圧痕(横位・斜位)	I P-9
72-21	西斜面	捨2層	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、L側面圧痕(横位、鋸歯状)、LR(縦回転)	I V-12
72-22	西斜面	Ⅱ層	口縁部	深鉢形	後期初頭?	波状口縁、R側面圧痕(縦位2条)、0段LR側面圧痕? (斜位多条)	I Y-13
72-23	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	RL側面圧痕(縦位)、ボタン状貼付	I T-9

土器観察表(7)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
72-24	西斜面	捨1層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(横位、曲線状)、LR側面圧痕(斜位、縦位)	I T-9
72-25	西斜面	捨1層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁?、ボタン状貼付、隆帯(円形状)、隆帯上刺突?、LR側面圧痕(口唇沿い)	I T-10
72-26	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位、円形状)、LR側面圧痕(隆帯沿い)	I V-12
72-27	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(方形区画状)、隆帯上刺突、RL側面圧痕(隆帯沿い)、RL(縦回転)?	I U-11
72-28	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、入組状)	図72-29と同一、I P-8
72-29	西斜面	捨1層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位、斜位)	図72-28と同一、I P-8
73-1	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、渦巻状)	I V-12
73-2	西斜面	II層	口縁部	深鉢形	後期初頭	隆帯(山形状、渦巻状)、隆帯上LR側面圧痕	I V-13
73-3	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭~前葉	平口縁?、隆帯(方形区画状)、外面炭化物付着	I T-9
73-4	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭~前葉	隆帯(巴状?)	I V-12
73-5	西斜面	捨2層	口縁付近	深鉢形	後期初頭~前葉	隆帯(入組状)	図72-28・29と同一、I P-8
73-6	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、縦位2条)、隆帯上刺突、ボタン状貼付	I V-12
73-7	西斜面	捨2層	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(横位)、隆帯上刺突(円形状)、隆帯間刺突列(縦位2条)	I U-11
73-8	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い2条、馬蹄形状)、隆帯上刺突、ボタン状貼付	I V-12
73-9	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、縦位、横位)、隆帯上刺突、ボタン状貼付	I U-13
73-10	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁?、隆帯(横位、縦位2条)、隆帯上刺突、ボタン状貼付	I V-12
73-11	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(口唇沿い、縦位)、隆帯上刺突(小円形状)	I U-11
73-12	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁?、ボタン状貼付、隆帯(曲線)、隆帯上刻目	I V-12
73-13	西斜面	捨1層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、ボタン状貼付、隆帯(横位、曲線)、隆帯上刺突	I P-9
73-14	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁?、ボタン状貼付、隆帯(口唇沿い2条)、隆帯上刻目	I U-11
73-15	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(斜位、横位)、隆帯(横位)上刻目、RL(縦回転)	I V-12
73-16	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付(2個)、隆帯(横位、縦位)、隆帯(縦位)上刺突?、地文不明	I T-10
73-17	西斜面	I層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(横位、方形区画状)、隆帯上刺突	I V-13
73-18	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、小円形状)、隆帯上刻目	I U-11
73-19	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、波頂部刻目、ボタン状貼付、隆帯(円形状)、隆帯上RL(横回転)?	I V-12
73-20	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(渦巻状、縦位)、隆帯上刺突	I V-12
73-21	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(曲線状、円形状)、隆帯上刺突、地文不明	I U-13
73-22	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、曲線)、隆帯(曲線)上刺突、刺突文	I V-12
73-23	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、逆U字状)、刺突文	I V-12
73-24	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(斜位、縦位、横位)、隆帯上刺突	I V-12
73-25	西斜面	捨1層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位2条)、隆帯上刻目、LR(縦回転)	I P-9
73-26	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(逆C字状、横位)、隆帯上刺突・刻目	I V-12
73-27	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位U字状)、隆帯上刺突、LR(縦回転)	I V-12
73-28	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	刺突列(円形状)、隆帯(横位)、隆帯上刺突(円形状)、LR(縦回転)、外面炭化物付着	I U-10
73-29	西斜面	捨2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	狩猟文(樹木状)	I U-10
73-30	西斜面	II層	口縁~底部	異形土器	後期初頭~前葉?	無文、透かし孔(円形状・半円形状)	I V-13、口径(9.0)、器高5.0、底径(12.0)
73-31	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(横位、波頭状)、無文	I T-9
73-32	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(曲線、渦巻状)、無文	I U-13
74-1	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(波頭状)、無文	I V-12
74-2	西斜面	I層	胴部	壺形?	後期前葉	沈線(横位・曲線)、無文	I U-13
74-3	西斜面	III層	口縁部	深鉢形	後期前葉?	平口縁、沈線(曲線)、無文	I S-8
74-4	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	中期末葉~後期初頭	平口縁(折返し)、LR(縦回転)	I U-11
74-5	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い)、沈線(隆帯沿い)	I V-12
74-6	西斜面	捨2層	口縁~底部	深鉢形(小)	中期末葉~後期初頭	平口縁、LR(縦回転)	I P-9、口径(11.6)、器高11.1、底径(5.8)
74-7	西斜面	捨2層	口縁~底部	深鉢形(小)	中期末葉~後期初頭	平口縁、RL(縦回転)	I T-10、口径(14.1)、器高20.0、底径(7.4)
74-8	西斜面	捨2層	口縁~胴部	深鉢形	中期末葉~後期初頭	平口縁、RL(縦回転)、輪積み痕	I T-10、口径(17.8)、器高(13.5)
74-9	西斜面	捨2層	口縁~底部付近	深鉢形	中期末葉~後期初頭	平口縁、RL(斜回転)	I T-9、口径(25.6)、器高(28.7)
74-10	西斜面	II層	胴部	深鉢形(小)	後期初頭	L側面圧痕(縦位)、単軸絡条体第1類R?(縦位・斜位)	I V-13、器高(16.6)

土器観察表(8)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
74-11	西斜面	捨2層	胴部～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	単軸絡条体第1類RL(横回転)、調整痕	I V-12、器高(26.6)、底径12.3
74-12	西斜面	捨2層	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭?	平口縁、RL(横、縦回転)	I V-13
74-13	西斜面	I層	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、単軸絡条体第1類L(斜位)	I U-13
74-14	西斜面	捨2層	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、RL(縦、斜回転)	I U-13
74-15	西斜面	捨2層	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、RL(縦、斜回転)	I T-9
74-16	西斜面	捨2層	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、LR(縦、斜回転)	I T-9
74-17	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	L(縦回転)	I V-12
74-18	西斜面	捨2層	胴部	深鉢形	中期末葉～後期初頭?	L(縦回転)	I T-9
74-19	西斜面	捨1層	口縁部	深鉢形	晩期前葉	平口縁、沈線(横位、入組三叉状)、0段多条RL(縦・斜回転)?	I R-7
74-20	西斜面	捨1層	口縁部	深鉢形	晩期前葉?	平口縁、沈線(横位、斜位)、0段RL(縦回転)	I U-12
75-1	西斜面	捨2層	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭～前葉	平口縁、網目状捺糸文(単軸絡条体第1類L?)	I T-9
75-2	西斜面	捨1層	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	単軸絡条体第1類L(斜位)、網代痕	I O-9、底径(7.7)
75-3	西斜面	I層	底部	深鉢形	中期末葉～後期前葉	RL(縦回転)、網代痕	I U-12、底径10.7
75-4	西斜面	捨2層	底部	深鉢形	中期末葉～後期前葉	RL(縦回転)、網代痕	I T-10、底径10.2
75-5	西斜面	捨2層	底部	深鉢形	中期末葉～後期前葉	LR(縦回転)?、網代痕	I V-13、底径10.5
75-6	西斜面	捨2層	胴部～底部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	RL(縦回転)、網代痕→調整	I V-12、底径13.0
75-7	西斜面	捨2層	胴～底部	深鉢形	中期末葉～後期前葉	LR(縦回転)?、網代痕、内面炭化物付着	I U-13、底径12.3
75-8	西斜面	捨2層	底部	深鉢形(小)	中期末葉～後期前葉	網代痕→調整底	I V-12、底径6.3
75-9	西斜面	捨2層	底部	深鉢形(小)	中期末葉～後期前葉	網代痕	I T-10、底径7.1
75-10	西斜面	捨2層	底部	壺形?	後期前葉?	上底状、外面黒色付着物	I V-12、底径4.0
75-11	西斜面	捨1層	底～台部	台付鉢形	後期前葉?	無文、内面黒色付着物	I U-11、台高0.7、底径5.5
75-12	西斜面	捨2層	台部	台付鉢形	後期前葉?	台部有孔、無文?	I T-9、台高1.6、底径7.2
76-1	南斜面	沢2層	口縁～胴部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(J字状)、RL(横回転)	I Q-29・30、I R-29・30、口径(18.0)、器高(17.2)
76-2	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(アルファベット状?)、RL(縦回転)	I R-29
76-3	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉	平口縁、沈線(アルファベット状?)、0横多条RL(斜位)	I Q-30
76-4	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、単軸絡条体第1類L(縦位)	I Q-30
76-5	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、RL(縦回転)	I Q-29
76-6	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(横位2条)、単軸絡条体第1類L(縦位)	I Q-29
76-7	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	波状口縁、隆帯(鱗状?、円形状)、刺突列、RL(横回転)?、内面鱗状隆帯	I Q-29
76-8	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	波状口縁、沈線(曲線)、内面鱗状隆帯	I Q-29
76-9	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	波状口縁、沈線(縦位2条)、内面鱗状隆帯	I Q-29
76-10	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉～後期初頭	平口縁、沈線(区画状?)、区画内刺突文、地文不明、内面鱗状隆帯	I Q-29
76-11	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	中期末葉～後期初頭	鱗状隆帯、沈線(横位、曲線)、刺突文(小円形状)充填	I Q-29
76-12	南斜面	沢2層	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、口唇部RL、LR側面圧痕(横位、C字状)	I Q-30
76-13	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、RL側面圧痕(横多条)?	I Q-29
76-14	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭?	RL側面圧痕(横多条)?	I Q-29
76-15	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	RL側面圧痕(横位2条)、RL(斜回転)	I R-28
76-16	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、隆帯上刻目、L側面圧痕(渦巻状)	I Q-29
76-17	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、突起?、口唇RL回転文、ボタン状貼付、隆帯(口唇沿い)、RL側面圧痕(斜3条)	I S-31
76-18	南斜面	沢2層	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	波状口縁(把手状)、有孔、沈線(曲線、円形状)、円形区画内刺突文充填、RL(縦回転)、鱗状隆帯	I Q-29
76-19	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁(把手状)、有孔、沈線(縦位2条)、沈線区画内刺突文(円形状)充填	I Q-29
76-20	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、有孔、沈線(円形区画状)、区画内LR(横位)充填	I R-30
76-21	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位)、隆帯上刺突、沈線(円形区画状)、区画内刺突文充填	I R-30
76-22	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、口唇RL、隆帯(口唇沿い)、沈線(渦巻状)	I R-30

土器観察表(9)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
76-23	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁(把手状)、有孔、隆帯(口唇沿い)	I Q-29
76-24	南斜面	沢2層	口縁部～胴部	深鉢形	後期初頭～前葉	平口縁(折返し)、隆帯(入組状)、RL(縦回転)	I Q-29
76-25	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(曲線、突起状)	I R-30
76-26	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(逆V字状)	I Q-29
76-27	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(方形区画状)、隆帯上刺突	I R-29
76-28	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(曲線2条)、隆帯上刺突(円形状)	I R-30
76-29	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い多条)、ボタン状貼付(2個)	I Q-30
76-30	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(連鎖状)、隆帯上刺突、刺突列(横位)、LR(縦回転)	I R-31
76-31	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(波頭状?)	I Q-30
76-32	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(小円形状、横位)、隆帯上刺突(円形状)、RL(横位)?	I R-30
76-33	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、波頂部刻目、有孔、隆帯(小円形状、入組状)、隆帯一部RL回転文	I R-28
76-34	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(小円形状)、隆帯上刻目?	I Q-29
76-35	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(渦巻状、Y字状)、ボタン状貼付	I R-30
76-36	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(曲線)、隆帯沿い刺突列	I R-28
77-1	南斜面	沢2層	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、ボタン状貼付、隆帯(口唇沿い、S字状、横位)、隆帯上刺突、L側面圧痕(V字状、波頭状)、刺突文	図77-2と同一、I Q-30
77-2	南斜面	沢2層	胴～底部	台付深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刻目、台部剥落、刺突文	図77-1と同一、I R-29、器高(6.8)
77-3	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位・横位2条1単位方形区画状)、ボタン状貼付、隆帯上刻目、沈線(円形状)、刺突文	I R-29-30、器高(21.3)
77-4	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(斜2条、縦位、横位)、隆帯上刺突、刺突文	I R-30
77-5	南斜面	沢2層	口縁部付近?	深鉢形?	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(横位2条)、隆帯上刺突、刺突文	I R-30
77-6	南斜面	沢2層	胴～底部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、刺突文	I Q-29
77-7	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(方形区画状?)、隆帯状刺突(円形状)、沈線(方形状)	I R-30
77-8	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(方形区画状)、隆帯上刺突	I Q-29
77-9	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	隆帯(S字状)、隆帯状刻目	I Q-30
77-10	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付、隆帯(横位、S字状)、隆帯上刺突(円形状)	I R-30
77-11	南斜面	沢2層	口縁～底部付近	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、三角形区画状)、ボタン状貼付、隆帯上刻目、LR(縦回転)	I Q-28-30、I R-30、口径22.4、器高(31.6)
77-12	南斜面	沢2層	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(三角形状)、隆帯上刻目、LR側面圧痕(三角形状)	I R-31
77-13	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(三角形状?)、隆帯上刺突	I R-31
77-14	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(山形状多条、縦位)、隆帯上刺突(円形状)	I Q-28
77-15	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、隆帯上刺突(小円形)	I Q-29
77-16	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形?	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、隆帯上刻目	I Q-29
77-17	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、隆帯上刺突、無文?	I Q-30
77-18	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁?、隆帯(曲線)、隆帯上刻目?	I Q-29
77-19	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位、斜位)、隆帯上刻目	I Q-29
77-20	南斜面	沢2層	口縁部?	ミニチュア	後期初頭	平口縁?、隆帯(曲線)、隆帯上刻目、刺突文	I Q-29
77-21	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横、連鎖状?)、地文不明	I Q-30
77-22	南斜面	I層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(三角形状)、隆帯上LR側面圧痕	I T-32
77-23	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刻目、RL(斜回転)	I Q-30
77-24	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(縦位、曲線)、隆帯上押圧、RL(縦回転)	I Q-30
77-25	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(斜位多条)、隆帯上刺突	I R-30
77-26	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位、斜位)、隆帯上刻目	I Q-29
77-27	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(曲線状2条)、隆帯上刻目	I Q-29
77-28	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位)、RL(縦回転)?	I Q-29
77-29	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭?	平口縁(折返し)、刺突列(小円形状)	I Q-29
77-30	南斜面	沢2層	口縁部付近	深鉢形	後期初頭	ボタン状貼付?、隆帯(斜位)、隆帯上刻目	I Q-29
77-31	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(曲線)、隆帯沿い刺突列(小円形状)、LR(縦回転)?	I Q-30
77-32	南斜面	沢2層	頸部	壺形?	後期初頭	隆帯(横位)、隆帯上刺突列、LR(縦回転)	I R-30
77-33	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位2条)、隆帯上刺突	I Q-29
77-34	南斜面	I層	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(曲線)、隆帯上刺突	I T-32
77-35	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期初頭	狩猟文(樹木状)	I R-29
78-1	南斜面	沢2層	口縁～底部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(口唇部・胴部に横位2条)、狩猟文(樹木状1条、弓矢状2条、動物状2条、円形状1条、楕円形状1条、方形状2条)、隆帯間RL側面圧痕、沈線(アルファベット状)、RL(縦回転)充填、RL(縦回転)	I R-30、口径21.5、器高25.7、底径(10.4)
79-1	南斜面	沢2層	口縁～胴部	深鉢形	後期初頭～前葉	波状口縁、沈線(円形状、横位多条)、刺突列(小円形状口唇沿い、胴部横位)、0段LR(縦回転)	I R-31

土器観察表(10)

図版番号	出土地点	層位	部位	器種	時期(型式)	文様等	備考(計測値はcm)
79-2	南斜面	沢2層	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭	平口縁、刺突列(小円形状)、RL(縦回転)	I Q-29
79-3	南斜面	沢2層	口縁部	壺形?	後期初頭	平口縁、刺突列(円形状)、隆帯(横位)、 隆帯上刺突列(小円形状)	I R-30
79-4	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	後期前葉	平口縁、沈線(横位)、無文	図79-8と同一、 I Q-30
79-5	南斜面	沢2層	口縁部	壺形	後期前葉	平口縁、沈線(横位)、無文	I R-29
79-6	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(波頭状)、無文	I Q-30
79-7	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(入組状、円形状)、無文	I Q-30
79-8	南斜面	沢2層	胴部	深鉢形	後期前葉	沈線(横位2条)、無文	図79-4と同一、 I Q-30
79-9	南斜面	沢2層	口縁~胴部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	平口縁、RL(縦回転)	I Q-28、I R-30 口径(26.0)、 器高(22.3)
79-10	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	平口縁(折返し)、LR(縦回転)	I Q-29
79-11	南斜面	沢2層	口縁部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	波状口縁?、単軸絡条体第1類L(斜位、横位)	I Q-30
79-12	南斜面	沢2層	胴~底部	深鉢形	後期初頭	RL側面圧痕(頸部横位)、RL(縦・斜回転)	I R-31、器高(25.0)、 底径9.1
79-13	南斜面	沢2層	口縁~胴部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭?	平口縁、RLR(横回転)、結節R(縦位)?	I Q-29、口径(23.0)、 器高(34.2)
79-14	南斜面	沢2層	胴~底部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	RL(縦回転)、網代痕	I R-29、器高(9.4)、 底径9.0
79-15	南斜面	沢2層	底部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	RL(縦回転)、網代痕	I Q-29、底径12.0
79-16	南斜面	沢2層	胴~底部	深鉢形	後期初頭	刺突文、網代痕→調整?	I R-31、底径(9.4)
79-17	南斜面	沢2層	底部	深鉢形 (小)	中期末葉~ 後期初頭	網代痕、内面炭化物付着	I R-30、底径6.6
79-18	南斜面	沢2層	胴~底部	台付 鉢形?	後期前葉?	無文	I S-31、底径(6.8)
79-19	南斜面	沢2層	台部	台付鉢形	後期前葉?	無文	I R-31、台高1.4、 底径8.8
80-1	その他	攪乱	口縁部	深鉢形	中期末葉?	沈線(横位)、単軸絡条体第1類R(斜位)	II I~G-28~33 (旧SX01)
80-2	その他	攪乱	胴部	深鉢形	中期末葉	沈線(アルファベット状)、RL?(横回転)	II I~G-28~33 (旧SX01)
80-3	その他	攪乱	口縁部	深鉢形	中期末葉	平口縁?、LR(縦・斜回転)、内面鱗状隆帯	II I~G-28~33 (旧SX01)
80-4	その他	I層	胴部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	隆帯(鱗状?)、沈線(曲線)、 単軸絡条体第1類L(縦位、斜位)	I V-36
80-5	その他	I層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、RL側面圧痕(横位2条)、RL(縦回転)	I V-35
80-6	その他	I層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、L側面圧痕(横位2条)	I V-25
80-7	その他	I層	胴部	深鉢形	後期初頭	RL側面圧痕(横位、曲線)	I S-22
80-8	その他	III層	口縁部	深鉢形	後期初頭	波状口縁、隆帯(口唇沿い、渦巻状)	II N-27
80-9	その他	I層	口縁部	深鉢形	後期初頭?	波状口縁、隆帯(口唇沿い)、刺突(円形状)	I S-25
80-10	その他	攪乱	胴部	深鉢形	後期初頭?	ボタン状貼付、沈線(曲線)、LR(横回転)充填?	II I~G-28~33 (旧SX01)
80-11	その他	I層	胴部	深鉢形	後期初頭	刺突文	I S-22
80-12	その他	攪乱	胴部	深鉢形	後期初頭	隆帯(横位2条)、狩猟文(樹木状)、RL(横回転)	II I~G-28~33 (旧SX01)
80-13	その他	攪乱	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、口唇突起、隆帯(S字状?)	図80-13~15は同一 か?、II I~G-28~33 (旧SX01)
80-14	その他	攪乱	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、口唇肥大、隆帯(横位・斜位)	図80-13~15は同一 か?、II I~G-28~33 (旧SX01)
80-15	その他	攪乱	口縁~胴部	深鉢形	後期初頭?	平口縁、口唇突起、隆帯(S字状)	図80-13~15は同一 か?、II I~G-28~33 (旧SX01)
80-16	その他	III層	口縁部	深鉢形	後期初頭	平口縁、隆帯(横位)、刺突列(小円形状)	I S-20
80-17	その他	I層	胴部	壺形	後期初頭~前葉	沈線(横位2条)、無文	I R-17
80-18	その他	一括	口縁部	深鉢形	後期前葉 (十腰内I)	平口縁、沈線(巴状入組文)、内面沈線(横位1条)	II B~D-37~39 (南東トレンチ)
80-19	その他	攪乱	口縁部	深鉢形 (小)	後期初頭~前葉	平口縁、網目状撚糸文(単軸絡条体第1類R)	II I~G-28~33 (旧SX01)
80-20	その他	III層	口縁部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	平口縁、RL(斜回転)	I P-10
80-21	その他	攪乱	底部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	LR(斜回転)?、網代痕	II I~G-28~33 (旧SX01)、器高(4.0)、 底径9.5
80-22	その他	I層	胴~底部	深鉢形	中期末葉~ 後期初頭	単軸絡条体第1類L(縦位・斜位)、網代痕	I Y-36、器高(10.1)、 底径14.4
80-23	その他	攪乱	底部	深鉢形	後期初頭?	無文、調整底?	II I~G-28~33 (旧SX01)、器高(5.3)、 底径(10.1)

石器観察表(1)

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
13-1	石鏃	SI01①エリア	床面	珪質頁岩	(2.9)	1.7	0.4	(0.7)	凹基無茎、アスファルト付着、先端破損、S-5
13-2	石鏃	SI01④エリア	床面	珪質頁岩	2.2	1.7	0.7	0.7	凹基無茎、両面全面加工、アスファルト付着、S-11
13-3	石鏃	SI01④エリア	床面	珪質頁岩	2.1	1.6	0.3	0.8	凹基無茎、両面全面加工、アスファルト付着、S-10
13-4	石鏃	SI01④エリア	床面	珪質頁岩	(2.5)	1.8	0.5	(1.4)	凹基無茎、片面全面、片面周縁のみ加工、先端破損、S-13
13-5	石鏃	SI01①エリア	床面	珪質頁岩	2.7	1.4	0.4	1.1	凹基無茎、アスファルト付着、S-4
13-6	石鏃	SI01①エリア	床面	珪質頁岩	(2.8)	1.5	0.4	(1.2)	凹基無茎、先端破損、S-3
13-7	石鏃	SI01④エリア	床面	珪質頁岩	3.2	1.8	0.5	1.7	凹基無茎、両面ほぼ全面加工、S-14
13-8	石鏃	SI01炉1	2層	珪質頁岩	3.4	1.4	0.5	1.4	凹基無茎、両面全面加工
13-9	石鏃	SI01Aライン	床面直上	珪質頁岩	3.3	1.5	0.5	(1.6)	凹基無茎、片面ほぼ全面、片面周縁のみ加工、基部一部破損、S-72
13-10	石鏃	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	2.8	1.7	0.5	2.4	平基無茎、両面周縁のみ加工
13-11	石鏃	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	2.8	1.5	0.7	2.3	平基無茎、両面とも周縁のみ加工、打面を残したまま加工
13-12	石鏃	SI01炉3	火床面	珪質頁岩	(2.3)	1.5	(0.4)	(1.2)	基部破損、両面周縁加工
13-13	石鏃	SI01①エリア	床面	珪質頁岩	(3.1)	0.9	0.4	(0.7)	平基有茎、アスファルト付着、先端破損、S-1
13-14	石鏃	SI01①エリア	床面	珪質頁岩	(3.7)	1.2	0.5	(1.3)	平基有茎、アスファルト付着、先端破損、S-2
13-15	石鏃	SI01②エリア	床面	珪質頁岩	3.8	1.4	0.5	1.7	平基有茎、両面縁辺のみ加工、S-8
13-16	石鏃	SI01②エリア	床面	珪質頁岩	(3.2)	1.4	0.6	(1.9)	平基有茎、両面全面加工、両面基部にアスファルト、S-7
13-17	石鏃	SI01Aライン	1a層	珪質頁岩	2.7	1.5	0.4	1.2	平基有茎、片面全面、片面周縁加工
13-18	石鏃	SI01②エリア	床面	珪質頁岩	(2.8)	1.0	0.5	(1.3)	凸基有茎、両面全面加工、先端破損、S-6
13-19	石鏃	SI01④エリア	床面	珪質頁岩	2.8	1.4	0.5	1.6	凸基無茎、両面全面加工、S-12
13-20	石鏃	SI01SCライン	1層	珪質頁岩	(2.1)	1.6	0.4	(1.0)	平基有茎、片面ほぼ全面加工、片面周縁加工、先端破損
13-21	石槍	SI01③エリア	覆土	珪質頁岩	(3.0)	(1.9)	(0.5)	(2.4)	両面周縁加工、基部破損
13-22	石錐	SI01炉2	焼土層	珪質頁岩	(2.1)	(1.0)	(0.5)	(0.8)	錐部両面加工、火はじけ
13-23	石錐	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	3.0	1.9	0.7	2.9	縦長剥片の両面2辺を加工
13-24	石錐	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	2.9	4.2	0.9	7.1	横長剥片の1辺を両面加工
13-25	石錐	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	3.7	2.5	0.9	5.4	縦長剥片の片面で2辺、片面で1辺を加工
13-26	石錐	SI01Aライン	床面	珪質頁岩	(2.2)	(2.0)	(0.5)	(1.9)	両面2側面加工、基部破損
13-27	削器	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	7.1	5.8	1.1	37.5	縦長剥片の1面2側縁を加工
13-28	削器	SI01④エリア	覆土	珪質頁岩	11.7	5.0	2.5	73.4	縦長、片面3側縁、片面1側縁加工
13-29	削器	SI01Aライン	床面	珪質頁岩	5.2	2.1	0.9	8.8	縦長、片面1側縁、片面2側縁加工、S-79
13-30	削器	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	2.9	1.7	0.5	2.5	縦長剥片の両面1辺を加工
13-31	削器	SI01	床面	珪質頁岩	2.4	4.6	0.7	6.4	横長、両面2側縁加工
13-32	搔器	SI01④エリア	覆土	珪質頁岩	5.0	2.7	1.0	8.7	縦長、片面1側縁と下端部加工
13-33	搔器	SI01①エリア	覆土	珪質頁岩	4.1	3.1	0.9	7.7	縦長、片面、1側縁と下端部、片面左右2側縁を加工
13-34	搔器	SI01Pit07	覆土	珪質頁岩	5.7	2.6	1.1	12.5	縦長、片面2側縁と下端部、片面1側縁加工
13-35	搔器	SI01③エリア	覆土	珪質頁岩	5.4	4.4	0.9	(13.7)	縦長、片面周縁1/2、片面1側縁を加工
13-36	石核	SI01⑥エリア	床面	珪質頁岩	5.9	6.2	4.6	134.1	3点と接合
13-37	石核	SI01②エリア	覆土	珪質頁岩	5.0	3.4	3.5	60.3	複数方向から素材剥片剥ぎ取り
14-1	石錘	SI01⑥エリア	覆土	安山岩	8.8	5.3	2.4	168.6	扁平楕円礫の短軸を加工
14-2	磨り石	SI01①エリア	床面	緑色凝灰岩	8.0	6.0	4.9	311.5	両面磨り、S-34
14-3	磨り石	SI01①エリア	覆土	緑色凝灰岩	8.8	6.6	2.4	173.7	楕円礫の2面に磨り、一面は擦痕多数で平坦面を形成
14-4	磨り石	SI01③エリア	床面直上	緑色凝灰岩	11.0	9.4	7.5	1023.9	やや扁平な球状礫の2面に磨り、S-42
14-5	磨り石	SI01⑥エリア	覆土	緑色凝灰岩	11.1	8.0	7.5	1018.5	俵形礫の2面に磨り
14-6	磨り石	SI01①エリア	覆土	緑色凝灰岩	5.5	4.5	1.7	49.3	扁平な小円礫の2面に磨り
14-7	磨り石	SI01④エリア	覆土	安山岩	4.2	3.7	2.7	53.8	やや扁平な小球状レキの2面に磨り
14-8	磨り石	SI01Pit12	覆土	流紋岩	11.6	4.7	2.8	241.6	直方体礫の2面に磨り
14-9	磨り石	SI01Bライン	覆土	安山岩	8.5	5.1	3.2	189.4	三角柱状礫の2面に磨り
14-10	敲き石	SI01⑤エリア	覆土	珪質頁岩	5.0	3.2	2.5	42.1	全周縁を敲打
14-11	磨り+敲き	SI01①エリア	覆土	凝灰岩	5.5	5.2	4.4	152.5	小礫の3平坦面に磨り・敲打痕
14-12	磨り+敲き	SI01④エリア	覆土	緑色凝灰岩	(6.9)	(5.7)	(1.8)	(129.3)	扁平礫の残存面2面に敲打と磨り、上端に敲打痕
14-13	磨り+敲き	SI01①エリア	覆土	緑色凝灰岩	11.0	4.4	2.8	175.4	扁平長楕円礫の一面に磨り・敲き、一面に磨り
14-14	磨り+敲き	SI01②エリア	床面	緑色凝灰岩	13.1	5.3	2.6	213.1	扁平長楕円礫の1面に磨り、2側面に敲き、S-40
14-15	磨り+敲き	SI01①エリア	床面直上	安山岩	12.8	6.5	4.5	389.3	三角柱状礫の平坦面1面に磨り・敲き、1面に磨り
15-1	磨り+敲き	SI01⑤エリア	覆土	緑色凝灰岩	13.3	11.5	5.9	1120.0	扁平円礫の2面に磨り・敲打痕
15-2	磨り+敲き	SI01④エリア	覆土	安山岩	10.5	7.9	7.0	691.8	三角柱礫の1面磨り・1稜敲打痕
15-3	磨り+敲き	SI01Aライン	床面	緑色凝灰岩	9.9	9.0	5.4	413.0	三角柱礫の2面磨り・敲打痕
15-4	磨り+敲き	SI01②エリア	床面直上	凝灰岩	7.4	6.4	4.0	156.7	扁平円礫の1面磨り・1面磨り・敲打痕
15-5	磨り+敲き	SI01②エリア	覆土	凝灰岩	13.0	(5.4)	4.2	(383.1)	四角柱状礫の1面に磨り+敲き、2面に磨り
15-6	敲き石	SI01Aライン	覆土	凝灰岩	9.0	7.7	4.8	263.5	扁平楕円礫の2面に敲打痕
15-7	磨り+敲き	SI01Pit12	覆土	凝灰岩	14.2	9.5	4.0	469.7	扁平な不定形礫片面に磨り・敲打痕
15-8	磨り+敲き	SI01①エリア	覆土	緑色凝灰岩	8.4	5.9	3.1	105.9	扁平三角柱礫の3面磨り・敲打、2側縁に敲打痕
15-9	台石	SI01②エリア	覆土	緑色凝灰岩	10.8	(8.7)	2.6	(279.3)	小さい、手持ちも可
15-10	台石	SI01⑥エリア	床面	デイサイト	12.8	11.0	3.5	725.3	扁平円礫の2面に磨り、S-48
15-11	台石	SI01①エリア	覆土	凝灰岩	(18.7)	(14.9)	(3.1)	(1183.0)	破損、2面に磨り
16-1	台石	SI01炉1	床面	緑色凝灰岩	48.2	37.5	10.2	20600.0	大型扁平楕円礫の片面に磨り・敲打痕、S-1
16-2	台石	SI01炉1	炉石	緑色凝灰岩	23.1	12.2	4.2	1857.7	2面に磨り、2側面敲打痕
16-3	台石	SI01⑥エリア	床面	緑色凝灰岩	22.4	6.7	4.1	1417.0	四角柱状礫の4面に磨り、S-47
16-4	台石	SI01④エリア	覆土	安山岩	(28.8)	(10.6)	(6.9)	3029.8	破損、三角柱状レキの2面磨り、剥離後使用
16-5	台石	SI01①エリア	床面直上	砂質凝灰岩	19.7	15.9	5.0	1884.7	扁平楕円礫の両面に磨り・敲打痕、周縁一部に敲打痕、S-35
20-1	石鏃	SI02	床面直上	珪質頁岩	4.0	1.6	0.2	1.2	凹基無茎、片面全面加工、片面周縁加工、S-36
20-2	石錐	SI02	覆土	珪質頁岩	5.2	2.3	0.7	4.3	縦長、下端部両面加工
20-3	搔器	SI02	覆土	珪質頁岩	3.5	3.2	0.6	7.8	矩形、片面上下端部加工
20-4	搔器	SI02Pit01	覆土	珪質頁岩	5.1	3.5	1.1	16.2	縦長、片面周縁加工
20-5	磨製石斧?	SI02	覆土	緑色岩	(2.7)	(3.2)	(0.4)	(4.8)	破片
20-6	磨製石斧?	SI02	覆土	青色片岩	(6.1)	(3.5)	(1.3)	(28.4)	破片
20-7	磨り石	SI02	床面	凝灰岩	5.3	4.8	4.3	153.8	小球状礫の2面に磨り、S-埋設2
20-8	磨り石	SI02	床面直上	デイサイト	11.0	8.4	7.3	874.8	楕円礫2面に磨り、S-3
20-9	磨り石	SI02	床面直上	凝灰岩	18.0	5.6	3.9	326.2	四角柱状礫の2面に磨り、S-2
20-10	磨り+敲き	SI02	床面直上	流紋岩	14.0	7.1	5.0	813.6	全面磨り、1側面に敲打痕、S-4

石器観察表(2)

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
20-11	石皿	SI02	床面	緑色凝灰岩	43.1	(24.1)	5.7	2400.0	四脚縁付き、片面磨り・敲打痕、S-1
22-7	石鏃	SI03	覆土	珪質頁岩	2.1	1.3	0.3	(0.8)	凹基無茎、アスファルト付着、先端破損
22-8	石鏃	SI03	床面直上	珪質頁岩	(2.8)	(1.4)	0.3	(0.9)	凹基無茎、アスファルト付着、両面ほぼ全面加工 S-16
22-9	搔器	SI03	1層	珪質頁岩	2.5	2.8	0.8	2.9	横長、片面2側縁加工
22-10	削器	SI03	覆土	珪質頁岩	3.4	4.9	1.4	17.8	周縁を加工、火はじけ
22-11	磨り石	SI03	覆土	粗粒玄武岩	6.6	4.8	2.4	108.8	小扁平楕円礫の2面に磨り、S-5
22-12	磨り石	SI03	覆土	安山岩	4.6	4.8	4.3	100.0	球状礫の2面に磨り、S-6
22-13	磨り+敲き	SI03	床面	凝灰岩	10.5	9.3	7.4	962.6	断面三角柱状円礫に帯状の磨りと敲打痕、S-4
22-14	台石	SI03	覆土	デイサイト	28.7	8.1	5.8	2350.0	四角柱状礫の3面に磨り、S-3
24-16	磨り+敲き	SI04	床面	凝灰岩	14.7	6.9	2.6	390.6	扁平楕円礫の両面に磨り・敲打痕、片面深く凹む
26-4	磨り+敲き	SI05	床面	安山岩	9.1	8.9	6.0	590.8	扁平円礫の両面に磨り・敲打痕、1側縁に敲打痕
26-5	磨り+敲き	SI05Pit01	覆土	凝灰岩	6.8	6.9	5.3	292.5	扁平円礫の3面に磨り・敲打痕、2側縁に敲打痕
26-6	磨り+敲き	SI05Pit14	覆土	安山岩	9.2	8.6	7.7	827.9	不定形礫の3面に磨り・敲打痕
28-6	石鏃	SI06Pit04	覆土	珪質頁岩	(2.6)	(1.4)	0.3	(0.7)	凹基無茎、片面全面、片面周縁加工、先端と基部破損、アスファルト付着
28-7	磨り+敲き	SI06	覆土	凝灰岩	9.0	8.5	4.7	391.4	断面三角柱状円礫の2面に磨り・敲打痕(凹み)
28-8	磨り+敲き	SI06	覆土	緑色凝灰岩	16.9	9.4	3.9	306.8	扁平楕円礫の周縁に磨り・敲打痕、被熱痕有り、S-8
28-9	磨り+敲き	SI06	覆土	石英閃緑岩	8.5	6.3	4.9	339.2	扁平楕円礫の2面に磨り・敲打痕(凹み)、S-6
31-13	石鏃	SI08Pit06	堀方	珪質頁岩	(3.3)	1.4	0.5	(1.7)	凹基無茎、両面ほぼ全面加工、先端破損、アスファルト付着
31-14	石鏃	SI08Pit13	覆土	珪質頁岩	(2.9)	1.2	0.4	(0.8)	平基有茎、両面ほぼ全面加工、先端破損
31-15	石錐	SI08	覆土	珪質頁岩	5.5	4.0	1.1	15.6	縦長、片面2側縁、S-2
31-16	磨り+敲き	SI08Pit27	覆土	安山岩	10.8	8.7	6.8	758.5	楕円礫の片面に磨り・敲打痕
31-17	磨り+敲き	SI08Pit11	覆土	安山岩	(10.9)	(5.9)	(4.9)	453.8	断面三角柱状長楕円礫3面に磨り・敲打痕
31-18	磨り+敲き	SI08Pit27	覆土	安山岩	8.2	8.4	4.8	366.9	扁平円礫の片面に磨り・敲打痕、片面に磨り
32-3	二次加工剥片	SI09Pit01	覆土	珪質頁岩	(2.9)	(2.0)	(0.6)	2.8	縦長、片面周縁を加工
34-10	石錐	SI10	覆土	珪質頁岩	(3.8)	1.8	0.7	3.3	縦長、両面2側縁加工
34-11	削器	SI10②エリア	覆土	珪質頁岩	4.4	2.9	1.2	10.4	縦長、片面2側縁加工
34-12	削器	SI10	配石炉	珪質頁岩	4.7	4.6	1.2	23.0	縦長、両面2側縁加工
36-8	石鏃	SI11Pit08	覆土	珪質頁岩	(2.8)	1.0	0.5	1.2	凸基有茎？基部先端破損、両面全面加工、基部厚手
36-9	石錐	SI11Pit08	覆土	珪質頁岩	3.4	2.1	0.3	1.4	縦長、両面2側縁加工
36-10	削器	SI11	攪乱	珪質頁岩	(3.3)	(3.5)	(0.8)	6.8	片面2側縁加工、破損
36-11	削器	SI11①エリア	覆土	珪質頁岩	11.7	5.1	1.8	94.7	縦長 両面2側縁加工
36-12	石錘	SI11	2層	安山岩	9.5	7.6	2.2	215.8	短軸加工
36-13	台石	SI11配石S-4	覆土	凝灰岩	28.1	52.1	5.3	8660.0	大型板状礫の片面に磨り・敲打痕、黒色付着物
37-4	石鏃	SI12	覆土	珪質頁岩	(2.1)	1.2	(0.3)	0.7	凸基有茎？両面周縁加工
38-6	石鏃	SI13Pit02	覆土	珪質頁岩	(2.2)	(1.5)	(0.4)	1.2	両面周縁加工、破損品、石槍の可能性有り
38-7	磨り石	SI13	覆土	緑色凝灰岩	10.0	7.7	5.5	550.0	扁平楕円礫の4面に磨り
38-8	台石	SI13	床面	凝灰岩	14.7	11.9	4.4	1044.8	扁平円礫の両面に磨り
38-9	台石	SI13Pit12	覆土	凝灰岩	15.1	17.7	5.3	1632.9	扁平楕円礫の片面・側縁に磨り・敲打痕、S-6
40-7	二次加工剥片	SI15Pit05	覆土	珪質頁岩	3.8	3.3	1.0	12.0	片面2側縁加工
40-8	磨り+敲き	SI16	覆土	緑色凝灰岩	(8.2)	(6.8)	(3.4)	170.5	扁平礫の2面に磨り・敲打痕(凹み)、1側面に敲打痕
41-3	磨り+敲き	SI17Pit06	覆土	砂岩	10.3	7.9	5.8	733.0	扁平楕円礫の1面に磨り、1側面に磨り・敲打痕
41-4	磨り+敲き	SI17Pit06	覆土	安山岩	11.7	8.9	6.2	791.4	扁平楕円礫の両面に磨り・敲打痕
42-5	磨り+敲き	SI18Pit06	覆土	緑色凝灰岩	13.0	5.4	3.3	269.2	扁平楕円礫の両面に磨り・敲打痕
42-6	磨り石	SI18Pit13	覆土	緑色凝灰岩	14.8	6.7	4.0	516.8	断面三角柱状の楕円礫の2面に磨り
44-6	磨り+敲き	SI19Pit15	覆土	緑色凝灰岩	15.4	10.0	5.2	1152.1	扁平隅丸方形礫の2面に磨り・敲打痕、1側面に磨り、下端部に敲打痕
44-7	磨り石	SI19Pit04	覆土	安山岩	9.6	8.5	5.3	586.6	扁平円礫の2面磨り、黒色付着物
45-2	石鏃	SI20	覆土	珪質頁岩	(2.3)	(1.6)	0.2	0.5	凹基無茎、両面に火はじけ痕
45-3	搔器	SI20Pit04	覆土	珪質頁岩	6.1	4.8	1.3	27.6	縦長、2側縁下端部加工
45-4	磨り石	SI20	1層	安山岩	10.9	8.2	6.5	857.4	楕円礫の2面に磨り
47-6	石鏃	SI21Pit06	覆土	珪質頁岩	(2.1)	1.4	0.3	0.8	凹基無茎、先端破損、両面加工、片面アスファルト付着
47-7	削器	SI21Pit12	覆土	珪質頁岩	(3.3)	(2.9)	(1.0)	6.7	片面1側縁加工
47-8	台石	SI21Pit01	1層	凝灰岩	(20.6)	(21.0)	(6.2)	2164.2	破片、扁平礫の片面磨り、片面磨り・敲打痕、1面ほぼ全体に黒色付着物
48-3	石錘	SI22Pit01	覆土	凝灰岩	9.4	7.9	3.0	305.1	短軸加工
48-4	磨り+敲き	SI22Pit02	覆土	凝灰岩	13.5	6.7	5.7	447.4	楕円礫の2面および上下端部に磨り・敲打痕
50-10	石鏃	SI23(SP82)	覆土	珪質頁岩	(4.3)	1.2	0.5	1.8	平基有茎、両面加工、先端部破損
50-11	微細剥離片	SI23(SP134)	覆土	珪質頁岩	7.2	4.2	1.6	36.9	両面1側縁に微細剥離痕
51-8	石鏃	SI24	貼り床	珪質頁岩	2.6	0.9	0.4	0.6	平基有茎、両面加工、両面アスファルト付着
51-9	石錐	SI24	覆土	珪質頁岩	(3.0)	1.2	(0.7)	2.5	片面2側縁加工、S-1
51-10	磨り石	SI24Pit02	覆土	安山岩	12.9	10.4	5.3	1030.1	扁平楕円礫の2面に磨り
53-9	石鏃	SI25	覆土	珪質頁岩	3.5	1.1	0.3	1.4	凸基有茎、両面周縁加工
53-10	石鏃	SI25Pit01	覆土	珪質頁岩	4.2	1.4	0.6	2.4	凸基有茎、両面加工、両面アスファルト付着
53-11	磨り石	SI25埋設土器	覆土	安山岩	13.3	8.3	7.5	1132.0	楕円礫の2面に磨り、S-2
53-12	磨り+敲き	SI25	覆土	凝灰岩	10.0	9.4	8.5	827.4	球状礫の全面に磨り・敲打痕、埋設S-1
53-13	磨り+敲き	SI25Pit05	覆土	安山岩	11.5	8.6	5.9	785.8	扁平楕円礫の2面に磨り・敲打痕、1面に黒色物質付着、S-1
53-14	磨り+敲き	SI25	覆土	凝灰岩	14.9	9.4	4.8	976.1	扁平楕円礫の両面に磨り・敲打痕、2側面に敲打痕
62-11	台石	SK07	5層	凝灰岩	16.8	18.2	(6.5)	2840.0	扁平円礫の1面に磨り、S-1
63-5	磨り石	SK08	覆土	安山岩	10.7	9.8	4.0	659.4	扁平礫のほぼ全面磨り
63-6	磨り+敲き	SK08	覆土	凝灰岩	7.2	6.2	2.5	136.8	扁平円礫の2面と周縁に敲打、1面に磨り
63-7	微細剥離片	SK12	覆土下層	珪質頁岩	4.2	2.0	1.0	9.4	縦長、片面2側縁加工、下端部に微細剥離痕
63-8	石核	SK14	覆土	珪質頁岩	5.1	3.8	2.6	33.1	分割された原礫から素材剥片剥ぎ取り
63-9	微細剥離片	SK16	覆土	珪質頁岩	4.3	1.6	1.5	8.1	縦長、1側縁に微細剥離痕
63-10	微細剥離片	SK21	1層	珪質頁岩	6.0	3.5	1.0	14.0	縦長、1側縁に微細剥離痕
63-16	磨り+敲き	SK22	覆土	安山岩	13.3	4.9	3.4	295.1	長楕円扁平礫の2面と上下端部に敲打・磨り
65-4	削器	SK30	覆土	珪質頁岩	7.5	4.7	1.7	29.7	縦長、片面加工、周縁部分的に刃部作出
65-5	削器	SK30	2層	珪質頁岩	5.9	9.3	1.9	72.0	縦長、片面加工、1側縁に刃部作出、S-1
65-6	削器	SK30	覆土	珪質頁岩	5.4	8.3	1.7	58.7	縦長、両面ほぼ周縁加工、1側縁に刃部作出
65-9	敲き石	SK31	3層	凝灰岩	9.3	8.0	3.3	277.8	扁平不定形礫の片面に敲打痕(凹み)
65-11	石皿	SK33	2層	凝灰岩	23.7	20.8	5.0	1262.4	破損、縁有り、1面に煤状物質付着

石器観察表 (3)

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
66-4	削器	SK36	覆土	珪質頁岩	4.0	3.0	1.0	13.5	矩形、下端部に刃部作出
66-5	石錘	SK36	覆土	礫岩	8.0	6.3	2.8	178.2	短軸加工
66-6	石錘	SK36	覆土	凝灰岩	6.3	5.2	1.9	71.3	短軸加工
66-7	磨り石	SK36	覆土	凝灰岩	11.3	8.7	2.9	351.5	破損した扁平礫の周縁と割れ口一部に磨り
66-8	磨り+敲き	SK36	覆土	砂岩	12.8	10.6	4.0	746.2	扁平不定形礫の2面に磨り・敲打痕
66-9	磨り+敲き	SK36	覆土	礫岩	12.7	6.9	4.0	335.4	扁平楕円礫の片面に磨り・敲打痕、1側面に磨り
66-10	磨り+敲き	SK36	覆土	凝灰岩	13.0	10.8	2.2	347.2	破損した扁平礫の片面に磨り・敲打痕、片面に磨り
66-11	台石	SK36	覆土	頁岩	18.1	19.8	2.8	1102.4	板状扁平礫の2面に磨り
66-12	磨り+敲き	SK37	1層	凝灰岩	9.3	9.8	5.5	592.6	破損した扁平礫の2面に磨り・敲打痕
66-16	石鏃	SK42	1層	珪質頁岩	3.1	1.3	0.4	1.0	平基有茎、両面加工、側縁一部破損
66-17	削器	SK42	覆土	珪質頁岩	3.4	2.0	0.8	6.0	縦長、片面加工、周縁に刃部作出
67-18	削器	SK48 (SI01SK03)	4層	珪質頁岩	5.0	3.5	1.3	15.0	縦長、両面1側縁加工
67-19	搔器	SK48 (SI01SK03)	覆土	珪質頁岩	5.3	4.2	1.0	15.7	矩形、1側縁・下端部、片面1側縁・下端部に微細剥離
67-20	敲き石	SK48 (SI01SK03)	覆土	凝灰岩	15.2	9.3	3.8	418.2	扁平な三角柱状礫3面に敲打
67-21	磨り石	SK48 (SI01SK03)	覆土	安山岩	8.2	7.5	6.9	582.1	円礫の2面に磨り
67-22	磨り+敲き	SK48 (SI01SK03)	覆土	凝灰岩	14.0	8.0	6.4	1048.7	楕円礫の4面に磨り・敲打痕
70-2	石錘	SP78	確認面	珪質頁岩	5.2	0.9	0.6	2.7	棒状、両端に光沢
70-3	削器	SP218	覆土	珪質頁岩	(1.8)	(3.6)	(0.4)	2.1	横長、両面側縁部加工、半周縁に刃部作出
70-9	搔器	SP232	覆土	珪質頁岩	5.0	2.5	1.1	7.9	縦長、下端部を加工
70-10	磨り石	SP237	覆土	安山岩	11.8	5.9	5.1	575.3	四角柱状礫の4面に磨り、上下端部に敲打痕
81-1	石鏃	西斜面	捨2層	黒曜石	1.7	1.5	0.2	0.4	I V-11、凹基無茎、両面加工
81-2	石鏃	西斜面	捨2層	珪質頁岩	2.2	1.3	0.3	0.8	I U-12、凹基無茎、両面加工
81-3	石鏃	西斜面	捨2層	黒曜石	2.5	1.6	0.2	0.6	I V-12、凹基無茎、両面加工
81-4	石鏃	西斜面	I層	珪質頁岩	(2.9)	1.7	0.5	1.5	I V-13、平基有茎、両面側縁部加工、先端部破損
81-5	石鏃	西斜面	I層	珪質頁岩	(2.7)	1.1	0.4	0.8	I W-13、平基有茎、両面加工、アスファルト付着
81-6	石鏃	西斜面	II層	珪質頁岩	(2.9)	1.4	0.4	1.0	I V-13、平基有茎、両面加工、アスファルト付着
81-7	石鏃	西斜面	捨1層	珪質頁岩	3.4	1.7	0.6	1.8	I Q-9、平基有茎、両面加工(片面側縁部のみ)
81-8	石鏃	西斜面	I層	珪質頁岩	(4.2)	1.7	0.6	2.5	I W-13、平基有茎、両面加工、先端部破損
81-9	石鏃	西斜面	捨2層	珪質頁岩	(3.9)	1.2	0.5	2.2	I V-12、平基有茎、両面側縁部加工、先端部・基部破損、アスファルト付着
81-10	石鏃	西斜面	捨1層	珪質頁岩	(3.9)	1.3	0.6	2.7	I Q-9、凸基有茎、両面側縁部加工、先端部・基部破損
81-11	石鏃	西斜面	捨1層	珪質頁岩	3.3	1.1	0.3	1.0	I V-11、凹基鏃?、両面加工
81-12	石匙	西斜面	捨1層	珪質頁岩	(5.0)	2.0	0.7	3.3	I S-10、縦形、両側縁部に微細剥離痕
81-13	石匙	西斜面	捨2層	珪質頁岩	4.0	5.4	1.0	14.8	I U-13、横形、両面周縁加工、アスファルト付着
81-14	石匙	西斜面	捨1層	珪質頁岩	4.1	(4.2)	(0.5)	5.3	I Q-8、横形、下端部刃部作出
81-15	石錘	西斜面	捨1層	珪質頁岩	5.0	4.3	1.8	26.2	I R-7、錐部加工、1側縁に微細剥離痕
81-16	石錘	西斜面	捨2層	珪質頁岩	4.2	1.4	0.6	2.7	I V-13、両面周縁加工
81-17	削器	西斜面	捨2層	珪質頁岩	3.6	1.4	0.7	2.9	I V-12、縦長、両面加工(片面側縁部のみ)、石錘の可能性有り
81-18	削器	西斜面	I層	珪質頁岩	10.7	5.4	1.7	79.8	I V-13、縦長、1側縁に刃部作出
81-19	削器	西斜面	捨1層	珪質頁岩	7.5	5.4	7.0	68.8	I U-10、縦長、1側縁～下端部にかけて刃部作出
81-20	削器	西斜面	捨1層	珪質頁岩	4.9	(7.0)	1.3	34.0	I Q-9、横長、下端部に刃部作出、両側縁に挟り
81-21	搔器	西斜面	捨2層	珪質頁岩	4.3	2.6	0.8	11.0	I T-32、縦長、片面下端部加工
81-22	搔器	西斜面	捨2層	珪質頁岩	(3.6)	2.0	0.9	4.6	I U-11、縦長、片面下端部加工
81-23	磨製石斧	西斜面	捨2層	緑色細粒岩凝灰岩	4.0	2.5	0.9	11.7	I T-11、円刃、2側縁の同位置に段を有する
81-24	磨製石斧	西斜面	捨2層	緑色細粒岩凝灰岩	5.9	3.4	1.1	35.9	I T-9、円刃
81-25	磨製石斧	西斜面	捨2層		11.9	5.0	3.0	296.7	I U-12、整形時の敲打痕残存、刃部に敲打痕
81-26	磨製石斧	西斜面	捨2層	輝緑岩	9.6	5.1	3.0	251.2	I U-13、偏刃
82-1	石錘	西斜面	捨2層	凝灰岩	8.4	5.9	2.2	126.8	I V-12、短軸加工
82-2	石錘	西斜面	捨2層	凝灰岩	10.6	6.8	3.4	292.6	I V-12、短軸加工
82-3	磨り石	西斜面	捨2層	礫岩	10.1	7.0	5.6	601.6	I U-12、扁平楕円礫のほぼ全面磨り
82-4	磨り石	西斜面	捨1層	安山岩	16.7	7.9	5.2	1023.6	I O-9、扁平長楕円礫の両面に磨り、1面にための擦痕
82-5	磨り石	西斜面	I層	凝灰岩	11.6	7.0	4.1	489.7	I T-11、扁平楕円礫の全面に磨り
82-6	磨り+敲き	西斜面	I層	砂岩	15.2	5.0	2.3	258.7	I V-12、棒状扁平礫の1面に磨り・敲打痕、1面に磨り
82-7	磨り+敲き	西斜面	I層	安山岩	5.6	5.2	4.2	154.0	I V-12、扁平円礫の2面に磨り・敲打痕
82-8	磨り+敲き	西斜面	I層	凝灰岩	8.9	4.9	2.7	137.8	I V-12、扁平楕円礫周縁に敲打、全面磨り
82-9	磨り+敲き	西斜面	I層	凝灰岩	(14.5)	8.1	4.6	(754.0)	I U-13、扁平楕円礫の両面に磨りと敲打
82-10	磨り+敲き	西斜面	III層	安山岩	16.2	5.0	3.4	373.0	I T-12、棒状礫1面に敲打痕、ほぼ全面に磨り
82-11	磨り+敲き	西斜面	捨1層	凝灰岩	10.3	9.5	7.0	813.9	I Q-9、扁平円礫の両面に磨り・敲打痕
82-12	磨り+敲き	西斜面	I層	緑色凝灰岩	12.3	6.4	3.0	274.9	I U-13、三角柱状楕円礫の片面に磨りと敲打
83-1	磨り+敲き	西斜面	捨2層	緑色凝灰岩	11.8	9.2	3.3	392.6	I U-12、扁平楕円礫の2面に磨りと敲打
83-2	磨り+敲き	西斜面	I層	凝灰岩	14.3	7.6	4.4	677.9	I V-13、扁平楕円礫の4面に磨り、2面に敲打
83-3	磨り+敲き	西斜面	I層	緑色凝灰岩	10.6	8.9	5.1	610.5	I V-12、扁平楕円礫の2面に磨りと敲打
83-4	磨り+敲き	西斜面	I層	凝灰岩	9.9	7.9	6.8	648.2	I V-12、楕円礫の1面と周縁に敲打、1面に磨り
83-5	磨り+敲き	西斜面	I層	凝灰岩	13.0	7.4	5.3	648.8	I V-13、扁平楕円礫の2面に磨りと敲打
83-6	磨り+敲き	西斜面	捨2層	緑色凝灰岩	10.3	9.2	6.3	637.9	I V-12、扁平円礫の2面に磨り・敲打痕
83-7	磨り+敲き	西斜面	I層	凝灰岩	11.8	9.2	3.3	392.6	I U-12、扁平楕円礫の2面に磨りと敲打
83-8	磨り+敲き	西斜面	I層	凝灰岩	(12.5)	8.6	(4.4)	(467.3)	I V-13、扁平礫の2面に磨りと敲打
84-1	台石	西斜面	捨1層	砂岩	25.0	8.9	4.9	1377.8	I P-9、扁平長楕円礫の両面に磨り・敲打痕
84-2	台石	西斜面	捨1層	凝灰岩	33.4	21.9	5.4	5340.0	I T-8、大型扁平不定形礫の片面に磨り・敲打痕
84-3	台石	西斜面	捨1層	安山岩	62.4	24.3	5.2	6.1	I V-12、扁平楕円礫の2面に磨り・敲打痕
84-4	台石	西斜面	捨2層	砂岩	17.4	10.6	3.1	945.2	I V-12、扁平楕円礫の2面に磨り
85-1	石鏃	南斜面	沢2層	珪質頁岩	2.2	1.3	0.3	0.5	I R-30、凹基無茎、両面加工、アスファルト付着
85-2	石鏃	南斜面	沢2層	珪質頁岩	2.3	1.5	0.3	0.7	I R-30、凸基有茎、両面加工
85-3	石鏃	南斜面	沢2層	珪質頁岩	(2.6)	1.2	0.4	0.9	I Q-30、平基有茎、両面加工、先端部破損
85-4	石鏃	南斜面	沢2層	珪質頁岩	(3.4)	1.3	0.5	1.4	I R-31、平基有茎、両面加工、基部破損
85-5	石錘	南斜面	沢2層	珪質頁岩	(3.9)	2.3	1.0	6.0	I R-30、縦長、両面2側縁～下端部加工
85-6	削器	南斜面	沢2層	珪質頁岩	4.2	2.6	0.9	13.3	I Q-30、縦長、両面加工(片面は周縁のみ)、1側縁に刃部作出
85-7	削器	南斜面	沢2層	珪質頁岩	5.0	3.4	0.8	15.8	I R-30、縦長、1側縁～下端部にかけて刃部作出
85-8	削器	南斜面	沢2層	珪質頁岩	5.7	4.8	1.3	20.9	I Q-29、縦長、両側縁～下端部にかけて刃部作出
85-9	搔器	南斜面	沢2層	珪質頁岩	5.9	2.6	1.1	17.5	I R-30、縦長、片面下端部加工
85-10	搔器	南斜面	沢2層	珪質頁岩	8.2	4.1	1.5	74.0	I Q-29、縦長、片面下端部加工、1側縁に刃部作出

石器観察表(4)

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
85-11	石錘	南斜面	沢2層	緑色凝灰岩	6.8	4.8	1.4	66.3	I R-30、短軸加工
85-12	石錘	南斜面	沢2層	凝灰岩	9.8	7.3	2.0	151.8	I R-30、短軸加工
85-13	石錘	南斜面	沢2層	凝灰岩	10.0	7.6	3.1	308.3	I R-30、短軸加工 敲き石からの転用
85-14	磨り石	南斜面	沢2層	凝灰岩	15.3	5.2	3.4	370.3	I R-29、扁平楕円礫の1面に磨り
85-15	磨り石	南斜面	沢2層	凝灰岩	8.8	6.9	2.2	123.3	I R-30、扁平不定形礫の両面に磨り
85-16	磨り石	南斜面	沢2層	緑色凝灰岩	9.7	9.3	7.2	894.2	I R-30、扁平円礫の3面に磨り
85-17	磨り石	南斜面	カクラン	凝灰岩	12.9	9.0	6.1	1044.1	I S-30、扁平楕円礫の両面に磨り
85-18	磨り石	南斜面	沢2層	安山岩	10.0	8.9	5.5	663.0	I R-30、扁平円礫のほぼ全面に磨り
86-1	磨り+敲き	南斜面	沢2層	安山岩	6.1	6.2	5.2	293.8	I Q-29、球状礫の片面に磨り・敲打痕、片面に磨り
86-2	敲き石	南斜面	沢2層	凝灰岩	10.1	6.4	3.5	231.8	I R-30、扁平不定形礫の4面に敲打痕
86-3	磨り+敲き	南斜面	沢2層	凝灰岩	15.3	4.6	2.6	256.6	I R-30、扁平楕円礫の2面に磨りと敲打
86-4	磨り+敲き	南斜面	沢2層	凝灰岩	18.0	8.5	3.5	703.0	I R-29、扁平不定形礫の両面に磨り・敲打痕、上下端部に敲打痕
86-5	磨り+敲き	南斜面	沢2層	砂岩	(10.4)	(7.7)	(3.8)	315.5	I R-29、破損、扁平不定形礫の4面と上端部に敲打痕、3面に磨り
86-6	磨り+敲き	南斜面	沢2層	凝灰岩	10.0	7.3	5.4	540.8	I R-30、扁平楕円礫の両面に磨り・敲打痕、上下端部に敲打痕
86-7	磨り+敲き	南斜面	沢2層	緑色凝灰岩	13.1	5.1	4.6	405.3	I R-29、楕円礫の4面に磨りと敲打
86-8	磨り+敲き	南斜面	沢2層	軽石凝灰岩	10.2	6.6	3.9	269.9	I R-29、扁平不定形礫の3面に磨り・敲打痕
86-9	磨り+敲き	南斜面	沢2層	安山岩	(7.5)	6.6	4.0	(231.7)	I Q-30、破損後の円筒状礫の2面に磨りと敲打
86-10	磨り+敲き	南斜面	沢2層	凝灰岩	11.2	11.5	8.5	1239.3	I R-28、扁平円礫のほぼ全面に磨り・敲打痕
87-1	石鏃	その他	攪乱	石英	(1.9)	1.4	0.2	0.4	II I-28、凹基無茎、両面加工、先端部破損
87-2	石鏃	その他	攪乱	珪質頁岩	2.8	(1.5)	0.4	0.9	II I-28、凹基無茎、両面加工、基部一部破損
87-3	石鏃	その他	攪乱	珪質頁岩	(3.4)	1.4	0.4	(1.6)	II I-28、凹基無茎、両面加工、先端部・基部破損、火はじけ痕
87-4	石鏃	その他	I層	珪質頁岩	(2.6)	1.0	0.4	0.8	I R-27、凸基有茎、両面加工、先端部破損
87-5	石錐	その他	攪乱	珪質頁岩	4.2	2.2	0.6	4.1	II H・G-28・29(旧SX01)、縦長、両面周縁加工
87-6	石錐	その他	I層	珪質頁岩	4.1	1.8	0.7	3.0	I Q-09、縦長、片面両側縁～下端部加工
87-7	石錐	その他	攪乱	珪質頁岩	6.1	3.9	1.2	16.1	II H・G-28・29(旧SX01)、縦長、片面両側縁～下端部加工
87-8	削器	その他	攪乱	珪質頁岩	3.4	1.9	0.7	4.1	II H・G-28・29(旧SX01)、縦長、両面周縁加工
87-9	削器	その他	一	珪質頁岩	3.8	(1.8)	0.4	2.3	I R-21、縦長、両面周縁加工
87-10	削器	その他	I層	珪質頁岩	3.0	3.5	0.5	3.7	I P-23、矩形、片面下端部のみ刃部作出
87-11	搔器	その他	攪乱	珪質頁岩	3.8	4.1	1.2	15.4	II I-28、矩形、片面周縁加工
87-12	削器	その他	攪乱	珪質頁岩	9.1	3.2	1.8	39.4	II I-28、縦長、1側縁に刃部作出
87-13	搔器	その他	表土	珪質頁岩	7.7	3.3	1.7	27.0	II C-32、縦長、下端部加工、両側縁に微細剥離痕
87-14	搔器	その他	一括	珪質頁岩	3.6	2.7	0.8	6.7	II H・G-28・29(旧SX01)、縦長、片面下端部のみ加工
87-15	磨製石斧	その他	I層	緑色細粒岩凝灰岩	3.8	2.4	0.7	10.2	グリッド不明、円刃
87-16	磨製石斧	その他	攪乱	粘板岩	11.7	3.6	1.7	121.1	グリッド不明、両面に敲打痕残存、S-1
87-17	石錘	その他	I層	緑色凝灰岩	11.0	6.9	2.7	248.0	I R-8、短軸加工、磨り+敲き石から転用
87-18	石錘	その他	I層	凝灰岩	7.5	5.8	2.3	132.6	I P-9、短軸加工
87-19	磨り石	その他	捨1層	砂岩	11.5	6.5	2.0	184.2	I P-9、扁平楕円礫の1面に磨り
87-20	磨り石	その他	攪乱	粗粒玄武岩	12.0	7.9	4.7	617.9	II I-28、扁平礫片の2面に磨り
87-21	磨り石	その他	攪乱	ひん岩	10.6	8.8	7.3	969.5	II H・G-28・29(旧SX01)、扁平楕円礫の4面に磨り
88-1	敲き石	その他	攪乱	珪質頁岩	8.7	6.0	2.7	112.4	II H・G-28・29(旧SX01)、剥片素材、稜部に敲打痕
88-2	磨り+敲き	その他	覆土	緑色凝灰岩	8.7	7.7	3.0	256.0	II H・G-28・29、扁平不定形礫の両面に磨り・敲打痕
88-3	敲き石	その他	表層	砂岩	10.7	7.5	4.2	378.8	II J-28、扁平楕円礫の両面と下端部に敲打痕
88-4	磨り+敲き	その他	攪乱	凝灰岩	(10.2)	(6.8)	(3.1)	(231.9)	II H・G-28・29(旧SX01)、扁平礫の3面に敲打、2面に磨り
88-5	磨り+敲き	その他	捨1層	砂岩	11.5	6.7	4.5	420.0	I P-9、扁平楕円礫の2面と上下端部に磨りと敲打
88-6	磨り+敲き	その他	I層	凝灰岩	14.1	3.6	3.1	200.0	I T-23、棒状礫3面に磨り・敲打痕
88-7	台石	その他	攪乱	流紋岩	(7.4)	(5.7)	(4.3)	(249.0)	II I-28、扁平礫片の片面に磨り、被熱

土製品観察表

図版番号	器種	地区	層位	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
16-6	土偶	SI01②エリア	覆土	胴部・腕部	(6.0)	(5.7)	1.8	(39.0)	刺突列、ボタン状貼付、貫通孔
16-7	土偶	SI01⑥エリア	覆土	腕部	(8.1)	(10.1)	(2.1)	(135.7)	刺突列、貫通孔
16-9	円盤状	SI01⑤エリア	覆土	半完形	(5.0)	(3.0)	(0.8)	(13.5)	
16-10	円盤状	SI01⑤エリア	覆土	完形	3.2	3.4	0.8	9.1	
16-11	円盤状	SI01⑤エリア	覆土	完形	3.7	4.1	0.8	11.4	網代痕
16-12	円盤状	SI01⑤エリア	覆土	完形	4.0	4.3	0.7	14.0	
89-1	土偶	西斜面	捨2	頭部	(6.3)	(4.0)	(5.1)	(83.0)	I U-11、刺突列、口(刺突)、十字の貫通孔
89-2	土偶	西斜面	捨2	胴・腕・脚部	(14.2)	(9.6)	(2.3)	(172.5)	I U-13、刺突列、ボタン状貼付、貫通孔
89-7	土偶	その他	排土	頭部	(6.3)	(4.0)	(5.5)	(75.5)	刺突列、顔面十字の刺突列、十字の貫通孔、赤色塗膜付着

石製品観察表

図版番号	器種	地区	層位	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
16-8	線刻石製品	SI01③エリア	床面直上	凝灰岩	4.9	4.7	1.0	18.1	鳥形?表面研磨、両面線刻、未貫通孔
67-23	円盤状	SK48(SI01内土坑3)	覆土	安山岩	4.4	4.6	0.9	31.5	周縁打欠
89-3	三角形岩版	西斜面	捨2	凝灰岩	6.6	4.5	1.1	(35.4)	I V-12、表面研磨、敲打痕
89-4	石剣	西斜面	捨1	粘板岩	(8.2)	(2.9)	(1.7)	(60.6)	I N-9、表面研磨、敲打痕
89-5	三角形岩版	南斜面	沢2	凝灰岩	5.1	4.5	0.6	16.6	I R-24、表面研磨、敲打痕
89-8	円盤状	その他	覆土	凝灰岩	4.3	4.5	1.3	27.5	II H・G-28・29(旧SX01)、周縁打欠
89-9	有孔石製品	その他	III層	粘板岩	(7.9)	(2.7)	(1.6)	(50.5)	I T-15、表面研磨、貫通孔

銭貨観察表

図版番号	器種	地区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
89-6	寛永通宝	西斜面	捨1層	2.8	2.8	0.1	4.1	I R-9、鉄四文銭



調査区遠景（東から）



調査区現況（南から）



第1号竪穴住居跡作業状況（南から）

写真1 調査区遠景・現況・作業状況①



西斜面作業状況（東から）

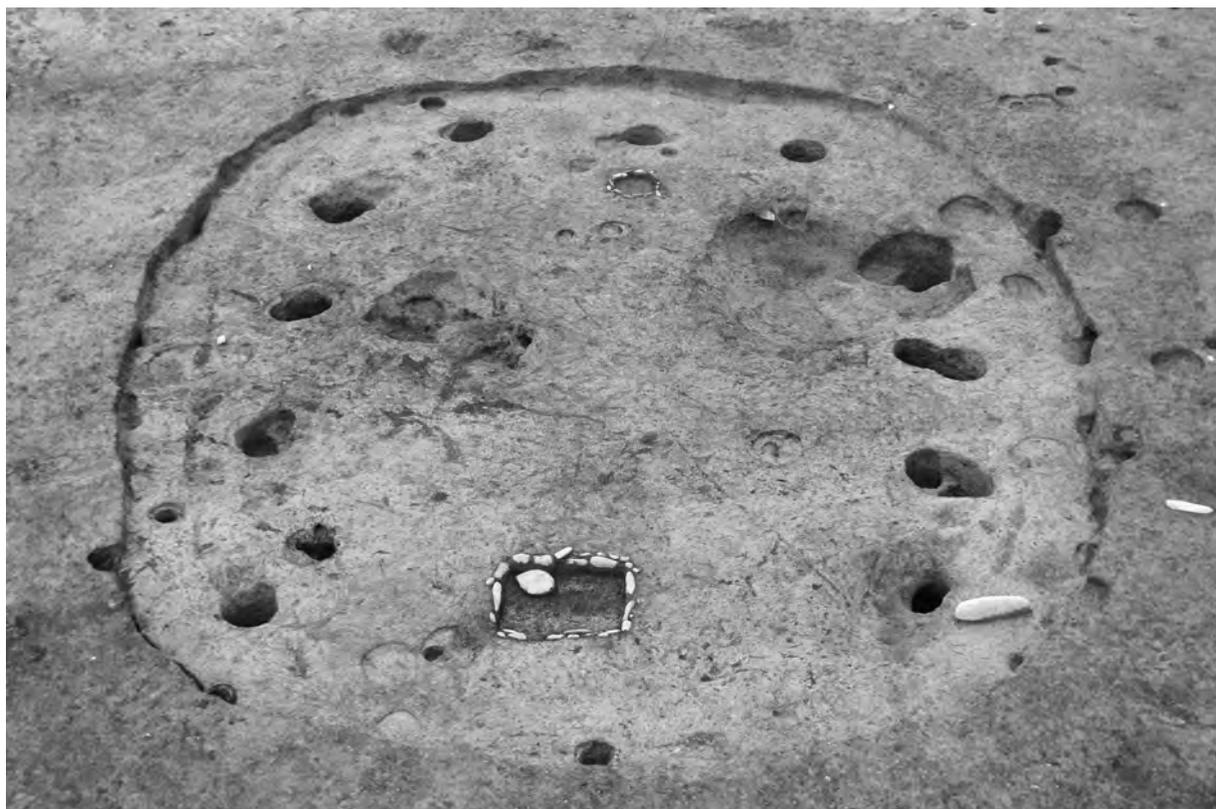


基本層序①（東から）

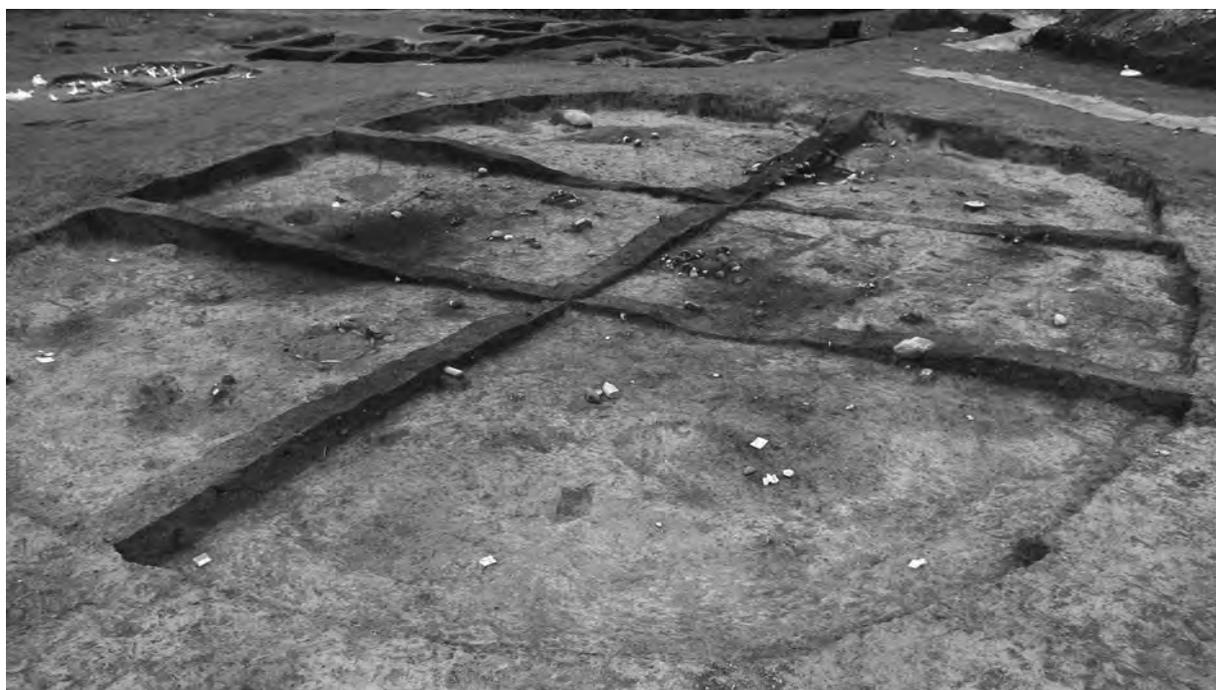


基本層序②（東から）

写真2 作業状況②・基本層序



第1号竪穴住居跡完掘（東から）



第1号竪穴住居跡土層（南西から）

写真3 竪穴住居跡（1）



第1号竖穴住居跡炉1完掘（東から）



第1号竖穴住居跡炉1土層（南から）



第1号竖穴住居跡炉2完掘（南から）



第1号竖穴住居跡炉2土層（南から）



第1号竖穴住居跡炉1掘方完掘（手前）炉3土層（奥）（北東から）

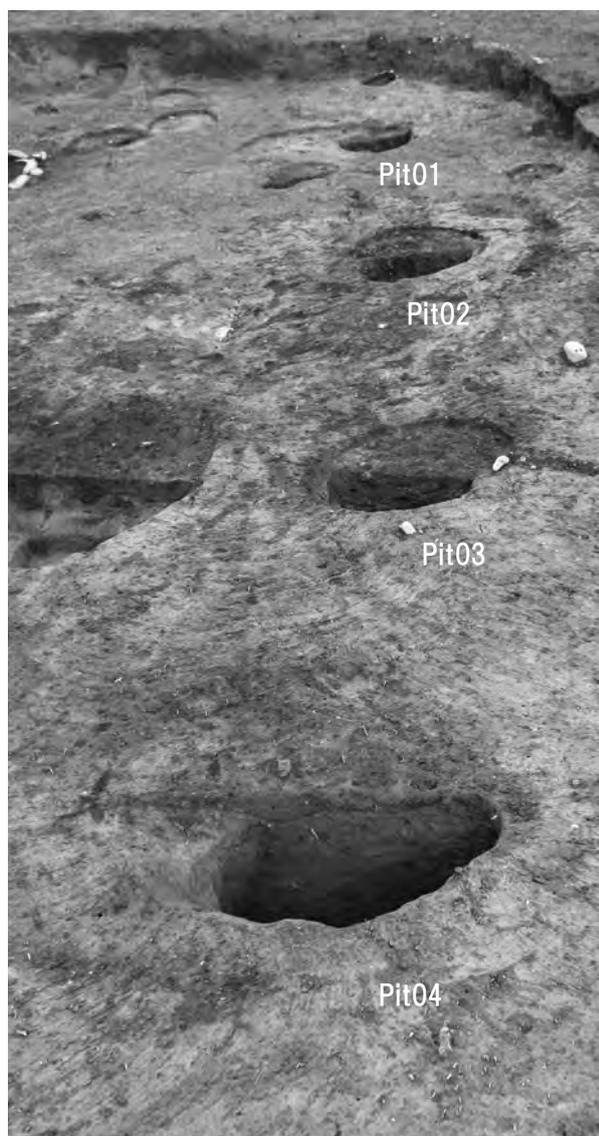
写真4 竖穴住居跡（2）



第1号竪穴住居跡炉3完掘（西から）



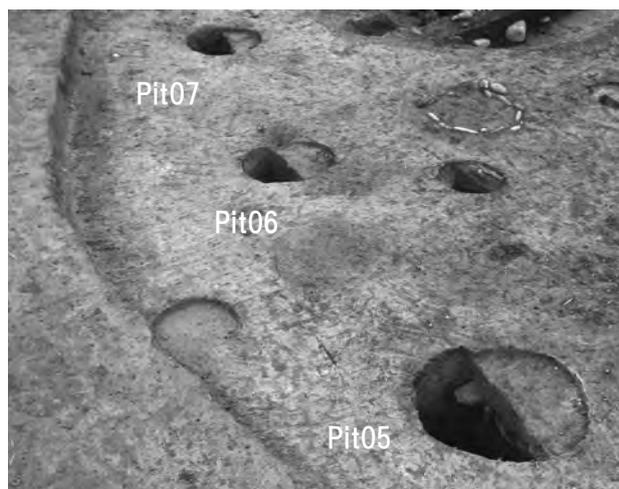
第1号竪穴住居跡焼土1断割土層（南から）



第1号竪穴住居跡 Pit01 ~ 04（西から）

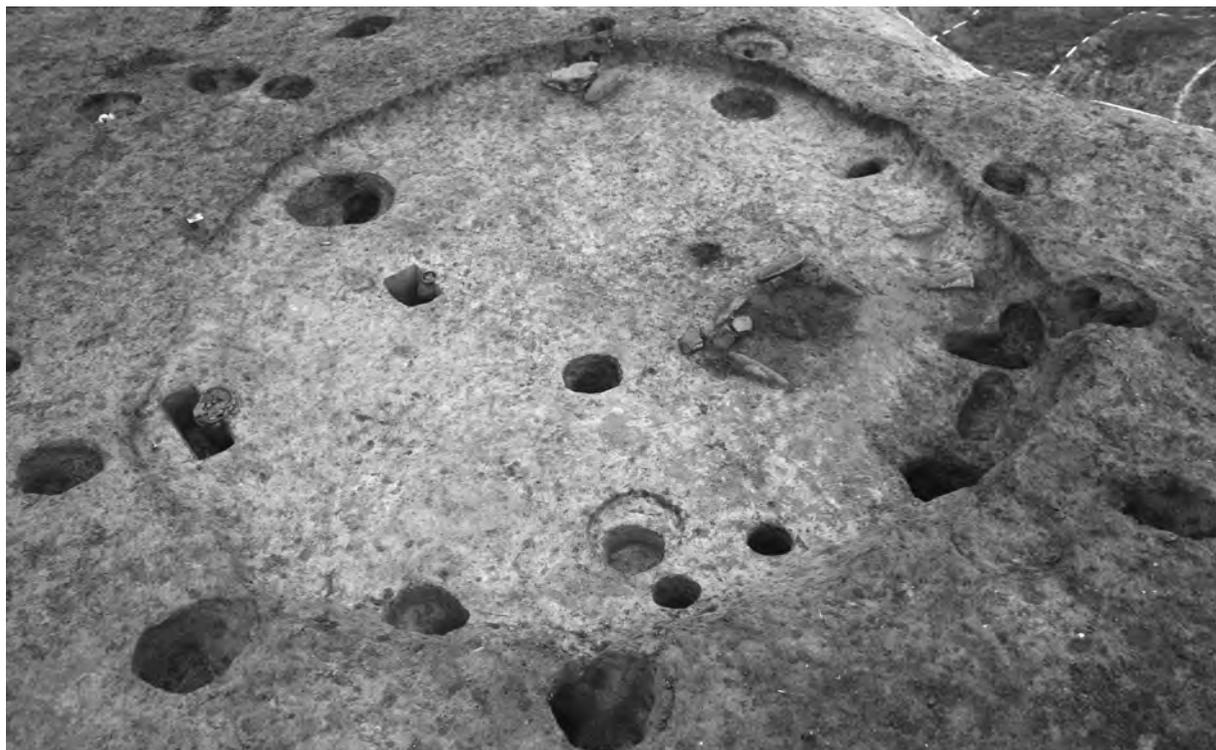


第1号竪穴住居跡焼土2断割土層（南から）



第1号竪穴住居跡 Pit05 ~ 07（南から）

写真5 竪穴住居跡（3）



第2号竪穴住居跡完掘（南から）



第2号竪穴住居跡遺物出土状況（西から）

写真6 竪穴住居跡（4）



第2号竪穴住居跡炉（東から）



第2号竪穴住居跡埋設土器1(左)・2(南西から)



第3号竪穴住居跡完掘（南西から）



第3号竪穴住居跡炉（東から）



第3号竪穴住居跡埋設土器（南から）

写真7 竪穴住居跡（5）



第4号竖穴住居跡完掘（南東から）



第5号竖穴住居跡完掘（東から）

写真8 竖穴住居跡（6）



第6号竪穴住居跡完掘（南から）



第4号竪穴住居跡炉（南東から）



第5号竪穴住居跡埋設土器（南西から）



第6号竪穴住居跡炉（南から）



第6号竪穴住居跡埋設土器1（南西から）

写真9 竪穴住居跡（7）



第7号竖穴住居跡完掘（南西から）



第8号竖穴住居跡C完掘（南から）

写真10 竖穴住居跡（8）



第8号竪穴住居跡A・B土層（南から）



第7号竪穴住居跡配石土層（南西から）



第8号竪穴住居跡B炉（西から）



第8号竪穴住居跡C配石土層（東から）

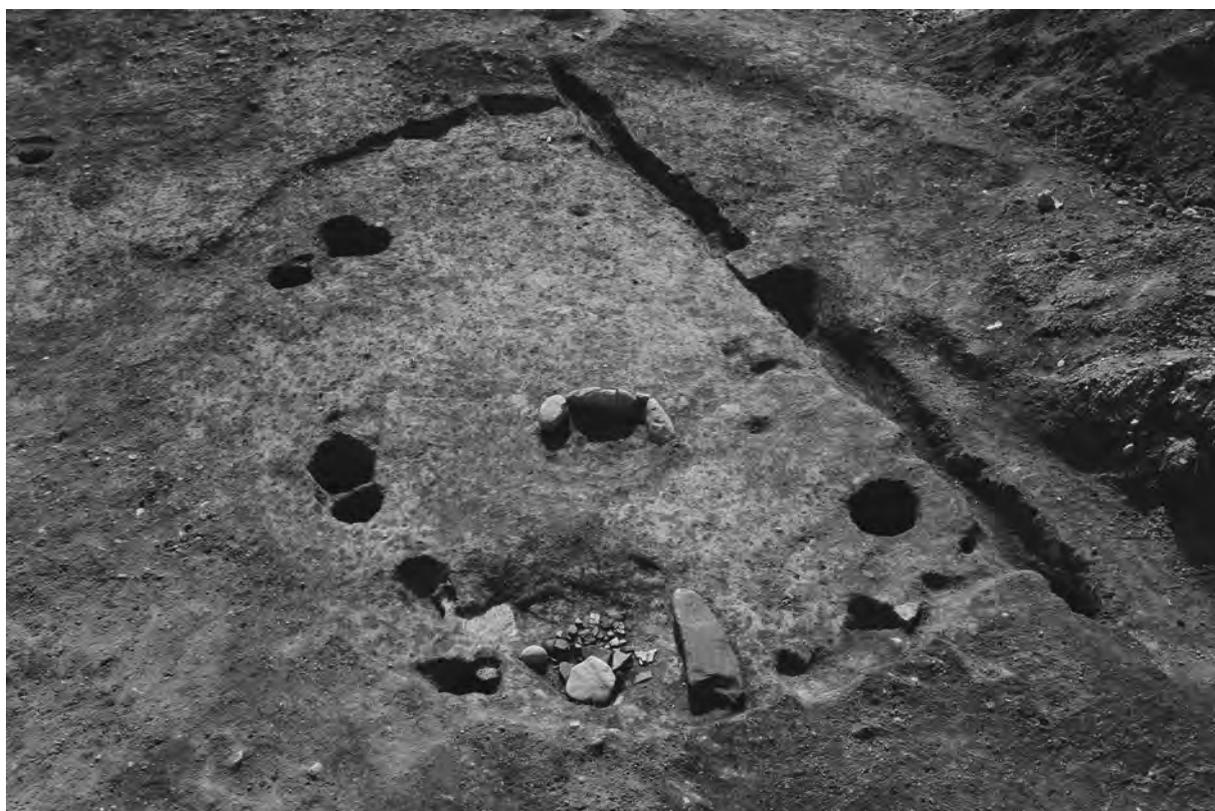


第8号竪穴住居跡C炉完掘（東から）

写真11 竪穴住居跡（9）



第9号竖穴住居跡完掘（南から）



第10号竖穴住居跡完掘（東から）

写真12 竖穴住居跡（10）



第11号竖穴住居跡完掘（南東から）



第9号竖穴住居跡炉土層（南から）



第10号竖穴住居跡炉土層（南から）

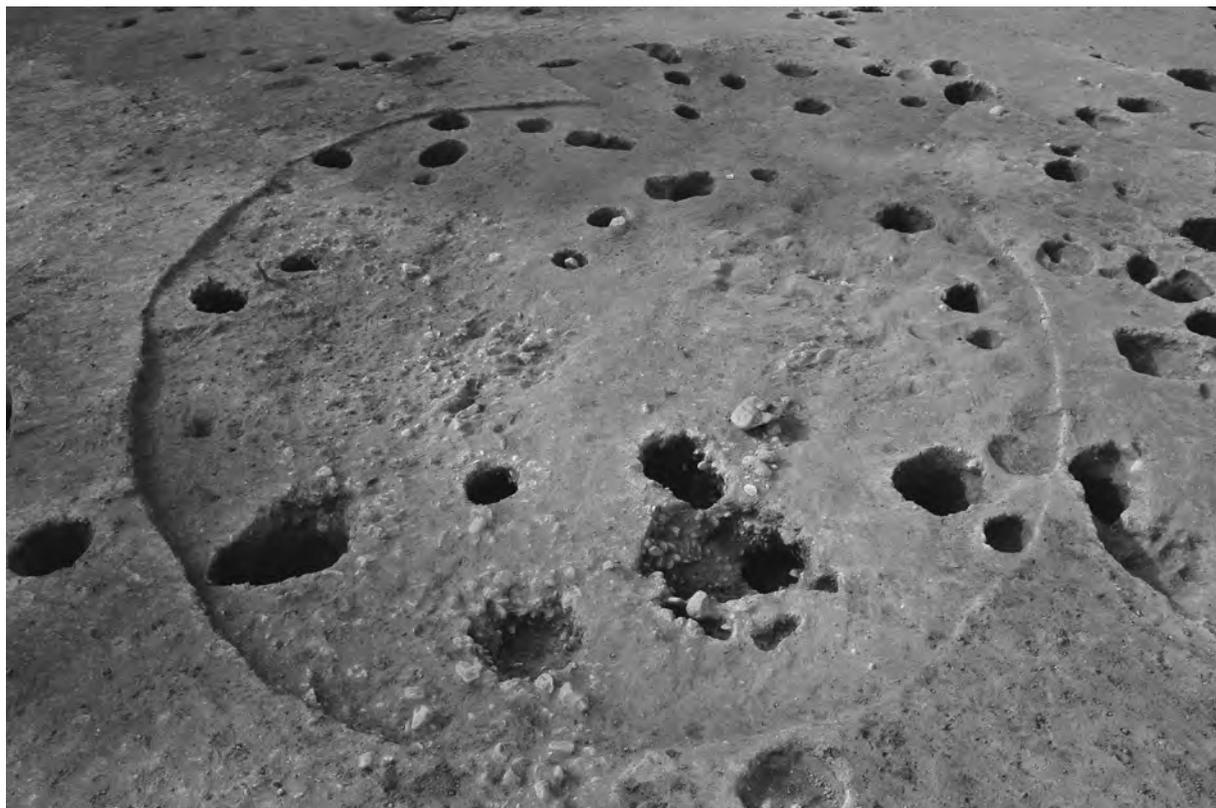


第11号竖穴住居跡炉土層（北東から）



第11号竖穴住居跡炉（掘込部）土層（北西から）

写真13 竖穴住居跡（11）



第12・26号（奥） 竪穴住居跡完掘（南から）



第13号竪穴住居跡完掘（南から）

写真14 竪穴住居跡（12）



第15・16号竪穴住居跡完掘（東から）



第12号竪穴住居跡付帯施設土層（南東から）



第13号竪穴住居跡炉土層（南西から）



第15・16号竪穴住居跡炉1土層（南東から）



第15・16号竪穴住居跡炉5完掘（南西から）

写真15 竪穴住居跡（13）



第17号竪穴住居跡完掘（南から）



第18号竪穴住居跡完掘（北から）

写真16 竪穴住居跡（14）



第19号竪穴住居跡土層（南から）



第20号竪穴住居跡完掘（北東から）

写真17 竪穴住居跡（15）



第22（奥）・24号竪穴住居跡完掘（南から）



第25・11号（奥）竪穴住居跡完掘（北から）

写真18 竪穴住居跡（16）



第17号竪穴住居跡炉土層（南西から）



第20号竪穴住居跡炉土層（南から）



第21号竪穴住居跡炉検出（南東から）



第21号竪穴住居跡埋設土器1（東から）



第23号竪穴住居跡炉検出（東から）



第24号竪穴住居跡埋設土器（南から）

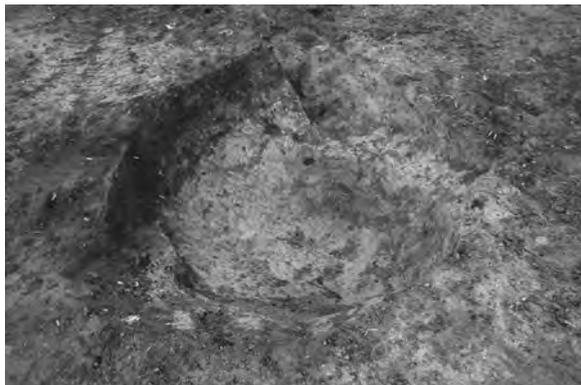


第25号竪穴住居跡埋設土器土層（南から）



第25号竪穴住居跡Pit01完掘（南から）

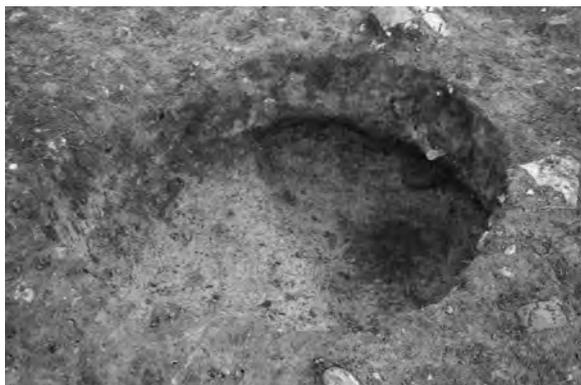
写真19 竪穴住居跡（17）



第1号土坑完掘 (南から)



第1号土坑土層 (南から)



第2号土坑完掘 (南西から)



第2号土坑土層 (南西から)



第4号土坑完掘 (南から)



第4号土坑土層 (南から)



第5号土坑完掘 (西から)



第5号土坑土層 (西から)

写真20 土坑 (1)



第6号土坑完掘（東から）



第6号土坑土層（東から）



第7号土坑遺物出土状況（南から）



第7号土坑完掘（南から）



第7号土坑土層（南から）

写真21 土坑（2）



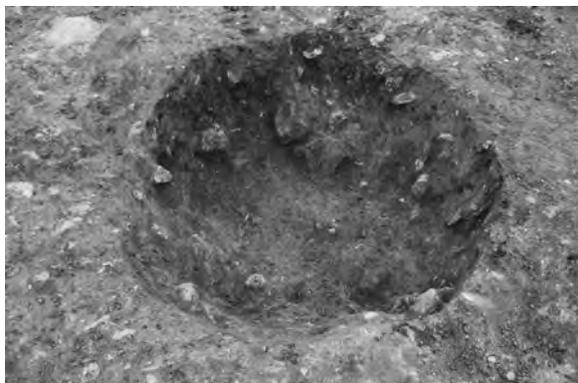
第8号土坑遺物出土状況（西から）



第8号土坑完掘（南から）



第8号土坑土層（南から）

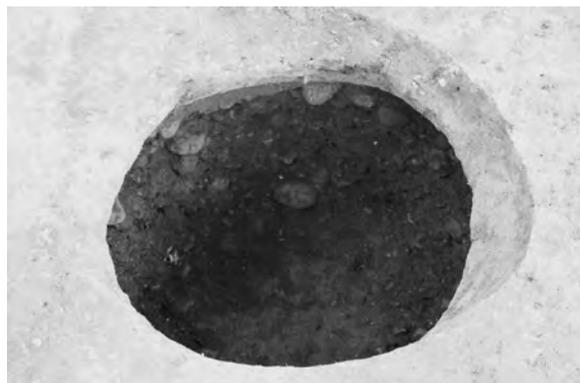


第10号土坑完掘（南から）



第10号土坑土層（南から）

写真22 土坑（3）



第11号土坑完掘（南から）



第11号土坑土層（南から）



第12号土坑完掘（南から）



第12号土坑土層（南から）



第13号土坑完掘（南から）



第13号土坑土層（南から）

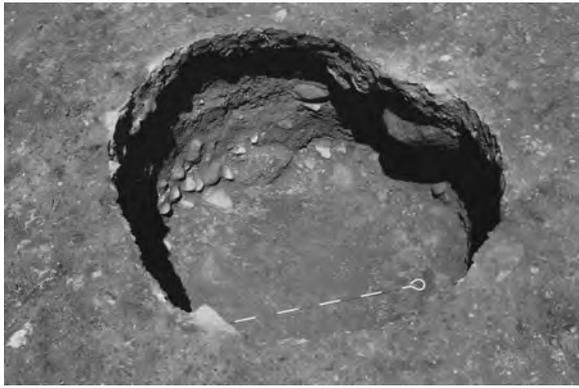


第14号土坑完掘（南西から）



第14号土坑土層（南西から）

写真23 土坑（4）



第15号土坑完掘 (南から)



第15号土坑土層 (南から)



第16号土坑完掘 (南から)



第16号土坑土層 (南から)



第17号土坑完掘 (南から)



第17号土坑土層 (南から)



第18号土坑完掘 (西から)

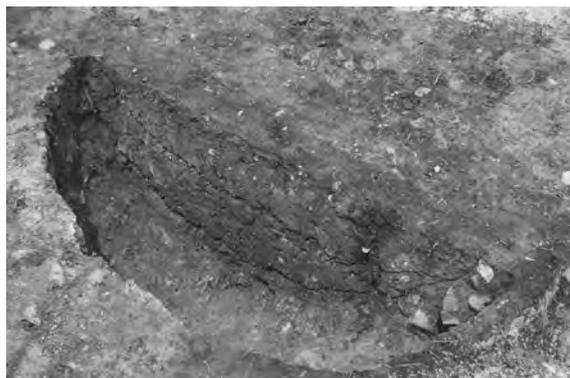


第18号土坑土層 (西から)

写真24 土坑 (5)



第19号土坑完掘（南西から）



第19号土坑土層（南西から）



第20号土坑完掘（南から）



第20号土坑土層（南から）



第21号土坑遺物出土状況（北から）

写真25 土坑（6）



第21号土坑土層（北から）



第22号土坑土層（南から）



第22号土坑遺物出土状況（南西から）



第23号土坑完掘（南から）



第23号土坑土層（南から）

写真26 土坑（7）



第24号土坑遺物出土状況（西から）



第24号土坑完掘（南から）



第24号土坑上端完掘（南から）



第25号土坑完掘（南から）



第25号土坑土層（南から）

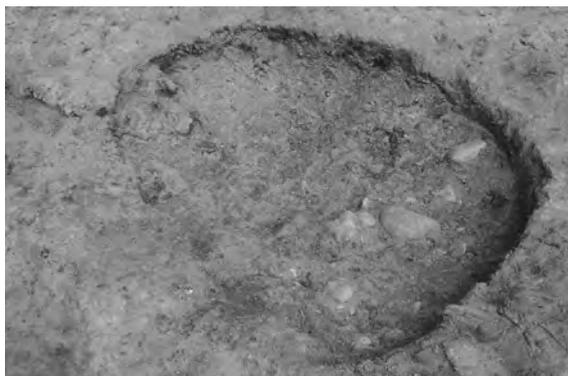
写真27 土坑（8）



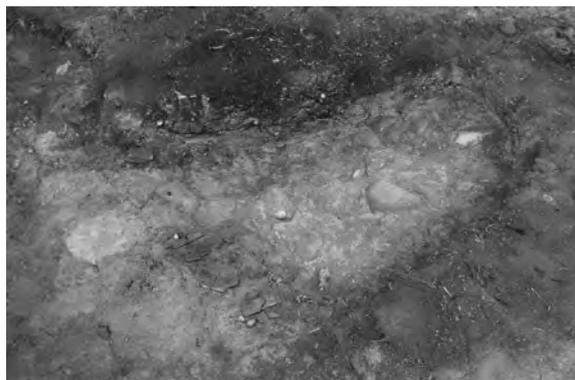
第26号土坑完掘 (南西から)



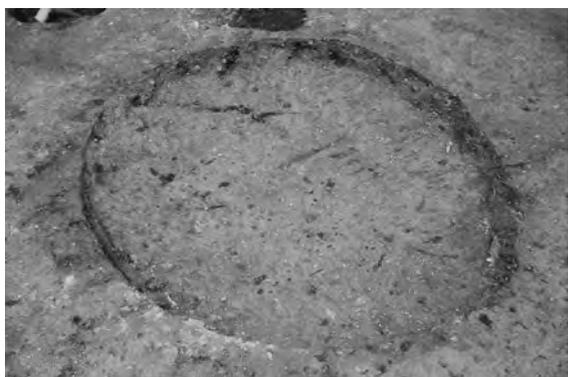
第26号土坑土層 (南西から)



第27号土坑完掘 (南東から)



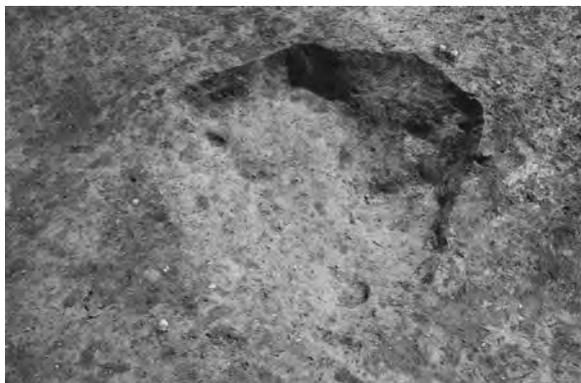
第27号土坑土層 (南東から)



第28号土坑完掘 (南東から)



第28号土坑土層 (南東から)



第29号土坑完掘 (北から)



第29号土坑土層 (北から)

写真28 土坑 (9)



第30号土坑土層（北から）



第30号土坑埋設土器土層（東から）



第30号土坑遺物出土状況（南から）



第31号土坑完掘（南から）



第31号土坑土層（南から）

写真29 土坑（10）



第32号土坑完掘（南から）



第32号土坑土層（南から）



第33号土坑遺物出土状況（東から）



第33号土坑土層（東から）



第33号土坑完掘（東から）

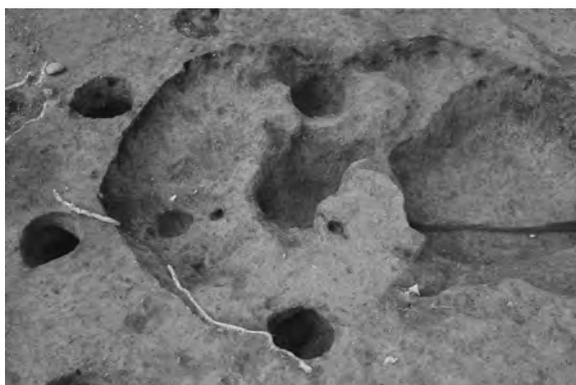
写真30 土坑（11）



第34号土坑土層（東から）



第35号土坑土層（北から）



第36号土坑完掘（南から）



第36号土坑土層（南西から）



第39号土坑完掘（北から）



第39号土坑土層（北から）



第40号土坑礫出土状況（南西から）



第40号土坑土層（南西から）

写真31 土坑（12）



第41号土坑完掘 (南から)



第41号土坑土層 (北から)



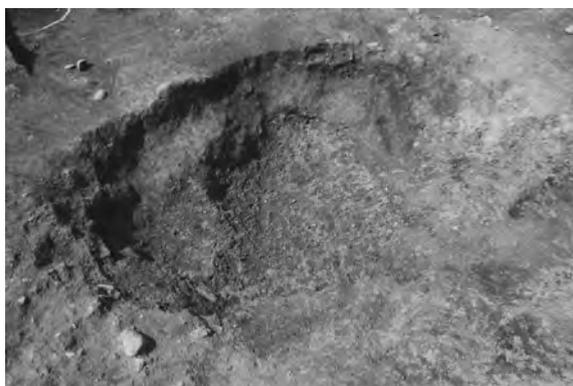
第42号土坑完掘 (南から)



第42号土坑土層 (南から)



第43号土坑土層 (南から)



第44号土坑完掘 (南から)



第44号土坑土層 (南東から)



第45号土坑完掘 (西から)

写真32 土坑 (13)



第46号土坑土層（西から）



第47号土坑土層（南から）



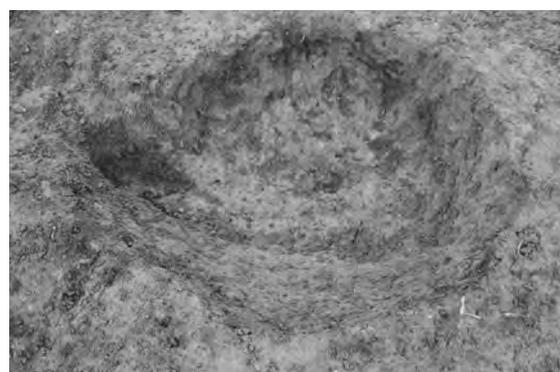
第48号土坑完掘（西から）



第48号土坑土層（北東から）



第1号配石遺構断割土層（南から）



第1号配石遺構完掘（南から）



第1号土器埋設遺構検出状況（東から）



第1号土器埋設遺構断割土層（東から）

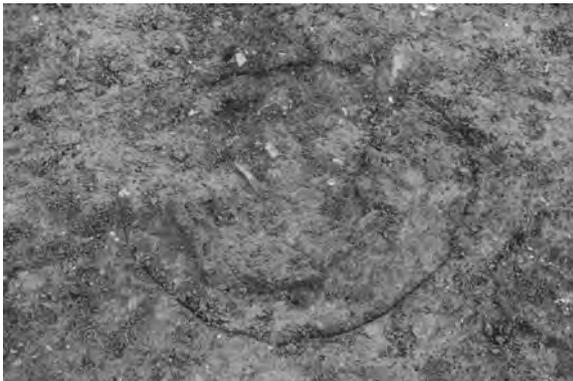
写真33 土坑（14）・その他の遺構（1）



第2号土器埋設遺構検出状況（南西から）



第2号土器埋設遺構断割土層（南西から）



第3号土器埋設遺構検出状況（北東から）



第3号土器埋設遺構断割土層（北東から）



第1号焼土跡検出状況（西から）



第1号小ピット群完掘（南から）

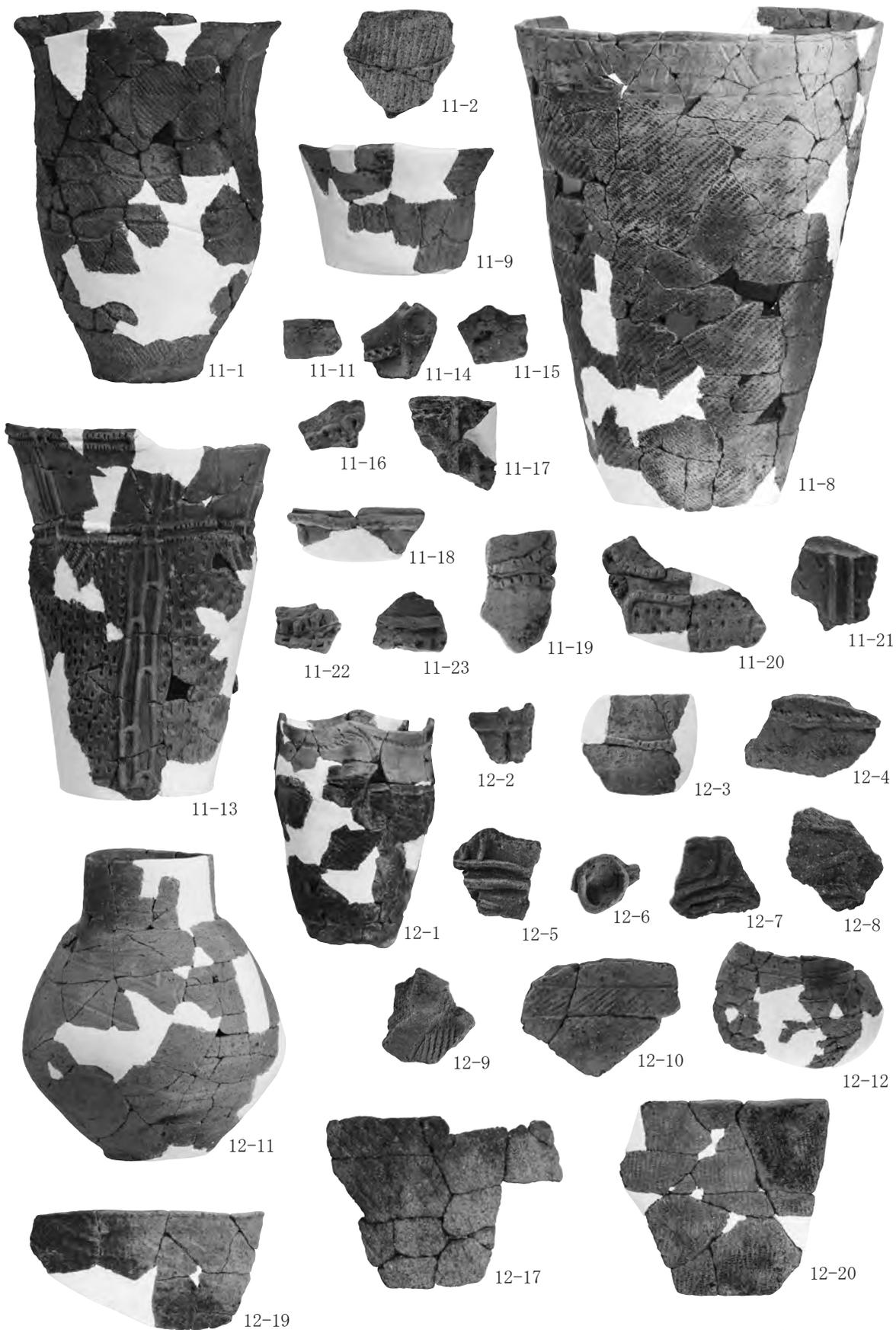


第4号小ピット群完掘（南から）



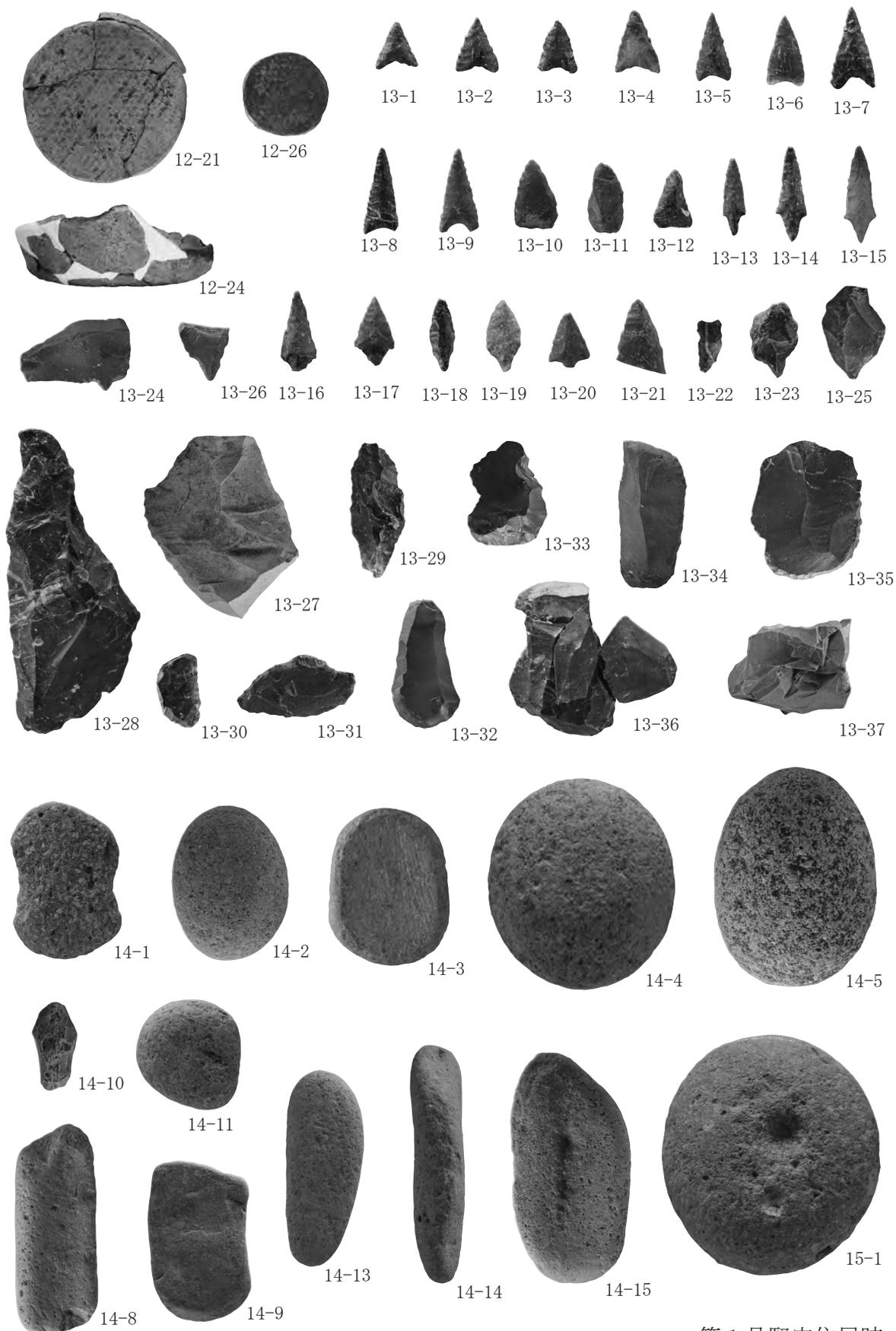
第5号小ピット群完掘（南から）

写真34 その他の遺構（2）



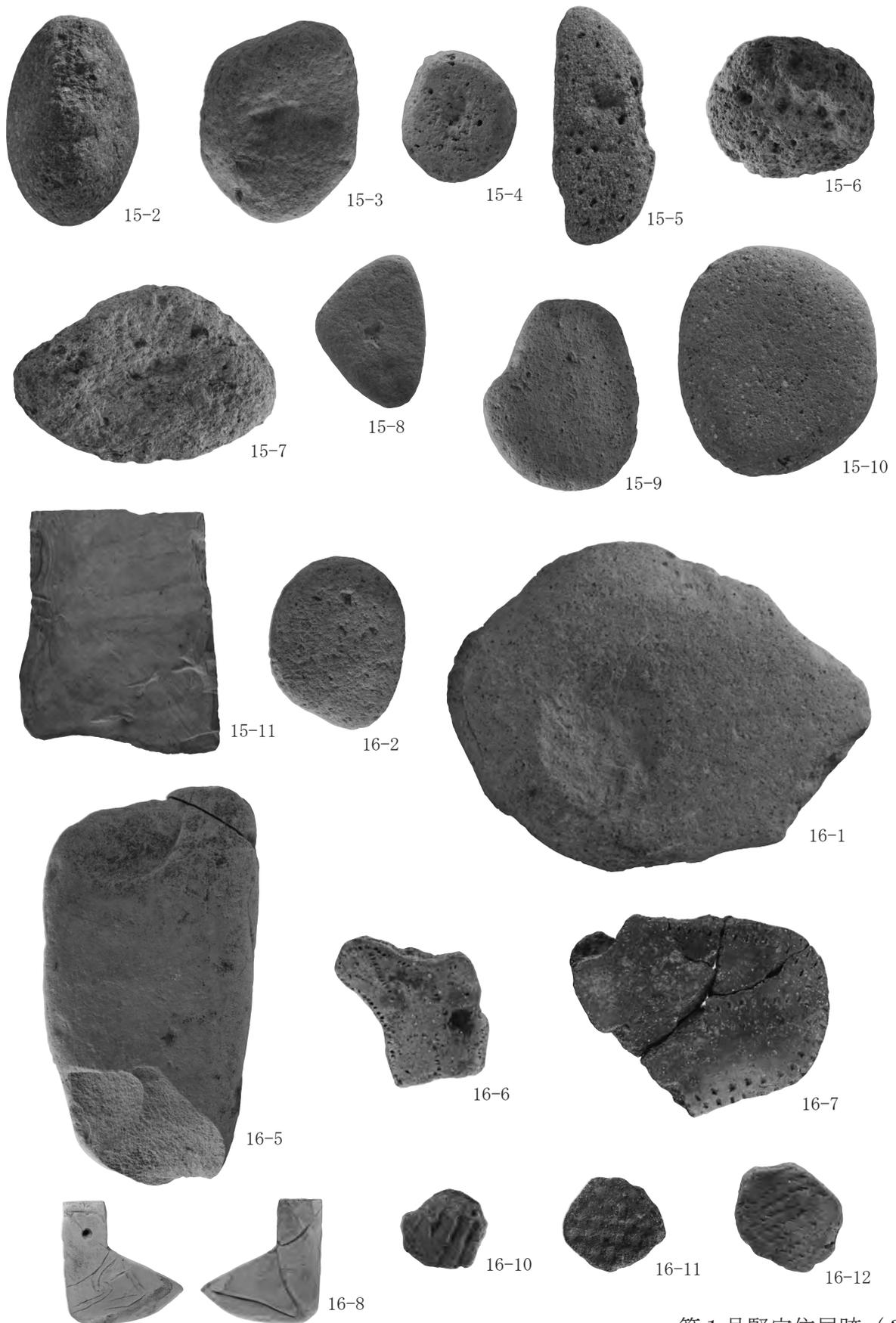
第1号竖穴住居跡(1)

写真35 竖穴住居跡出土遺物(1)



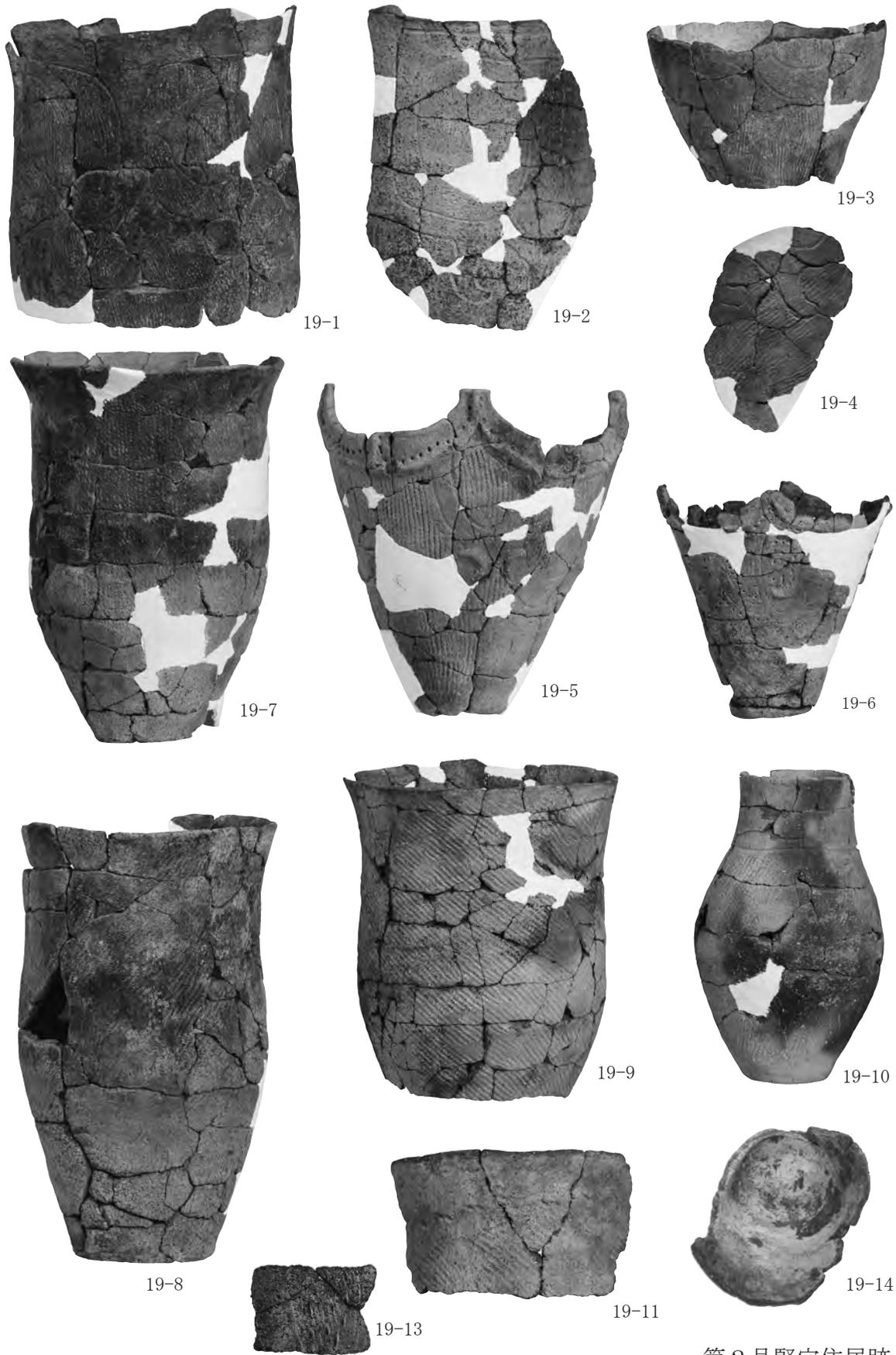
第1号竖穴住居跡(2)

写真36 竖穴住居跡出土遺物(2)



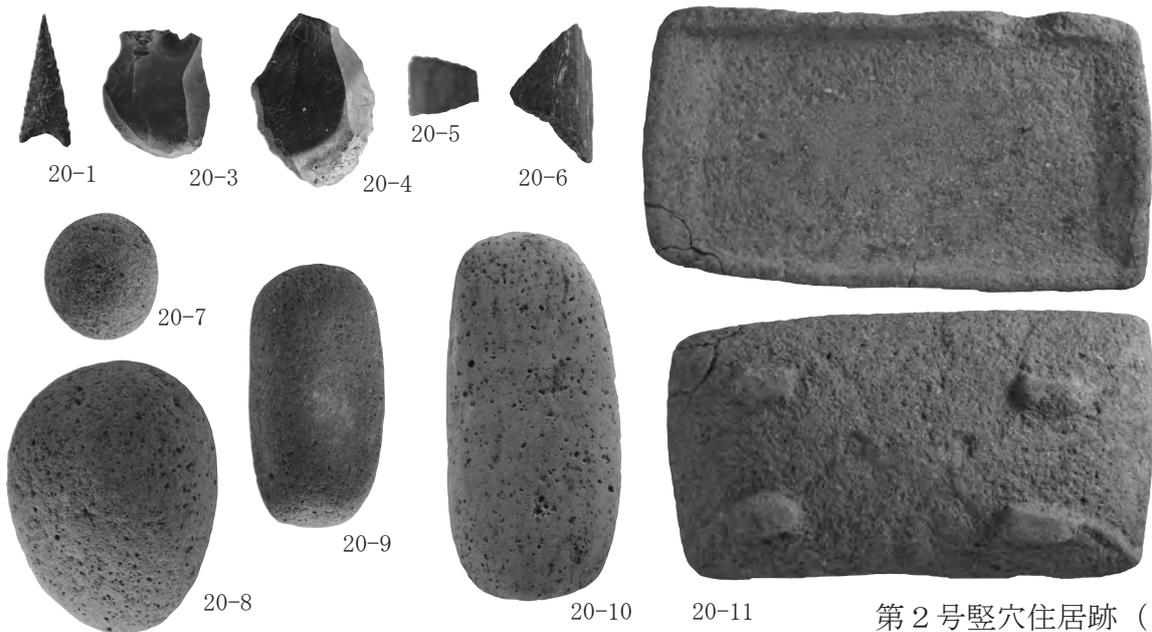
第1号竖穴住居跡(3)

写真37 竖穴住居跡出土遺物(3)

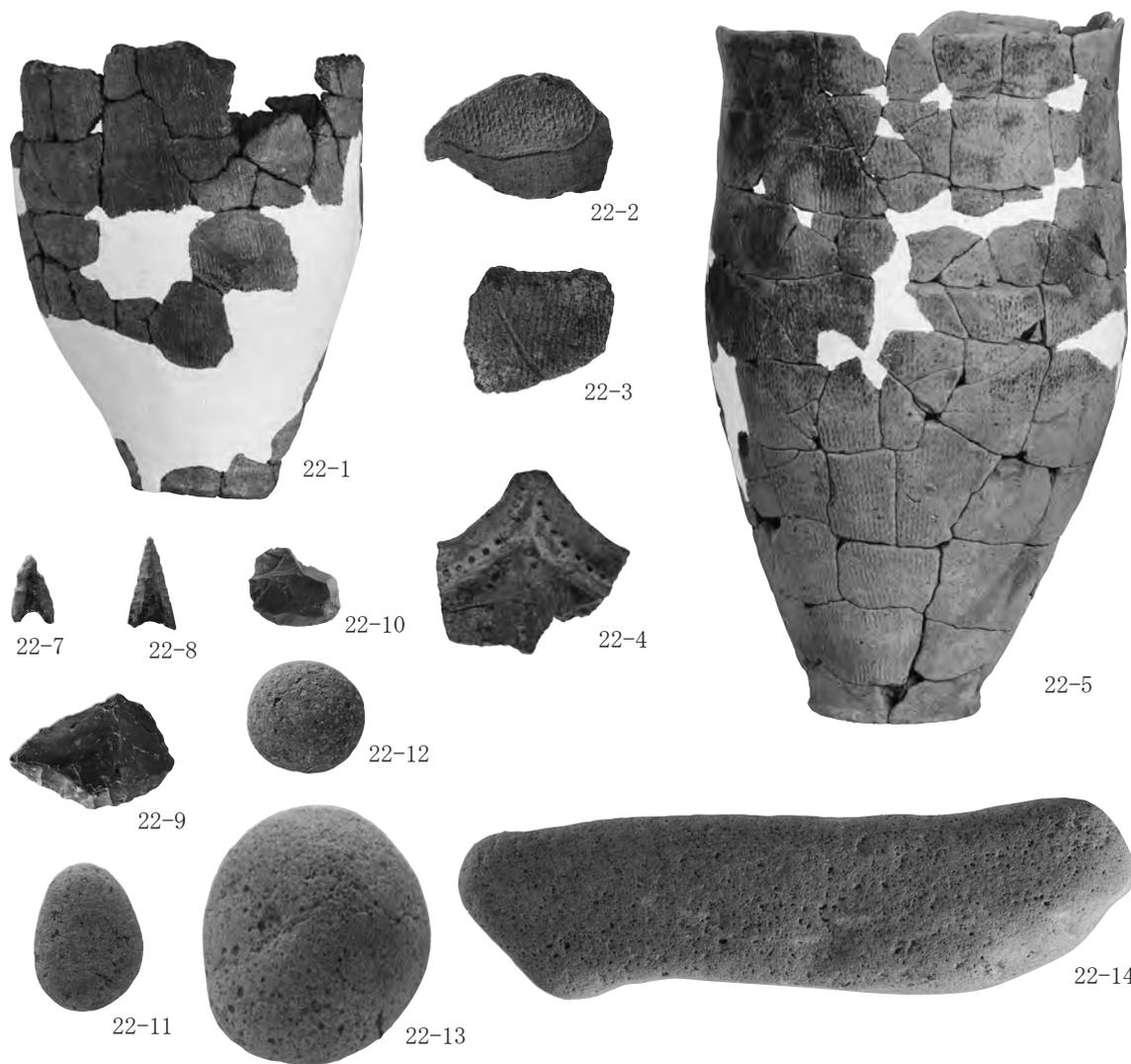


第2号竖穴住居跡(1)

写真38 竖穴住居跡出土遺物(4)



第2号竖穴住居跡 (2)



第3号竖穴住居跡

写真39 竖穴住居跡出土遺物 (5)

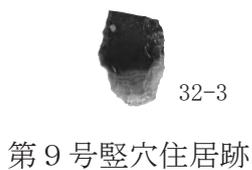
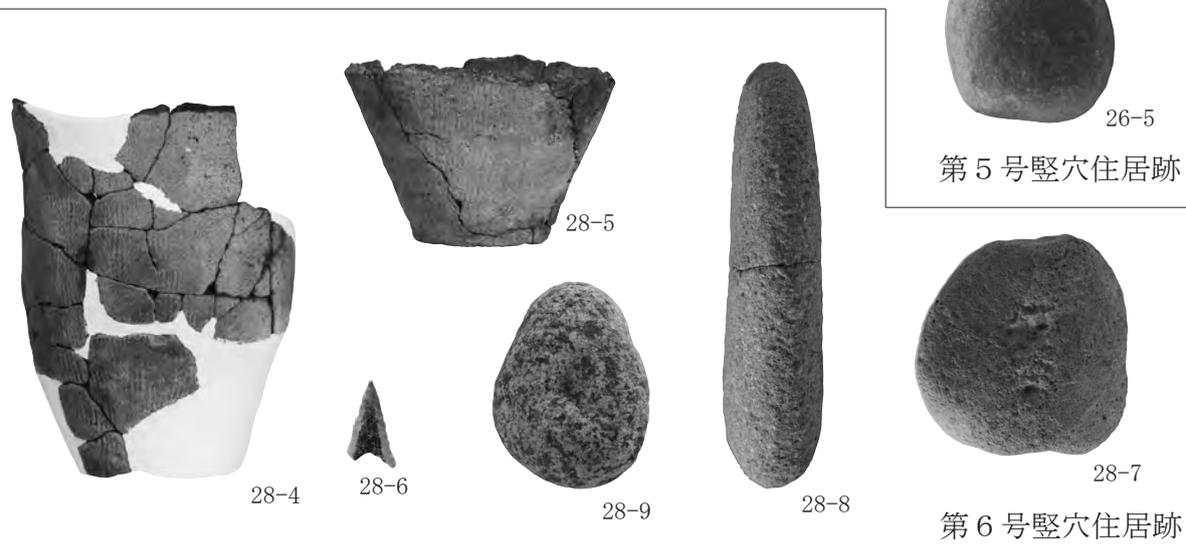
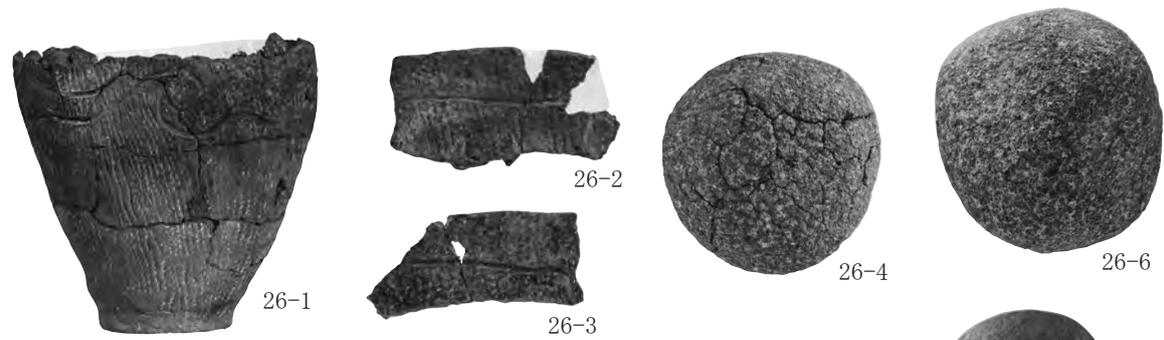
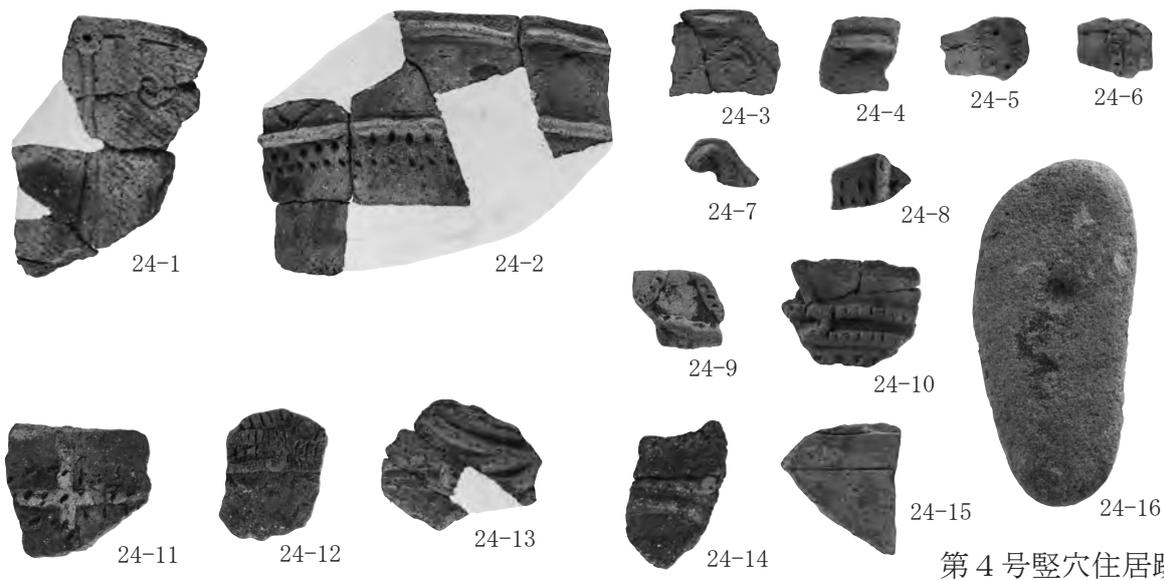
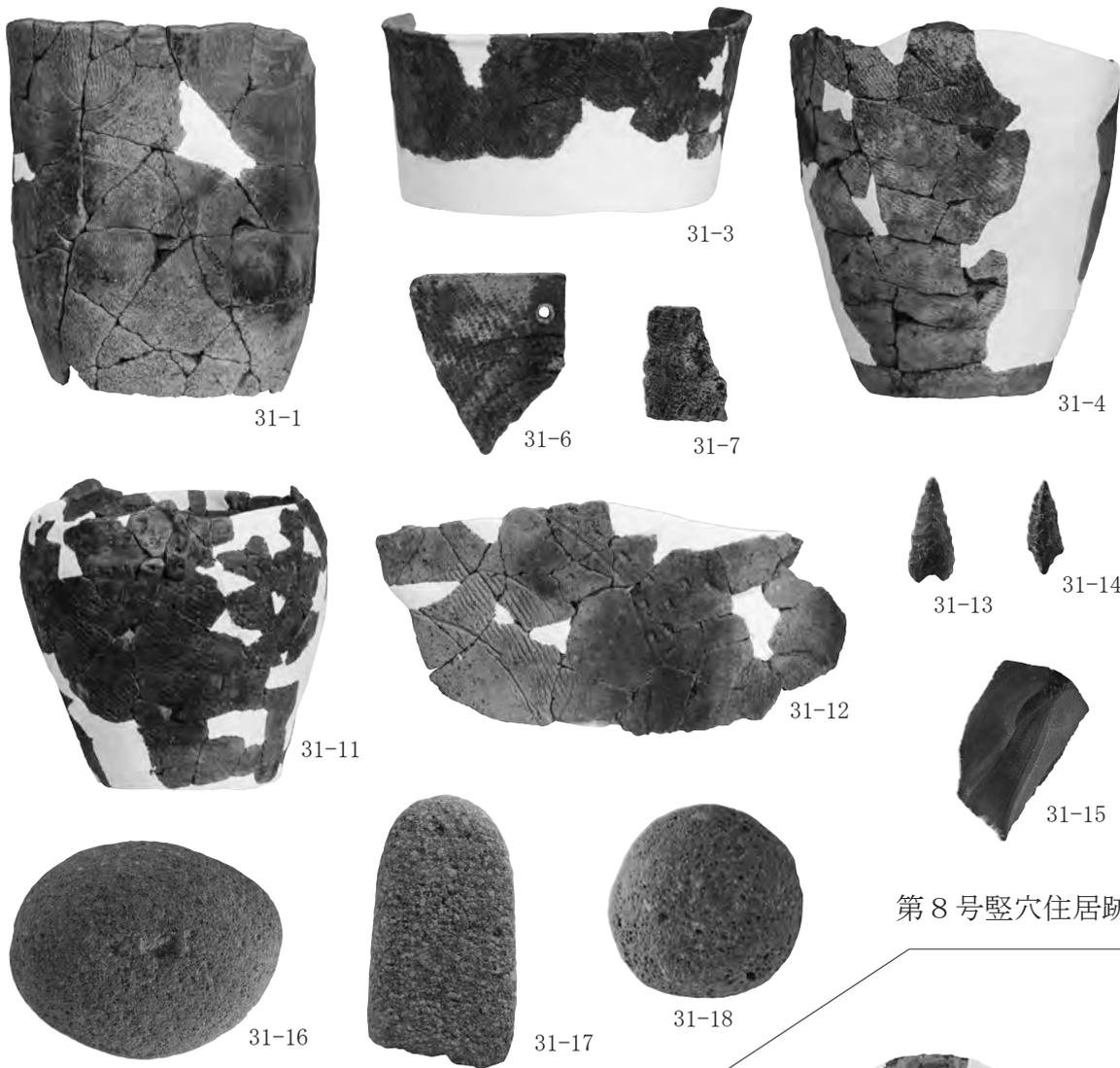
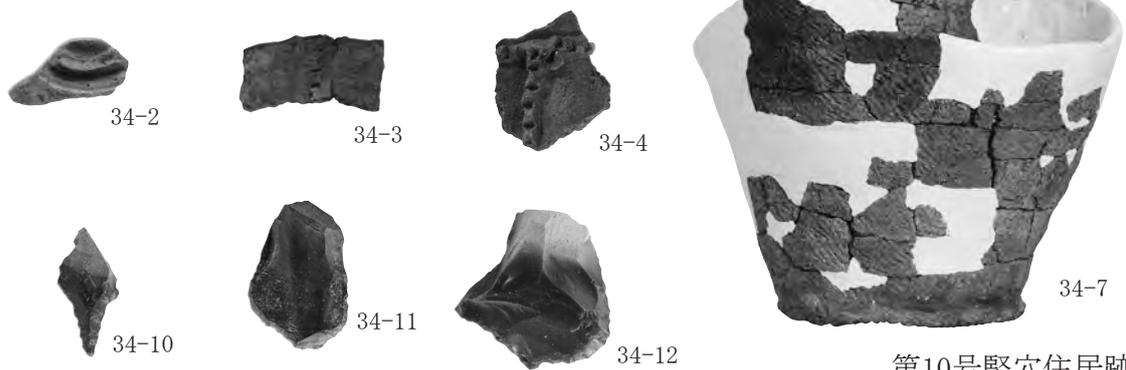


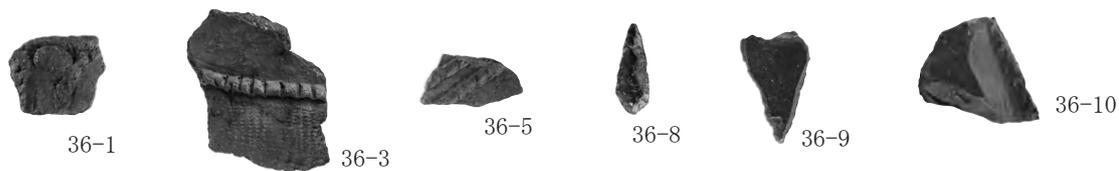
写真40 竖穴住居跡出土遺物(6)



第8号竖穴住居跡



第10号竖穴住居跡



第11号竖穴住居跡 (1)

写真41 竖穴住居跡出土遺物 (7)



36-11



36-12



36-13

第11号竖穴住居跡 (2)



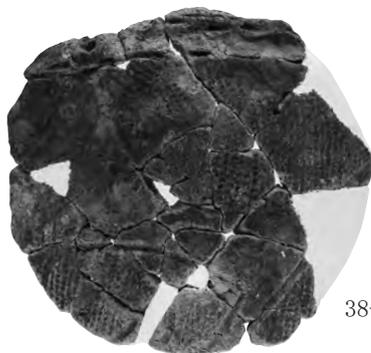
38-2



38-4



38-6



38-3



38-8



38-7



38-9

第13号竖穴住居跡



40-1



40-2



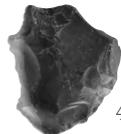
40-3



40-4



40-5



40-7



40-8

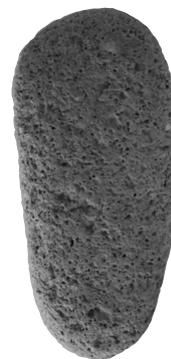
第15・16号竖穴住居跡



42-2



42-5



42-6

第18号竖穴住居跡



41-1



41-3



41-4

第17号竖穴住居跡

写真42 竖穴住居跡出土遺物 (8)

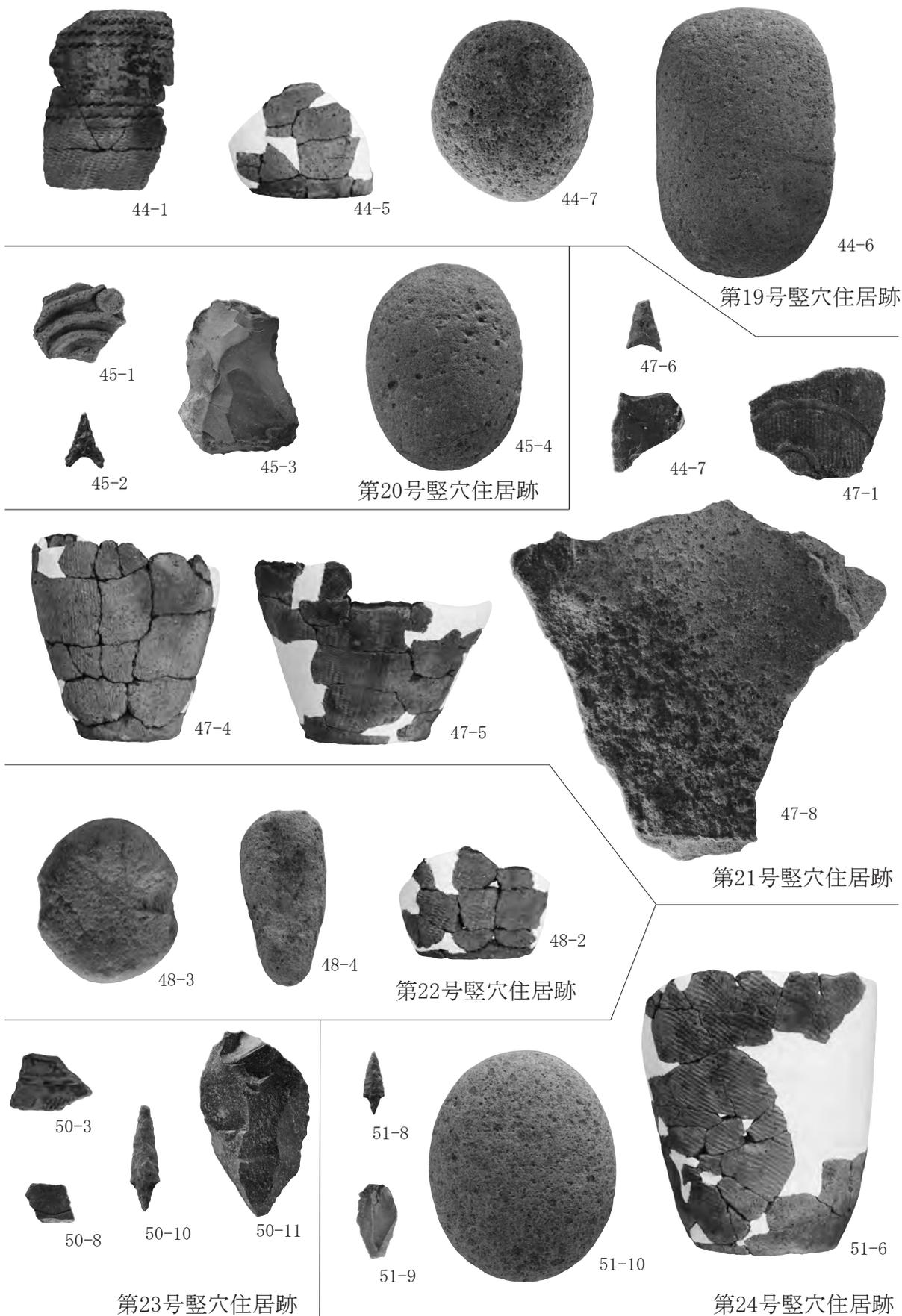
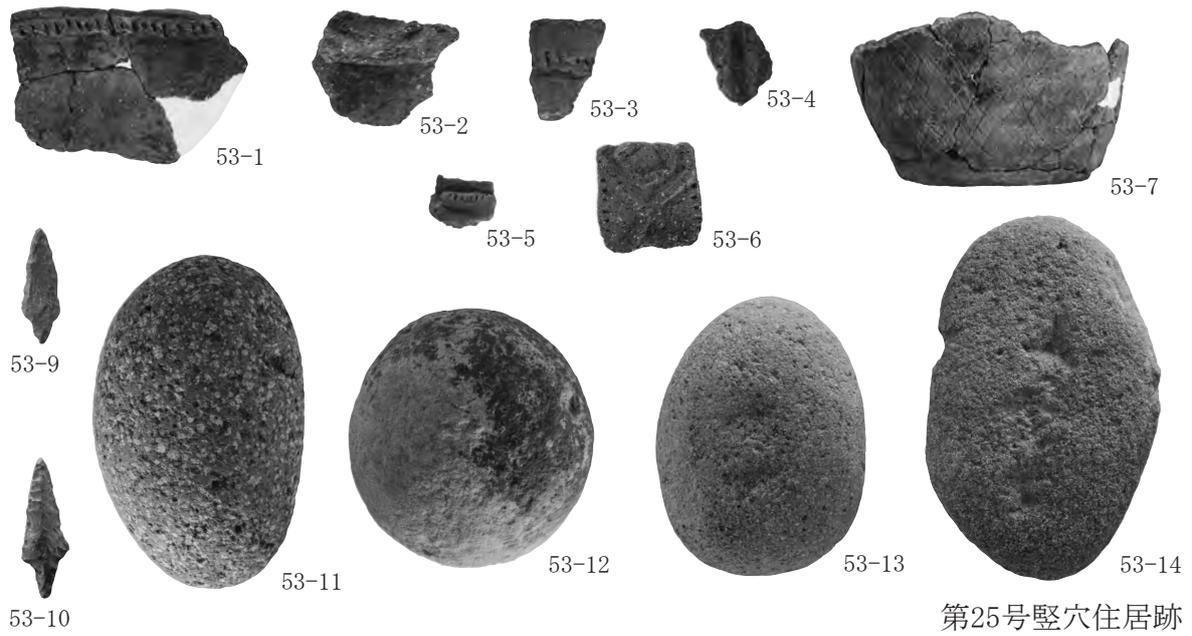
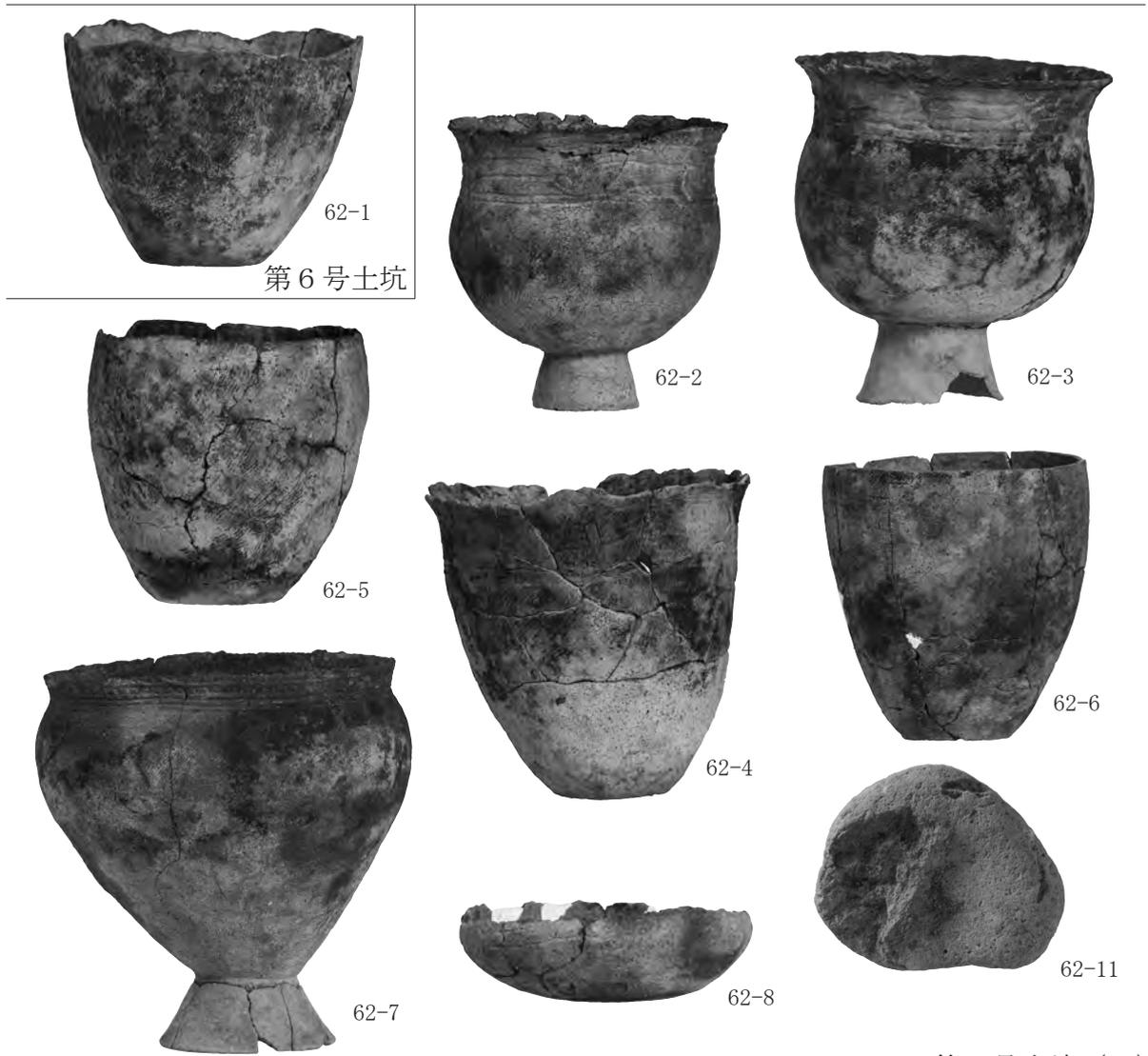


写真43 竖穴住居跡出土遺物 (9)



第25号竖穴住居跡



第6号土坑

第7号土坑(1)

写真44 竖穴住居跡出土遺物(10)・土坑出土遺物(1)

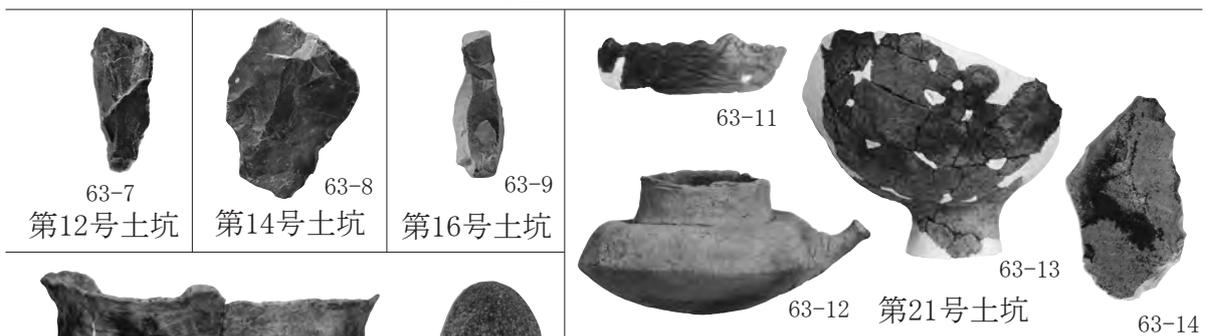
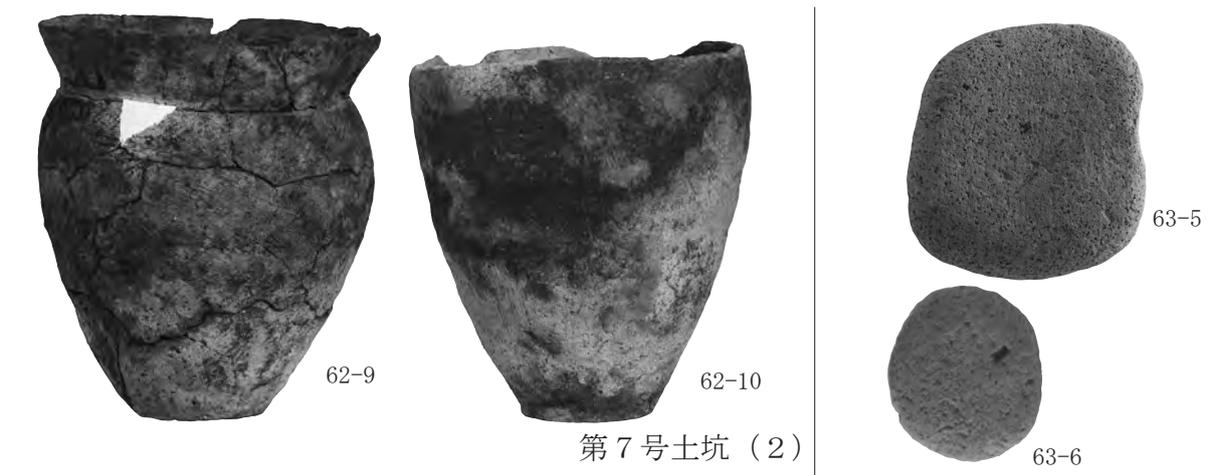


写真45 土坑出土遺物 (2)



64- 1



64-2



64-3

第24号土坑



64-5

第29号土坑



64-6



65-1



65-2



65-4



65-5



65-6



65-3

第30号土坑

写真46 土坑出土遺物 (3)

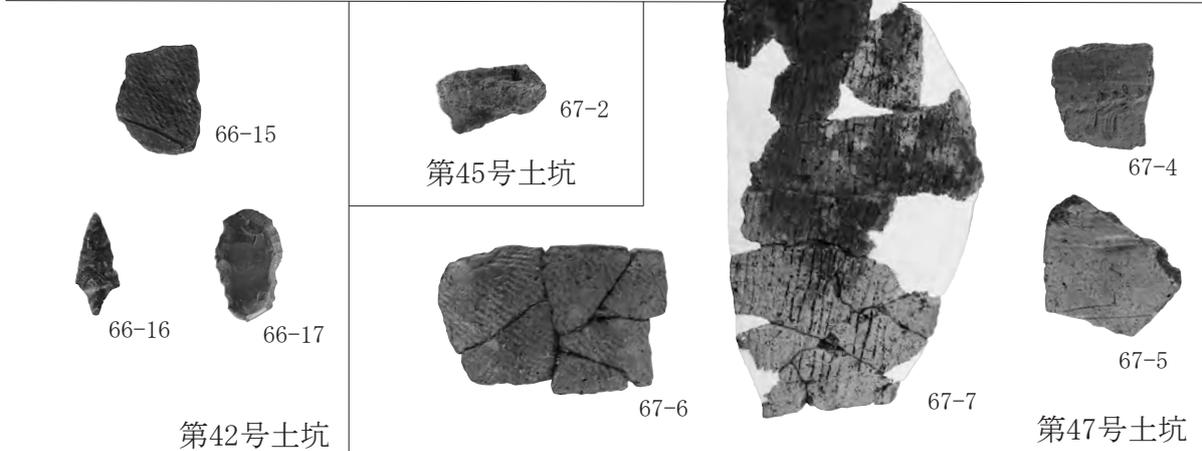
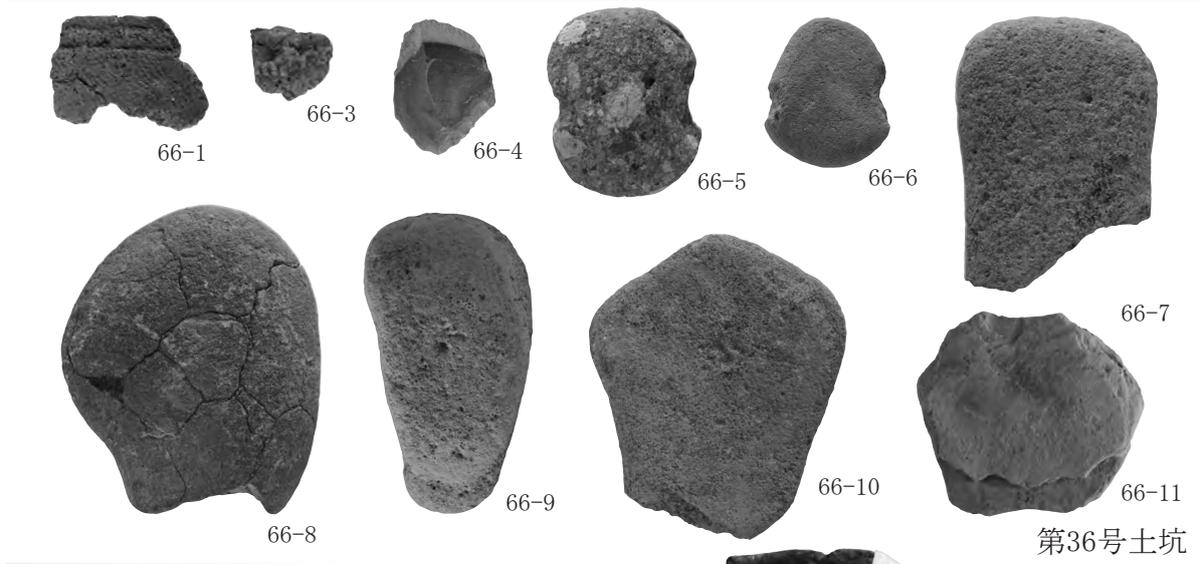


写真47 土坑出土遺物 (4)

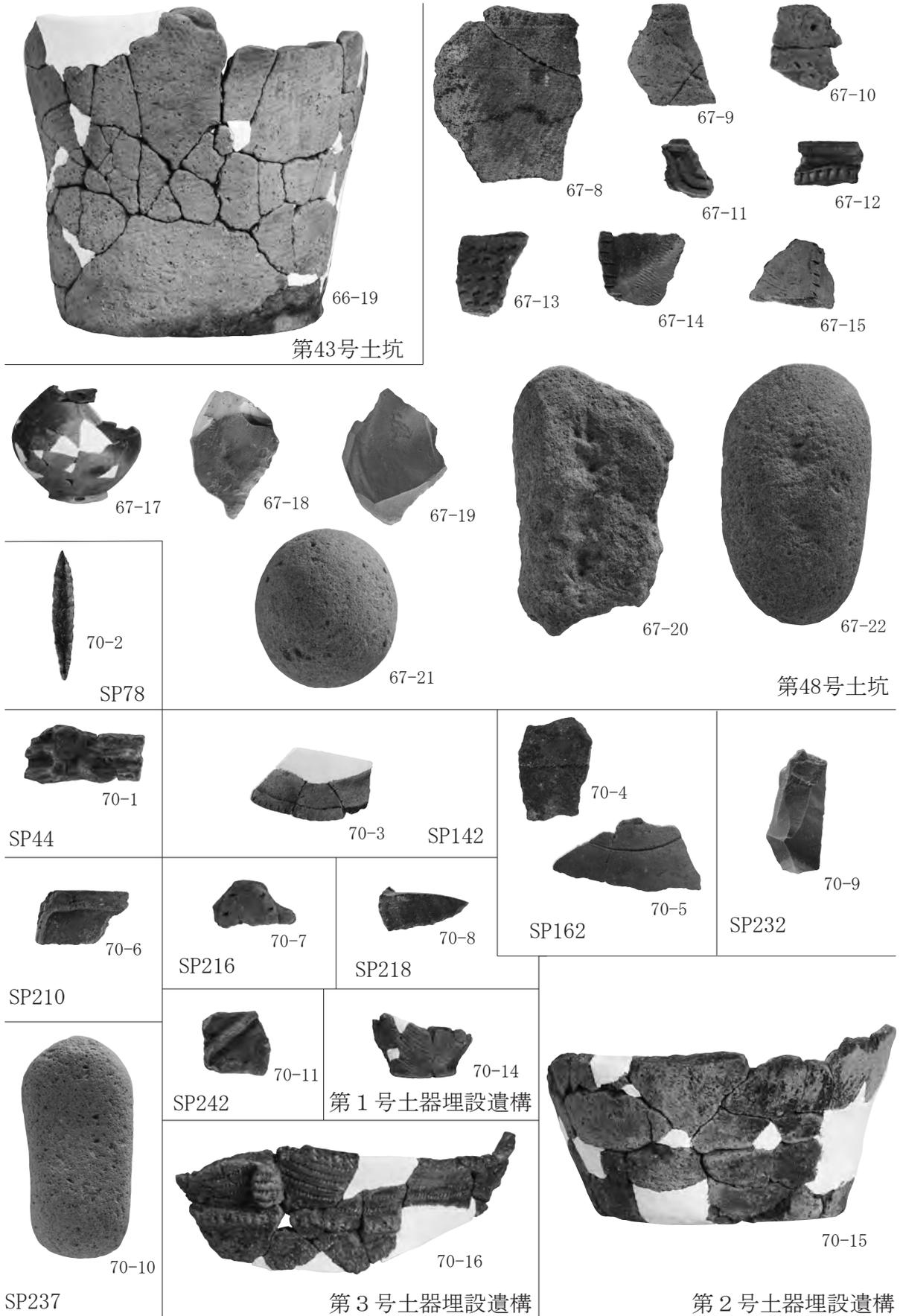
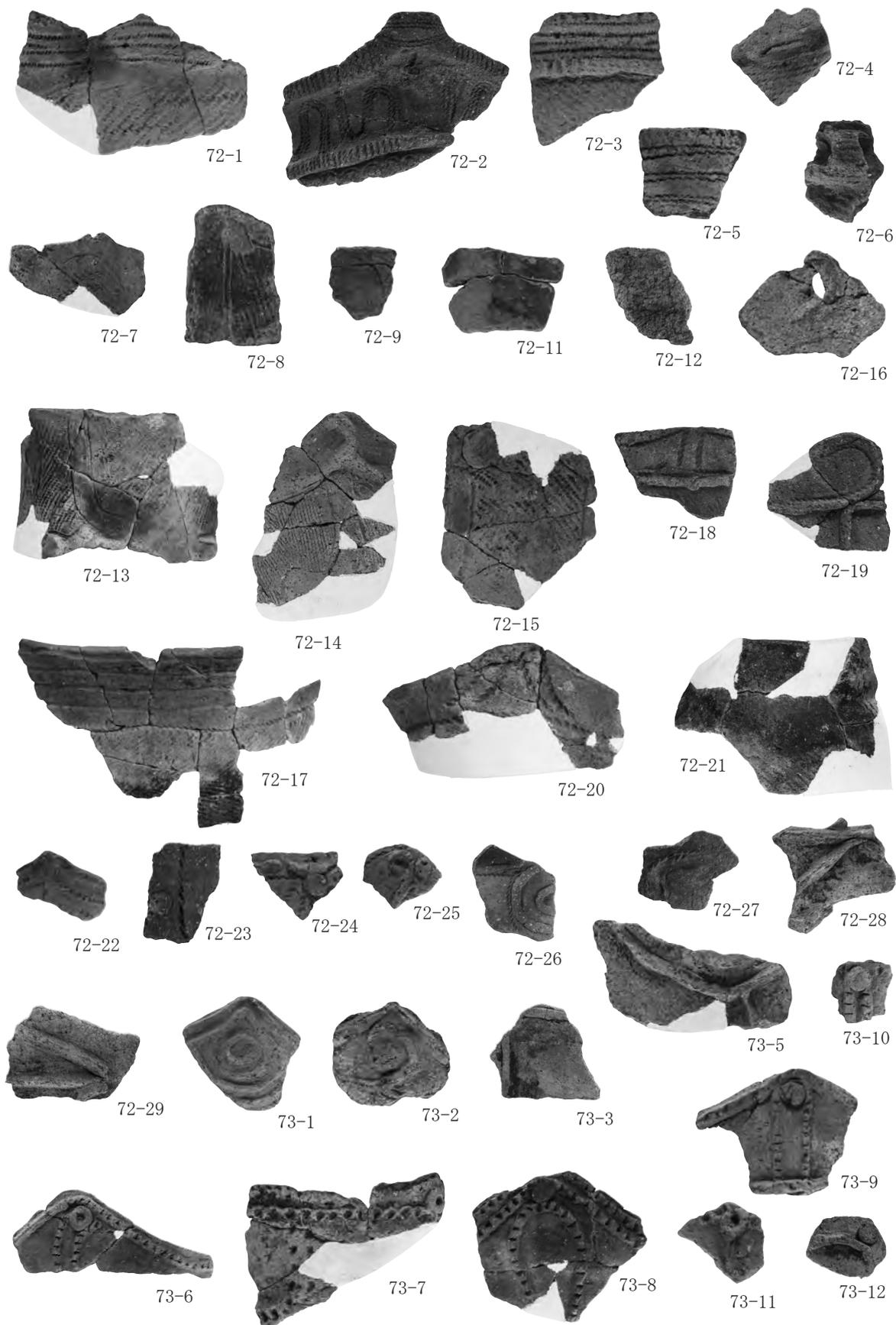
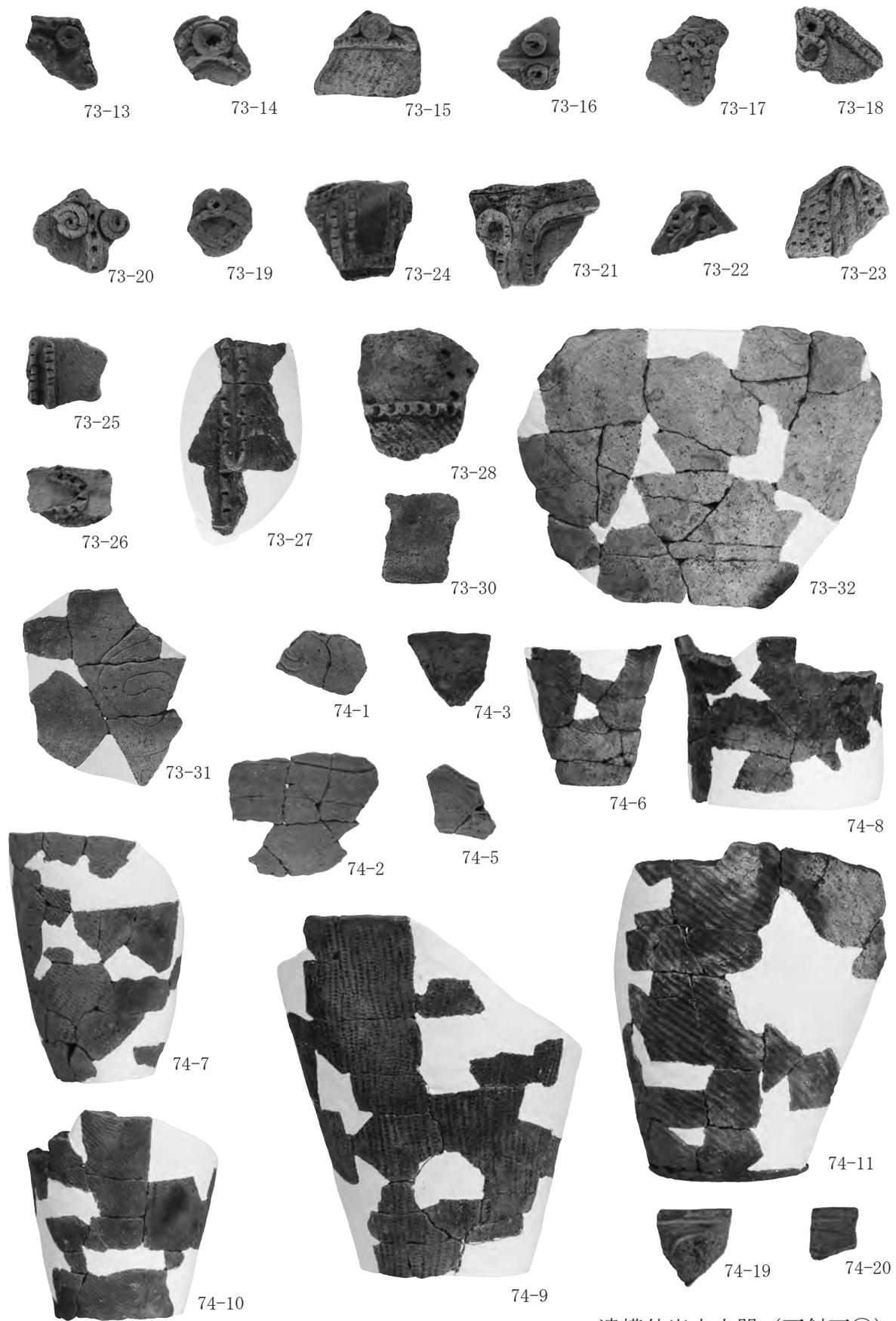


写真48 土坑出土遺物(5)・その他の遺構出土遺物



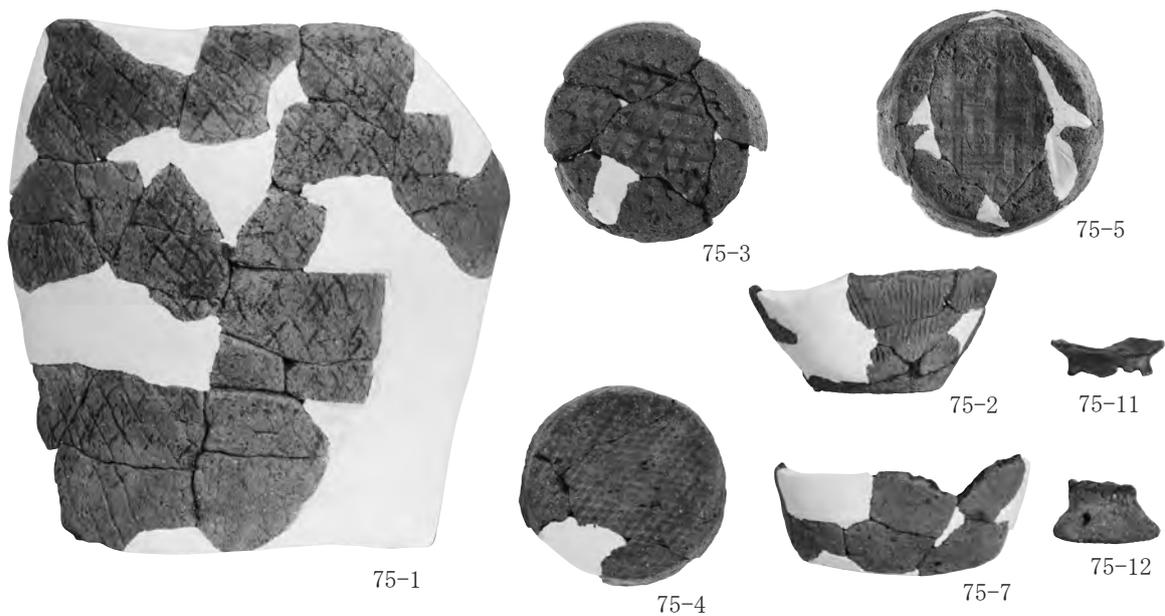
遺構外出土土器（西斜面①）

写真49 遺構外出土遺物（1）

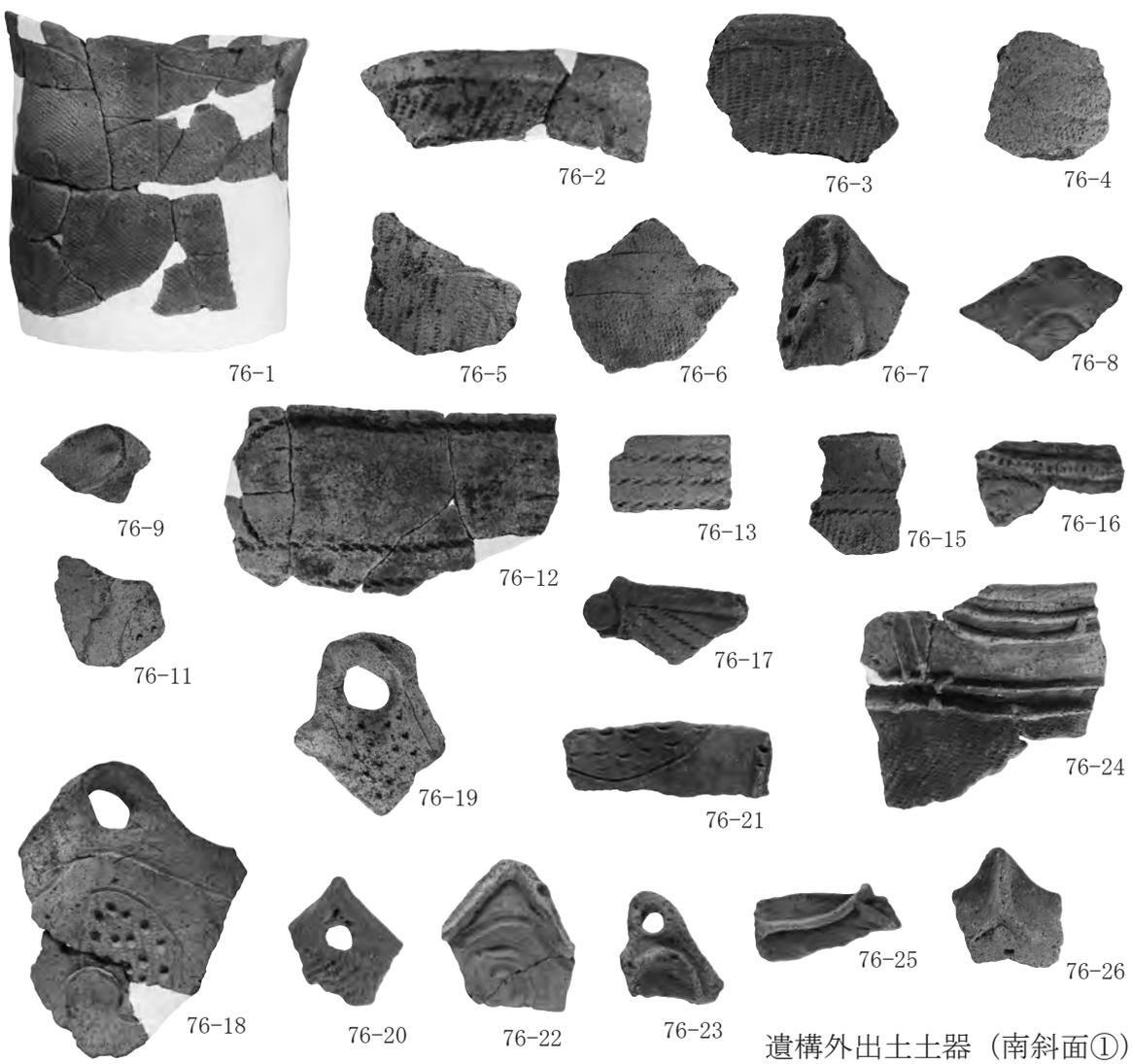


遺構外出土土器（西斜面②）

写真50 遺構外出土遺物（2）

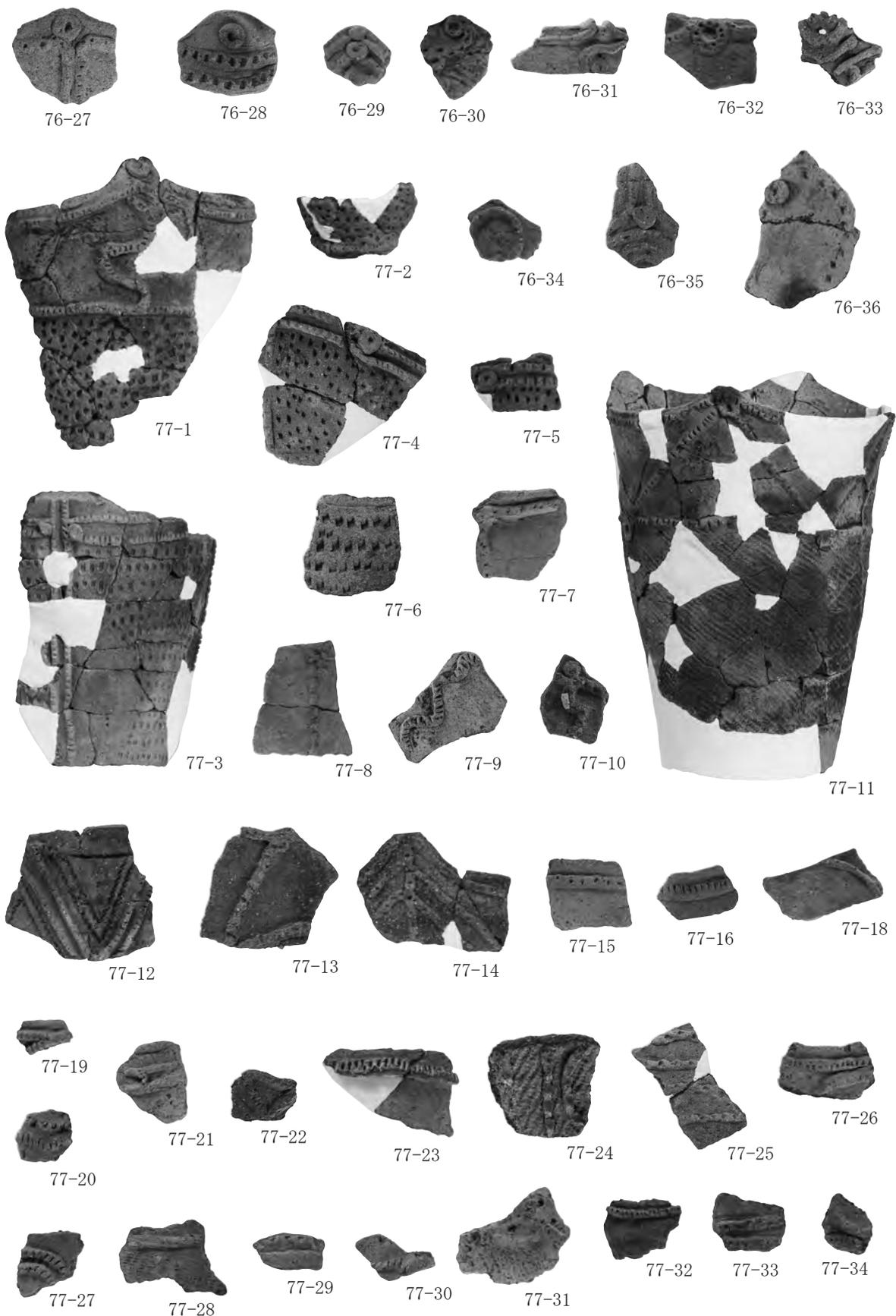


遺構外出土土器 (西斜面③)



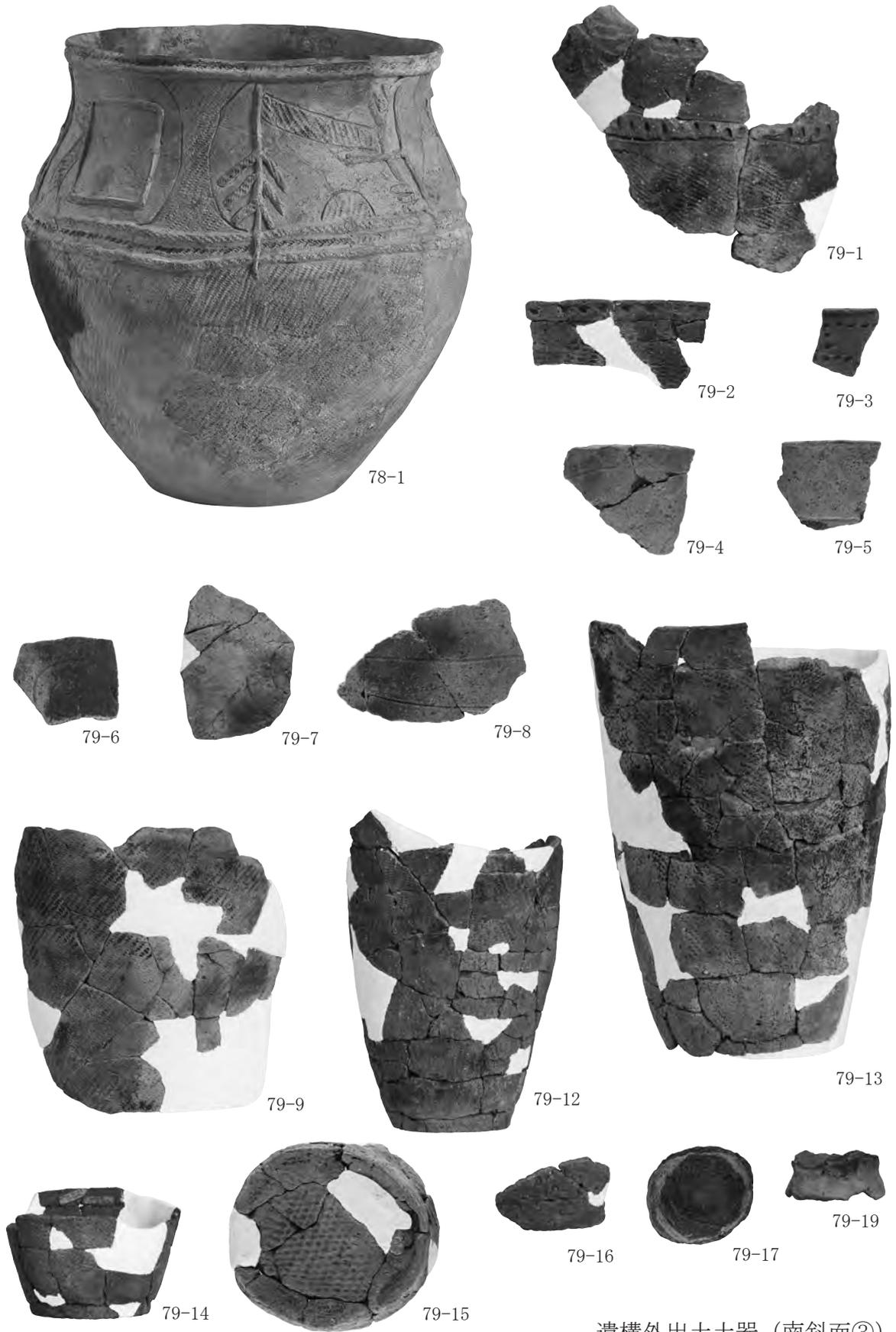
遺構外出土土器 (南斜面①)

写真51 遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土土器 (南斜面②)

写真52 遺構外出土遺物 (4)



遺構外出土土器（南斜面③）

写真53 遺構外出土遺物（5）

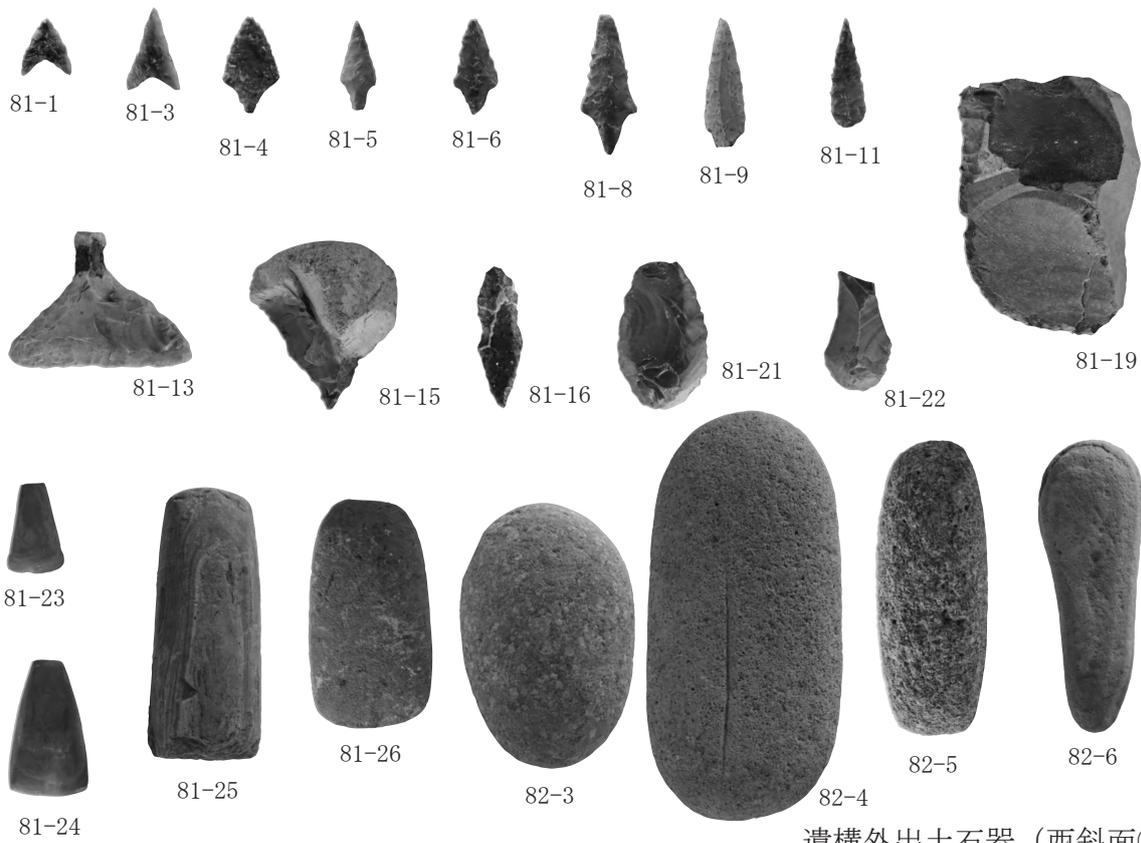
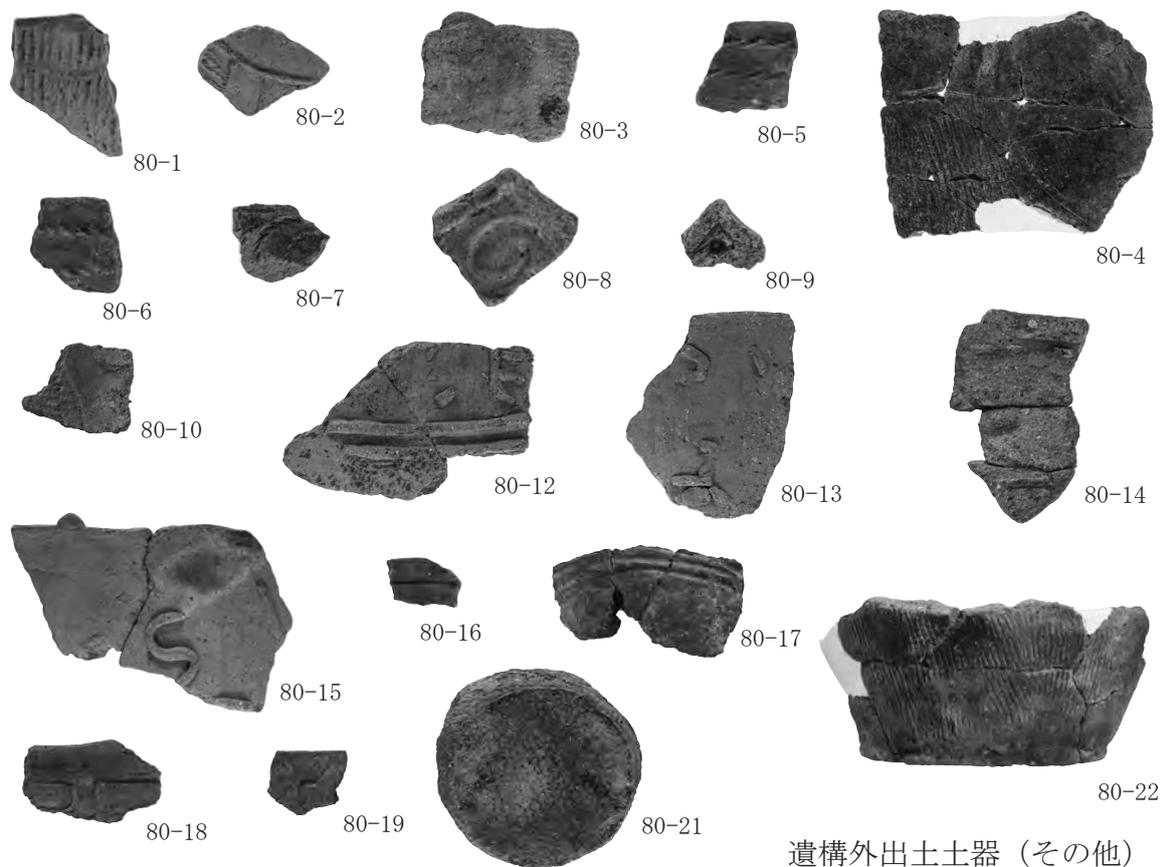
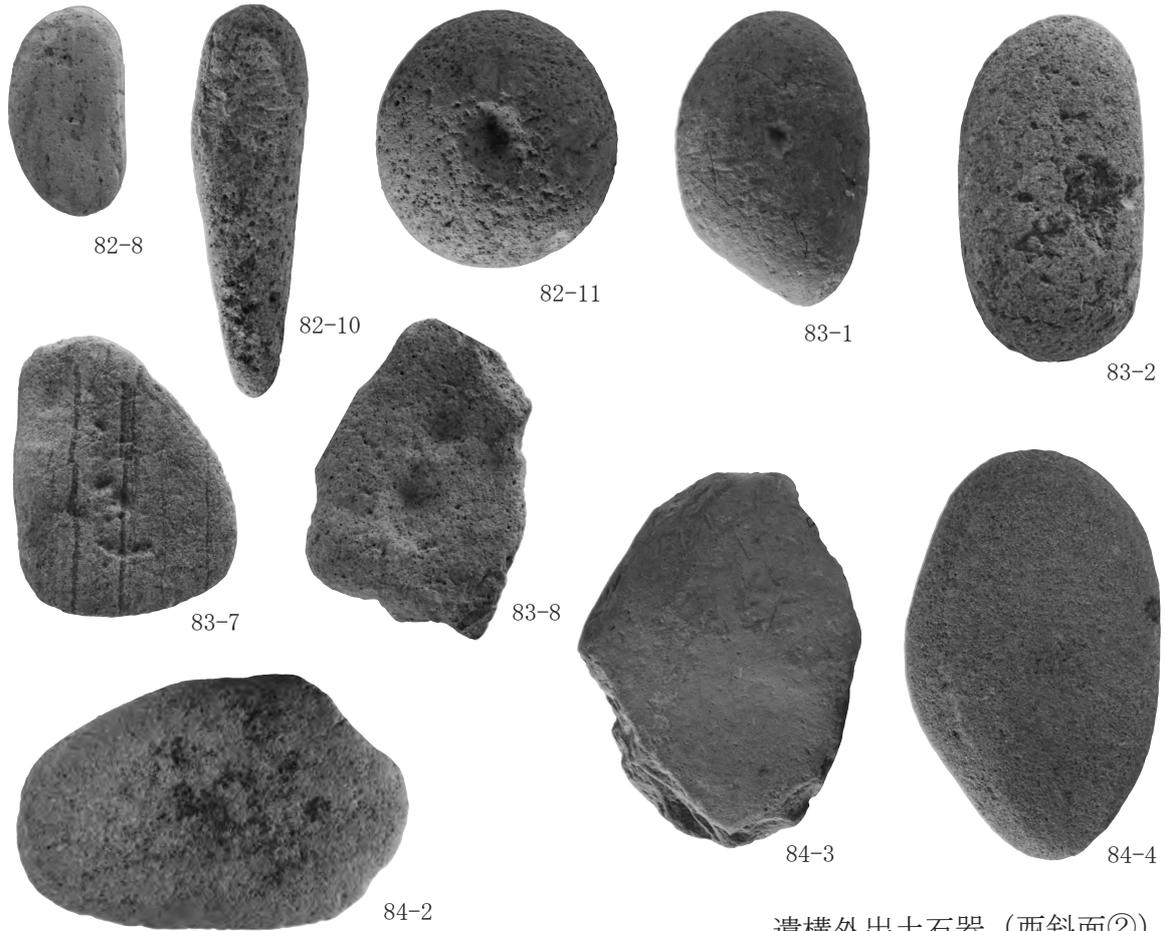


写真54 遺構外出土遺物（6）

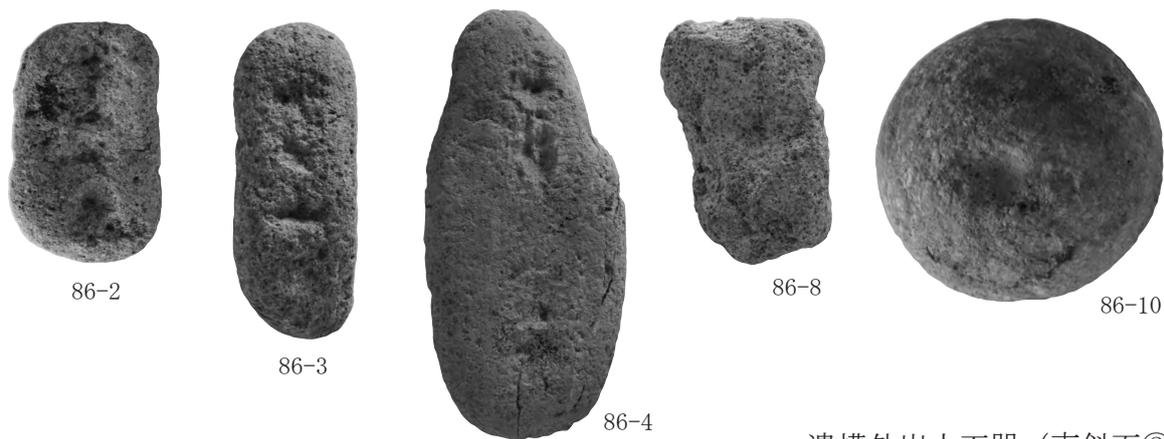


遺構外出土石器（西斜面②）

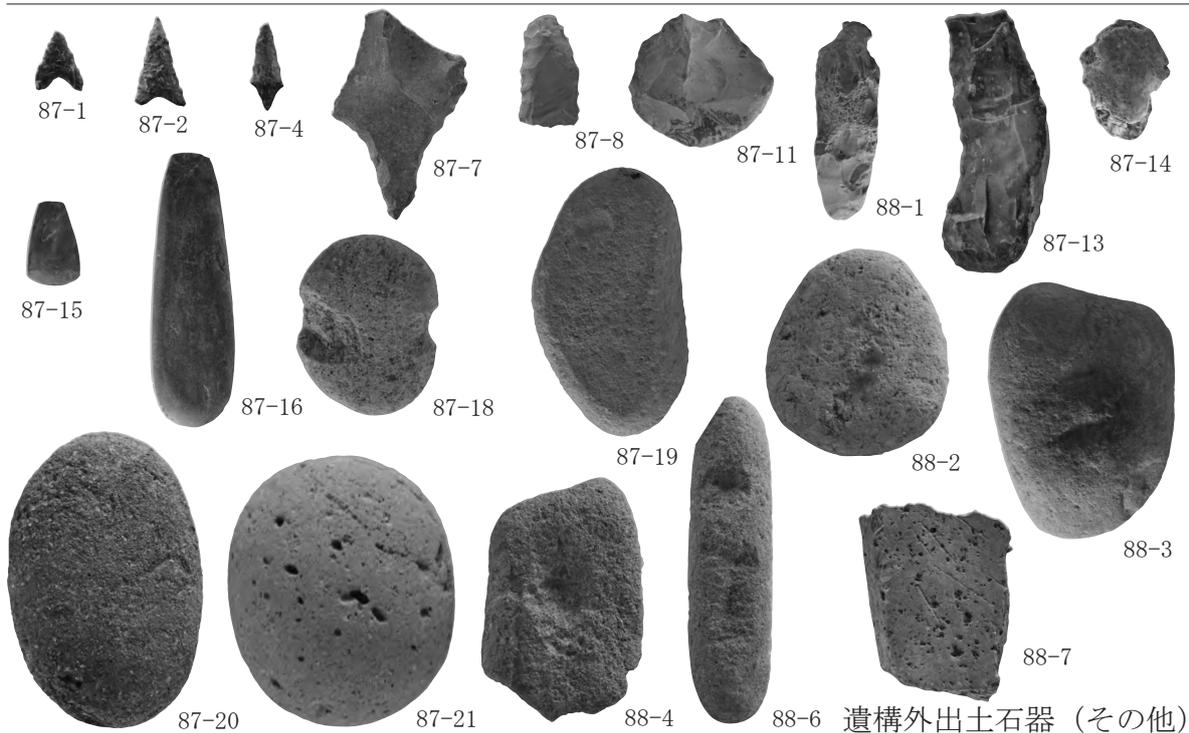


遺構外出土石器（南斜面①）

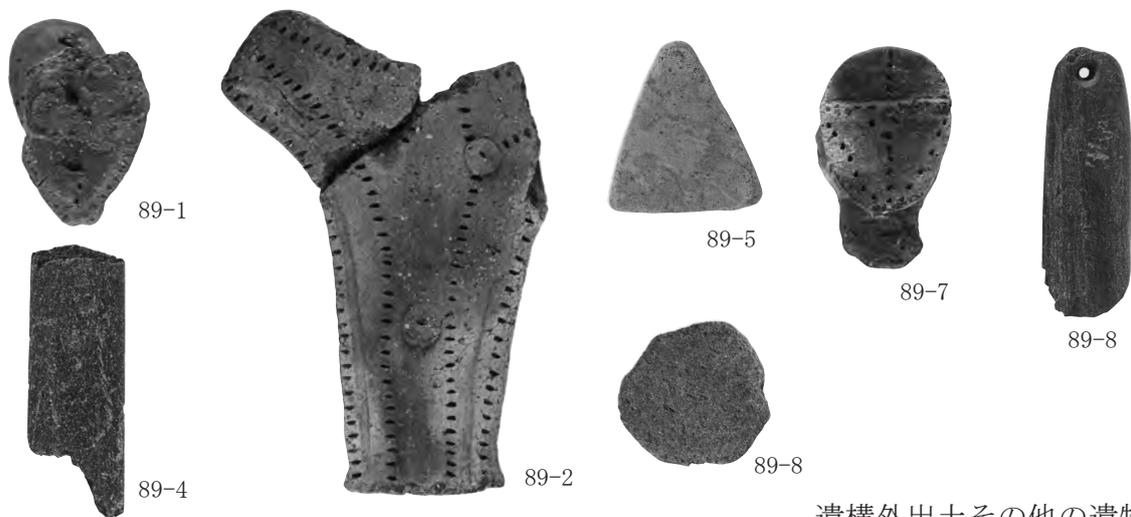
写真55 遺構外出土遺物（7）



遺構外出土石器 (南斜面②)



遺構外出土石器 (その他)



遺構外出土その他の遺物

写真56 遺構外出土遺物 (8)

報告書抄録

ふりがな	かわらたいかつころくいせき
書名	川原平(6)遺跡
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第567集
編著者名	新山隆男・荒谷伸郎
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	西暦2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD 2000)		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
かわらたい いせき 川原平(6)遺跡	あおもりけん 青森県 なかつがるぐん 中津軽郡 にしめやむら 西目屋村 おおあざかわらたい 大字川原平 あざみやもと 字宮元	02304	343035	40° 31′ 38″	140° 14° 10″	20120911～ 20121026 20130508～ 201130628 20140501～ 20140711	1,500 3,200 5,600	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
川原平(6)遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡 26 土坑 46 配石遺構 1 焼土跡 1 土器埋設遺構 3 小ピット(柱穴) 267		縄文土器・石器・ 土製品・石製品	・縄文時代中期末葉～ 後期前葉にかけての 集落跡 ・縄文時代晩期前葉～ 中葉のフラスコ状土 坑群 ・遺構外から狩猟文土 器が出土
		近世			銭貨	

要約	<p>川原平(6)遺跡は、縄文時代中期末葉～後期前葉に営まれた集落跡であることがわかった。検出した竪穴住居跡の中には大型の竪穴住居跡も数棟含まれており、該期の集落形成のあり方などを探る手がかりとなる成果であった。また、遺跡北側には縄文時代晩期前葉～中葉のフラスコ状土坑群があり、壁際から複数の完形土器が出土する土坑も数基検出した。土坑の用途を考察するための貴重な発見となった。</p> <p>遺物は、縄文時代中期末葉～後期初頭の資料が最も多く出土した。該期の資料がまとまった数量出土するのは貴重な発見であり、遺構外(南斜面部)からは狩猟文土器も出土した。</p>
----	---

青森県埋蔵文化財調査報告書第567集

川原平(6)遺跡

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日	2016年3月25日
発行	青森県教育委員会 〒030-8540 青森県青森市新町二丁目3-1
編集	青森県埋蔵文化財調査センター 〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701、FAX 017-788-5702
印刷	株式会社サンエイ 〒030-0121 青森県青森市妙見三丁目2-19 TEL 017-738-0040、FAX 017-738-0880
